KAIZO

改造

三月號

929



改造 三月號 目次



創作

議會を常設制度にせよ

不答辯同盟の觀があつた今期議會は、辯論の見るべきものが一つもなかつた。濱口君の彈劾演説も、その態度は政黨首領として相當重味あるものではあつたが、しかし生彩も氣魄もなく、內容の空疎、殊に新しく時代に呼びかくる何者もなかつたことは我々をして失望せしめた。若槻君のそれは攻撃のための一辯力といふ以外何等の新經綸をも含まぬ。もしそれ、田中君の答辯に至りては歷代首相中、曾つて見ざる底の貧弱極まるものであつた。就中、海陸軍大臣の低能振りはあれでよくも國務大臣が…と傍觀者をハラ〳〵せしめた。ただ民政黨の攻撃力の微弱なるが辛うじてこの兩人を救つたのだ。この兩人を救つた以上に國務大臣として非難百出の小川、久原をさへとつちめることができない腑甲斐なさである。そしていろ〳〵の重大事件を調査中の名のもとに逸したことは何といつても野黨の一大失敗である。今後こうした內閣の致命傷となり、與黨の一大打撃となるやうな大事件は總て「調査中」の名のもとに推通されたら國民はその眞を何れに聽取すべきであるか。かかる大事件を審議するがためにこそ帝國議會は存在すれ、もしそうしたことを今後も「調査中」として絶對秘密に附するやうでは專制政治と寸毫も異らぬではないか。國際的にも、國內的にも爲政者は自分が間違つた行爲を爲したときはそれを赤裸々に表明し、謝罪すべきは謝罪して正當の責任をとつてこそ國家、國法も始めてそこに威嚴を生じて來るが、それを隱蔽することによりて何等の國家的利益は生れて來ぬのである。却つていろいろの揣摩、臆測はそこに暗黑なる政治上、外交上の障害を伴つてくる。我々はこうしたことはあくまで政府より正當なる事實を發表することが當然であることを思ふものである。しかし現在の議員諸君の德義心の程度、政黨的排擠的態度等を考へればそうしたことはできまい。ただ、議會の開期を三ヶ月とせずして一年中ブッ通しに開會することによつてこうした諸種の弊害を除去できると思ふ。豫算審議の性質、結果より見、諸種法律の決定等の重要性に鑑み、現行のやうに野次と、喧噪と、不眞面目と、不答辯等々によりて三ヶ月間をどうにか切拔けることをのみ考へていては結局われ等多數國民の眞の利益の何ものであるかも彼等には諒解ができないのだ。そして「考慮中」「調査中」の彼等の鐵案を根本的に、制度的に除去することが帝國議會淸淨の捷徑であり、そして彼等に眞の任務を覺らしめる唯一の道でもある。



第二貧乏物語

河上肇

一、まへおき

私が一般的な讀者を相手に、社會問題に關する續物を書くのは、私のこれまでの生涯では、これが三度目である。

『北鷗詞兄足下、余不治の病を得て西歐より歸朝し、房總の間に客たること玆に二年、憂愁頻りに繁くして心胸轉た平ならず』といふ書き起しで始めたものが、第一の續物としての『社會主義評論』であり、それは、私が大學を出て三年目の(從つて『不治の病を得て西歐より歸朝し』云々は、うそである)、一九〇五年(明治三十八年)の秋から、『讀賣新聞』に連載したものである。當時は日露戰爭が終末を告げたばかりであつた。私はその序言の二において、當時有名であつた謂はゆる六博士の上奏を批評し、『條約破棄の論は畢竟するに衆愚の謬論なり』と言つてゐる。當時における大學教授たちの最大の關心事が何であり、それが如何なる形式において現はれたかについては、この『條約破棄の上奏』が適切なる一例を示してゐる。それは今日から回顧しても興味あることである。

他方ロシアにおいては、如何なることが行はれてゐたか？ 私は私の舊稿から次の一節を引用しよう。

『血の日曜日の話は全世界に語り傳へられてある。一九〇五年一月九日の日曜日は、雪が降つて骨を刺すやうな風の吹いてゐる酷く寒い日であつたが、ペトログラードの勞働者數萬人は、男や女や小供が一緒になつて、皇帝に歎願書を捧呈せんために冬宮に進んだ。………

『彼等の捧呈せんとする歎願書は、「專制と無責任制とによつて窒息させられつゝある」彼等をば、たゞ人間として認めて貰ひたいといふ・謙遜な歎願をなしたものにすぎなかつた。彼等は最も根本的なる人權——彼等自身のために考へ、彼等の必要を討究し、彼等自身の困難なる境遇を改善するために若干の方策を講ずるの權利——を歎願したにすぎない。彼等は彼等の「父」たる皇帝が、ロシアを幸福にするために、彼等の要求を容るゝの誓をなさんことを哀訴した。彼等は、生きて彼等の祈願の容れられざるよりも、むしろ王宮前の廣場において死なんことを求めた。彼等にとつては、「自由および幸福への道か、しからずば墓場への道」しか開けてゐなかつたのだから、彼等は實際、苦めるロシアのための犧牲として、彼等の生命をさゝげることを欲してゐたのである。

『……その日が來た。しかるに皇帝の伯父にあたるウラヂミール大公は、××に命ずるに、當日集まり來たる勞働者に向つては××をもつてこれを擊退すべく、且つ彼等が全然退散し去るまでは決して××を中止すべからざることをもつてした。殆ど千五百名の×××が出た、そのうちには婦人も子供もゐた、彼等はロシアのために眞に××とされてしまつた。憐れなる・困窮せる・長きに亘つて苦める・民衆の彼等の「父」に對する哀訴は、此の如くして終りを告げた。』

これが有名なる『血の日曜日』の出來事である。それについて、ソコロフの『ロシア革命史論』（荒川實藏氏譯）には、『一月九日の進出は、「みづから革命と自覺しなかつた」としても、當時××のなした行動は、この日を本當の意識的革命の序幕たらしめた。全露の勞働者は、今やはつきりと、たゞに彼等の雇主または政府からのみではなく、××××からすらも、もはや何物をも期待しえざることを知つた』と書いてある。かゝる序幕によつて、ロシアにおける一九〇五年の革命は行はれたのである。

そして私の『社會主義評論』は、かゝる社會情勢のもとに執筆されたのであつた。

『驚くべきは、現時の文明國における多數人の貧乏である。一昨々年（一九一三年）公けにされたアダムスの「社會革命の理」を見ると、近

近のうちに社會には×××が起つて、一九三〇年を待たずして、現時の社會組織は根本的に××してしまふと、いふことが述べてあるが、……歐米の社會を見ると、……かゝる議論が出るのも、必ずしも無理ではないと、思はれる事情がある。英米獨佛その他の諸邦、國は著しく富めるも、民は甚しく貧し。げに驚くべきは、これら文明國における多數人の貧乏である。』これは、私の第二の『社會主義評論』ともいふべき・『貧乏物語』の冒頭の一章句である。

私はこの『貧乏物語』を、『社會主義評論』を書いてから十一年目の・一九一六年（大正五年）の九月から、『大阪朝日新聞』に連載した。それは世界戰爭の最中であつた。そしてその翌年の一九一七年は、ロシアにおいてプロレタリアの××××し、世界全面積の六分の一を占める廣大な地域に亘つて、無產者××の政治が人類の歷史においてはじめて確立されるに至つたところの、歷史的な劃期的な年となつた。『一九一七年の二月革命は、封建的絕對制を顚覆し、十月革命はブルヂョアジーを顚覆した。この勝利せるプロレタリア××は、×××を××し、×××××××××××生產手段を××××、はじめて人類の歷史において一大國のうちにプロレタリアの××を建設し確立し、ソヴェート國家といふ一の新たなる國家の型を創造し、かくて××××××××××××の端を開いたのである。

私は、『貧乏物語』を書き終へてから滿十二年を經た今日、私にとつては『第三の社會主義評論』であり、『第二の貧乏物語』であるところのものを、今度はこの『改造』の誌上を借りて、公けにしたく思つてゐる。

ところで、これまで私が斯樣な續物を書かうと思ひ立つたときには、さきにも一言したやうに、いつでもそれ以前に戰爭が勃發してゐた。そしてそれらの戰爭（日露戰爭および世界戰爭）は、必ずや私の頭腦を刺激したのであらうけれども、私自身は當時殆どそのことを意識してはゐなかつた。また、これまで私が斯樣な續物を書かうと思ひ立つたときは、二度ながら不思議にも、革命（一九〇五年および一九一七年のロシア革命）の前夜に相當してゐたのだが、私はもちろん斯かる革命の勃發を少しも豫期してはゐなかつた。だから私が結局において主張したものは、單なる個々人の道德的革命にすぎなかつた。『社會主義評論』を途中で擱筆したときは、私自身一切の職業を拋つて、東京の郊外なる巢鴨の大日堂に引籠つた。それは、今日でいへば、京都の郊外にある一燈園の如きものであつた。私はそこで、言はゞ新宗敎の宣傳のために、一生を獻げんと欲したのである。『社會主義評論』の[illegible]

の幸福平安を得せしめん、その時に當つて人々[illegible]、余と無上の歡樂を共にするに至らん、然らばまた何をか悲まん』といふ句で結んであるのは、そのためである。私は今その當時を回想して、そこに一個の宗教的倫理的空想者としての過去における自己の姿を見出すことにおいて、苦笑せざるをえない。

『貧乏物語』はそれより十一年後に書いたものであるけれども、その時もまたその總體の結びは、ラスキン流の空想に外ならなかつた。『思ふにもし世の富豪乃至資本家にして、消費者として將生産者としての眞の責任を自覺するに至らば、たゞに國內における社會問題を平和に解決しうるのみならず、また世界の平和をも維持しうるに至るであらう。……「大學」にいふ、古の明德を天下に明かにせんと欲する者は、先づ其國を治む。其國を治めんと欲する者は、先づ其家を齊ふ。其家を齊へんと欲する者は、先づ其身を修む。身修まつて後家齊ひ、家齊うて後國治まり、國治まつて後天下平かなり。天子より以て庶人に至るまで、一に是れ皆な身を修むるを以て本と爲す。其本亂れて末治まる者は否じ矣」と。嗚呼、「大學」の首章、誦し來たらば語々盡く千金、余また何をか言はん。筆を停めて悠然たること良久し』、これが『貧乏物語』の結語である。世界戰爭の眞最中に、ロシアにおけるプロレタリア××××××に、かかる倫理的宗教的空想に溺れてゐた過去の自分を思ひ出すとき、私は今、[illegible]ゐる。

此の如き私の過去は、現在の私にとつて恥辱以外の何物でもない。私はその出發點における斯かる姿を、現在の如きその反對物に轉化せしめるまでに、四分の一世紀以上を費したのであり、そのことは、たゞ私の愚鈍を證明するに外ならぬであらう。けれども、それは同時に、他方においては、現在の私に向つて加へられつゝある『無批判的なるマルクス狂信者』といふ非難に對し、あるひは一の抗辯となりうるでもあらう。社會問題は、私の敎を受けた先生たちが『條約破棄の上奏』で世間の耳目をひいてゐた日露戰爭の當時から、いま筆を執りつゝある現在に至るまで、少くとも過去四分の一世紀にわたり、絶えず私の最大の關心事となし來つたものである。たとひ現在の私の立場は世間の多くの人々から見て、如何に異端的に見えようとも、それは多年にわたる正直な思索の量的累積が齎らした質的變化の結果である。今日多くの人々が考へてゐるやうなことは、私もまた——ある場合には實に全身こめて——考へたのである。マルクス主義レーニン主義の勢力をもつて經驗に乏しき青年の客氣に基づくとなすは、完全な誤認である。經驗の累積は——人類の總實踐は——私の如き鈍とれる

ものをも、苟くも當人が自分に正直であらうとするかぎり、マルクス主義の旗のもとに引きずり込まずにはおかない。

私は最初からのマルクス主義者でもなく、また簡單に唯物論者となりえたものでもない。だから私は、現在においてもなほ、無意識的には、過去の觀念論的空想の殘滓を少からず保菌してゐるであらうが、しかし意識的には、辯證法的唯物論の見地に立つて、マルクス主義レーニン主義を奉ずる一學徒として、こゝに第二の貧乏物語に筆を執らうとしてゐるのである。

前に述べたやうに、これまで私がかゝる讀物を書かうと思ひ立つたときはいつも戰爭が爆發した後であり、そして間もなくそれに續いて×××××してゐるのである。しかし當時にあつては、眼前に行はれてゐた戰爭も、間近に近づいてゐた××も、私の意識的な題目とはなりえなかつた。ところで第三回目の讀物に着手しようとする現在では、日本は他國に對して、少くともまだ、公然たる×××××をしてはゐない。しかし、それにも拘らず、今筆を執らうとしてゐる私には、×××××の×××××××××。そしてまた、×××××××××あらうところの××××××××××××。私の頭は、私の腦細胞は、××××××××××××××××、××××、×××××××××××。私は、今度こそは、倫理的な說教や空想的な希望やをもつて此の篇を結ぶことを敢てしないであらう。私は專ら客觀的な事實によつて××××から××××への××の不可避性を科學的に立證し、且つかゝる客觀的な科學的分析に適應すべき吾吾の行動について論述するであらう。第一の貧乏物語は、その×××的性質のゆゑに、貴族層の間にすら若干の愛讀者を見出しえた。しかしその反對物に轉化してゐるであらうところの此の第二の貧乏物語は、果してその最後まで書き續けられうるや否やをすら、筆者みづから危んでゐる。

今本誌で語ることは、同時に數十萬の讀者に向つて語ることである。しかし吹きすさぶ嵐の中に立つて、かゝる多數の人々の前に、私の如きものが、忌憚なく所見を吐露しようとすれば、その吹きすさぶ嵐が私を妨げるであらう。私はその妨害を、こゝでは、可能なかぎりに避けたく思ふ。だから私は、數十萬部に上ぼる本誌本號のいづれかの一つを現にいま手にしてゐられる一人の讀者を心に描いて、しばらくその一人の讀者だけを相手に、話を進めよう。（以下私は、その讀者を、あなたと呼ぶ。）屋外はひどい嵐が吹いてゐるが、室内はそれでも靜かだ。私はあなたを私の書齋に招じ、火鉢をかこみ茶を酌んで、膝を

くゆらしながら、私は靜かな氣持ちであなたと語らう。

私は、社會が動くと信じてゐるものであり、現代社會は今やまさに大に動かんとしてゐると信じるものである。それが何處へ・何故に・また如何にして・動くか？　私があなたに語らうと思ふのは、この問題についてである。

この際、私はあなたを、かゝる問題についての全くの素人であると假定する。私は問題を、『できうるかぎり簡單に且つ平易に陳述することを努め』、內容は全く科學的智識に限定されるにも拘らず、『經濟學の——又はその他の科學の——最も初步的な概念ですら、これを前提しないやうにするであらう』。しかし私はまた、あなたが『何等か新たなるものを學ばんと欲し、從つてまた自ら思索せんと欲する』人間の一人であることを、前提とする。——もしかゝる條件をあなたが認められるなら、私はもつとこの『まへおき』を續けよう。

あなたは佐藤信淵の『混同秘策』（瀧本誠一氏編『佐藤信淵家學全集』中卷に收む）を見られたことがあるか？『文政六癸未ノ年四月十一日』といふ日づけをもつた・その序文の末尾には、次の如く書いてある。『予深く上天賦育の大恩に感じ、竊に六合を括嚢するの意あり、然れども奈何せん家貧にして年の老たることを、於是乎此書を筆記し、題して混同秘策と名け、聊か以て晩遠の鬱憤を寫し、固封して兒孫に遺す、云々』。彼れにはまた『呑海肇基論』なるものがある。その序の一節にいふ、『今夫世上の外寇防禦の論を見るに、大抵財用の不給をも知らずして、唯一圖に武備を嚴重にすることを議する者多し、然ば手も無くして打敲んことを欲し、足も無くして奔走んとすることを求むるが如し、悉皆妄想の論なり、故に予實に國家を利すべきの正論七卷を作り、其名を呑海肇基論と題し、將に以て安濃津侯に獻ぜんとす、然るに愚息升庵、此書を讀で驚き恐れ、乃ち諫て曰く、不肖此書を一覽するに、實に是れ世界を混同し、萬邦を統一するの大議論にして、八十老翁の壯心感伏に堪たり、然りと雖ども家嚴は草間の小父なり、卑賤にして如此の大議論を爲す者は、往々不測の大患に遇ふ、家嚴の固より知る所なり、……此書世上に漏ば、或は越俎の刑あらんことを畏る、願くば固く辭して此書を獻ずる勿れと、書を抱て悲泣連日休まず云々』。これには『弘化四丁未元年正月六日』といふ日づけがある。それは、（西曆では、一八四七年、すなはちフランスの二月革命の勃發およびマルクス、エンゲルスの『××××』の發表の前年にあたるが）、日本では、吉田松陰、橋本左內、賴三樹、等々の死刑に處せられた安政六年を距ること十二年前、明治革命を距ること二十一年前、まさに封建社會の崩壞期にあたる。そしてかゝる社會の客觀的情

勢が、佐藤信淵なる『草間の一小父』の頭腦に反映し、彼れをして『ひそかに六合を括囊するの意』を起さしめ、あるひは彼れの長子が、『これを抱いて悲泣連日休まず』といふが如き書を起草せしめたのである。

私は今吾々が再びかゝる時勢にめぐり合はしたことを感じる。しかし歷史の進展につれて、××の舞臺は、今日では正に世界的な規摸にまで擴大されてゐる。

佐藤信淵の時代は、死滅しつゝある日本封建社會の胎內で、資本主義のための物質的諸前提がすでに成熟してゐた時代であつた。八十年後の今日は、××しつゝある世界資本主義社會の胎內で、××××のための物質的諸前提がすでに成熟して來た時代である。一九一四年より一八年に至る世界戰爭およびこの戰爭がひき起した資本主義の一般的危機は、『資本主義的な外皮が人類のより以上の發展に對する耐ゆべからざる桎梏となつてゐるといふこと、および歷史は××による資本主義的羈絆の××をすでに世界的規摸において日程に上ばせたといふことを、證明する』。今や××の××は××××××してゐると××に、白色テロアもまた世界到るところにおいてその狂暴を逞しくしてゐる。×××××××、安政×××××××昭和××は、××××××××である。事情は八十年前と相似たところであるが、舞臺の擴大なる、從つて××の深刻なる今日の如きは、もとより人類の歷史において×××である。そして、かゝる時代の情勢は、朦朧たる吾々の頭腦にもまた反映せざるをえない。等しく草間の一小父にすぎざる私の如きものが、ここに『ひそかに六合を括囊するの意』を抱きつゝあるも、またこれがためである。だが吾々は佐藤信淵のやうに、『この神州の雄威をもつて蠢爾たる蠻夷を征し、世界を混同して萬國を統一せん』との空想に耽らんとするものではない。彼等が『呑海肇基論』を艸した翌年には、マルクスおよびエンゲルスの『××××』が出てゐるが、この××の結語『萬國のプロレタリア團結せよ』こそ、今まさに吾々が六合を括囊せんとするに際しての××××××である。吾々は今かゝる×××××××××××。吾々は『吾々の見解と意圖を隱蔽するを陋とする』。私は『晩遠の鬱憤』を記し『閉封して兒孫に遺さう』とは思はない。今の時代は、たゞに黑を白といふことばかりではなく、黑を黑といはないことが、すでに反動的な意義をもつ時代である。私はみづから考へてゐるかぎりのことを、こゝで率直にあなたに語らねばならぬ。

二、辯證法的唯物論（總說）

『現代社會は何處へ・何故に・また如何にして』吾々の如何なる行動

を媒介として・動くか？』」——これが私のあなたに語らうとする問題であるといふことは、すでに述べた。ところで私は、この問題に對する科學的な解答を、マルクス主義のうちに見出してゐる。だから私の物語は、（もし私が甚しき過誤を犯さなかつたなら）、つまりマルクス主義の大體にわたる・できうるかぎり平易な・解説書となり入門書となるわけだ。しからば吾々がマルクス主義といふのは、一體何であるか？

昨年の或る會議の席上で、ブハーリンは、かく問題を提出し、それについて次の如く述べてゐる。

『吾々がマルクス主義といふのは、一體何であるか？　マルクス主義なる言葉によつては、色々なことが理解されうる。吾々はそれをば、マルクスによつて言ひ表はされた具體的な諸思想（すなはちマルクス自身が書いたもの）および彼れの學理と有機的に連絡されてゐるものの總和を意味する、と解釋することもできる。そしてこの見地からすれば、あらゆる新たなる理論、例へば、トラスト的資本の如き最近の現象のマルクス主義的分析は、マルクス主義には屬しない。だがマルクス主義を此の如く解釋することは、よくないであらう。マルクス主義は一定數の理論に限定されてはゐない。それは××的な哲學であり同時にまた研究の方法である。吾々はこの方法の助けによつて、種々なる諸現象を分析することができる。そして吾々が、例へば帝國主義といふが如き問題についてマルクス主義的分析を行へば、それにマルクス主義の方法を適用すれば、吾々はそれによつて、新たな理論的思想を含むところの、新たな思想を造り出だす。しかしかかる智的産物は、決してマルクス主義に對する補足ではない。それは新らしいマルクス主義的理論として、直ちにマルクス主義の不可分離的な一構成分となるのである。私は敢ていふ、吾々はマルクス主義の體系に一分子だも非マルクス主義的なものを加へたのではない、たゞ吾々は新たなる諸事實および新たなる諸現象をマルクス主義の見地から研究し、それによつてマルクス主義の寶庫を豐富にし、マルクスの理論を發展せしめた、等々である。……レーニン主義が世界において最も正統なマルクス主義であるゆゑんは、正にレーニン主義がマルクス主義を豐富にしたからである。吾々はすべての諸現象をマルクス主義の見地から分析する。マルクスの生時にはまだ存在してゐなかつたといふだけの理由で、マルクスが分析しえなかつたところの、新たな現象が澤山にある。帝國主義の問題、現在吾々の前に展開されてゐるやうな具體的形態においての・過渡期〔×××から×××への〕の問題、ソヴェート國家といへる國家の新たな型に關する問題、かゝる具體的な形態ではなくマルクスの出會はなかつたところの多くの諸問題をば、吾々は今日分析せねばならぬのである。』」

吾々がマルクス主義といふは、此の如きものであり、從つてレーニン主義なるのものは、かゝる意味におけるマルクス主義の『より以上の發展を代表するものに外ならぬ』。言ひ換へれば、レーニン主義とは、『帝國主義およびプロレタリア××期において新たなる發展を遂げたところのマルクス主義』に外ならぬのである。

なほブハーリンが『××的な哲學であり同時にまた研究の方法である』と言つてゐるところのものは、とりも直さず辯證法的唯物論である。それゆゑに今日のマルクス主義は、自らを規定して、次の如く宣言してゐる。吾々は『マルクスおよびエンゲルスの辯證法的唯物論を擁護し宣傳し、現實の認識の××的方法として之を現實の××的××のために適用し、ブルヂョア的世界觀の・ならびに理論上および實踐上の日和見主義の・あらゆる種類に對し積極的に鬪爭する』。

かくて辯證法的唯物論は、マルクス主義と非マルクス主義とを分かつ一つの試金石である。だから私は、しばらくの間、先づこの辯證法的唯物論について語るであらう。

前にも斷つておいたが、この問題についても、やはり私は、あなたを全くの素人だと假定する。

昨年の夏、ある專門學校の雜誌に『社會主義の實現性を疑ふ』といふ論文が出てゐた。それには全くの素人がいふやうなことばかり書いてあつたので、私は批判をも加へずに看過したのだが、今は失禮ながらあなたを全くの素人だと假定するので、先づこの論文を題材にして話を進める。それには次の如きことが述べてある。

『吾々は、社會主義××の主張者に對して、社會主義の全構成を示すことを、要求しうると思ふ。誤解なからんがためにいふが、私の疑問は社會主義的秩序の維持可能性にあるのだから、從つて私が要求するものは、革命戰術のプランではなくて、革命後にあらはれるといふ社會主義的秩序の構成のプランである。私は、その構成のプランについて、その實現性を吟味することを欲するのである。

『マルクス信者は、故意に未來のプランを避けるやうである。……「明日の天氣豫報すら當らぬ今日、未來社會の構成が描けるものではない、吾々はたゞ、未來社會が社會主義であるといふ大綱を知るのみ」と平氣でいふ。私見によれば、かゝる議論は、彼等がマルクスに忠實なるあまり、學問に對しては極めて不忠實な態度と考へる。

『以上述ぶる通り、社會主義者は、正に實現せんとしつゝある社會主義の社會について、その全體的な詳しいプランを示さざるがゆゑに、吾々自身が種々なる構成を想像し熟慮するの外はない。而してかゝる想像熟慮を費せば費すほど、その實現の困難を感ぜざるを得ぬ。社會

主義は結局、人間の利己心が亡びざるかぎり、言ふべくして行ひ得ざる空想ではないかといふ結論に達する。私は、社會主義の實現を信じ且つ期せらるゝ方々の、懇な教へを期待してゐる。』

斯様な疑問をもちつゝ、この筆者は他方において、次の如く言つてゐる。『マルクスの言ふやうな「各人の自由なる發展が全體の自由なる發展條件たる如き協同社會」が、もしも實現維持の可能なものと考へられるならば、むろん吾々は、かゝる社會の實現のために、犠牲を惜んではならぬと思ふ。否なそれが實現しうるとすれば、其ために財産生命を賭して悔なきものは、天下必ずしも其數に乏しくはないであらう。』

右と同じ頃に、更に別の筆者の手になる『マルクス主義××主義の疑點について』といふパンフレット、が別のところから現はれた。そして、それには次のやうに書いてある。マルクス主義は『第一、人間の欲望を考慮したるや、第二、欲望を滿足せしめたる後の動作を厭ふの本能を考慮したるや、第三、以上の疑點に基づく其の他の疑點。つづめて言へば、右の三つの疑點が氷解できぬのである。この疑點さへ氷解できれば、マルクスの謂はゆる…各人の能力に應じて勞働し欲望に應じて分配する善美なる社會を出現するとの主義も、採否を決定しうるわけなれども、疑問が存する以上は、その疑問の程度によつて、マルクス主義が實現する可能性ありや否や、また實現さすべきや否やの分岐點が定まると思ふ。

『我國の主義者はその落ち着く先きを研究して實行運動に着手したるや、…「とにかく現制度は氣に入らぬゆゑ、現制度を破壞さへすれば、落ちつく先きは、ともかくも現制度より、より善き社會を出現する」とて實行運動に着手したるや、充分に研究せずしてより善き社會を出現する」とは未知の問題にして、國民は現在より幸福になるや否やは分らぬことである。分らぬことを空想して實行運動に着手することは、余の與する能はざるところである、云々。』

これで見ると、前の論者も後の論者も、全く同じ型の疑問を抱いてゐることが分かる。今よりもより善い社會を造り出すことが果して可能であらうか？　この點が一番心配になつてゐるらしく見える。これらの人々の考では、それは到底不可能なことにしか思はれないが、しかしそれが確實に可能だといふことを、充分納得できる程度に、もしも、誰かが説明してくれたなら、自分たちもそれに贊成しよう。だが、その點が不安心であるかぎり、おれたちはそれを否決せねばならぬ、といふのである。

ところで、あなたはどうだ？　マルクス主義に對するあなたの基本的な疑問は、あなたの心のなかに、やはりこれらの論者のそれと同じ形

で存在してゐるのか？　私はそれを聞いたなら、序ながら、こゝであなたの社會的地位を卜ふこともできる。

もしもあなたがこれらの論者と同じ不安をもつてゐるのなら、私はあなたがプロレタリアでないことを推定しよう。マルクスが言つてゐるやうに、プロレタリアは××のほか失ふべき何物をも有つてゐない。だから彼等は、現代社會の××について何等の××をも感じない將來の社會が現在よりも果してより善き社會であらうか否かといふことは、決して彼等の最大の關心事となりえないのである。

私はあなたに一通の手紙を見せよう。――

『こゝは××××の產地ですから、私の近所にある工場もやはり××××の工場です。男女合せて千五百人使つてゐます。××では模範工場と云はれてゐるものです。就業時間は朝の六時から夕方の六時までですがそれだけの日給では男工ですら一ヶ月三十五、六圓にしかならないので、殆ど例外なく夜の十時まで引續き殘業をやつてゐます。だから毎日十六時間の勞働です。私の知つてゐる男の知人は、約二里ほど離れた×××といふ小さな町から、この××の工場へ自轉車で通つてゐるのですが、彼れは、例へば今日の朝六時に仕事を始めると、今夜はずつと徹夜して仕事を續け、明日の夜十時まで、前後四十時間ぶつ通しに勞働し、それから自轉車で自分の家まで歸り、つまり二ヶ日目の夜はじめて自分の家へ歸るわけです）、床のなかにも這入らずに、ごろねをするのださうです。そしてその翌朝はまた六時までに、自轉車で工場へ歸へるのです。これは特別の例外ですが、しかしこれに近い例はいくらでもあります。家族が多いと、こうまで無理をしなければ、ともかく生きてゆけないのです。

『女工の方は出來高拂ひださうですが、最初一ヶ月十五圓內外の收入で、寄宿舍にゐるものは、そのなかから食費として八圓差引かれるのです。十年くらゐ勤めたものでも、五十圓かせぐものは滅多にないさうです。

『夫婦で通勤してゐるうちでは、父も母も朝早くから夜おそくまで工場にゐるので、兩親の顏をよく知らない小供がゐるといふ話です。こんなうちでは、大概祖母か何かが留守居をして、子供を育ててゐるのです。

『何か一と言でも不平を言ふと、すぐ首になります。首になつた或る職工は、私に次のやうに語りました。「不平を言つたら首にするぞといふことを、最初工場に入れるときに教へておいてくれたら、私は一と言も不平を言ふのではなかつたが、だまつて入れておいて、一と言不平を言つたといふので、すぐ首なのですから、全くもつてひどいものです。」しかし酷いのも酷り前かも知れません。產業豫備軍に實に夥し

い數に上ぼつてゐるのですから、資本家は落付いたものです。いくらでも代りがあるのです。地方の未組織勞働者は實に弱いものです。

『當地にはまた×××が實に澤山ありますが、そこの職工ときたら、また極端です。男工の賃銀は一ヶ月二十五、六圓、女工の方は十五、六圓です。あなたは×××を見られたことがありますか？　素人には全く話のできないほどの・あのひどい騒音と塵のなかで、大きな男が一日十何時間も働いて、一ヶ月に二十五、六圓の賃銀なのです。しかも一ヶ月無事に仕事が續く分は、まだ結構な方です。朝工場に行くと、『今日は仕事がないよ』と親方に云はれることが、一ヶ月に二三度、多いときは五六度あるさうです。そんなときは、その日の米が買へないのです。仕事のない日には、せめて日給を半分くれろと言つても、工場主は相手にもしないさうです。

『この×××の勞働時間は、朝の六時から夜の七時。休憩時間は午前九時から十五分、晝食後三十分、午後三時から十五分、合計一時間です。

『當地の勞働者の健康狀態は、一般に非常に惡くて、殊に女工には肺病が非常に多いさうです。工場醫の話によると、肺病の女工を靜養させれば、どの工場も休まねばならぬ、とのことです。この女は大分病氣が進んでゐて、休ませなければならぬと思つても、ありのまゝを言へば直ぐ首になるだけであり、首になつたら食ふに困まつて死を早めるのだから、何ともいへぬ氣の毒な思ひがするけれども、そのまゝ働かせておく、とのことです』。

これはほんの一例だが、吾々は此の如きを、抽象的には、×××の耐ふべからざる羈絆といふのである。まことにマルクスのいふやうに、ローマの奴隸は鐵の鎖でつながれてゐたが、今日の奴隸は眼に見えざる鎖でつながれてゐる。彼等はその鎖の外に失ふべき何物をも有たない。現代の××××××を×××××××、果してその次に今日よりもより善き社會が來たるであらうか、などいふことに、最大の不安と關心をもち、その點を机の上で『熟慮』してゐるやうな餘裕を有する人々は、まことに結構な御身分の方々なのである。あなたもその一人なのだ。そしてあなた方が『國家』または『國民』の名において心配してゐることは、さういふ結構な御身分の方々のために心配してゐることなのだ。××××の耐ふべからざる羈絆のもとに喘ぎながら、辛うじてその日〳〵の生活をしてゐるプロレタリアにとつては、あなたが問題とするやうなことは、てんで問題にも何にもなりはしないのだ。しかもさういふ人々が今社會の最大多數を占めてゐるのだ。

先きに引用した論者は、他の場所で更に次の如く述べてゐる。『××××の實現を欲し且つ多くの人たちがその實現を問題としつゝあると

いふことは、決してそれが實現できることを意味するものではない。『人間は常にみづから解決しうる問題のみを問題とするといふ』マルクスの言葉は、マルクス信者でない私にとつて無論何等の價値もたない』。

この人は、自分の『空想』的問題を、社會に課せられてゐる現實の問題と、取り代へてゐるのだ。マルクスが『人類は常にみづから解決しうる問題のみを問題とする』と言つたのは、誰でもが勝手に考へ出した問題がいつでも無事に解決される、といふ意味なのではない。例へば、この人が假に未婚者だとすると、彼れは美人で金持で從順で悧巧で等々の諸條件を具へた細君を得んことを『問題とする』でもあらうが、そんな問題がいつでも難なく解決されるといふことを、マルクスが主張してゐるのではない。いづれ後で詳しく述べるであらうが、資本主義から××××への推移が實現されるためには、その間に苦難に滿ちた過渡期が横たはる。先きの論者は、資本主義の×××××してしまへば、すぐその跡へ、完全な××××××が實現されるといふことを、マルクスが主張してゐるかと思つてゐるらしい。そして、かかることの實現が果して可能であるか否かを『學問上の』問題としてゐるのだが、そんな問題が現實の社會でいま日程に上ぼつてゐるのではない。彼れの問題は、いま人類に課せられてゐる問題ではなく、書齋裡における空想的な一讀書生がふと思ひ浮べた論理的遊戯のための一問題である。マルクスが『人類は常にみづから解決しうる問題のみを問題とする』と言つたのは、そんな問題のことではない。

——だが、あなたがこれらの人々と同じやうに、マルクス主義に對する最大の疑問をそこに置いてゐるといふのなら、私は今あなたを相手に話をしてゐるのだから、——一日に十六時間も勞働してゐる人々は、新聞紙さへ手にしたことはない、況んや『改造』などがそれらの人々の手に入る見込はない、私共の文筆的勞働は直接にはそれらの人々と無緣である、——私はあなたが問題としてゐるところを先づ話の緒口にせねばならぬ。

あなたがたの要求するところはこうなのだ、——將來における×××××の全構成について詳しいプラン(設計圖)を見せろ。それを示したなら、おれたちはその一々について『研究』し『熟慮』しよう。そしてこれなら大丈夫心配はないと合點できたら、おれたちも贊成しようが、さうでないかぎり、おれたちは之を否決せねばならぬ。

こういふ考は今日いろ〳〵な形態で發表されてをり、それはインテリゲンチア層の間に相當廣く行き渡つてゐる觀念形態の一つに相違ないから、私は以下それ〳〵の段階において、これをに種々の方面から

批判するつもりでゐるが、こゝでは先づその根柢に横たはつてゐる觀念論を批判しよう。

かゝる要求を提起する人々の頭腦のなかには、吾々の社會的存在（吾々がそのもとに織り込まれるところの社會組織の全體）をもつて、吾々の意識・意圖・意欲に依存するものであるとなすところの、一の觀念論的幻想が横たはつてゐる。その幻想によれば、吾々は何等の條件・何等の前提・の拘束をも受けることなしに、將來の社會組織をば勝手に工夫し發明し設計することのできるものである。そこでこれらの人々にとつては、將來の社會組織につき『種々なる構成を想像し熟慮する』ことだけが、『學問的』な問題となる。だが此の如き『生活から離れた』理論的遊戯、此の如き『國民の政治的運動から離れた』書齋的思索こそ、吾々の最も無用とするものである。吾々は逆に將來社會を生み出だすべき諸條件と諸前提とを、その母胎たるべき現代社會のうちに求める。だから吾々の考察の重心點は、吾々が現にそのもとに生活しつゝある現代社會に向けられる。これ『科學的社會主義を説明せる主要著作たる「資本論」が、目下現存するところの・そしてその中から未來の秩序が生長してくるところの・諸要素のみを考究しつゝ、未來については最も一般的な示唆に止めてゐる』ゆゑんである。（レーニン『人民の友とは何ぞや』、川内氏譯本、九八頁。）

『何人も知る如く、未來の展望については、舊社會主義者が、無數に多くのものを與へてゐる。彼等は、人間が××なしにやつて行き、その社會的諸關係が搾取に基づかずに・人間的本性（例へば利己心、例へば無限の欲望、等々——河上）の諸條件に適應せる進歩向上の眞正の原則に基づく・場合の、社會的秩序の圖形をもつて、人類を恍惚たらしめようと欲し、未來の社會を極めて詳密に彩色したのである。』（レーニン、前掲書）。私は舊稿から、こゝにその一二の例を引かう。

『例へば、フランス初期の社會主義者カベーは、一八三九年「イカリア航海記」なるものを公けにしてゐるが、これは今まで誰にも知れなかつたイカリアといふ極樂國の有樣を記述したもので、すなはち寓言に托して著者の理想社會を描いたものである。それには、共産主義を實現しつゝあるイカリアといふ理想郷の有樣が、極めて精細に記述してある。一例を擧ぐれば、この國においては、すべての人が皆な一樣の服裝をすることになつてゐて、——尤も男女および老若に應じて必要已むをえざる差別は許されてゐるが、——各人の好みによつて選擇ができるのは、たゞ服地の色についてだけである。男子は十八歳より六十五歳に至るまで、女子は十七歳より五十歳に至るまで、すべて勞働に從事する義務がある。一日の勞働時間は、夏に七時間で冬は五時間である。尤も女子の勞働時間は、一日に僅に四時間にすぎない。4

後一時になると、一切の勞働は皆な中止される。嫌な不愉快な仕事は、すべて機械でやる人間の負擔する仕事は、みな面白い愉快な勞働ばかりである。從つて物の生産は夥しき額に上ぼる。これをば社會一般の人々は平等に分配する。尤も男女および老若に應じて、必要な程度の差異は設ける、等々』。

同じくフランス初期の社會主義者フーリエによれば、『將來の理想社會の單位となるものは、ファランジなる共産的團體である。ファランジは千五百人乃至二千人の團員から成り立つことを原則とし、その中に部が分かれ、部が更に組に分かれる。すなはち趣味を同じうせる人々が七人乃至九人相集まつて一組をなし、また趣味の似寄つた組々が相集まつて一の部をなし多くの部が集まつて始めて一個のファランジを組織する。此の如くにして、一個のファランジの中には、農工業すべての方面にわたり、それ〴〵の仕事を分擔する多くの部が包含されてゐる。例へば、ある部は果樹園の仕事を擔當してゐる。そしてその部の中のある彼は專ら林檎の栽培を司る、等々といふが如くである。一個のファランジに屬する人々は、ファランステールと稱する大建築のもとに共同生活をする。各家族は別々の部屋に住んでゐるが、炊事その他のことは總てこれを共同に經營するので、非常に經濟的である。ファランステールの建物を中心として、一定の面積を有する正方形の土地がこれに附屬してゐて、その上に農業および工業が營まれる。すべての團員は生活必要品の供給について保證されてゐる。しかし全體の產物の中から、すべての團員に分配すべき必要品を控除した後は、その剩餘が勞働、資本、技能の三者に分配されるので、その割合は、勞働に對して十二分の五、資本に對して十二分の四、技能に對し十二分の三である。新社會には軍隊も警官も必要はない、罪人もゐなければ裁判官もゐない。たゞ一般の事業を管理するために、多少の役員がおかれる。すべて共和制であつて、ファランジの長も選擧によつて定める。三個または四個のファランジが聯合してその全體の長を選び、これらの聯合體は更に相集まつてその長を選び、此の如くにして次第〴〵に大なる聯合體を組織し、遂に世界全體のファランジが一個の世界聯盟を形造り、その聯盟の長は世界最高の官吏としてコンスタンチノープルに駐在し、この都をもつて世界の首府とする。』

日本でも一九〇二年（明治三十九年）には、矢野龍溪氏が『新社會』を公けにされた。そこでは、新社會の有樣が、例へば中央政府の豫算の數字まで列擧して、詳細に記述されてゐる。だが、これも全く書齋人の夢で、現に著者自身が筆をおくに臨み、『覺め來たりし書室の裡、四邊寂として人なく、……遙に聞ゆるは曉月杜鵑の聲、また殘夢を續くに由なし』としてをり、更に『いのちにもまさりて惜くあるもの

は、見果てぬ夢のさむるなりけり』といふ古歌を附記してゐる。（序ながら言つておくが、私が最初の『社會主義評論』を書いたのは、こういふ書物が廣く讀まれてゐた時代なのである）。

此の如く、舊式の社會主義者は、未來の展望につき、頻りに種々の空想を描いたのである。だが『人間的本性（利己心、無限の欲望、等等）に適應せる社會的條件に關する考察を放棄し、現代の社會的諸關係の唯物論的分析に・現代の搾取制度の必然性の説明に・たづさはる場合、その場合にこそ、社會主義的教義の成效があるのである』。（レーニン、前掲書）。かくして空想から科學への社會主義の進化が行はれた。社會主義はこれによつて始めて唯物論の基礎の上に・現實の土臺の上に・据えつけられたのである。

フランスのサン・シモン、さきに擧げたフーリエ、およびイギリスのオウエンは、エンゲルスが『三人の偉大なる空想者』といへるものである。これらの人々の著作のうちには、（先きに掲げたるが如き未來社會の空想圖の外に）、後の社會主義がこれを承繼し發展したところの偉大なる諸思想の萠芽が含まれてゐるが、しかしこれらの偉大なる思想家たちも、『彼等の時代によつて設けられた柵は超えることができなかつた』のである。

『一八〇〇年代（のヨーロッパ）では、新たなる（資本家的）社會秩序から生じる矛盾が、やつと生成し始めたばかりであるから、かゝる矛盾を解決するための手段に至つては、猶更のことであつた』。『かゝる歴史的情勢は、社會主義の建設者たちをも支配した。資本家的生產の未熟な狀態に・未熟なる階級狀態に・未熟なる理論が適應した。未發展なる經濟的諸關係のうちにまだ隱れてゐたところの・社會問題の解決法は、勢ひ頭で作り出されねばならなかつた。社會はたゞ諸々の弊害を示しただけで、（同時にそれらの弊害を除去すべき手段を示してをらず、從つて）それらの弊害を除去することは、思索する理性の任務であつた。そこで問題は、社會秩序に關する一の新たなる完全な體系を發明し、これをばプロパガンダにより、また出來うべくんば模範的實驗の實例により、外部から社會へ押しつけるにあつた。これらの新社會組織は最初からユートピアたるべき運命を負はされてゐた、それは微細な點に亘つて工夫されればされるほど、いよ〳〵ます〳〵紛れもない幻想に墮せざるをえなかつた。（エンゲルス『反デューリング論』河野・林兩氏譯本、第三篇の一、參照）。初期の社會主義者が、未來社會を頭で發明しようとしたのは、そして未來社會を生み出すべき諸要素をその母胎たる現代社會のうちに發見しようとしなかつたのは、かゝる事情に基づくのである。

私は先きにカベーやフーリエに因んで、矢野龍溪氏の『新社會』を引用した。私は更に武者小路實篤氏の『新しき村』について一言しておかう。エンゲルスは、空想的社會主義者たちが問題としたところを說明して、それは『社會秩序に關する一の新たなる完全な體系を發明しこれをばプロパガンダにより、また出來うべくんば模範的實驗の實例により、外部から社會へ押しつけるにあつた』と言つてゐる。武者小路氏が一九一八年（大正七年）に唱道し始められた「新しき村」の計畫は、日本における斯かる空想的社會改造案の一實例と看做すことができよう。氏は當時次の如く言はれた。

『新しき村といふのは、一言でいへば、皆が協力して共產的に生活し、そして各自の天職を完うしようといふのだ。

『それは（我等の憧がれてゐる時代は）すべての人が一定の勞働を果すことによつて、すべての人が衣食住の心配から超越することが出來る時代でなければならぬ。

『少くとも人間が人間らしく健全に生きるために必要なものは、すべての人がたゞでなければならない、それらのものをたゞで要求する權利を有するだけの義務は、各人が働くことによつて拂つてゐるわけだ。

『（吾々が隣人に對する）義務を果して安心するには、吾人が平等に勞働の分配に與づて、人間が人間として生きるに必要缺くべからざるものは、たゞにすることを明言する。』

これで見ても分かるやうに、氏が理想として『頭のなかに』描いたものは、××××の社會だ。ところで氏は、かゝる社會が如何にして實現されうると考へたか？ 氏の言葉は次の如くである。

『もし萬人がさういふ世界を眞に憧がれたら、さういふ世界は實現せらるべきはずだ。

『自分を信じ切つてくれ、その上さういふ世界を本當につくり出したいといふ氣のつよい、そして熱心が時とともにます〳〵ふえる人が、五六十人、否な二三十人でもゐれば、僕は必ず新しき村は實現できるものと信じてゐる。』

かくて氏は『自分を信じ切つてくれる』二三十人の人々の協力により、新しき村を建設して、『模範的實驗の實例』を世界に示し、『萬人がさういふ世界を眞に憧がれる』やうな機運をつくり、これによつて全世界に理想社會を實現しようとされたのだが、それは『最初からユートーピアたるべき運命を負はされてゐた』。

エンゲルスは、サン・シモン、フーリエ、オウエンの三人を批評して、次の如く言つてゐる。『啓蒙主義者と同じく、彼等は一定の階級を解放せんとしたのではなく、全人類を解放せんとしたのである。（彼等によれば）眞實の理性および正義がこれまで世界を支配しなかつたの

は、ただ人間がそれを正しく理解しなかつたからである。今やかゝる個人は出現し、眞理を認めた。だが、かゝる個人が出現し、眞理が丁度いま認められたといふことは、歴史的發展の聯關から必然的に継起した不可避的の出來事ではなくして、純粹の僥倖的偶然にすぎない。もし斯人にして五百年早く生まれたならば、人類は謬誤や闘爭や苦惱を五百年分節約することができたであらう。この考へ方は、本質において、すべてのイギリス、フランス、およびワイトリングを含む初期のドイツ社會主義者たちの考へ方であつた、云々』。（河野・林兩氏譯文による）。

日本では一九一八年に現はれた武者小路氏が——氏自身は自分を如何に意識してゐたとしても——正に斯かるものであつたのである。當時私は氏の『新しき村』を批評して、『この上同じ實驗を繰り返す必要はない』と言つたが、（拙著『社會問題管見』の後の版にその一文を收めた）、氏はこれに對して、『經濟學者が何と言はうとも、彼等には人生が分かつてゐない、おれたちの村の事業が彼等に理解できるものか』といふ風のことを答へられたかに記憶してゐる。（記憶だから間違つてゐるかも知れない）。だが、『人生』とは霞を食つて生きてゐる仙人の生活のことではない。人間生活にとつての最も基礎的な事實は、經濟學者が最もよく心得てゐるはずだ。それから十年以上たつた今日、氏はなほ依然として『新しき村』についての當年の意氣込みと抱負とを維持してゐられるであらうか？『熱心が時とともにますますふえる』習慣を得られてゐるであらうか？

いづれにしても、社會情勢がまだ熟してゐない時代には、頭のなかで理想社會を發明しようとする思想家が出るものなのだ。西歐にあつてはサン・シモン、フーリエ、オーエンたちがその偉大なる代表者である。

だが、かくするうちに、歴史はしばらくもその歩を休めなかつた。大工業が勃興した、××××にあつた階級闘爭は××××××をとつて社會の表面に現はれた。そしてこれらの新たなる事實は、社會觀の上に、歴史觀の上に、決定的な影響を及ぼさずにはおかなかつた。『一八三一年にはリヨンにおいて最初の勞働者一揆が起つた。一八三八年から一八四二年にかけては、最初の國民的勞働者運動たる・イギリスのチヤアチストの運動が、その極頂に達した。』（エンゲルス）。マルクスが資本論において、『都市的プロレタリアートはリヨンにおいて警鐘を打ち鳴らし、地方的プロレタリアートはイギリスにおいて赤旗をひるがへした。海峽のこなたではオウエン主義が、海峽のかなたではサン・シモン主義およびフーリエ主義が蔓延した』と言つてゐるの

が、それである。（カウツキー版、五三二頁）。かくて『一方においては大工業が・他方においては新たに獲得されたブルヂョアジーの政治的支配が・發展するにつれて、プロレタリアートとブルヂョアジーとの間の階級鬪爭がヨーロッパの進歩せる國々の歴史の前景へ現はれた』。それは『實際的にも理論的にも、益々あからさまな・×××な・形態をとつてきた』。かくて『科學的ブルヂョア經濟學の弔鐘が鳴つた。』經濟學はそれがブルヂョア的であるかぎり、もはや科學として止まりえざる段階に進んだ。「資本と勞働との利害の同一を説き・自由競爭の結果は一般的な調和と一般的な福祉を齎らすと説く・ブルヂョア經濟學は、『事實によつて、ます／＼明白に、その欺瞞を曝露された』。『すべてこれらの事實は、もはや××できなくなつたと同時に、たとひ如何に不完全であつたにしろ、かゝる事實の理論的表現であつたところの、フランスおよびイギリスの社會主義もまた、もはや××できなくなつた。しかしまだ驅逐されてゐなかつた舊式の觀念論的史觀は、物質的利害に基づく階級鬪爭について、否な一般に物質的利害について、何等知るところがなかつた。』（エンゲルス）。

今や新たなる事實に基づいて新たなる史觀がうち立てられ、新たなる經濟學がうち立てられ、かくてそれらのものの基礎の上に社會主義が科學的にうち打てらるべき時機がせまつた。十八世紀の偉大なる思想家たちが乗り越え得ざりし時代の柵は、（かゝる時代の柵は何人にとつても乗り越え得ざるものであるが）、時代そのものの進展によつて取り除かれた。マルクスはかゝる時代に生まれ出た。そして正に時代が要求しつゝありし件の諸任務を見事に果したのである。

私は、マルクスの成し了へたその××××事業につき、以下順序を追うてできうるかぎり平易に物語るであらうが、こゝには先づ、唯物論の人間社會への擴張として生まれた・唯物史觀について述べねばならぬ。そしてそれについては、エンゲルスが次の如く叙述してゐる。

『新たなる諸事實は、從來の全歴史を新たなる考察に從へることを強制した、かくして、すべて從來の歴史は階級鬪爭の歴史であつたといふこと、これら相互に鬪ふところの社會の諸階級は、いつでもその時代の生産＝および交易諸關係の・一言にしていへば經濟學諸關係の・産物であるといふこと、かくてそれ／＼の時代の社會の經濟學構造が現實の礎を形成してゐるのであり、各々の歴史的時期における法律的および政治的諸制度の・ならびに宗教的、哲學的、その他の觀念諸様式の・全上層建築は、結局においては、この現實の基礎から説明さるべきであるといふことが明かにされた。これによつて、觀念論はその最後の逃げ場たる史觀から追ひ出され、唯物史觀が提供され、そして、これまでのやうに人間の存在を彼等の意識からでなしに、彼等の意識を彼

等の存在から説明する道が發見されたのである』。（『反デューリング論』序論の一）。

此の如きが、エンゲルスのいふところの『マルクスの二大發見』の一つに屬する唯物史觀——唯物論の人間社會への擴張——の根本命題である。

こゝで最も肝要な點は、人間の社會的存在（彼等がそのもとに織り込まれるところの社會的諸關係の總和としての社會の經濟的構造ならびに斯かる社會組織の變動、一の社會形態から他の社會形態への推移、等々）をば、彼等の意識・意圖・意欲に依存するものとなすことなく、むしろそれとは逆に、かゝる意識・意圖・意欲こそは、彼等の社會的存在によつて規定されるのである、となす點である。

社會の變動は、人間がそれを意識すると否とに關係なく、それを希望するや否やに係はりなく、むしろ彼等の意識せぬうちに、多くの場合には彼等の意志に反して、實現される。そして、如何なる社會的諸關係が結ばれたかは、事後になつて、しかも極めておぼろげに、人間の意識に反映するにすぎない。

レーニンが言つてゐるやうに、『人間は相互に交通してゐながら、しかも彼等は、少しでも複雜な社會組織のなかでは——殊に資本主義的な社會組織のなかでは——それによつて如何なる社會關係が形成されるか、それらは如何なる法則によつて發展するか等、々のことを意識しない（知つてはゐない）。例へば、穀物を賣る農民は、世界市場における世界の穀物生產者たちと「交通する」のであるが、しかし彼れは、自らそのことを意識せず、また同じやうに、その交換から成立するところの社會的諸關係をも意識しないのである。世界經濟のなかにおける個々の各生產者は、生產技術の上にかく〳〵の變化を齎らしたことを、意識してをり、各ゝの商品所有者は、彼れがかく〳〵の生產物を他と交換したことを、意識してをるが、しかし生產者も商品所有者も、彼等がこれによつて社會的存在〔人々の間に結ばれる社會的諸關係の全體〕を變化することを、意識してはゐない。』かくて現代社會の全構成のあらゆる分岐は、人々の活動により絶えざる變化を刻々に閲しつゝあるが、『資本主義的世界經濟の内部における斯かる諸變化の一切の總計を、その一切の分岐に亘つて知りつくすことは、マルクスが七十人ゐてもなしえないことである。たか〳〵成し遂げられたところのものは、かゝる變動の諸法則が主要な根本的な筋道において發見され、かゝる變動の客觀的論理とその歷史的發展とが啓示されたことである。』しかもマルクスについて學ばない人たちは、かゝる主要な根本的な筋道をすら全く知らずにゐる。彼等は自分たちが一體どういふ社

會に住んでをり、その社會がどう動いてゐるかについて、大體の筋道をすら心得ずに生きてゐる。

人間がその上に住んでゐる地球は、人間が頭のなかから考へ出したものではない。それは人間が一定のプランに基づいて構成したものではない。人間の頭はもちろんのこと、人間そのもの乃至その他の生物もまだ存在してゐなかつた頃から、地球はすでに存在してゐたのである。それは人間の意識から獨立に存在してゐる。そして人間がそれを信じようと意識しようと否とに係らず、地球は絶えず太陽の周りを廻つてをり、また人間がそれを豫期しようと希望しようと否とに係らず、自身の內部で絶えず運動を（例へば地震といふが如き運動を）起してゐる。これまでのやうに、人間が彼等自身の社會關係を意識的に統制することができず、むしろ逆にかゝる社會關係の制御のもとに無意識的に引きずられてゐるかぎり、社會組織に對する人間の意識の關係は、この地球に對する人間の意識の關係と同じである。

かくて現代社會の改造は、言はゞ地球の改造と同じである。して見ると、吾々の意識・意圖・意欲からは全く獨立に、與へられたるがまゝの複雜な諸條件を具ふるこの地球の上に、現に自分が生活してをりながら、この地球の改造が問題となつてゐる場合に、地球自體の研究は全くこれを無視し、たゞ自分の主觀的な要求や希望を規準として、將來構成さるべき地球の設計圖を描くといふことが、如何に愚かなことであるかは、明かであらう。改造さるべき地球はすでに與へられてゐるのであり、その地球には吾々の意識や意欲やでどうすることもできない諸條件が、前提されてゐるのである。

だから問題は、現在の資本家的生産の仕方を、『一方においては、その歴史的連絡と一定の歴史的時期に對するその必然性とにおいて・從つてまたその沒落の必然性を・表示し、他方においてはまた、その內的性質を曝露する』といふことに集中される。

『科學的社會主義が何等固有の意味での未來の展望を嘗て一度も描いたことのないのは、何人も知るところである。科學的社會主義は、近代的ブルヂョア制度を分析し、資本家的社會組織の發展傾向を研究することに、局限せられた、しかもそれだけである』。（レーニン『人民の友とは何ぞや』、川內氏譯文による）。

『吾々は世界に向つて、汝の鬪爭をやめろ、それは下らぬことだ、とは言はない。吾々はたゞ世界に向つて、世界は本來何のために鬪ふかを示す。そして意識とは、世界が否應なしにみづから體得せねばならぬところのものである』。『吾々は世界を獨斷的に豫想しないで、舊世界の批判の中からはじめて新たなる世界を見出さうとする』。（マルク

ス『獨佛年誌』)。

要するに、『すべての×××××および×××××の最後の原因は、人間の頭のうちに・永遠の眞理や正義やに對する彼等の增進しゆく洞察のうちに・求めらるべきではなく、生產‖および交換様式の諸變動のうちに求めらるべきである』。もし現存の社會制度が不合理であり不正であるといふ考が次第に高まりつゝあるならば、それはいつの間にか生產方法や交換形態に變動が起つてゐて、(例へば資本主義はいつの間にか帝國主義の段階に進んでをり、自由競爭はいつの間にかその反對物たる獨占に轉化してゐる、等々)、そのために、以前の經濟的諸條件に適合して造られた社會的秩序が、今日ではもはや斯かる適合を失つたといふことの、一の兆候にすぎない。もうさうであるとするならば、『そのことは同時に、發見された弊害を除去するための手段は、やはり變動した生產諸關係それ自身のうちに——多かれ少かれ——發展して——存在してゐねばならぬ、といふことを意味する』。(エンゲルス『反デューリング論』、第三篇の二)。マルクスが『政治經濟學批判』の序文において、人間は常に彼等が解決しうる問題をのみ問題とする、何故なれば、より嚴密に觀察すると、問題そのものは、その解決のための物質的諸條件がすでに存在してゐるか又は少くともその生成の過程にある場合にのみ、發生するといふことか、いつでも發見されるのであるから』と言つてゐるのは、まさにこのことを意味するのである。

あとで詳しく述べるであらうが、總じて人間社會の仕組み(社會組織)は、生產諸力(人間が物を生產するために役立つ一切の力の總和)の發展程度に適應するものであつて、生產諸力の貧弱な時代には低級な社會組織が成立してをり、生產諸力の强大となつた時代には高度の社會組織が成立する。ところで、社會問題なるものは、根本的には、これらの生產諸力と社會組織との間に矛盾衝突が存在するために起るのである。一定の社會組織のもとで生產諸力が段々に發展してくる、さうすると、あたかも小供のからだが成長するにつれて今までの着物が合はなくなると同じやうに、發展した生產諸力は從來の社會組織の外皮のもとに包みきれなくなる。そこで生產諸力と社會組織との間に矛盾が起り、その矛盾が人間の意識に反映されて、社會問題が問題とされることになるのであるが、しかし斯かる問題が起るのは、生產諸力がすでに或る程度以上の發展を遂げたからであり、しかもその或る程度以上の發展を遂げた生產諸力は、現存の社會組織よりもより高級な社會組織を生み出だすための前提條件なのであり、それ自身が社會組織の變革といふ問題を解決するための根本的な手段となるのである。譬へば、ある程度以上に胎兒が成育したならば、母體はそれを包

みきれなくなる。だが、母體がそれに耐え得なくなつたといふことは、同時に、胎兒が母體から離れて獨立に生存しうる程度にまで成長し了へたことを意味する。分娩——胎兒の母體からの獨立——は、すなはち問題の解決である。此の如くにして、問題は常にその解決の手段が存在する場合にのみ發生するのである。

だから問題解決の手段は、『頭のなかからなど發明さるべきものではなく、むしろ頭の媒介により眼前の物質的な生産上の諸事實のなかで發見さるべきものなのである』。(エンゲルス)。

かくて社會問題の解決を、宗教や倫理や哲學やに求めることなく、これを經濟そのもののうちに求めたこと、この問題の取扱に際し、個個人の希望や趣味や性癖やに基づく一切の觀念的空想を徹底的に排斥し、(その意味において徹底的な無我主義)、與へられてゐる眼前の事實の科學的分析によつて客觀的論理を把握し、吾々の意識・意欲・意圖から獨立して行はれる社會變動の必然的な自然法則を理解することにより、問題の解決を徹底的な唯物論の地盤の上に据えたこと、こゝに先づマルクス主義の根本的な特徴が存在するのである。

質問に現れたる議會政治家の論理

蠟山政道

一

本誌編輯部よりして、「議會に於ける大臣の不答辯と其責任」と云ふ題に就て、何か意見を書くやうにと求められたのであるが、之を憲法上の問題として解釋すれば、斯方面に對して專門的知識を持たぬ私は、それにお答へする資格を持たぬのである。それに充分答ふる爲めには夫々適當の人が他にあらうと思ふ。

が、編輯部に於てこの問題を採り上げて一般讀者と共に考慮されやうとしたのには、恐らく現在開會中の議會に於ける質問及び答辯に現れてゐる所、殊に大臣の答辯に現れてゐる所が常識的に考へても何かしら不滿足のものを感じ、一體かやうな狀態で議會政治と云ふものは宜ろしいのであらうか、と云ふやうな疑惑を持たれたからなのではあるまいか。法律上の責任と云ふやうな嚴格な意味でなくて、漠然たる意義に於ける政治的若しくは道義的責任に缺くる所無きやうと言ふ程の疑問ではないかと思はれる。若しそうであるならば、一般社會の通念から見て、如何にも議會政治家の論理と云ふものは不可思議千萬のものではあるまいか、それで一體一國の政治が正當に行へるものだらうか、果して議會の權威を保ち得るものだらうか、と云ふやうな懷疑が湧いて來るのに對して、一箇の眞面目な問題として考慮するに値すると思ふ。私も一箇の市民として、又公共問題の研究に從事してゐる一學徒として、不充分乍らお答へする義務のあることを感ずるのである。

二

抑も議會に於て、議員から質問が爲され、大臣又は當局者が答辯をしなければならぬのは、どうゆう理由に基くのであらうか。それは、

議會の有する權限又は職能の一つである所の執行及び行政機關、一口に言つて所謂政府に對する批評及び監督なる事柄に基くのである。議會政治は俗に輿論政治とも言はれてゐるが、その意味は輿論によつて政治及び行政が批評され統制されることである。批評なく統制の存しない所に於ては、人間の性情の然らしむる所であるが、動もすれば腐敗と沈滯とが生じ易い。議會が立法及び豫算その他高等政策の決定と共に、この批評及び監督の職能を有するのはこれが爲めである。から普通に說明されてゐる。

而して、ここに問題となつてゐる質問なることは、この批評及び監督の一手段であり、それに對する答辯は議會に對して實質上責任を負ふてゐる政府の反作用に外ならぬのである。勿論この批評及び監督の手段は質問に限らぬのであつて、他に種々なる方法及び手段がある。その諸手段の中何れが有力であり又實際上多く用ひられてゐるか、と云ふことになると、各國の議會に於て必ずしも一樣でないが、通常次の三種の方法がある。その一は議會に對して政府をして文書に依る情報の報告を爲さしむるものである。議員の動議によつて政府に文書の公開を要求し得るのであるが、事柄の如何によつては政府は之を拒絕するであらうし、又與黨がその動議を院議として決議することに反對することもあらうから、この方法は政府のイニシアチーブに依る文書の提供以外には實物はない。英國の政府は通常「命令文書」(Command Paper)と云ふ形式で、多くの文書を自己のイニシアチーブで議會に提出する慣習を有してゐる。又議會自ら調査委員會を任命することもあるが、我國に於ては假りにこの種の委員會が設けられたとしても、議院法の規定によつて、「審査ノ爲ニ人民ヲ召喚シ及議員ヲ派出スルコトヲ得ス」とされ、又「國務大臣及政府委員ノ外他ノ官廳及地方議會ニ向ツテ照會往復スルコトヲ得ス」(第七三、七五條)とあるから、その調査能力は制限されてゐる譯である。

その二は、單に事實の情報を得るので無く、事實の糺彈の目的の爲めにする口頭その他の手段に依る審査である。その結果を院議若しくは審査委員の報告の形式に於て發表するのである。この方法も前段の夫れに就て言へる如く、我國に於ては議會はその審査に必要なる權能が與へられてゐないから、この手段も實際上行はれない。かういふ議院法に依る制限を撤廢することは、必ずしも憲法違反とはならぬとされてゐるが、議院法の改正あるまでは致方無い。

最後に第三の方法として質問がある。この質問に就ても二つの種類がある。その一つは一定の形式を具へた質問であつて、我國の議院法第四八條—五〇條に規定されてゐる如きものである。それには、先づ三十人以上の贊成者あることを必要とし、質問の趣意書を議長に提出する時は、議長は之を夫々當該の大臣の下に送り、大臣は直に答辯を爲すか、又は答辯の期日を定むるか又はその答辯を爲さざる時は、その理由を明示することになつてゐる。これに對しては、質問者は、國務大臣の答辯が要領を得ない時は議場に出席を求め、更に議場に質問

を爲んことが出來る（衆議院規則第百四十一條）。又答辯に接しなかつた時は、質問の事項につき質問者は動議を提出し、三十人以上の賛成ある時は議題とすることが出來るとされてある（同上第百四十二號）この種の質問は、實際に屢試みられてゐる所であるが、右の如き形式的手續を必要とするが爲め、その效果は餘程限定されてゐる。この外に通常質問と言はれてゐる各種の場合がある。殊に議會の開會劈頭に於て首相の施政方針、外相の外交演説の終つた後で行はれる「質問戰」と言はれてゐるものや豫算總會に於て行はれる質問の如きがその主要なるものである。通常問題になるのは、この種の質問ではあるまいか。それで、これに比較的詳しく論じて見たい。

三

右に述べたる如く、議會が政府を批評し監督する手段として、事實の情報を求めたり、事實の眞相を審査したりする機能は、我國の場合は法規によつて甚しく制限されてゐる。法制上制限あるのみならず、政黨政治即ち多數黨政治となれば、政府黨が多數なるを常則とするから、反對黨にとつてはこの種の手段は實際上の效力無きことゝなるのである。

そこで勢ひ名を事實又は意見に對する質問に藉りて、議員自らの政見を發表し、政府を批議する方法を發達せしむることゝなるのである。そこに、この種の質問の濫用を來す傾向が存すると共に、しかもこれ以外に政府をして批評に答へしむる方法なき場合に、正當にして誠實なき答辯の爲されざるに就て、一般の不滿の發生する事情が存するのである。

勿論この種の質問に就ても一定の形式と手續とに依る制限が與へられてゐる。卽ち通告順に依る制限と質問が事實若しくは意見の說明を求むるだけで、討論に亙ることは出來ないとされてある。從つて假令その答辯が質問の要旨に觸れず又は滿足せしめないものであつても、更にその質問を重ぬるの外はない。政府當局者が事の機密に亙ることを口實とし、若しくは國家の重大なる利害に關するを理由として答辯を回避しても、そのこと自體は直接に何等の責任を發生せしむるものではない。たゞそれが一般に濫用されたりと見られる時は、政府に對する世上の疑惑を深からしむるに過ぎないのであつて、それに對する處置は政府自らの決定に委せるの外はない。

佛蘭西の議會に於ける Interpellation は、時として猛烈に大臣の問責の手段に使用せられ、又は議事妨害の目的に行はれると云はれてゐる。而してその答辯に就て討論を許し、その結果議院それ自身として投票を行ふことがあるので、小問題だと見られたものが、時に意外にも內閣の瓦解を招くことがある。これは、小黨分立の國では、政府黨と反對黨との分野が確然としてゐない結果であつて、討論の際に政府反對のブロックが多數として成立する可能性があるからである。我國に於ても、先日の滿洲某事件に關する決議案のやうな場合に、若し中

立黨が多數存してゐたならば、その向背如何によつて、どんな結果を導いたか、は分らぬのである。かうした意味に於て、所謂問責的質問なるものゝ役割は重大なのである。

次に豫算總會その他の常任委員會や特別委員會に於ても勿論質問は行はれる。豫算總會の場合等に於て、直接豫算に關係なき事項が、即ち首相の施政方針や外相の外交方針に對する質問の續行のやうなものが行はれるのは、質問權の一種の濫用であり、豫算審議の趣旨にも合致せぬやうであつて、一見甚だしく不合理のやうである。然し、見様によつてはさうでもない。一體豫算なるものは、財政上の數額のみに關係してゐるやうに見ゆるであらうが、議會が豫算に協贊を與へる根本趣旨は、その豫算の對象たる政策又は行政を是認するや否やの前提を決定して、然かる後に數額の問題に及ぶべきものである。だから、その政策又は行政成績に就て不滿不審があるならば、飽くまでそれを追及するのが至當である。從つて質問がここにも相當の役割を演じ得る譯である。

四

以上論じたる處によつて、何故に議會はこの種の狹い意義に於ける質問、即ち單なる事實の質疑ではなく、問責の意味を含めたる質問に多くの力を注ぐに至つたかの事情に就て一層明かになし得たと思ふ。要するに、これは、言葉を換へて云へば、政黨的意見の披瀝であつて、討議と何等異る所無き性質のものである。人々は質問を事實の眞相を明かにし、眞理への道を拓くと云ふやうな事象と見ればこそ、その答辯に就て多くの不滿を感じ、不誠意を詰りたくなるのである。が、その質問が既に一種の政策的意見の表示であるならば、それへの答辯も亦一種の政策的理由によつて如何樣にも構成され得る性質のものなのである。ここに議會政治家の論理があり、一般に眞理への道を指示すべき學問的意義に於ける論理は存在しないのである。然らば、問題はこの種の議會的論理は如何なる意義と價値とを有するものであるか、と云ふ點に移る。

曾つて『議會的論理（パーリメンタリー・ロジック）』なる一書を遺し、その長き議會生活に於て體驗せし所を後世に傳へたウィリアム・ジエラルド・ハミルトン（一七二九―一七九六年）が、該書の中で、かう言つてゐる。曰く『事實を表示すること或はそれを混ね合はすことは、絕對的にその事實夫れ自身ではない』と。議會政治家の論理は事實夫れ自身を表白する所に成立つのではなく、寧ろその反對の目的を到達した時に成功するのである。續いて彼はかう云つてゐる。『同一の事實を種々な仕方で表白せよ。批評しようとする時は、何か贊同すべきものを見つけよ、贊成しようとする時は、批評する何かを、重大でない點は承認せよ。提議には贊成して、推理は否定せよ、……極端な場合の誤謬を述べ立てよ』と言つたやうな調子である。要するに議會に於ける質問にせよ、答辯にせよ、それに成功するとか失敗するとか云ふのは、このハミルトン

式の議說に從ふか否かにある。

之は討論と云ふ形式が、ソクラテスの對話のやうに眞理への方法として考へられたのではなくて、反對黨をやり込める目的の爲めに採られてゐる結果なのである。從つて、討論なるものは、殊に議會の黨派の間に行はれる討論に於ては、その何れか一方の側に眞理への道が伏在してゐるとは考へられない。又單純にその中間に存するのでもない。その何れの場合に於ても、それが各自その儘行はれた場合に如何なる結果を來すかの比較判斷に於てのみ見出されるのである。從つて、それは質問者と答辯者、卽ち反對黨と政府との兩者を、第三者として獨自の立場より批判し又は爲し得る民衆の間に於てのみ發見されねばならぬ。民衆は自ら事實を知り、情報を採り、意見を蔵し、裁斷するの明を備えねばならぬのである。

議會は政權の構成が決定される意思又は行動の機關であつて、社會的事實に根據する思想の創造又は決定の機關としては不備であり不向きである。ここに行はれる質問や答辯を、この思想機關の表白と見做すこと自身が根本的に誤りなのである。現代社會に於ける思想機關は、學術、新聞、調査所等の機關に於て營まれてゐる。議會は單純に輿論機關ではなく、輿論を背景にする行動機關である。我々が行動者に求むべきものは意思の決定であつて、思想の決定ではない。我々が議會政治家の論理や修辭を通うして發見すべきは、それが質問であれ、答辯であれ將又怒號であり、野次であれ、皆一様に、それらによつて何が國家意思として決定されたかの一點である。然り而して、その國家意思の内容を思想的に批判し是非すべき任務を有するものは、民衆であり輿論に外ならぬ。獨自獨往の民意輿論こそ議會政治の基礎である。それ無き議會は盲ひの觀察を前に行はるゝ演劇に過ぎぬであらう。

文學形式問答

谷川徹三

A
B
C
筆記者

B、また何か考へごとか？

A、今日はさうぢやないんだ。「文學の形式」について何か書けと言はれたのでその腹案を拵へてゐるんだ。

B、「文學の形式」といふと？

A、さあ、それが僕にも曖昧だがね。普通文學の形式といへば繪畫の形式とか音樂の形式とかいふものに對する概念になる。――文學といふ一つの藝術形式を文學以外の藝術の諸形式に對立させてその形式の獨自性を考察することができるからね。この意味の文學の形式の獨自性は言葉といふ文學の媒體の性質によつて規定される。問題は言葉の本質の問題、つまり言語哲學になる。ところが「文學の形式」はまた「文學の諸形式」の意味にもなるんで、さうすると小說とか劇とかいふ文學の中の諸種類の形式のそれぞれの獨自性の考察になる。更にまた律語と散文といふやうな區別も文學に於ける形式の問題として看過ごせないし……

B、さういへばこないだ新聞の文藝欄で形式主義何とかいふ論文を見かけたつけ。しかしその論文では君の今言つたやうなことは問題にしてゐなかつたよ。

A、さうなんだ。今問題になつてゐるのは別な意味の形式なんだ。もつとも全然關係がないといふのではないが……。さつきの場合と區別していへば、「文學作品の形式」つまり內容と對立させた意味の形式だね。

B、形式美とか內容美とかいふ言葉があるね。

A、さういふ對立もある。また美といふ概念から離れても（といふのは藝術品は美といふ點からばかり見られるものではないから）、一般に作品の價値を決定する規準が形式にあるか或は內容にあるかの問題と

してなかなか論爭があつた。

B、でそれはもうかたがついてゐるのかい？

A、まだ問題にしてゐる人もあるし、もうかたがついたと言つてゐる人もある。たとへばリツプス——さう、この人の言つてゐることを君に一つ聞かせてあげよう。かうなんだ、「藝術品の價値を規定するものは藝術品の內容か形式かといふ爭ひは、內容を題材（腹案とか素材とか言つてもよい）と取りちがへてゐるのである。……內容を、眞に內容の名に價ひする意味、すなはち藝術品に含まれてゐるもの或は藝術品の中に存するもの〔das im Kunstwerke Enthaltene oder darin Liegende だね〕の意味に解すれば、さういふ爭ひは對象を失つてしまふ。この意味に於ける藝術品の內容は、藝術品のうちに形づくられたもの或は形成せられたもの〔どうもうまく譯せないな、つまり das im Kunstwerk Geformte oder Gestaltete だ〕、或は藝術品に於いて一定の形式にまで把捉せられたもの、である。藝術に於ける形式は內容の在りかた〔die Daseinsweise des Inhaltes〕——それによつて內容が內容になるところのもの——である。兩者は藝術作品に於いては一つのものであり、したがつて、或藝術作品に於いて、形式すなはち內容の在りかたを少しでもかへれば、それによつて藝術品はどこか異つた內容をもつことになる、その逆もまた然り。……內容と形式とは相關概念である。一は他を含んでゐる、或は一は他を伴ふことによつてのみ其の意味を得る。」更にかういふんだ、さつき內容と素材とを區別したね、その素材の概念をもつてきて、「素材に對立せしむべきは形式ではなくて、むしろ藝術品の形成〔Formung〕である。この素材の形成はしかし實際は、藝術品の內容を素材から取出すことを——內容をその形式に、すなはちそれによつて內容が內容になるところの形式に、呪縛することにほかならぬ。……ゆゑに、題材の意味に於ける素材は藝術品の價値を決着しえない。それは、形成されて藝術品の內容とならぬ限り、むしろ藝術品としては決して存在しないで全く藝術品のかなたにあるところの或ものを意味してゐる。クリンゲルと共にいはば、藝術品にあらはされてゐる人間がペテロであらうがエンディミオンであらうが、それは藝術品にとつてはどうでもよいことである。……藝術品に於いては形式がすべてである。しかしそれは結局また、藝術品の價値はその內容にのみ依存するといふのと同じことになる。」

B、それで君はこの意見に贊成なのか？

A、僕には僕の意見が多少あるが、藝術品を藝術品として見る限りに於いてはこの意見に別に反對はしない。しかし、近頃の所謂形式の問題は今言つた問題ともちつと違つてゐるのだ。問題の中心は「形式が內容を規定するか、內容が形式を規定するか」にあるやうだ。尤もこの規定の問題がひいて作品の評價の問題をも規定するだらうから、關係があるにはあるがね。

B、つまり卵があつて鷄があるのか、鷄があつて卵があるのかの問題だね。

A、同じだとはいへないが、似たやうな問題だ。しかしさういふ比論をすると問題がかへつて面倒になる。かういふ問題はどこまでもその問題だけを取扱つて行かなければ……

B、だつて君はさつきからいろんな形式の意味をもち出して、なかなか當面の問題にはいらなかつたぢやないか。

A、それはまづ、問題になつてゐる形式の意味をはつきり規定したかつたからだ。そしてそれは大體今まで規程したと思ふが……つまり、第一それは文學作品の形式であること。第二に、それが內容と對立して問題にされてゐる限り、またそのいづれが他を規定するかが問題の中心である限り、リップスなどに於けるやうな內容の相關概念としての、むしろ內容と一つのものであるところの、形式概念ではないことが明かになつたと思ふが。

B、それだけぢや僕にはまだ分らない。さういふ意味で形式とか內容とかいふ、概念の積極的內容が分つてゐない。

A、普通美學では藝術品に於ける感覺的要素の結合統一の關係――つまり多樣の統一といつたやうな――を形式といひ、その中に表出せられてゐる感情とか、觀念とか、と言つても單に抽象的なものではなくて事物の表象と結びついてゐるのだが、とにかくさう言つたものを內容と呼んでゐる。この形式と內容とは本來は分けられない。それはリップスの言つてゐる通りだ。それは一つのものの二面である。しかしそれにもかかはらずわれわれは或藝術品に於いて、形式は整はないが何か感じをもつてゐるとか、生きたものがあるとか、眞實があるとか、深みがあるとか、つまり內容的に秀れてゐるといふ感じをもつ。また或藝術品に於いてはこれに反して、形式は整つてゐるけれど感じがないとか、眞實でないとか、生きてゐないとか、深みがないとか、さういふ感じを受ける。これは事實である。なるほど、かういふ感じは本來二つ以上の藝術品の比較から來てゐる。意識的にさうしなくても多くの作品に親しむうちに自然にさうなるところから來てゐる。もし世の中にただ一つの藝術品しかなかつたらさういふ感じは起きないであらう。しかしその由來はどうでも、今ではさういふ感じはそれぞれの藝術作品の享受そのものから直接受けとる感じとなつてゐる。ここに形式と內容との對立がある。しかしもう一つの場合がある。それは內容を素材の意味に、つまり取扱はれてゐる人物とか事物とか事件とかの意味にとる場合だ。この場合には內容すなはち素材を前の場合より簡單に、といふのは一つには始めから他の作品との比較によらないでも、形式に對立させることができる。なるほど、藝術品の鑑賞に卽してのみいへばわれわれは前の意味の內容、つまり作品の中に形成されてゐるもの、としてより享受も認識もできないのだから、その內容から後の意味の內容すなはち素材を想見しうるのは或程度までだ。その素材をその藝術的形式前に知つてゐるやうな場合は別として。しかしそれに反して制作の場合には、素材を如何なる形式のうちに生かすべきかに腐心するし、また一つの形式として出來上つたものが果してそ

の素材に適合してゐるかどうかが

で、それに鑑賞の場合でもいろいろな角度や視點からとにかくさういふ素材を想見することはできるのだから、その意味で素材と形式とは一般的に對立する。（この點から素材が完全に形式に呪縛されてゐないもの、素材と形式とが完全に融合してゐるもの、形式が素材に勝つてゐるもの、といふやうな區別をつけるものもあるが、面倒だからさういふ問題にはふれない。）

さてかうしてそれぞれの意味で形式と內容、形式と素材との對立が考へられるが、この場合の形式といふのは孰れも、整つたとか、整はないとか、美しいとか、美しくないとか、より素材に適合したとか、適合しないとか、さういふ性質の差をもつてゐる。さういふ性質の規定がなければこの場合內容や素材と對立しえない。普通、形式はあるが內容は貧弱だと言つたり、內容はあるが形式はないと言つたりする場合には、一見その形式に性質的規定はないやうに見える。が、實はさうではないので、この場合のあるは整つてゐるとか美しいとかいふ意味であり、ないは整つてゐないとか美しくないとかいふ意味なのである。然るに形式と內容とを一つと見る意味では、その形式はさういふ性質と必ずしも結びつかない。勿論結びつくこともできるが、さういふ性質規定がなくても成立つのである。いはば絕對的意味の形式なのである。從つてこの意味の形式は如何なる藝術品にも見られるのである。形式のない藝術品はないのである。ところで……ああ、丁度い

くれたらうね？

C、もつて來た。いま道道電車の中でまた讀みかへして來たんだが、犬養健といふ人は頭がいいね。實に行き屆いてゐる。

A、僕もそれを讀んだときさう思つた。それに、頭がいいのに、決して頭だけを先走りさせないでじつくり腰をすゑて考へてゐる。あの人の作家としてのよさがすつかりあの中にも出てゐる。さういふ風に感心した記憶があつたのでもう一度見たいと思つて君にたのんだのだ。

C、ついでに近頃「日日」に出たのももつてきた。

A、それは手許にもある。實は、賴まれたからには、あまり當面の問題を知らないでも悪いと思つて、二三の雜誌や新聞でこの問題を取扱つたものを最近讀んで見た。しかしどうもセンスのある人は論理やまとまりがなく、論理のある人はセンスがないやうに思つた。犬養氏には珍しくその二つがある。

B、すると君は犬養說か？

A、さうぢやない。大分異論がある。犬養氏に對してといふより、所謂形式主義の主張に對してと言つた方がいいかも知れないが、それには根本的の異論がある。尤も、根本的といつても、その「精神」にではなくて、その問題の導き方、或は問題の呈出の仕方にだがね。ちよつとその「日日」を貸したまへ。ここに犬養氏と橫光氏と池谷氏との間に「通過濟み」となつた形式主義文學論の一部が個條書きになつて

ゐるね。この第一條の立論に先づ僕は疑ひをもつてゐるのだ。『從來文藝作品に於いて漠然と「内容」といはれたものは何か？　それは畢竟作品の外面形式——即ち文字の羅列のはたらきを通じてのみうかがはれるものである。從つてそれは外面形式のはたらきに隷屬する。それゆゑわれわれはこれに内面形式といふ定義語を與へる。』といふのだが、ここにある「外面形式即ち文字の羅列」といふ言葉が僕には先づ氣に入らない。文字といふものはすべて意味をもつてゐる。その意味によつて文字は文字であるのだ。意味をはなれては文字の意味はない。(少くとも文學に於いては。)その意味から離れた單なる物質(?)としての文字の羅列なるものは考へられない。すでに滅びた民族の文字が地中から發見され、それを誰も讀み解くことができない場合には、この文字はなるほど、單なる物質としての文字の羅列である。しかしこの場合にも、1、われわれがこれを文字として認識する限り、そこに何等かの意味のあることを豫想する。それを豫想してそれは始めて文字として認識される。2、と共に他方またその意味の知られない限り、それは文字としての機能を果してゐない。(これはたとへば日本字を知らぬ他國人が日本字を見た時についても同様である。)

C、しかし犬養氏達はもつと別な根據からああ言つてゐるんぢやないか？　今僕の持つてきた「朝日」の中では鑑賞と結びつけてかう言つてゐる。文學作品の鑑賞とはほかでもない、『つまり作者自身が「形式」をとほして[illegible]したところの[illegible]を、讀者がその[illegible]形式を[illegible]とほして想像し返すのだ。しかしながら人生には人おのおのの想像作用を一律にすべき法律といふもののない以上この場合客觀性をもつのは「形式」のみである。』と

A、しかしその「形式のみ」といふ形式が實際には「客觀的」に内容を伴つてゐるんだ。つまり「文字の羅列」は單なる文字の羅列ではなくて意味を即ち内容をもつた文字の羅列であるんだ。その内容の把捉に絶對的に一致がないといふことと、その内容に客觀性がないといふこととは別だからね。だからそこからして『客觀性をもつのは「形式」のみである』といふ結論は出て來ない。われわれの「内心」は他人によつてさまざまにうけとられる。しかしわれわれの内心にも一定の客觀性がある。それは勿論われわれの身體と離すことができず、多くの場合に身體的表現の媒介によつて、或は身體的表現そのものとして、他人に知られる。しかし、だからと言つて身體にのみ客觀性があつてわれわれの内心には客觀性がないといふことにはならない。その意味で形式と内容とは身體と精神とが離すことのできないやうに離すことができない

C、それは分つてゐる。しかしそれだけぢや問題は解けてゐない。

A、僕もこれだけで問題を解いたとは思つてゐない。今言つたのはむしろ誰でも知つてゐることだ。しかしこの「誰でも知つてゐること」をよく誰でも閑却したがるんだ。つまり、ここに言つてゐる形式は、[illegible]

やうな性質的規定をもつてゐる形式ではなくて、さういふ性質的規定のない、從つて内容と常に結びついてゐる、だからまたどんな藝術品にでもある、所謂「形式をもつてゐない」藝術品にでもある、さういふ形式の意味なのに、それをみんな内容や素材と對立する意味の形式と混同してゐるのだから。しかしさういふ意味の、つまり全く内容と離すことのできない形式を根據として、形式主義といふのなら、それは内容主義と言つてもかまはないことになる。

C、さうは言つてゐない。「形式が内容を規定する」から、形式があつて始めて内容がありうるから……

A、しかしその場合、その形式といふのがすべての藝術品に――いや存在のすべてにと言つてもいい――認められるものだつたら、つまりこの形式が全く内容と離れられないものだつたら、内容の相關概念であつたら、それは同じ論理で、「内容が形式を規定する」ともいへる。形式があつて内容があるといふのも内容があつて形式があるといふのも結局同じことだ。とにかく僕がさつき言つた形式の二つの意味――まだ他に形式にはいろんな意味があるが、當面の問題に必要な限りに於いてかういふんだ――その二つの意味を、はつきり區別するのが急務だ。假りに第一を、つまり内容の相關概念で、内容と離れえない、意味をその絶對的意味と名づけ、第二を、つまり整つたとか整はないとか、美しいとか美しくないとかの性質的區別をあらはにも或は内含的にも含んでゐる、含まなければ成立たない、從つて内容とか素材とかと對立した、意味をその相對的意味と名づけよう。さてそこで僕はもう一度はつきり言はう、形式主義といふやうな主張はこの第二の形式概念をもとにしてのみ成立つので、第一の形式概念をもとにしたのでは成立たない、と。しかしただ第二の概念をもとにしたのではその形式主義は淺薄になる恐れがある。そこに形式主義のデイレンマがある。

C、といふと?

A、第二の意味の形式で美しいとか快いとか整つたとか言はれる性質は表面的な外觀的な感覺的粉飾か、でなければ生氣のない乾からびた傳統的形式――決して藝術的價値を要求しえない形式、と結びつき易い。人が所謂形式主義者を非難するのはその點道理である。その意味の形式に對しては、われわれは一方眞實の形式を説くと共に、他方内容の意味をも説くことができる。さういふ形式に對して、われわれが或種の形式整はぬ藝術品に於いて感ずる、生きた感じ、溢れ生るもの、或はまた内に含まれた味ひ、深刻、神秘――さういふ内容感は、逆に價値あるものである。われわれが形式をかかるものとのみ見るならば、われわれの貴んずる形式がかかるものとしてしか形成されないならば、われわれは如何に形式整はぬものといへどもそれを非難する權利はない。その整はぬ形式がもし新しい形式を求めるのあまりたまたま陷つた陷穽であるとしたら、われわれはその整はぬ形式をこそ反つて尊重すべきである。――新しい形式をもとめることは一つの最も生

き生きした藝術活動であるから。・・・・

O、しかしディレムマといふのは?

A、第二の意味の形式概念をもとにした形式主義が、もしかういふ形式を形式だと思つてゐたらそれは取るに足りない主張だ。しかも第一の概念だけをもとにしたのでは形式主義が成立たないとすれば、形式主義は一般に成立たないことになるから。

O、しかし形式はもつと深い意味をもつてゐる筈だ。第一・・・藝術は形式を離れてはありえない。

A、しかしその意味の形式は内容を離れてはありえない、したがつて藝術は内容を離れてはありえない。いまも、もう幾度も、言つたぢやあないか、形式の第一の概念だけをもとにしては形式主義は成立たない、と。

O、ぢやあ君は結局形式主義なるものは成立たないといふつもりなのか?

A、成立つともいへるし、成立たぬともいへる。

O、率直にいふと僕は君のその態度が嫌ひだね。もつとはつきり言つて貰ひたい。

A、僕はこれではつきりしてゐるつもりなんだ。或種のことははつきりいふと却つてはつきりしない。はつきり言はない方が却つてはつきりする。ついでだからいふが、僕は藝術家が一つの立場に――自分の信ずる立場に腰を据ゑて表現するのを[illegible]の獨斷をさへ尊重する。それはたとひどんなに間違つてゐても常にその中に一つ二つの寶石を藏してゐるからだ。しかし僕は批評家だ、僕は認識を求めるものだ、認識を求めるものは少しでも獨斷を避けなければならない。ものの區別をしなければならない。それぞれの主張の權利をもつ範圍と限界とを決定しなければならない。……で今の問題にしても、つまり形式の意味の取りかたで、どの程度にまで形式の意味をもつて行けるかによつて、どちらにでも言へる。僕の根本の見解を先づ言はう。僕はさつき形式の第一の意味と第二の意味とを區別したね。第一の意味では形式は全く内容と相關的だ、それは如何なる藝術品にでも見られ、その意味で整つてるとかゐないとかいふやうな性質的規定をもたない。第二の意味は形式は整つてるとかゐないとかいふ性質的規定をもち、從つて藝術品によつてそれのあるものとないものとがある、また形式はあるが内容はないとか、形式はないが内容はあるとか(勿論このある、ないは一定の性質的規定である)といふ意味で内容や素材と必ずしも結びつかない概念だ。ところで僕はもう一つの、第三の、形式の概念をもち出さなければならない。すなはち内面的形式の概念だ。

O、犬養氏達の言つてゐる?

A、さうぢやない。犬養氏達の言つてゐる内面形式とはちがふ。僕のは大體ゲエテの innere Form と言つてゐる概念から取つたのだ。尤も

[illegible]

仕方として理解せられてゐるか、僕はその直觀性を强調してむしろ表現の仕方、或は表現（もしこの言葉に近頃或人達のしてゐるやうに深い意味を與へれば）の意味にとる。勿論さういふ內面的形式はゲエテも言つてゐるやうに「手をもつて摑むことはできない、ただ感ぜられるのみである」が。この點をマックス・シェーラーが「他我の理解」について解いてゐる所謂知覺說と結びつけるのは僕にとつて非常に誘惑的だが、脫線の氣味があるから差控へる。それはとにかく犬養氏達の言ふ內面的形式ではない。……尤も犬養氏達の把捉の混雜を整理すればほとんど同じものになるかも知れない。これは後で問題にして見よう。しかし氏達が外面形式を單なる文字の羅列とし、內面形式を所謂內容に代はる、或は代はるべき、概念と見る限りに於いては、それは形式の第一の概念に、すなはちあらゆる作品に見られる形式に、結びつけられてゐる。しかるに僕のいふ內面的形式はさうではなくて、形式の第二の概念を通して來てゐる、つまりすべての作品に見られるものではなくて、特定の作品にのみ見られるものである。それは素材に適合した形式、或は內容を最もよく生かす形式と言つてもよい。この性質規定は今まで便宜上、整つたとか美しいとか快いとかいふ性質規定と一緒に取扱つてゐたが、實際には全く區別しなければならないものだ。つまり整つたとか美しいとか快いとかいふ性質規定は、必ずしも素材に適合せず、また必ずしも內容をよく生かしたことにはならない。そしてその意味で內容なしには考へられないといふ概念ではない。整つた形式をもつてゐても內容のない作品がある。しかし素材に適合した形式、內容をよく生かした形式に於いては、その形式は、その言葉がすでに示してゐるやうに內容と堅く結びついてゐる。その意味に於いて第二の形式概念、すなはち性質的規定をもつた形式概念の中から、その形式が必ず內容と結びついてゐるものを特に取り出して、それを第三の形式概念にしたといふことができる。さつき僕は第二の形式概念に關聯して形式と內容（素材）との關係に三種を區別するもののあることを言ひ、そのうちの一つとして形式と內容（素材）とが完全に融合したものを數へたね。第三の形式概念はあれに類似してゐる。しかし形式と內容（素材）とが完全に融合してゐるといふだけでは實際は未だ不十分なんだ。內面的形式は內面的充溢を、內面から湧き上る力を、內面的緊張を重要視する。さういふ充溢から、さういふ力から、さういふ緊張からつくられた形式でそれはなければならない。それは靑ざめた形式であつてはならない、乾からびた形式であつてはならない、硬化した形式であつてはならない、粉飾であつてはならない。その意味からいへば內面的形式は全く內容的である。しかし同時にそれはその內面的充溢を單に充溢させるだけではいけない。湧き上る力を制御し、呪縛しなければならない。適當な形式に晶化しなければならない。そのやうな制御、呪縛、晶化によつて內面的形式は始めて內面的形式となるのである。もし內容主義を內容さへあれば形式はどうでもよいこととするならば、內面的形式の立場はそれを排

む。自分の消化してゐない內容を――いたづらに大きな事件や生まな思想やを盛り上げて、それで內容がすぐれてゐると思つてゐるものに至つては論外である。それは內容ではない。內面的形式の立場からは、硬化した形式や扮飾やが形式ではないやうに、さういふ消化されない、生まな思想や出來事やは內容ではない。かくして內面的形式の立場は誤つた形式主義にも誤つた內容主義にも對立する。そしてそれは、形式が內から、素材の必然性から、有機的に展開されねばならぬことを說く意味で內容主義ともいへるが、形式の制御を、呪縛を、晶化を重んずる點で明かに形式主義である。

C、すると君のいふ內面的形式は、形式の第一の概念と第二の概念との綜合といふわけだね？　いや辯證法的統一か？

A、さう言ひたければ言つてもいいだらう。ところで犬養氏達の內面形式だが、さつきも言つたやうにこれは少し混雜してゐるやうだね。もし犬養氏達が單に內容といふ一般的な言葉に內面形式といふ言葉を置きかへたなら、それは形式の第一の概念に屬し、したがつてどこにでも見られる、別に性質的規定のないものだ。然るにこの內面形式をもし所謂「內面形式の原型」に關係づければ、その「內面形式の原型」は「人おのおのの稟質、主義、立場の角度から視られたもの」として性質的規定をもつものであるから、したがつてその內面形式も性質的規定をもつものとなる。一方に性質的規定をもち一方に性質的規定をもたない。この矛盾はどこから來たかと言へば、それは氏達が外面形式を單なる文字の羅列としてゐるからである。いひかへれば第一の形式概念――形式と內容とが全く相關的になつてゐる第一の形式概念、に於いて內容を拒まうとしたからである。更に、さういふ間違つた形式概念をもつて「形式が內容を決定する」と言はうとしたからである。それの間違つてゐることについてはもう前に言つたから繰返さないが、とにかくそれによつて本來第二の概念に屬すべき內面形式を第一の概念の中へ密輸入することになつたのである。だから、この場合單なる文字の羅列としての外面形式といふやうな概念を捨て去り、またさういふ外面形式が內容を決定するといふやうな主張を捨てれば、ここにその內面形式は――いや一般にその形式論は、蘇つて來る。勿論これだけでは僕のいふ內面的形式にならないが、しかし犬養氏達の――或は犬養氏のと言つた方がいいかも知れない――主張の裏に見える（これが僕には見えるつもりだが）精神を汲むと、結局僕の思つてゐるのとさう遠くはないやうに思ふ。たとへば犬養氏は武者小路氏や志賀氏の例をひいてから言つてゐる。『いつの時代でも一つのエポックを作るほどの作家は、例外なしに新鮮な外面形式〔注意したまへ「新鮮な」だよ、ここには性質的規定がある〕をひつさげて立つた。』『今日內容主義者の代名詞のやうにされてゐる武者小路實篤を例にひかう。同氏が最初に多くの讀者をえた時代にしても、當時の讀者にとつて第一に魅力となつたものは、當時の作者の新鮮た表現――外面形式をあつかつた。[illegible]

た。志賀直哉の場合はこれが一層はつきりしてゐる。』『事實はかくの如く内容主義者の場合に於いても尙〔この言葉をよく覺えてゐてくれたまへ〕形式は最初の聲高い發言權をもつてゐた。』この言葉に僕は決して反對しない。しかしここに言はれてゐることを押しつめると、かへつて氏達の形式主義の論旨を裏切るやうなはめになる。言葉をかへて言ふと、ここに言はれてゐることは、犬養氏の形式主義の主張がその論理の表面にあらはれてゐるよりも深い精神をもつてゐることを示してゐるのだ。といふのは、犬養氏はここで内容主義者たる武者小路氏達を謂はば同時にまた形式主義者にしてゐる。さういふことができるか？出來る道がたつた一つある。即ち内面的形式——犬養氏達の内面形式ではない——によつて藝術を見る道である。形式主義を單に傳統の形式や、扮飾としての形式を重んずるとすればそれは眞の内容主義と一致しない。また内容主義を内容さへよければ形式はどうでもいいと考へたり、或は消化されないままにでも（したがつて晶化されないままに）大きな題材や觀念を盛りあげることとすればそれは眞の形式主義と一致しない。しかし内面的形式に於いては、形式と内容とが内的必然によつて離れることのできないのはすでに述べた如くである。武者小路氏や志賀氏の作品にはこの緊張した内面的形式がある。武者小路氏の形式がどうして當時新鮮であつたか？武者小路氏が當時の文學の硬化した形式、萎縮した形式に囚はれないで、その獨自の個性、人生に對する新しい態度——人類に對する愛、普遍人間性への信賴、を表現の上に生かさうと心がけた（？）からである。硬化した形式を斥けた意味で、またその新鮮な形式が必然的に内面から湧き上る力によつて形づくられた意味に於いて、それは反形式的であつたやうに見える。しかしその湧き上る力はそれに適合した形式をもつことによつて始めて作品のうちに生かされた點からいへば、それは決して反形式的ではない。

尤も具體的にはこのやうな内面的形式にも程度の差がある。そしてその程度の差は大きくなると性質の差になる。形式の第二の概念に於ける性質規定が本來程度上のものであることはすでに語つたが、それと同じである。つまり結晶の完全不完全である。そこに第三の概念としての内面的形式が第一第二の形式概念から出て來た、したがつて常につながりをもつ、所以があり、また内面的形式の稀薄なものが結局内面的形式をもたぬものとされる所以がある。そこにまた、内面的形式が外面的形式（ここでは僕は普通の形式概念を、すなはち感覺的要素の結合統一關係を、僕の内面的形式と區別するためにかういふのだ——整つたとか美しいとか快いとかいふ性質規定は主としてこれに結びつく）と、いはば妥協する所以がある。それによつて内面的形式は外面的形式と結びつきもすれば離れもする。ひとしく内面的形式の緊張をもつた藝術品に、より整はぬ形式とより整つた形式、より美しい形式とより美しくない形式などの別ある所以である。そしてこの場合、ひとしい程度に内面的形式の緊張をもつた作品のうち、一方が整つ

形式をもち、他方が整はぬ形式をもつとすれば、純粹な藝術的立場からは、前者により多くの價値を與へなければならないであらう。そこで……

筆記者、もう規定の枚數を大分超過しましたが。

A、さうですか、しかしここでやめたんでは尻切れとんぼだ。ではあまり立入らないで、できるだけ簡單にかたをつけませう。そこで、さつきの問題にかへれば、結局、犬養氏や武者小路氏や志賀氏を內面的形式家として認めてゐるのだ。すなはち形式の最も深い意味に於ける形式家として、眞の形式家として、從つてまた眞の內容家として、認めてゐるのだ。でなければあの論旨は立たない。それにもかかはらずつまりセンスの上では武者小路氏や志賀氏の形式をさういふものと感じてゐながら、その形式を文字の羅列としての外面形式に結びつけようとするから無理があるのだ。氏の形式主義論を一貫する無理もそこにある。もつとはつきりいへば、犬養氏自身作家としては內面的形式家なのである、眞の藝術家が常にさうであるやうに。その內面的形式は勿論まだ志賀氏や武者小路氏に於けるやうな完成や切實を示してゐないとはいへ、とにかく氏の作品は生まな消化されない觀念や事件を盛りあげたり、うはつらの塗料や飾りでごまかしたりは斷じてしてゐない。僕は氏の作品を尊敬し愛してゐる。そしてまだまだ伸びるべき人だと思つてゐる。氏の作品を見れば、氏が淺薄な形式主義を主張してゐないことを、否、主張しえないんだといふことを、いやそれを認めなければならない。それだのに……

B、規定の枚數が超過してゐるといふのにそんなに本題を離れてはいけないね。もう好い加減おしまひにしたらどうだ。少しうんざりしたよ。

C、待つてくれ。もう一つ僕に聞かせてくれ。君はぢやあ、犬養氏のいふ作家活動と人間活動との區別をどう思ふか?

A、ああいふ區別をした犬養氏の氣持は分る。しかし區別そのものには贊成しない、殊にああ截然と一を形式活動に、他を內容的攝取や努力に割り當てるやうな意味では。勿論それは半分言葉の取りやうで、一方、作家活動にも形式活動と共に內容活動が屬し、人間活動にも內容活動と共に形式活動が屬する、といふに對して、自分は特に形式活動を中心とするものを作家活動と呼び、それ以外の行動の總稱を人間活動と呼ぶんだ、と答へることもできる。しかしそれにしてもその限界は不確かである。もしかういふ區別をしないですんだらしない方がいい。しかも實際しないでいいんだ。ああいふ區別をしなければならなかつたのは、やはり、氏が一方十分な內容感を、或は內容に對する尊重を、持ちながら、しかも他方形式を文字の羅列とし、その意味の形式が內容を決定するといふやうに言はうとしたからだ。さういふ主張の仕方を捨てれば、そして氏が、それこそかへつて氏の本質に近い內面的形式の立場を取れば、問題はもつと簡單にかたがつく。われわれはかう言へばいいのではないだらうか。藝術家は藝術家であるが

彼は藝術家としての活動を中軸とする、そしてその藝術家としての活動は表現活動すなはち形式活動を中軸とする、と。なるほどその表現は内からの必然性をもたねばならない。内面的充溢を、湧き上る力を、生活を背後にもたねばならない。しかしその充溢を、湧き上る力を、生活を、藝術として生かすものは表現である、形式である。さういふ充溢を、湧き上る力をもつてゐてもそれを藝術として表現しなければ藝術家としての意味はない。またそれに適合した形式を見出さなければ藝術家として價値はない。……藝術活動の背後に人間活動がある。藝術活動は人間活動の一つの表現、一つの形式である。人間活動を離れて藝術活動はない。しかし藝術家としての人間にとつては藝術活動はその人間活動の中軸であり、意味である。少し古風に教師風に言へばそれは藝術家の本分なのである。……なるほど人間としての活動はすべて社會的歴史的に制約されてゐる。そして藝術活動が人間活動の一表現ならば、藝術活動も社會的歴史的に制約されてゐる。したがつて表現活動——形式活動も社會的歴史的に制約されてゐる。しかし、であるからと言つて、藝術家が表現活動——形式活動を中軸とすることを、或はその意義を、否定することには毫もならぬ。或はまた藝術に於ける形式の意味を否定することには毫もならぬ。かへつて、形式はさういふものであることによつて一層重大な意味をもつのである。ルナチヤルスキーはそのハウゼンシユタイン論の中で、ハウゼンシユタインが「藝術は常に時代精神の形式づけられたものとしてのみあらはれる。」[illegible]彼はきながら、依然として「形式主義的考察」に囚はれてゐるのを不満とし不審としてゐるが、われわれにとつては、ルナチヤルスキーのその不審こそ不審である。藝術がその時代の精神の形式づけであり、形式が時代の内容性と結合してゐるからこそ、彼は——ハウゼンシユタインは、形式を重んじ、そしてその形式の社會學的考察から立派な成果を生み出しえたのである。さうでなくて、もし形式が全く内容から遊離したものであつたら、形式の考察は意味をもたないであらう。丁度内容が形式を離れて考察されたらそれは藝術の考察ではなくなるやうに。

ハウゼンシユタインと言つたからついでに引き合ひに出さう。僕の今まで言つたことを裏づけてゐるやうな言葉がここにある。かう言ふんだ。尤もこれは繪畫を取扱つてゐる論文だから、文學、つまり言葉の藝術——言葉といふものの性質によつて或人達がイデオロギーの藝術と言つてゐるもの——の問題とは多少喰ひ違ひもあるが、しかし大體は文學にもあてはまる。「藝術品は意識的に（つまり傾向的にだね）時代にはたらきかけなければならないと要求する卑俗な説の中にも相當深い意味がある。それらの理論のいけないわけは、それが感覺的存在をもつとも理解しないで、知的な説明手段をのみ過重に評價し、畫家に、或時代の道德や政治や精神を合理主義的作品によつて寓喩（アレゴリー）化せよと要求するからである。かかる傾向藝術は非難しなければならない。

尤も客觀的内容が傾向的だからと言つてそれを非難するのではない。ただ劣悪な形式で美術と文學的にあらはさうとするいかさま表現を非難するのである。われわれは寓喩（アレゴリー）をでもそのものとしては非難しようと思はない、ただ寓喩（アレゴリー）が美術としての表現の形式を缺いてゐることを非難するのである。スタンランは自由、平等、博愛に對する寓喩（アレゴリー）を描き宣傳的直接的に理解され易い石版刷によつて勞働者にはたらきかけた。メンツエルはホーヘンツオルレルン家を讃美するやうな挿畫を描いた。しかしスタンランやメンツエルはかういふ政治的傾向があつたからとて決してつまらない藝術家ではない。といふのは彼等の「傾向」は立派な表現の形式に置きかへられてゐるからである。……一つの時代が知的文化に偏し、感覺の文字を直接讀むことができない場合には、藝術はかういふ一面の傾向なしにはすまされないのである。……しかしまたこれと正反對の理論、すなはち「藝術のための藝術」を說くもののいふところにも一應の理はある。藝術は形式的のものである。藝術に於いては形式性の最高標準に達することが最高の論理に達することである。尤もこの規定は、間違つてはゐないが、不正確である。藝術は、或時代の生活が充ち溢れて最も純粹な藝術的表現形式をとるときに始めて完成する。或時代の活力が最も強く形式づけられた時、藝術はその本質の最高頂に達する。……もしも「藝術のための藝術」が、素材的なものを最高度の形式性に置き換えようとする試みを意味し、いはば或事柄とその[illegible]の重心から形式的なものの重心に移しかへることを意味し、しかもそれらすべてが一時代の生ま生ましい苦惱の精神においてなされるとしたら、その時こそ藝術の意義が、そしてまた「藝術のための藝術」の唯一の可能な意義が、充たされるだらう。』これは大體の意味を取つたのだが、面白いと思はないかね？　しかもマルキシズムの立場からほとんど最初に實のある藝術研究を出したハウゼンシユタインの言葉として。尤もかういふハウゼンシユタインをルナチヤルスキーは不徹底だとしてゐるし、更にルナチヤルスキーも一層徹底したマルキシスト達からは、不徹底だとされてゐるが、しかしさういふ「マルキシズムの立場から徹底した藝術論」なるものを僕はあまり信用しない。多くはピントが外れてゐる。それは過渡期の理論としては、また政策的なものとしてなら、理解はできる。またそのあるもの（たとへば尊敬すべきプレハーノフのものなど）はたしかに今までの藝術論に不足した研究の一面を補足してもゐる。しかしそれが眞の藝術論だとは思はないし、それが今までの藝術論に代りうるものだとも思はない。つまり……

筆記者、もう規定の枚數を十枚以上も超過しました。

A、さうですか。それぢや止むを得ない。まだ澤山問題を殘してゐるが今日はこれでひとまづ打切らう。

勞農大衆黨の成立過程と其の將來への展望

水谷長三郎

一

昭和三年四月十日勞働農民黨が解散されてより九ヶ月、吹き荒れる反動の嵐の中から血みどろの苦難を經て、新黨組織準備會は再び新勞農黨の創立大會を、十二月二十二日から三日間、東京に於て開催した。だがこの新勞農黨創立大會は未だ結黨の實體を議了し終らざる中に、田中反動政府に依つて解散を命ぜられ、併せて新黨組織準備會も共にその結社を禁止せられた。

かくて一切の組織を奪はれた準備會本部は十二月二十八日『すなはち今や知る——我が新黨準備會は現在の狀勢の下にあつてはそれが階級的なる限り、その合法性の剝奪は不可避であり、合法政黨として組織され得んが爲には左翼的なりと雖も依然としてかの裏切り合法諸政黨と同じく社會民主々義的政黨以外にはあり得ないことを。今日、×××××はその政策スローガンを全勞農大衆の前に明示してゐる。そしてよく今日の白色恐怖の下に敢然と自らを結束し、訓練と規律とによつて大衆的に戰ひ得る唯一の××××××××を措いてはあり得ないことを宣言し、廣く戰鬪的勞農大衆の參加を希望してゐる。こゝにおいて新黨準備會の解散にあたり我等は既に再び新なる新黨組織の計畫を放棄し自らを廣汎なる勞働大衆の鬪爭團たらしめんがために今後政治的自由獲得勞農同盟準備會と名乘ることを』宣言することに依つて、農民勞働黨以來の光輝ある大衆的左翼政黨の生活は、終にその最後の頁を閉ぢた。

二

昨年三月十五日に於ける共產黨の大檢擧、四月十日の勞働農民黨の解散、それ以後××の如くに吹き荒れた××××にその組織を散々に破壞し盡された左翼の陣營が、僅々九ヶ月の後に於て自らを鬪爭團と名乘るに至つた事は、卒然としてこれを聞けば誠に目まぐろしき飛躍であり發展ではある。

だが、この飛躍と發展とは、勞農大衆の大衆的規模の下に展開された鬪爭の上に力強く立脚したものであつたか？　左翼の指導理論が誤謬と淸算の連續的展開に寧日なかつた時、勞農大衆の大衆的鬪爭は

左翼の差し示すコースに隨つてグン／＼押し進められたか？ 斷じて否！ それは單に、大工場鑛山農村に基礎を持たざる、それらの職場に於ける大衆的鬪爭の展開を伴はざる、即ちそれらとは餘りにも遊離した、短なる理論の飛躍であり跛行ではなかつたか。

三

われ／＼は今こそ、冷靜な立場に立つて、新黨準備會が進んだ生活を嚴肅に批判しなければならぬ。惟ふに新黨準備會九ヶ月の鬪爭歷史は、『無產者新聞』の指導に對するあはただしき盲目的追隨であり、その方針の絕え間なき動搖の記錄であり、しかも結黨間際に至つては、それは何者かに憑かれし如き自らを葬るところの自暴自棄的突進ではあつた。

三月十五日の大檢擧は、日本の無產者運動が嘗て一度の經驗も經たことの無い、未曾有の大衆的且つ×××なものであつた。それと共に開始されし×××××××、最も×××形態の下に白色テロルの嵐として、左翼の陣營を片端しから破壞し盡して吹き荒れた。始めての體驗に加ふるに、指導者と云ふ指導者を一度に奪はれて、而も容赦なき白色テロルの雨下に曝されし左翼勞農大衆は、死守すべき自己の陣營を根柢的に破壞されて如何とも爲すに術なき無力の狀態に陷れられた。

×××××、戰線よりの逃避者と落伍者との續出——陰慘な日が梅雨期から七月に亘つて續いた。味方の陣營がかゝる狀態に陷つてゐる時、新黨準備會本部から續々と發せられし指令に何か？——曰く、『對支出兵反對運動を起せ』『治安維持法反對民衆運動を起せ』『××××、××××××××××』『勞農黨彈壓の大衆鬪爭を展開せよ』等々と。だがこれらの指令の下に鬪爭を展開するには、當時の勞農大衆は、餘りにも萎縮してゐた。二三の地方で七八人の所謂戰鬪的分子が數十枚のビラを撒き散らした位で、勞農大衆はむしろ本部とは日に日に離れて行くが如き傾向すら示した。

捕て〻加へて本部の結黨方針は、四月末×××××集つた全國の代表者會議に於て決定されしところの、政府に解散の口實を與へざる黨を即時組織する方針が、五月には勞農協議會で進めに變り、五月下旬から六月に亘つては日勞黨との無條件合同の提議となる等、まことにそれは、動搖常なくして、一貫した結黨目標をば大衆に失はしむるに過ぎなかつた。

過ぐる二月の總選擧の前後には、その強力な全國的組織の下に、支配階級の面前へ津浪の如く勞農大衆を動員したところの勞働農民黨も、今や以上の如き本部の方針に禍されて準備會支部の組織も極めて微弱となり、會員の登錄、會費の徴集はおろか、支部の大部分は看板をかける合法性すら獲得し得ない狀態となつた。

七月に入り、突如として無產大衆黨が結黨さるゝや、新黨準備會本部も遂に結黨への具體的方針を發表するに至り、新幹事會に確立された綱領、政策、規約の發表となつた。依つて準備會本部に於ても

々結黨への具體的行動を開始するや、これを契機として、舊黨員大衆は漸次戰線に復歸する傾向を示し來り舊黨支部、支部聯合會の所在地に於ても、準備會支部、支部聯合會が組織され、地方に於ては極めて狹い限度ではあるが、日常鬪爭もボツ〳〵開始されるに至つた。

舊黨の復活と結黨への準備は、九月十月になると、機關紙のアヂと遊說隊の活動とに拍車を加へられて、益々活潑に進展し、、準備會支部支部聯合會の組織も急速に增加した。勿論その九割までは、舊黨の幹部が漸く事務所に出入するに至つた狀態で、大衆的鬪爭を强力に展開し得る力などは固より持ち得なかつたのである。

かゝる狀勢を前にして、十月下旬全國代表會議は召集された。この會議は左翼獨特の意氣と熱とに包まれて、各地の代議員は異口同音に『三・一五事件に××××吾等の×××……』『××××をついて血みどろの鬪爭を……』等々、物凄い氣勢が文字通り嵐の如くにあげられたが、しかし結黨方針の基準となるべきところの、かけ引のない現在の組織狀態や、鬪爭力や、又將來の確實な見透し等は、何等具體的に報告される所なく、終始一貫、抽象的な言葉のみで、只だ徒らに中味の空つぽな氣勢があげられたに過ぎなかつた。かくの如くにしてこの會議は、その一面にウルトラ的傾向をば充分に持つてはゐたが、然し全體の空氣としては綱領、政策、他黨との合同問題等の討議に於ては、あくまでも、左翼大衆黨としての結黨に成功しなければならぬ意慾に燃えてゐた。

この會議の直後から十一月に亘つて、左翼の陣營は再び彈壓の襲撃を受けた。打重なる××に左翼は文字通り血みどろの身を引き起して、然し目指すところの結黨の日へと勇躍した。

だが、十一月の末から、『戰旗』×××××××を烽火として、結黨前後に至つては、『無產者新聞』『勞働農民新聞』を始め、準備會本部總動員の下に、暴風の如くアヂられた方針——結黨を中心としての左翼今後の方針は、餘りにもすばらしい飛躍を遂げたものであつた。

四

以上に於ても明かな通り、三月十五日以後新黨準備會の——これを指導した左翼の理論と云ふものは、まことに急速な發展の過程であつた。誤謬と淸算の目まぐろしい展開は、恰かも活動のフヰルムの如く、それの正しき把握と消化とは固よりのこと、それの追隨すらさへも、異常な精力を消耗せしめた。されば、三・一五事件に遁れた各地の若い指導者——所謂戰鬪的分子なるものは、あの目まぐろしき活動のフヰルムから投げられる左翼理論のタイトルを追ふに急なるの餘り、自分の立つてゐる組織を見失ひ、鬪爭の原動力たる大衆と遊離して遂に自らを救ふべからざる極左翼小兒病者に陷れると共に、創立大會をしてあの狂燥的な空氣に支配せしめるに至つた。

五

大衆的組織と大衆的鬪爭とより遊離した理論は、それが如何に××的文字に粉飾されてゐやうとも、それは現實の運動に取つては最悪の

妨害物の外何物でもない。我等は如何なる時に於ても大衆に追随してはならぬ。だが我等の運動は常に大衆の成長狀態を正確に認識し、それに立脚して一切の方針が建てられねばならぬ。舊勞農黨解散以來打續く白色テロルの下に勞農大衆が今日如何なる狀態に在るかを全然無視した所の、舊準備會本部の方針こそは、今現實の前に如何なる批判を受けてゐるか『無産者新聞』や『勞働農民新聞』の全紙面をあげて、ヒステリー的叫喚を續けてゐるにも拘はらず、勞農同盟の鬪爭は斷じて一寸も進んではゐない。謂ふ所の戰鬪的勞農大衆の獲得、組織、動員が何處に行はれてゐる。又それが近く強力的に展開される見透しが、果して何處に於て立ち得るか。

以上の如き舊準備會本部の犯した極左的誤謬に對する、同一陣營内よりの大膽にして卒直なる批判――そこから我が勞農大衆黨は生れたのだ。

京都に於ける勞農同盟の運動は、彼等の必死的狂奔と狂氣的デマゴーグにも拘はらず、その運動は全然行詰り、日に〱大衆と遊離して行く。之に反し我黨は、大衆の日常鬪爭の先端に立ち、田中反動内閣打倒、議會解散要求運動を始め、不當解雇反對、借家爭議の鬪爭等目ざましく活動してゐる。

我黨が一度び結黨の旗をひるがへすや、既に盛岡、大阪、奈良、靜岡、兵庫、福岡、鹿兒島、廣島、福井、鳥取等の諸同志、舊支部間に緊密な連絡が開始されつゝある。これらが打つて一丸となり全國的左翼大衆黨に結成さるるの日は、今や時機の問題となつてゐる。

勞農大衆黨は今日政府がその結社を認むるが故に、それはたしかに、かの極左翼の謂ふ官許的合法黨ではある。だが我等はこれを毫も恥としない。むしろ我等が恥ずる所は現在左翼陣營の組織と鬪爭力との缺如である。

水に加へられた熱が一定點に達すと、それは質的に一大飛躍をする。だが、水に熱が加へられたからと云つて、直ちに質的飛躍をするものではない。それが一定點に達するまでには、それだけの熱量と時間とを必要とする。勞農大衆と云ふ水に我等が必死的に加へる熱に對して、それに數百倍する冷水を浴せる支配階級との鬪爭過程に於て、昨年三月以來今日極度の受難を負ふ我等の加熱作業の繼續は、辛じて合法黨の分野にのみ許されてゐる。

――一九二九、二、五――

アインシュタインの新學說について

石原純

一、自然科學の驚異

數日前、外國からの新聞電報は突如として我々の耳を驚かせた。アインシュタイン博士がプロシヤ科學博士院に提出すべく今度完成したところの論文は、「電磁氣が結局重力と同じである」こと、即ち「針を磁石に引きよせる力は手を離れた磁石を地上に落す力と同じものである」といふことを證明したのであると傳へられた。更にこの新學說の噂さは米國に於て多大の興味と注意とを喚起したことが報ぜられ、ニューヨーク大學のシエルドン博士の意見として、

「發動機なしの飛行機の空中遊航、高い建築の窓から怪我一つせずに飛び降りること、人間の月世界訪問旅行といふやうなことは、これまでジュール・ヴェルンあたりの架空小說だけの物語りに止まつてゐたが、アインシュタインの新發見で斯ういふことも將來に於ける現實的可能性を帶びて來た」

と云ふ、いかにもセンセーショナルな豫想さへも物語られるに至つた。

「我々は光、電氣、磁氣を統禦する方法を知つてゐる。この三者はいづれも電磁氣的現象である。そこでアインシュタインの發見通り、若し引力が同樣に電磁氣的現象であるならば、われ／＼は引力絕緣に成功しないとは云へない。斯う考へてくるとアインシュタインの新學說に期待し得る將來の可能性はわれ／＼の想像に絕する。今後の問題は實驗學者技師が如何にこの新學理を適用するかにある」

とも說明された。

一般世人は之を讀んで果して何を感じたであらうか。十數年前アインシュタインの手によつて成つた相對性理論は實に我々に取つて一つの偉大な驚異の對象であつた。我々が從來思考し慣れたところの、そ

して哲學上からは全く先驗的に與へられた形式として解せられてゐたところの、時間及び空間なる概念が、自然科學的經驗からしていかなる變革を受けねばならなかつたか、我々の物理學的世界形象のなかには時間と空間とはもはや決して全く獨立のものではなく、互ひに融合して唯一の四次元世界を形作らねばならなかつたこと、又萬有引力はこの世界空間の歪みとして完全に云ひあらはされること、そしてこの理論の一つの歸結として我々の宇宙空間が有限の或る形體をもたねばならないことなどが、我々の前に日蝕觀測に於ける一つの事實的證明と共に提示された。何と云ふ絶大な劃時代的な理論であつたであらう。哲學者たちが無益にも單なる思惟的獨斷をもつて之に抗爭しようとしたにしても、彼等は明確な經驗的事實と之を包容する全數學的構成とを奈何ともすることができなかつたのであつた。かやうにして相對性理論は遂に我々に思考轉換を餘儀なくせしめた。

何故にそれがかほどの確實性をもつて我々に迫り得たかを私はもう一度强調しよう。自然科學であればこそである。若し單なる一人の有力な豫言者が今日に於て上に引用した新聞電報に語られたやうな事柄を揚言したとしたならば、彼が明日世界の顚覆の起るべきことを豫言したであらうと同樣に、たとへ或る人たちはそこに何等かの根據を推測しようとも、それでも尙ほ現にアインシュタインの理論に依るとする程の確實性を恐らくはそこに認めはしなかつたであらう。この意味で我々は既に自然科學がすべてを支配する時代を經驗してゐるのであると云つてよいであらう。自然科學こそ最も確實な驚異を我々に提供するのである。嘗て夢想としてのみ語られた空中飛行は既に現實のものとなつてしまつた。音聲や映畫の放送さへもが亦日常の出來事に化せられるやうになつた。自然科學が今後何を持ち來すであらうかについて我々は尠なからぬ好奇心にさへ驅られてゐる。「自由な空間散歩や月世界訪問もそれではどうやら見込みがつくと云ふものであらうか」と、一般民衆が自然科學の驚異に依賴することも、亦決して無理ではないと思はれる。

さて併しそれは果して事實であらうか、抑もアインシュタインの新



アインシュタイン博士

學說と云ふのはどんなものであらうか。斯うもう一度尋ねるのが多分一般者の心であらう。私は大に之に關して多少の說明を費さうと思ふ。とは云ふものの、私も亦その後報道せられた新聞電報以外に、謂はゆる新學說の內容を詳かにしない。それ故若し之を曲解する處があつたとしたならば、後日原論文を讀み得る機會に於て訂正を加へることにして、豫めその諒恕を請ふより外はない。

二、自然科學理論の構成及びその通俗化

ニウヨーク電報はなかなかにおもしろいことを報道してゐる。

「如何にも哲人らしい風貌の一人の男が夫人令孃と一緒に好奇心に燃えた世間とのうるさい接觸に疲れてもの靜かな假家をポッツダム附近に探してゐる。一代の碩學アルフレッド・アインシュタイン博士は引力及び電力に關する氏の新學說が喚起した世界的大評判にほとんど茫然自失の體である。『世界中に私の新學說の十分わかる人は十人足らずなのですから一般人のためそれを說明するのは無駄な時間つぶしです』と云つてゐる博士に取つて、世界中の人がどうしてこんなに新學說に興味を感じたかが不思議なのだ。學說發表の前後、博士は新聞記者や崇拜者に取りまかれて疲れてゐる。それに來月十四日は博士の五十歲誕辰にあたり、この機會に友人や崇拜者が一入のお祭り騷ぎをやるかも知れぬのをひそかに恐れるので、早くどこかへ逃げ出さうと逃げ場處を探してゐるのだ。」

この電文はいかにも能く博士の超越的な學者的な有樣とその周圍とを描き出して眼前に髣髴せしめてゐると私は思つた。一人の學者に取つてはその研究が全部である。之に成功したと云ふこと程彼に滿足を與へるものはない。だが、彼の滿足と愉悅とはそれで十分なのである。そして正當に批判してくれるものが一人でも二人でもあれば結構なのだ。世間や民衆が彼を崇拜しその功績を讚へるのは或はよいかも知れない。併しそれがために靜かな研究を妨げられることはいかにしても迷惑千萬である。そんな名譽をあてにして彼は決して研究に從ひはしなかつたであらう。

電文は更に續けて云ふ。

「でも博士はやつと我を折り、ニューヨーク・タイムス紙のため平易な言葉で新學說を說明した長論文を脫稿した。博士はその論文を奧さんに朗讀させ、夢みるやうに聽き入つてゐたが、朗讀が濟むと我れに歸つたやうに、『この論文には永久的價値がある。いづれ著書の中に入れることにしよう。』と滿足げに見えたが、その全文をニューヨークに打電すると云ふことを聞いて、奧さんが『まあ、無駄な金を使ふものですね』と眼を回した。博士は『世間では馬鹿なことに、例へば要りもせぬ着物などに隨分金を使ふぢやないか』といふ意見だつたが、とにかくかうした世界的興味は總て博士の意表外だつた。かくて新學說全文は巨費を投じて海の彼方に打電され、又論文は無線電送寫眞によ

つて電送された。博士が學者の研究室で生れた深遠な學理を世界的大ニュースとなし、乾燥無味な數學公式を新聞電報にさせた最初の人である。こゝに興味があり、世界新聞界は記事報道上の劃期的事件としたのである。」

これこそ一つの新時代的な劇的場面ではないか。

私は餘りに興味を覺えて、長々と新聞電報をこゝに轉載した。自然科學が我々の驚異であり得ると同時に、併しその高遠な理論の通俗化は一つの不可能事なのである。「乾燥無味な數學公式」、それが丁度近代のコンクリート建築物に於ける鐵筋と同樣に、近代自然科學理論、殊にもその最も進歩した物理學理論の骨髓をつくつてゐるからである。この數學公式を理解しようとしないで、手つとり早く理論を知らうとするのは、鐵筋の組み立てを少しも見ないで、只表側からコンクリートを撫でてゐるやうなものである。それがどれだけの丈夫さをもつてゐるかは到底それだけではわからない。そして無謀な人たちは、あんな粉末のやうなものを固めただけではとても地震などに堪へられるものではないと直ぐに罵倒してしまふ。何といふ淺薄早計な見方であらう。だが、さう云ふ種類の批判は現にあの以前の相對性理論に對してさへ隨分數多く持ち出されたのであつた。それ故に私は特にこゝで我々の自然科學理論がいかに構成されてゐるものであるかについて一般の注意を惹いて置きたいと思ふのである。

今日では理論物理學上の概念はすべて數量的であり、從つてその間の關係は悉く數學的にのみ云ひあらはせるばかりでなく、アインシュタインの一般相對性理論が承認されてからは、種々の根本法則をあらはす數學的方程式は時間及び空間によつて形作られた四次元の世界に於て謂はゆる共變的關係を滿足しなければならないことが一般に豫想されてゐる。共變的關係と云ふのは、任意の座標轉換に際して各の量がそれぞれ一方の方法で、卽ち共變的、逆變的、若くは不變的に變化し、從つて亦方程式全體がやはり同樣の形式に轉換されるのを指すのである。この結果として、どんな量も之に或る幾何學的意味を附せられるやうなテンソルとして成り立たなければならないのであつた。（ヴエクトルとかスカラーとかはそれの特殊な場合としてあらはれるものである。）之は實に我々の理論に對する最も一般的普遍的な要請であつて、之を滿足することなしに我々はどんな理論をも完全には望むことができないと考へられる程に確實な基礎として見られるやうになつた。恐らくそれは相對性理論が我々に持ち來したところの最大收穫の一つであらう。

この要請は、若し更に嚴確に論ずるならば、古代の自然哲學が準據したところの多くの先驗的思惟と同樣に、等しく先驗的であることを免がれないかも知れない。併しながらそれはもはや空疎な概念論議ではない。徒らに相對とか絕對とかを論爭し、若くは實在とか假象とかを差別する類のことにのみ傾倒する直觀的哲學は、吾々にとつて既に過去の遺産に過ぎないと云つてもよいであらう。我々はもつと現實に

深く進まねばならない。事實を把握して、しかも全物質現象を包括する一義的な理論を立てようとするのが我々の目的なのである。そして之に恰も適應するものとして一般相對性理論が見出だされ、既に事實的に證明されると共に、おのづから上述の要請を結果せしめたのであつた。それ故に之はもはや必らずしも任意的のものではなく、少なくとも之に代るところの、より普遍的な他の根據が新たに見出だされるまでは、我々は決して之を無視して何等の物質理論をもより根本的に價値づけることはできないわけである。若し相對性理論への異見を有する人があつたならば、先づこの事情を明確に反省しなくてはなるまい。

上に述べた時空の四次元世界は、我々が從來取り扱つてゐたユークリッド幾何學の成立するやうな空間的性質をもつのでなく、極めて複雜なリーマン幾何學に從ふ處のものであつて、そのなかに於ける諸關係は高尚な數學に依ることなしには何人にも想描することができないのである。從つて之を通俗化すること、即ちかやうな數學的手段を取り除いて直觀的に云ひあらはすことは到底不可能でなければならない。恐らくアインシュタインに於てもその通俗化は理論の發見それ自身よりももつと困難であるかも知れないと思はれる。彼がその理論に對する世界的興味を不思議がるのも當然であるし、亦一般者から見てこの難解の理論を「なか〳〵割れないくるみ」と形容することも適切であると思ふ。さう云ふわけで、私がこゝに說明しようとするのも同樣に無駄なことに終るに違ひないが、せめて割れないくるみの外皮をでも觸れることができるならと云ふ程の役に立たせたいつもりに過ぎない。

三、萬有引力論以後の問題

能く知られてゐる通りに、アインシュタインが特殊相對性理論を發表したのは一九〇五年であり、一般相對性理論を完成したのはその後丁度十年を經過した一九一五年のことであつた。前者は電磁氣現象並びに一般の力學的現象が互ひに等速運動をなすところの或る基準座標系、即ち惰性系と稱せられるものの何れに對しても全く同樣の方程式によつて云ひあらはされることを明らかにしたものであつたが、後者は更に之を全く任意の座標系にまで擴張したのであつて、之がためには萬有引力をもつて單に座標轉換のためにあらはれるところのコリオリス力の如きものと性質的に同樣であると見做すことによつて、惰性的質量と重さとの同等であることを假定し、その間におのづから萬有引力の場の理論を導き出したのであつた。二百數十年前にニウトンが萬有引力の法則を發見して以來、引力の物理的性質について殆んど何事も知られてゐなかつたのに對して、こゝに始めて軌道を開いたと見なければならないのであつた。

さて、併し萬有引力の理論がかやうにして立てられた上で、一般相對性理論なるものはそれで完結し盡されたのであつたらうか。又は最

々の研究すべき問題が尙ほそこにどんな風にか殘されてゐたであらうか。之について私は先づ當然の順序として少しく說明して見なければならない。

最初にかやうな問題の一つとして提出されたのは、謂はゆる宇宙形體の問題であつた。アインシュタインの理論によれば、物體質量の存在する周圍の空間は或る歪みをもつて居り、この歪みによつて萬有引力の場があらはされてゐる。若し宇宙空間全體に質量が一樣に平均されて存在したとするならば、空間はそのために何處も一樣の歪みをもつべき筈であり、從つてその結果として宇宙空間の全體が一つの三次元的球面を形作るやうに閉ぢられてしまはなければならない。アインシュタインは一九一七年に至つてこの問題を論じて、宇宙空間の球半徑の大いさと全質量との關係を導き出した。從來我々が到底推測することの不可能を信じてゐた宇宙の終端、卽ち我々の天體觀測に入る限りの星よりももつと遠方の有樣を、理論的に論じようとするに至つて、いかにそれが驚くべきことであるかを察せられるであらう。アインシュタインの結論に從へば、宇宙は全然終端を有しないが、しかもそれ自身有限であると云ふのであつた。單にユークリッド幾何學に固執するならば、この言葉が既に矛盾を含んでゐるのは明らかであるけれども、併し空間の曲率を定義することのできるリーマン幾何學の上では、それは不思議でも何でもないのである。我々が地球表面を二次元の球面として考へ、之に沿うて眞直ぐに飛ぶところの飛行機がどこまでもその航行を續けたならば、遂には地球を一周して再び以前の地點に戾つて來るやうに、宇宙の三次元的球空間では、或る一點から發した光がどこまでも眞直ぐに障害なく進むならば、いつかは再び以前に發した點に歸戾することが可能であるとされたのであつた。只之は宇宙が空間的に遠大であると共に現象の經過が時間的にも極めて莫大であることのために、之を實際に試めすことは殆んど望まれないとしても、そのために我々は之を疑ふ何の理由をももたないわけである。

だが、我々はそこにもう一應の考慮を費す餘地がないではなかつた。アインシュタインの論じた通りに宇宙を三次元の球體とするならば、之と時間とを合せた四次元の世界は、時間を一つの直線的座標として取る限りに於て、圓柱を形作るのである。けれども一般相對性理論が有限的な諸問題に於て時間と空間とを形成的に同等の座標として取り扱ひ得ることを示し、この兩者の間の差別を取り除けることの可能性を許してゐる事實から見るならば、我々は尙ほ進んでこの宇宙論の場合に於ても、時空の四次元世界に對してこの著しい對稱性を齎することができなかつたであらうか。若し然うであるならば、時間を特殊の軸として假定するアインシュタインの理論よりも、少なくとも形式的には一層滿足な結果を得はしないであらうか。この立場に於て四次元世界に完全な球體を假定したのだが、オランダのド・ジッターの假說であつた。

圓柱並びに球世界の兩假說のうち、何れが事實に適應するかは、そ

れらが關聯を超絶した宇宙に關するだけに、容易に判定することはできないであらう。けれども兩者の性質についてその發展上論議が重ねられた。そして何等かの我々の觀測が多少でもこの判斷に資することがないであらうかと云ふことも探究せられた。例へば今日に於て觀測されてゐるうちの最も遠方の星として見做される渦狀星雲は平均に於て凡そ毎秒800キロメートルと云ふ巨大な速度をもつて太陽系から遠ざかつてゐることが知られてゐるが、イギリスの天文學者エッデイントンの解釋によれば、この事實は寧ろド・ジッターの說に都合のよいものと見られる。なぜなら、第一にこの說によれば、原點以外にある質點は相互の引力によつて打ち勝たれない限り、空間曲率のために自然に遠ざかる性質をもつてゐるし、第二には、時間の進行が遠方に於ては遲れる性質を有するので、原子的振動の週期が增大し、從つてそのスペクトル線が赤色の方向に移動し、之によつて測られた運動速度を外見的に實際以上に判斷せしめることが可能であるからである。

併しこの宇宙論の問題は、多くの興味を感ずることはできるにしても、ともかくも餘りに遠大に走つたところのものである。我々の現實により多く關係してゐる、且つ理論的にもつと重大な問題が、もう一つそこに橫たはつてゐたのである。それは卽ち今度のアインシュタインの新學說の內容として傳へられてゐるところの、萬有引力と電磁氣力との關係であつた。

四、萬有引力と電磁氣力との對立關係

從來の普通の物理學書を繙くと、そのなかには力學、音響學、熱學、光學、電磁氣學などと分たれた諸部分を見るであらう。之は物理學が最初に我々の特殊の感官に應ずる諸現象を互ひに獨立に取り扱ふことに始まつた昔の俤を殘存してゐるのであつて、力學が筋覺に應ずる力の關係及び之によつて起される物體の運動を論じたものであり、音響學、熱學及び光學はそれぞれ聽覺、温覺及び視覺に感ずる現象を研究したものであり、電磁氣學は物質の特殊の狀態としての電氣及び磁氣に關する現象を取り扱つたものであつた。けれども各の現象に對する理論の發達は漸次に之等の部分の間に密接の關係を持ち來し、今日ではもはやそれらを全く獨立には論ずることができなくなつた。音響は既に早く物體の彈性的振動に外ならないことが知られてから、音響學は全く力學の一部として包括されてしまひ、熱と機械的仕事との關係が見出だされ、次いで熱を物體分子の運動として解する謂はゆる運動學的理論が出來上つてからは、熱學もまた力學と相離すことのできないものとなつた。更に十九世紀の半ば頃にあの有名なヘルムホルツのエネルギー恒存の原理が確立されるに至つて、すべての物質現象がエネルギーの關係に於て連絡されるやうになつたが、その後マクスウェルによつて光の電磁的理論が提起せられ、ヘルツの電磁波の發見によ

つて之が事實的に證明されるに及んでは、嘗て磁氣を電流によつて說明したアンペールの理論と相加へて、光、電氣及び磁氣の三様の現象を全く同一の根本方程式によつて云ひあらはすことを可能にしたのであつた。尙ほまた十九世紀から今世紀に轉ずる時期に於ては、電子の發見と之に關する多くの事實及び理論の著しい發展があつて、嘗ては單に物質の特殊の狀態に於て知られた電磁氣の現象が物質の普遍的な要素たる電子に固有なものであり、從つて最も根本的の性質に屬することが明らかにされた。そして之と同時に力學に於ける基礎概念であつたところの質量なるものが結局は電磁的の惰性に外ならないことが確められるに至つて、物理的現象のすべてがまさに唯一の形像のもとに統一整序せられ得る外觀に到達した。何と云ふ壯大な燦然とした理論的勝利であらうと、當時の物理學者は滿足な微笑を樂んだのであつた。

だが、その後今日に至るまでの四半世紀の經過は果してどうであつたであらう。今世紀の初頭に於ける勝利は尙ほまだ一つの前衞戰に對するそれに外ならなかつたことを我々に氣付かしめるに十分であつた。私はこゝには個々の電子の概念やそれの原子構成に關する種々の關係について我々に全く新らしい知識を供給した量子論を話すことを止めよう。之を暫らく除外しても尙ほ我々の世界形像に對して根本的な發展を持ち來さしめねばならなかつた偉大な業績を誇ることができたのであつた。そしてそれが卽ちアインシュタインの相對性理論であることはもはや特に云ひ添へるまでもないことである。

私はそれの一々の結果についてこゝに繰返す餘裕をもたない。だが、只一つ萬有引力についてもう一言を費す必要があると思ふ。それは既に上にも述べた通りに、電磁氣力の如き力の物理的性質が普通の物理學書に於て特に一篇を形作る程に詳細に說明せられてゐるにも拘はらず、萬有引力に對しては單に力學篇のなかに含まれる僅少の記述の外には何もその性質に關して說明されてゐないと云ふことについてである。能く知られてゐるやうに、電磁氣力はファラデーの卓拔な研究以來、空間的媒質を通じて近接的にはたらくところの力として考へられた。この場合に空間的媒質は卽ち力の場として或る變形、卽ち歪みを受けることが假定された。けれども之に反して萬有引力は嘗てニウトンの時代に空間を隔てゝ遠隔的にはたらく力として見做された儘で、その後ニウトンの法則の精密さのために殆んどそれ以上に出ることなしに殘されてゐたのである。之が萬有引力に對して常に單なる力學的の記述だけで終らしめてゐた根本的の理由でなければならない。

勿論すべての力に對する近代的解釋は萬有引力をも一つの近接作用として見ることを要求し、その力の場や、時間的傳播の如何に關して論議せられないではなかつた。(それはかりでなく電磁氣力によつて直接に萬有引力を說明しようとする二三の試みもなされたことがあつた。けれども之等がアインシュタインの一般相對性理論によつて明確に理論づけられるまでは、之に對する確固たる理論的根據を我々に殆

んどどこにも見出だすことができなかつたのである。この意味に於て一般相對性理論は實に物質に取つて最も重要な萬有引力の物理的性質を始めて見出だし、之を電磁氣力と同等の位置に据えたものであると云つてよいであらう。

ところがその結果は更に驚くべきものであつた。萬有引力を謂はゞ抽象的な位置から具體的な物理的な階段に引き上げたばかりでなく、もつと一足飛びに電磁氣力の位置する階段を踏み越えて、最も根本的な本質的な頂點にまで登らしめてしまつたのであつた。なぜならそれが物質的質量の存在と共に純粹な世界空間的の歪みとして云ひあらはされるに至つたからである。恐らく物質（電子）の實在は世界空間に於ける恒常的な何等かの特異性として意味づけられるであらう。そして萬有引力は今は之と必然的に結びつけられた根本的性質に外ならないのである。

さて、萬有引力がこのやうに理論づけられたところで、之に對して電磁氣力がいかに解せられたであらうか。我々は現在に於て物質に歸せられる最も根本的の力としてこの兩者を認めるだけである。そして兩者共に空間に場を生ずるものであり、一般相對性理論によつてその場をあらはす方程式は四次元の時空世界に於ける共變關係として成り立つのであるけれども、それにも拘はらず一方で萬有引力は直接に空間的歪みとしてあらはされるのに反し、電磁氣力に對してはこのやうな意味を缺くやうに思はれたのであつた。從つて後者は先づ第一義的に空間そのものの或る特異性として存立すべき物質（電子）に向つて第二義的に從屬するであらうところの特殊の力として見做されねばならなかつた。だが、この事情は共に根本的であると想像せられる兩種の力に對して與ふべき正當な差別であらうか。

こゝに重大な疑問が殘されてゐたのであつた。若し出來得るならば、この差別を取り除くに若くはない。そして我々は實に空間に於ける電子の存在を純粹に理論づけることのできる最も徹底的な立場に置かれるに至るであらう。我々の物理學的世界形像はかやうにして甚だ統一的な構成に達し得るのである。それ故にこの極めて重大な目的に向つて、既に一般相對性理論の發表以後に種々の試みが企てられた。私は次に之に關して少しく述べなければならない。

五、電磁氣力の世界幾何學的意味づけ

上述の目的を果さうとするには、明らかに獨り萬有引力ばかりでなく、電磁氣力をも世界空間の幾何學的性質によつて起されるものとして意味づけることを必要とするのである。從つて問題はこの幾何學的性質をいかに變更し假定したらよいかと云ふことに歸着させられるのであつた。

萬有引力の理論がアインシユタインによつて導き出されたまでの事情を顧みるならば次の通りである。我々は從來經驗的に空間の性質を

ユークリッド幾何學によつてあらはすことができると思惟してゐた。そして亦之を唯一の空間的關係であるとも解してゐた。ところがユークリッド幾何學が公理として假定するところの命題に對する檢討が數學者によつて行はれたに際して、その謂はゆる平行線公理なるものが一見他の公理から演繹されるやうに見えながら、實はどうしても之を論理的に引き出すことのできないことが證明されたと同時に、この平行線公理に代へるに、同樣に平行線に關する他の假定を導き入れて空間的性質を求めると、そこに全く矛盾なしに、しかも新らしい幾何學的關係の成立するものが論理的に歸結されるのであつた。ロバチェフスキー及びボリアイの非ユークリッド幾何學がかやうにして始めて生れたが、一度この方法で擴張された幾何學は更にその當然な權利をもつて一般化せられて、遂にリーマン幾何學に到達したのであつた。けれども之等の幾何學はその成立が純粹に論理的に由來されたために實在の空間とは久しく沒交渉に置かれねばならなかつた。それをアインシュタインの烱眼が拾ひ上げたのである。そして哲學者たちが骨折つてそれの非實在的な理由を探し出さうと努力したのと反對に、我々の世界空間にリーマン幾何學を適用することによつて、みごとにもあの深奧な萬有引力理論を築き上げることに成功した次第である

それならば我々が更に電磁氣力の問題に進まうとする場合にいかに空間の性質を變更し擴張したならばよいであらうか。之は併し非常に困難な問題に相違なかつた。最も能くリーマン幾何學を解し、最も詳細にその性質關係に精通する人でなければ恐らく望み難いものでなければならない。だが、幸にしてチューリッヒの數學者ワイルが一九一八年にこの解決に對する一つの路を開いてくれた。その新たに提示した理論がいかに高遠難解のものであつたかは既に上の說明から想像されるであらう。

リーマン幾何學がどんなものであるかを私はこゝで少しでも明らかにしなければならないと思ふが、それもこゝに豫定された通俗化の範圍内では出來難い。私は只次の一點だけを記して置かう。即ち通常のユークリッド幾何學では或る二點間の距離が、之から遠方に隔つた他の二點間の距離に比べて大きいか小さいかをいつでも任意に比較することができるけれども、之に反してリーマン幾何學では互ひに無限に近く横たはる二點間の距離を比較することができるだけであつて、有限の大いさを有限の距離を隔てゝ直接に比べることはできない。尙ほ亦有限の範圍に於ては一定の方向概念さへも與へられないのである。數學的に之等を云ひあらはすならば、無限小の線分 ds の値が單に一定に性質づけられるだけである。

若し任意の遠隔さに於て互ひに幾何學的性質の比較を許すところのユークリッド幾何學を遠隔幾何學として名づけるならば、之に對してリーマン幾何學は近接幾何學と稱すべきものでもあるであらう。そして丁度物理的の力が昔は遠隔作用として假定されてゐたのに、それが近代に於て力の場の概念の導入と共に近接作用として解せられるやう

になつたと同樣に、空間の性質も亦遠隔幾何學から近接幾何學に轉ずるやうになつたと見ることができよう。

　ところでワイルはこの轉移を更に延長することによつてリーマン幾何學を一層擴張しようとしたのであつた。即ちリーマン幾何學では尙ほ上述の無限小の線分 ds の大いさが絶對的に殘されてゐるけれども、ワイルは之に平行移動を行はしめた場合にその大いさが連續的に變化するやうな空間を考へた。從つてたとへ無限小の距離ではあつても、之等が遠方に離れてゐるときはその間をどんな路に沿うて移すかによつて異つた變化を生ずるのであつて、その經路を指し示さずには比較することができないのである。ワイルは之をもつてリーマン幾何學の最も自然的な擴張と信じ、そしてこの空間の性質によつて萬有引力と共に電磁氣力をも正しくあらはすことに成功した。質點の運動が空間內の一つの最短線（Geodesic line）によつて云ひあらはされることは、アインシュタインの理論の美くしい結果であるが、この場合には帶電體の運動もやはり最短線として與へられるのであつた。

　ワイルのこの理論と同一の方向に於て、エッディントンは一九二一年に、無限小の範圍に於ける平行移動に關して新らしい定義を附加することにより、更に一層廣い幾何學的空間に到達することができたし、インフェルドは昨年稍々異なつた假定のもとに新しい理論を立てゝゐる。恐らく純粹に理論的には之等は亦可能なものとして認められるであらうけれども、實在の空間が果して之等と合致すべきかどうか、即ち之等のなかに思惟せらるべきすべての變化が經驗的にあらはれるかどうかについては、尙ほ周密な檢索を待たなければならない。

　他方で一九二一年に上述の理論とは稍々方向を異にした一つの理論がドイツのカルツァによつて提案せられた。それは簡單に云へば、リーマン幾何學の性質をその儘保存する代りに、五次元の連續體を假定し、之を或る圓柱條件によつて局限することによつて時空の四次元世界を結果せしめようとするものであつた。ここでも萬有引力と共に電磁氣力が幾何學的に導き出されることは同樣であつて、この點では我々の目的に添ふことができるけれども、併しこゝに假定せられた第五次元なるものが物理的に果してどんな意味をもつかは解き難い謎として殘されなければならない。（五次元の假定はもつと以前にノルドストレームにいつても導き入れられ、私も亦之について論じたことがあつた。）併しこのカルツァの理論はその後多くの注目を惹き、アインシュタインも之に關して論じ、亦クライン及びフォックは（一九二六年）量子論に於けるシュレーデインゲルの波動力學をもこの理論のなかに包容せしめようとしたのは極めて興味ある處である。

六、アインシュタインの新學説

　私はアインシュタインの新學説について話さうとしながら餘りに長くその準備に費してしまつた。だが、之なしには、新學説のどんなものかを輪廓づけるとしても、殆んど無意味であることを思つたからで

ある。上の說明でこの新學說がいかにして起つたかを幾分でも肯づけるであらう。

さて、アインシュタインは上に種々の人々によつて論ぜられた問題をどんな風に取り扱つたのであるか。彼は物理的に全く知られない五次元を理論に導き入れることを思ひ止まり、何等か他の方法に依らうと考へた。けれども然うすればリーマン幾何學をその儘に用ひるわけにはゆかないので、何かの變更を必要とすることは云ふまでもない。それにしてもワイル及びエッディントンによつて既に歩まれた路は、以前から彼が疑つてゐた通りに、すべての實在的關係を餘りに複雜錯綜せしめる嫌ひがある。そこで新機軸を案出しようと云ふのが彼の數年前から苦心する處であつた。そして彼が最後に到達したところのものは、既に部分的には昨年の始にベルリンの學士院で公表されたのであつた。

アインシュタインの採つた路は、ワイルがリーマン幾何學を更に近接的に押し進めたのとは寧ろ反對の方向にあるのであつて、それだけに却つてワイルの幾何學よりも解し易く、且つ錯雜さをもたない。即ちリーマン幾何學では二つの無限小の線分に平行性の定義が與へられてゐないし、又有限の範圍に對しては方向概念が存在しない。アインシュタインは之等の定義を新たに適當に附加して、そこに一つの幾何學を立てたのである。つまり之によつてその空間內ではユークリッド幾何學に於けると同樣に平行線を確定することができるやうにされた。けれども二點間の距離に關してはやはり從來のリーマン幾何學に於けるやうに計量されるのであつて、この點でユークリッド空間とは全く異なつてゐる。

これだけの假定で彼は萬有引力と共に電磁氣力を世界空間の幾何學的性質として云ひあらはすことができたのである。しかも只一つの幾何學的量、即ちテンソルによつて兩者のポテンシアルを完全にあらはすことに成功したのであつた。今度報道せられたところの論文は、最初に述べた通りまだ之に接することはできないけれども、多分この內容を秩序立てゝ論じたものに外ならないであらうと私は想像する。

そこで私はこの理論に對する極めて粗雜な敍述の後に、最初に抄錄した新聞電報に傳へられたやうな事實の可能性について云ひ及ぼさねばならないことを感ずる。

「針を磁石に引きよせる力は、手を離れた磁石を地上に落す力と同じものである」と云ふのは、餘りに云ひ過ぎてゐる。こゝで「同じもの」としてあらはされてゐるのは、實際にこの兩種の力が同じ法則に從ふと云ふ意味では決してない。前者がマクスウェルの電磁理論に從ひ、後者がニウトンの引力法則に從ふのは、否定することのできない實驗的事實である。アインシュタインは只兩者を世界空間に於ける一つの根本的な量に歸し得るものとして解釋したと云ふに外ならない。丁度時間と空間とが融合して世界空間を作り、そのなかの距離ヴェクトルとしてあらはされたからと云つて、兩者が同じものでもなければ、

又現實の上で誰も時間と空間とを互ひに思ひ誤まることのないのと同樣である。

「空中遊航や月世界訪問が實現される可能性を帶びて來た」と云ふことは、「電磁氣力の絕緣が可能ならば、引力絕緣にも成功しないとは限らない」との豫想から導き出された事柄である。だが、之も亦極めて勝手な都合のいゝ豫想でしかないと私は思ふ。たとへアインシュタインの理論が電磁氣力と萬有引力とを同一の世界テンソルとしてあらはし得たとは云へ、兩者が我々にあらはれる有樣は、從來の實驗が示す通りにその性質を異にしてゐるのであり、そして理論はこの事實を一步も動かすわけにはゆかない。(極めて微小な程度に於て未知の現象は附加されるかも知れないけれども、それはやがて新らしい事實的發見によつて裏書されねばならない。)電磁氣力の絕緣體は知られてゐても萬有引力の絕緣體を我々は經驗的に見出ださないのである。それ故に結局は之等に關する新らしい事實の發見がなされない限り、我々は現實的に之を期待することはできない。引力絕緣の如きは理論的にさへも依然として架空的であると云はなければなるまい。

かやうに批判し去るならば、世人に取つて恐らくこの學說は徒らに失望を結果せしめるに終るかも知れないであらう。けれどもそれは決して學說自身の負ふべき責ではない。若し世人が、引力絕緣の現實化を想像してのみこの學說に興味を惹いたとするならば、それは疑もなく誤つてゐる。この學說の偉大なる價値はいづれにしてもかやうな實際的應用にあるのではなくて、我々の物理學的世界形像に對して統一的な根本的な基礎を確立する點にあることを忘れてはならない。アインシュタイン博士自身が世人の興味を不思議がる理由も亦之がために相違ないであらう。

傳へられる處の學說が正しいかどうかについても、それは固より尙ほ今後の學界の批判に待たねばならない。今は單に一般的興味に對して、その學說の由來する處とそれの一端とを紹介するのみである。

(二月七日)

校門を出る若き人達に

阿部賢一

春の日を浴びて校門を群れ出る若き人々よ。何處に諸君は行かうと云ふのであるか？

角帽からソフトに變る人。詰襟を背廣に代へる人。中には金ボタンの得意を菜葉服の驕りに進める人。職を求めて足を棒にする人。様々の若き群を思ひ浮べる。

地方の農學校をビリで出ても自分と社會を判つきりと認識し、自分の行路をしッかと掴む少年がある。最高學府と云はれる大學を昔ならば銀時計で出ても、自分がなく、社會的認識もなく、高き地位と豐富な俸給を夢みながら、併し、實のところ社會的寄生蟲に終るであらう青年もある。さてはカンバスに自己を見出す者、サーベルに宗教を發見する者、ペンに依つてパンを得んとする者、何はともあれ金さへあればと生れ乍らにして資本の奴隷たるを光榮とする者。等、等、それぐ＼有爲な多くの青少年を、大量的に、年毎の春は生産する。

× × ×

さても難の多い國柄である。いたいけない可憐の兒童から入學難がある。小學、中學、大學の入學難は卒業後の就職難の前提となつてゐて、人間の最も華かなるべき前半生は入學難と就職難とで萎びて終ふ。それにしても上級の學校に上れるのは、青少年自身の天禀とか才能によるのではなく、多くは社會經濟制度の中に於て、父兄が多少は子弟教育の餘裕あるによるものと云はねばならぬ。小學校を卒業する者の中で、何れだけが中學やその他の中等學校に上り得るか。中等學校を出るもの丶中、果してどれだけの割合が高等專門の學校に又大學に上り得るか。こゝに統計を上げるまでもない。吾々が小學校の同輩や中學の同級生のことを考へるならば判ることである。

云ふまでもなく文明と云ひ文化と云ひ、過去の社會的遺産の累積である。そして我國今日の文化一般が明治以來の教育に負ふところ深くして大なることは何人も疑ひはしない。併し折角國家が大學その他の教育機關を設け、地方の自治體が身代限りをするまでに一生懸命に教育施設に熱心であるに拘らず、その機關が最も效果を上げるやうに

利用されてゐるか如何かと云へば、實のところ甚だ疑はしいのである。と云ふのは一人の息子を立派に教育で仕上るには並々ならぬ資本が要る。如何に才能あればとて、この資本なくしては望みの學校の門をくゞれない。その反面にはこの資本さへあれば、また人並の勉強さへすれば、何處かの學校に入ることが出來る。學問はしたくなくても、見榮に又目前の功利のために——それも惡いと云ふのではない——紳士顔して大學を通過し得るのである。

つまり例外はあるにせよ、貧富の社會階級が教育機關を決定する根本支配力となつてゐるのが今日の實際である。一概には云へないが、社會の階級層が大學、中學、小學の教育層とさへなりつゝある。無論これは大體の話である。子弟の教育に譯もなく熱心な父兄の多い我國では、貧家から高等の學校に子弟を出す事も多く、又謂ゆる苦學生も尠なからずある。併し要するに學校は社會制度の一產物であり、其處に勵む青少年は、自覺すると、自覺せざるを問はず、その社會經濟制度の强い絆の支配に服してゐる譯なのである。

入學難を突破して來た青少年に對して教育家は云ふであらう。これから諸君は傍目を振らずに學問の深奥を探らねばならぬ。學校は社會の外にあつて眞理の探究に專らなるべきなのだから——と。又、學校を出る時には就職の難關を前にして更めて訓されるであらう。諸君の學問の修業はこれで大體出來上つたのだから、これから實社會に出て、學校で得た力を以て、大に奮闘努力せられたい。忍耐と、誠實と、健康と、努力は、諸君を必ずや成功に導くであらう——と。

誠に尤もな話ではある。併し學校を社會や世間から引離した考へ方が、どれだけ我國の教育を害うたか判らない。學校が假に社會の一分子であり、必然に社會を統制する力に否應なしに支配されてゐる事を、明白に認識しないことから、教育の魂がとかく消え失せる。早い話が艱難汝を玉にす、とか。稼ぎに追ひつく貧乏なし、といくら熱心に教へはしても、今日の社會ではそのまゝ通用してくれまい。不景氣の嵐、失業の波。個々の人々の責任ではなしに、社會の動きの原理に支配せられる世では、時として、人格も學識も信仰もパン一片さへ得難い不換紙幣となり終るではないか。人生の苦杯を嘗め盡した人々から、よく聞くことだ。正直にしてゐてはとても飯さへ食へない——と。そうだ。從來學校で教へられた個人本位の道德では飯さへ償はれないほど世間は變りつゝあるのだ。誰の責でもない。何物をも押しのけて進んでゆく社會の原理だ。そしてその背後の糸は云ふまでもなく、資本の無制限壓制力だ。善かれ惡かれ、資本の力、つまり金の力が、舊來の一切の道德と信仰と生活を根底から破壞しつゝあるのだ。無論それは應報の理法で、自己の力を費消する他の社會理法や新道德を呼び起しつゝあるにはあるが。

これ等の事情を判つきりと掴み得る青少年こそ、次の時代を擔當するに價する人々だ——。

× × ×

大學を出れば名譽が出迎へ、持參金が待ち構へた時代もあつた。高等専門の卒業證書一枚を握れば會社や銀行が車で迎へに來た時代もあつた。明治二十年代から日露戰爭後までは大體この通りであつたのである。我國資本主義の發達途上の光景がこれだ。この當時我國の青年を醉はした標語は「成功」の二字であつた。優等な青年が實業界に投じ、高級の官吏が會社の番頭になつて得意とする風が出たのはこの時代だつた。ところが世界大戰の前夜の世界的不氣味さと、我國にあつても經濟の行詰りで――産業の不振、輸入の逓年超過、就職難の襲來――學校卒業生は深刻な不安の淵に投げ込まれたのであつた。然るにこの不安と生活苦を一掃したのが云はずと知れた世界大戰だ。くどい話はよしにして、我國はアメリカの大成金に比較しては桁が違ふが、とにかく小成金となつた。古新聞紙が一貫一圓にも成り、古釘に値段が出た時勢で、欲しいと云へば猫の手まで借りたいと云ふ具合、學校出でもあれば羽根が生えて飛んで行き、其頃まだ稀らしい自動車の上から埃にまみれて行く「恩師」に會釋したものであつた。

が、戰爭は止み、漁夫の利は無くなり、有頂天の絶頂から奈落の底に突き落された其の上に、關東の大震災、昭和二年のパニツクと矢繼ばやに起つた打撃。それにもと〱基礎の弱い温室經濟でもあり、困ればすぐに政府に泣きつく〱實業界の腐敗、優柔不斷の政府や支配階級。とにかく不利益な條件が按配よく揃ふて、今以て右顧左眄、生活の不安と就職難とが手を携へてます〱深みに沈み行く有様である。

と云つて徒手空拳で天涯萬里に新運命を開拓することが出來るかと云へば、云へずと知れた排日の高札が、世界の目星しい場所に掲げられてゐる。

內に得ず、外に得ず。簡單に國難だとか、經濟難だとか、思想難だとか、悲愴な文句を列べてゐられない今日である。然もその悲痛な叫びの渦に直面して將來の方向を定めねばならぬ青少年諸君は何を第一義として進もうと云ふのか。

× × ×

天下國家を論じて壯とした意氣は、その內容を異にする意味に於て、今日の青少年諸君にも希望したいと思ふ。青少年諸君はその意氣に於て、その純情に於て、その不屈の健康に於て、明日の社會を擔ふところの今日の先覺者であらねばならぬ。老人や既成の滿足階級からどう云はれようと、新社會の建設と新日本の樹立を、常に胸底に祕め、之を實現さす爲の努力を、其の立場々々に於て、盡すだけの自信と熱情は持つて貰ひたいと思ふ。

諸君の行路は千差萬別だ。ビルデングの一室で算盤片手に生くる人もあらう。會社の外交員として靴すりへらす人もあらう。工場で油に染まる人。田園で肥料に化する人、或ひは海上に、或ひは鑛山に。或

ひは何。或ひは何と。

その行路が、どうのかうのと、私は云はない。それは何であつても、一つの職業を獲得することが精々の事でもある今日、贅澤は云つてゐられない現狀である。

問題はこゝでは職業の如何ではない。職業はどれであらうと、資本家階級者が全能的勢力を占める社會では、職業の安定、それは必然に生活の安定が、究極に於て得難いものであることを明白に認識すると否とである。學校を出て如何なる仕事に從事しようと、得意と失意の機會に突つかつて、この點は必ずや思ひ當らるゝことであらうと思ふ。既にこの客觀的形勢を察知せられる人々は、やがてその立場々々で社會改造の、その一つとしての我國政治の一新についても、自から適當な途の存することを看取せられるに相違ない。

× × ×

あらゆる權威が失墜する時代だ。今日の中老、壯年、或ひは數年前の卒業生諸君に對してはある程度の權威を以て臨んだ道德上の、宗教上の、社會上の公理や信仰や壓迫は、校門を出る諸君に對しては、もはや何等の威信を持つてゐないかも知れない。否、擧ぐれば數々の實例がある。空間と時間の懸隔は、同じ人間を別物にする。舊き權威が廢れて新權威が未だ確立しない過渡の今日に於て、諸君が人生第一義の問題について迷はれることは──迷はない人もあらうが──吾々の同情を促すものでなしに、諸君の手に新權威を樹立するの大なる任務が握られてゐることを證する。諸君の爲に祝してよいと思ふ。

とは云へ校門を後に、異なつた社會の生活苦に突進する諸君に對して、健康と、強固な意思と、當面の變局に處する聰明と、十轉十起の樂天主義と、その他多くの教育家や先輩が諸君の爲に示すであらう諸々の希望を、私は些も減退しようとは思はない。併しその他に私がこゝで云ひたい一つの事は、我國の社會經濟の缺陷をしつかと認識すること、而てその改造を將來に期することである。この信念さへ立てば、職業の如何や、職業の謂ゆる高下などは、個々の人にとつても又自から異なつた氣持で考へられるではなからうか。

× × ×

この不景氣の眞中に、眞裸で飛び込む多くの若き人々に對して一應は同情するが、その深刻なる苦惱から、諸君自からを救ひ、次から次に來る更に若き人達の爲に、より公平な、より清い社會が生れることを信ずるのである。

多望なる諸君を祝福する。

時評

思想善導の破綻

山川均

政府はさきに、學生の思想善導のために、學校內における社會思想研究團體を禁壓し、進歩的な思想に對する懲罰と見せしめとのために、謂ゆる『赤化教授』を馘つて獄門にあげた。しかしこれだけではまだ安心がならぬとあつて、學生主事といふ名前で、學生の思想を監視する一種の思想憲兵、ないしは學校警察ともいふべき制度を創設した。かうして日本全國の高等の學校には、思想上の戒嚴令が布かれた有樣となつた。いふまでもなく、この學校警察の制度は、田中內閣の國民思想善導政策全體系の一部分をなすものであつて、政府は社會運動を××によつて威嚇する法律を、議會によらないで緊急勅令によつてこしらへたように、この學校警察の機關を、責任支出によつてこしらへた。國民の豫算審議權の停止ともいふべき責任支出によつて、あわたゞしく創設しなければならぬほど、それほど火急な必要に迫られて設けられた學生主事なるものが、一たいどのような緊急な仕事をしてゐるかは明らかでないが、こゝに少なくとも唯だ一つだけは、學生主事の業績が現はれてゐる

『近來、各大學に所謂學校騷動がしきりに起り、それが大抵の場合に思想的背景があり、各大學で之が取締り方に手を燒いてゐるが、先般の學生主事會議で、危險な思想は高校時代に培はれてゐるから、徹底

的に學內の平和を維持するには、これら危險思想保持者の大學入學を拒否するが最も有效であるとの結論を得た』そこで『昨年東京帝大の醫學部で私かに試驗的に試みて成功した實例により、今年は各官立大學に於て正式に法科、經濟科、文科始め全學部で、學科試驗の外に志願者の思想的傾向を參酌することに決定し、近く文部省より各大學總長及び各高等學校長に通知を發し、協議會を開き具體的に方法をきめることになつた』（一月二十二日『時事新報』）。といふのである。（この報道は、同日同紙所載、河原專門學務局長の談話によつても裏書きせられてゐる）。

大學は、高等學校で培はれた危險思想保持者の入學を拒否する、高等學校は、中學校で培はれた危險思想保持者の入學を拒否する、中學校は、小學校で培はれた危險思想保持者の入學を拒否する（現に某縣の中學では、入學の考査試問の外に兒童の思想傾向を調査するといふことが、最近に報道せられてゐた）。これが『徹底的に』學校內の平和を維持する『最も有効な』手段である！　徹底的であるか否かは暫らくおき、たしかに、有効な手段であることは間違ひない。もし或る病院で傳染病の黴菌保持者の入院を拒否したなら、その病院には傳染病患者は無いだらう。もし或る醫者が、死にさうな病人の診療を拒否するなら、この醫者の患者は悉く本復することになる。しかしもつと『徹底的』でありたいと思ふなら、一切の病人の入院を拒否することが、こ[illegible]う。

その通りに、危險思想保持者の入學を拒否することは、學校から、危險思想を無くする『有効な手段』である。けれども病院が病人の入院を拒否することが、その職分の拒否であるやうに、教育の機關たる學校が、教育せられる必要を最も多く持つ者（思想善導論の立場から）撰り出してその入學を拒否するのは、教育そのものゝ拒否にほかならぬ。

政府は、學生の思想を善導してくれる筈で出發した。政府はそのために、貧乏な國民の財布から、何百萬圓かの無承諾の支出を敢行した。政府はそのために、學生主事の制度を新設した。そしてこれによつて政府が爲し得たことは、學生の思想を善導したことではなくて、善導する必要のない學生だけをその學校に集めておくことが、『最も有効な』、恐らくは唯一の有効な方法だといふ新發見であつた。これは政府が、思想の善導を『徹底的に』諦らめたことを意味してをり、思想征伐の十字軍の『徹底的』な敗北を意味してをり、少なくとも政府が『善導』しようとする『危險思想』の力は、政府の善導力よりも強大なといふことの自認を意味してゐる。

鹽と煙草を國民に供給することが、政府の特權であるやうに、一定の思想を國民に供給することは、政府の特權と考へられてゐる。この觀念は、學校の驚くべき中央集權に具體化せられてゐる。國家に學校[illegible]

要の穴に嵌まるように拵らへ上げる——即ち教育することが出來、また教育しなければならず、そして教育する特權を持つてゐる。支配階級はかく信じ、かく主張し、そして斯くの如く行つて來た。或る傾向の思想を持つた學生の入學を拒否することは、教育に對するこの特權の放棄にほかならぬ。

「帝都不安」

この頃、『帝都不安』といふ文字をしばしば見る。帝都不安といふのだから、某假想敵國の軍艦が房總沖に姿を現はしたとか、爆彈を搭載したその飛行機が首都の上空に現はれたとでもいふことかと思ふと、たかゞ一人か數人かの猫背かに股の小男の強盜が出沒する、そして萬能の警察の手でも捕まらないといふのである。

なるほど近頃の新聞には、毎日一つか二つ、強盜被害の大見出しの記事の無いのはない。警視廳では二千人の非番巡査を狩り出して警戒を嚴重にし、すは此處だすは彼處だと非常線を張つてはみるが、水も洩らさぬ警戒網からも強盜のみは洩れると見えて、一向に捕まらない。そこで警察頼むに足らずといふことになつて、青年團が動員され自警團が編制された。まさに帝都の不安である。

こゝで勢ひ警察の無能が問題となり、警視廳の責任が喧しくなつた。そして近々、これは議會の問題ともなるらしい。強盜が出沒し、警視廳がその逮捕に血眼になつてゐて、それで滅多に捕らぬとしたならば、これは決して警察の有能の證據であるとは云はれない。そこで市民の間、ことに警察力の萬能を信ぜしめられてゐる市民の間から、警察無能の聲のあがるのも無理はない。けれども強盜が捕まらないといふ結果をのみ責める結果は、一そう有害な結果を生む。これはたゞに今度の強盜さわぎだけではないが、世間の注目を惹くような犯罪事件が起こり、ものゝ一週間も犯人の檢擧がおくれると、何時でも警察無能の非難が起こる。もちろん警察有能の聲の起こるべき道理はないが、たゞひたすらに犯人を擧げよ犯人を擧げよとせき立てる結果は、さうなくとも有り勝ちな、不當な犯人製造を督促することゝなる。これは犯人檢擧の功を急ぐために、、、、、、、人權蹂躙の行はれてゐる實例が雄辯に物語つてゐる。警察が人民のものである代りに、人民が警察によつて、、、同樣に見られてゐる國にあつては、犯罪には何でも彼でも犯人が擧がらねばならぬとする考へほど、民衆にとつて危險な考へはない。民衆の權利を尊重せよといふ要求は、少くとも我國の現在においては、犯人を擧げよといふ要求以上に緊急な要求である。現に近頃の強盜事件に關聯しても、すでに驚くべき人權蹂躙が犯されたが、『任意同行』の取調べといふことで、この人權蹂躙の一切の責任は解除せられてゐる。警察の、、、、、、、、、、、、せられるにもかゝはらず、曾てその『犯人』が擧つたことがない！　犯罪やこの種の警察の行爲——不法の檢擧、檢束、、、などに對する國家の賠償その他の有効な救濟の方法に對して、民衆の當然の權利を要求

ることを知らないで、たゞ時々に、警察の無能呼ばはりをすることは決して民衆の生活を安全にするものではない。

最近に暴露せられた謂ゆる警察の無能なるものが、畢竟、警察制度の缺陷に基づくものであることは疑ひがない。刑事上の犯人逮捕の無能は、警視廳の首腦部が、政治警察に沒頭してゐるためだとも言はれてゐる。けれども假りにこれを事實としても、政治警察に沒頭することは、寧ろ警視廳の本來の性質であつて、これは特に政友會内閣の警視廳の罪惡ではなくて、この傳統が守られてゐるといふだけのことである。これは我國の警察制度のうちに特殊な地位を占めてゐる警視廳なるもの、本來の成り立ちが、その性質を物語つてゐる。もとく政治警察を主要な使命として生まれたものに向つて、政治警察に沒頭することを責めるほど、お門違ひな責任論はない。昨今耳にする警視廳の無能呼ばはりと責任論とが、いかに淺薄不眞面目なものであるかは説教強盗の噂のやむ今から七十五日の後には、恐らくはこの無能呼ばはりと責任論もまた消滅するにちがひないといふ事實によつて、證據だてられるだらう。警察の無能がその制度の缺陷にあるとしたならば、この無能、この無能から起こる『帝都不安』は、説教強盗と共に消滅するものではない。市民は、犯人を擧げよといふ要求から、更に一歩を進めて、警察制度の根本的な改革を要求すべきである。その通りに、警視廳に向つて政治警察に沒頭することを責めることから更に一歩を進めて、市民の利害とその利害に關するそれ制度の廢止を要求すべきである。

説教強盗のセンセーションの中から現はれた注目すべき現象の一つは、嚴罰主義の主張である。説教強盗に脅威を感じた人々は、強盗罪に對して『僅か』七年や十年の刑罰は、餘りに輕すぎるといふことに一致してゐるらしい。現在、社會生活の基調が私有財産主義にある限りは、人々が、私有財産に對して最高限度の保障を要求する心理は、一應無理からぬものと云ふことができる。けれどもかような嚴罰主義の要求は、私有財産に對する單なる保障の要求ではなくて、明らかに、、の性質を帶びてゐる。私有財産主義は洗練された文明人の頭の中に再び、、主義の野蠻人を喚び起こす。

多年免囚保護事業に從事してゐる或る有名な博愛家も、近頃強盗の殖えたのは、新刑法による刑の規定が輕るくなり、竊盗に比較して強盗が引合ふようになつたからだと云つてゐる。この觀察が正しいか正しくないかは別問題として、若し正しいとしたならば、この博愛家は強盗嚴罰主義の主張によつて、竊盗の激増を要求してゐるに過ぎぬ。

司法當局者の間でも、強盗犯人に對しては、今後は極刑をもつて臨む方針が定められたと云ふことである。猶僅かに段の一説教強盗が、一國の刑法の適用を左右するとしたならば、その、、、、であると云つてよい。

婦人の公民權

五十六議會には、婦人の政治上の權利に關する三つの法案が提出せられてゐる。即ち治安警察法五條を改正して、男子と均しく婦人に政治結社權（政黨加入の權利）を認める法案、選擧法を改正して、婦人に男子と均しい參政權を認める法案、婦人の公民權の承認によつて、地方自治體の選擧に婦人を參加せしめるための、地方制度の改正である。この三つのものは、婦人が政治的に一切の權利を剝奪され、政治的無能力の地位におかれてゐる現狀を打破し、人口の一半たる婦人を能動的な要素として、新たに政治勢力のうちに計上する極めて重要な法案であつて、議會がこれを如何に處置するかは、注目に値ひする。

右の三案のうちで、婦人公民權案は、政府と與黨の一部が反對してゐるにも拘らず、壓倒的な多數をもつて衆議院を通過することが、もはや疑ひないといふことである。それと同時にこの案が貴族院で葬り去られるに違ひないといふことも、多くの人々の觀測が一致する。政府が婦人公民權の承認に反對してゐるのは、ブルジョア政黨の直接の利害の上から反對してゐるといふよりも、寧ろ貴族院によつて代表せられてゐる保守的意見を代辯し、若くはこれに迎合してゐるものと思はれる。

今日までに、衆議院に現はれた反對意見のうちにも、婦人が政治に參與することは、我國の家族制度の傳統や賢母良妻主義を破壞する、妻は夫によつて政治的に代表せられゝば澤山だといふような、振つた反對論もあつた。この種の反對論の本場たる貴族院でも、定めしもつと猛烈にこの種の反對意見が聞かれることゝ思ふ。しかしさすがに政府の反對理由は、時期尚早の一天張りであつた。御趣旨には賛成であるが——と云ふ人が、ほんとに賛成したためしはない。政府が時期尚早と認める理由は、婦人公民權の承認は、まだ一般の輿論と見做されない、それはまた婦人大衆が要求してゐるものとは認められないといふことにある。政府は、衆議院の多數決を輿論とは認めない（たしかに、衆議院に於ける政友會の現在の多數が、輿論を反映してゐるとは思はれぬ）、言論機關のほとんど全てが、異口同音にこれを支持してゐることをも、政府はこれを輿論とは認めない。たゞ婦人大衆が直接に議院の門に殺到して、口々に公民權を與へよと叫んだなら、初めてそれが輿論であり、婦人大衆の要求であることを認めようといふのが、政府の考へであるらしい。

先きにも云つたように、婦人の公民權を認めることは（參政權を認めることさへも）必ずしもブルジョア政黨の直接の利益に反するものではない。それ故にこそ、ブルジョア議員の多數がこれに賛成を表してゐる。少なくとも現在においては、婦人の多數は新興勢力の味方ではなくて、舊勢力の支持者である。現に政友會の政務調査會の決定は婦人の公民權の賦與と小選擧區制の確立とを並らべ掲げてゐる。若し婦人の選擧權と小選擧區制とを結合することができたなら、少なくとも當分の間、保守的反動的勢力は、一そう安固となるにちがひない。それにも拘らず、婦人の公民權（婦人の參政權は尚ほさらのこと）の要

求が、有力な反對に遭遇せざるを得ないのは、それが舊勢力の直接當面の具體的な利益に反するからではなくて、一そう根本的な、原則に反するからである。現在、吾々の社會生活は、婦人の權利剝奪とその隷屬との上に立つてゐる。婦人は政治的に權利を剝奪せられてゐるばかりでなく、私有財產主義の上に立つ社會に於いては何よりも重要な權利である財產上の權利をも剝奪せられてゐる。婦人は家族の一員としても、婚姻の當事者としても、子供の親としても、男子の享有せる權利を剝奪せられてゐる。かように男子の支配と婦人の隷屬は、たゞに習慣、因襲、傳統として殘つてゐる事實であるばかりでなく、それは國家の權力によつて法律的に批准され、保障され、組織され、維持せられてゐる一個の制度となつてゐる。婦人の公民權を承認することは、現在の支配的階級にとつて何等直接具體的な損害を與へないにもせよ、そして婦人にとつては、その社會的地位に著しい變化を齎らすものではないにもせよ、兎にも角にも、それは婦人の權利剝奪と隷屬との體系の一角が崩づれることを意味してゐる。こゝに婦人公民權が婦人にとつてはこれを獲得するに値ひする意義があり、舊勢力にとつては、これを拒否しようとする理由がある。

　婦人が選擧に一票を投ずることによつて、地方政治に忽ち光明が輝やくかの如く考へるのは、素朴の幻影である。婦人が全社會生活のあらゆる領域において隷屬者である限りは、その投票權の行使においてのみ、別樣のことを考へることはできぬ。現に或る國々では、婦人の參政權は、保守的勢力を鞏固にした。

　その通りに、婦人が公民權を與へられるといふことは、たゞそれだけの切り離された事實としては、直ちに婦人の隷屬的地位に著しい變化を與へるものではない。婦人の公民權は（參政權もまた）これを獲得する者から見ても、これを拒否する者から見ても、婦人の隷屬を基調としてその上に立つてゐる現在の社會の全構造と、婦人の完全な解放といふ背景のうちに置いてのみ、初めて重要な意義が浮き出して來る。

田中外交の終末

　濟南事件の解決は、日支交涉の癌だと云はれてゐる。濟南事件を切開せぬ限りは、日支兩國間の正常な關係の恢復は望まれぬ。濟南事件の未解決が、日支關係の打開を妨げてゐるといふことは、田中內閣の『、、的』出兵の跡始末の片づかぬことが、日支間の正常な關係の恢復を妨げてゐるといふことに外ならぬ。

　田中內閣成立の主要な理由は、謂ゆる對支積極政策、ないしは强硬政策の遂行であつた。若槻內閣から田中內閣への政權の移動は、議會內ではなくて議會外の政變の結果として行はれた。そしてこの非議會的な政變を惹き起すために、對支外交問題が主要な役割を演じたことは、疑ひがない。

　かうして出來上つた內閣にとつては、出兵は避くべからざる行動で

あつた。それは在支邦人を現地に於いて保護するために必要であつたばかりでなく、田中内閣を現地に於いて維持するために、一そう必要缺くべからざるものであつた。

かうして田中内閣は、出兵によつて、無理矢理に、幣原外交の外に田中外交のあることを實證しようとした。もちろん田中外交は、出兵によつて、南方の勢力が北方に及ぶことを阻止しようとするものだとは宣言しなかつたが、これを阻止することの出來なかつたことも事實である。南北の統一は、日本の兵隊を尻目にかけて、お構ひなく進行した。そこで田中外交が出兵によつて、、、、、、、、、、、、、濟南事件であつた。

田中外交は、先づこの濟南事件を軍事的に解決しようとしたが、支那は相手にしなかつた。そこで三ヶ月後になつて、改めてこれを外交問題に移し、外交的に出直ほしてみたが、支那側では、濟南事件發生の責任は日本の出兵にあるといふ見解を取つたので、固より談にならなかつた。爾來、濟南事件の責任の所在に對する日支の見解が正反對だつたのと、支那側は濟南事件の解決の先決條件として、日本の撤兵を主張してゐるので、田中外交が田中外交である限りは、濟南事件の解決は全く望みがなくなつた。

かうして六ヶ月間もぐづ〳〵してゐるうちに、支那と大方の國々との間には新條約が締結され、無條約國だとか何だとか押問答をしてゐるのは、たゞ日本だけとなつた。國内の雲行も怪しくなつて來た。こ

の要件のやうに會議が開かれた。この時、急轉直下、芳澤王正廷交渉が成立し、いよ〳〵調印するばかりとなつた。交渉の内容は明かでないが、日本側が撤兵の時期を聲明し、責任の所在を不問にし、双方の損害の賠償については、共同調査によつて定めるといふことにあるらしい。若しこの報道を事實としたならば、濟南事件は考へ得られる唯一の解決の方法に到達して解決せられたものに過ぎないが、これを田中外交の立場から見るならば、出兵以來の全行程は、一歩一歩、田中外交が田中外交たる特質を放棄して、たゞのブルジョア外交――幣原外交に歸着することによつて、辛うじて濟南事件を解決することができた、といふことになる。對内政策のために生れた田中外交が、對内政策のため終末することとは、その終りを全うするものだと云ふこともできる。

かうして調印の間際まで漕ぎつけた交渉は、俄然として、決裂に瀕したと云はれてゐる。その理由が何であつたかは、政府は口を緘して語らない。けれどもその理由が、この場になつて、再び田中外交が、少しばかり田中外交に復歸しようとしたゝめであることは、疑ひがない。そしてこの動搖が、同じく國内的の事情に基づいてゐることも疑ひがない。田中外交は、よしあらゆる特質を失つたにしても、外國に對する外交ではなくて、内國に對する外交であり、在外邦人を現地で保護するための外交ではなくて、田中内閣を現地で保護するための外交だといふ、この本來の根本的な特質だけは、大切に保存してゐると云ふことができる。（二月十二日）

議會展望台

馬場恒吾

津田三藏有名になる

此頃になつて、津田三藏が甚しく有名になつた。津田三藏と云ふのは明治二十四年五月十一日大津に於て露國皇太子を斬り付けた警衞の巡査である。日本の國賓を日本の領土內に於て、日本の警官が傷けたのである。併し日本は其時は此巡査を日本の法律で裁判し、明治天皇は京都迄露國皇太子を御見舞に行かれ、そして日本の國民が露國皇太子に同情の念を表したから、露西亞政府もよく諒解して、却つて日本の好意を喜んだ。

若し其時、日本の政府が何んとか誤魔化して事件をうやむやに葬り去らうとしたならば、日本國民全體が暗殺贊成の野蠻國と見られて、其名譽恢復に何十年かゝつたか判らぬ。或は此事件の爲めに、日露戰爭が起つても、世界中何の國も日本に同情しなかつたであらう。全く危險な事だつた。

暗殺ほど卑怯な行爲はない。相手は殺して、自分は逃かれんとするのであるからだ。西洋でも英米佛のやうな立憲的に進んだ所では暗殺は流行せぬ。伊露獨の如き、文化の比較的後れた國ほど暗殺が多い。暗殺國と云はれた丈けで、何の位國家が損をするか判らぬ。

併し世には馬鹿者が居る。其馬鹿者の出る事を絕對に防ぐことは出來ぬ。其馬鹿者が出たときに、國民が其馬鹿者と同列にされては、その國家は立つ瀨がないのである。

幸に津田三藏の時の政府は、津田三藏は暗殺を企てたけれども、日本國が暗殺を企てたものでない事を天下に證明した。それで日本は助かつたのである。

津田三藏が大事か、日本國が大事かと云へば日本國の大事な事は判り切つた話しだ。

內閣より上の方面で近頃しきりにかうした話しが出る。××××××も一時は其說であつたさうな。日本國民は暗殺に贊成する國民でない。此事を世界に證明せずして日本に將來とうして國を立てゝ行けるか。民族の名譽に於てゝ顧みなくてもよいもの。

今現實に津田三藏が居るか居ないか斷言する事は出來ぬ。併し津田に贊成する思想は存在してゐる。吾々は深く考へさせられる。苟くも日本人たるものは深く考へなければならぬ。内閣が潰れるとか潰れないとか云ふ以上の問題だ。

屠所の羊

田中政友會内閣は潰れる。議會が濟むか、濟まない頃に潰れるだらう、と、これは私の獨斷ではない。政界の機微に通じてゐる連中の確信である。何の問題で、何んな工合で潰れるかと云ふ事は判つてゐない。併し潰れる丈けは確かだ。中が空虛になつてゐる大木がさう何日までも立つてゐられる筈がないと、これが政界の豫感と云ふ如きものになつてゐる。

、、に所謂某重大事件と云ふもの〻内容を發表すると内閣は一たまりもなく潰れる事になつてゐる。だから政府は調査中であると云ふ事で議會を押し通す事にした。現に押し通してゐる。併しそれは内臟に致命的な病氣を持つて居りながら、診察中と云つて、、、、、、、、、ゐるやうなものだ。、、、、、、、、、、、、、、、病氣は遠慮會釋なく昂進する。今に表面に現はれて、全體が崩れる事は判り切つた話しである。

殊に其、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、鈴を盜まうとすると音がするのが恐わい。だから自分の耳を塞さいで鈴を盜む。それで鈴が鳴らなくなつたと思ふのが可笑しい。外の人には聞えてゐるのだ。

議會に於て、政府は重大問題に對しては、調査中一點張りで逃げる故に、反對黨は作戰をかへて、滿鐵と京奉線との交叉點に一時支那兵を入れたのは誰れの責任だと云ふ事を質問した。こゝは日露戰爭の結果日本の行政權が排他的に行はれる所である。そこの警備の一部を一時支那兵に讓つた間に重大事件が起つた。此行政權の委讓に對して誰れが責任を取るかと云ふ事を、中野正剛氏が豫算委員會でいひ詰めて行つた。すると白川陸軍大臣は關東軍司令官位までは責任が及ぶかのやうな返答をさせられた。田中總理大臣はそんな事に責任を取つては總理大臣は何萬人あつたつて足らぬと答へた。

所ろで、宣戰布告があつて、大本營が出來てゐる時は、軍事行動の責任は大本營に歸する。宣戰布告もなく、大本營もないときは、軍事行動に對しても内閣が政治上の責任を負はねばならぬ。それを中野氏が問ひ詰めて、責任は誰れが取るか、參謀總長か、陸軍大臣か、總理大臣かと質問して行くと、陸相も首相も默つてゐる。何遍聞いても啞の如く默つてゐる。面と向つて、これをお答へなさいと云つても默つてゐる。堀切委員長は『答辯がありませぬから、貴方がさうお考へになるならば、さうするより外はないと思ひます』と云ふ。

總理大臣、陸軍大臣となつても、から面前で問詰められて、答辯が

出來なくて、唖の如く默つてゐなければならぬときは、つくぐ世の中が厭になるであらうと思はれる。それが委員、代議士、新聞記者など數百名の前で、グウの音もない事を見られるのは辛らからう。田中總理大臣は議院内では全く屠所の羊である。その内閣が永持ちしやうとは思はれない。

山東悲喜劇

芳澤公使は初め支那へ山東撤兵交涉に行くのを嫌がつた。行つたつてどうせ纒る心配はないと思つたからである。所ろで政府は汎べてを讓歩するから、行つて呉れと云ふ。公使は汎べてを讓歩するなら纒らない心配はないと考へた。それで支那に渡つて二月五日の王正廷との第一回會見で手際よく纒つた。民政黨あたりでは餘り讓歩が甚だしいので政府を攻撃しにかゝつたが、何分自分等が撤兵贊成であり、輿論も撤兵贊成であるが故に、此攻撃は反響が起らなかつた。

所ろで、議會に於て此攻撃がまだ響いてゐる内に、芳澤王正廷第二回の會見で交涉破烈と來た。攻撃する方も、辯護する方も呆然たらざるを得なかつた。

何が此交涉を破烈せしめたか。新聞は色々に報導してゐる。此所を書いてゐる時(二月九日)には眞相が判つてゐなかつた。併し眞相は、、、、から抗議が出た事にあると云ふ。撤兵條件の中に、濟南の出來事に關しては日支兩國共に遺憾の意を表するとあつたらしい。すると五分々の裁きで公平のやうに見へるが、遺憾の意を表すとは、陳謝の意味だ。すると日本の陸軍も陳謝せねばならぬ事になりはしないか、、、、、、、、、、、、、、、、、、、は此陳謝の主體とならなければならぬ。それは出來ぬと、今度の撤兵交涉に、、が故障を云ひ出し、芳澤王正廷の談判破裂となつたと傳へられる。此説が當つてゐたか否かは此雜誌の出る頃には明かになつてゐるであらう。

此所に此問題と關聯して一つの喜劇が演ぜられてゐる。それは床次一派の行動である。床次竹二郎氏が昨年八月民政黨を脱黨したのは早く自分で天下を取り度い爲めであつた。彼れは其目的を田中現内閣と提携し、若しくは田中内閣をユスブル事に依つて達せんとする。床次氏は支那から歸つて山東撤兵を提議した。併し床次氏自身に採つては山東撤兵なんかはどうでもよいのである。寧ろかうした出來ない相談を持ち懸けて、田中内閣を困らす。困つた結果が、それでは政權を君に讓るから、此議會中は助けて呉れと云はしたかつたのであらう。田中床次の第二回會見の時だつたが、床次氏は何とかよい返事を期待して田中首相に會つた。然るに首相は劈頭から云ひ出した。政局の事と支那問題とは別にして考へやうではないかと。床次氏は不平ならざるを得なかつた。支那問題などはどうでもよい。政局の問題が第一である。それを政局と切離すと云ふのでは、彼れの支那問題に對する興味を冷却せざるを得なかつた。第二回會見後の彼れの態度は反政府的であつた。某重大事件の內容を發表せよと云ふ決議案には床次氏は民政

黨と一緒に此決議案に賛成の白票を投じてゐる。

所ろで山東撤兵の交渉が成立したとなると、田中首相は直ちに床次黨の一代議士を呼んで、今度は床次氏の意見を參酌して山東撤兵を行ふ事になつたから、今後は提携して行かれるやうに宜ろしく頼むと云つた。尤も此前に田中床次第二回會見の不首尾を心配して此兩政治家の間を奔走して、よりを戻した連中がある。久原遞相、榊田清兵衛氏などが其人である。それ故に、床次氏は、政府は自分の意見を採用したのだから、今更反對は出來ぬと云ひ得た。民政黨の出す內閣不信任案には、反對投票をする事になつてゐた。

所ろで山東撤兵の交渉が破裂すると、床次氏はどうする。蓋しどうもしないであらう。彼れの民政黨脱黨の根本觀念は早く自分で政權を取り度い事にある。それと、現內閣に正面から衝突して行つたのでは、內閣が倒れると民政黨の濱口總裁が總理大臣になつて、自分は伴食大臣たるに過ぎぬ。それ故に正面衝突でなく、裏面から廻つて政權奪取をやらうと云ふのである。具體的に云へば、田中總理大臣を其地位からゆすぶり落す目的ではあるが、自分が天下を取る爲めには政友會と提携して居らねばならぬ。だから此議會中、彼れが政友會と握つた手を放すであらうとは期待出來ない。彼れの民政黨脱黨の論理を追つて行けば、さうなるより外に行く途はない。

支那問題などゝ、しかつべらしく言つてゐるが、此連中の手にかゝつては、議會で多數を得る爲め、若しくば政權を取る爲めの道具に使つてゐるに過ぎない。其政策を決定するものは帝國主義でも、國際主義でもない。主義などは初めから眼中に措かず、又腦中に存在せしめない。若し主義がありとすれば、それは彼等が政權を握つて居り度い、又は握り度いと云ふ慾望に外ならぬ。之を何かの主義だと思ふのは事實を知らぬ者の買被りである。

政治を議會より街頭へ

貴族院は平生無用の長物のやうに思はれてゐたが今度はいくらか其有効性を發揮した。と云ふのは貴族院議員はおとなしくて、如何な愚劣な演説に對しても、彌次を飛ばさず、妨害もせず。二階から見てゐて齒痒くもあり、ウンザリもさせられる。然るにさうおとなしく演説を聞いてゐる所に、利益な點があつた。それは理義明白に、議論で負けたか、勝つたかゞ、誰れにでも判る事である。衆議院であると政府の連中が負け相になると、與黨がワイ〱騒いで、演説者が何を云つてゐるか少しも聞えず。それで足らないときは、腕力のある議員が亂鬪を演じて、議場の注意を其方へ奪ふ。そして、肝心の議論の勝負は有邪無邪にして了ふ。かうした事が貴族院では行はれない。

今度の貴族院では若槻前首相が田中首相其他の國務大臣を相手にして戰つた。若槻の切り込む太刀が一々急所に當るに對し、田中は劍舞の如く勇壯活潑に空氣を切つてゐる。かう明白に負けては大臣席に座はつてゐる事が、きまりが惡からうと思はれる位だ。

共一例として、若槻は、議員の切崩し、抱き込みと云ふ事に言及して、議員が甲の政黨を名乘つて選擧に出て、當選の後乙の黨派に入ると云ふ事は選擧人を賣るものである。それは憲政を破壞するものである。若し現内閣の關係中にさう云ふ風に議員を導くものがあつたら、それは憲政の反逆者だ。さうした關係があらうとは信ぜぬ。併し切り崩しとか抱き込みと云ふ言葉が恰かも政府筋の人が反對黨に向つてなさるゝ行動かの如く聞える。それが政界の空氣を陰慘ならしめ、人心を險惡ならしめる。故に私は田中總理大臣が此議場に於て、現内閣の關係中には議員を誘惑するやうな左樣な不心得なものはないと云ふことを、良心に誓つて此所で御言明あらん事を切に望むと云つた。

之に答へて田中首相は『所謂議員諸君の此政黨間に於ける所の集散離合、移動と云ふ事は、これはもう年來ある事であり、又已むを得ぬ事である。是はあなたが御經驗の私共より深いだけ能く御承知のことゝ存じます……要するに議員自から顧みて斯樣な事柄は自ら適當な行動を取らるべき筈であると存じます。が之を餘儀なくする爲めに何者か一種の行爲をなしたかと云ふ事は私は認めて居りませぬ。又あるべき筈はないのであります』（速記錄による）

若槻氏は立つて

『所謂切り崩しとか抱き込みとか……さう云ふ不心得な者は政府にないと云ふ事を玆に良心に誓つて言明なされと希望したのでありますが、あなた方ゝ御經驗のある通りと云ふ御答辯であります。私は議員を誘惑したやうな經驗を有たぬのであります。それをあなたも能く御承知の通りと云ふ事であると、政府はそれをお認めになつた事であるのでありますか、是は實に私共遺憾千萬な事であると思ふ』と云つた。田中首相は狼狽して、

『重ねて若槻君の御尋ねであります。關係中に誘惑若くは切崩し等に關係する者が云々と云ふ御尋に對しましては、私は殊更答へなかつたのであります。又答へる要はないと存じて居つたのであります。強いて御要求であるならば、左樣なものは無いと斷言いたします』

若槻氏は岡田海軍大臣に向つて大正七年度からの製艦費はどうするかと聞いた。海軍大臣はそれは大藏大臣がどうかして吳れるだらうと答へた。若槻氏は大藏大臣が何うかして吳れるだらうと漫然と當てにしてゐられるのはどう云ふ事だと云つた。海軍大臣は之に答へて病氣になつたら醫者の言葉を信用する外はないと云つて皆んなに笑はれた。海軍大臣は海軍大臣であつても國務大臣でない事を白状したのである。

衆議院で原夫次郎氏は議員誘拐の事を論じて石川縣の代議士佐藤實氏を民政黨から政友會に移らす爲めに、政府は、、、、をして、佐藤氏關係の銀行へ四十萬圓の特別融通をなさしめたと云つた。佐藤氏は之に對して一身上の辯明をすると云つて、自分は民政黨に居て、民政黨の政府に特別融通を頼んだけれどもして吳れない。私はどうしてもして貰はねばならぬ。故に政友會の内閣時代に之を頼んだと云つて、

『君は中々正直な事を云ふ』と彌次られた。（速記錄に依る）つまり原氏の云ふ事を肯定した形になつてゐる。

昨年二月總選擧の時は政府黨と反對黨の勢力は殆んど同じであつた。衆議院の議長は政府黨に取られたが、副議長は反對黨で取つた程である。然るに、一年後の今日では、政府不信任案で、政府黨は六十名からの多數を占める。政府が政策的に行き詰れば行き詰るほど、之を支持する議員が多くなつて來る。議院內丈けを展望すれば日本の立憲政治は前途暗澹と云ふ外はない。

二月九日の夕方、私は內幸町から櫻田本鄉町に出でんとした。二百人ばかりの男が議會の方へ向つて走る。警部や巡査がそれを追つて行く。內幸町の通り、櫻田本鄉町附近、南佐久間町の角は警官が垣根を作つて交通遮斷をしてゐる。時々喊聲が上る。其日の午後上野公園で內閣倒壞の大會に集つた民衆が議會に押し寄せて來るのを警戒してゐるのである。

政治が街頭に出て來たのである。それがよいか惡いかは別問題として、議院內の政治の動きは明るくない。何故に議員が黨派を移動するか。これと云つて理由なく黨派を變へて、そして其所に鐵鎖で縛られてゐるかの如く、幹部の指揮命令で動いてゐる。其所に行くと街頭の民衆の行動は公明正大だ。民衆の心持ちは民衆と共に動くものには誰れにでも判る。少くとも民衆の頭には打算がない。初めは打算してゐても、直ぐ忘れて了ふ。結局は感激と純情に支配されて行く。政治は時々街頭に引き出さるる事に依つてのみ、新たな生命を注射されるのである。

改造社版

經濟學全集

◇第五回配本◇

各國經濟史

各國の經濟史を叙述せる著書は多い。が本書の如く經濟史上に重要なる諸國を列擧して簡明直截に論ぜるは無い。讀者は本書を一讀することによつて英・佛の或は又獨・露・米の經濟が、如何なる相互關係にあり如何なる發展形態を過程したであらうかを、容易に興味深く會得せらるゝであらう。

内容一斑

イギリス經濟史	野村兼太郎
ドイツ經濟史	石濱知行
フランス經濟史	平貞藏
ロシア經濟史	嘉治隆一
アメリカ經濟史	丸岡重堯

第四回配本 唯物史觀經濟史（配本濟） 山川均 石濱知行 河野密

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

憲政の原理と其運用

森口繁治著

（菊判 四四六頁）

定價參圓五拾錢 送料貳拾四錢

最新刊

憲政治下に在りながら、憲政の原理と其運用に就て正當な知識を持てる人の少き我國より甚しきは稀である。本書は斯學の權威森口教授が其蘊蓄を傾けての快著で、制度の靜的な法律學的技巧論としての憲法學の著書に對し、制度の根本的な要請としての其精神論をなすことが主眼とされ、又其原理を基礎として發展し生長する動的な憲法政治論をなすを目的としたもので、我國憲法政治に關する學術書中最も類書の少ないものである。憲政の原理と其運用の徹底的知識は本書の中にのみ見出さる。

【內　容】

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

世界大衆文學全集

第十三回配本（二冊）

三銃士

武士道華かなりし佛蘭西帝政末期の歴史的波瀾を主材に、大デュマの奔放なる筆鋒が、當時の遊俠忠節な銃士の面目を描破し、宰相の奸惡なる謀計、貴官の譎詐、王妃の明眸禍、貴女の淫蕩、等を遺憾なく物語り、時代の空氣を正史以上に髣髴せしめてゐる。中にも主人公ガスコンの勇者ダルタニアンこそは、あの時代の佛蘭西人が最も翹望した英雄型の具象化である。

マーク・トウエーン名作集

マーク・トウエーン作・佐々木邦譯（五拾錢）

眞のユーモアを知らんと欲するならば、先づトウエンに親しむべきである。彼の諧謔の一皮下には虚僞の世に對する熱烈な憤激があり、笑の蔭には苦い涙が潛んでゐる。彼は常に彼の高い道徳觀に依つて社會を覺醒しようと努めた偉大なユーモリストである。本書は彼の傑作中の傑作長篇諧謔小説「抜けウヰルソン」「トム・ソーヤー」の他に出世作「跳ね蛙」及「社會改良家」「死んで生きてゐる話」等の短篇が收録されてゐる。

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



風俗畫論

鏑木清方

作家の方から云へば如何なる對象を選ばうとも、製作する氣さへあれば繪は自から出來るものであつて、風俗畫ばかりでなく、歴史畫とか、風景畫とかいふ分類はどうだつていゝことなのである。

併し作品が作家の手を離れて世の中へ出て來るとさうは行かない、觀る方の側ではその作を問題にする時には分類を必要とする、私にしても繪を描く時は分類などを考へたこともないが、批評でもするとやはり類を分けることがある。需められるまゝに風俗畫に就いて多少の考察を試みようとするのも、割合に曖昧になつてゐる分類を少しでも正しく解釋して見たいからであるが、それも私だけの解釋に過ぎないかも知れない。

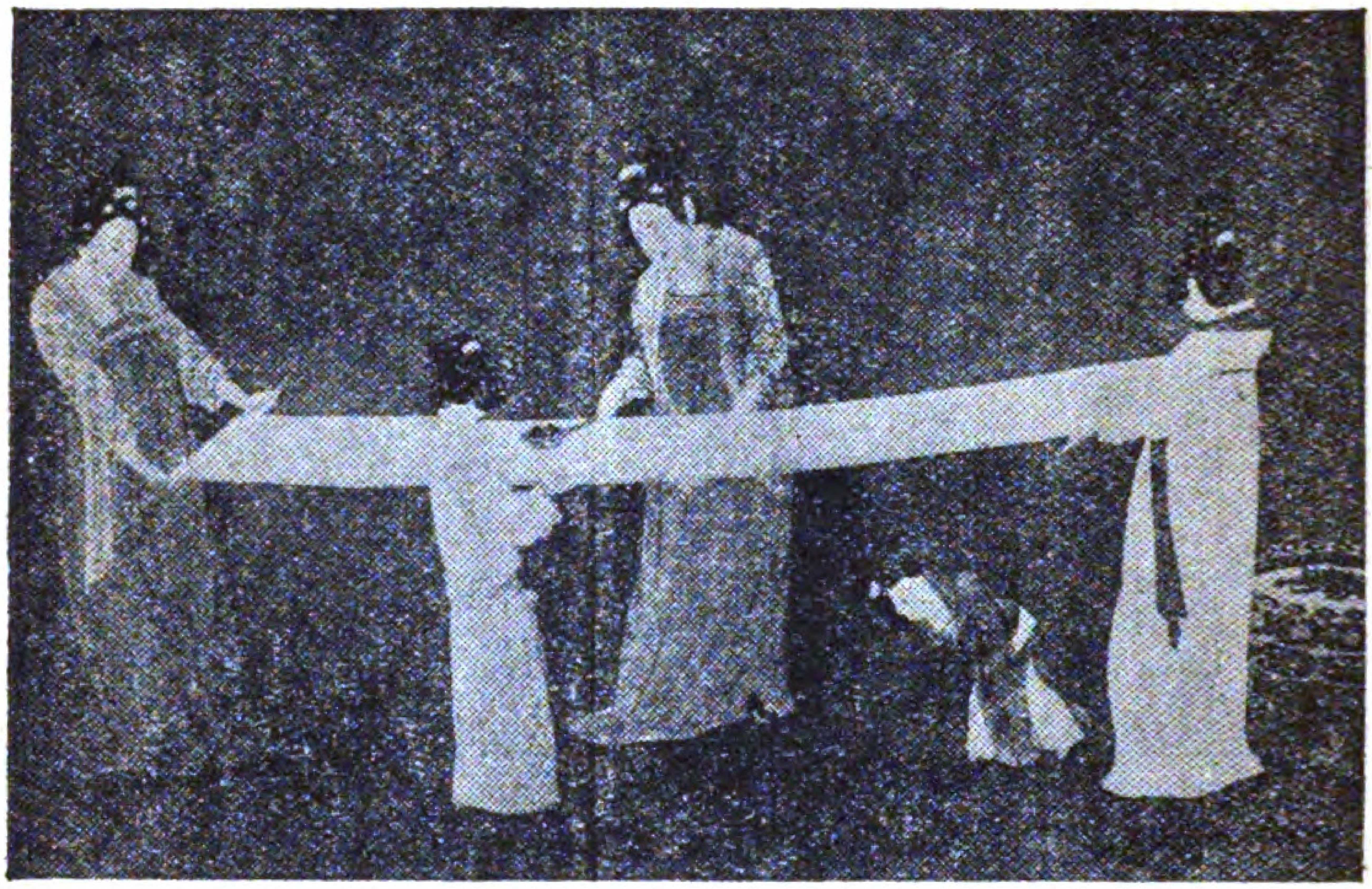
風俗畫と稱へられてゐるものゝ範圍は相當汎いけれども、大別すれば以下に擧ぐる二種類の内に大方は含まれるであらうと思ふ。

一つを「社會風俗畫」一つを「時樣風俗畫」と名づける。

くは生存した人間を主體として生ずるもので、人間の集まるところ必ず社會が構成される、それが過去であつても、現在であつても、その社會生活の描寫が繪の主題とされ、或ひは多量に認められたものを、社會——風俗畫、以下略して社會畫と呼ぶ。

風俗の語義は時世粧のみを指すのではあるまい、その詮索は先づ措いて、こゝにはこれを普通に用ひ慣らされてゐる衣裳、調度を指すことゝする。殆んど裸でゐる南洋の土人でも、首には飾りをかけ、腰に纏ふ僅かな布片にも、色や模樣の好みがあるやうに、人物に風俗は付きものである。

未開の土地程風俗の變化は尠いが、人文の開くるところ、近代の都會などにあつては目まぐるしい程の推移がある、それら時代々々の風俗が繪の主要點として現はれてゐるものを乃ち、時樣——風俗畫、以下略して單に風俗畫と呼ぶことにする。



搗　練　圖　（徽　宗　帝　摹）

はない、社會畫は複數で、風俗畫は單數だ [illegible]
て複數が出來るのではあるが、時として風俗畫と社會畫と表現の內容となるものが、出發點を異にする場合も豫想し得る。

社會畫の方はその描かれた時代の世相、人情、その他あらゆる社會相を繪の中に覓むることがあるが、風俗畫に在つてはさういふことよりは主として外部に現はれた形に依つて見るべきで、マネキンの如き表現も許さるべきである。第九回の帝展に出た中村大三郎の「編物」を誰かゞ評してデパートの飾窓の人形と擇ぶところがない [illegible] 術的で在り得べき筈だ、飾窓の人形のやうになるのを厭つたら風俗畫——殊に現代婦人風俗畫は成り立たない。

風俗畫と世間で呼んでゐる中に、風俗は主でなくて人の美（その大部分は婦人美であるが）を主題としてゐるものもある、美人畫と呼ぶと共に風俗畫とも呼んでゐる。

作者の主觀が基調となつて、人物を描いてあつても、それは畫面を構成する一分子以上に見てはいけないやうな場合もある。

菊池契月の「南波照間」のやうに、エキゾチックな古都の情感といつたやうなものを謳ふのに、ある時代の風俗を假りて現はすこともある。

作家はいくらでも複雜な表現を試みる。一人の人物も畫面に現はすことなくして、社會生活の一端を示すことも出來る、ちよつと見ては風景畫と云ふべくして、實は社會畫或ひは風俗畫であることさへある。

作品に隨つて一々區分をするのは餘りに煩雜であるが、大體は社會畫、風俗畫に屬するもので、その特異なのは各々の作品に就いて說くより仕方がない。

風俗畫若しくは社會畫は凡そいつ時分に發生したものか調べたこともないが、繪畫は原始時代から始まり、動物を描き、狩獵を描くに至つた時には、早くも生活の一つの實相を繪にするといふ、今日の社會

風俗畫の製作意識が具體化された最初だらうと思ふ。

埃及の壁畫には、水草の間に狩をする人を描いた、かなり進んだ繪もあるし、希臘の陶畫には女風俗を扱つてもゐる。

古い時代には繪畫は多く宗教に附隨して居た爲めに、東洋にも、西洋にも純粹な風俗畫といふものは極めて稀れである。波斯のミニエチユアには往々精密な風俗描寫を見るのと、印度のアジャンターの壁畫なども目的は違ふけれども一部風俗畫と見られぬこともない。

大英博物館にある、晉の顧愷之と傳ふる有名な「女史箴圖卷」は[illegible]傳ではあるが、鏡に對つて髪を結ぶ圖様などは、今日も尚ほ日常家庭に踏るところと大差なく、盛唐の張萱の筆を摹する徽宗皇帝の「搗練圖」などは更に純粹な美人風俗畫で、先頃日本へ將來された周昉筆と傳ふる「仕女圖」の卷と共に宛も近代の作のやうで、千年の時代がこれらの繪と吾人との間に横たはつて居ようとは思はれぬ程である。

正倉院の御物中にある琵琶の撥皮に彩陀で描かれてゐる「胡人狩獵」は、頗る時代の古いといふことを感じさせるが、これ亦た立派な風俗畫である。

同じく正倉院の「樹下美人」は佛畫ではあるが、これなどが後の美人風俗畫の源を成す點で意義の深いものであらう。同じことはやはり天平期の「吉祥天女像」に就いても云へないではないが、これを風俗畫と見做すのに[illegible]同じ見[illegible]である。

西洋では前にも云つたやうに宗教の宣傳機關としてのみ、繪畫は存在するかの觀さへあつた程で、肖像畫を風俗畫として見ればその間にでもないことはないが、純粹風俗畫と定かに指し得るものゝ出て來た十六七世紀頃には、既に日本では純粹風俗畫の第一の盛期である鎌倉時代を疾くの昔に通り越して、第二の桃山後期時代に入つてゐるのだから、その發達は西洋よりも日本の方が早かつたのである。

我が國で純粹風俗畫の盛んに行はれた時代を顧みると、そこに三つの集成期を見出すことが出來る、一は藤原時代末から鎌倉時代につぎつぎに作られた夥しい繪卷物の群れ。二は桃山後期、豐臣氏新興の終りに近い頃から、大阪二度の陣を過ぎて、徳川氏三代の頃、年號で云へば、慶長から寛永をその中心とした屏障畫、世にこれを初期浮世繪と呼んでゐるものゝ一團。三はそれに次いで徳川氏治世の在る限り繼續した世界的に名高い浮世繪、勿論その間に何にもない譯ではないが、後世から顧みてこの三つの集成がハッキリ目立つて見える。

比較的時代の新しい土佐派に對して古土佐と云はれてゐたのを、この頃では凡て大和繪と呼ばれてゐる、その大和繪の古繪卷で現存してゐるものゝ數も決して尠くはないのだが、湮滅されたものを加へて、作られた當時に驚くべき多數であつたらうと思はれる。今日これらは皆



源氏物語（傳隆能）

を作らうとする氣持ちもなかつたであらう。西洋の古畫が貴族の玩賞の爲めに作られたのに等しく、古繪卷も宮殿に發生し、作者として傳へられてゐる人は凡て官位を有たざるはない、時は平安の朝、[illegible]の[illegible]けたる事なしと[illegible]せる御[illegible]關白を出した、花ならば八重櫻、[illegible]

象して永遠に傳へたもの、尤は僅か只に充たず、五十四帖揃つてゐたものであらうが今傳はつてゐるのは、卷にして四、繪は十九図である。隆能筆といふ繪卷はないのださうであるが、源語の作られて間もなからぬ時代、同じ雰圍氣の中に育くまれた[illegible]の感覺に優れた人の筆であることは[illegible]存在と云ひ得るであらう。

「志貴山緣起」はその題名の示す[illegible]のであるが、鳥羽僧正の筆と傳へられ[illegible]れは遙くして[illegible]

[illegible]

珍である。

繪卷の研究は専門家も多い、門外の私の立ち入るも如何だが、上記の三種はいろ／＼な意味から、風俗畫を描く人にとつて決して門外の品でないと思ふので特記したのであつた。

尚ほ繪卷ではないが、四天王寺その他に殘る「扇面寫經」の下圖。藤原末期に經文の装飾畫として作られたのであるが、上流、中流の生活、小兒の戸外の遊びを、装飾風とは云へ、意は寫實に描かれたもので、これは用途はとにかく、製作の目的は純粋な風俗描寫にあつたこと疑ふべくもない、その點から寔に珍らしい例である。

「春日驗記」は貴紳の生活を如實に、而して正確に描寫してあるが、番匠の仕事の樣子、木片、鋸屑の類を手際よく束ねて頭上に載せて行く小童などの行き屆いた觀察もあり、雨の夜、春日社殿の廊下の縁の下に、多くの鹿が潜んでゐるのも、私は未だ春日へ行つたことはないが、多分今でも接し得る情景であらうと思ふ。

大和繪には恐らく計畫的に四民の生活を主題として扱つたことは無いかも知れない（扇面寫經がやゝそれに近いことは認めるが）その主題とする内容は物語繪、社寺の縁起繪、聖の行狀繪、合戰繪の類が大部分を占むるのであるが、その中には挿話的に庶民階級の生活が、社會風俗畫と云へる程度に見出し得る。

藤氏[illegible]の[illegible]、[illegible]、[illegible]の[illegible]限りそれらのものは今知るよしもない。

宮廷の式事を描いたもの、原本を燒失して四分の一程の摸本に依つて傳へらるゝ、光長の「年中行事」の類はやはり社會畫の部に數へられるであらう。

第二の集成期だと云つた桃山後期、前記の大和繪の盛時から一足飛びに桃山まで、何にもなかつたのではないが、源平兩氏の鬪爭以後、南北朝の對立。足利氏の時代には一しきり藝苑に花は咲いたが、それは風俗畫には聊か縁の遠い、枯淡を尙ぶ禪畫の一流で、宋、元の禪學趣味、色を疎んじ、形を卻け、濁世を超えて高く標榜する禪境は、社會大衆と共に在るべき社會風俗畫とその住むところを異にするかの觀がある。

秀吉の豪放な趣味が導いた桃山美術、その前に信長の安土城の美術もその先驅を爲したものではあるが、永德、山樂、その時代に應じて起つた巨匠の大作は、豪華を極めた太閤の偉業によく適つて、藤原氏時代に繪卷が出來たやうに、こゝでは屛障畫の大きなものが描かれるやうになつた、只だ、彼は優雅、これは豪健、瑰麗とは云へようか何處かに野人の態がある。この一家の作として信ずべきものは花鳥畫多く、風俗畫は未だ的確な類品を下すことの出來るものを見ないが、狩野派の一[illegible]その他無數の風俗



志貴山緣起（傳覺猷）

注目すべきは、完全に社會風俗畫が獨立して全形を現はすに至つたことである。

今は宗教の附屬でもない、物語の說明でもない、その畫題を見ても知れるやうに（それは近時名づけられたものであるが）享樂を享樂として描き、插話の境界から全く脱出してゐる。

「高雄觀楓」の屏風は、高雄であるかどうかは定かでないが、京洛の名勝を四季に描いた内の半双らしく、秋と冬とが一圖に纏めてある、紅葉の下に行廚を開く女連れ、茶を煮て客に沽る人もあれば、武人の一群れ、僧尼の姿も描かれてある。

「花下遊宴」の屏風は、淀君、松の丸などゝいふ秀吉の嬖妾を描いた花の下に毛氈を敷き、酒を擧げてゐる、侍女らしきもの、當時流行したばかりの三味線を彈いて、尼の形した人が手拍子うつてこれに和す。半双には梨の花が堂字を覆ひ、堂の外縁に若い女數人、歌舞放蕩りを見てゐる、幕の影に菓子折のやうなものを運ぶ仕女、縁の下に駕をさし入れて眠りこけてゐる輿丁は、供待の自動車の中に眠つてゐる運轉手と少しも變りはない。

これらより年代降つて世間的に著名な「彦根屏風」がある、妓女と嫖客とを巧みな構圖に纏めてある、非常に端正な畫風で、妓女といへども見た目はいかにも上品である。文を書く女、雙六に興ずる女、三味線彈く盲人、中にも刀を杖にして白扇の要のところを撮んで下げてゐる美少年の姿態は寛文頃の芝居の仕業にも行はれてゐる粹な形で今で云ふモボの生つ粹を表現したものである。

松浦伯爵家の「妓女屏風」は頗る鮮麗であつて、技法は甚だ稚拙なのだが、彦根屏風よりも若々しい氣分が漂つてゐる、構圖なども自然に任せたといつたふうなところが見える。この二つの屏風繪は別に暗示的な内容も何も有たず、只だ在るが儘の時樣風俗を見たなりに描いたものであつて、前の「花下遊宴」「高雄觀楓」は當時の社會畫の代表的なものであり、後の二つは風俗畫のこれ亦た代表と云ふことに誰も異議はあるまいと思ふ。

その他この時代には續々と社會畫も出れば、風俗畫も出てゐる、庶

民、遊女は大手を振つて廓中を濶歩してゐる。四時遊樂、祭時、歌舞伎は、大和繪時代の宮廷の公事、緣起に代つてその畫題の主なものとなつた。

信長が天主教徒を導いて以來、南蠻、紅毛の徒が內地へ入り込むことが多くなつた。堺は唯一の貿易港として開かれ、その港らしい背景を有つ「南蠻人來朝」の數々の屛風はエキゾチツクの社會畫として見遁すことの出來ないものである。

「歌舞伎の草子」は絢爛の美を極めたもので、繪はさう勝れた名畫と云ふのではないが、舞臺、樂屋、木戶口の喧嘩、見物のとり〴〵の風俗など、この頃には製作の材料としては餘程夥くなつた繪卷物に、かなり細寫されてある。見物の中には異國人の種々なのがあり、流行の煙草、若人が渡りものゝ羅紗の襟外套とでも名づけられるやうなものを纏つてゐるのも目新しい。

庶民の生業を描くことは、古く「東北院職人盡歌合」の卷があるが、それは歌仙繪の種類に近く、生活の色は稀薄だ。この期の作で喜多院にある「職人盡屛風繪」は諸職の現在が委しく實寫されたことで特色がある。

前期の風俗畫から次の集成期、浮世繪へ移るのは、際立つた區別はなく、祭禮や四季遊樂を主題とした屛風繪や繪卷などに、主として京
[illegible]の手で製作されてゐた。師宣や長春の描いたものには單なる仕人物以上に藝術的に見られるのも尠くない。その對象として選ばれるのは、芝居、吉原、風呂屋、その他ノ次の遊びが多い。

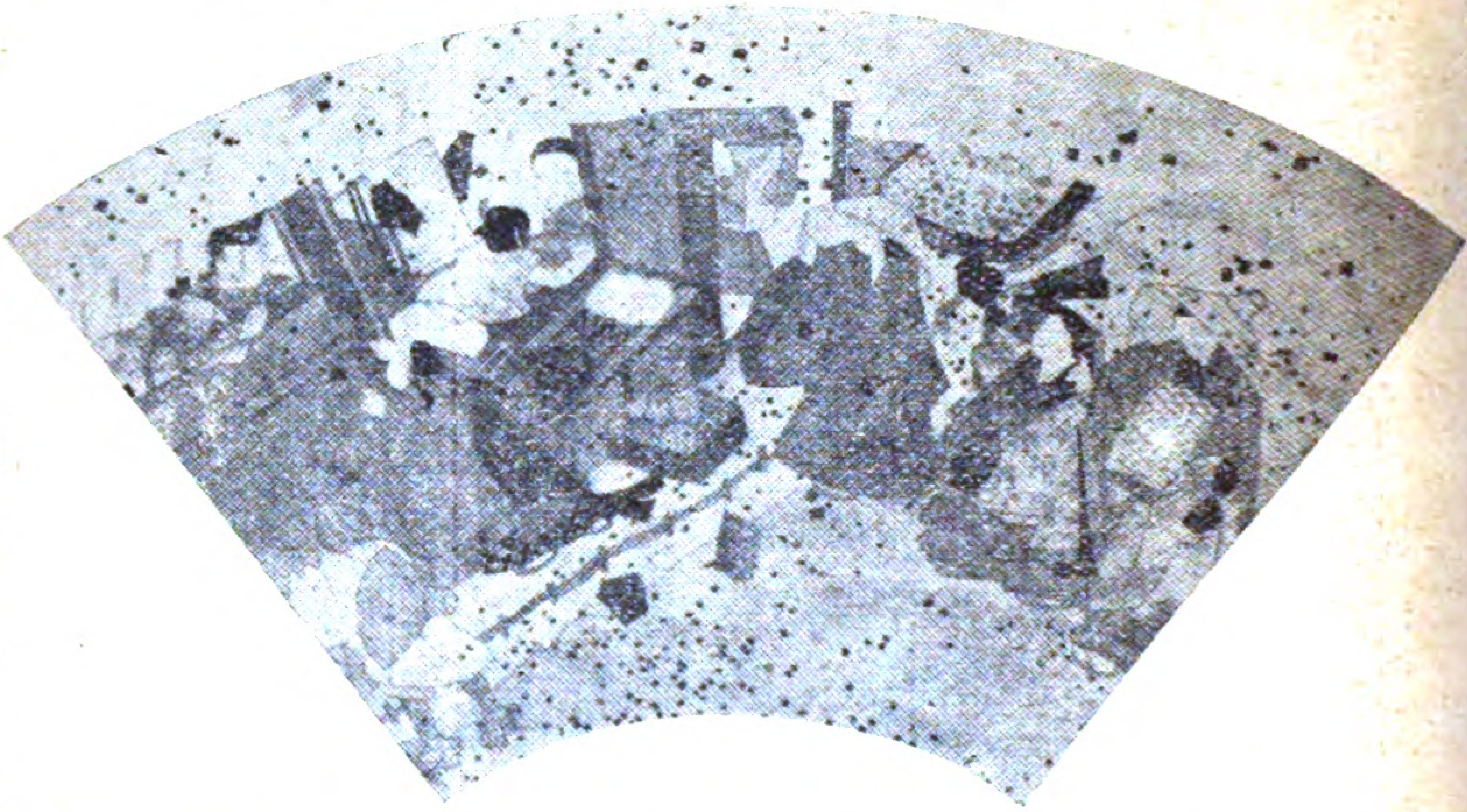
浮世繪は狩野とか土佐とかいふ、筆法上の流派ではなく、浮世の態を描く、乃ち今私の云ふ社會畫、風俗畫にそつくり當る意味を有つて呼び出された、云はゞ取材上の流派で、一派の主張が自から其處に明白にされたものであるが、その傾向は江戶に於ける庶民階級の異常な發達と共鳴して、德川幕府の治世下にいはゆる大江戶の花と唱へらるる錦繪の盛行となり、畫風、作法一ならざるも、傳統二百年の長さに亙つたのは、風俗畫の集成時代として從來に見なかつたところである。

煩雜を厭ふが故に餘り多く知られてゐる浮世繪に就いては、作品、作家を描くことは控へよう、前の二期と違つてこれは全部が風俗畫なので、宗教や文學の支配は受けて居ないのだから、特にその風俗的描寫を抽き出すには及ばない、浮世繪卽風俗畫とする世間の見方は當然ではあるが、その全部が社會畫、風俗畫として毫も遺憾なく認容し得るかといふと其處に多少の問題がある。

以上三項に亙つて明治維新前の三大集成期なるものゝ論旨を說いたが、最後の浮世繪に就つて私の先づ第一に擧ぐ世間は、浮世繪の大部
[illegible]

かと云ふことである。

扇面寫經　（筆者不詳）



凡てがさうだと云ひ切ることは憚るべきかも知れないが、浮世繪は夢幻の國であつて、江戸の現實社會から凡ての男女は一度この國へ誘はれて、在りし日の現實相を振り棄てゝ了つたと見るは誤りであらうか。春信もさうだ、歌麿もさうだ、師宣の描ける男女が、戀故に命を惜しまなかつた人達と見えるだらうか、西鶴や近松に依つて窺はれる人情世相が、元祿、正德の浮世繪と同じ時代と思へるだらうか。

社會畫として浮世繪を視ると甚だ慊らぬことが多いが、時様風俗畫――と云ふよりも寧ろ美人畫としてこの派は異常な進展を遂げたのである、春章でも、清長でも、春信でも、歌麿でも、美人畫の立場からの風俗畫としては洵に名品と賛ゆべき多くのものを殘してゐる。

社會活動の態を寫すことの尠かつたのは、動的描寫に赴く人の稀れであつたことにも基因する。昔鳥羽僧正覺融出でゝ雄勁にして自在な描線が行はれ、繪卷物には人物の活躍思ひのまゝなのが尠くなかつたが、浮世繪には藤原時代の作り繪の部に入るものが多く、靜的の描寫に傾き過ぎた爲めに、日常生活を如實に示すことが疎くなつたとも云へる。今一つは演劇との關係がひどく密接になつて、劇に畫面の見得といふ術語を生ずる程になれば、畫も俳優の舞臺姿になぞらへるやうになり、歌川の末流に及んでその弊いよ〳〵甚だしくなつた。それでも五渡亭國貞、溪齋英泉の一部俠斜趣味のものは決して平凡な美人畫ではない、風俗畫の見方から云へば俗だと云つて顧みないのは間違つてゐる。

浮世繪時代、その流派の外に立つて風俗畫に筆を執つた人も尠くない、中でその重なのを擧ぐれば、久隅守景、英一蝶、渡邊華山、形蕙齋、長谷川雪旦などである。これらの人々の作るところ、浮

派諸家の作よりも、却つて社會畫、風俗畫の本旨に適つてゐるものゝやうに思ふ。

一蝶の「四季日待繪卷」を見ても、「渡し舟」「雨やどり」畫題を覺えぬが立場茶屋を描いた横物その他折々見かける浮世繪風の作は、浮世繪の誰にも見えない活々とした社會相が見える。明治の河鍋曉齋は一蝶と同じく狩野派の出で、輕妙な筆で社會相を描かうとしたのであつたが、あまりに卑しいので識者の採るところとならなかつた。一蝶も氣品すぐれて高いといふことは出來ぬが藝術價値をあれだけに保つて卑しくなり勝ちの社會相を、ユーモアを示しつゝ、自在に寫して行つたのは凡ならぬ修行なくては能はぬところである。同じことは華山に向つても云へる、華山は社會風俗に一ばん縁の無い筈の南畫の出であるが、その著「一掃百態」の序に短いけれども風俗畫に對する抱負を示してゐる。「一掃百態」は路上に室内に、當時觸目の風俗、社會相を憎い程うまい華山一流の筆で自由にこなしてゐるので、時代が近いだけ一蝶のよりも活々と看者に迫つてくる、自分の愛妓を描いた淡彩の掛幅を同じ時代の豊國や國芳のものと比較して見ると、歌川派のはやはり芝居の女形の扮装らしく、華山のは、こんな藝者がゐたらうと思ふ氣がする。

守景はさう澤山あるものではなく、「耕織圖屛風」と「夕顔棚」の二つを見たのみではあるが、共に農民を主題として描いたことが珍らしい、[illegible]相がよく攫めてゐる上に、藝術的な香りがすぐれて高い。前者の如きは社會畫的風景畫の範とすべきものである。

蕙齋は浮世繪出身の人だけれどその師重政が只の浮世繪師ではなかつた、蕙齋はその薫陶を受けて、俗流から脱出しようと試みたその業蹟は洵に同感すべきものがある、極めて省筆して物象の核心を捉えやうと企て、多くのいはゆる略畫を案出した、「職人盡繪卷」は多くの職人盡より更に進んで、筆を用ふること尠く、意を用ふること多く、今日漫畫と云はれてゐる社會畫の一體の範を垂れてゐる。

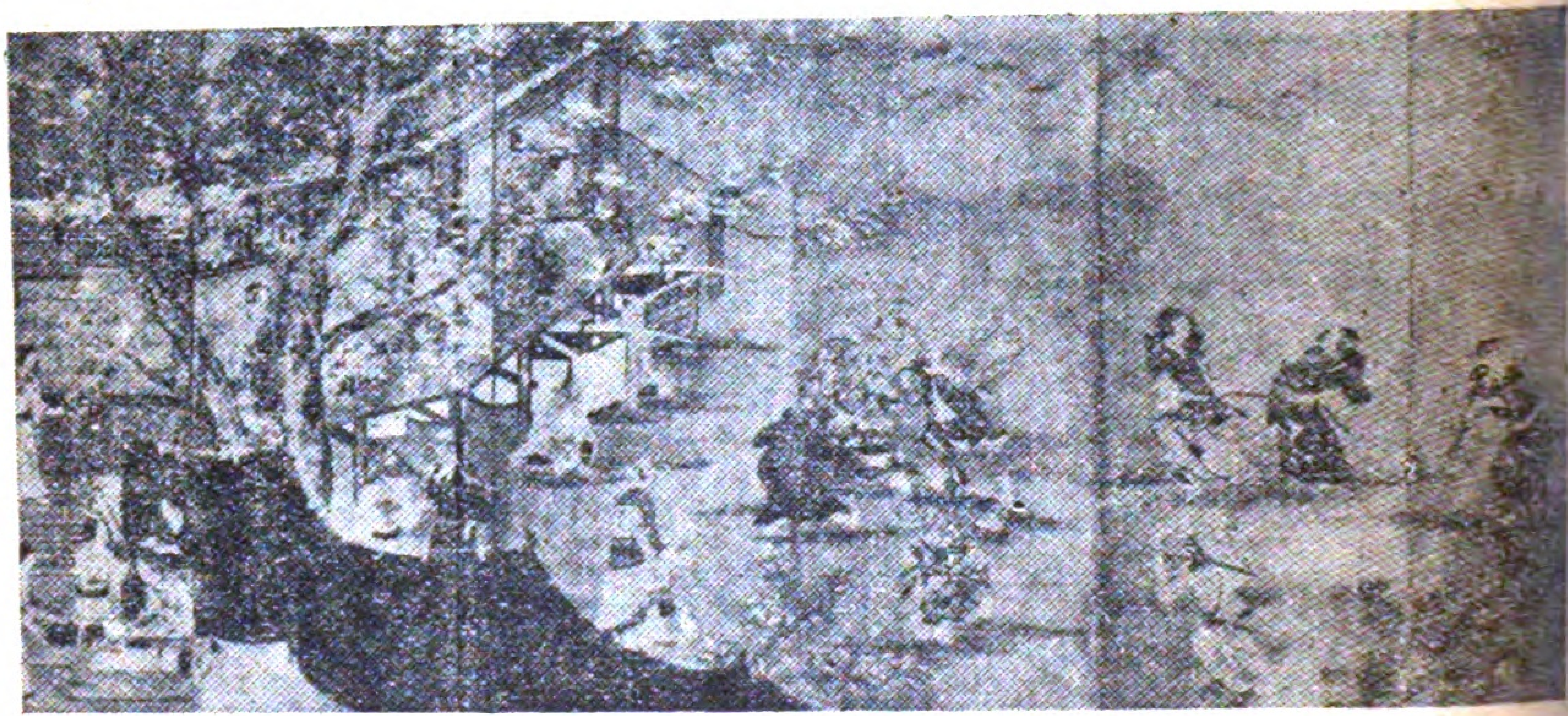
雪旦は「江戸名所圖會」二十卷、そのいづれを披いて見ても、百年前の江戸市民と生活を一にし、行樂を倶にするの思ひあらしむる。

私は濫りに浮世繪を貶するのではない、愛すべく、尊ぶべき夢幻境として讃美も憧憬もするけれども、只だ古大和繪に出で、桃山後期に自覺の途を拓いた社會畫、風俗畫の進路としては、長い間傍系に入つたものだと思ふ、德川期の間には如上專門家外の諸家の作、今日この傾向に進む人に何物かを暗示するところがありはしないか。

日本に於ける風俗畫發生の順序を追つて摘出して來た私は、明治、大正を經て現代に及ぶところに達した。明治元年から昭和四年までは通算して六十二年、その間非常に變化したものもあれば、さのみ著に[illegible]

この間に著しいことはと云へば、海を越えて外國の文物がどし〲流れ込んで來たことで、明治中期以後になると今まで銅版畫でその片鱗をしか窺ふことの出來なかつた西洋の藝術が、寫眞も、精巧な複製も、後には眞物も追々に渡つて來るやうになると、風俗畫も今日映畫で外國の家庭生活に親しめるやうに、日本畫のどんな寫實のものよりも、生きて居るやうに描かれてゐる點で著しく好奇的な親しみを覺ゆるやうになつた。明治二十三年の博覧會に龜井至一といふ人の「彈琴美人」がかなり俗なものだつたのだが、當時の美人風俗畫として一世の視聽を集めたこともあつた、その人自身が作つたのだと記憶するが、砂目の石版畫でやはりその繪が複製されて繪草紙屋の店頭に、芳年や、清親の錦繪と並んで掛けられ、久しい間、社會風俗の石版摺、筆彩色の繪が錦繪に代る程の勢をもつて流行したことがある。

芳年は明治初年を代表する浮世繪系統を引



花下遊宴（狩野長信）

に遭遇したのでその大才も濫出する末期の錦繪や新聞の插繪位にしか用ふることが出來なかつたのは遺憾であつた。

浮世繪派の人々が肉筆に疎かつたやうに、この期に風俗畫を作つた人々も亦た版畫をその製作の舞臺としてゐた、その版畫も錦繪は漸く廢れて、芳年、清親、年方、月耕の名を數へるのみで、それとても當代の風俗より、歴史、あるひは過去の時世粧を材とする傾向が勝つてゐた。

清親の寫生風の風景畫は、明治初年の生活を窺ふ社會畫的風景畫と觀るべきものもある。中期前後の風俗畫は殆んど文藝に附隨して描かれた小説の口繪、插畫であつて、屏風もなければ、繪巻もなく、獨立して作家が思ふまゝに當代を描いたものは寔にに曉天の星の如くである。

唯だ一人寺崎廣業が、中期以後、屢々藝術的にも優秀な美人風俗畫を作つたことは特記するに足る廣業は各流各派に參して綜合的に筆技を養ひ得た大家なので、好んで藝妓を材料としたけれども、いつも優雅でおほどかな氣品があつた。

明治の中期は明治文化の最盛期として實際に過した其の頃を懐かしむ心が私などは一倍強いのであるが、繪に依つて當代の生活を偲ばせてくれるものはないかと索むると、それはやはり挿畫類の他には殆んど無いと云つていゝ。挿畫などは、屏風や繪卷と違つて相當の數は刷られる筈だが、誰も大切に保存する質のものでないから、當時を距る三十年に充たぬ今日で、もう手に入れることは容易でない。

乏しくはあるが明治、大正に亘つて風俗畫の立場から製作をした人は、廣業、省亭、桂舟、永洗、年方、月耕、清親、半古、松園、柳塢、素明、百穗、栖鳳、輝方、蕉園、恒富、などを擧げられよう。

栖鳳の「あれ夕立に」は明治も大正に移るに近い頃の作だが、珍らしくも瞬間の美を捉へたもので、甚だ印象的な描出は、過去には尠い作例である、同じ人の「日蔭」も美人を描くのが常になつてゐる風俗畫の舊套を脱して、一介の勞働者の在りのまゝを描いたのであつた。

素明と百穗とが无聲會時代に作つたものゝ中には、氏等が提唱した自然主義（往年文壇のそれとは違ふ）に依つた街頭、田園の[illegible]月描寫で、漫畫の一面を有する社會畫の本流を行くものであつた。

もう明治以後の作になると意識すると否とに拘らず、泰西の繪の影響を受けぬものはないと云つてもよからう。

泰西の社會風俗畫は日本よりもずつと後れて出て來たのではあるが

[illegible]

してゐたことは、日本の繪卷などの例によく似てゐる、社會風俗畫が行はれ出したのが何時からなのか私は審らかな知識を有たぬけれど、近代になればなる程、日常生活の社會風俗は題材として必然的に選ばれねばならぬものになつてゐた、その邊日本の近代繪畫と違ふところである。

尤も日本の近代繪畫でも、浮世繪のやうな純然たる專門的の風俗畫の集團はあるけれども、それは藝術の本流としての待遇を受けては居らぬ、市井の俗畫として卑しめられ、これを鑑賞することを身分に關はる位に思はれた思想が、明治時代、その後になつても却々消散することなく、今日だつてこの謬見はかなり一部に濃厚なものがある。

西洋では新しい藝術運動の起つた時、それを容易に受け入れないことは、かなり頑固だが、譬へばマネエの「草上の晝餐」が、在るべからざる處に裸女を描いたと云つて容れられなかつたといふやうな、道徳習慣?からの反對もあるが、日本のやうに風俗畫そのものを輕蔑するやうなことはない。

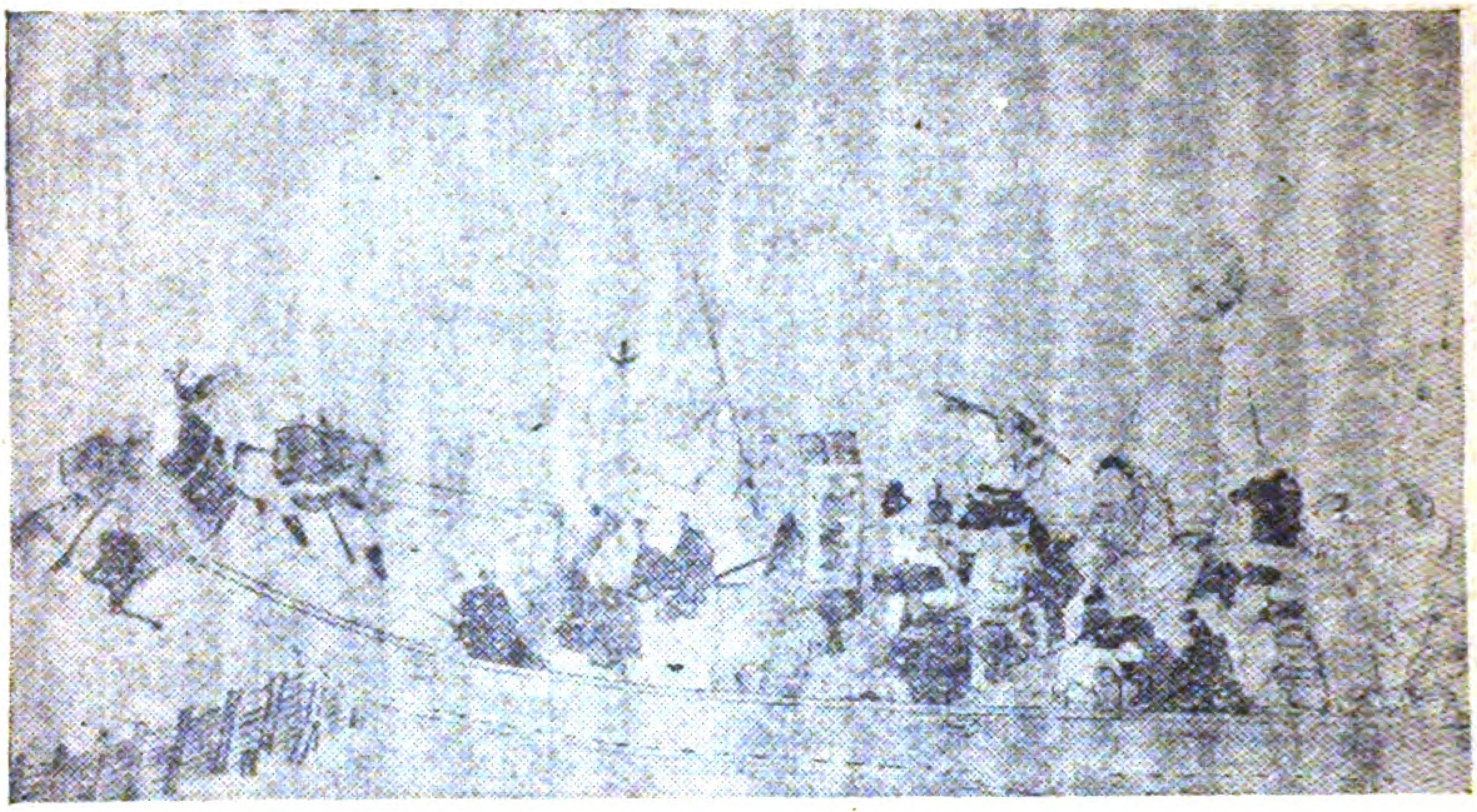
明治以後、明治以前もさう云へるが、風俗畫が藝術的に觀るべきものゝ多く出なかつたのは、原因を凡てこの謬見に歸すべきである。

一體風俗畫が何故に蔑視されたければならなかつたのだらうか。若し繪卷時代に發生した和繪が、その儘に進んで行つたなら、然

[illegible]

んで行つた藝術鑑賞か、長く衛世を支配しなかつたなら、風俗畫にもつと進展を見せてゐたのだらうと思ふ。

宋、元の簡素雄勁な、一線の内に物相を超越した不言の美の盡きざることは學者の說くを俟たず、藝術を解する者の思想漸く老いて到り得る境地である。高いと云ふもよし、深いと云ふのもよいが、一方を偏執することは獨り藝術の上ばかりでなく、社會萬般のことに亙つてよくないことである。



渡舟（英一蝶）

墨畫に現はれた禪味は隱逸を尚び畫の上でも形態を疎じ、色彩を輕んずることを以つて自ら高しとする風を養つた。この隱逸性は實現力に乏しい我が國人の自己嫌惡にとつて御誂へ向きの避難所であり、面倒臭いところで俗塵を浴びて働いてゐると、褒める人は尠くて、批難ばかり蒙むる。それと反對に面倒になつたらアッサリ切り上げて、空氣の善いところで土でも掘つてゐると、高士だの、清節だのと評判がいゝ、我々は多少とも共通してさういふ氣もちを有つてゐるところへ、その方が世間の受けもよいのだから尚更隱逸氣分を助長させる。宋元渡來の東山、明清渡來の江戶末期、前の水墨趣味と、後の南畫趣味とは一つものだとは云へないが、隱逸を尚ぶに於いては一致してゐる。

德川時代は武士が支配はして居ても、實力は町人にあつた、明治は支配が變つてもやはりさう云へるのだけれども、庶民の鑑賞眼は今も昔も低いのが常なので、浮世繪の如きもその實質は概して低い、町人藝術である浮世繪は、その優秀なものを除けば確かに藝術價値は乏しいのである、かと云つて當時の官學派の狩野や土佐は位倒れの貧乏華族のやうなもので、藝術に非ざるは熊や八の浮世繪と五一三六の間柄なのだが、それでも公儀の御繪所などゝ空威張をしてゐた。南畫はその藝術的空虛時代に乘じて傳播したのだが、超然主義は宋元渡來の後と同じく、やゝもすれば浮世を離れて自ら高くすることを人爲的に行ふ風習を爲すに至つた。

藤原隆能（假定）が源氏物語を描いた時、當代風俗畫は憚るところなく、上なき御方の御鑑賞にも入り、誰もこれを訝しむ人はなかつた

らう。

東山以後時様風俗を描くのを作家は憚り、作品には署名を避けたと傳へられてゐる、落款の無いのがその爲めかどうかは尙ほ考ふべき餘地があると思ふ、がさういふ思想の在りさうなことは想像される。大和繪のことは先づ措いて、桃山後期に出たやうなものが、ずつと續いてゐたら、超然藝術がいかに鑑賞を支配したと云つても、もう少し何んとかなつてゐたのだらうと思はれる。

鍬形蕙齋が浮世繪から遁れたのも、近くは私の師水野年方が歷史畫に進んで行つたのも、各々その好むところに赴いたのながら、その間他の消息が明かに窺へる。

展覽會が製作の發表場所になつてから前に云つたやうな弊風も何分か緩和されて來たが、未だ全然消散したものではない。

畫家の生活の大部分が床の間の掛物の需要に依つて支へられてゐる今日では、依然幕府時代の思想に支配さるゝのは已むを得ないことかも知れぬ。床の間が鑑賞を主としないで、神棚の如く、佛壇の如く、耶蘇の敎壇の如くに用ひられることは、風俗畫の出現には非常に大きな妨げである。下駄を穿いてゐる畫は掛けられないと云つた人さへあるといふ、それは餘りに固陋な人の例ではあるが、祭壇とすれば無理もない。

これは畫題の變化に伴なつて早晩何んとか解決される問題ではあるが、風俗畫、殊に現代風俗畫の進展を阻む。これがまた主因の一つである。

西洋ではそんな種々の面倒な障碍物はないから、中にはいはゆる社會風俗畫の說明に墮したのもあるが、近代には潮の漲るやうに多くの風俗畫のいゝものが出てゐる

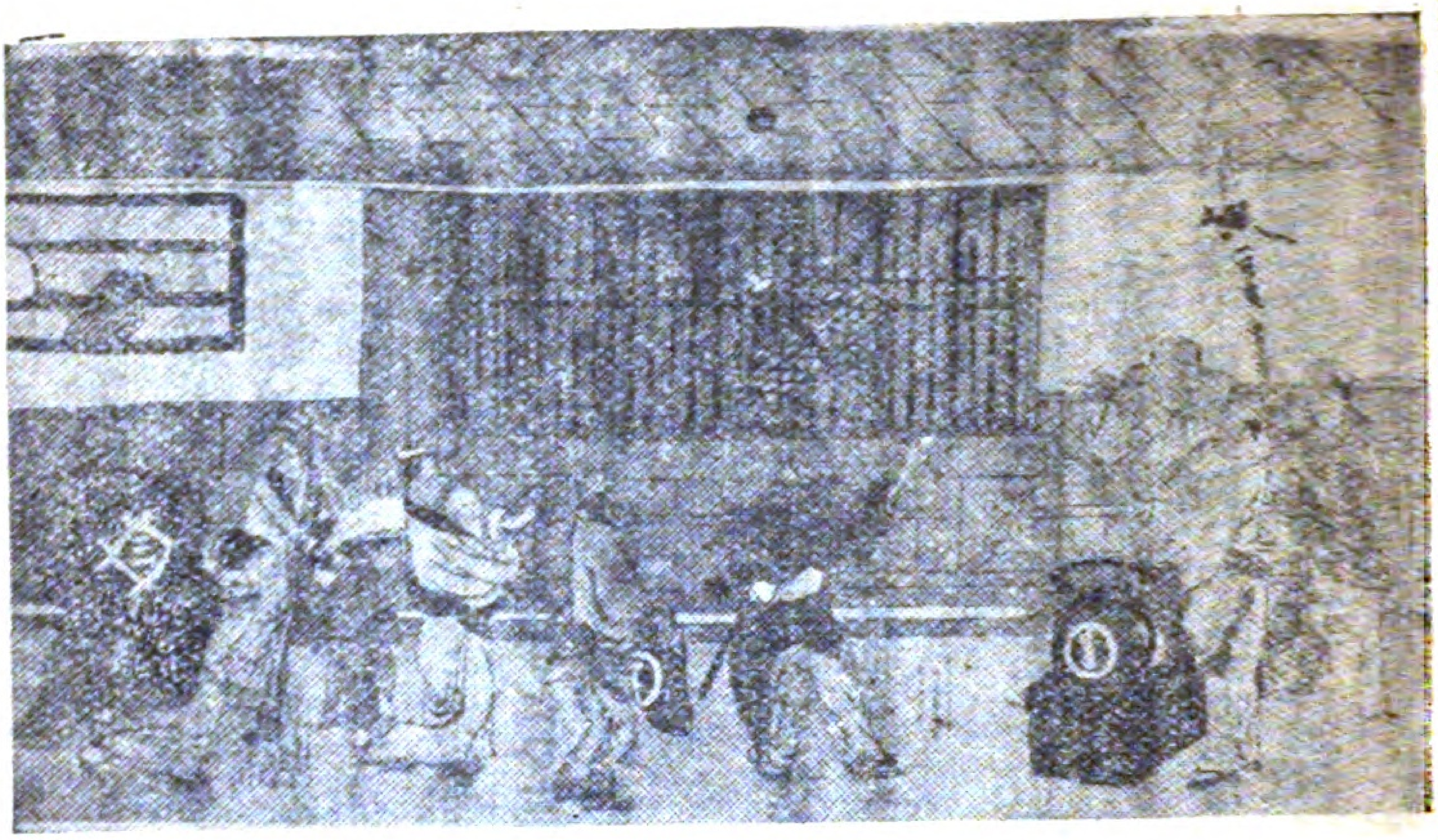
ドガの踊り子を描いたのは何時見ても倦きない、栖鳳の「あれ夕立に」をドガから聯想して、氏がもつとあゝしたものを描かれるといゝなと思ふ。

靜を畫にするのは比較的易い、動を描いて藝術の格を失はぬのは頗る難い、時様風俗畫は靜の藝術で、それとても容易だと云ふのではない、まあ、出來易い部に屬する。動が絕對に必要なのは社會畫で、社會そのものゝ本體が斷じて靜物でない、社會はモデル臺に立たせることも出來ず、描く人の頭腦と腕とが餘程確かでなければ出來ないことだ。

私はいゝ映畫を見ると、あの監督はあれでよく神經衰弱にならないと思ふ。社會畫を描く作家の神經は、映畫の名監督と同じに働かなければ駄目だ、銳敏な觀察、周到な注意、それが缺けたら社會畫にはものにならない。

社會畫なるものゝ私の今までの說明は未だ遙かに充分な理解を與へてゐないかも知れぬ、社會風俗畫を略稱すると始めに云つたけれど、更に詳細には社會事相畫の略稱と云つた方が適切らしい。さう云へば別に斯く斯くの畫樣と說明するにも及ぶまい。社會の萬象悉く畫によつても[illegible]いゝとするのが妥當の態度と云へよう。

藝術を過去に選ぶ場合には社會の事相たりとも、それに歴史畫の部に入るか又は回顧的社會畫とでも云つてこれを別たねばならぬ。こゝに云つて居るのは作者の印象が繪畫や文獻に依つたのでない、直接のものを指してゐるのである。



職人盡畫卷　（鍬形蕙齋）

スタンランの挿畫藝術などは挿畫ではあるけれども立派な社會畫だ、社會畫としては殆んど間然するところのないものだが挿畫と普通の製作とは無條件に一つに見ることは出來難い。スタンランとミレエとを一つに語るのは間違つてゐるだらうが、スタンランの街頭描寫も、ミレエの田園描寫も、もう一つ、降能の宮廷描寫も、一蝶、[illegible]、の國民畫部も、社會畫の見地からしては同一に置て差はない。今では石井鶴三の仕事、四五年前、もつと前だつたか今判然した記憶はないが、夜汽車か電車の中を描いたのがあつた、その當時私は誰かに、浮世繪といふ詞を今までの概念から離れて付ければ、これが眞實の浮世繪だと云つたことがある、其の後？それともその時分か上司小劍の「東京」へ出た氏の挿畫を觀ていよ〳〵その感を深くしたのであつた。

昨年先帝銀婚の御祝に全國官吏から獻上の美術品を拜觀する機會を得たが、その中に數巻の繪巻と畫帖とがあつた、繪巻は悉く當代の社會風俗を題材としたもので、川端龍子描くところの川崎造船場などは中でも尤も印象の强かつたものであり、常にあまりに見慣れた花鳥人物山水の畫帖は、名家の筆にも興を惹かれなかつた。

その時にも私は現在の日本畫の一角に、どうしても社會畫の進出を見ねばならぬことを痛感した。

無機體藝術と有機體藝術。

妙な名だがさういふ感じのすることがある、無機とか有機とかいふのは題材に依るばかりではない、石を描いても畫が良ければ有機體にもならうし、人を描いても死んで居れば無機體になる。けれども大體活きて働く社會と何にも交渉のない材料に依つて製作を續けて行くことに、前途何の不安もないだらうか。山水畫には昔から點景人物を必要としてゐる、或ひはそれと同じ意味で飛禽を描く、只だ磽确たる巖

石に一の生物も無い、月の世界のやうなものになることは避けてゐる。その間の消息が無機より有機を欲する人心の欲求をよく語つてゐる。勿論人の心にはそれと全く反對の、世塵を脱して社會相の累を避くる欲求もある、斯る論を樹つる私は、どちらかと云へばその方を欲する組だが、私はそれを善いことだとばかりは考へられない

東洋藝術の極致は、やはり簡素、幽寂に歸するものであるらしい、けれどもそれは往き盡し、往き盡しして、自づから到り得る境地であつて、一氣に行かうとして行けるとこでなく、又誰もが行かねばならない道でもあるまい。それを思はずにひたすら高い藝術をと志して、當然進むべき途をも、俗だ、卑しいと云つて避けて通るのは決して藝苑の慶事ではない。

最高の藝術は到底社會一般には理解されない、そんなら公衆に解るのは皆俗畫で、藝術として見るに足りぬものばかりだとするか、それも亦た早計であらう。

社會に構はず藝術は藝術で進んでゆく、所謂藝術至上主義を眞向に振り翳して、それで押し通せぬことはなからうが、社會と藝術とは離れ／＼になつて、兩者の間につながりがなくなつて了ふ。凡そ今の世の中で、社會と交渉のなくなつたものが何で強い生存力を把握してゐられようか。然して強い生存力を有たない者に、何で良い藝術が出來るものか。俗衆に媚びるのはよくないだらうが、背くのは更によくない。

藝術の鑑賞は人にも依るが、一所に止まつてゐるものではない、衆愚もいつまで衆愚では居ない、眼が肥えて來れば良いものは自然と解つて來る、最高の藝術が全く顧みられないとは想像されない、藝術が民衆的になつた時、その向上が阻止されるやうに考ふることは杞憂であらう。

今の日本畫の展覽會を觀ると、私の云ふ無機的藝術の多いことよ、たゞ構圖の爲めの存在より他何物もない、社會人に少しの係はりだに無い、その存在は現世を益せず、況して後代に何んの益するところのあるべくもない。浮世繪の中には隨分俗惡なものもある、低劣なものもある、それでもある時代の時世相を觀るだけの興味、又風俗資料として役に立つだけでも、無いよりは有る方がいゝと云へる。

社會風俗畫は描くても何かの役に立つ、それは極く消極的なものゝ云ひ方だが、積極的に云へば藝術なるものゝ定義、見方、それらが根本的に覆へる時が來ても、人間が繪を描く本能だに滅せざる限り、社會風俗畫だけは存在するだらう、何故ならばそれは人間に最も親しいもので、實際生活から遊離しない唯一のものであるから。

社會畫の一派として漫畫の在ることを忘れてはならない、惡ういつたら漫畫家諸君から繩張りを荒しては困ると云ふ抗議が出るかも知れないが、社會畫はユーモアも入用だし、皮肉も惡くない、只だ漫畫の全部がさうだとも云へないのは、社會畫に諷を目的とすることにたい

淸親の「團々珍聞」のやうな、アメリカ漫畫の「親爺教育」のやうなのは、その目的とするところが違つてゐる。鳥羽僧正のやうな、華山のやうな、蕙齋のやうな、あの可笑しさは、笑ひが凡てゞある譯ではない。

チヤツプリンの「黄金狂」やチヤーレス、レイの「我が戀せし乙女」とクリステイ喜劇との差は漫畫と呼ばるゝものにも在るのではないか。

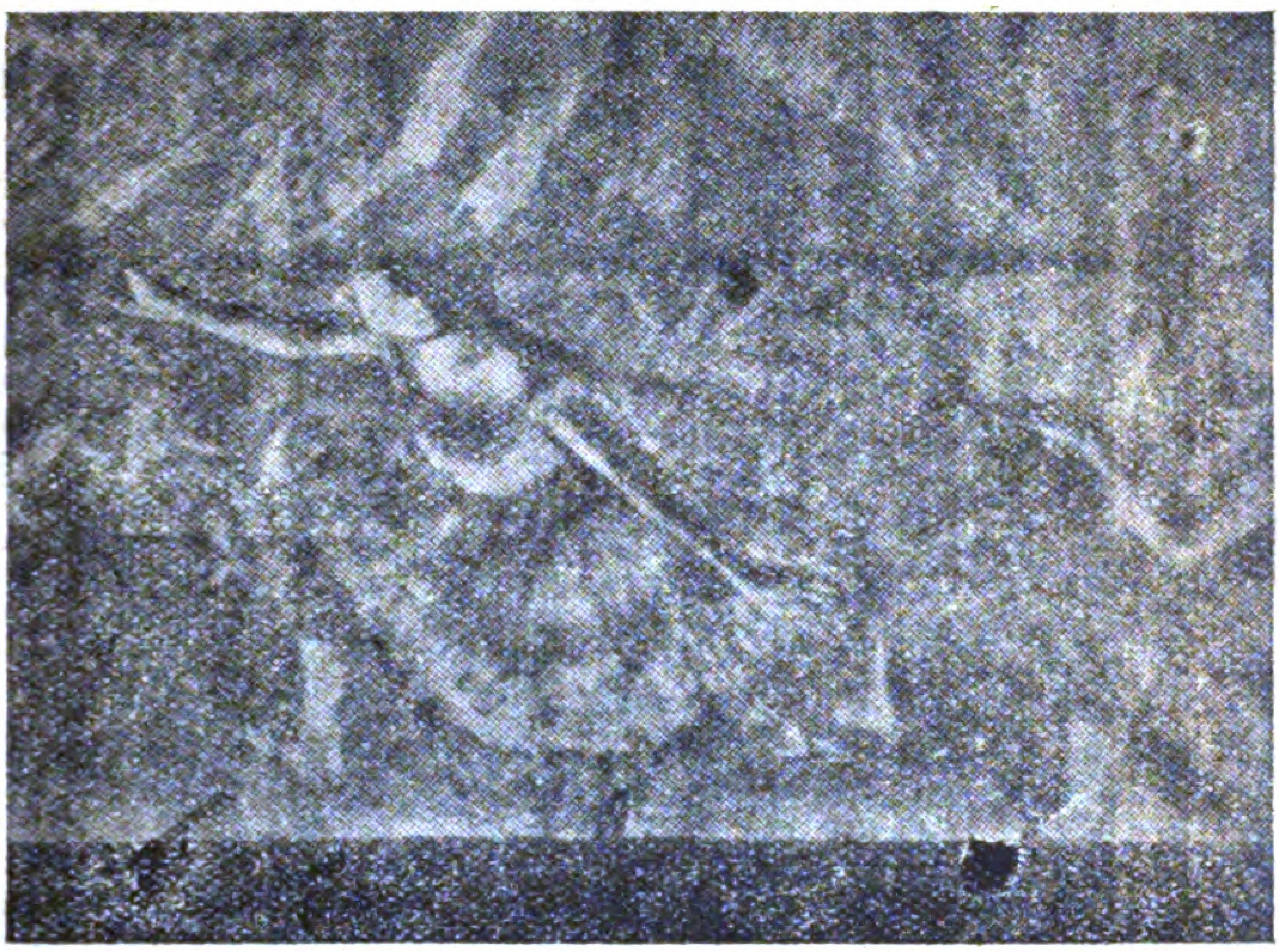
勿論漫畫には漫畫獨自の立場があるだらう、社會畫は必ず諷刺や諧謔を伴はなければならぬのではないが、社會觀察の報告が、往々一致點を見出すであらうことは想像に難くない。

時樣風俗畫も出來るだけ精緻な觀察で、よく時代相の精髓を捉へ、藝術的に良き繪であることを望むのは當然だが、その表現はどんな方法でもよく、主張や理想が加はつて、單なる風俗描寫以上のものとなることは一向妨げないが、それがマネキン式風俗描寫より一段上のものだとばかりは云へない、さういふことは作家に依つて價値が違つて來るのだから。マネエの「露臺」などは別に作者の難かしい企畫もなささうだが、單なる風俗紹介には終らないで、一人一人の人物にも何かしら觀者に働きかける魅力を有つてゐるではないか。

美人畫は風俗畫と一所になつてゐる場合もあるが、その名を見れば解るやうに、その目的は違ふので、全く別なものと見るのが正しいからう。浮世繪以來、風俗畫はとかく美人畫と混同され、又美人畫の方へ進路が傾き過ぎてゐる。美人畫のことは前に本誌へ書いたことがあるから、本編では省くことゝするが、ミレエが農民を描いたやうな、土から生まれた風俗畫も疾の昔に出てもよい筈ながら、地方の人も風俗畫と云へば申し合はせたやうに、美人、然も都會の美人を描く、その心理も察せられないではない、地方人にとつて田舍の風俗は眼に慣れて面白くない、色彩の華やかな都會風俗は一種の魅惑的な興味を惹くので、勢ひその方に誘はれることもあらう。けれども都會を描くのはやはり都會人に如くはない、田園を描くのが生れながら土に親しんだ人でなければ眞實でないやうに。境涯の異つた側の者が見ることが、批評的で面白い場合もないとは云はぬが、その方は特種なことに屬す



藝妓 （渡邊華山）


踊り子（ドガ）

る。

私は九年に亘つて帝展の鑑別に立ち會つてゐるが、毎年二千だの三千だのといふ出品の中から、社會風俗に材を索めたものが一割に充たぬ事實に直面する、その內選ばれて列べられるものはその中の僅かな數である。

若しその中で私の唱ふる社會風俗畫を探すとなれば、その佳作を得るのは容易でない。久しい前に國展に出た、酒井三良の「雪に暮れつゝ正月は行く」と云つたと思ふか、東北民俗を描いて評判になつたのや、帝展で毎回見る福田豐四郎の田園生活描寫、前回の新興大和繪會に出た狩野光雅の、故郷の山河と自分の幼時の追憶を描いたのなど、あゝいつた境地へ筆を進める人が何故もつと出ないのだらう。

美人風俗畫の飾窓式描出も、ある程度までは認容するものゝ、出るのも〳〵、そればかりではウンザリしないこともない、風俗畫の多く列んでゐる會などへ行くと、安香水の香ひに噎せるやうな感じがする。國貞や英泉の美人畫は俗は俗だが息が通つてゐる、見かけは上品で味のないのは一番いけない。ところが展覽會などへ出るのはさういつた安價な上品を覘つたのが尤も多くて、味をやつてるなと思はせるのは極めて稀れだ。

第一今の展覽會に電車や自動車の描かれたこともない、女の繪はあつても職業婦人を扱つたものはない、勿論工場の中、機械の動き、さういふものも描かれない、今日の若い人達にそれらは畫材として何の興味も惹かないのだらうか。

現在の日本畫壇で個々にはその方面への進出を見せて居るのも稀れにはある。團體としては新興大和繪會が、その創立當初頻りに進路をその途に執つて居た、今でも全然棄てた譯ではないやうだが、偶然か非か所謂新興大和繪風の語が、風景畫の冠詞として世間に用ひらるゝやうに、風景描寫に傾いて來た。オットマンの色彩を偲ばせた岩田正巳の「公園」夜の都會の騷きを寫した穴山義平などその成果はとにか

く注目すべき態度であつた。郷土會は私の關するところだから餘り批評めいたことを記す餘白もなし、さう必要もないことだと思ふから記述は避ける。

[illegible]會は社會風俗畫の發展[illegible]てゐる。[illegible]が、その[illegible]

れることを好まぬが、社會風俗畫への進出は寧ろ必然的な宿命とでも云へよう。けれども今日までは未だこれと云ふ進展を示して居らぬ。伊東深水は社會風俗畫の第一線に立たねばならぬ者、先年郷土會に出した森ケ崎の風景、帝展に出した「晝下がり」は作者の觀察を尤もよく語つてゐた。現今「朝日新聞」に續出してゐるその挿畫を觀て、[illegible]は彼がスタンランの如く、手に應じて片端から社會描寫を試みて行つたら愉快だらうと思つた。

個人のこの方面の作は尠いと云つても多少はある、[illegible]畫家と云はれてゐる人にも相當あるけれども、今一々それに就いて[illegible]



露臺　（マネエ）

[illegible]

尙ほ二三、足らざるところを補ふと、古代には上流、中流、下流の別ちなく、その生活は描かれてゐるが、德川時代になると殆んど庶民の生活ばかりしか描かれてゐない。これは畫を描く人が自分の觸れることのない生活は描けなかつたのと、士分、殊に大奧や大名の生活などは畫にすることなどは思ひも及ばなかつたからであらう、これからはそんなことの無いやうに爲たいものである。

次に桃山後期と云つた頃から以後の作、浮世繪の殆んど凡ても、題材は享樂生活から一歩も出てゐないと云ふも過言でない狀態である、勸善懲惡を唱へるにも及ぶまいが、人生は享樂ばかりでもあるまい。

前にもちよつと言及してはあるが、これから社會風俗畫に進まうとする人は、浮世繪の傳統を離れて、德川時代では守景とか、一蝶、華山、などの仕事を窺ひ、桃山後期の諸作から、古大和繪を一わたり現世の社會相と合せて見直す必要がある。

古人と今人とを共に語る上で、今人にのみ敬稱を附するの丶不合理なるを思つて、これを省略した、大方の寬恕を乞ふ。(完)

雪が消えて、春へ！

金子洋文

一

私の郷里は秋田の土崎港だが二十年前は可なり繁昌した河港だつた。父は六十三才で去年亡くなつたが、船夫からたゝきあげて、私が十才の頃は附船廻船問屋をしてゐた。

多く取扱つたのは越後船で帆前船は二三を數ふるだけだつた。積んで來る荷物は、南國の塗物、傘、瀬戸物、甘藷などで私は美しい塗物と傘の匂ひに憧れを刺戟されたものだ。

無茶に儲かつたものらしい。

船商人の一人で酒に醉ふと、（金錢の置き所がない）と往來を叫んで歩いたと言ふ位だから………、ところでその利潤が何處から來るかと言ふと、近在の百姓で河の下流に住む、人々の懐を搾り取つたものだ、これは極端な例だが、米俵を滿載して來た河船に十疋の鰰を積ましてかへしたと言ふ………その搾取ぶりは昔も今も同じである。

鐵道がかゝつて以來、港は急速度で衰微して行つた、今日では石油會社と鐵道院工場で多數が漸く生活を支へてゐる有様で、その昔、船舶ではびこつた商人連中は見るかげもなく落ぶれて、夜逃げしたものも少なくない。

土地の有力者はこゝ數年來築港で狂奔してゐる。漸く昨年度からその運びになつたがそれが、ことごとく黨勢擴張に利用されるので醜状眼もあてられない、、、が運動のため藝妓を連れて上京する、十日間の滯在費千數百圓、税金が高くなる、資産家は他所に移住し、中産階級は團體をつくつて町會へ捻ぢ込む、勞働者は困窮のどん底にたゝき込まれ小作爭議は頻發し、はげしい鬪爭がつゞけられてゐる。………さうした生活の上に、今、四十年ぶりの冷寒と吹雪がおそつてゐるのだ、母の手紙に、

（……父の百ヶ日もすみまして私は實に安心いたしてゐます、今年は

珍らしい雪と寒さで皆困つております、漬物もなれません、鰰の壽司もまだ食べられません。湖のチカ（わかさぎ）を送りたいと思ふても、それさへ獲りに來ませんからもう少しお待ち下さい……」

二

三月半になると、氷柱は落ち軒下に積つてゐる雪の山が次第にくづれて、雪に直射する陽の光を手でさへぎりながら、挨拶する日が多くなつてくる。

風は相變らず冷たいが、その底に戯れ、微笑みかけるものを感じる。

雪が降る、それから霙、雨、……（オヤとう／＼雨となりましたね）と喜んでゐると、夜になつて吹雪となつたりする。

雪……今度は霙でなくて雨、雨、雨……。

「御物川に行つて見ましたか」

行人の聲が嬉しさうにひゞく。

「いや……」

「氷がさけて流れてゐますよ。」

それは哀感をともなふ眺めだ。

子供の頃自分等は夢中よく鈎へ鰰の頭をくつつけ一匹を釣つたものだ

だから氷が流れ始めて一その遊びを想ふことは甚だ寂しかつた、自分等は河岸に立つてピーンとひゞく金屬のやうなその音をきゝ、きれいな水にゆら／＼流れて行く氷の姿をいつまでも見送つて語り合つたものだ。氷は海へ流れて行く、やがて浪をけつて北海道から鰊船がはいつてくるだらう。子供等の新らしい仕事――盗みが始まるのだ。

今、食物のない港には隙だつてやつて來やしない、河岸には子供の生活はない、氷を見送つて哀感をおぼえ、鰊船の幸福を思ふものは、過ぎ去つたゼネレーションである。

三月末になると軒下の雪がすつかり消えて、泥によごれた根雪の下から新らしい土が、眼を出す。

これは誰にとつても歡ばしいものだ。陽は照る、永い間雪を吸ひ込んだ土からはゆら／＼と陽炎がたつて新鮮な土の匂をおくる、それは處女を見、處女に接する感じに似てゐる。かうしたうれしい日は三四日、ある時は一週間もつゞく、そして水氣がすつかり蒸發してしまふと、郷里では草履路と言つて、足から春を迎へる、そして夜、町内の男女が東西に分れて賑かな綱引を始めるのだ。

三

以來、秋田は食べることに苦勞する所である、ことに（港の大食ひ）と言はれるほどで、飽る達者な人間が多い……と言つたところで貧乏すると食ひたくても食へないのははつきりしたことで、十年前は食へなくなつたものはどんどん北海道へ落ちて行つたものだ、鯡や鱈

を手摑みでできるのと宣傳された北海道へ行くとうんと食ふことができると思つたものらしい。

今でも北海道やカムチヤツカの漁場へ稼ぎに行く人間は多いが、十年前とちがつて一家がうつつて行くのでなく、ある期間だけ稼ぎに行くのだ。資本主義そのものが國境を越えて聯結されてゐるのだから、樂をして大食ひのできるそんなうまい所なんぞあるものでない……が、港の人間は何處か空想に醉ふ天分を多量にもつてゐると見え、今では築港ができさえすれば皆が幸福になつて二十年前のやうに大食ひができると思つてゐる、その誤解を我々無産黨の仲間が嚙み碎くやうにして說いても、少數の勞働者をのぞいて理解せうとしない、その大食ひを夢見てゐる多數は小商人階級である。

秋田特有の食物に貝燒といふものがある、これは帆立貝のいゝちり料理であるが、今では貝の代用にアルミの鍋を代用する所が多い、これはあらゆる階級を通じての常食である。

その種類を階級的に區別して見るなら、

ブルジュア――　材料、鯛、白魚等の高價な魚に、豆腐、葱、蕈菜を按排して、醬汁や醬油で煮て食べる。

プチ・ブルジュア――　鰈、小鯛、鰺、鯖、等に前記の野菜をとり入れて煮て食べる。

貧乏人――　鰯、干鰊、鹽鮭に、豆腐野菜を入れて、鹽汁、味噌で煮て食べる。

から、三種別に分けたものゝ、別段はつきりした區別ではなく、ブルジュアでも干鰊の貝燒を食べることだつてある。

每夜一升二升と母が吹雪の中を米屋に通つた貧窮時代でも、私は每日貝燒を食べた記憶がある、今日プロレタリアはさうもできまいが、借金で首のまはらん小商人階級でも、每日貝燒で御飯を食べてゐるし、世間でもそれを贅澤と思つてゐない。

秋田で春を迎へる食物は鰊である。今日港は衰微してゐるが、それでも、御物川の氷が流れてしまふと、每年三四艘の鰊を積んだ汽船が沖にかゝる。そして町中は鰊を燒く匂ひに充滿すると言つても誇張ではない。

東京では鰊は下の下の食物で、事實まづくて食べられないが、帆前船が積んで來る鰊の味はまた格別である。丁度船にゆられて來る灘の酒がうまいと同じやうに…………。

が、酒にもいろ〳〵あるやうに鰊にも差別がある。第一に漁れる海のちがひである、北海道物、樺太物、カムチヤツカ物、等々、このうち北海道ものが一番うまいことは言ふまでもない、また北海道でも余市邊のもの(これは明言できない)がいゝらしい。

汽車で運んでくるのは下だが、汽船より帆前船がいゝ、それよりも一番重大なのは鹽の質と鹽加減である、私の子供の頃は丁度上々のあいゝらまきに等しいうまい鰊を食べられたものだが、今日ではさうした鰊

はほとんど食べられない、味なぞ考へないで、營利的に惡い鰊でからくつけて來るからである、それでも港の人間には大鰊を一度に二三枚燒いて食べないと、春の氣分がしないと廣言する者がゐる。

四

ある小說の中で少年時代の春を私はかう書いてある。

ある日町の人々は河岸にたつて氷のながれて行くさまを眺めてゐた。

いよ〱冬の別れが來たのである。

それは三月も雪と氷にとざされてゐる町の人々に大きな歡びにちがひなかつた。が、氷塊がわれてゆら〱海へながれて行く情景には淡い寂しみが漂ふてゐた。

まだ冷たいが、春の匂ひをふくんだ潮風が毎日町の上を吹いた。雪解に淨められた土が陽にあたゝめられて高いかほりが町をみたした。

春！

そして次に人々は青い波を越えて、河にはいつてくる鰊船を待つた。

思ひがけないことであつた——。

船は河口一里の沖にかゝつてゐるが、誰もその船名を知ることが出來なかつた。

廻船問屋のうちでは金虎の望遠鏡が長崎から買つてきたもので一番たしかなんだが、それで見てさへ何丸か、何れの廻船問屋に來たものか判明しなかつた。

すべての廻船問屋が狼狽て出した。

大事件である。

なぜなら、春になつて初めて入港つて來たたつた一艘の鰊船である、定約の一分の口錢でも土藏が一つ建つといふものだ。

古川町はひつくりかへるやうな騷ぎであつた。船を呼ぶので平素から聲が大きいが、その大きな聲と聲とが町の上でぶつかり合つた。

各々の廻船問屋で傭つてゐる艀艇乘連は、それ〲用意をとゝのへて河岸に馳けつけた。

艀艇が水に下りた。

帆柱がたつた。

強い風にひるがへる、青、赤、緑さま〲の旗の色！

初めは五艘同時に河岸をはなれた、四五分おくれて二艘、それ等の船が中流まで漕ぎ出すと、それ〲帆をまきあげた。

新らしい帆！

古いよごれた帆！

それ等の五つの帆は風を一つぱいはらみ、かゞやく陽の中を海に向つてすべり出した。

猛然たたのもしい船のレース！

河岸は町の人々で一ぱいだつた。利害の伴ふ者、伴はない者の區別なく人々はそれぐの船に向つて聲援した。

先になり後になり船は遠ざかつて行つた。その度にどよめきが河岸におこつた、そして五つの艀艀が河口を出る時には、何れが前後してゐるか肉眼では判別することが出來なかつた。

今ではかうした春のレースなぞ見られない、鷗も寄りつかない港に見知らない鰊船なぞ來る筈はない。

十一月の聲をきくと、水に對する私の感覺は凍りついてしまふ、どんなに條件がよくても樂しむことはできない、江戸時代の人々が炬燵のはいつた舟を浮べて酒と女を樂しんだ心持は充分理解できても、寒い水の冷たさが空想の樂しさを凍らせてしまふ。

これは寒がりの性情のみではないらしい、なぜなら、氷や雪がとけそめるまだ寒い頃の水の流れを見ることは、初夏に飛瀑を見る樂しみにもまして私をよろこばすからだ。

その頃の河水の色は濁つてゐながら、きよらかな感觸を傳へる、そして冷たくまた暖かい……ある種の女の連想を呼び起す眺めである。

私は水そのものより流れを好む、自然海や湖より、河水の趣きが多く樂しめる。しかし、湖水に訪れる春の美しさはまた格別である、ことに八郎湖には、うまい食物があるので一さうなつかしく思ひ出される。

その八郎湖を、、、の利權屋共が埋立てやうと今血眼になつてゐる。それと對立して湖岸漁民に對する小船税、網税、漁業税撤廢の運動が、無産黨に依つてはげしく鬪はれてゐる。

かつて、我々藝術家は無關心に四季を送別し、これをうたつたが、今日ではそれはできなくなつてゐる。

銀色におほはれた八郎湖を思ふ時、吹雪にふきまくられて湖水を渡る同志の姿が、眼にうつる、また、美しい春の湖水を思ふ時、××を立て、對岸の爭議に向ふ同志の舟が眼に浮ぶ。

しかも、それ等の鬪爭とかゝはりなく冬去り春來る。

われぐは心を小さくし、また大きくする。

雪が消えて春が訪れる。

やあ、いゝ氣持だな！

支那は動く（完）

前田河廣一郎



16　雨花臺行

情緒と景色を捜がして歩るく梢風君と、南京で特殊な支那研究をしてゐるK——君と、三人で、小雨のそぼ降る中を、雨花臺と云ふ山へ登つた。雨花臺と云へば、支那の封建的歴史に興味を持つ人達が、漢語づくめで賞めちぎる場所になつてゐる。

『見おろせば金陵百里風さむし、たれかまたここに都たつべき。』

佐々木信綱といふ人の歌である。この帝王主義的悲壯美を表現した歌を、そのままに受取ることは、モダーン南京を美化する所以ではないのである。私達は、この金陵百里の間に、いろいろな近代資本主義の建築を見受けてゐる。五階も六階も地價を暴騰させて置いて、政府の要人である蔣介石や、中央建設委員會主席である張靜江や、市長劉紀文などが、南京地產公司といふ土地會社を經營しにこめたなどといふ報告があるだけでも、いかに何百萬といふ人間を犠牲にしてここで首都を再建することにまで漕ぎつけた南京政府下に、これからどれほどの社會的犠牲が、金陵百里の新しい土臺石として埋められねばならぬかを暗示するのである。

が、ともかくも、約束は、雨の雨花臺を眺めようといふことだつたので、私達三人は、濡れた兵隊と、夥しい人力車と、無數の失業者の群とを掻きわけて、その山の麓で黄包子から下車した。

降りると、すぐ、もう特有の貧民群に包圍されるのである。但し、ここの貧民は、めいめいに籠の中へ瑪瑙の粒を入れて、客に押賣りしようと云ふのである。彼等と乞食との間には、たゞ戞々と鳴る、そのろくでもない小石が介在するだけなのだ。

山のてつぺんには、石造りの一堂宇があつて椅が毀れて雨に打たれてゐた。私達が山の上に立つた姿を見受けると、下から、中腹から、やはり[illegible]がかや〳〵云ひながら競爭で追ひ登つて來るのである。

「まるで、乞食を見に來たやうなものだね——」

私達は苦笑した。

現實の支那にも、外國の壓迫にも殆ど無感覺で、たゞ日頃拾ひ聚めた小石を、若干の銅片と交換することだけを知つてゐる、これらの魯鈍な、同じやうな襤褸を着て同じやうな表情をした大人、男の子、女の子達の姿を見てゐると、そこには、ブルジョアが如何に欺し騙つて犧牲にしても、消極的な覺醒手段では容易にめざめない數千世紀間に結晶した『無智』の岩盤が横はつてゐるやうな氣になるほかはない。

私は景色を見ることにした。しかし、どこを見廻はしても、佳い眺望などといふものは見當らない。下の方の小徑には、跛婦が二三人、柴をかついで驢馬の方へ、躓むさうに歩るいて行く。小丘の下には、剝された墓や石がごろごろしてゐて、枯草の上に雨が濺いでゐる[illegible]あてない小徑が、動物の脊のやうにまるく隆つたところには、支那[illegible]墓があつて、人間が住んでゐるのかゐないのか、わからない[illegible]

[illegible]

は、雨花臺の中腹に、三つ四つ蒲團のやうに蹲まつた小高い土饅頭が置かれてあつたことだ。これらが、支那兵の墓であることは、[illegible]に教はつて知つてゐた。そして、[illegible]はあつたらうが、その當時、[illegible]を、暗らい氣持で憶ひ出し[illegible]

その記事は、[illegible]

衞戍司令部では、[illegible]

にあるこの[illegible]

私は、[illegible]

17　[illegible]

[illegible]

十九歳の同年だし、戴天仇と何應欽がこれも三十八歳の同年で、國民政府の財政をどうにか切り廻はすと思はれる中央銀行總裁の宋子文が三十五歳である。野心家と銘を打たれてゐる白崇禧は三十六歳で、その他武官連のちよつと名のある人間でも、四十を遠く越したものは、あまり現在の問題にはなつてゐない。

かう擧げて來ると、要府の老人達と云へば、吳稚暉（六五）、蔡元培（六二）、譚延闓（五四）それから馮玉祥の四十九、王正廷と閻錫山の四十七歳が、元老株であらう。しかし、これは年齢からだけは判斷出來ないことでもあるし、又、この統計の若干は支那側の人名錄から掲げたのであるから、支那人流の正確さ以外には保證し難くい。

共產黨や左翼の方にしても、譚平山のやうな老人株は、近頃はとんと零落して、第三インターナショナルから除籍されて、中華革命黨などといふメンシエヴイキ黨を拵へてゐるし、陳獨秀も老人、陳友仁なども五十一歳であり、程潛は四十八歳、わづかに汪精衞や陳公博がさほど老人ではないといふだけで、現在の共產黨の如きは、殆ど無名の靑年闘士が組織の各一員として働いてゐるのである。

かういふ若手揃ひの支那の政治的運動者と、ブルジョア、プロレタリアを問はず日本の政治的運動者とを比較して見るならば、むしろ日本の方が總體で老人を無理に起用してゐる傾向が見え過ぎる位である。そこに、政治に對する、現在の支那と日本との間に、見解のひらきが段々に出來上りつつあるのではあるまいか？

東京の市長に、上海特別市市長の張定璠のやうな、わづかに三十七歳の壯年者がなつたとすれば、恐らく鬚と脂肪と金鎖の十五區の市會議員によつて唯無意味に笑ひのめされてしまふことだらう。

老廢しかかつた日本の外皮はいつになつたら剝落るだらう？

18　綿打小僧

私は、時折、その音響に魅せられて、支那人の家庭工業の一つである綿屋の前に立つて見ることがある。

この店は、支那人の騷がしい店屋々々のうちでも、最も巧く廣告術を利用する店であらう。それは、もう、その音だけで、立派な看板となるのである。とすると、誰がそんな物音を立てるのか？――

大抵の場合、それは二人の少年徒弟によつて起こされる物音である。うす汚い小店に、無表情な顏をした二人の少年が向ひ合つて立つてゐる。二人の間には、卵白を極度に攪拌したときのやうな綿が積はつてゐる。彼等は、その綿をめがけて、めいめいの肩へ釣るした弓狀の綿打機を、びんぴん間斷なく打ち卸ろしてゐるのである。

彼等がかうしてクリームのやうに柔かにした綿は、白いふくよかな商品の包となつて、その邊の棚の上に積まれてある。この手工業で丹念に打つた綿が、二十萬錘とか十萬錘とかを誇る大量生產主義の紡績工場の產物と、どんな競爭をするかは、ここに穿鑿の餘地がない。何となれば、一方の量は、あまりに少く、一方の量は壓倒的に多量であ

るからである。

だが、問題になるのは、これらの二人の小さな勞働者が、見受けたところ、殆ど一日半夜はかうして綿を打ちつゞけてゐることである。一見、彼等は、八時間勞働制も強求してゐないし、晝餐休息の三十分も與へられて居らない。それから、特別に公休日と云つては、正月の二三日間ぐらゐしか與へられないであらう。——支那に綿のある限り、彼等は打ちつゞける心算でゐるのだらうか？

次には、綿から飛散する、無數の綿屑である。これに對して、この少年徒弟達はマスクを供給されて居るわけでもなく、特別な何かの設備をして貰つてゐるやうでもない。人間を殺ろす黴菌が問題にならぬとすれば、彼等の足である、腰である、腕である。間斷なき一定度の運動の人體に及ぼす疲勞の程度が、變化ある別種の諸運動の與へる刺戟よりも甚大なことは、生理學的に說明されてゐる。しかし、この煤ぼけた、騷がしい支那人の店では、生理學は教へないのである。

次には、かういふ徒弟は、殆ど給金などは貰つてゐないといふ事實が出現する。

それと同時に、支那にある限りの綿を、この二人の少年徒弟に打ちに打つて、打ち斃れるまでも打たせようとする店の主人は、つい眼と鼻の距離に聳えてゐる外人經營の紡績工場の何であるかをさへ知らぬのである。

ただ、私は、これらの綿屋の小倅が、時折顏をあげて、表通りに立つてゐる私のやうな外國人を見るときに、そのどん栗のやうに無表情な顏面から、きわめて激烈な表情が閃めいて、同僚に何かを呼びかけるのを目擊するのだ。言葉は、一種の反射作用であるとしても、その表情には爭はれぬ何物かがある。そのときの彼等は、踏み碎かれたキユーピーの顏である。

いつか、毀はれたキユーピーの大衆が、原始的な綿屋から、紡績工場の方へ驅け出すかも知れない……。

19　少年の組織化

四一二日と、四一五日とは、それぞれの日のクーデーターによつて、上海の勞働者が終生忘れようとしても忘れられない記念日となつてゐる。その前後に工會やその他の方面で、逮捕された人間は二千人からあつたが、その中に私達の注意を惹くことは、澤山の少年が居つたことである。それからあと一切の工會的運動は、地下に潛伏した。そして、「童子團」組織も、一千人の少年鬪士を有しながら秘密組織となつた。又、五月二十一日事變の前に、湖南湖北地方では、農村の童子團が、南に三萬、北に四萬、合計七萬人からあつて、一般軍隊に代る役目を果した。それらは、貧農の子弟が多く、その他は小店員であつた。小店員は、從來の封建的商業組織下に、全然奴隷と同じ境遇に在つたところから、非常に團結力が強く、それに彼等自身の勞働意識を日常の生活の上に持つてゐた。この七萬の童子團の活動のために、

兩湖州の惡店主や人買ひ業や親方は、在來までの奴隷制度を改正しなければならなかつた。

武漢の童子團は、夏斗寅が叛逆したとき、毎日四百人づつ交替に市内の秩序維持の任に當つた。のみならず、その看護卒としての活動振りは實に婦女團體も及ばぬほどであつた。こんな具合に、その當時の童子軍の活躍は深く小資本家や店主の怨みを買つた。彼等は、この恐るべき少年軍に對して、各種の流言や虛構をもつて國民政府に訴へた。そのために、汪兆銘すらも、童子團から棍棒と制服を取り上げ、その組織の改造をなすべく餘儀なくされたさうである。

先達の、廣東三日占領の鬪爭に於ても、臨時學生同志の組織した、一班五十人づつの『少年先鋒隊』が、花々しい活動を示した。

支那に、二つの階級の對立が彈丸と煙硝のスクリーンの間から、次第にはつきりして來ると、そこには、勢ひ、少年大衆の爭鬪戰も開始されて來るわけである。——少年は、單にこれからの社會を構成する有力な人員であるだけではなくて、彼等自身が虐げられ酷使されてゐることによつて、自ら不平を持ち、自ら組織を編成するに到つたことは、正にセークスピーアの

『子供は人間の父である。』

といふ、妙な句をも、合理化してゐるのである。現に上海の工人の二十五六才になる或る男は、組織が完備してゐるから、俺を童子團の中へ入れて呉れと願ひ出たほどであつた。

そこで、ブルジョア側では、どんな組織編制で、幼年徒弟や少年工や農村の小農奴大衆を、自己階級の方の味方につけようかとして苦心してゐるかを見るのも一興である

勿論、その眼目とするところは、社會改良主義的見地から、彼等にプロレタリアートの政治を見せまいとする點にあるのであるが、その手段方法には、各種の教化施設が必要とされるわけである。その顯著なものには、基督教青年會の編制する少年團もあり、公立、私立の支那學校が率先して、スポーツ訓練や娛樂の甜味をもつて無邪氣な彼等を釣る童子軍組織もあるのである。それから、勞働組合運動にも、この童子軍の編成が行はれて、一部では調法がられてゐる。上海の日本人でさへも、少年團を持つてゐる。

次に、さういふ形式をそつくりそのまゝロシアから借りて逆用してゐる國民政府では、『中國國民黨童子軍編制系統』を作つて、十二歲未滿の少年を幼童軍と呼び、十二歲から十八歲までは童子軍として黨の訓練下に置くことに決定した。その編成は、六人乃至九人を一小隊と唱へ、正副の隊長を一人づつ置く。二小隊以上は、一團と云ひ、正副團長を一人づつ附添はせる。三團以上は一師となり、三師以上が一軍——といふ風に、全くの軍隊組織で、これら軍團長以上の軍官は、中央執行委員會訓練部の司令を請ける。これは『三民主義の革命青年を養成し、國民革命を完成する爲めの』必要な教育であるさうである。

これらの童子軍は、一定の標準によつて政府が選んだ訓話を、その

図書館に於て讀み、政府の出版する各種の出版物に眼慣れることによつて、完全に國民黨たるべき資格を備へる約束になつてゐる。だが、これは約束であり、組織系統である。果して、勤勞の支部に於て、[illegible]ブルジョア・デモクラシーを、これら少年の頭腦に注入し得るや否や、もつと見なければわからぬ成績である。

ここにはつきり對立して來る二つの少年團の存在が、一は[illegible]組織により、他は現實の貧困と搾取制度から來た[illegible]の影響に從つて、次第に「人人」の關係にまで[illegible]れるのは、[illegible]支那幼少年の背後に動い[illegible]

[illegible]

[illegible]人

[illegible]

遂に二小隊の軍人が武力でその亂入軍人を引率して行つたといふ事件がある。

これなどは、寧ろ滑稽な方の例であるが、戰時から平時に急激に轉換された軍人が、しかも、國民軍の北伐的名目のために『革命軍』の名を北平まで持續してゐた關係上、その殺伐な戰鬪心理を、政府の引戻し政策とは別に、國家の非戰鬪員の上に適用しようとするのは、物理的な滑走力を持つてゐるほどの自然現象である。これに對して、國民政府は平時撫邮暫行條例を持ち、更らに裁兵會議でいろいろと方法を講じつつあるやうだが、『軍人必讀』とか『軍人須知』とかいふ本に職業軍人的精神を十分に皷吹されてゐる彼等を、歸農、築路、開墾といふ方面に轉化しようとしても、せいぜい現在のところでは、この頃孫科君の提出した道路改築及び延長案ぐらゐの方面にしか採用し得ないのではあるまいか？

この裁兵上の成果如何は、共產黨方面でもかなり注目してゐる政治的樞機であるらしい。現在は全國的尺度をもつては計ることは出來ないが、兩湖、江西、廣東地方へかけて頻りに蜂起してゐると新聞紙に報告されるパルチザン的暴動などの構成要素に、幾パーセントかの軍人（非共產黨の）が交つてゐるとしても、それは強ち二百萬の者を五十萬にまで淘汰する數字の上の計畫の、アルキメデス的な汎濫の原理とのみ見ることは出來まい。軍人の破壞性は、除隊と同時に、社會にむかつて集中される。

21 時計

青年男女の腕時計は、かなり裝身具の一つとして幅を利かしてゐるやうである。

しかし、それが現在の支那の青年男女に、どれほど『タイム』の觀念を與へる機械としての必要が痛感されてゐるかは、私達の疑問とするところである。上海の街路を歩るいてみて氣のつくことは、時計といふものの缺乏である。海岸通には、貿易港としての國際的必要から、稅關ビルヂングに大時計があり、それからこれも時間に支配される役所の一つとして郵便局にも時計臺がある。そのほか、總商會館に小さいのが一つ――北停車場にはないといふ始末である。ちよつと混み入つた市内へでも這入れば、私のやうな時計を持つことの嫌ひな習慣をつけてしまつたものには、時間を正確に知るまでには、よほどの骨を折らねばならない。

組織からしてモダーンな居住をでも覗かなければ、時刻の正確不正確を問題にせずとも、時計がないのである。唯、學校だけは例外である。

もし私が、普通の支那人と普通の會話の出來るほど支那語に通じてゐて、假りに街頭で今何時ですかと訊ねたとすれば、

『日既に正午』

とでも返答されるのではないかと思はれる。それほど一般支那人は

民國政府が、陰曆を太陽曆に改めてから、もう十八年になるのだが、その『新國民年鑑』のやうな三十人の新人によつて編纂された年鑑でさへも、十二頁を費して、舊曆の印刷に從事してゐる。それには支那式な干支と、例の迷信的な『諸事不宜』とか『宜取魚』とか、人間の行動を誰かが高いところから縛ばりつけるやうな指令が書いてある。

つまり、今日の支那人は、外國人殊に歐米人に接觸する半面では、やむを得ず時間といふ觀念を持たうとするが、さうしなくとも濟む場合には太古以來の時の觀念で間に合して行かうとしてゐるらしい。しかも、この一見保守的で非科學的な生活は、更らに保守的で非科學的な商業制度や農本位の社會經濟組織から出發してゐるのであることは、支那を硏究する人の見遁し難い社會的情勢である。

商店や農村は、今でも太陰曆を使つてゐて、一年を踏靑だの、端午だの、月半だの、年關だのと、繪畫的な文字で區分けして、その季節に應じて御祝ひや、商取引の決算などをすることは、實に草深い感じを人に與へるのである。

つまり、かういふ時間の觀念の前には、ウオルサムもハツードも、李白や杜甫の詩には適はないのである。杏の花が咲いたから二月である、三番鷄が啼いたから朝である、麥秋であるから何——と云つた農村生活が、つい壁の外にまで迫まつてゐる經濟生活が、實に普通都會

しかしながら、私達は、上海の繁華なショウ・ウインドオの前に立つて、田舍から出た農民家族が、よく自動的に動く螺旋形のサインや、小さな活動寫眞や、明滅する電氣サインなどを、あつけらかんとして眺めてゐるのを見受け、科學的文明の特長の一つである『動』の觀念が、彼等の頭腦に次第々々に沁み込んで行つて、いつかは、その『動』の基底的因素である『時』が、彼等の生活に深く刻まれて行くであらうことを想像する。或る馬賊は、都會で活動寫眞を見てから列車襲擊を思ひついたといふ話である『時』の觀念の生長は、空間的縱列である現在までの支那の社會相に、秩序と組織化と統計とを與へるであらう。やがては、そののべつ幕無しの芝居にもテムポの制限が行はれるだらうし、三年越しに長江を下つて來る二里や三里の長さの筏も、モータアの利用を思ひつくことだらう。社會の各方面に漲つてゐる無限の勞働力の濫費も、その時には組織化によつて集中され分散されることであらう。時計を見ない方の支那の半分と、時計を見る方の支那とは、必要上、だんだんに利害を一にして步み合ふにちがひない。機械は、その必要を中心にして廻はるだらう。

龍華閑廟と云はれる陽春三月に、龍華の桃の花を見てゐる支那人の家族が、米國製の飛行機を空のどこかに發見して、——中間の無い、古代と近代との間に急に突落されて、無意識に悶えてゐる自分達の二重心理を自覺しないだらうか……？

22　ロシア領事館

もつとも目につきやすい場所に、もつとも目につきやすい狀態にあるのが、上海に於けるロシア領事館である。ロシア領事館は閉ぢてゐるのだ。家屋や建築の閉鎖狀態にあるものほど、都會人の神經を刺戟するものはないのである。――それは、一昨年の十二月から、ずうつと空屋になつてゐる。

最初、何氣なくその建築の前に立つたとき、私は、黑檀の卓子のやうな色の扉に、その扉の大きさを證明するほど大きな鐵の錠がおろしてあつて、更らに錆びた鎖の絡らんであるのを見て、この忙しい上海に、何と閑なビルデイングもあるものかな、と振り仰いだ途端に、上部に半ば缺けた鎌と槌との交叉を發見して、端と何かにつまづいたやうな氣になつたものであつた。

瞻あげたところ、この宏壯な帝政ロシア式建築は、その建築樣式に於ても、嚴丈な鐵柵に於ても、近代的なビルデングスの間に、一小クレムリンの觀があるのである。しかも、建築全體は、固く內部に包藏した空氣を守るやうに、絕對秘密主義を維持してゐる。

私は、何故、この鎌と槌が半分缺けてゐるかについて、友人から次のやうな話を聽いた。

革命十周年記念日に、この領事館は、赤旗を揭げ、赤い裝飾を施し[illegible]勞農市民も、ロシア領事館の革命記念日が賑かなところから、見物がてら、アスター・ハウスの前に集つてゐた。

すると、どこから來るともなく、群集に紛れて忍び集まつた武裝した白系ロシア人の群があつた。彼等は、次第々々にその數を增して行つて、いつともなく見物人の間には、白露派の諸說が飛ぶやうになつた。――武裝した白系ロシア人は、しまひには、五百人からの人數になつた。

ぴん〳〵！

最初の一發から、英國軍人のやうな服裝をした白系ロシヤ人は、領事館めがけて、突擊を開始した。館內は水を打つたやうに鎭まりかへつてゐた。吶喊しながら白系ロシア人が闖入しようとすると、ピストルの音が館內の沈默を破つた。狙擊者は、もう一度後退して射擊を開始した。誰かによつて、赤旗がずたずたに引裂かれた。鎌と槌とに一發の彈丸が當つた。しかし、勞農ロシア領事館は、五百の白露軍によつて占領するところとはならなかつた。

だが、その十二月には、缺けた鎌と槌の紋章を殘したまま、もうソヴイエット代表は上海を引上げてしまつた。そして、今日、ガーデン・ブリツヂ、蘇州河をへだてて、沈默せるロシア領事館は、宏大な英國領事館の大庭園を俯瞰しながら、闊葉の樹の林の蔭に聳えてゐる。

――これが、勞農ロシア領事館の閉鎖狀態にある理由である。人つた一[illegible]

る。聯邦(ソヴェート聯邦)に於ては、遙かにモスクワのコミンターン執行委員會の『コムインターン執行委員會は、コムインターンの全セクションが、あらゆる手段によつて、支那××を支持することを、その義務とするものたることを認める!』(大田黒、高橋共譯『支那革命の將來』マルクス書房による)

と叫んでゐる聲を反響するガラスがあるかどうかさへわからない。しかし、その對角的地點に英國總領事館が存在してゐる以上、恰も英露の政治的暗鬪がしばしば新聞に報道されるやうに、陰性の形に於けるロシア領事館も存在するのである。

ただ、この錆びた鐵扉が、何時、左右に颯と開かれて、ボルトフオリオを抱へた勞農ロシアの役員がそこへ出這入りするか——畜し興味は『時』に懸垂してゐる。

23 乞食

乞食の存在について、非常に迷惑を感ずる人は、必らずしも、乞食を製造する社會組織に對して迷惑は感じないらしい。

さういふ人達の觀察する乞食は、二三の點に於て、私達の興味を喚らざるを得ないのである。

彼等は、先づ、乞食を憐れまうとしてかかる。この人道主義的な氣持の働きは、たしかに、乞食と自分達とを切離して、一種の優越的な立場から彼等を見得るやうにすることに役立つのである。次には、乞食の發生の原因を、その資本制度の缺陷の不合理なところに見ないで、ゐてたと假ずることである。それから、最後に、乞食を收容する慈善事業の發達を計ることによつて、彼等は、一度脱線した機關車にますます石炭を投じて、何處へ行かうとしてゐるのかを知らない狂機關手を思ひ出させるのである。これでは、乞食を廢止しようとして出發しながら、わざわざ乞食を殖やす方の説へ贊成してゐるやうなものである。さういふ人達に對して、ほんたうの乞食はから抗議を申込むだらう。

『俺達をどうするつて、——冗談はよしねえ。よく眼をあけて俺達を見ておくんなさい!』

から云つた彼は、ぐるりと後ろ向きになつて背を見せるにちがひない。

もし二人の人間が、一人の體軀に合體して、前後ともにちがつた顏をしてゐるとすれば、正しくそれは、この不思議な化物である。一面は襤褸を着て、一年も顏を洗はぬ乞食の形相をそなへてゐるが、他の一面は外國資本家の、すさまじい豪奢な装をしてゐるのが、即ち彼である。私達は、この二人の合體物を、一度に一面づつしか見ることが出來ないのである。したが、二人は、いつも、いつしよになつて歩いてゐるのだ。

先達、廣東で『乞食大學』といふ物を拵へたといふことが新聞に出てゐたが、これは別に乞食を養成するといふ意味ではなしに、乞食か

ら眞面目な勞働者を作るといふお役人の目論みなのである。李濟琛のやうな悧巧な反動主義者の思ひつきさうなことである。乞食の生ずる社會機構はそつとして置いて、乞食そのものを弄り廻はして居れば、たしかに今にも乞食が廣東から消滅するやうな錯覺を人に與へるのである。尠くとも、乞食にまでも關心を濺いでゐる政治家――といふ錯覺は誰しもが彼に對して抱くところであらう。トルストイが屢々經驗しては、こぼしてゐるやうに、かういふ順序では乞食は失くならないのだ。――支那に於ける乞食の發生を防ぐ方法は、その新軍閥と稱する外國資本家の走狗を撲滅することにあり、新興資本主義と稱する買辦の手先を掃蕩することにあるのである。「乞食大學」を建設した人間がゐなくなる事が、乞食を失くする差し當りの手段である。

乞食に技術といふものがあるとすれば、それは社會組織の缺陥を看板にして、その代償を個人的に請求する術である。つまり、資本主義制度の殘忍性を見せつけて置きながら、それを變改する方法は、出來るだけ乞食の手に多數の銅片を投與することにあるやうに思はせる術にあるのである。この最も普通なタイプは、貧民からちよつと成り下がつた種類の、半永久性を帶びた失業者である。これは社會の下積層となつてゐる大部分の勞働豫備軍と、その存在理由を同一にしてゐる。もう少し退化した乞食に、職業的乞食がある。この方は、必要以上のペソースを使つて、出來るだけ多くの同情を引出し、集めようと加へてゐる[illegible]ら露出してゐる男や、終日大道に向つてひた泣きに泣き暮らしてゐる母子の乞食などが、一町の街には必らず一組や二組は喰つて居るのである。南京は、もとから乞食の名産地と云はれてゐるほどあつて、浦口の邊には船を持つた乞食の大群が汽船を襲ふさうであるが、現在はどうであるか知らない。唯、私の見た一人の乞食は、人間としてもこれ以上に醜惡な標本はなからうと思はれる種類の天刑病者であつた。この人間は、ドウナツツを人間大にしたやうなもので、病氣のために顏の中央部の軟骨や肉が悉く脱落して、顏のまん中にぽつんと大孔があいてゐるきりで、眼も鼻も脣もなく、わづかに下顎と齒とだけがあつたのである。

これらの乞食は、たしかに組織化されて、めい〳〵の繩張りを持つてもゐよう。また、親方があつて、一定の上り前を撥ねもするだらう。客の注意を惹くためには、顏に煤や泥を塗ることもあらうし、自ら出血させて悽慘な外見を裝ひもするだらう。したが、乞食の技術乃至は組織化をもつて、何か事新しい支那の特質ででもあるかに囃し立てることは、盜癖をもつて支那人の第二の本能であると斷定するのと同一錯覺であるに過ぎない。私達は、支那に於ける富の分配の不平均を、刺戟的な形態を借りて見せつけられてゐるだけなのである。乞食の一部分が必要として自適してゐるとか、その或者は身分不相應な金を蓄へてゐるとかいふ噂を持つて來て、海外資本の支那侵略や、支那の新[illegible]といふ、[illegible]に乞食を作る[illegible]

ことは、あまりに見え透いた自由放蕩である。

24 纏足

いまだに纏足といふ窮屈なことをしてゐる婦人を見受けることがある。

『私の妻は足が小さくて――。』から自慢する支那の亭主もある。

纏足は婦人の外出禁止の一様式であり、傍ら、その蓮歩なるものには性的アルージョンも存在するといふことを聞く。いづれにしても、婦人の社會的活動を極端に束縛した帝王主義的黴風であることにちがひはない。

媚藥、強精劑、阿片、淫書、纏足――これらが、支那の封建主義に從屬關係をもつてゐた、性の獨占の道具立であつたことは、それを強調することすらが危險なほど明白な事實である。歐洲大戰直後の支那は、敢然として社會狀態の向上のために四大綱目を擧げて、改良運動に從事した。その最後の綱目は『婦人の解放』にあつた。そのときから『纏足』は廢止されたのである。

三寸ぐらゐの大きさの皮鞋を穿いて、よちよち家鴨に追ひ越されながら歩るいてゐた彼女達は、急速に足を伸ばして男性と歩調を合せ出した。『自由交際』の出現がそれであり、經濟的生活への加入がそれであり、政治的活動への參加がそれであつた。さういふわけで、今日の

支那には、[illegible]し、主婦、妾、私娼、革命婦人などが、日本社會に於けるよりもずうつと激しい混淆性をもつて共存しつつ在るやうに見える。

昔から、男が華僑として海外へ出稼ぎに行くことの多い廣東では、大部分の政治運動と雖も婦人によつて營まれてゐるのを知る。そのためには、ヨッフエと交渉した廖仲愷が暗殺されてから、二人の遺子を養成しながら、廣東の役人となつて活躍してゐる未亡人、何香凝女史のことを引用するまでもなく、『支那革命の將來』（大田黑、高橋共譯）といふ本の一頁を開いただけで澤山である。これは一昨年十二月廣東ソヴイエット建立三日間の出來事であつて、どんなに婦人前衛隊が支那のプロレタリア運動に果敢なる爭鬪力をもつて參加してゐるかを物語るものだ。『婦人×××や無産婦人は××手にして××の陣營中で戰ひ、埠頭に居つた英國水兵の眼前で逃走せる××××を逮捕し』、その『幾十人かはソヴイエット政權崩壞後に白衛軍によつて××これた』。

最初は男女同權から、フエミニズム的改良運動、政治への參加――と發展して來た支那の婦人運動は、必然の過程として、實際鬪爭への參加によつて、大膽にも男子の長靴へ片足を踏み込んだのである。

國民政府が、一つのポリシイとして容共主義を捨ててから、頻々として逮捕され銃殺される若い婦人の群を見ると、これが、北方では十五歳どころが五十元で賣却されるといふ娘達や、活動寫眞と外國の化

粧品とダンスとに養成されるフラッパースや、四馬路界隈を追ひ出されて今は移動的娼窟を計營してゐると云はれる野鶏の類ひの姉妹であらうかと疑はれる次第である。いや、たしかに姉妹であるからこそ、彼女達は無産階級運動に從事してゐるのである。これは、一部の日本人が觀測するやうに『極端から極端へ走る支那婦人の先天的性向』ではなくて、與へられたる社會の客觀的狀態の下に於て、その矛盾の客觀性を把握して行く主觀の差等を示すものに外ならない。

黄浦江でジャンクを操つてゐる女船頭や、大馬路の女子儲蓄銀行で働いてゐる子女銀行家、數十ケ所の紡績工場で日夜勤務してゐる女工の群、河岸の埠頭で逞ましい筋肉を聳やかして働いてゐる女苦力、事務所、店舗、各種の學校、病院、工場、役所で働いてゐる支那の婦人達――彼女達は、一方に經濟的覊足から自分を解放しようとしてゐる傍ら、他方では、男子の政治的な穿物の大きさにまで、自分の足を適應させようとして苦しむでゐるのである。

今に、支那の少し進歩的な亭主は、いの一番ののろけとして、

『僕の嬶の足は大きくてね――』

と云ふ時が來るかも知れない。

25　茶館一景

K――夫婦と私とは、何の豫備知識もなしに、赤蓮閣へ這つた。

私達は、ときどき歩き疲れて、お茶を飲みたくなる。これは、支那の群集の持つ刺戟性が、こちらの氣持に反應するからかも知れない。それとも、又、支那の大家族制度に附隨する、例へば同じ釜を突き合ひ、同じ汁を啜つて食事をするなどのやうな、原始的共産主義の殘りの部分が、私達を誘惑するところから來る氣持であるかも知れない。

それには、赤蓮閣は、あつらひ向きの一大パンデモニヤムである。

この茶館のことは、既に書き古るされてゐるから、管々しい敍述は省くとしても、私は、ここに集まる客の數と、その設備とを簡單に書いて置かねばならぬと思ふ。

客の數と云つても、指を折つて數へることの出來ない種類の數である。一町もあらうと思はれる長さの室に、いつも充滿してゐる茶喫み客なのである。それから、ここへ登ると、ボーイが來て、熱いタオルと茶と西瓜子とを持つて來る、ただそれだけのサーヴイスであることも斷つて置かねばならぬ。

さて、同伴者のK――夫婦といふのは、私と同じ船で支那へ來て、それ以來交際つてゐる若い人達であるが、妻君は斷髮をして和裝をしてゐたのである。

ここまで、ごく機械的な説明が私の筆によつて運ばれて來たわけだが――これからは、全く劇的な動きが、この前半に折返へしして働き掛けるのである。

時は午後三時頃、樓の下の福州路には黒つぽい支那人の群集が、アスファルトの路面を見せぬほど稠密として絶えないのであるが

客を囲んでゐた私娼達三人は、いつの間にか他の客の私娼達によつて取圍まれてゐるのを發見した。それらの私娼は、自由にこの茶館へ出入りして、相互の契約次第によつては、客を連れて引上げる權利を享樂してゐるのである。

小さな十三四の少女とも思はれる娘から、面皰の出盛りの十七八歳の青い何かの莖を思はせるやうな娘にいたるまで、みな一人づつの太々に守られて、安物の裝身具をぴかぴかさせながら、客を物色して歩るくのである。どうして彼女達が、私達を包圍したかといふと、目標は、K——の妻君の後姿にあつたのである。

この四馬路には、もとひとしきり日本語全盛の時代があつたとかで、それ等の私娼達は或る程度までの單語を使用することが出來た。最初は、こちらの氣配を覘がつて、少し逡巡してゐる風であつたが、次第に大膽になつた彼女達は、歩一歩と近づいて、K——夫人の櫛や帶や草履にいたるまで、一々手を觸れて珍らしげに品評しはじめた。この品評會は、決して南洋の土人が、漂着したアメリカの水兵を取り圍んで、そのナイフや靴を評判してゐるのとは同種類のものではなかつた。彼女達は、K——夫人に對して、職業的な嫉妬を感ずるあまり、わざと嫌がらせをはじめたのである。彼等は彼女を同業者と思惟したのである。

『此女お前の女？』

『それとも、お前のか？』

かういふむき出した[illegible]されたこと、その間、K——夫人はまつ赧になつたことも、査問會の公約に叶つた行爲であつた。

がやがや云ひ合つてゐるうちに、K——君がすこし剽軽な性質なところから、K——夫人を私の『女』であるといふ風に教へてしまつた。さうすると、彼女達は、旺んに足でK——の脚を蹴りながら、いつしよに出ようと云ひ出した。その間にも、一部分の者は、K——夫人の懐中物をまで抜き出して、腹立たしげに投げ出したり、何か悪態をつきながら、うつちやるやうに元へ收めたりした。殆ど泣き出さんばかりになつたK——夫人に對して、すつかり氣の毒になつた私は、急いでボーイを呼ぶと一弗銀貨を投げ出して、茶館を出たのである。女達の復讐的な笑ひ聲が、遠くまで私達を追ひ掛けたことも勿論である。

往來で、私は、普通よりもすこし力の籠もつた手で、K——の肩を敲いて、

『よせよ！』

と云つた。

26　在留日本人

私は、東京にゐるときよりも、支那へ來てからの方が、遥かに多數の日本人に會つてゐるやうな氣がするのである。尠くとも、差出される名刺の肩書や職業の範圍が、東京に於ける場合のやうに單純なもの

ではない。

これらのやや複雑な個々人を通じて、どんな氣持が流れてゐるだらうか、どういふ社會觀、人種觀、國家觀の下に、彼等は租界を形作つて棲んでゐる支那を見てゐるか、彼等は幸福であるか、どんな生活態度を持つて生きてゐるか――これらの質問は、久しく私の心に亦して應答を得なかつたものであつた。……

この間、私は一つのアクシデントを目撃した。それは、吳淞路といふ共同租界內の日本人街の狹い通りに起つた出來事である。原稿用紙を買ひに出た私は、やつと灯のともつたばかりの黃昏の街のむかうに、何かしらびしりッと大地へ擲きつけられた物音に注意を惹かれた。續いて、その邊から犬が悲鳴を擧げて逃げるときのやうな泣き聲が起つた。私の視線に這入つた物は、一臺の自動車と、そのすぐあとに、誰かが着物を脫いで投りばなしにしたやうな何かであつた。自動車は急にブレーキをかけて留まつた。すると、私の步いてゐる道の左右から、いつ露はれるともなくぞろぞろと出て來る支那人が、口々にみな『東洋！　東洋！』と叫んで、その方へ駈けつけるのに氣がついた。『東洋』とは、支那人が日本人のことを呼ぶときの言葉である。私は、何が何やらよくわからなかつたが、それらの支那人群集のあとについて、自動車の橫まで駈けつけた。

運轉士は支那人であつた。立派な大型の自動車には、顔を隱くすやうにして、二人の日本人が乘つてゐた。それらは、普通『大班』とでも呼ばるべき支店長級の紳士らしく見えた。この自動車は、一人の支那青年を轢殺したのであつた。布で拵へた人形のやうに生命の失くなつた青年は、あわてて群集の眼から隱蔽さるべく運轉士と一人の巡捕のために車內に押籠められた。そして、何の豫告もなく自動車が疾驅し去つたあとには、小百人からの群集が、大道の血痕を見ながらわいわい云つてゐた。

この事件は、恐らく大部分のアクシデントと同じやうに穩密で調査の上內濟になつたことであらう。上海の交通規則は、たしか人道以外の場所で怪我をしても、よほどな事情がなければ被害者の自業自得といふことになつてゐると聞いた。それに、その自動車の運轉士が歷然として支那人であつたといふことは、どんなにこの場合の雰圍氣を緩和したことか！　この事件が、第二の漢口事件とならなかつたことに、件の胴震ひを禁じ得なかつたであらう紳士達は、支那人運轉士にむかつて感謝すべきである。

だが、私の問題はそこにはない。どうして私の後方にゐた四五の支那人が、私よりも早くこの事故を發見して、直覺的に、

『東洋！　東洋！』

と叫んだかといふことである。

この電流の放射されてゐるやうな雰圍氣、ここに移住してゐる日本人諸君は、果してどんな作用をしてゐるだらうか？　これを否定するものは、日本人の持つ封建的[illegible]條件にもよるのである。もし、支那的な義

現がここに許るされるとすれば、彼等の大部分は、非常に淋しがつてゐることは事實である。

私はこの『淋しさ』を分析して見よう。この寂寥のうちには、國家を離れた國家主義者の孤獨感もある。又、間斷なき注意の緊張から來る生理的疲勞もある。茫漠として見透しのつかぬ支那の社會狀態の動搖に對する不安もある。侵、、、、として感ずる、、、、に對して感ずる不斷の脅威もある。內地に於けるよりも遙かに困難な日常の生活、快樂の攝取、慰安の方法などもある。そこには幾部分のフロイド流な性的不滿足も混つてゐるだらう。それから、古るい人種觀に妨げられて支那人にむかつて（又支那人からも）同じタームで話の出來ないといふ迫害心もある。——これらは、總括して、日本人が支那人と同一組織の社會生活に融合してゐないところから來る心の不均衡狀態であると云へる。

然らば、どうしたら諧和の狀態に入れるか？ これは、私にとつては非常に重過ぎる問題である。微力な私としては、支那の無産階級大衆と日本の同志との歩み寄りによつて解決しなければならぬと云ふより外はない。

だが、いろいろなものが、出來るだけ多くその前に整理されねばならない。無意味なる出兵の如き武斷外交はその主なる一つである。日常の問題の一部分に引用される人種問題の如きも、その一つである。

私はこんな小さな喧嘩に立合つたことがある。それは鞄を背負ひ、校服を被つた日本の小學校生徒と、やゝみすぼらしい服裝をした支那人の小學生とが、門柱と電信柱とを根據として、惡口の云ひ合ひをしてゐたのに行合はしたのであつた。

『東洋！ 馬鹿ッ！』

これは支那の子供である。彼は『馬鹿』といふ日本語の意味を、侮辱的に使用した。

『チヤンコロ奴！ 馬鹿やーい！』

これは、むき出しの日本語を使ふ、日本の小市民であつた。

私は、この小さな喧嘩を、日本の子供をなだめることによつて仲裁し終せた。

かういふ無心の子供達の喧嘩を、人は、すぐと人種的感情に持つて行く習慣を持つてゐる。一度、この問題をある大きさにまで擴張して、人種對人種の問題に發展させようとしたら、私達は、先づ人種學、言語學、人類學、地質學、天文學などの學的系統を追ふてからでなくては解決出來ないものと見做さなければならない。そして、それも、學者は、最も公平に云つて、まだ推定の範圍にまでしか究めてゐないのである。學者になるまでの研究の過程を忌避して、いきなり人種的感情に飛躍したがる人達は、國家主義の教へる人類學の劣等生であるに過ぎない。

しかし、この場合の如きも、もつと平明に見れば、日本人小學生が立派な學校を安價で買つた外國の土地へ建てた人々によつて、日本本

位の教育を施こされてゐるといふ事實を前提としなければならない。その小さな日本帝國臣民は、貧乏な支那の小學生よりも立派な制服を着てゐる。その金は、誰が何處から取るのか？　しかも、父兄達の排日思想が、漠然とながらも支那少年に反映してゐたとすれば、彼が子供心にも日本人小學生を憎むといふ客觀的環境と主觀的條件とが既に備はつてゐたものではないか？

この支那少年は、決して人種的觀念といふ根底もない幻影から罵つてゐたのではない。もしあつたとしても、それは、斷じて究極の動機たり得ないのである

現在の支那は、新文化を持つべく何等の社會的基礎工作が出來てゐない。一面、非常に唯物的に、ひたすら眼前の變化のみを追うて動いてゐるやうな上海の社會狀態にも、全然淸算され切らぬ舊文化と、混沌として大衆の中に渦卷いてゐる強い新世界觀への衝動的追求とが、互に上にならうとしてもがいてゐるのが見える。一歩國外へ出て見てはじめてその全輪廓がわかる日本のブルジョアジイの統一的支配に、何の疑問をも抱懷せずに、國外發展の前哨戰に立つてゐることを自任して來た日本人諸君が、支那の動搖の振幅が大きければ大きいほど、その消極的な舊世界觀の震盪されるのはあたり前の話である。――さういふ意味からも、私達は、支那に於て激情としたインターナショナリズムの潮流を感じ、ほんたうに支那人が何のために「打倒帝國主義！」を叫んでゐるかを、身邊の武器や商用資本や、軍隊や、秘密外交や、商館の搾取や、各國の國旗や、領事館員や、軍艦の移動など[illegible]

27　逆に見る

私は、出來る限り、支那に於ける特殊性を見まいと試みた。どんなに支那人は日本人と異る化物であるかを立證すべく、かなりの數の學者や研究家が動員されてゐる。しかしさういふ見方は、いくら研究を深めても、ますます支那から遠ざかるだけのものであると私には思はれる。さういふ無數の差別性の雜然たる羅列よりも、支那と日本とが根本的には相等しいものであるといふことを直感的に知つてゐるのは學者や研究家ではない。それは、支那に資本を輸出して、支那の勞働者を使役する資本家の群である。このホモジェナスな見地からこそ、他の資本帝國主義を外飾するすべての外輪の辭令や外交辭令が生れるのである。私達は、同じ見方を、ただ逆にして見ようといふのである。支那のプロレタリアートが、日本へ來てするだらうと思はれる觀察を、私も支那に對して試みたいと思つたのであつた。

ただ、旅行の時間が僅かだつたのと、全然支那語がわからぬので、私の模糊とした觀察は、一層ざつぱくな、霧の中の群集のやうなものになつてしまつた。動いてゐる支那がどちらへ行くか――についても、私には、無產階級的立場からその客觀的諸要件を研究するよりほかに道がないやうに思はれる。

いろいろと聰明な人達も南京に集つてゐるやうだが、彼等が支那の無產階級の希望のする方向へ行くかどうかは、恐らく彼等と雖もわかるまい。

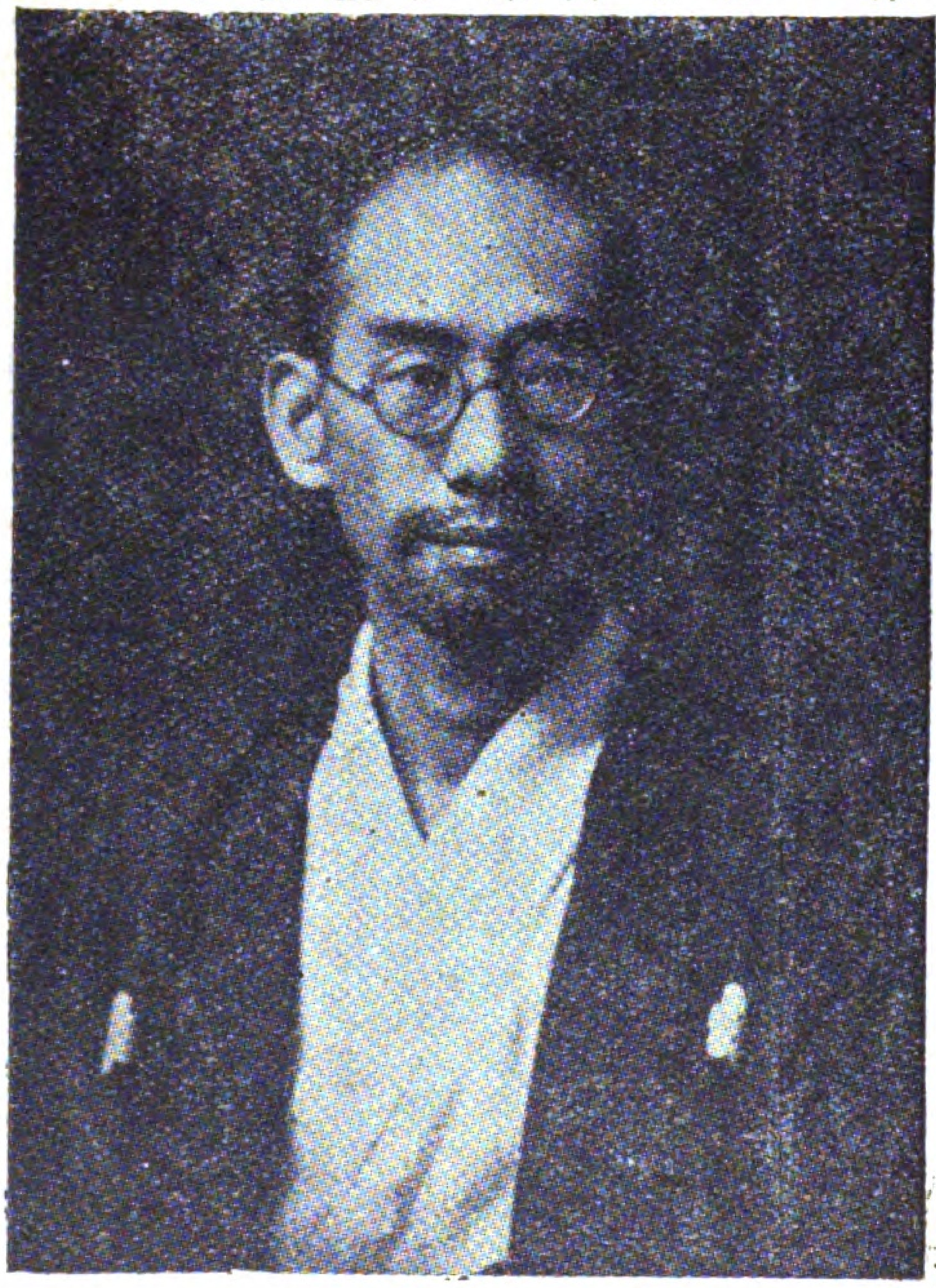
支那の[illegible]

我が學界の世界的權威

西田幾多郎博士

三木　清

西田先生は石川縣の出である。東京文科大學哲學選科を卒業された。地方の高等學校の教授となり、また學習院で教鞭をとられたことなどもあつた。その間に「善の研究」が出來た。京都大學へ這入られてから殊に多産な研究の日が續いた。論文が次から次へと書かれ、纏められて數種の單行本になつた。研究著作と共に先生はそこで澤山な弟子を養成されてゐる。單に學校に於てばかりでない、その著書の偉大な影響のために、哲學界の若い人々の殆ど凡ては多かれ少なかれ先生の感化を受けてゐるのである。西田哲學は一時日本を風靡した觀があつた。昨年の夏先生は停年の故をもつて大學を引退された。帝國學士院會員である。



西田博士

嘗て現代の哲學を論じた中に、古きロマンチストは叙情詩を歌うた、新しいロマンチストはドラマチストとならねばならぬ、と先生は書かれた。私はこの言葉が先生の哲學の風貌を傳へてゐはしないかと思ふ。先生はなによりも直觀の人である。その考へ方は著しく具象的である。しかし先生は藝術家的な直觀を直接に吐露されるのでなく、それから得た想をどこまでも練り、これを構成してゆかれる。その構成にあたつてはもとより論理的嚴密を期しながらもなにとなく放膽にして、しかも度胸のすはつたところがあるやうに感ぜられる。いはゆる「種々の世界」に出入して其々の立場の個性を生かさうとしながらも、これを統一せずにはおかぬ思索の勇氣と執拗とが到る處に現は

れてゐる。様々な思想は先生の哲學に於てまことに劃的な統一を見出す。この統一の中心は先生の人格である。今の時代の哲學に於て先生のものほど人格的な哲學はない。これらの特色がその難解にも拘らず多くの人をして先生の著述に近づき易く親しみ易く感ぜしめるのではなからうか。

先生の思想の發展はこれを三期に分つことが出來る。第一は「善の研究」によつて現はされてゐる純粹經驗說の時期である。第二は「自覺に於ける直觀と反省」を中心とする主意主義の時期であつて「意識の問題」及び「藝術と道德」とがこれに屬する。「思索と體驗」は兩者の過渡期にあるものと見られる。第三は最近の、殊に「働くものから見るものへ」の後編の論文によつて明かにされて來たところの直觀主義の時期である。この書の前編に收められた諸論策はこれを準備するものと考へられ得る。この發展は言ふまでもなく連續的であつて、先生が純粹經驗を說かれるとき、その根柢には意志的なものがあつたのでありそして先生が意志について語られるとき、その基礎には直觀的なものが既にあつたのである。しかし先生の哲學について專門的な議論をするのはいまはその場所でない。

先生は愈々元氣である。大學を去られるに際して記念論文集捧呈の議が弟子達の間に起つたとき、先生は、これから自分で大いに書くつもりだから、そのことは見合はせてくれと申された。最近鎌倉の寓居に先生をお訪ねしたときには、これから一年間續けて筆を執るのだ、と先生は話してをられた。私は私の學生時代、二年あまりの間、かの劃期的な著物「自覺に於ける直觀と反省」の文章を毎月發表してゐられた當時の先生の姿を想ひ起し今なほ衰へぬ先生の精力に對して畏敬の念を禁じ得なかつた。邊幅を飾らず、世のつねの榮達を求めず、超然として、しかも烈しく思想を求めてやまざる先生の人格には崇高なるものがある。——(一九二九・一)——

木村榮博士

橋本昌矣

水澤の緯度觀測所の所長木村博士のことを書けと云ふ改造社の註文であるが、成る程私は水澤に十二年緯度觀測の御手傳ひをして居たから、木村博士のことは可なり能く知つて居る一人であらう。然し紹介に尤も適して居るとは思はれないのである。

木村博士は運の好い人である。根氣の能い人である。手紙を書くに無性をしない人である。此三つの要素が片田舍の水澤に居て緯度變化の樣な複雜された問題を研究して氏に今日の成功を齎らした原因であらう。

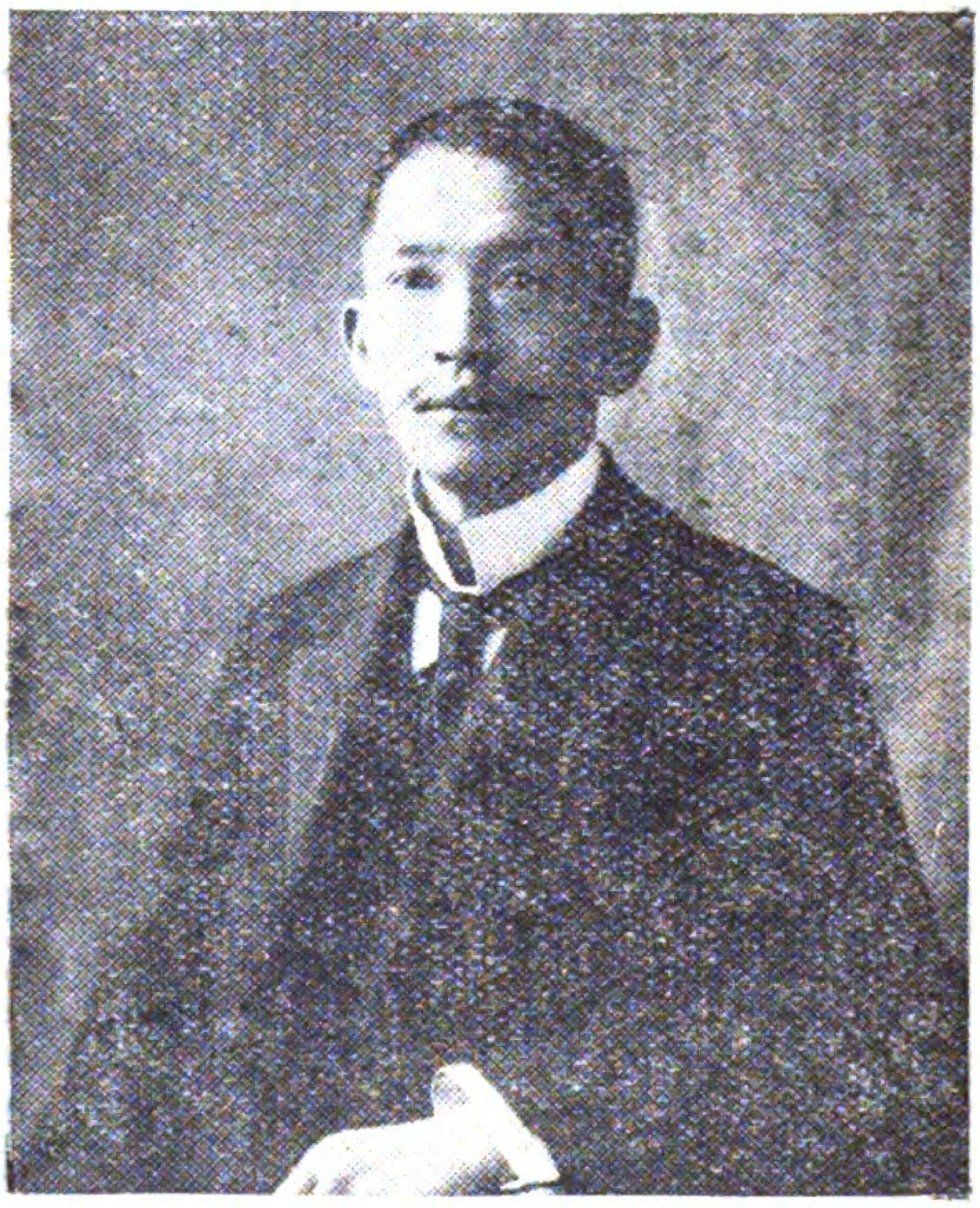
博士は金澤の產である。生れながらにして木村民衞氏に養はれた。養父民衞氏は先覺の教育家であつて、自ら初等學校(小學校と中學校の同位のもの)を經營して居られたので其の學校から直ちに金澤の第四高等學校に進まれ、第一期の卒業生として東京帝國大學に送られたのであつた。實に君の卒業證書は第一號である。何と運の好い事ではないか。夫れから在京三年、博士は理科大學星學科を優

等な成績を以て二十二歳の弱年にて明治廿四年に卒業され、以後卅一年迄專心、麻布の東京天文臺で諸種の研究に就事して居られた。

萬國測地協會の事業として水澤に緯度觀測所が出來る事に決定したので、其の觀測の準備やら打合せやらの爲に、三十一年に獨國ポツダムの測地研究所に派遣され、在留約一年翌年歸朝して三十二年九月に水澤の觀測所所長となり、今日迄三十年緯度變化の研究に沒頭して居らるるのである。何と根氣のよい事ではないか。

其結果卅五年一月に所謂木村項則ちZ項の存在を認定し以て博士號をかちえ、且つ後年のZ項の精しき研究は帝國學士院の恩賜賞の第一號を博士に齎らしたのである。又英國王立の天文協會の會友に推されたのも、博士が最初の日本人であらう。博士は昨年まで前後四回海外に旅行されて今や萬國學術協會の天文協會、及び測地及び地球物理學協會聯合の緯度變化の委員會の長に推されて、諸外國よりの報告を整理し益々研究の便利を得て居らるるのである。

博士は丁度本年六十歳である。益々御健在で學問の爲に精進せられるのは感謝に堪えない。



木村榮博士

又緯度變化は取扱ふ量が普通のものより一桁先であると云ふ外、大して妙味のありさうに思へない。夫でも水澤の片田舍で可なりの不自由を忍んで一生研究すれば、あれ程の效果はあるのである。物がないから研究が出來ないと云ふ人は博士に對して恥かしい氣がすべきである。

（終り）

自傳的に見た日本社會主義運動史（三）

堺利彦

目次

一　安部磯雄氏の人物

(a) 如何にして社會主義者となりしか

いよ〳〵社會民主黨の創立者六人につき、その人物經歷、風采等を列記すべき順序に成つた。先づ安部磯雄氏から始める。

週刊『平民新聞』の第三號（明治三十六年十一月廿九日）以下の紙上に、『予は如何にして社會主義者となりしか』と題する、興味の深い記事が續載されて居る。その中に、安部氏の分が第十九號（明治三十七年三月二十日）に次の如く記されてある。

『余は十五歳の時、同志社に入り、十八歳の時に基督教を信じ

た、爾來余が心を常に縈けしは、如何にして貧民を救ふべきかの問題であつた、今も猶ほ善く記憶して居るが、明治十七年同志社を卒業した時、余は卒業演說に「宗教と經濟」といふ題を選んだのである。これは言ふまでもなく宗教と經濟を以て社會救濟の任に當りたいといふ自己の決心を現はしたのである、然し如何にせば貧民を救濟することが出來るかに付きては未だ確たる意見は有して居なかつた、其後殆んど七八年は盲者が物を探る樣に其救濟法を考へて居たのであるが、恰かも明治二十五年の夏、余は米國の或學校の寄宿舍にて閑靜なる生活を爲して居た時、圖らずもベラミーの「百年後の社會」を讀んだのである、實にこれは余に取りて非常のインスピレーションであつた、恰も盲人の眼が開きて天日を仰いだるが如き感に打たれた、其れからは社會主義に關する著書數十册を手當り次第に讀んで、玆に初めて數年來の疑問が晴れ、全く社會主義に依りて救濟事業を實行せんとの決心をなした』

こゝに『百年後の社會』とあるのは『ルッキング・バックウアード』（回顧錄）の事である。この書は一八七二年（明治五年）に米國で發行されたのだが、その後、非常なセンセーションを引起し、遂に五十萬部の賣行を見るに至り、その結果、一八八八年には國有主義の新運動が起り、一八九一年には其の機關紙として週刊『國民』が發行されたといふ勢ひであつたので、明治廿五年（一八九二年）頃の日本留學生たる安部氏がその影響を受けたのは甚だ自然である。日本でもその頃、この書の內容が屢々社會に紹介されたこと、前記の通りである。

斯くて安部氏は熱心な社會主義者として米國から歸り、暫らく同志社の教師となり、程なく早稻田專門學校の教師に轉じ、その頃から社會主義研究會を起し、續いて社會主義協會および社會民主黨を組織した事は、前に記した通りである。

猶、安部氏の學歷について、直接に同氏から聞き得た所、左の如し『十五歲（明治十二年）同志社に入學、二十歲で卒業、明治二十四年米國のハートフォード神學校入學、同廿七年六月卒業、其から英國を經て獨逸に入り、三ケ月許り伯林大學で講義を聽き、明治廿八年二月に歸朝しました。米國の神學校では宗教の研究と同時に社會問題を研究する內、遂に社會主義者となりました、學位は一つもありません』

（b）　溫厚の長者、キチヨウメンな人

又、週刊『平民』の第二號に、『同志の面影（一）』として、安部氏のことが次の如く記されてある。筆者は堺と幸德だが先づ堺の方から。

『予は先づ一言にして君の人物を彷彿し得べき評語を求めて次の一句を得た、曰く「溫厚の長者」

『君は中ゼイにして肉甚だ肥えたり、丸刈の頭にふくよかなる兩の

頰、左の目少しく眇して、そこに却つて和氣がある、君の容貌風采は質朴と云ふほど粗野ではなく、質素と云へば當るかも知れぬが、マダ何やら足らぬ心地がする、文質彬々と云ふ所が現はれて居るのかとも思はれる。

（註『文質彬々』とは『文質ヒンピン、而る後思ふ』といふ論語の言葉を稍や得意らしく使つて居るわけだが、その頃の私には、まだそうした多少の漢文辯が殘存して居た。「ふくよか」などといふ和文辯も同時に殘存して居た。堺生）

『予は君の盛裝した所を見た事が無い、フロックコートの姿すら見た事が無い、安部君と云へばイツでも同じ様な脊廣の洋服姿が予の目に浮ぶ。

（その頃、幸德も私もフロックコートを持つて居た。私がフロックコートを着て最初の入獄をした話は後に記す。堺生）

『曾て牛込榎町に君の家を訪うた時、幾ら玄關で案內を求めても返事がない、稍大きな聲で「頼む」とヤツたれば、奧の方に「應」と云ふ聲が聞えて、やがてツカ〳〵と人が出て來た、それが即ち安部君であつた、双子か何かの着物に白木綿の兵古帶をして、至極無雜作な態度であつた、二階に案內せられて暫く話したが、其應接室は君の風采と同じ事で、殆んど何等の裝飾も無かつた。

歸り」と呼び立てる、けれども私の家では妻も下婢も一向玄關には出て來ない、車夫も此頃は其ことを知つて仕舞つて、これをやらぬやうになりました」是れ豈に最も善く君の家風を見るに足る者では無いか。

『君は又熱心なる運動家である。休暇毎には早稻田大學の學生の一群を率ゐて、或は宇都宮に、或は靜岡に、ベースボールの練習に出かける、君は四十歲を越えて猶少年の意氣を存して居るのである、「私はソノ、今に早稻田のチヤンピオンを三四十人も連れて、夏休みか何かに米國に出かけて、インタナシヨナルのベースボールマツチをやつて見たいと思ふのです」などと語る時、君の豐かなる顏にサモ愉快げなヱミが溢れて、春の日の光の如くに人を照す。

（「私はソノ」の「ソノ」は安部さんの口癖である。ベースボールマツチのこの理想が後に實現された事は、讀者御承知の通り。

『君は一面に斯くの如き運動家であると同時に、又一面に於いて非常なる勤勉家である、君は多くの家族を養ふべき義務を負うて、隨分多くの時間を早稻田の學校に費して居るが、其外に雜誌の編輯をする、新聞雜誌に投書をする、多くの演壇に絕えず其雄辯を揮ふ、多くの會合に善く出席する、蓋し亦勉めたりと云ふべし。

人、如何にもマジメな人、
『去年の暮、田口卯吉等の經濟學協會で、工場法に關

山 家 集

川 物 語

…の大衆的解放!!

[illegible]人である、君は[illegible]和して四人の子供がある。
「君は實に純乎たる理想家である、夫婦論をすれば右の如く、平和論をすれば、「私はモウ絶對にノン・レジスタンス（無抵抗）の主義を取るのです」と云ふ、君が歐洲の平和國たる瑞西の事を語る時、其ジエネバ湖畔風光明媚の處に世界の議會を開きたいと夢みる時など、實に詩的高調を帶びて居る。
「君は決して不平家ではなく、寧ろ樂天家である、君の社會主義は詩的なる君の理想から割出されたもので、些の私欲私心を混じて居らぬ、君は實に社會主義者の至醇なる者である、日本に於ける社會主義が斯くの如き先輩に依つて唱導せらるゝは、實に至大の幸福と云はねばならぬ。
「最後に、予は又一言にして君の態度を彷彿し得べき言葉を求めて次の一句を得た、曰く「和して同ぜず」以上枯川生記
（「和して同ぜず」も論語の言葉。斯様な點、及び他の種々なる點に於いて、私の安部さんに對する人物評は、安部さんを畫き出すと同時に、誠に善く當時の私自身も畫きだして居るに注意ありたし。
次に秋水は左の如く安部さんを評して居る『マン圓く肥て小兒のやうな顏をして、言語は明晰で態度は沈着た、そして公平な人、高潔な人、如何にもマジメな人、コンナ缺點のない人を見たことがない。
「去年の暮、田口卯吉翁の經濟學協會で、工場法に關する討論會に招かれ、[illegible]大闘はされた後、鹽島仁吉君は嘲笑半分に、今の勞働者に[illegible]すればツケ上つて同盟罷工などを企てるから、[illegible]まで壓制して一寸の暇も與へず使はねばならぬといふ意見を述べた。此時まで今夜は君等に任さうと沈默して居た君は猛然と立上り、滿面稍々紅を帶びて、例の明晰な音吐を張上げ、鹽島君は二十世紀の今日に奴隷制度を再現せんと欲するか、是れ紳士の口より發す可らざるの暴言なりと一喝し、正義人道の上より勞働者救濟の急を論ずる數十言、語簡なれども意強く、宛かも百雷の墜るが如くであつた、予は此時、君が決して唯だ溫厚の人を以て目す可らざるを知つた。
「君の品格ある雄辯は、予は推して當代第一品と稱すに躊躇せぬ（以上秋水生記）』
（秋水の人物、、、、、、、、、此の安部評のに現はれて居る。秋水も當時やはり絶對平和主義者であつた。）

× × ×

安部さんに就いて私の思ひだす事は、安部さんの原稿には消しもなく、直しもなく、書き入れもなかつた。清書したのかと思ふと、さうでなく、それが初からの書きおろしで、原稿紙の一冊に一行づゝ、キチンとはいつて居た。現に、昨日[illegible]取つた安部さんの[illegible]も、[illegible]り清書したように、キチンと[illegible]かれてゐる

安部さんは又、夜十時まで勉強する習慣であつて、本を讀みかけて居ても、文章を書きかけて居ても、十時がチン〳〵と鳴れば、直ぐにランプをフッと吹き消して寢床に行くといふ話であつた。それほどキチョウメンな性質である。

二　片山潛氏の人物

(九)　大男根性、百姓生活、學問の決心

片山氏に一卷の『自傳』（大正十一年、改造社發行）がある。それの最初の部分は、『明治四十五年、東京電車從業者のストライキに關連して收監された折に、獄中で起稿したもので』あり、その次の、凡び次の次の部分は、それ〲數年を隔ててアメリカで書かれたものである。この自傳の東京で發行された時、氏は既に遠くロシヤに行つて居り、改造社では社員の手でその原稿を整理し、少なからぬ補修と省略を加へて編纂したのであつた。氏は『綺麗な筆は持つて居ないが、それだけ又……達筆にかゝれて事實を誇張したり粉飾したりする樣なことなく、眞面目に眞實を眞實として書いてる所に價値と面白味が見出される』と云はれて居る。以下、私はこの自傳の摘要を試みる。

『極めて平凡な、而も格別興味のない、卑俗なる予の生涯を茲に少しも修飾を加へず赤裸々に語る。』『予が子供等は今は皆幼少である故に、……當時幼年が生長して……其父の事を知りたいと……た時、（その）便宜を與へんとするのである。』

彼は『安政六年十二月七日、明治元年を去ること約十年前』美作國久米郡弓削村字羽出木の『山間に閉ぢこめられた一孤村』に生れた。『家は……代々庄屋であつた。』『父は年十五の時……養子に來て、母……と結婚した。……母も亦年は十五であつた。然るに彼が四つの時、父は故あつて（家を）去つた。』彼は『家族制度の結果』、『次男』として『生れ落ちるとから冷遇され』『繼子扱ひにされた。』彼は『次男根性』が『ヒガミ勝ちで、利己的で、意地が惡い』事を認め、それに對して、『總領は度量が寬く、思慮が深く、公平である』と云ひ、そして彼は、その總領の友人から『性格を鍛ふ上に於て多大の好感化を與へられた』事を語つて居る。そして彼は『母の愛子』として、『母の實際的なる教訓』を受けつゝ成長した。

彼は『幼時に學問が嫌ひであつた。』彼は神主の處に手習に行き、お寺に本を讀みに行つたが、『大學だの論語の素讀を教はつて』も『直ぐに跡形もなく忘れて仕舞ふ』のだつた。『無意味なる素讀を機械的に記憶して居ることは何うしても出來ない』のだつた。彼の『子供時代の心理狀態は一種の難で』『腦に缺陷があつたかの如くである。』然しそれを『一方より見れば、當時の教育制度が』彼『の如き愚鈍なる者には適當せなかつたからである……。』

『解覺するに』彼『の眼力は抽象的意味を缺いて居た、（或は）子供の時に……その……要素が無かつたのである。』『遊戲』等が取つて……する如

[illegible]工匠は淺薄に出來て居るので、平易な事物でなければ容易に理解が出來な』かつたのである。

然るに小學校が設立されて、『十四五の少年が』その『一年生となつて、糸、犬、家、錨と單語を習うた』時、その『教育の方法』が『全く新規であつた』爲、初めて『學問の趣味を發見し、……人並に學問の出來ると云ふことを自覺し』『常に級の頭』となり、殊に『暗算が最もよく出來』『急に勉強がして見たくな』り、『東京に行つて大學にでも』入りたいといふ『突飛な放言』をして、『各生徒からも先生からも嘲弄』された。

この時『女生徒の級長をして居た賴子と云ふ』『髮の黑い鼻筋のよく通』つた『酒屋の娘』が、『只一人非常に同情を以て』彼を遇し、それが自分の家の離れの障子を明けて、彼が『そこを通るのを待つて嬉しさうな笑顏をして目禮をし』たり、『どうかすると……話をするうちに眞赤な顏をする』ので、彼も『赤顏がホテツて來』たこともあつた。

（このエピソードは只これだけで終つて居るが、私は片山君の柔かな半面を示す爲、この事を書きもらしてはならぬと考へた。）

然るに今度は『家の事情が』彼の學問する事を許さなかつた。彼は『愈々百姓となつた。その後、數年間は農業に熱心した。』『蓑も編めば、繩も打つ、牛も使へば木樵りもするし、炭も燒いた。草刈り・柴刈り、[illegible]代には、村内若衆との交際として云ふに云はれぬ興味ある經驗を得た。』

彼は『小學を止めてから……獨學で勉強し』た『丁度明治十年正月下旬』彼は『未明に起きて……炭六俵を牛に負はせ、四俵を自分が擔うて五十町もある大戸の問屋に持つて行つ』たが、『此日は朝から重い雪がポト〳〵降』り、『苦しいから全身汗が絞るが如く』『此熱で全身に積つた雪は解けて着物はビショ濡れとなり』『頭の雪は溶けて首から胸にズル〳〵と流れ』『藏本（當時、貢米の納所にして富豪）の前に來た頃には肩がチギレルやうであつ』て、『そして何時もの如く（そこの離れで山田方谷といふ漢學の先生が塾を開いて居たので）學生の讀書と談笑とが威勢よく障子から洩れて』來た。『この瞬間に』彼は『斷然學問で身を立てること』を『決心した。』

その後、彼は『小學校の助教に出』て『月一圓の報酬を貰』つたり、師範學校に貸費生として入學したりしたが、明治十四年『小學教師では滿足が出來ない』で、遂に母に別れて東京に出た。

東京では先づ『食客に失敗し、』次いで『活版所の勞働者とな』り、初は『機械の車廻し』後には『文選』をやり、そして岡鹿門（千仭）の塾を『安下宿と心得て』入塾して居た。或時、彼が『五厘を投じて……菜漬を買つて來た』のを、『鮪の刺身を作らして居た』『富豪の子』が見つけて、『やあ片山君、大變た御馳走を買つて來たなア』と云つた

ので、彼は『怨み骨髓に徹した。』

彼は岡塾で四書、五經、左傳等を學び、『岡先生の維新革命史編輯を助け』『熱心なる勤王家』となつた。一時彼は『學僕として』『芝新錢座の攻玉社に入つた』が、製圖に『閉口』して『突然止めた。』

その頃、彼は岡塾での親友岩崎清七を激勵して『渡米』の決心をさせた。（この岩崎氏が今では有名な富豪となつて居り、近々『資本家代表』として國際會議に出席する筈で、『歸路はモスクワで舊友片山潜君にも會へる』と語つて居る。）そして程なく彼自身も亦『一文なしで渡米を思ひた』ち、長崎の父等から多少の助けを得て遂に渡米した。

彼は『生來の酒好き』『隨分の大酒家』であつたが、渡米の送別會を『飲み納め』として『禁酒』した。

（ト）　米國、皿洗、大學生活、英國旅行

明治十七年の暮、彼は廿五歳で、『生死是在天』と壯語しつゝ、米國桑港に上陸し、僅かに持つて居た『メキシコ弗一個』を使ひ盡し、『全く桑港ゴロツキ社會の仲間にはいつた。』

それから彼は『十仙借りてパンを買』ひ、それで『命を二日間支へた』り、『下女系コツタに奴隷の如く酷役』されたりした後、漸く皿洗ひ、掃除、洗濯、窓拭等の家庭勞働で生活し得る事となつた。

當時彼『の方針は、先づ金を貯めて、それから學校生活をするといふ事に目標をおいてゐた』ので、『從つてスクールボーイ（學僕）を勤まず、いつもハードウオーク（激しい勞役）にぶつかつて行』き、『貯金も四五百弗に達し』た。そして『少し英語が解つて來たので、……オークランド市のホプキンス・アカデミー（中學校）に入學した。』

次に彼は桑港を去つてロッキー山を越え、東部テンネッシー州のメリヴイル大學に入り、更に轉じてアイオワ州のグリンネル大學に入つた。それが一八八九年（明治廿年）彼の廿八歳の時であつた。

彼はグリンネル大學のクラシカル科に編入され、希臘語と羅典語に非常な困難を嘗めつゝ『國元に老母の貧乏に苦んで居た』爲に『歸心矢の如』く、『學業を急ぎたるが爲め』『理科學は殆んど門外漢で』『不完全に大學を卒業』した。

彼の『英語は街路で拾ひ集めた英語で』あつた。彼の『北米に於ける教育は極めて速成で、しかも粗製濫造であ』つた。然し彼は又グリンネル大學のシニオルイヤー（三年級）で獨逸語を學び、『ゲーテ全集を賞與として貰つた。』

然るに彼は『在大學中に國元の繼母が死去せる報を得てから、今三年勉強することとした。』そこで彼は一八九四年（明治廿五年、三十三歳）の秋、エール大學に轉じ、そこで『社會問題の研究』を『專門』とした。『當時彼は學校改良にも興味を持つ』た。

彼が『社會問題に興味を持つ動機となつたのは、メリーヴイルに於る

から『彼はグリンネル大學へ入學した年の春、イリー博士』の著述を『讀んで非常に面白く感じ』た。『いよ〳〵』彼が『社會主義者になつたのはシニオルイヤーの時、應用經濟の一科として社會主義を一期間研究した』時、『其の參考書』として『ラサールの傳』を讀んでからのことである。』

その前、一八九四年の春、彼はグリンネル大學から『英國の徒歩旅行を企てた。その頃の英國は社會問題の中心地であつた。』彼は『安下宿に泊つ』て『社會及慈善事業、其他何でも社會問題に關する事業を視察』した。

一八九五年、彼はエール大學を卒業し、五月から九月まで、ノースフィルド・ホテルに『一ケ月四十五弗の食附給金で働き、歸國の旅費をもう』け、』十月中旬『太洋コチキ號に三等客として乘込んだ。』

(c) 英語教師の失敗、キングスレー館

彼は太平洋で難船に遭ひ、明治廿六年、足かけ十三年目で故國に歸つた。』

彼は先づ『英國今日の社會』と題する一書を警醒社から發行させた。それは『或る老書生』に彼の『話を書いて貰つた』のであつた。

次に彼は『鐵道新論』を博文館から出した。これは『社會經濟の上から鐵道國有を主張したもので、』植松考昭氏の助けに依つて著はさ[illegible]

『投態々』彼も『パンの道を求めねばならぬ事となり、專門の牧師とか傳道師として賴んで見たが、中々同志社連中が跋扈して』うまく行かない。『其内に』『早稻田專門學校の英語科を教ゆることになつた』が『半年で見事に失敗し、古る草履の如く解雇されて投げ出された。』

『早稻田の失敗で……車夫にでも成ればよかつたらうが、又々……磯部彌一郎氏の一雇人となり、數ケ月の間、彼からエキスプロイトされた其の上に、此の人から止めさせられた。』

『斯うする中に』彼は『天然痘に罹』り、それから『英語教師なと止めて、兼ねて研究して來た社會改良事業をやつて見る事にした。組合派の宣教師長をして居たグリーン博士が、月に二十五圓呉れる事となつたので』彼は『神田三崎町一丁目に一軒の家を借り、キングスレー館と云ふ看板を掛け』た。それが明治三十年の頃であつた。

その時『妻を迎へたら……と云ふので、岩崎清七の世話で結婚した。』『其の準備としては古河町へ行つて、將來の妻を見た、彼女は予に給仕をして呉れたので、予は飯を食つて歸つた。愈よ結婚の日になつて予が何をしたかを云ふたれば、――理髮所へ行つて斬髮した外に、何事も仕なかつた、……實に呑氣なものさ。』

彼が『キングスレー館を經營し始めた頃は、また熱心な耶蘇信者であつた。番町教會の一理事として、或は日本女學校の幹事として、同日

曜には教會へ行つて働いた。』彼は米國に行つて間もなく、『一種の熱病に罹つた』時、初めて『耶蘇の神を求め、』その後アラメダに於いて『天の一角に耶蘇を發見した』のであつた。『耶蘇の生涯は』彼に『幾多の感激と力とを與へ』たが、然し彼は『最初から耶蘇を神と思はなかつた。』

キングスレー館は『一種の宗教團體として取扱はれ、……直接表面の事業としては、幼稚園を設立した。』『キングスレー館の事業で最も成功したのは、その渡米案內であつた。』『渡米案內なる小册子を四五日掛つて一書生に筆記させて發行した所が、それが大當りに當つて一週間に二千部も賣れ』た。『その後、渡米研究會を開くと、多くの青年がやつて來たものだ。』然し『キングスレー館の根本目的は社會改良事業であつた。……』

その頃、『社會問題研究會も組織され』『普通選擧を叫ぶ者もあり、勞働問題の聲を揚げる者もあつた。』『此の勃興時代に當つて微弱ながらも』彼は『社會問題の解決を目的とする所謂大學殖民事業を開始した』のであつた。『英語を教へて失敗に失敗を重ねた』彼は、『來るべき社會問題の時機に投じたのであつた。』

『近世日本に於て勞働問題の聲を揚げた者は米國歸りの三人、卽ち高野房太郞、澤田半之助、城泉太郞で、これらの尻押しをした者は鈴木純一郞といふ男であつた。始めて此の三人が「勞働者の心得」なる小冊子を發行して、……（明治三十年夏）神田の靑年會館で勞働問題演說會を開いた』時、彼も『頼まれて演說した。』

彼は『演說が上手と云ふ譯でもなく、或は勞働問題の專門家でもなかつたが、演說家の頭數には利用されて、……とうとう勞働問題の專門家と成るやうになつた。』彼は組合教會の機關なる六合雜誌にラサールの傳などを譯述して連載した。それには早稻田大學の教授大西祝氏が『親切に手を入れて呉れた。』

この『ラサール傳』が後に『一册の書物として發行されたりして』『勞働運動も思ひの外進行した』が、『其中に段々』彼が『勞働運動と離すべからざる深味に入るに從つて、教會からは暗々裡に反對を受けた。』『一番テキメンに予に打擊を與へた』のは『グリーン博士が予に月給を呉れ』なくなつたことである。『予は獨立でキングスレー館を維持することとなつた。耶蘇教は、全體から云へば、此の時分からもう富豪の手先であつた。』

（a）勞働運動、日鐵罷工、社會政策

『明治三十年後年の組合運動は大成功であつた。』『同年十二月一日……鐵工組合の生れた日を以て、勞働世界なる機關雜誌が發行された。』彼は『その主筆であつた。』彼が『勞働運動に身を入れて盡力し始めたのは』この時からである。『固より無經驗で勞働問題に關する初めての雜誌であつたから、……極めて幼稚なものであつた』が、『第一號から……一頁の英文記事を載せたので、歐米にも……日本の勞働問題及び社會問題の運動を代表する機關雜誌』[illegible]

[illegible]の實際を助けて呉れ」た一人は「[illegible]考明君であつた。」彼は後に『東洋經濟新報の基礎を樹立した人』である。

『明治三十一年二月廿四日に日本鐵道の機關職工の同盟罷業があつた』が、それは『確かに前年夏以來の』片山氏等の『勞働運動の間接の影響であつた。』この大ストライキに就いては、本篇の前回にも種々記して置いたが、片山氏の語る所に依れば、このストライキをあの樣に成功させたのには、『二三偶然の原因があ』つた。即ち『其一つは、丁度』その時『福島以東、奧羽地方は未曾有の大雪で』それがストライキを『助長したこと。』『第二は時事新報が三井の富豪一派と結托して日鐵の乘取策にこのストライキを大いに利用したこと。』

片山氏等の『勞働運動に對する地位は稍本物になつて來た。』鐵工組合は『益々發展した。』その『本部を日本橋の柳屋と云ふ[illegible]料理屋の二階』に置いて『高野は詰切りで事務を取つた。』

『勞働經濟問題から勞働運動に興味を持』つ『ものが澤山に出て來た。』其中に二種ある。第一は熱心にコツ／＼と……頻に組合員をふやすのを以て唯一の樂みとする質直な職工で『多く渡り職工、……腕のある職工であつた。……今一種……は名譽の欲しいとでも言ふか、演說會に於て前座でも勤め……やうとする者で、……皆一かどの職工である。』斯くて『頭角を顯したものゝ中』片山氏の記憶に存して居る者が『二三ある。即見沢金太郎と[illegible]前者は仕上工で後者は鍛冶工であつた。』

『明治三十一年の初夏』片山氏等は『[illegible]に出かけた』が、『まだ日鐵同盟罷工の餘熱の冷めぬ中であ』り、『機關職工組合なり矯正會が組織されてホヤ／＼の所であつ』たので、『至る所でストライキの功名談で持切り』思ふ存分にストライキの鼓吹[illegible]た。』

『明治三十一年四月三日に上野公園で[illegible]を鐵工組合の主催[illegible]る事になり、組合本部たる『日本橋の柳屋から市中を行列して[illegible]ようと言ふことにしたが、警視廳が禁止した。』

『これより少し前から[illegible]大の[illegible]、……[illegible]の連中が[illegible]會政[illegible]會なるものを組織して居つた。片山氏も[illegible]で入會した。先づ宣言書を發表するのだと云つて、氏も[illegible]一人に加へられた。其の[illegible]に[illegible]なる[illegible]に[illegible]る』なる文句があつた。片山氏は、『我々は[illegible]であるから『ネカチーヴな立場に立つ……[illegible]したが、『多數決で原案に決定した。』然し片山氏は『決して[illegible]主義者でないと自信して居つたから、自ら[illegible]、……斯會に多少盡力をした。』

『明治三十二年の初秋頃』片山氏は[illegible]を作りて『[illegible]樂つ連中の演說會を催した。』[illegible]となつて……活版工組合は[illegible]の一派[illegible]、[illegible]明治三十二年の十一月[illegible]日に……[illegible]されて行つた。』

それから間もなく『活版工で一つの演說會を催した。それは『社會政策の連中と』片山氏『とを同じ演壇に立たして、社會主義に對する、謂はゞ討論をやらせる積りであつた。』片山氏は彼『一流の社會主義の立場から演說した。高野は……資本と勞働の協調論をホノめかした。桑田君は社會改良一點張りであつた。』片山氏の『後に殿りとして金井延博士が立つて散々に』片山氏の『演說を非難攻撃し、……滅茶々々にやツつけた。片山氏は『其晩は何も云は』ず『次に發行した勞働世界で』それに答へた。『兎にかく博士は其の後、沈默を守つた。』(この邊の事は本篇の前回にも書いてある。相互に參照ありたし。)

『明治三十二年は…… 組合運動の最も盛大な年であつた。』片山氏は『鐵工組合の有給幹事(月給十五圓)』で毎日本部へ出張した。片山氏の『自傳』(既刊の分)はこれで終つて居る。これに續いて(前回に記した)社會主義研究會と、社會主義協會と、社會民主黨との歴史が現はれるのである。

(6) 鍛鐵、赤熱、白熱、默、冷、堅、重

週刊『平民新聞』第三號(明治三十六年十一月廿九日)の『同志の面影』には、片山氏が左の如く描出されて居る。

『年齢は四十六、五分刈の頭、薄痘痕の顏、短かい髭、古い洋服を纏ふた中肉の身體、全體に鍛鐵の如く引締つた男振を一見すれば、何人も其の幼年から今日迄、如何に濁世の風波と戰ひ續けたか、如何に多くの[illegible]に堪へ來つたか、如何に[illegible]に腐敗して來たかといふ經歴を、勞働として讀み得ることが出來るであらう『此鐵の如く鍛へられた身體には、同じく鐵の如き心腸を包んで居る、若し夫れ此鐵の白熱以上に熱せられたる時には、其火花は常に君の舌から、君の筆から、縱横に亂れ飛んで、當る可らざる勢ひである。

『米國の勞働會で、腕一本、裸一貫で遣り通して來た君は、今も猶、腕一本裸一貫で遣り通し、如何なる艱難辛苦をも物ともせずに進み行く、意志の鞏固なのと精神の強いのは驚くばかりで、親からの仕送りで學問した、生白いハイカラなどの、夢にも想像せられぬ所である。

『君の精通する所は經濟學、社會學、歴史である。而も君は決して學者として立たないで常に勞働者の代表者を以て自ら居る、君の態度も其の生活も全く規律あり品格ある文明的勞働者のそれである、家にをつては多くの書籍圖書の狼藉たる中で兀々として筆を取り、曾て倦怠の色を現はさぬ、否な一時寸時も働かずには居られぬかのやうに思はれる。外に出ては、予は一回も君が人力車に乘つたのを見ない

『君の演說は決して草案を作らない、否な多忙なる君はソンナ時間の餘裕を有せぬ、其時と場所とに應じて、直ちに平生腦裡に有餘る意見を、率直に露骨に、少しも巧を弄しないで演說する、演說すると云ふよりも意見の方が滾々として湧出るのである、そして聽衆をして其の[illegible]の氣に打たれしめる。

[illegible]

警察役後何らなく、又北海道の某に出で、[illegible]した、其間、家には母を失つたばかりの五つと三つの可愛らしい幼兒が、數月間、隣の老婆を相手にして父の歸りを待ちわびて居た、噫志士苦辛多しである
（以上秋水記）

『君は實に鐵である、其質たるや堅にして重、其赤熱白熱の時は秋水の言の如し、其平生を見れば則ち默にして冷

『温乎たる和氣は君に於て缺けて居る、是れ君が種々なる世評を受くる所以である、世評の多くが誤解に因る事は固より予輩の堅く信ずる所である

『夫人逝去の時、予は君の面に現はれたる悲痛の色を見るに忍びぬ心地がした、强しとは云へ、君も亦情を矯める人では無い（以上枯川生記）

（b）頑鈍、愚痴、不平、怨恨、惡罵、溫良

片山君の自傳を讀んで最も著るしく感じた事は、君が明白に自己の『弱點、過失』及び『馬鹿な事』等を認め、自己の生涯を『失敗の經驗ばかり』と斷定し、『世渡りに落第した』と歎息し、『予の遲鈍』予の如き愚鈍な者』『予の如き鈍物』『予が如き臆病物』『予や頑愚』『朴訥な鈍性』『田舍ペイの朴訥者』『山出しの男…愚鈍…朴訥漢』などの言葉を殆んど無數に繰返して居る點である。これは彼として弱點の自認であり告白であると同時に、又多大なる不平と不滿と、幾分の失望と、愚痴と、そして又、少なからぬ憤慨と反抗の氣分を現はしたものである。

今一つ、私の[illegible]である。隣の刺身を食ふ富豪の子から、茶漬をさげて歸る自分の貧窮を嘲笑されて、『怨み骨髓に徹した』といふ、前記の事實の如き、又米國から日本に歸る友人に貸した三十弗と、同人に托して『國元の老母に送』つた三十弗と、合計六十弗の金を其の男に橫領された『苦い經驗』を『地團太踏ん』で悔しがり、『爾後一切（人）と交際せざるの良策なること』『殊に金錢上に於ては決して何人とも關係してはならないこと』を敎へられたといふ事實の如きが、それである。

今一つ、私が稍や不快を感じた點を述べておく。それは彼の餘りに無遠慮な、輕率な、而も不必要の場合に於ける、毒々しい惡罵である。例へばムーデーといふ『狡猾なる男』を批評するついでに、それを『田中正造生寫し』と云ひ、『ムーデーも田中も同じく豚目で』『人をあやつること人並以上に越えて巧者であ』り、『正直實直を裝ふこと兩人共に巧妙であるが、兩人の眼玉は之を覆ひ隱すこと能はず』と云つて居る所など、最も甚だしい。又神田佐一郎氏の事を記すついでに、全く何の必要もないのに、『神田は有名なマイザー佐治實然坊主の親友であつた』と書いて居る。何としても、少し餘計な事だ。

然し片山氏が、その幼年時代に於ける故鄕の事物と人物とを語る時、その性情の善良さと溫和さが自然に遺憾なく露出されて居る。『自傳』の編纂方をアメリカで擔任した石垣榮太郎氏は、その部分を評して、『純眞な自然な情を讚美した一つの詩篇』だと云つて居る。

最後に私は思ひだす。西川光二郎君が若し片山君の事を評して、あの人は栗のような人物で、イガだの、皮だの、澁皮だの、色々な物で幾重にも包まれて居るので、容易な事では内部の甘い實に接する事が出來ない、と云つた。私はその時、如何にも面白い、適切な批評だと感心したので、今に忘れないで覺えて居る。

三　河上清君の人物

（a）如何にその面目を改めたか

河上清君が最初（明治三十一年）からの社會主義協會員であつた事は前に記す通りである。當時、彼は恐らく同會員中の最年少者だつたらう。彼は秋田縣の生れで、中央大學の出身であり、又青山學院の卒業生であつた。彼が社會主義者となつた動機は今明らかでないが、その頃、田島錦治氏の著書『日本現時の社會問題』が發行された時、それは實際上、河上君の著述（或は寧ろ反譯）だと云はれて居た。ズット後になつて、この書は、田島、河上、兩氏の共著として再版された事がある。

彼が『余に他の長技なし、只正義の爲に闘ふを知るのみ』の抱負を以て（明治三十三年）萬朝報に入つた事、及び翠陵のペンネームを以てその紙上に多くの論文を書いた事、稍や道德的傾向の社會主義者であつた事、そして明治三十四年、社會民主黨創立者の一人となつた事は前に記した。彼はその頃まだ廿歳台の青年であつた。黑岩涙香は頗る彼を愛して居た。

明治三十四年七月十六日、彼は米國留學の途に上つた。彼はその前、青山學院の出身として、米國ウイスコンシン大學に論文を送り、その貸費生資格を得て居つた。

萬朝報（七月十四日）に彼の『告別の辭』が載つて居る。『今や日本の政治上に社會上に論ずべきの問題と爲すべきの事業極めて多きの時、』彼は『歐米漫遊の意拐々として禁ずる能はざ』るが故に、我々と別れて行つた。實際、その時、彼は甚だ多く日本の社會問題と社會運動に心を引かれて居た。社會民主黨禁止のあとに、社會主義協會が漸く發展しつゝあつた。萬朝報の理想團が設立されつゝあつた。或時、彼は私に向つて、『自分が若し洋行しないなら、必ず足尾の鑛毒問題の爲に一身を投ずるのだが』とも語つた事がある。然し彼は『歐米諸國に客遊』する事に依つて、『聊か余の面目を改むるを得べきか』と希望しつつ、『明媚なる故國の山谷水態に辭し』た。――如何にも彼は、後大いに其の『面目を改』めて故國に報いた。

（b）インタマリッジの理想

萬朝報（七月十六日）に『河上翠陵君送別會の記』が載つて居る。これは種々の意味に於いて、非常に面白い文書である。記者は私。

『時は七月十三日の夕、處は萬朝報社の樓上、行く者は河上翠陵君、送る者は萬朝報社の同人十餘名、食ふ物はパン、カツレツ、ライスカレーの四五品、飲む物はビール、ラムネの二三[illegible]

に流行の勢を極めたる自轉車の流行から始まつた。內村君が最近三日間の稽古に五十回落車した事、黒岩君が其四倍即ち二百回の落車をして、既に樂に千葉まで遠乘するに至つた事、……』『此時黒岩君は、此會が自轉車の倶樂部でなくて河上君の送別會である事を注意した。それからテーブル・スピーチがはじまつた。』

（この頃から少し後れて、幸德も私も皆な自轉車乘になつた。こゝに食ふ物と飲む物の事が擧げてあるのは、我々の間に宴會改正の提唱があつたり、飽醉常習者に對する非難が多かつたりしたからである。）

『先づ山縣君の英文朗讀、これは英文欄に出るからこゝには略する。』（山縣五十雄君は朝報英文記者であつた。）『次には黒岩君、河上君が西洋から歸られた時にも依然我が朝報の友人となり下さる樣に…』『次に內村君……河上君は多くの洋行者のやうに半分米國人、半分日本人といふやうな者にならずに、どこまでも元の日本人で學問をして戻つて來て戴きたい。』『次に幸德、……健康の爲には何事をも犧牲にせられん事を望む、然し主義或は正義は、決して健康と兩立せぬものではあるまいと信じます。』『次に最も愛嬌のある問題を捕へた松居（松葉）君、河上君は曾て、あちらの婦人を妻にしやうかといふお話があつたが、此事だけはよく御熟考あらん事を希望します。』『最後に余（堺）は、かくの如き清潔な、高尙な、立派な宴會を以て河上君を送る事を得たのを喜び、是といふのも、河上君の品性が動機となつたのであると述べた。』

『此に於いて河上君は、山縣君の推奬に對して謙遜の言葉を述べた後、自分はいつまでも平民の友、勞働者の味方であるが、[illegible]はいつまでも朝報社の友人である筈といふ事、自分は……飽くまで日本人たるの體面を重んずるといふ事、……歸國の曉には必ず平生の理想を實行する覺悟であるといふ事、歐羅巴人を妻にしやうかと云つたのは、何も確とした考へではないけれども、然し社會主義の如きインタナショナルの事業をやる者は、先づレーシヤル、プレジュダイス（人種的偏見）を去らねばならぬので、それにはインターマリエージ（國際婚）が一番よくはないかと思つたので、何にせよ是は決して一場の笑話ではなく、グレート、エンド、シリアス、プロブレム（重且つ大なる問題）であるといふ事等を演說……した。』――これらの誓言と豫言が、後になつて如何樣に實現されたか。

萬朝報（七月十七日）には又、『河上淸君の文章と其の送別會』と題する、伊藤銀二（銀月）君の文章が載つて居る。これが又、色々の意味に於いて多くの興味を我々に與へる。

『河上淸君の全體を見たりと斷言するの資格あるなし、何となれば河上君の傳記の大部分は、未だインキに染められざる白紙に屬すればなり。……』

今日之を讀めば、伊藤君のこの言葉に、一種の豫言的皮肉があつたのでは無いかとさへ思はれるが、當時の伊藤君として、決してそんな筈はない。現に、右の續きには次の文字がある。『然れども、河上君が論策家としての一面は何人も是を見るを得べし、君が……尤も進步的新思想を吸收するに適せる頭腦は、年來萬朝報の珍として、……誇示されつゝありしにあらずや』

然しこの時、幸德が、主義或は正義は健康の爲に犧牲にすべきでないと信ずる旨を告げて居るのは、或はそこに多少の、皮肉ではないまでも、警告の意味が無かつたとも考へられない。伊藤君はそれを『親友的忠告』と評して居るが。

伊藤君の文章は續いて云ふ。『河上君の文章は其容貌に似たり、何人も君の容貌に於いて其信ずる所を行ふ外、交際的愛嬌を必要とせざる、意志強き眞面目の青年を見出さゞるものなかるべし、而して交際的愛嬌を必要とせざる人及び天使にのみ賦與されたる、純淨無垢なる幼兒らしき眞の愛嬌は、時として君が破顏微笑の際に露呈するを認め得べし、……』

河上君の風貌には野氣があつた。或は百姓面とも云ふべき趣きがあつた。それを伊藤君は『愛嬌を必要とせざる』と評し、『意志強き眞面目』と評した。然しそれと同時に、彼の顏には折々『幼兒らしき愛嬌』が現はれた。殊にそれが、伊藤君の巧みに表現させて居る通り、『破顏微笑の際に呈露』した。その無邪氣な面影を思ひ浮べる時、私は今日でも猶ほ彼を愛する氣持になる。

理想實現、夢の覺めた後

然らば彼のその後は如何。彼はウイスコンシン大學を卒業した。そしてアメリカ婦人と結婚してインタマリツジの理想を實現した。彼は英文の記者となり、著述家となつた。彼は今、日本政府の擁護者として、『大阪每日東京』の通信員として、國際的大文士たる地位を獲得して居る。彼の英文は實に堂々たるもので、今、日本の英文書きとしては、嘗て幸德傳次郎氏とが一對の二大名家だと云はれて居る。前記の時縣五十雄氏も、萬朝報以來、英文書きの名家であつて、河上氏がウイスコンシン大學にスカラシップを請求した時の論文に對しても、少なからぬ助力をしたと聞いて居るが、その山縣氏が、今では口を極めて、右の『一對の二大名家』を推賞して居る。然しこれほどの世界的才人が、日本の無產階級の爲には、その如きこの洋行以來、全く永久に失はれてしまつたのである。

數年前、私は偶然、星一氏の應接室で、實に久しぶりの河上君に會つた。彼は(私より大ぶん若い筈であるのに、殆んど私と同じく)老いて居た。インタマリツジの理想實現者とも見えず、國際的大文士とも見えず、昔ながらの野氣を存する一老人であつた。その點は私に取つて、意外であると同時に頗る愉快であつたが、あの『幼兒らしき愛嬌』の面影を再び見る事の出來なかつたのは、大いなる遺憾であつた。

その後、私は彼の英文の著書の一つを堺君から見せられた時、ツイその序文の一二ページを飛び讀みしたが、その中に、『私も若い時には一個の夢想者であつた』といふ一節があつた事を覺えて居る。『夢想者』の意味は甚だ深い。

◆次回には木下尚江、西川光二郎氏等の人物を寫し出だす。

◆前回の訂正。九一頁上段十三行、城常太郎は泉太郎の誤。城泉太郎氏は慶應義塾出身で、ガルスト氏の著『單稅論』は、その實、城氏の筆に成つたものだと云ふ。又九三頁下段末行、明治三十三年の社會問題研究會とあるは明治三十年の誤、だと村林太八郎氏から教へられた。村林氏も同會の一人であつた。

プロレタリヤの舞踊

武田忠哉

×

十度の空中交叉と二萬時間のジャムピングのために、ブルジュアジーの畸形兒ニジンスキーは、ガラスのやうに發狂した。デニスは、詩味の高い、併しながら、結局、自己滿足でしかない彼女のオリエンタリズムを、いつまでも謳歌した。そして、ニースで毎日午後六時に起床したイサドラ・ダンカンは、彼女の娛姆的な「將來の舞踊」說――「ギリシャではなくて、ギリシャ的にといふことが問題だ。「自然」と「宗教」が、踊られなければならない」云々――と、抒情過多のために自殺した亡夫エセーニンとの追憶で輾轉した。

×

マリー・ヴィクマンの無音樂舞踊――

それは、表現派的であつた、だが、表現派的以上には、出ることがなかつた。

×

映畫のスピードとジャズの雜音が、舞踊界を、一色に、アメリカニズムで掃過してしまつた。

×

常設館に於けるルヴュー全盛時代――

それが、今、將に來ようとしてゐる。

そこでは、資本主義が、それ自身のクライマクスを、心ゆく限り、誇示することだらう。

×

一時、大衆は、譯もなく、その豪華な資本性のために、眩惑されてしまふであらう。

そして、精力的な興行家と、目の鋭い小市民的ビズネスマンが、ルヴュー時代を謳歌するだらう。

併し、資本主義の極盛期は、それの沒落の、直前に位してゐることを忘れてはならない。

今、實に、資本主義が上向線を辿つてゐる點で日本は、アメリカと共に、世界での特殊國なのであり、その中でも、映畫劇場の經濟的狀況は、特に、上向的であるのだが、やがて、映畫とルヴューの商品性が失はれ、××主義時代となり、舞踊は――映畫と共に――、プロレタリアートの所有物となることであらう。

×

何故なら、無產階級解放のための政治運動の力は、最も貴族的だつた舞踊をさへ、外部から切迫して、それをプロレタリアートの手に奪はないではやまないからである。

現代の藝術家として、ルヴューに參加してブルジュアの反動政策の參謀になるほど、恥づべきことはないのだ。

舞踊を、勞働者の手に奪へ――。

勞働階級の生活苦とそれのマルクス主義的批判と、同時に、彼等への、××までの煽動とが、踊られなければならない。

×

永久に、「肉體」を基調としてゐる舞踊が、どういふ風にして、私等の映畫神經を滿足さ

せるだけの、スピードを持つことが出來るか。私等の勞働者舞踊は、ブルジュア舞踊から、どれだけの技巧が習得されるものであるか。生活だけで全く規定されてしまつてゐる勞働者の肉體を、舞踊化するためには、どんな修練を施したらいゝか。――

　プロレタリア舞踊運動は、先づ、かうした根本的な疑問と衝突する。

×

　そして、此の過渡期を繋ぐ使命を持つ舞踊手は、一つは、無産階級へ戰ひ取られた舊ブルジュア舞踊手であり、も一つは、技巧と體驗と煽動力がやゝ不充分な、インテリゲンチヤ出身の舞踊社會主義者であるのだ。

　その傍流として、或は、その指導者として、左傾的な舞踊批評――云ひ換れば、ブルジュア舞踊の反動性の摘發とも名附けられる――が、潑溂とした活動を續けなければならない。更に、同時に、勞働者出身のマルクス主義者を、實際に、舞踊的に訓練して行く必要のあることは云ふまでもない。

×

　勞働者が、舊社交ダンス的な表現欲――或は、衝動――を持つやうになるかどうかは、疑問だと思ふ。

　私等は、現在のスポーツが、一種の野外ルヴューとして、極度に反動的であることを曝露すべきであるが、一方、勞働階級は、彼等自身の、スポーツを持つことによつて、社交ダンス的な悦びを感じ得るのではないかと考へてゐる。

　それとも、踊ることは――例へば、メーデーの群衆のやうに――、永久に、人間の本能であり續けるのだらうか。

×

　昨年、私がプロレタリア演劇研究所のダルクローズ講習を擔任したとき、私は、そこに、勞働で規定された二三の美しい肉體を見た。それらは、最早、ユリヅミクスによつて、どう改變も出來ないほど固定してゐた、否、完成され、調節され、均齊を保つてゐた、そして、私は、明かにダルクローズの感傷と女性化を欲してないそれらの肉體とその運動の、力學性に感心してしまつた。

　私は、分らなくなつてしまつた、もう時数に擢つた技巧の適用に苦しめられた。

×

　舊ブルジュア舞踊意識から遠ざかるために、そして、映畫のスピードで動かされる勞働の形相を見るために、私は、舞踊美學的には、さうした見地から、今、一撮影所で働いてゐる。

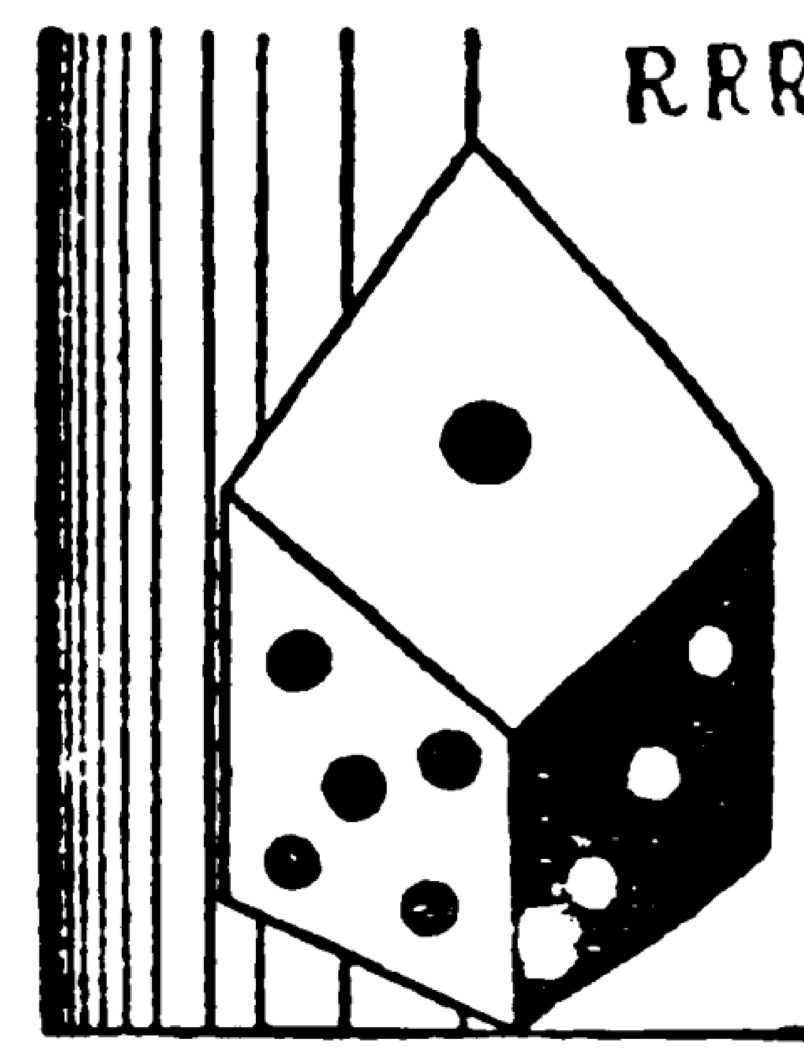
　私が勞働者に近附いて行けば行くだけ、現在の舞踊――及び、映畫――の、無内容な反動性を、益々痛切に認識させられつゝある、而も、舞踊と映畫こそは、最も力學性に富み、××への强力なアヂである力と使命を持つてゐる筈なのであるが。

×

　ブルジュア舞踊手を戰取せよ、ルヴュー不見同盟を作れ、特に、勞働者を、××へアヂる舞踊を提供せよ――

　プロレタリア舞踊運動は、やうやく、多事であらうとしてゐる。　――一九・二・一――

RRR



近代婦人特殊職業漫談

北村小松

ロンドンには女のおまはりさんがゐるさうである。私はまだ一度も西洋へ行つた事がないから本當の事は分らないが、とにかくロンドンには女のおまはりさんがゐると云ふ事だ。アメリカにもゐるんだと云ふ話も聞いた。

おまはりさんを女がつとめると云ふとどうもまだ我々にはピツタリ來ない。おまはりさんと云ふと泥棒に背中からピストルでブツコヌカレたり、演説會場で主義者を、、、、、、、、、、りするすさまじい職業の樣に考へてゐる日本の我々や子供達には不思議に思へる位である。

が、女のおまはりさんと云ふのは、おまはりさんにはおまはりさんでも道案内の樣なものでお上りさんや子供達の世話をしたり、つまり民衆の友達なのださうである。、、、、、、、、職業ではなくて仲々親切で評判がよいさうである。

で、例へば諸君なり、お上りさんなりがロンドンならばピカデリーあたりで、旅の恥はかきすてるつもりで女を追つかけようとする――みつけそこねる。そんな時は道でも聞く時の樣に女巡査をつかまへて聞けばよい。

「あの……一寸伺ひたいのですが、どこへ行けば、あの……その例の女が見つかるでせうか……」

すると女巡査はニツコリと笑つて

「私でよければ四十分後にこの場所で……私の公務はあと四十分で終りますから……」と答へると云ふ話だ。誠にもつて親切なお話で、これは作り話かも知れない。然し日本でも女が道をたづねると親切に連れて行つて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、があつたと云ふ新聞記事を見た事があるから、まんざら嘘ではないかも知れない。

ともかくも、どちらにしろ犬だつて雄と雌とはあんまり嚙み合はない。だから、人間の社會でも色々と女が進出して來て男同士では嚙み

合ふ樣な所でも圓く柔かくをさめて行くのがよろしいかも知れない。

これは別の話の樣だが、女人禁制の軍隊の病院で以前は看護婦は使はなかつたさうであるがいつだつたか猛烈なスペイン風邪が世界的にはやつた時、看護婦をやとつて見たら看護卒ばかりの時より患者の恢復率がづつと上つたと云ふので、今ではどの病院でも看護婦を使つてゐるのだと云ふ話を聞いた事がある。こんな風で婦人が社會にのり出して來て男子の間に立ち混つて働くと云ふ事は經濟的に見れば勿論一つの重大な問題であるが、その他にも性的な、感情的な方面から見ても仲々重大な樣子が見える。

先づ自動車の運轉手や車掌である。――自動車の、あの乘合自動車の車掌と云ふと、あの人達がはじめて現はれた時分には、まるで「女」であると云ふだけで眺めとしても仕事としてもあまりピツタリしたかつた樣子で感心しなかつたが近頃は仲々車掌達自身も、自分達の乘つてゐるのは下駄箱や馬車ではなく、走つてゐるのは街のマツタヾ中で、ボロフオードにしろウーズレにしろこれは新式の交通機關だ――その車掌ともあるべきものがあたり前の不健康なモダンガールに負けてたまるものか、と自覺したらしく[illegible]た調和と云ふ事も分つて來た樣子で髮形も顔の作りも――ものごしも、やせてもかれても三十五馬力のガソリンエンヂンにふさはしい位には調子がとれて來た。中には人絹の靴下を光らせて足の魅力さへも[illegible]してゐる車掌がゐる。――[illegible]かになるのだから。簡素な美しさが本當のモダーンな美しさだと云ふ事がはつきり彼女達に分つたら乘合自動車のお客たちは健康な彼女達の潑溂とした、目、脣、手、足を見る事だけでも、都市生活のヒカラビた感情に休養を與へる事が出來る――と云ふわけである。

圓タクの運轉手でも女は仲々潑溂としてゐる。第一女の運轉手だと、亂暴なやり方はしないだらうと云ふ氣もちが來るのがよろしい――然し本當は彼女達のドライヴする車が女性的に柔和に走ると云ふわけでもないのであるが――。

とにかく私の場合では自動車の運轉手も女流飛行家も同じ樣に好ましい印象を與へて呉れた。私の目の前に現れた彼女達は飛行機の場合でも自動車の場合でも乘馬ズボン風なパンツに深い編み上げの靴をはいてゐた。勿論、短いスカートの彼女もあつたが私には男裝の彼女達がはつきりしてゐる。なぜと云ふのに、彼女にドライヴして貰つた古フオードの自動車は全く女性的なデリカシーを、これつぽちもあつてゐなかつたからである。スピードはチヤンチヤン出す。マゴマゴしてゐる車は燕の樣に追ひぬく。――昨年の夏私は田舍へ歸つて家内の實家へ行くために山道三時間半をドライヴして貰つたのも同じ樣な乘馬ズボンの女丈夫であつたがこの時も古シボレは猪の如く突進して子供と家内は何返車の中でゴムマリの樣にとび上つたか分らない。車を下りた時は私の神經の半分は[illegible]流れてしまつて[illegible]ほどの感じさせてゐた。――自動車の運轉手は[illegible]

が、それにしても思ふのは女流飛行家のはかなさである。日本でも今や航空路が開けて朝日新聞などは一週三往復もドルニエ系やK・B・C型の旅客飛行機を飛ばしてゐるし今年から日本航空輸送會社が、フオッカーやドルニエで上海や大連線を開始しようと云ふのに日本の航空當局は女流飛行家は一等航空士になれない樣な條文を作つた樣子である。勇ましく二等操縦士の免狀をとつた朴敬元女史の免狀にも「曲技を行ふを得ず」等と云ふ樣な制限がしるされてゐる樣なわけだから職業としての女流飛行家の前途は開けさうにないのは殘念な事である。

仕方がないからこれもやつぱり自動車でもやらなければなるまい。さうだ。彼女が美貌ならば一臺のロードスターで圓タクを初めるとよい。二人並んでドライヴするのだからお客は必ずつかうと云ふものである。

こんな事で思ひ出したが近頃圓タク專門の職業婦人が現はれるさうだ。つまり銀座なら銀座で、この頃ならはショールに半分顏をうづめて、キッドまがひの手袋をはめた手を上げて、通りかゝつた助手のゐない車を呼びとめるのである。

「どちらまで……？」その運轉手が若くて小綺麗ならなほおあつらひ向きだ。

「あの……代々木の原つぱを通つて行くんですけど……よくつて？」

「えつ……そりや……少し遠いですけど……よござんす、參りませう……」大抵の運轉手なら女の云ふ通り車を走らせる。

代々木の原つぱへ來る。と「あの……運轉手さん、ちよつと止めて……」

「え？」と運轉手は驚いて車をとめる。

と、これからがその、、、、、である。

「、、、、、、、、、、？」「、、、、、、！」と云つた風な、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、と車は又銀座へ後もどり──、、、、、、、、の損をする、と云ふ新らしい職業があるさうである。

こんな職業はちよつと困ると思ふのであるが、どうも致し方あるまい。

とにかく女は、女と云ふ點で男に對して一種のアピールがあるわけだ。このアピール──云ひかへれば一種の魅力が經濟的な根據と一所になつて色々な方面へ現はれて來るわけであるからかなはない。

産婆や女醫は昔からだが女齒科醫は新らしい方だらう。無論齒の惡いのは男とはかりきまつたものではないのだが、まづ男の立場から云つて見ると同性の齒醫者に口の中をかき廻はされるよりは女の柔い手でやられる方が少々痛くても痛く感じない樣な場合がないでもない。先の自動車と同じに齒科醫のエンヂンが女性的に廻轉するわけのものでもあるまいが、そこはそれ女性と云ふ點、その點が一種の魔睡劑の効用をなす場合があらうと云ふものである。──かう云ふ理由か

どうか知らないが私の知つてゐる女歯科醫は大變なお客である。——不眞面目な物の見方だとお叱りなさるな。この性的魅力が大きな役目をしてゐる近代的職業がどつさりあるのだから——

たとへばあの街の所々にある小さなガソリン賣場のガソリン・ガールを見て見給へ、あの小いボックスの中で雑誌でもよみながらガソリンをなくした自動車を待つ娘達（中には娘でないのがゐるかも知れないが）——あの人達は事實、顔の美しさとか話しつぷりとか、つまり彼女の「イツト」に正比例して賣り上げの差が出來ると云ふのだから大したものである。

そこから行くと白帽などゝ云ふのはどう云ふものかな？　白帽即ち赤帽に對する婦人のステーション勞働者であるが——白帽はあんまり美しくてきやしやでは荷物をもたせるのが申しわけなくなるかも知れないな。とにかく東京では赤帽連の反對でまだ姿を現はさない樣であるが大阪では相當やつてゐるらしい女、子供が行く先をたづねたり、小い荷物を持つて貰つたりするに親切な白帽がいいだらう。又は見送りに女氣一つないお客が男ばかりの見送りの中に紅一點を、はかなく咲かせる術ともならうと云ふものだ。

然し、私に、最も新らしくて、そして最も淋しい職業に見えるのは

▼マネキン・ガールである。

▼マネキン・ガールとは所謂[illegible]だ衣裳を着て見せる生きた人形である。西洋の活動寫眞を見てゐるとよく出る奴だ。お金持ちのお孃さんが婚禮の着物をお母さんと買ひに行つたり、大金持に愛された田舍娘が着物を買つて貰ひに行くと、色々な着物を着た色々な女が現れ、色々なポーズで一まはりして見せる。

あれだ！　まざまざと現代のみぢめさを見せて呉れるあれだ。日本のマネキンはお人形のちよつと進んだやつだ。河野通勢圖案する所のキモノを着て歩いて見せる。——と云ふ所だ。

マネキン・ガールは辛い職業だ。まだ日本のお客は彼女達を、女優をうけいれる程度にも自然にうけ入れて呉れないらしい。彼女達にしてもまた、自分として見せるべき演技とも云ふべきものを創造してゐない。第一に見せるべきものは着物である。然し人々はまだあまりに強く彼女達を見るわけだ。つまり彼女達は男達女達の前にさらされた女性としてしか映らないのである。パラマウントの映畫に「店曝らしの天使」と云ふのがある、この題名を見た時私は今日の日本のマネキン・ガールはこれだ！　と思つた。彼女達は勿論生活のためにこの職を戰ひ取つたのではあらうが、それだけに「店曝らしの天使」だと云ふ事を痛感するであらう。マネキン・ガールは淋しい。

ここにマネキンに似た樣な發音でマニキュア・ガールと云ふのがある。

こんな話がある。ある大學の運動部の學生の話であるが、彼はある時[illegible]に、驚くべき藝術の[illegible]にあると云つたものである。

「[illegible]！ 僕が今日、[illegible]らし、[illegible]はいつて理髪して貰つたんだよ。所が例によつて顔をそつて貰ひたがらいい心持ちに眠つちやつたのさ！ ふと氣がつくと僕の手を握つてるものがある。あたたかい柔い手だ。どうも變だ！ 眼をあいて見るとモダン・ガールが俺の手を握つて俺を見上げて笑つてるぢやないか！ 俺もカッとしたね。で驚いて、あたりを見ると何でえ！ 面白くもない。隣りでも同じ樣な女が隣の奴の爪をといでやつてるぢやないか！ はつはつは！ おどかしやがつて……俺あまだ女にあんなぐあいに手を握られた事はないんだからな……」

つまり、マニキュア・ガールの話である。爪磨きの女である。爪をとぐなどゝ云ふとまるで猫みたいな話で田舍の校長さん等は「その爪で女でもひつかけるんか？」など云ふ方がないとも限らないが、とにかくアメリカ映畫の影響か、美容術が盛になつたせいか近頃は男でも爪をみがく人が多くなつた。勿論無精にのばして爪の間にまつくろい黒糞をためたり小指の爪を黄色くのばしたりしてゐるのは感心した話でないのは分り切つてゐる。だから爪のまん中をとんがらして櫻貝の樣に桃色に光らせてゐるのは淑女のたしなみであらう。もつとも紳士ならなほさら指先や爪はなほ念入りに掃除してをく必要はあるわけだ。それにしてもハサミで切り、ヤスリでとぎ、ナメシカワでみがき上げて光澤を出すのは大變な努力だ。

それを手つとり早く光らせるためかどうか知らないが爪にぬるエナ[illegible]てゐる人を私は見た事があるが、あれはグロテスクである。人間も動物にはちがひないがあんたに爪を光らせてゐるとねずみでもとりさうな動物だ、と云ふ氣がして變である──つまりふだんはほとんど意識にのせてゐない爪の存在があんまりはつきりするせいであらう。

とにかく何と云つたつて指先と指先の仕事だから、この爪みがきの婦人達はデリケートな性的魅力のある職業だ。

もつと觸覺で行く職業婦人がある。云ふまでもない、それはダンスホールのダンサーである。

憂國の志士達が、ダンビラをふりまはして踊り場へ切り込んだのも今は昔だ。そこここにダンス場が出來る。踊りに來る人々も無數だ。

あるダンスホールを設計した友人の話によると、彼が設計してやつたダンスホールなどは二ケ月で元がとれたと云ふすごい景氣である。

まづ、ちよつとその邊のダンスホールをのぞいて御らんなさい。あの調子だ。

宵闇せまれば
悩みは涯なし
みだれるこころに
うつるは誰が影
『君戀し』
くちびるあせねど
涙はあふれて

今宵も更け行く

あの日本製フォックストロット。甘い感傷と明るい憂鬱のジャズで、とにかくひるまの練習時ならば一回十錢、夜で二十錢位で、しなやかな女と相抱いて踊れると云ふのだから流行するのも無理はなからう。晝など、金ボタンの學生もゐる。前だれかけた着物の番頭さんの樣な人もゐる。――すさまじい光景だ。

私の知人で、もはや、よはひ不惑に近い紳士がゐる。その人はある大きな商賣をもつてゐるので晝ははんてんを着て働いてゐるが夜になると、スマートな服に着かへて踊りに行くと云ふ熱心さである。その理由はかうだ。

「私は決して浮いた氣で踊るのではない。私には妻もあり子供が六人もゐる。然し、私は保健のために踊るのだ。第一胃が丈夫になる。私の何年もの神經衰弱は今はきれいになほつてしまつた。動作は優美になるし音樂がはつきりと樂しめる――この上の保健法はたい！」とかう云ふのである。

何はともあれジャヅである。うす赤い光である。サキソホンである。バンヂヨーである。そしてチューインガムである。

踊子達のくちびるはチューインガムをかみながら魅惑的に動く。(あまり上品な踊り方ではない。)ガルソンヌの斷髮、乳房の小丘を描く洋服、或は戰色のキモノ、濃い眉、濃化粧の目、そして唄なあのチュインがんとか、[illegible]

それで彼女達はお金になるのである。觸覺と聽覺のリズムがお金になるのだからすごい。

觸覺と云ふと、これもどうも感心した話ではないがついでだから書くが、近頃、ある方面の裏町の酒場では、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、と云ふ觸覺商賣があると云ふ世の中である。

勿論これはカフエーの女の變形であらう。

カフエーの女と云ふと全くカフエーの女ほど、何が職業だかはつきりしないものはない。第一カフエーと云ふのは紅葉があつたり櫻があつたり正宗があつたりビフテキがあつたりシウマイがあつたりウイスキーがあつたりカレーライスがあつたりチーズがあつたり飯があつたりコーヒーやお菓子がある。だからカフエーの女もエプロンをかけた振袖姿と云ふ事になるのだらう。――全く人々は何をしにカフエーに行くのだらう。

食事をするためにか？――食事をするためならばあたりわき返る樣な歌や笑聲や喧嘩に氣が取られない樣な靜かなうまい家が無數にある。第一コックに聞いて見るといゝ。いはゆるカフエーで、女とふざけ通つこゐて料理を冷たくしたり、半分かぢつて煙草の灰皿がはりにしたりする樣な所ぢや、ナカシクツテ腕はふるへませんと、云ふのだ。

では飲むためにか？ 飲むためなら、飲むためのソースくさくない [illegible]

ミでもあると云ふものだ。
女を目的にしてか？　女なら本牧の女の方がはつきりしてめんどうくさくない。

と云つた風になりはしないだらうか？

カフエーの女はして見ると花柳はるみや渡瀬淳子の様に酒のサーヴイスを職業としてゐるわけでも本牧の女の様に全觸覺を賣り物にしてゐるわけでもない。がそれでゐて、賣り物の様でもあり酒のサーヴイスもするのだ。その混とんとしたややつこしさがセンチメンタルな人達には神祕的なアトラクションになるのかは知らないが——。

とにかくクラ、ボーや、バクラノヴの魅力がピンと來る人には——ガルソンヌに刈り上げた女のえりすぢに、魅惑を感じる人には——チヤズやサキソホンに淚をこぼす様な人達には玉の井やかめゐどは向くまい。それかと云つてカフエーのエプロン姿の振り袖や、銀杏返し的センチメンタリズムが可笑しく見える人達には異國的な横濱の職業婦人が向くと云ふ事になるのだらう。

本牧でもよろしい。大丸谷でもよろしい。夜になると灯がともる。夜霧の中に××××ホテルと云ふイルミネーションが淋しく輝き出すだらう。海には汽船がゐるし、バルコニからは夜の海も見えよう。

扉を開いて小いホテルにはいつて見給へ、或はそこはニユーメキシコあたりの酒場の様に殺風景かも知れない。然しロシア女が蛇の様なチヤツをやり出すだらう。

或は又他のホテルを訪れて見給へ、華やかな電燈の下に長じゆばんの様なハデなキモノをガウンの様にひつかけた斷髮の女が牝猫の様な目つきをしてゐるだらう。

ここにもヂヤズとダンスと、それから二階に行くと、月夜ならば窓からベッドに月もさそう。或はうす絹のシエードを通した電燈の光で天井に蜘蛛の巣がゆれてゐるのも見えようと云ふのである。

諸君も驚くであらう。一體全體、こんな職業婦人達を、何が、誰が、こさえたんだ？

よもや神様ぢやあるまい。

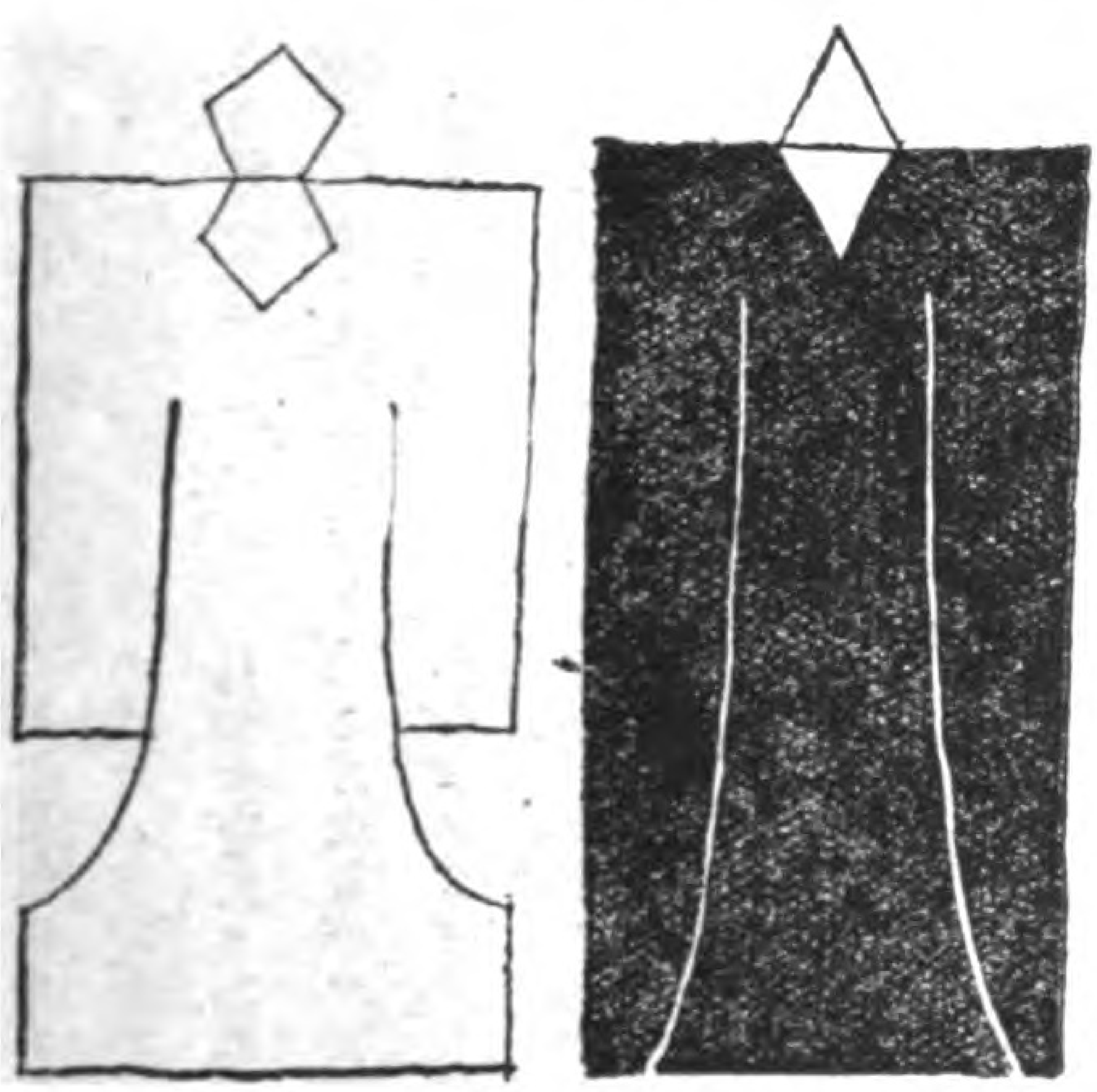
モダンお雛様の話

武井武雄

雛は雛形であつて人間の小さいの、つまり人形といふ意味に發してゐる樣です。然し雛遊びといふ言葉で呼ばれ、今日の解釋による人形の意味が芽生えてきたのは漸く藤原時代にあつて、それまでの謂はゞ雛の母胎をなす形代は、わづかに迷信の對象物として扱はれてゐたに過ぎません。

雛の祖先を溯ると結局神代まで行くことになりますが、伊弉諸尊以來盛んに行はれた禊祓の際に、身の罪穢をのせて川へ流した形代（又はヒトガタ）こそは日本のあらゆる人形の濫觴をなすもので、形代より玩具への進展を辿る役目を果したのが雛であるといへませう。

形代が天兒（奈良朝）になり婢子（平安初期）になつて、實感の上で愛翫の素質をもつに至つても、用途は依然として罪穢を流す祓ひにあつて平安の聲を聽く迄の長い間、末は川魚を友達としなくてはならない寂しい人形であつたわけです。



現在神社から出る形代の一例

雛遊びとして遊びの意味が漸く芽生えかけて來た藤原時代にも、要するにその遊びなるものゝ主體は禊祓をすることにあつたので雛は流される運命を依然として背負はされてゐました。鳥取、粉河、德島、廣島等に現存する流し雛はその痕跡を今だにのこしてゐるものです。又紀伊、房總等で船魂樣と稱し、船の守護神として安置する雛は、船に一旦緩急ある場合生贄の代りとして海に投ぜられるもので、やつぱり祓の頃の面影をのこしてゐます。

今日我々が普通雛と呼ぶ形式のものは、その誕生が悉く德川期にあるので、室町雛、寛永雛、享保雛、治郎左エ門雛、古今雛、等々々と代表的なスターが現れ、それ〴〵時代の嗜好に投じて人氣を博したのですが、就中享保雛、治郎左エ門雛を以て絶頂とし、雛のルネッサンスともいふべきものに當ります。落噺無事志有意で治郎左エ門雛が白酒に醉つぱらつて「なんと治郎左エ門、おのしなどはむかし出の安くない男だが近年の出來ぼしめらに押付けられて賣れないとはごうはらな事だ」と悲鳴をあげてゐるのをみると、寛政十年の頃にはすでにこれに倦怠した人氣が更らに擡頭した古今雛、芥子雛等に移りつゝあつたものと見えますが、でも治郎左エ門の勢ひはなか〳〵大したもので、京都から江戸大奥へ納める時の道中では、この雛に對して片つぱしから土下座をさせたといふから豪勢です。その次に出て來た古今雛が德川[illegible]雛を壓して



總決算をしたといふ形ですが完成されたものといへば足りるのであつて、すべての藝術に於てからした役割をつとめる作と同じ樣に覇氣を缺いて居るので治郎左工門迄の樣に覇氣を缺いて居るので、治郎左工門迄の樣な魅力は消えて了ひまづ以て行きづまりといふ事になつてゐます。今日內裏雛と呼んでゐる立體的の雛はつまり享和の原舟月によつて創案されたこの古今雛のタイプを繼承してゐるわけであります。

雛の大さも享保の頃が恐らくその絶頂で、二尺に近い化け物が現はれ、桁外れに華美を競ふ傾向があつたので將軍吉宗から、八寸以上のものを作つてはならん。純金の裝束を着けてはならん。などと細かい事まで法令が出てゐる程ですが、化政度の芥子雛に至つては大いに縮んで、寸に足りないものが歡迎される樣になつてゐます。然し寸法の變遷こそあれ一層ブル好みの程度を濃厚ならしめてゐるので、芥子雛などは民衆と何の交渉をも持たずに大奧で呑氣に遊んでゐたもの丶樣です。

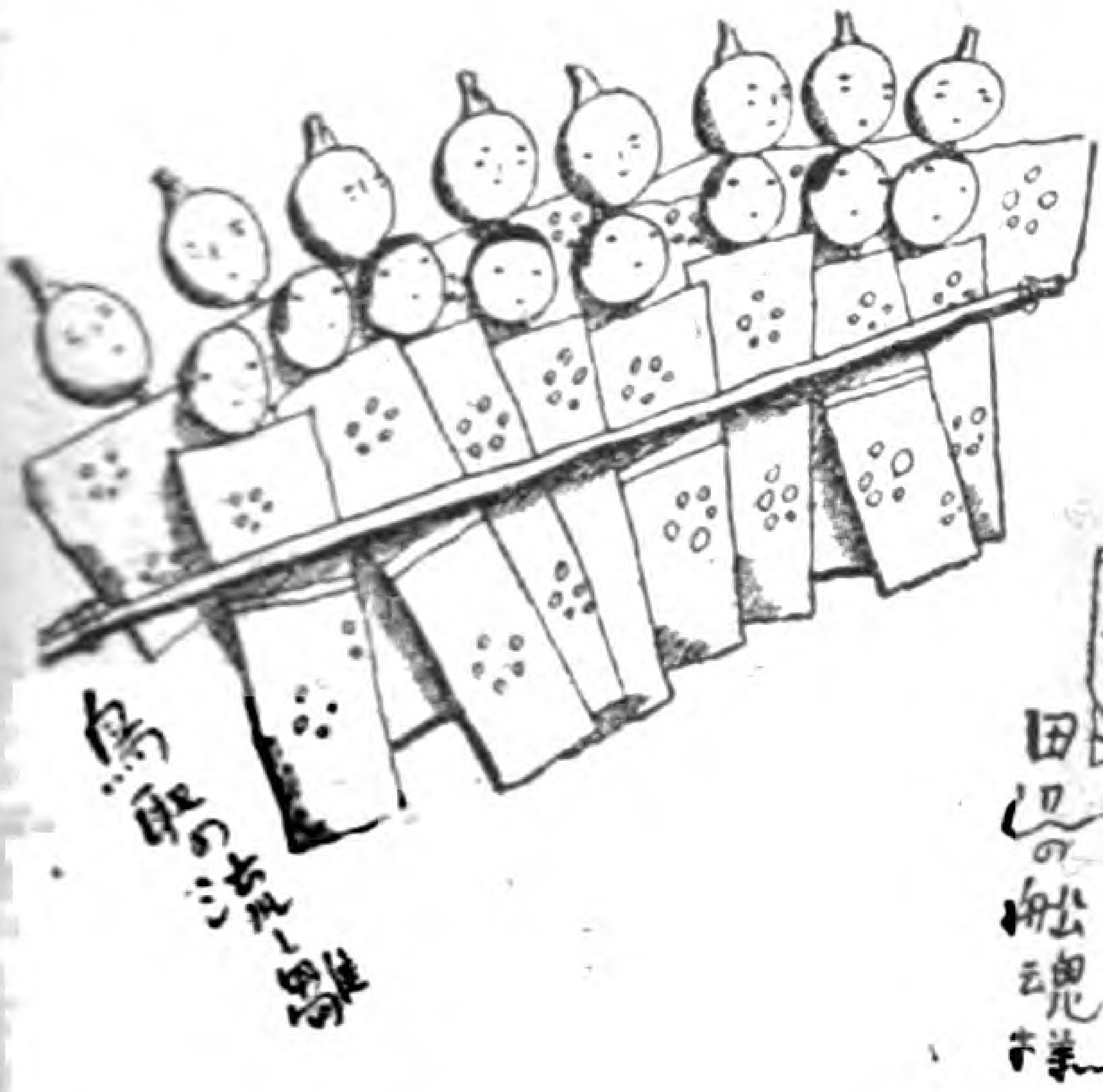
雛の創作は治郎左工門に至るまで京都に獨占されてゐたのですが、古今雛と芥子雛とになつてはじめて江戸が氣勢をあげ、その株を奪てはみたもの丶すでにこの時は人形藝術刧興の氣魄は下火と見られる樣であります。大よそこれは都のブル系統の雛の大勢でありますが、プロ雛ともいふべき田舍雛では越ケ谷、鴻ノ巣その他の時代ものは別として、今日郷土玩具として全國にのこる土玩產地六十餘ケ所のものについて見ても、拾ふべきものは極めて稀れであつて、結局前述の流し雛の類に止めを刺すの外ありません。雛は他の郷土玩具の樣に鄙唄の聲を聽き、童心に則して孤々の聲をあげたものでなく、如何にして都ぶりの美しい雛を安價な方法で享樂するかの解決方法として生れた無理な模倣にその誕生があるので、さつぱり滋味がないのだらうと思はれます。

穢れをなすりつける爲の最も役割の惡るい



治郎左工門雛

形代が、どうした廻り合せかとう／＼九重の奥のさまを寫す雛にまでなり上つて、出世の親玉となつた爲に、雛は即ち都ぶりと折紙がついて、變り雛など思ひもよらぬ昔の事では、牧歌の中に生れ出る郷土の雛など無いのが當然といふことになりませう。鹿兒島の糸雛その類型の三河雛、土佐の糸巻雛、松本の七夕雛、日向の青島雛、琉球の紙雛等はまづ郷土的の特色をもつものでありませうが、鳥取その他の流し雛の素朴さには一寸及ばない感があります。





變り雛としては、文政の俳人銀鶏が銀鶏雛を作つてゐますが要するに立雛の變態です。それでも當時としては驚くべき大膽の仕事であつたかもしれません。それから奈良人形の抱き合つてゐる睦雛、この邊が德川期の變り雛で、この外恐らく五指を屈する程度であつた樣ですが、何といつても變り雛は全く童心を離れて大人の好奇心を惹く爲にのみ案出され、この時分からすでに正道を踏みはづしてゐたのではあるとしても、美意識を離れなかつた事だけは今日に比べてまだ見處は充分にあつた樣です。

變り雛の全盛時代、といふよりもむしろ中毒時代として今日の如きは全く凄味を帶びるに至つてゐます。祓を行ふ形代から轉じた兒女の健康を祈念する雛祭りは、どこまでも子供中心の年中行事で、變り雛としても童心を中心として進出すべきが正しい方向であつたのに、大人の、しかも好奇心が中心となつた爲にまづ邪道の一歩を踏み、その上あれやこれやと凝り固まつて只「變り」といふ點にのみ固執焦心した結果、遂に美意識をまで失ふに至つたのは、何ともはや沙汰の限りといふの外ありますまい。炭に眼鼻をかいた深山雛、インク壺の秀才雛、葉巻をつき立てたおたばこ雛、さてはコーラス雛、銀ブラ雛、スポーツ雛、ダンス雛、アダム・イヴ雛、モボモガ雛ときてそれから芝居を片つぱしからもつて來て雛壇へ押し込め、やがてはアメリカ渡りのスクリーンものが日本のお節句を手傳つてくれるとあつては變り雛のゲップに惱まされる事際限もありません。

江戸末期の頽廢的な贅澤がすでに大人の嗜好を中心としてゐたのにその端を發し、たま／＼雛が兩性をモティーフとしてゐる點がます／＼それを助長して、大人の畑へ斯くまで惡性に引つぱり込む有力な起縁をなしたものとも見られますが　童玩運動がまだ嗜眠狀態にある內は、大供當て込みの化け物雛は當分しのぎを削つて輩出する事でせう。

まさか說教雛までは出來ますまいが、まるで雛をニユウスと間違へてゐるのではないかときさへ疑はれます。

そんなことはどこを吹く風かとばかり、子供は子供でおとなしく手廻りの紙きれや綿でも拾つて自分で、好きなお雛さまを作つてゐるのがよからうと思ひます。

新聞論

現代の新聞と新聞記者

長谷川 [illegible]

新聞紙の[illegible]

は、一般[illegible]

がある

資本主義以前の社会に[illegible]

資であつて、[illegible]

術、[illegible]術、その他一[illegible]

は、これらのものが[illegible]

かれば、生産者の作り[illegible]

生産者自身の[illegible]

る、資本主義[illegible]

[illegible]

識構成の一過程とする。ニユースは、幼稚な社會に於ては言語をその唯一の機關としたが、後には新聞紙といふ形態をとつたのである。新聞紙の出來る前は、消息通、物識りの人間そのものが新聞であつたが、後には紙片がそれに變つたのである。

新聞紙はこの機能がその主たる効用だから、如何に商品化しても、この機能を失つては、効用を失つた物品、たとへば氣の拔けた酒と同じく、商品とはならない。だから商品としての新聞紙は此機能に制約される。蓋し新聞紙の機能は、商品の効用と異つて常に、生活の目的を充たす客觀的の物質的効用ではなく、生活者自身の社會生活の意識構成のための機能だから、新聞紙は資本家にとつては、單にそれを商品として生産して利潤を獲得するといふ外に、その機能を、自己の社會意識による支配の目的に利用することを得るものである。

新聞紙は始めは――それが商品とならない頃――はそれ〲意識を異にする社會が自己の社會意識の普及によつて一定の社會統制の目的を達する機關としてそれを製作したものであつた。我邦に於ける新聞事業は、我邦に在留する外國人が、自己の社會集團意識の機關として、又自己の近代商業組織の對象として日本を開拓する目的をもつて、創められたものであつたが、當時徳川政府も、開國の已むを得ざる事情を周知せしめる必要上、言ひかへれば、自己の統制意識を普遍的ならしめる必要上、外國新聞を飜譯して公にすることを始めたのであつた。

されば今日の新聞紙も、資本主義的商品として利潤獲得の手段たる外に、同時に資本主義的統制の機關言ひかへれば、資本主義社會の意識構成の機關としての機能をもつのであつて、そこから此特殊の商品自體の矛盾が産れるのである。

單純の利潤獲得の手段としてならば、新聞紙はたゞ社會に最も多數を占める集團の意識に投ずる低級のキネマのやうなものであつていゝのだが、然し、社會の多數はキネマのやうな娯樂の目的以外に新聞紙に對しては積極的の要求をもつてゐる。即ち社會集團は、それの社會意識の表現又は梃子としての機能を新聞紙に求める。キネマのやうな娯樂機關に對しても大衆は、やはり自己の社會意識の表現を求めるが、これはキネマ資本家の方からいへば、その要求を他の方面に誘導せしめて、多數を惹つける方法を講じ大衆の社會意識に觸れることを避けることが比較的容易である。即ち大衆の社會意識に訴へずに、寧ろその反社會的な動物本能に訴へ、衝動的な劍劇とか、頽廢的感覺に投ずる悲喜劇とか、單純な好奇心に訴へるトリックとかを以て、その目的を達し得る。之反新聞紙は、無論これも大に映畫に於けると同じ方法を利用し得るが、然し、元來が、娯樂よりも社會意識の機關であるから、大衆は、それに現はれる社會意識の傾向を選擇すること、娯樂機關以上に嚴重である。

で新聞紙の資本家は、出來るだけ、新聞紙そのものから、その特殊の社會意識の表出の機關としての性質を[illegible]

に共通の生活興味に基いた性質のものにしやうとするあらゆる社會集團に共通の生活興味といふと、それは、やはりキネマのそれと同じく、動物的本能に基づく、官能的の昂奮である。貴族にも平民にも奴隷にも、共通の興味は、これらの人々の階級的特殊性の上に成立する特殊の意識でなしに、もつと原始的な、鬪爭本能や性殖本能やの衝動であるが、新聞紙は利潤獲得の手段としてはこの動物的の鬪爭本能、性殖本能その他一般に普遍的な官能的の要求を充たすやうな新聞を作らしめようとする。つまりそれの社會意識的性質を捨て去つて、官能的性質を發揚せしめんとする。

無論、それと同時に、新聞資本家は、決して新聞紙の機能を利用することを忘れるものではない。彼等は新聞紙に對して、一方で利潤を得ねばならぬ要求をもつと同時に、それを自己の階級的意識の支配に利用する要求をもつ。それは便利のことではあるが、矛盾した要求に相違ない。新聞紙に對する大衆は、その動物的本能を刺戟されることを喜ぶに相違ないが、それと同時に、その新聞紙が、自己の社會意識の表現たることをも要求するもので、資本家意識の發揚された新聞を喜ばない。又反對意識の研究の材料としての新聞紙などは決して大衆の要求する所でない。

商品としての新聞紙は、何うしてもその時代の最も多數な社會集團の意識に投ずる必要があるので、新聞資本家にとつても、自己の機關たる性質が露骨に新聞紙に現はれることは禁物である。それは、政黨の興味を、[illegible]しないのと同じ事情である。かういふ事情が、ある程度まで新聞紙の純商品化を牽制する。

更らに、新聞紙といふ商品は、その生產の過程に於て、普通の商品と異る所がある。普通の商品に於ては、生產勞働者自體は、決して原料の性質や種類を撰擇するものではなく、從つてその製品は、生產勞働者の意識の形態でも何でもなく、生產者の意識とは別な原料の商品化である。反之、新聞紙といふ商品は、意識の表現としては、それを作る新聞記者の意識を通じて現はれるために、それの包含する感覺及び感情には、何うしても記者自身の意識の性質や傾向が全く現はれないといふ譯には行かない。新聞の記事や論說を通して現はれる意識に、記者個人のそれが現はれないやうにといふ努力の拂はれてゐることは、新聞が個人意識でなしに、社會的意識の客觀性を具象すればするほど優良のものであるといふ性質上當然のことであるが、然し、その努力は絕對には成功しない。新聞は記事にしろ、論說にしろ、記者自身の筆にあるものであるから、如何に客觀性をそれに與へやうとしても、ある程度でその記者自身の意識が表現される。そこでその記者なるものが、純然たる新聞資本家の階級的立場にあるものならば、その場合、新聞資本家の階級的要求と、出來上る新聞紙との間に矛盾はない譯だが、多くの場合それと反對の現象が起る。卽ち、新聞紙の事業は、その中には巨額の利潤を擧げてゐるものがあるが、今日に於てもア

メリカのやうな恐ろしい好景氣の國を除けば、新聞事業で巨額の利潤を擧げてゐるものは寧ろ少數で、それは機關としては、大部分現代社會的統制即ち資本主義社會の統制に服してゐるが、それの利潤獲得の手段たるよりは、意識普及の機關たるものの方が多數である。從つて、新聞記者の待遇は、あらゆる資本主義事業のうちでは、甚だ不良の部に屬してゐるのである。その事業自身の利潤の低いために、それに使用する機械も廉價ならざるを得ないのである。そこから新聞記者の社會意識は、彼れが余程迷信的乃至觀念的の人間でない限り資本家階級的ではあり得ない。新聞記者は概して知識階級の中の專門家的性質のないものが入り込み易い職業であるから、インテリゲンチヤ的特徵に富た人物が多い。これは、時代の過渡的性質を代表するに適した人格であるから、新聞記者は、階級的定型をもつた生活意識にはいつも批判的態度をとる。而かもそれの生活の現實は、決して資本家階級的ではないのであるから、彼れらの作る新聞紙は、決して直ちに資本家意識を擬るといふことはしない。しかも直ちに大衆の階級的意識を代表することもしないが、彼等の感情の傾向は資本家階級的であるよりは寧ろ大衆的である。中には極端な政治的興味を持つてゐて、それがため資本家社會の政黨政治的統制意識に沒入してゐるものもあるが、さういふ記者の多い時代は、一般大衆の間にも、政治青年の數が多く、大衆の階級意識は、いまだブルジョア政黨的宗派意識を脱しない時代であるから、やはりそれは此の時代の必然的意識であるといへるし

何づれにしても新聞記者はその生活の現實に於ては資本家階級的ではない。從つてその意識の傾向は、彼等が作る新聞紙が資本主義化した後に於てもなほその新聞紙に現はれる。然し、これは強ち商品としての新聞紙にとつて惡いことではないので、今日の新聞生産の上に於ても、ある程度まで、記者自身の意識の表現が許されてゐる。而してそれが商品としての新聞紙の性質をある程度まで大衆的意識に接近せしめ、新聞の機能的性質を保存せしめる。

が新聞紙の資本主義化の過程の進捗するに伴つて、この記者自身の階級的意識の表現は次第に壓迫される。日本の例によつても、それは、政治青年的大衆向きの記者の淘汰から始まつた。商品としての新聞紙はある程度まで、此政治青年的大衆向きを必要とするが、惡いことには、政治青年向き新聞記者は、必ず政治家的である故に黨派的である。商品新聞紙は、この黨派的傾向の禁物たること既述の如くであるから、新聞紙が商品化する過程に於ては先づこれが淘汰され、又新聞社が企業化して、一般企業と同じ組織そのものが營利の目的物となるに從つて同じ淘汰の起ることを免れない。福地源一郎、沼間守一、尾崎行雄、犬養毅、三宅雄二郎、島田三郎その他第一流の新聞記者が、新聞界から退けられたのは皆その過程に於てであり、その當時からの一流記者であつて今日まで地盤を守つてゐた德富蘇峰も最近に於て退職の餘儀となることを免れなかつた。

資本主義化した新聞紙に、一般資本主義[illegible]

うに、個人的趣味による製品たることを本質とする如く、商品は個人の色彩のあまりに濃厚に現はれることは禁物である。中世の商品は、誰れの作、誰れの好みといふことを生命としたが近代商品は廣く一般共通の趣味によるもので、狭い特殊の趣味は大量的商品の生命に反する理由である。されば今日の新聞紙は、昔のそれと違つて記者の有名となることを避ける。これは記者が有名になると、その新聞紙がその記者によつて死命を制せられる虞があると同時に、今日の商品は質より量を重んずる關係上、いかに有力な個人的努力も、決して低劣な一般的興味ほど大衆を迷はし又は惹きつける力があるとはいはれないから後者のために前者を捨てるのである。商品新聞は、有力な記者の存在のために、その汎社會的な商品の性質を妨げられることは大打撃である。何れの點からいつても、記者個人の有力となることは避けねばならぬ。その上、有力なる記者は必ず一定の社會意識の傾向をもつであらうから、それが新聞紙上を占領することも商品としての新聞紙には禁物である。

更らに今日の新聞紙は、資本主義的企業としては恒久のもので、昔の新聞紙が、個人の意見發表の機關としてその生存中それを必要としたといふやうな性質とは異る。從つて新聞紙の組織には、それに對する事業家の移り變りを普通とすること一般企業と同じである。それはその企業組織そのものゝ交換價値を出來るだけ高價に保たねばならぬ。然るに個人的に有力なる記者が、その組織の下に使用人として存する如く、その新聞社上の組織そのものの本質には甚だ危險が多いこととなる。新聞社の賣買又は組織變更の當時に於ける紛擾は必ず有力な記者の存在することに原因する。『日本』新聞が陸實の手から伊東欽亮に賣られた時には、殆んど全社員の同盟退社といふ事件を起したのは、賣られた新聞社の記者の中心に三宅雪嶺といふ有力な記者の存在したためであつた。かゝる狀態は、新聞社そのものゝ交換價値を下げることゝなる。新聞社は妓樓が有力な娼妓附といふことで交換價値を增すのと異り、有力な記者附は却つてその交換價値を減ずることゝなる。始めは、新聞社を妓樓と心得て、有力な記者附に高價を拂ふものもあつたが、今日の資本家は最早その愚を敢てしない。注意深い買主は、豫め有力な記者には退いて貰ふことを條件とするが、(『東京日日』などが轉々した場合はさうであつた) 不注意の買主は、『日本』新聞の場合のやうな、又最近の『國民』新聞の場合のやうな失敗を演ずるのである。それにしても德富蘇峰の如き今日の日本の新聞社會に匹儔を見ざる大記者附きの、しかも『國民』新聞のやうな歷史ある新聞社の値段を僅々七十萬圓に値切り倒したのは、同社の買主も記者附といふことに少しの交換價値を增す理由を認めなかつた點に於て、やはり資本家的評價を誤つてはゐなかつたのである。

最後に、新聞記者の個人的又は階級的特性を商品新聞紙の上から排除する方法について一言すれば、今日の新聞紙は、二つの方面からその方法を講じてゐる。一つは、新聞記者の待遇を良好にして、その生

活を資本家的生活程度にまで高め、それのインテリゲンチヤ的又は無產階級意識を減退せしめることである。高級新聞記者の待遇が最近に良好となつたこと世界的のことらしく、大學教授などの待遇の向上の度合とは比べものにならぬといふことであるが、日本に於ても十年前と今日とは急激な變化を見た。と同時に、他の一面に於ては、餘り高い給料を與へることの出來ない多數の非高級記者を、全く事務的ならしめ、言ひかへれば機械化せしめて、記者自身彼れの社會意識の表現についての要求を持たないやうな性質でなければ安全にその地位を保ち得ないやうな組織とするのである。社會的意識の表現を要求する記者の淘汰されることは、最近の一般の傾向で、それが今日の所謂「平記者」なるものゝ間に存する重なる不滿である。

かくして新聞事業の資本主義化は、ある點まで新聞紙の機能的性質に制約されつゝ、着々として新聞紙の商品化の過程を進めつゝある。がこの現象が、現代社會の組織的進化に伴つていかなる變化をとりつゝあるかについては、私は最近外で（「我等」一月號）これを詳說してゐるので茲には省略する。

資本主義と新聞

青野季吉

新聞社會の出來事で、最近、人々の心を打つたのは、德富蘇峰の國民新聞退社だ。德富蘇峰の思想や文章に、かくべつ傾倒してもゐない私などでも、あの「悲痛な」聲明書を讀んだ時に、ホロリとさせられたのは事實で、手も無く蘇峰の白髮首を切つて落した國民新聞の資本家××××に、芝居の惡形に感ずるやうな、隔り充實しない憎惡を感じた。それ位たから、蘇峰の思想・文章に心服し、蘇峰の[illegible]を文字通りに愛讀してゐた人々には、この事件がどれだけ强く響いたか、それは想像するに難くない。

蘇峰の聲明書を突然新聞の上に見出した時には、いま云つたやうに、私も譯もなくホロリとさせられたが、その後蘇峰が、慰安會の席上で一家一門と共に下る挨拶をしたとか、或は或の擁護のために開かれた[illegible]

かされた時には、私は最早、鼠のやうな感傷を持てず、寧ろそうした蘇峰に、冷やかな批判的な心持を感じた。

蘇峰にとつては氣の毒であるが、この事件が私共に與へる問題は、老蘇峰がその生みの子たる國民新聞から、古靴のやうに投げすてられたと云ふ點にあるのではない。資本家によつて摑みとられた新聞紙、新聞資本家の下に一介の文筆勞働者と化した新聞記者、言ひ換へれば、資本主義の下における新聞紙が、この事件を媒介として、私共の當面させられた問題だ。問題は當然、こゝに歸着させらるべきものであつて、老蘇峰が古靴拔ひをされたことを、彼らに憤激したり、同情したりしてゐることは、美しい人情には相違ないが、詮ずるところ、一片の人道的感傷に過ぎない。

資本家×××××から見れば、國民新聞企業を、とにかく算盤の立つて行くやうに經營せねばならない。それと、老蘇峰に毎月月給千二百圓を與へることとが兩立する間は、彼は蘇峰の「筆」を尊重しもするであらう。だが、それが兩立しなくなれば、彼は老蘇峰を古靴拔ひにするのに、微塵も躊躇するものではない。と言ふのは、彼が國民新聞資本家となつたのは、老蘇峰の「文功」を全からしめるためではないに相違ないから。だから老蘇峰の今日の痛ましい運命は、自分の手でやつて行けなくなつて、新聞を資本家××の黑い手に事實上讓渡した瞬間に既に約束されてゐるのだ。言ひ換へれば老蘇峰は、その瞬間から一介の勞働者と化したのだ。この現實、この轉換をいゝ加減に自分にごまかしておいて、いよ〱勞働者並に冷やかに取扱はれた時に、いかに聲涙共に下る挨拶をし、血涙を絞つたところで、それは所謂單なる哀情をそそるにしか値しない。

資本主義の新聞支配は、今日の普遍的事實だ。所謂大新聞には、早くから資本主義の支配が確立されてゐる。中小新聞には、まだ前資本主義的要素が、經營にも、編輯にも、屢々殘照してゐるであらうが、それも結局は資本主義の大波に洗ひ流さるゝに定つてゐる。そこで、老蘇峰退社事件の持つ特殊點としては、下の二つの事實が浮彫されてゐるに過ぎない。(一)、老蘇峰ほどの大記者、彼ほどの地位を持つ名記者でも、新聞資本家の前には、一介の文筆勞働者として立たねばならぬと言ふこと、(二)、パーソナル・ジヤーナリズムと言つたものは、資本主義化せる新聞界においては、最早完全に死滅して仕舞つたこと、この二つの動かす可からざる事實だ。

(一)については説明はイラないであらう。(二)について一寸説明すればからだ。曾ては成島柳北の何々新聞とか、池邊三山の何々新聞とか、或は私共に親しいもので、黑岩涙香の萬朝報とか、德富蘇峰の國民新聞とか云つた風に云はれて來た。これは何も柳北や、三山や、涙香や、蘇峰の文章だけが、その新聞のイソハルトだと言ふ譯ではないのだが、尠くともその文章が、その新聞の生命だといふところから來たのだ。これは言はゞパーソナル・ジヤーナリズムだ。このジヤーズムが、資本主義の新聞征服と共に征服されて來たことは、誰

も明らかであらう。そして、それに取つて代つて、集團的なジャーナリズムが、言ひ換へれば、個人の文筆本位のジャーナリズムに取つて代つて、多數記者の報道本位のジャーナリズムが、擡頭して來たことも、多く說明するまでもないであらう。ところで、彼のパーソナル・ジャーナリズムを最後まで持ちつゞけてゐたのは、蘇峰の國民新聞だ。その點で最近迄の國民新聞は、一種のアナクロニズムの感が、新聞面にも浮き出てゐた。この最後の一つが、いま新聞資本家の手によつて見事に葬られ、これでパーソナル・ジャーナリズムは、その古典的な姿を全く沒して仕舞つたのだ。

いつたい新聞紙の內容には、二つの要素が最初から約束されてゐる。一つは主張の機關としての要素であり、他は報道の機關としての要素だ。主張の機關としての新聞紙は、言ふまでもなく、何等かに社會的集團の主張を反映するもので、それが政黨である場合もあらうし、特殊思想團體である場合もあるであらうし、或はまた、或る利益協同である場合もあらう。だが、とにかくそれは、その持つ主張を、新聞といふ手段を通して、廣く社會化しやうとするのだ。ところで、新聞のこの機能を十分に、有効に果し得んがためには、何よりも先づ、新聞が廣く社會に配布されることが必要だ。どんな素晴らしい主張であつても、それの印刷されてゐる新聞が、極く僅かな人々の手にしか渡らないとすれば、その主張を十分に社會化することは[illegible]い。そこで報道の機關としての新聞紙の機能が重要になつて來る。報道の機關たる機能が發揮されれば、それに正比例して、その新聞の流布の範圍の擴大する可能があり、從つてその持つ主張の社會化する度合の高まる可能がある。だから、主張だけの新聞といふものも無ければ報道だけの新聞といふものも、最初から存在しない。

この內容と平行して、新聞記者にも二大種別のあることは、言ふまでもない。專ら主張の機關としての機能を分け持つ記者と、專ら報道の機關としての機能を分け持つ記者との二大種別だ。而して、前者の種類の記者が、數において少數で、個人的文名において高いこと、後者の記者が、數において多數で、個人的文名において顯はれないことは、その機能の性質の然らしめるところだ。

そこで資本主義の新聞征服が、深く廣くなつて行くに從つて、この內容及び記者の關係が、どう變化して行くか？　否、現在、どう變化して來てゐるか？　これは興味ある事實だ。

資本主義が見ると、新聞は一個の商品に過ぎない。社會の木鐸、天下の公器で、あつても無くてもよい。とにかく商品たる機能を果し、それによつて資本家が儲かりさへすればよいのだ。或る場合には、その內容に、資本家階級にとつて不利な記述すら混入されてゐても構はない。それによつてその商品たる價値が加はれば。ところで新聞が商品たる機能を果すには、何といつても數において多く賣れることが肝[illegible]

[illegible]
重要部分を成す廣告收入にしてからが、發行部數によつて決定されるのだ。

新聞がかく完全に商品化されるにつれて、その內容が、主張本位から報道本位に轉移して來るのは自然だ。新聞がまだ前資本主義的な經濟で營まれてゐた頃は、發行部數そのことが主眼でなく、それによつて主張の弘布を圖らんがためであつた。事實明治の初めに發行された新聞で、資本家的利益を胸に描いて、發行されたものは一つもないであらう。否、のつけから損失を覺悟で、主張弘布のためのみで發行されたものが、多かつたのは事實である。だが、新聞が完全に商品化すると、發行部數そのものが主眼となつて、主張弘布は遙かに下位に押しやられる。極端の場合には、無視されたりさへする。そして敏速、詳細、完全な報道が、新聞商品の缺く可からざる資格となる。現に今日、新聞の論說なるものは、當の新聞の方でも重點をおいてゐないし、讀者の方でも決して重要視しない。報道の敏速のためには、傳書鳩から電送寫眞まで、あらゆる手段をつくし、莫大な出費を惜まない新聞社も、主張の權威のために巨費を投じて世界に知識を求めたといふことを聞かない。

それに平行して、記者の地位にも變移が來てゐる。主張の機能を分け持つ少數の記者は、曩には特に尊重され、また文名の高い人がその任に當り、報道の機能を分け持つ記者は、探訪記者の名によつて侮蔑さ[illegible]若くとも前者は著るしく重要性を失ひ、後者は著るしくその重要性を增して來てゐる。老蘇峯は、今日の新聞資本家の眼から見れば、或は俊敏悧發な一社會部記者よりも、その利用價値が低いかも知れない。正に新聞における論說、主張の衰微時代だ。

資本主義の下に於ける新聞は、かく主張の機關としての機能を極度に喪失し、報道の機關としての機能を極度に發揮する。それは資本主義の支配においては、必然には相違ないが、新聞紙の社會的機能といふ點から云ふと、不具になつたのであり、片輪にされたのであり、新聞が新聞でなくなつたのだ。

（新聞が新聞で無くなつたと云へば、資本主義の下に於ける販賣本位の新聞經營政策は、最近では特に極端になつてゐる。かの謂ゆる大新聞社內の事業部とか、企劃部とか云つたものゝ活動がそれだ。讀者から言へば新聞社がローマへ飛行機を飛してくれなくとも、或はアメリカの高山踏破の記錄をつくつてくれなくともいいのだ。新聞そのものゝ內容が充實してくれゝばいゝのだ。だが、新聞資本主義は、飛行機を飛し、高山踏破記錄をつくらないではおれない。それは外部的に、有力に、發行高の赤線を高めるからだ。）

資本主義の下における新聞のこの轉移は、これを別の言葉でいふと、新聞は最早闘爭の武器ではなくなつて、利潤の武器となつたといふことである

まだ前資本主義の關係におかれてゐた時代、乃至は資本主義の支配が確立しなかつた時代には、新聞紙は、或る社會的集團が、その主張を弘布して、他の社會的集團と鬪爭する武器であつた。或る政黨は、自己の機關紙を通じて、敵黨と鬪爭し、或る利益協同は、自己の機關紙を通じて、敵たる利益協同と、鬪爭した。この狀態は、今日、支那の多くの新聞紙において見られる。

ところが資本主義の新聞支配が徹底して來ると、この鬪爭の武器たる性質が意識的に避けられ、鬪爭は新聞を通じてゞなく、他の手段によつて行はれ、新聞は專ら勝利の武器となつて來る。今日でも、何れの新聞にしろ、多かれ少かれ何等かの政黨乃至は利益協同を、その背後に持つてゐるのであるが、しかしその關係を出來得る限りボカそうと努力されてゐる。事實、今日、或る特定の新聞の記事なり論說なりを一見して、直ちにそれが何れの政黨、何れの利益協同の機關であると判定し得る者はないであらう。即ち、その關係をハッキリさせることは、利得の武器としての機能と矛盾するからだ。

かく資本主義の下において、新聞はその社會的機能の一部を喪失し、一個の報道商品と化してしまふが、こゝに面白い現象は、その喪失した社會的機能を奪還する「新らしい」新聞紙が生長すると言ふ一事だ。

それは言ふまでもなく、資本主義の下において階級的に成熟しつゝあるプロレタリアの新聞紙だ。既に今日、日本にも『無産[illegible]者新聞』を始め、各勞農政黨の機關紙が、定期的に發行されてゐるが、それは明かに鬪爭の武器として機能、主張弘布の機能を主眼として發行されてゐる。これらの新聞の生命とするところは、その報道的要素よりは、潑溂たるその主張に在り、尖銳なその階級的抗議に在る。これは恰かも、資本主義の支配の下に在る新聞紙において失はれた社會的機能の奪還だ。

それはそれとして、私は曩に、主張の機能を分け持つ記者の重要性が低下して、報道の機能を分け持つ記者のそれが加はつたと述べたが、しかしそれは、後者の經濟的・社會的地位が高上したことを意味するのでは斷じてない。資本主義の新聞支配が徹底すれば、それだけ、何れの種類の記者たるを問はず、その經濟的・社會的地位は勞働者化する。一世に文名を馳せた老蘇峯と雖も、決してこれが例外たるを許されないのだ。曩にも言つた通り、彼は、その愛子に等しい新聞を資本家×××××に、事實上賣渡したその瞬間から、實は勞働者化したのだ。何時馘首されるかも知れず、何時失業するかも知れなかつたのだ。たゞ問題は、彼がそれを知らなかつたところから起る。

だが、これは老蘇峯の不明とばかりは勿論言へない。勞働者化してゐる現實を、十分にハッキリと意識し、勞働者自覺をもつて、新聞資本家に對抗してゐる記者が、果して幾人あることであらうか？　老蘇峯の國民新聞事件に、いま更のやうに憤然とした記者が相當に多くあつたこと

ふうことに、その事件を一種の個性的悲劇でもつて取扱つた諸新聞の記事から容易に察し得るが、然らば、その悲劇の根幹に喰入つた記者が、果してどれだけあつたか？ これにたいする答は、餘りにもハッキリしてゐるやうだ。

そこで資本家に捕へられた記者は、老蘇峯の悲劇を自己に複演しないためには、どうすればいいのか？ [illegible]ここに覺醒する。勞働者化した記者は最早個人的差別の失はれた記者であり、個人的防衛を失つた記者だ。そこで集團的な結合によつて、勞働者的要求を掲げて、新聞資本家に對抗するより外はないのだ。これほど分り切つたことはない。（終）

事業としての新聞

＝附 新聞の勢力＝

高石眞五郎

『新聞の勢力は大したものだ』といふ語は、今日では、その內容の詮義を免ぜられた一の通用語たる觀を呈してゐる、私は新聞記者としてかういふ風に話しかけられるたびに、何となく氣はづかしく感ずると同時に、新聞といふものが、果して世間で傳ふる如く、そんなに「勢力」のあるものかを考へぬわけには行かぬ。「勢力」といへば、いふ迄もなく、人を動かす力である、世間を動かす力である。卽ち新聞が人心を右にも左にも向け、延いて世相の動きまでをも支配するといふ意味であるが、果して我國現在の新聞が、それ程有力であるか、どうか。

いふまでもなく、新聞の發行部數は著しき數に上つてゐる。ひとり日本全體の新聞の總發行部數が多くなつたのみならず、一つの新聞の發行部數が、世界數種の大きな發行部數を持つてゐる新聞と比べて、少しも遜色なき迄の數に上つてゐる、大阪每日と大阪朝日の發行部數の如きは世界の何處へ行つて之を示しても、正に一大光彩であり、又彼等に取つては一大驚異である。單なる發行部數の點のみいふも、日本新聞の發達は目ざましき限りである。

新聞がかく廣く讀まれ、かく一新聞にして驚くべき大きな部數を出してゐる事實から見れば、新聞が量的に世の中を風靡してゐる事は爭

はれない。そこで、私は世間でいふ「新聞の勢力」といふ語には、此量の觀念が大分強く働いてゐるのではないかと思ふ。しかしながら、量的にでも、かくの如く民衆の生活に喰入つてゐる限り、新聞といふもの丶性質上、それが人心に大きな力を持ち得ることは爭はれない。けれども、それは「持ち得る」ので、分量が多いから何時でも持つてゐるといふのではない。正當な意義において、新聞が勢力を持ち得るためには、新聞それ自身の「紙格」と、之を讀むところの讀者のインテリジエンスに待たなければならない。いひ換へれば、同じいふ「勢力」にもいろ〳〵あつて、善い意味の勢力と惡い意味の勢力とがある、そして新聞それ自身の調子が低く、讀者のインテリジエンスも低ければ、その勢力は得て惡い意味の方に片よりたがる。而して今日普通にいふところの「新聞の勢力」といふことは、善惡は別として、たゞ人心に及ぼす影響とその宣傳力とを、概念的に言ひ現したもので、その點で大きな力があるといふことではないかと思ふ。さうだとすれば、私も新聞に大きな勢力を持つといふ語を肯定するに躊躇しない。

しかしながら私達としては、新聞の勢力が善い方にヨリ強くなることを希願しなければならぬ。近代の政治が民衆政治であり、輿論政治であり、議會政治であり、政黨政治であるとすれば（形式的にさうであつても）、此政治の樣態と最も密接の關係を持つて居る新聞紙が多分に善い勢力を振ふといふことは、極めて大切な事である。

而して今日の「新聞の勢力」といふものに可成いゝ加減なものだと思ふことも私達はたび〳〵ある。たとへば、讀者の判斷が「見出し」に左右される場合が多い、「見出し」の附け方ゝ近頃巧妙になつたけれども、その「見出し」の各句を見て、この新聞は民政黨びゐきであるとか政友會びゐきであるとか勝手に極めてしまふ讀者が少くない。社說では終始一貫或る主張を書いてゐても、讀者の中には「見出し」に誤まられて、全くその社說の主張と反對の側を助けてゐる新聞と思ふものさへある。現に政治季節になると、私の從事してゐる大阪每日に全く矛盾した兩面の攻擊投書が澤山に飛び込む。即ち或る黨の投書は、「大阪每日は政友會を助けて怪しからん」、「政府に買收されてゐるぞ、しつかりしろ」と攻擊し、他の或る黨の投書は、「大阪每日は民政黨ばかりの肩を持つて鼻持ちがならぬ」「野黨を助けて人氣を得ようとしてゐる、卑劣な營業政策だ」などゝ怒鳴つて來る。しかもその當時の大阪每日の社說は、さう世間から間違へられるやうなあいまいな議論は書いてゐない、否、はつきり過ぎるほど一定の主張に閉齒して論陣を張つてゐるのである。私はかういふ全く相反した投書を每日見る時、泣きたくなるほど情けなくなる。

これが私の前にいつた讀者のインテリジエンスといふことになる、即ち讀者の智識の問題である。けれども私は率直にいへば、「見出し」を附ける方にも罪があると思ふ、即ち私達が惡いのである。例へば、新聞政治家の談話なり演說なりの文句の一節をそのまゝ「見出し」に持つて來ることがある。之は新聞語のクオーテーションであるが、日本

奴にはかういふ形式が少い、そこへ持つて來て[illegible]の[illegible]しである[illegible]ヒツカケを用ゐないことも度々ある、さうなれば、その政治家の語が直に「見出し」になるのであるから、その新聞は之に裏書きすることになり、その政治家のために宣傳の役を勤むることに見へる、卽ちその政治家が政友會の人であれば、その新聞は政友會びゐきとなる。之れは一例であるか、「見出し」を通うして現はれる編輯者の主觀が、直ちにその新聞の主義主張であるかの如く解せられるやうな場合が少くない。「見出し」は讀者を惹き付ける任務を有するものであるから、出來るだけ人を惹きつける文句を選ぶのは、編輯者苦心の存する處であるが、結果においては上述のやうになるのであるから、編輯者も細心の注意を拂はなければならぬが、讀者にも新聞をまつすぐに讀むだけのインテリジエンスがあつて欲しい。

「新聞の勢力」で思ひ出されることは、明治初代の新聞の勢力である。明治の早い年代頃の新聞はいかなる點から見ても貧弱の語で盡きてゐるやうに思はれるけれども、しかも民權擴張、國會開設の爲に、國論を喚起した力に至つては實に花々しいものであつた、當時藩閥の政治家が此等の新聞を恐れてゐたことは非常なものである。それは餘り知れ過ぎてゐる事實であるから玆に言及しないが、私が此一事を擧げたのは量において少くても、新聞はその主宰者の力の入れやうに依つては、大きな勢力を振ひ得るといふことを言ひたいからである。そして私は、今日の新聞がその量の大きいといふ好條件の下に、新聞本來の勢力を大に振ふやうになることを[illegible]

紐育のウワールド新聞は、今日でも恐らく紐育第一の發行部數を有する新聞であるが、此新聞の過去は、或方面では非常にセンセーショナルた新聞として記憶に殘つてゐる。實際一八八三年ピユーリツツアーがウワールドを買收してから、彼の取つた編輯方針は全く傳統の殼を破つたもので、一口にいへば、ニユースの調子を下げて、犯罪の如き社會の暗黑面の出來事を、露骨に詳しく報道したのである。今日の新聞は何れの國でも、當時のウワールドに敢て讓らぬセンセーショナリズムを發揮してゐるが、五十餘年前ウワールドの此編輯方針は正に新聞界に一新紀元を劃したもので、新聞界に[illegible]。それでピユーリツツアーのセンセーショナリズム[illegible]じ、ウワールドの發行部數は、まりを地に投げつけるやうな勢で[illegible]躍し、他の新聞は遂にその跡を追はねばならぬやうになつた、[illegible]今日の新聞の編輯法はピユーリツツアーに[illegible]といつても差支へないであらう。

從つてピユーリツツアーに對する[illegible]もあつたが、[illegible]彼自身は大きくそして[illegible]い抱負を[illegible]つて持つてゐた[illegible]ある。彼の[illegible]つてゐた處はかうである「[illegible]多數の讀者を得やうとするのは、[illegible]の人々に[illegible]て貰ひたいためである、多數の人に[illegible]ふためには多數の讀者を得なければならぬ」[illegible]彼のセンセーショナリズムで[illegible]

明である。實際彼の經歴に徵せば、彼は稀に見る熱情熱血の男であつたやうである、そして彼は凡ゆる社會惡に向つて挑戰した。殊に彼は新聞紙の大なる使命は政治上の罪惡を矯正することであるとなし、國家及び地方自治體にまつはる腐敗等に對しては、寸毛の假借するところがなかつた。紙面に掲げられる雜報を前にして、ウワールドの社論主張を聞けば、彼は正に國士のおもかげがあつた。彼が後年パナマ運河に關する腐敗を摘發して、ルーズヴエルトに向つた時の如き、彼の骨ぶしの强さを語るものと云はなければならぬ。敢然として彼の攻擊する處、悉く社會正義のパックを有するものであつた。彼は保守的新聞の傳統を破壞した罪を免れないかも知れないが、彼が民衆のために、そして社會惡に直面して奮鬪した功績は到底沒すべからざるものがあるであらう。彼はかくの如く大童になつて社會惡と戰ふ一方に、自分の新聞の驚くべき經濟的發展をも樂み見ることを得た好運兒であつた。一文の貯へもなくして渡米した南歐の一移民が、遺産千八百六十五萬弗を殘したのであるから、彼の事業的成功も偉大なものといはねばならぬ。

茲において彼の社會惡と戰つたことも新聞の營業政策からだと見てゐるのもある。私は之に就ては本當にピユーリツツアーを知らないから何ともいふことが出來ない。けれども私は彼が新聞の使命の一つを極度に發揮し、而して社會に貢獻することの少くなかつた點を、新聞人として推奬し、之に對して滿腔の敬意を拂ふものである。私は敢て彼のために辯するのではないが、彼自身の談によれば、彼が新聞の經營に當つて以來、彼は營業部に顏を出して其處に一時間以上居たことはないとの事である、之は彼の書いたものに、明にさう載つてゐる。その心は、彼の新聞事業に對して打ち込んでゐるところは、營業ではなく、編輯の上にあるといふ事を言つたつもりであらう。彼の新聞のセンセーショナリズムが、その當時としては思ひ切つたものであつたから、彼はたゞ新聞を賣るため、金を儲けるために、そんな事をすると思つた人が多かつたやうであるが、ピユーリツツアーをしていはしむれば、彼には立派な抱負があつたのである、私は彼を信ずると共に新聞の持主、經營者が、かくの如き抱負を以て新聞を發行し、名實ともにその新聞を自分自身のもの、、としたことを、定めし愉快であつたろうと想像する。

それを思ふと、たゞ金を出して新聞を商賣の手段としてゐる經營者は、定めてつまらないだろうと思ふ。尤もさういつた經營者も英米にはある、けれどもそれ等の人は最初から營利が目的であるから、新聞事業を見ること、チヨコレートの製造業と異らず、チヨコレートが賣れて儲かつて行くやうに、新聞が賣れて利益が大きくなつて行けば、それで滿足してゐるらしい。しかし私は新聞事業を他の商品製造業と同一に取り扱ふことをいかにも惜しく思ふ、無論新聞の獨立のためには、經營的にも成功しなければならぬけれども、新聞事業といふものは、世人の新聞に對して持つ特殊の觀念のために、營利的にのみ之を

取扱はなくても、おのづから營業的に立行くものなのである。之は新聞事業者のみの持つ特權とも幸運ともいふべきものである。私はこゝに於いて紐育タイムスの編輯振と經營振りとを思ひ出さゞるを得ない。』

――いまの紐育タイムスの社主アドルフ・オックスがタイムスの經營者となつたのは、ピューリッツアーの出現後十二三年後の事である。その時のタイムスは發行部數僅に九千に落ちてまことに影の薄い新聞であつた。然るに今日の紐育タイムスは四十萬に近き紙數を有する世界有數の大新聞である。四十萬といふ數は小さいやうであるが、我國などゝは事情の異る米國では、非常に大きな發行部數で、米國全國を通じて此數以上を出してゐる新聞は五指を以て數ふるほどしかない。しかし紐育タイムスの有力なのは、その紙數ではない、その信用と權威である。信用と權威の點からいへば、ロンドンのタイムスと紐育のタイムス紙とは正に世界の双璧といつていゝ。

　かくの如くオックスはタイムスを今日の地位に持つて來たが、しかもその編輯方針に至つては、ピューリッツアーと全く反對であつた。とは、誠に面白い對照といはねばならぬと同時に、新聞の經營といふものが、單に大向に受けるのみを以て萬事了れりとなすことの出來ない有力な證據である。

　タイムスの全支配をその手に握るや、オックスはその最初の紙面に彼の編輯方針を聲明し、「タイムスは清潔にして威嚴あり而して信頼すべき高級の新聞」たることを期すといひ、その「用語は善き社交界において用ゆる」ものでなくてはならぬといつてゐる。即ちオックスは當時燎原の火の如き勢を以て新聞界を風靡しつゝあつたセンセーショナリズムに對して、雄々しくも挑戰の旗幟を掲げたのである。而して今尚ほタイムスの標語である All the News that's Fit to Print といふ語は、タイムスの題號の側第一面に毎日掲げられてゐる。此モットーのためにタイムスは一日の論説欄を費して、之を社會に說明したほどである。即ちタイムスは三十二年以前、オックスの所有に移つて以來、品のいゝ高尚な新聞たることに努力し來り、それで事業としても今日の隆盛を見るに至つたのである。オックスは今六十八九歳で、依然かくしやくとして事務に當つてゐる。私は前年渡米の際にも、又今回もタイムス社の饗應に招かれて彼と親しく語を交へたが、彼は米國新聞界の長老として深甚の敬意を新聞界から拂はれてゐるばかりでなく、新聞事業家として驚くべき富を蓄積し、その社屋の如きも善美を盡してゐる。』――オックスはかくの如く大向うに受けに新聞をこしらへなかつたにも拘らず、事業的にはかく成功したのである。而かして彼に就て物語らねばならぬことは、彼が經營においても獨立獨歩、自らを持することの高かつたことである。彼が僅に九千の發行部數しかなかつたタイムスを買つた當時の困難は隨分甚しかつたものであるが、彼は此間幾多の金錢的誘惑を敢然として斥け來つた。たとへば、當時紐育の市參事會が、紐育の六新聞に年額二十萬弗を與へて或事項の公告を出させた時、タイムスもその一に選ばれたが、タイム

スは之を拒絶した許りでなく、その金は政治的目的の爲に市民の金を濫費するものであると攻撃した。それからタマニー派市廳から一年約十五萬弗に價する市の公告をタイムスに出すといふ申込をも斷つた、その言ひ草が面白い、タイムスのやうに僅かな紙數しか出してゐない新聞にかういふ公告を出すとなれば、タイムスは痛くない腹を採られる惧れがあるといふのである。又一九〇〇年の大統領選擧の際、タイムスが珍しく共和黨の候補者を助けた時（タイムスはどちらかといへば民主黨に近い）、共和黨選擧本部から共和黨候補者に有利な新説を掲げれば、その新聞を百萬部買ひ取るといつて來た時もきれいに斷つた。此れ等の話はいはゆるパブリック、ストックで誰でも傳聞してゐる。オックスが新聞を清潔にして行くといふ苦心の外に、經營の方面においても、同じ清潔さを維持しやうとした苦心は大に買つてやるべきであらうと思ふ。

タイムスが新聞としての信用權威を得る點に於ても、事業それ自身に於ても、今日の成功を收めたことは、右の通りであるが、要するにタイムスの覗つた處は、ヂミであつても爲めになる新聞を作るといふ事であつた。そして過去三十餘年間その方針を以て事件に處したのである。そしてそれはオックス唯一人の意思を以て行はれたのである。だから行き方は違うけれども、オックスもピューリツツアーも新聞經營者として、新聞を通じて、完全に自分自身を表現したことに於て全く軌を一にしてゐる。この二つの場合は、新聞が經營者その人のものである完全な例である。

新聞が事業としてのみ經營されることになり、從つて紙面に特異性がなく、どの新聞も似たりよつたりになつてしまうことは、その社會の多面性を缺くものであり、又その社會の進步を刺戟する上において遺憾事とせねばならぬ。新聞の經營が事業欲營利欲の動機のみから行はれることになると、その新聞は自然ニュースのみの配給機關となつて、新聞の持たねばならぬと信ぜられる魂を缺く。又さうなると資本のヨリ潤澤で、經營のヨリ巧みな新聞のみが繁昌する、あだかも他の商品と同じである。けれども新聞には普通商品と異つて、製作者（卽ちそれを主宰する經營者）の性格情操が加はつて、初めて新聞事業に意義が出て來るのであらうと思ふ。尤も前に書いたやうに、經營者が少しも自己といふものを新聞を通じて現すことなしに、たゞ新聞をニュースの販賣機關、お座なりの議論の掲載機關とすることも出來る、（論說などは經營者が氣にかけず擔當の記者に任してゐる如き場合）けれども、さうなれば、新聞は資本とか設備を以て他の新聞と競爭せねばならぬ事になり、結局資本の乏しい新聞は敗殘者となる。この傾向は、現に私共が見てゐるところである。

私は新聞が善い勢力を持つことを願ふ、そして複雜なる社會に、それ／＼違つた心の糧を供するやうに、特色のそれ／＼違つた新聞の存在を、社會のために願はしいことゝ思ふ。それには、新聞が經營者によつて、普通の商品を作る以上の理想と希望を以て作らるべきもので

る」考へる。而して世間も亦其の考へを以て、それ〳〵の新聞をパトロナイズする用意があるべきものと思ふ。尤も此用意は他動的に起らなくとも、實際記者の精神氣魂を打ち込んだ生々した新聞が出れば世人はおのづからそれをパトロナイズするに至るであらう、故に事業として新聞を觀ても、單なるニユースの販賣新聞、趣味や議論の受賣をする發刊物とすることは、餘り得たものでないだらう。況や新聞の單なる商業化が新聞の社會に役立つべき效果を減殺することの甚しいに於ておや。新聞事業を單純に商業化することは、資本の乏しき者に取つては、自らを縊るものといはねばならぬ。（完）

新聞經營は何處へ行く

矢野正世

新聞經營の弱點

德富蘇峰先生が國民新聞を去つた。國民新聞は蘇峰の筆に依つて建設された鐵壁である。其建設者たる德富氏は國民新聞を捨てた。然かも國民新聞は存する。今の世の奇蹟である。蘇峰氏社を去るに及んで、一言天下の讀者に發表したところを見ると、記者としての危急が其主たるものである。金錢の生ずる迄には幾多の紛糾があつたらう。幾多の曲折があつたらう。けれどもそれはどうする事も出來ない解決であつた。そうして蘇峰の國民であり、國民の蘇峰は永久に消滅してしまつたのである。決して偶然の出來事ではない。

然し蘇峰の筆には何處かに現はれる筈である。大阪每日新聞に光彩を放つと聞く、社會は國民新聞も德富蘇峰も失はない。只蘇峰去つて國民はどうなるか。國民を去つて蘇峰にどれだけの光りが存するか、殘された疑問はそれだけである。

この顯著な出來事は何を新聞界に教訓したであらう。新聞經營の資本化に依る至難を鮮かに物語つて居るではないか。國民の建設者であり經營者であるべき德富蘇峰は、今や本來の一筆に歸つて、新らたなる魂を抱きしめながら、再び蘇峰の何ものかを得やうとする努力の旅立である。然し之れも時代變遷の一角に起るべき當然の出來事である。

個人記者萬能の時代に建設された國民新聞が、機械化時代や、資本化時代を夢のやうに過ぎて、筆の力のみに依る經營の非を如實に體驗した事は、當然の事とは云ひながら、或る意味に於て教訓に價する。

スは之を拒絶した許りでなく、その金は政治的目的の爲に市民の金を濫費するものであると攻撃した。それからタマニー派市廳から一年約十五萬弗に價する市の公告をタイムスに出すといふ申込をも斷つた、その言ひ草が面白い、タイムスのやうに僅かな紙數しか出してゐない新聞にかういふ公告を出すとなれば、タイムスは痛くない腹を探られる惧れがあるといふのである。又一九〇〇年の大統領選擧の際、タイムスが珍しく共和黨の候補者を助けた時（タイムスはどちらかといへば民主黨に近い）、共和黨選擧本部から共和黨候補者に有利な新説を掲げれば、その新聞を百萬部買ひ取るといつて來た時もきれいに斷つた。此れ等の話はいはゆるパブリック、ストックで誰でも傳聞してゐ[illegible]にして行くといふ苦心の外に、經營の方面[illegible]ある完全な例である。

新聞が事業としてのみ經營されることになり、從つて紙面に特[illegible]がなく、どの新聞も似たりよつたりになつてしまふことは、その[illegible]の多面性を缺くものであり、又その社會の進歩を刺戟する上にお[illegible]遺憾事とせねばならぬ。新聞の經營が事業慾營利慾の動機のみから行はれることになると、その新聞は自然ニユースのみの配給機關となつて、新聞の持たねばならぬと信ぜられる魂を缺く。又さうなると資本のヨリ潤澤で、經營のヨリ巧みな新聞のみが繁昌する、あだかも他の商品と同じである。けれども新聞には普通商品と異つて、製作者（卽ちそれを主宰する經營者[illegible]新聞事業に意義[illegible]が少し

蘇峰先生の場合・記者の位置

雪嶺三宅先生の、日本新聞時代は全盛を極めた。そこで伊藤欽亮氏が資本を抱へてのりこんで來た。雪嶺三宅先生一派は追はれる如く自ら退くが如く、退いて『日本及日本人』に據つたのである。

其の時分、日南福本先生が二六新報へ『孤懷凄寥』といふ一文を草し『馬群に入つて牛言せんとするもギウの音も出ず』云々と書いたことがある。夫れを蘇峰德富先生が大變感心した。當時國民新聞紙上に連載されてゐた『東京便り』の中で天下の名批評であると賞めたことがある。其の蘇峰先生、今や昔の雪嶺先生の轍を踏むに際し感慨無量……僕は『牛言』と題する一文を書きかけたが馬鹿〱しくなつて止めた……僕がやがて第三の轍を踏む時來らんを想ふて、といふ譯ではないがネ。これは新聞界の或る長老が僕に話してくれた一插話である。

德富氏が四十年の間築き上げた國民新聞を、追はる[illegible]くが如くにして退かねばならなかつたといふ一事は新聞記者を論[illegible]者に取つて最も手近な、最も新らしくして最も重要性を帶びた題[illegible]なくてはならない。或者はいふ、德富氏は、、、、、、に追はれと或者はいふ德富氏は、、、からの榮養分で數年間生きのびたと、[illegible]者は言ふ、資本とペンとは最後に利害の一致を見ないものである、[illegible]いふ事實を見誤まつてゐた德富氏に現實直視の明が缺けて居り、、、には又、『先生』を他の所有會社の重役同樣勝手に使用し得ると思[illegible]違ひをして居た。其處に破鏡の端は當然開始されなければならなかつたのであらうと……。

新聞の經營は立派な營利事業である。營業税を國家に納めないから公益事業であるなどいふ思想は、矢張り營利觀念から出發した自己陶醉の夢である。朝日毎日は勿論、日本中何れの新聞社乃至通信社が、

ら發へされた以上、新聞の進むべき目標は何處にあるか。日に增し增加する人口と、日に進む人間の智識を指導すべき新聞製作の苦痛は何時になつても止みそうにない。「新聞は二つの目的を持つ、一は讀者に智識と報導を供給することであり、他はニュース及び廣告を通じ、實業界に重大な役目を演ずることである」と米國大統領クーリッヂ氏は云つた。それも一つの時代である、しかし今や新聞は其目的を遂行しつゝ、更に何ものかを目標とせねばならぬのではなからうか、個人記者時代は、其高遠な理想を讀者に强要した、讀者はそれを目標として新聞の指す方に禮讃した。その讀者が今や充分なる智識と批判力を有し、新聞の所論に盲從する迂遠さを失つてしまつた。新聞記者の主觀が徒らに振廻される時代は過ぎた、讀者は一日も早くニュースを欲する、機械の力の及ぶ限り、新聞社は之れに應じた、科學の力はラヂオを生んだ、軈てラヂオがニュース供給の唯一的使命を帶ぶるであらうことは想像に難くない、新聞の使命は茲にまた一轉する、新聞は忠實なる記錄者でなければならない。斯うして新聞は傳統的に持つ威力を薄められ、日常生活の辭典視されるやうになつた今日、讀者は更に一段の奉仕を要求して來るに相違ない。いや要求しつゝある。新聞社は新たに企劃部を設け、事業部を作り、有ゆることに讀者の滿足を買はんとしつゝある。社會文化の上に喜ぶべき現象と云はねばならぬ。

然かるに茲に未だ讀者にも新聞社にも打解けられぬ問題が一つ殘つて居る。それに新聞社の外形律當てあり。新聞に依つて利益する個に、どうしても去らぬ讀者の恐怖性である。外國の新聞は讀者でも政府でも新聞に對して完全な理解を有ち、發表すべき材料は遠慮なく新聞社に提出して了解を求める點にまで至つて居る。我日本に於ては此點に大きな溝がある。讀者の了解を求め得ざる新聞の不德は此に存する。新聞が讀者に奉仕することは社會へ奉仕することである。社會への奉仕は國家への奉仕である。斯くの如く考へて來ると、これからの新聞が進むべき國家奉仕は、讀者に對して「心安さ」を感せしめる點に他ならない。

しかしそは極めて消極的な方針であつて、今日の如き營業競爭の激烈な時代では、直ちにそれと色づける譯には行かない。先づ讀者が欲する本能へ働きかけて、貴重なる紙面を費さうとして居る。憐憫すべき狀態であるが已むを得ない。流行作家を爭ひ合ひ、雜誌の領域までも奪取せんとする今日の傾向は決して喜ぶべき現象ではないか、兎に角新聞勢力扶殖時代としてそれもよからう、讀者の覺醒は必ずや無意義を淘汰するであらう。

そうして新聞社が自覺した時、初めて要求さるゝ新聞の發生となる。要求さるゝ新聞は根强い根柢を植えつけてしまふ。根强い根柢は「心安い」讀者の所有にある。新聞經營の企ふする時機は遠い將來ではあるまいか、茲に緊急とする問題は、只其外形律の優越に陶醉して、本來の讀者と離れ行く事に留意されたいのである。讀者はもはや政治家の新聞、實業家の新聞と云ふものに一言も與へたい點、其勢力が高

して來た。新聞は矢張り新聞人が作るものであつて、政治家や資本家が之れに携はるべきでない。しかして其新聞人が只理想のみに生きる筆の所有者であつてはならない。流麗な文章の書き手だけであつてもならない。相場のみに左右さるゝ實際であつてもならない。圓滿なる常識と、國家的意識の忠實なる所有者でなければならない。

新聞記者論

山浦貫一

蘇峰先生の場合・記者の位置

雪嶺三宅先生の、日本新聞時代は全盛を極めた。そこで伊藤欽亮氏が資本を抱へてのりこんで來た。雪嶺三宅先生一派は追はれる如く自ら退くが如く、退いて『日本及日本人』に據つたのである。

其の時分、日南福本先生が二六新報へ『孤懷凄寥』といふ一文を草し『馬群に入つて牛言せんとするもギウの音も出ず』云々と書いたことがある。夫れを蘇峰德富先生が大變感心した。當時國民新聞紙上に連載されてゐた『東京便り』の中で天下の名批評であると賞めたことがある。其の蘇峰先生、今や昔の雪嶺先生の轍を踏むに際し感慨無量……僕は『牛言』と題する一文を書きかけたが馬鹿々々しくなつて止めた……僕がやがて第三の轍を踏む時來らんを想ふて、といふ譯ではないがネ。これは新聞界の或る長老が僕に話してくれた一挿話である。

德富氏が四十年の間築き上げた國民新聞を、追はるゝ如く、自ら退くが如くにして退かねばならなかつたといふ一事は新聞記者を志する者に取つて最も手近な、最も新らしくして最も重要性を帶びた題目でなくてはならない。或者はいふ、德富氏は、、、、、に追はれた、と或者はいふ德富氏は、、からの滋養分で數年間生きのびたと、或者は言ふ、資本とペンとは最後に利害の一致を見ないものである、といふ事實を見誤まつてゐた德富氏に現實直視の明が缺けて居り、、、、には又、『先生』を他の所有會社の職役同樣勝手に使用し得ると思ひ違ひをして居た。其處に破綻の端は當然開始されなければならなかつたのであらうと……。

新聞の經營は立派な營利事業である。營業税を國家に納めないから公益事業であるなどいふ思想は、矢張り營利關係から出發した自己陶醉の夢である。朝日毎日は勿論、日本中何れの新聞社乃至通信社が、

營利を第二とし、營業税免除の特典に因つて來る所の公益を第一の主眼としてゐるのがあるか。もしこんなのがあれば、既に潰れてゐない筈はない。

別に經營論を書かれる先輩があるといふから、其の文章に就いて見られるがいゝ、きつと、如何にして賣り、如何にして廣告を吸收し結論は如何にして勢力を増すかを説かれるであらう。根本は金である。金をかけて金をもうける話しに外ならない。

そこで記者論に入るわけだが、極端ないひ方をすれば新聞記者は新聞資本家に取つてケースの中の活字と同格である。磨滅して役に立たなくなれば新らしいのと更へられる運命を持つてゐる。磨滅迄使はれゝば未だあきらめもつくかも知れぬ。活字は再び鎔爐の中へ投げこまれて、更に使へる部分は再び世の中に出して貰へるが、人間である新聞記者か、再び役に立つといふ夢は時代が進歩しないと思ふ夢に外ならぬ。

新聞記者にも勿論區別すればいろ〳〵ある。殊に近年、社會科學をやつて來た學校出の新らしい若い溌溂たる記者諸君は一種特別の存在と未來性とをもつてゐるが、現在の概念的にいふ新聞記者、社會通念的新聞記者の多數は、過渡時代的な位置にゐる。成程自分は勞働者である、とは自覺してゐる。けれとも板一枚下は地獄ならぬ、名刺一枚の重さに、金持だの政治家だの、そんないろんな者に接近してゐる關係からか、ついその、金持の心持を諒解し、政治家の立場に同感を持ち、いつの間にか自分といふ一個の勞働者も彼等と同じ階級に生きてゐるといふ錯覺に捉はれることがある。

さうだ、新聞記者は資本家的錯覺に捉はれてゐると同じく官僚的錯覺に陷つてゐる。口に官僚を攻撃し資本家の横暴を痛嘆する勞働者新聞記者が、書く事とは裏腹の自分の行動を反省してゐられないといふ所に病氣が存在しなければならない。いや然し、夫れは、根本をたゞす時に、公益事業を看板に掲げる營利勘定を專門にする新聞資本家のエゴ的矛盾を、使用人がこのまゝ受けついでゐる。ゐなければ其の日が暮せない、そこに病源がひそんでゐるのかも知れない。

新聞社内自體のいきさつは右の通り同情される。が然しそれが紙面に現はれるに到つては病膏肓に入るの感なき能はずである。新聞記者及び新聞は大衆を目標とする。大衆に迎合しなければならないけれども大衆を指導して行かなければならぬといふのが立て前である。然るに、そこにも官僚主義に降參してゐる跡が歴然と見える。資本主義に迎合し謳歌してゐる形跡が充分である。

田中大將だらうが、誰だらうが、總理大臣としいへば新聞第一の材料である。論説でやつつけてゐ乍ら、政治面でも社會面でも不必要な位多くのスペースを彼の爲めに提供する。總理大臣ならまだいゝ。政治は民衆に直接響く。が華族界などにおける單なる出來事の報導に就て全力を傾注する場合すらあるに到つては呆る〳〵。ときに、思ふことがある、しかも多くの新聞記者は未だに公卿のお坊つちやんの家庭

へ捉はれてゐないであらうか？　御大臣の、、など、れだけ大衆の利害に關係ありと思つてゐるであらう。

以上書いた所は勞働者である新聞記者の資本家的錯覺、官僚的錯覺である。かくの如くんば、昔の新聞記者の方が未だいゝ。豪傑肌で、非官僚非資本家非閥族、その本領を自由に發揮し得られた時代は新聞記者等の黄金時代であつたかも知れない、其の時代は眞に國事を憂へ、世を憂へ、經世濟民の業は新聞によつて遂げられたかも知れぬ……斯くのごとくして新聞は公益事業であつて官僚の手先ではなかつた。資本主義の權化ではなかつた。營業税は免除された。

大衆は、資本主義で救はれない、官僚主義のおかげで飯が食へない。大衆を基調とする新聞事業の中のエレメントである新聞記者よ、何處へ行かうとするのか。

個性無視時代

僕が新聞記者になつてから十年餘りになるが、十年前の新聞記者と今日のそれとは文字通りに一昔の差がある。而して今後十年の後には僕等は葬られ去つて、いま入社しつゝある新しい社會意識をもつた人々が『新聞記者』の概念を形成するであらうと思はれる。今は其の過程である。

僕等の出發當時から最近迄はまだ豪傑肌といへる人が多かつた。編輯局へ醉つ拂つて入つて來て放歌喧騷するのは勿論、編輯局へ酒を持ちこんで記事を書き編輯に從事する人々さへ珍らしくなかつた。酒をのめぬ人でさへが呑まなくては巾が利かないといふ馬鹿な氣風さへ流行したものである。吉原に居續をしたのはもつと昔であらう。郊外の安待合に二日醉の眉をあげながら、自分の上役を電話へよび出して『金がなくて歸れない』と脅し上げる豪傑さへあつた。

その日の仕事にさしつかへる所から上役は、半ば親分肌の宣揚に自ら滿足しつゝ金をもたせて救助にやるといふ風なことさへ珍らしくなかつた。

が今は、そんなことは殆ど行はれない。酒をのんでも、夜おそく編輯局に現はれるのには社の入口で形を改め、醉つてゐない風を作らねばならぬ。

資本主義の威力は益々旺盛を極めて來た。聖書の文句ではないけれども、有てる者は與へられ、有たざる者は有てるものをも奪はれる、大朝、大毎、東日、東朝などが勢ひをのばして行けば行く程、群小新聞は小さくなる。社員の月給が拂へなくなる。從つて新聞記者は有り餘る程ある。生存競爭が動物世界よりも劇烈である。就職難はもとより、首を切られまいとの焦慮は一切の自由人的餘裕を奪つてしまはないではおかない。

と更に、新聞は益々科學的に組織される傾向を昂めつゝある。科學的傾向は個人を無視しなければならぬ。非英雄主義的である。合理的といふことは黙能を綜合するといふ事になる。昔は、彼の新聞には原

敬が謙譲をしてゐたとか、堺枯川が非戰論を書いたとか、個人の名に於て新聞の聲價を昂めて行けたけれども、當今は、個人の名は、新聞組織の表示狀態に於ては極めて力弱きエレメントで、無名有能の多數の記者を集め如何に通信網を完備するかゞ先決問題である。一將功成り萬卒枯れる。資本家は懐へ入れる、無名記者は何時でも必要に應じて不必要にされる運命の下に居る。資本家に取つて、永久に絶對的必要であるといふ記者は一人もあり得ない。德富先生の場合丈けでもそれが完全に證明される。先生の樣な大いなる個人でさへも資本科學の威力で驅逐されるのだ。

朝日新聞が其の昔、白虹日を貫くとかの問題で時の政府寺内内閣からにらまれた時には、その社の有數なる幹部であり天下の名記者であつた鳥居素川、長谷川如是閑氏等は退いた。資本系統には更に狂ひを生じない。

又科學的組織を第一とし、事務本位の立場から個性を無視する結果人事移動で有名な大毎、東日では、昨日迄編輯局の中心人物であつた樣な人でも頻々と待命休職とやらになつたりする。近代的新聞業の當然の歸結でなくてはならぬ。その他の小資本系の新聞は推して知るべきのみ。こちらは科學も糞もない今日の飯の問題だ。

斯くの如き事情であるから、新聞記者は毎々警戒を必要とする。與へられたる任務を盡さずも先づ、社内の空氣を觀察し、上役の御機嫌を取る。又大義名分を掲げて上役と戰鬪を開始したり、恩人や同僚への義理だてをして月給を棒に振るが如きは、國民殘留者の詞ではないが封建的小乘である。まかり間違へば同僚を排けて自分が榮達安全の途を拓かうとする。勢ひ、世相に比例して利巧者にならざるを得ない。幹部酒を好む風あれば記者亦酒をのみ、幹部酒を好まざれば飲んでも醉はぬ修養を積まなければならぬ。

資本家が横暴だとか、新聞記者の意氣地がなくなつたとかいふのではない。斯うならざるを得ない迄の話である。

記者氣質

斯くの通りの事狀で、新聞記者は、ほゞ他の一般の銀行會社員同樣甚だ職業的である。組織と資本のとゝのつた新聞社では、他の營業税を納める事業會社と同樣に給與、手當、退職金、病氣の時、死んだ場合には、といふ風に規定されて居り、これが一流會社のそれと大差ない所がある。其れ等の新聞社の記者は又、これをよくのみこんで、延命術を講ずる。が然し、新聞社は二つや四つでない。日本中の多くの新聞によつて衣食する記者の大部分は、未だ職業的のそこ迄待遇されて居ない。資本家に待遇する意志はあつても内容これに伴なはない所もあるし、内容これを超過しても知らぬ顔の半兵衛で、わが懐へねぢこんでしまふのもある。何れにしても多くの新聞記者は食ひ詰、住めない。にも拘らず、彼等は實によく働らく。忠實である。給與の割實な記者必ずしも優遇でない、月給の少ない、又に滿足に[illegible]の記

[illegible]衡の大躍する所によれば、所謂小新聞の中に、たま／＼素敵らしい活動力と創造力をもつた記者がゐる。却つて大新聞の中には去勢されて、幹部一任式の消極主義な記者も居る。新聞記者氣質、新聞記者道といふ風な言葉は、むしろ少なく與へられてゐる彼等によつて守られてゐるとさへ思へる。

由來新聞記者になる程の者は、少々變つてゐる、新聞が飯より好きな人が多數である。だから仕事をしたい。派手な記事を書きたい、其の爲めには寧ろ犠牲的に勇猛心を發揮する。昔、大阪の本山社長がいつた言葉に、新聞記者は妻帶しない方がいゝといふのがあつた相だ。まるで戰地へ乘り込む兵隊と同じ事である。家を顧みてゐたんでは底を突いた大仕事の出來ないのは事實だ。だから新聞記者の多くの家庭は惠まれてゐない。酒を呑んでおそくなるのでなくとも、器械力の發達は彼等を夜の一時二時迄も働かせる。最新最大のニウスを攫む爲めには、家庭を顧みてはゐられない事情が頻々として生ずる。月給が少ないことも、仕事に熱中すれば忘れてしまふ。月給を拂つてられない不平も競爭心の前には何でもない。夜おそくなつて寒さしのぎに一杯やる。それで小使錢の餘剰を棒にふつて、月給の前借をすることも亦愉快なる現象の一つとして彼等は人柄よく[illegible]へる。もし夫れ、素つ破ぬきの特種でも聞いた時は有頂天である。自分が[illegible]の中の活字と[illegible]ころか、天下を取つた心意氣である。資本家も[illegible]記者もない。たゞ[illegible]決して人後におちないのである。

資本家に惡心はないにしても、そこをうまく利用されてゐる。新聞記者程お人好しの勤め人はないといふのが[illegible]の持論だ。對資本家のみならんや、社會に對してもさうだ。世人が新聞記者を恐ろしいといふ。それは自分に弱點があるからか、又は新聞記者の本態を見誤まつてゐるからである。記者氣質の特質には、情にもろいことである。[illegible]には[illegible]敗されない[illegible]人情にはホロりとする。惡くいへば[illegible]封建時代の人情味を彼等の多數が持つてはゐるが、[illegible]時代おくれの人情大臣にさへもごま化されな[illegible]ゐるな。

だから、新聞記者の足許を見て[illegible]家などは、[illegible]ゐるのだ。

然し、ホントに[illegible]し、近年[illegible][illegible]ある若い人々は[illegible][illegible]強い。社會の[illegible][illegible]れない[illegible]ない。彼等の[illegible]の様な[illegible]

有名記者無名記者

[illegible]紹介する[illegible][illegible]ある。[illegible]

る。僕のいふ記者は多くの無名有爲の新聞大家だからピントは一寸合ひ兼ねる。が名を擧げて紹介すべくんば興業價値に乏しいのを如何せんである。

僕は誰にでも話すことだが、東朝の編輯局長緒方竹虎氏と大毎の主幹の城戸元亮氏とは誠に好い取組みと思ふ。緒方氏は英國に留學してゐた。城戸氏は獨逸仕込みだ。前者は英國型を日本流にくづした圓滿なる近代的紳士であるに比して後者は、かつて獨逸はおろか朝鮮にも渡つたことのありさうに見えぬ東洋肌の紳士である。緒方氏は一見、極めて圓滿な好男子、何處ぞ會社の一洋服勞働者であるし、城戸氏は見たゞけでも利かん氣の、まかり間違へば喧嘩でも買はうといふ印象を受ける。精悍、さわらば血のほとばしらんず氣持がする。

緒方氏は作爲のない自然兒、圓滿なる人格が身上であり、城戸氏は自信力が身上である。緒方氏に敵はないであらう。地位を讓れといつたら讓り兼ねない人、城戸氏は敵あらば敵を粉碎して進む人である。傾向は全然異つてゐるが、その異つた傾向を以て此の兩人は立派に大編輯局を統率して間然するところがない。東朝の編輯局は、主幹の美土路昌一、牧野輝智の兩雄、兩政治家の上置には人格者を置いて、うまく管絃樂を奏してゐるし、大毎は、歸り新參の城戸氏が人事行政の新鮮味と抱負に、機略の人奥村不染氏が同じく矢張大[illegible]管絃樂を奏でてゐる。英國仕込みの紳士高石眞五郎氏は當今社務といふ名目で張り出し抜の職、行政事務に城戸氏が一手で切りまは[illegible]といふ。然なら大概なことはやつてのける質だ。やれなければ直ぐにも辭める人である。或るゴシップメエカーがいふには、緒方は蔣介石だ。誰をもつて行つても格構でないから、自然押し出されて上置きにされる。—尤も望月圭介が內務大臣になつた樣に、他の人をもつてゆけば喧嘩になる。、、なるが故に安全だ、といふのとは異つて、有能の人格者野心家でない故に敵がないといふことである。彼の人望は[illegible]むに充分だ。

又或人はいふ、城戸は原敬で、高石は床次竹二郎だと。尤もこれは地位をさしたのではなく、そして大政友會時代の原敬と床次で、謂ゆる峠の床次ではない。高石氏はそれ程汎洋として「人格的」であり城戸氏はそれ程創意的精力的である。敵は碎く。味方は心服させる。雄勁の大擴張を斷行する。

時事新報の編輯局は主筆板倉卓造、編輯局長伊藤正德兩氏の勢力範圍である。板倉氏は、講座の教授を兼任し、法學博士かなんかであるが、學者風と政治家風と併せ、腹の出來た人で、見識あり文章に達してゐるから編輯局長になつても立派にやつてのける人と思はれるが、伊藤氏は外勤の經驗もなし、編輯整理の實際もやつて來てゐないから、主に其の方は一任して大處高處から評論を試みて居るを賢明なりと心得てゐるのかも知れない。彼の社[illegible]に專門家に[illegible]される。

伊藤正德といへば海軍記者として海軍評論家としては一寸世界的である。ワシントン會議の時[illegible]

かの評論を送つたのは有名な話で、今政治部長をして居る飾らない理想家肌の後藤武男氏と共に例の日佛英米四國海軍協定を素つ破ぬいて、ホントに世界的に響いた人である。いゝ記者である。立派な評論家である。が行政手腕に於ては少し疑問である。その夕刊に執筆する得意の『時事小觀』に見る樣なドグマが勝ちすぎてゐはしないか。野心が見えすぎはしないか。時事新報でも何處でも編輯局全員の歸趨點の一定してゐない社は、リーダーに缺陷があるものと見なければならぬ。かつて或る人は僕に伊藤正德論を聽かせて『矢張り野にをけ蓮華草だ』といつた。又『溫室育ちで薹が立つて居る』とも言つた。寧ろ最初外の社でミッチリ修業して苦勞を知つてゐたらと惜しまれる。

時事新報の幹部は殆ど慶應義塾で、其の慶應閥の中で生存競爭が行はれる。其の中でも同じ慶應の、有力なる株主を背景に持つのでなければ實力があつても重さをなさないといふ特殊な傾向がある。板倉氏も伊藤氏も、それを完有して居るであらうと思ふ。それのない者は小さくなつてゐるかそれがいやなら自分から尻に帆をあげるか、帆を與へられるかして港外へ出なければならぬ。

資本家と勞働者の立場を區別してない方が資本家の勘定からいつても記者の安寧から論じても寧ろ上策であるといふ證據を時事新報は明示する。

新聞記者に其の社の家附き記者と、引き拔き記者とある。家附では前述の大先生方を初めとし、朝日の鈴木文四朗、名倉聞一、關口泰、高原操、原田讓一郎、杉村楚人冠、中外の高田知一郎、都の大谷誠夫、大阪東日の小野賢一郎、杉山幹、布施勝治、阿部眞之助等の諸先生がゐる。

他の社から現在の社へ行つて有名な人物には、朝日の石川六郎、成澤玲川、靑澤洌、原田讓二、土岐善麿、大每東日の松內冷洋、下田將美、小村俊三郎、伊藤金次郎、稻原勝治、千葉龜雄、橋戶信、朝日の野村秀雄、國民の細野繁勝、每夕の御手洗辰雄、讀賣の柴田勝衞、其他大勢の諸先生方がゐる。これ等を一々御紹介申上げて居ては批判も不足であるし、又顏馴染み同業の先輩同僚の批評は勢ひ骨拔きになるからとばしてしまふことを許されたい。

畫家の特殊地位

僕のいひ度いことは、幹部……つまり行政的立場に居らず、さりとて無名有能的新進でない新聞記者の上乘なるものを評論家となすことである。時事の北澤樂天氏の持つ讀者、朝日の岡本一平氏の持つ讀者、今は德富先生と共に國民を去つた池部鈞氏の持つ讀者、更に新進、日日の和田邦坊氏が持つ讀者、其他下川凹天氏、柳瀬正夢氏等が保有する讀者の數は、新聞の生命とする小說の讀者よりも多いであらう。從つて資本家は諸君を絕對必要とする。諸君の生命は一般の新聞記者の如く薄氷を踏むが如きものではない。甲の社で不用とあらば乙、丙、の社で喜んで迎へられる。收入もいゝ。名前も賣れる。政黨政派に拘はれる不自由は勿論、社內の上役に[illegible]にも、官僚に[illegible]

はれる必要はない。全然新聞人自由人の立場を、此の資本制度の下で保留してゐるから豪勢なものである。

前にも述べた通り、新聞事業が科學的進展を遂げて來た結果個人の存在を紙面に主張することが少なくなり、素能を綜合した一大オーケストラでなければならない傾向に在り、從つて、多くの讀者は、前述の如き新聞界名士の存在には無關心であるけれども、小說と漫畫の作者には決して無關心であり得ない。

小說ば、しかし新聞の本質からいつて本格的のものではないけれども漫畫は新聞の本格も本格、エキスである。ニウスにして直ちに評論である。併も音樂であり文學である。この漫畫丈けは、是非共個人を主張する。しなければならない。論說や、漫筆やは署名なしに通用する。いや署名のない方が好都合でもあるが漫畫は誰のかいた物かわからなくては讀者は承知しない。

電送寫眞術が輸入されてから、漫畫のニウスバリウは更に昂まつた。朝日、大每東日は勿論これを使用して東京で描いた漫畫を直ちに大阪に送る。日本電報通信は同じく九州迄も電送して、專用電話による原稿と同時に紙面へ躍り出す樣に仕組んでゐる。恐るべき進出である。

需要があつて供給が少ないに原因すること勿論ではあるが、僕など屢々夢想する。俺に漫畫が描けたらなあ、と。――新聞記者としての流說に併せて、[illegible]漫畫を保有[illegible]する漫畫家に[illegible]新聞記者中の[illegible]者である。

近代新聞漫畫の先驅者は北澤樂天氏である。其の特徴は諷刺で、着想の奇警なこと一世を風靡した。今でも一週に一回出る時事漫畫附錄は愛讀者をかざる所、素人の僕だから餘り生意氣な口は利けないけれども、繪の描き方がうまい拙いといふよりも、着想丈けで十二分の讀者をもつ。それ丈けが身上で、樂天氏は時事新報の社長が代らうが、編輯局長が何人目だらうが、社賓として連綿顔きをなして居る。德富蘇峰先生個人についてゐる國民の讀者が五萬あると計算した人があるが、樂天氏にも其の位はついてゐて道理は惡くない。慶應出でもなく株主の特殊な背景も何にもない北澤氏が、社內の氣流に超然としてアゴひげを撫してゐる圖は、矢張り僕を羨ましがらせたのである。

岡本一平氏は北澤氏の次の時代を作つた人だ。舞臺が朝日だから好都合であつたらうけれど、漫畫に專念して、文展も帝展も院展もかへり見ず十五六年描きつゞけて來た專念ぶりには敬意を表したくなる。僕が批評するのも可笑しいが、事件と人物との交錯をぎゆと摑んで繪筆をメスに代へる。其の文章は、繪を描かない新聞記者、つまり專門文章家よりも一頭地を拔いてゐる。僕なども新聞記者の端末を汚してゐるが、岡本の文章を讀むと、迚も叶はないと思ふ。俺に繪がかけたら岡本氏の弟子位にはなれるかナ、と思ふ。

北澤氏とは同じ社に五年も一しよにゐたし、岡本氏とは每日の樣に[illegible]會の中で會ふが、北澤氏が邸宅を二三軒へ、財産なども[illegible]、

從つて社交的であるに對し、岡本氏は[illegible]を[illegible]し、ネクタイに[illegible]けて居り、紺の背廣は年中クタ〳〵に汚れて居る。それが、彼れの自然の姿である程、一種の悟りを開いてゐる。岡本氏は、新聞記事としての漫畫から繪本來の姿の漫畫へ轉換しかけて居る樣に思はれる。

惜しい人を國民新聞は失つた。池部鈞氏の漫畫は、專門家の批評によれば、繪としての價値當代隨一であるといふ。線の正しさなどは[illegible]の追隨を許さないといふ。これ丈けではない。新聞記者的感覺に於ても、彼は新鮮であつた。蘇峰氏の文章と池部氏の漫畫とは國民の[illegible]であつたと言へる。國民新聞は、新らしい看板を掲げなければならなくなるまい。池部氏は再び漫畫は描かぬ。本筋に立ちかへつて繪を[illegible]といふ。その念願には丁度いゝ潮時であつたかも知れぬ。[illegible]るが僕の新刊『政治家よ何處へ行く』のカットを[illegible]描いてくれたのは一月十七日かである。これ以後彼の繪を國民[illegible]ことが出來なくなつた。

東日の和田邦坊氏も[illegible]

[illegible]

[illegible]いふ時代が來るかも知れない。

尊敬すべき人々

[illegible]

なきに到り又は、暗打を食はされた活字組である。こゝにたとへば、前の國民編輯局長馬場恒吾氏がゐる。前田蓮山、松崎天民、富士辰馬、井澤弘、古莊國雄、一寸思ひ出しても直ぐ之れ丈け頭に浮ぶ。又、東京や大阪にばかり新聞社があるのでないことも考へなくてはならず、地方の新聞社によき新聞記者のゐることも忘れてはならぬ。これも、一寸思ひ出して見ると。

松陽新報の松井柏軒氏は萬朝でならした名記者であり、秋田魁の安藤和風氏は地方紙中の記者として重きをなし福岡日日の客員をしてゐる坂口二郎氏の如きは寧ろ新聞學者として專門家の尊敬をうけてゐる。新愛知の尾池義雄氏は歴史家であり、名古屋新聞の小林橘川氏は能文家であり、信濃毎日の桐生悠々氏は、朝日から信毎へ、信毎から新愛知へ、それから又信毎へ、老いて尙ほ盛んなる批評眼を、其の名文に光らせて居る。其他山陽新報の杉山榮、北國新聞の鴨井悠氏、讀書力と批評眼と文章で一騎討をしたら、東京大阪の所謂大記者先生必ずやタヂ〳〵とするであらう人々が散在して居る。機會と場所とを得ない爲めに、或は『大記者』たらず、或は不遇をかこつ先輩友人の爲めで篤き敬意を拂ひ、又くりかへすが、無名小壯有能記者の大進出を希望して筆を止める。(二月八日)

ムッソリーニ治下の伊太利新聞

竹内　清

ムッソリーニの政府が出現して以來既に六年の餘になる。早いものである。其間伊太利の政治にも社會生活にも極めて激しい變革があつた。伊太利新聞界の狀態も非常な變り方である。伊太利に言論の自由なしとの批評はファシスチ政府出現以來よく云はれる處である。實際ファシスチ政府の新聞政策は初から極めて直截鮮明であつて、反ファシスチ新聞を全滅せしめてファシスチ新聞を以て之に置き換へるといふに在つたのである。ムッソリーニの政府は突撃的に此政策を強行した。反對新聞に對しては遠慮會釋なく發賣禁止發行停止處分を喰はせた。其結果は營業不可能であり、續いて降伏であり廢刊である。反對の小新聞共は忽ちにして影を潜め四、五の大新聞のみが此壓迫と戰つた。其雄なるものにミラノの「コリエラ・デラ・セラ」があり羅馬の「ジオルナレ・デイタリア」其他二、三紙があつた。ファシスチは之に對し買收、威嚇等あらゆる手段で猛烈に追窮した結果、何れもカルタゴの陷落の如く又大阪の落城のごとき悲壯なる最期を遂げてファシスチの手中に落ちた。斯くて五年を出でずして全伊太利に反對新聞も中立新聞もなくなつて、一切の新聞はファシスチの統制に服するに至つたのである。

然しムッソリーニの新聞政策は新聞に對する無理解から生ずる彈壓ではない、盲目な官憲の壓迫癖から出た常套手段でもない。ムッソリーニ程に新聞を理解し新聞の價値を認めて居る政治家は見渡した處世界に一寸無いであらう。蓋しムッソリーニは生粹の新聞人である。年少三十に達せずして「ロッタ・ディ・クラッセ」（階級爭鬪の意）紙の主筆となり、次で「アヴァンチ」（前進の意）紙の主筆となつて社會主義の爲に健筆を揮ひ次で大戰中主戰論の爲めに社會主義と絕縁して同紙を去り、自ら友達から借り集めた[illegible]でミラノに「ポポロ・ディタリア」（伊太利民衆の[illegible]）紙を創刊して伊太利參戰國民の戰爭熱作興に努め、大戰後は同紙に據つて共產黨征伐の大旆を翻し、同志の糾合に努め遂に天下を取るに至つたもので、彼が首相となる迄は全くの新聞人であつて、文筆が言論となつての[illegible]も彼が新聞人であつたが爲めに外ならないのである。又彼れが政治家として有する[illegible]して迅速正確なる[illegible]も、[illegible]爭[illegible]力も、大きな魅力も、凡ては彼が新聞人として[illegible]經驗が齎らしたもの[illegible]

[illegible]

三月八日・國際婦人デー

神近市子

國際婦人デーは、一九一〇年アメリカに始まつた。

アメリカの社會主義婦人たちは、この日をプロレタリヤ軍中の最も意識の後れた分子である無産婦人の教化と組織化の運動を起す日と定めた。そして世界の婦人たちに、この日を期して一齊に立ち、資本の束縛にくるしむ婦人勞働者の解放に關する根本的な要求を提起せんことを要望した。

翌一一年には、この日は數ケ國で行はれたにすぎなかつた。ドイツとオーストリヤの婦人たちがこの日を守るに最も忠實であつた。婦人の示威運動者と官憲との間の衝突事件すら起つた。

一三年に、ロシヤの無産婦人は始めてこの運動に參加した。西歐に於けるその年の婦人デーのスローガンは、婦人の[illegible]——即ち婦人參政權の獲得乃至はそれの擴大であつた。

が、ロシヤに於いては事情が異つてゐた。封建的な政治形態の存在は、當時のロシヤの無産運動の憎惡の的となつてゐた。ロシヤの民衆は、ツアールの、、、、、、、にその力を集中してゐた。そしてそれは婦人デーの指導者たちにも反映した。一四年の婦人デーの示威運動は『、、、、、、、、』のスローガンの下に擧行された。

一九一五年と一六年とは、西歐諸國では第二インタアナシヨナルの指導者たちの策動によつて婦人デーは行はれなかつた。僅かにノールウエ、スウイス、及びロシヤで行はれた丈けであつた。しかし翌一七年になつて、この日は俄かに世界の無産運動の歴史に特筆す[illegible]

この日——正確に云へば一九一七年三月八日に、當時のロシヤの首都ペトログラードの工場や職場で、婦人勞働者はストライキを宣言した。彼女たちが街上に現はれ始めると、パンと燃料との不足を久しく堪へて來た一般の婦人も、直ちにそれに參加した。

『パンを與へよ、われらにパンを與へよ！』と叫ぶ婦人の集團は、即ち街路を埋めはじめた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。そして途上、仕事場や職場があるのを見ると、彼女たちはそこに働く仲間によびかけることも忘れなかつた。

『同志たちよ、、、、、、、、、、、！』

、、、雰圍氣は、この朝からペトログラードに漲ぎり始めた。

午後三時には、この激情の波はフイリポフ製パン所前のボルシヨイ廣場にのびた。パンを求めて朝から長い間むなしく待ちあぐんでゐた婦人たちは、直ちにそれに參加した。製パン所は、、、、、。つゞいて別の一隊は、カメヌーストロフスキー街のピーカー製パン所、、、、。

これが、、、、、、、、であつた。すぐに全市の勞働者は、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、。

四日後の三月十二日には、ツアーの、、、、は倒れてゐた。

ボルセヴキキ革命後、ロシヤのプロレタリア婦人は凡ゆる法律上經濟上の權利を男子と同等に與へられ、獨裁政府の完全な參加者となつた。革命が完全すると共に、革命に迄誘導したロシヤ婦人の勇氣と努力とは、世界のプロレタリヤによつて深く感銘された。國際婦人勞働者會議は、改めてこの日を婦人の國際祝祭日とすることを決定した。

現在この日が最も盛大に祝はれてゐるのは、勞農ロシヤであらう。

この日には、ロシヤで一年間に行はれる婦人の運動のプログラムが決定されるのが例である。國内いたるところに婦人の特別の集會が開かれ、新しい托兒所、相談所、食堂、洗濯場が建設されるとこの日を待つてその創立式を擧げるのが又例である。婦人の雜誌は特別號を發行し、新聞は婦人のその日の動靜を滿載し、見て[illegible]婦人[illegible]放され、劇場は婦人の集會に便するためにその夜は休場して提供されてしまう。

しかし、ロシヤ以外の國家の婦人にとつても、この日の重要性は決して變りはないと思ふ。それはロシヤ婦人の、、、、、、とを學ぶに、この日を記憶するにます教訓はないからである。

そして實際に、世界の各地でこの日は無產婦人によつて記念されてゐる。彼女たちはこの日を帝國主義戰爭反對、、、、、、、、、、、、ソビエットロシヤ、、を表明する日として選び、國際的ソリダリテーの精神發揚につとめてゐる。

——プロレタリヤの運動は、婦人を參加せしむることに成功する迄は、決して完全なものといふことはできない。——（レーニン）

敵陣に肉迫する

—初登壇の感想—

淺原健三

「帝國議會こそはブルジョアジーの、、である。」

「衆議院こそはブルジョアジーとプロレタリアートの、、、、、、、、に示現し得る活舞臺である。」

これが、無産階級解放運動の一兵卒として始めてブルジョア議會の演壇に立つた私の實驗である。私は私の議會觀の一部として、一月二十四日の議場で、何を觀、何を感得したかを語りたいと思ふ。

治安維持法の承諾案、不信任案、兩稅委讓案等々の重要案件を直前にして、忙中小閑を偸んでの走書である。順序も何も備つて居れない。

□

登壇、開口二分間經つか經たぬかに、政友會席はカアッとなつた。嵐とでもいつたやうなものが議場に捲き起つた。政友會席の面々に「此の野郎—」といつたやうな鬪氣がサッと漲り渡つた。激怒、憤怒、牙をむいて飛びかかつて來る、、の熱氣、私は、叩きつけられたことを感じた。「、、」が鮮明に意識せられた。、、、、、、、、、、、き上つて來た。

私は始め、冒頭は靜かに出て議場の空氣を次第に昂揚してゆきたいと思つてゐたが、そんな手ぬるい手段が駄目なことを知つた。最初からが爭ひの上にあつた。

二十分ぐらひ經つと、「彼奴にものを云はせてはならぬ」といふ意思を持ちながら、私の、グンゝと突つこんでゆく態度に押され氣味になつて議場は暫時靜謐であつた。小康が來た。然しそれは、一面、無産階級に對する官憲の、、、、、とする心理からのたるみでもあり、又一面、彼等の間に殘つてゐる僅かばかりの自由主義的精神からの輕るい共鳴とでもいつたやうなものから生れる寛容から來たそんなものの混和から來た、ほんの一時の表面上の休職狀態に過ぎなかつた。

治安維持法、殊に對支外交に及んでゆくと彼等の陣營はまたもとの鬪氣にざわめきたつた。「、、、、—」「、、、、、—」。彼等の妨害は壓倒的であつた。滿洲某重大事件に觸れて行かうとして身構へた私に對して、最後的の壓力が來た。私は、遺憾ながら壓倒せられた。が、一方には此の事件を今私が取り上げることが此の事件の暴露のために不利だといふ考へもあつたがために、私の口が塞がれたことも事實である。

私は最初から闘つた。その闘ひは無効果で**はなかつたと思ふが、最後は彼等の壓力に抑へられた形になつた。**

□

最初、大臣席はユツタリと落ちついてゐた。悠々と弱兵の泣ごとを聞いてやれと云つたやうな餘裕ある態度であつた。なかば頃には、大臣席の面々が一歩乘り出して來たといふ感じを受けた。殊に內務大臣は「少し面倒だぞ。」といつたやうな風に、椅子から乘り出して來た。終り頃には、大臣席の一部には、狼狽といつてもいゝやうな不安な空氣が動いてゐることを感得することが出來た。あとで思ふと、內務省關係の政府委員席に動搖が其の時起つてゐたのである。

大臣の答辯を通じて、私は田中內閣の持つ近代ブルジョアジーの特質を見た。一面、ガムシヤラな反動性と、他面、極めて近代的、紳士的な儀禮で自己の、、、反動性を掩ひかくさうとする僞善的方面とを見た。

答辯內相の態度　言葉は後者である。內相**が、「人の氣をいやにさせるやうなことを云つて」などゝ、官憲の、、、の下に血みどろになつてゐる無産階級鬪士の慘めな姿に目を掩ふやうな態度は、表面その反動性をかくさんとする紳士的假面であつた。原法相は前者であつた。「此の、、、、、、、ー」と云はぬばかりに噛みついて來た姿は、**田中內閣の反動性のさながらの表象であつた。

森次官は、その性格の如く、「斯くの如き說を爲す者もあるが」と、事實を肯定しつゝ、堂々と正面から鬪爭してくれた。勝田文相は彼自身が私に被せやうとした「下劣さ」の上着を自分で被て引下つた。

要するに、すべてが反動內閣の全姿をまざまざと見せつけるほかの何ものでもなかつた。

□

議員になる以前、議員になつてからも、私は議院內の鬪爭を見て、議會といふものは如何にも下らないものと思つてゐた。ブルジョア**議員の甲論乙駁を聞いてゐると、議員たる**ことのバカ〱しさを痛感せざるを得なかつた。然し、自分で演壇に立ち、精根の限りドナつて見て、私は議院の鬪爭の價値を認めざるを得なくなつた。眞劍にさへやれば、こゝに、、、、の縮圖を展開し得ると思ふ。我々と彼等との鬪爭は斷じて遊戲ではない。此のブルジョア議會でさへも、此方が本氣でさへやれば、、、、、が現實に爲され得ることを實驗した。

眞の無産階級的理論と鬪爭意思を持つものであれば、議員數の如き、敢て問はぬ。三人でも、五人でもよい。此所にこそ最も熾烈な、、、、の戰野が展げられ得る。

□

壇上と議席とに私と彼等とが對峙した時、私は始めて、眞の、、、、、とを生々と感じた。平常、如何なる演壇に立つても、こんなことはない。通常の演說では官憲との小ぜり

合ひはあるが、こゝほどマザ／＼とブルジョアジーとの、、を感得しない。此の時こそ、私は眞に敵軍をきりまくつて行く戰士の氣持になり得た。敵陣に向つて、眞一文字に、血みどろになつて突貫し、奮進してゆく者の心理を、私は始めて此の壇上で經驗した。鬪爭の快感がヒシ／＼と胸に迫つた。何といふ痛快さ。私の演說のキレ目毎に起る嵐の如き怒號を聞くたびごとに、私は形容のできぬ快感を感じた。心臟を、、、した瞬間、サツト、、、、出るときのやうな情景であつた。私は此の快感に醉心地にさへなつた。

□

私は議事規則を知らぬ。先例を知らぬ。議場の情勢を適當に判斷してゆく經驗もない。不安は私が抱くべきである。然し、私は投げてゐる。最初から棄身である。妨害も懲罰も少しも意としない。私には何の不安もなかつた。

然し、彼等には不安がある。、、を恐れる恐怖心からの不安である。それが、政友會よりも寧ろ民政黨に濃厚である。民政黨は私を擁護しなければならぬ立場に形式上置かれたが故に、餘儀なく私に生溫るい拍手を送つた。がそれは餘儀なき拍手である。私の立論の內容への贊意なんか毛頭ない。私の鋒先は民政黨の胸元にも突きつけられて居る。民政黨にも不安があつた。ブルヂョアジーの、、を怖れる點で政民は共通の立場にある。こゝから議場にはブルジョアジーとプロレタリアートの、、、、、が生れた。私の前に居る者は全てがブルヂョアジーである。私はこんな演壇に立つたことが未だ曾てなかつた。、、の痛感せられたのも、鬪爭の快感を滿喫し得たのも、こゝに原由する。

□

私は大臣席を指ささず、振り向きもしなかつた。彼等の立脚地は政友會席にある。私は政友會席を睨みつめた。そこに私の、、、、。その席に私に肉迫して來る力が充滿してゐる。その力はブルジョアジーの力である。個々の議員が持つ力ではない。議場全體に漲る私への抗爭力は、、、、、、、、力ではない。ブルジョアジーの力が議員や議院を通じて示現さるゝのに過ぎない。政友會席を睨んで立つた私は此のブルジョアジーと睨み合つてゐる私であつた。「白刃の下を行く」氣持がそこから湧いた。何といふ、、、、、、何といふ痛快な鬪爭であらう。

私は議員になつたことを悔いない。



女性論

兼常清佐

○

私の女房は女である。また私は女の知人をも持つてゐる。私は女の事は全く知らぬとは言はない。氣まぐれな『改造』記者が私に女についての雜文を求めるならば、私は快くそれに應じようと思ふ。

女は美しい。この地上にあるすべてのもの丶中で最も美しいものを求めるならば、その一つは確に女であらう。

女の中でも若い女は特に美しい。見た目に甚だきれいである。皮膚のつや、脣の色、眼のうるほひ、頰のふくらみ、みな人に美しいといふ感じを與へる。そして顏のいろ／＼な道具立てが自然に或る種の條件にかなつてぐあひよく配置されてゐる樣なのは、人はわざ／＼それを美人とさへも呼んでゐる。實際にしても、畫や彫刻にしても、美人を見る事は誠に私共の大きな喜びである。

女は美しい。そのうちでも西洋の女は特に美しい。すくなくとも私自身にとつては、西洋の女の方が日本の女よりも遙に美しく見える。諸君のうちでまだ西洋の土地を踏んだ事のない人々は、或は西洋の裸體婦人の畫を見た事のない人々は、遺憾ながら女の最上の美しさをまだ見た事のない人々であるかもしれない。

私自身には、女は一體に體格がすばらしくて、肌の白い方が美しく見える。金髮と碧眼とは、綠なす黑髮や黑水晶の眼よりも美しく見える。それはからだの上部の方がむしろ輕くて、からだ全體がよく安定してゐる樣に見えるからかもしれない。そして日本の女の着物は袖が長く、また帶を結ぶので、ます／＼不安定な感じを與へる。髮を日本髮に結つたら、その不安定さはます／＼增して來る。その上、日本髮は島田も丸まげも銀杏返もいづれも私にはあまり美しいといふ感じは與へない。見てあまり面白い形とは言はれない。畫にかいてもやはりそのとほりである。私自身は、西洋の體格のい丶女が西洋の着物を着た姿の方が、どうしても見てゐて愉快である。好奇心などいふ樣な第

二義のものをつとめて除いて考へて見ても、やはり私自身にはさうとより外には思はれない。私は繪畫でも彫刻でも、女ならやはり西洋の女の方をとる。しかし私は西洋の國では僅にドイツの一つを見ただけである。そしてドイツは或る點では西洋の田舍の樣に言はれてゐる。それでも私には西洋の女は美しいといふ印象を與へた。もし西洋のいろいろな國を遍歷しあるいた人ならば、必ずさらに、さらに多くの女の美しさをも見たであらう。

女は美しい。そして生きた女の美しさには、多くの場合には他の別な一つの感情を伴ふ事がしば〳〵ある。その點で女の美しさは、花の美しさといささか違ふ樣に見える。それは戀である。もちろん戀は女の美しさを嘆賞する事とは意味が違ふ。しかしこの二つの感情は常に密接に結び付きやすい。そしてこれこそ實に人間的な感情である。人間の持ついろ〳〵な感情の中でも、最も人間らしい、最も美しい感情の一つである。

女の美しさを嘆賞する事と戀とは世界古今の文學や藝術の絶好の題目である。世界の文學や藝術から女と戀とを除いたならば、あとに殘るものはほとんど幾何もなささうに見える。詩や小說と言へば、直ちに私共は戀を聯想する。繪畫や彫刻と言へば、直ちに私共は裸體の女を聯想する。藝術の内容としては、これよりも美しい、華やかなものは外にはあるまい。

[illegible]

この大題目と全く無關係で、しかも昔から僅に藝術として世の中に存在して來たものがたゞ一つある。それが音樂である。もしこの世の中に、女をも好まず、戀をも讃美しないといふ人があるならば、その人の藝術には音樂が一番適してゐる。また或る藝術家がゐて、熱心に女の美を歌ひ、戀を歌はうと思ふならば、およそ音樂くらゐそれに不適當なものはあるまい。音樂はその事にかけては、全く力が及ばない。藝術家自身にとつては、恐らく甚だはがゆからう。甚だじれつたからう。しかし何ともしかたのない事である。

音はたゞ音である。なるほど音樂の音は美しいけれど、しかしたゞそれきりの事である。ピアノの鍵盤を一つ叩いて、これは女の美しさの音であるといふわけにはゆかない。それはたゞピアノの音である。ヴイオリーネの絃を一つ彈いて、これは戀の音であるといふ事も出來ない。それはたゞ絃の音である。そしてその樣な音をいくら複雜に組み合せて見ても、もと〳〵無いものからは何も出て來るはづがない。やはりたゞ美しい音の組み合せといふだけの事である。もしそれに何かあると思ふのは、思ふ人の心だけである。

たゞ多少望のあるのは唄である。これには文句がついてゐる。その文句したいで女の美しさを唄ふ事も出來れば、また戀を讃美する事も出來る。ゲーテのグレートヘンの戀の唄を作曲したシユーベルトの音樂は、正しく戀の音樂だといへよう。ハイネが女の美を歌つた詩を作[illegible]そして

ワーグネルの樂劇の歌劇は、暖くもた女と戀の音樂である。なるほどさうも思はれる。しかしそれもたゞ比較的な話である。唄のふしと文句とは別々なものである。せつかく戀の文句に作曲したと思つても、人が勝手に文句を變へて唄つたのでは何にもならぬ。ただ私共は作曲家の意志を尊んで、決してそれを變へようとしないだけの事である。しかし唄の文句こそ變へようと思へばいくらでも變へられる。日本でも以前には、音樂は學校にしか無かつた。その學校はみな政府文教の省の司るものである。そして戀や女の文句は日本では學校の教育に害があるとあつて、燃ゆるばかりの戀の歌を忠君愛國の歌などに作りかへて歌はせたものである。さうなつては戀の音樂も甚だたよりない事になる。

それに比べると、歌劇は遙に幸福である。何しろ仕掛が大きくて、それを根本から改造する事は容易には出來ない。たとへばワーグネルの歌劇をやるならば、それはそのまゝにやるより外に仕方はない。やらなければやらないだけの事である。如何に忠君愛國論者だと言つても、まさか『トリスタンとイッルデ』を楠正成忠義の歌劇としてやる事は出來まい。もちろんそれは本質的な事ではないが、實際上音樂の中に女と戀とを求めるならば、それには歌劇が一番適當してゐる。世界古今の文學や藝術のこの大題目は、音樂としては甚だ不純粹な歌劇だけに實際上あらはれてゐる。そして歌劇の中の西洋の女こそは、殆ど女といふものゝ粹である樣にも見える。

日本にはまだ大きな音樂は生れない。いはんや日本の女がそのうちに活躍する樣な歌劇など、いつ生れて來るかわからない。日本の女の美しさと日本人の戀とは、これまではたゞ文學や空間的な美術に表現されただけである。將來それがどの樣に音樂の中にも唄ひ出されようか。島田や、振袖や、黑い髮や、黃い肌は、管絃を背景にしてどれほどその美しさを發揮する事が出來るであらうか。フレエーテやヴイオリーネが日本人の手にかゝれば、それからどれほど日本の女の美と戀とを唄ふ力が出るであらうか。考へ樣では、そこからまた新しい日本の女の美が生れて來ないとも限らない。――新春の或る夕、諸君はこの樣な空想を描いて見るのもまた一興であらう。

○

女は弱い。女は美しいけれど弱い。弱いのみならず遙に男よりも劣つてゐる。人間がこれまでして來た事業は、殆どみな男の事業である。人間がこゝまで築き上げた文明は、殆どみな男の文明である。これはわざ〳〵こゝにことわるまでもない明白な事實である。

私の友人に一人の婦人愛護者がある。女の學校に行つて語學などを教へて、そしていつも口癖の樣に、女の學生はよく出來ると言つてゐる。それもどうやら本氣で言つてゐるらしい。私はこの友人の婦人愛護の說をきくたびに、いつも何かの幻影に捉へられた人の誤謬の樣なものを感じさせられる。私はこの友人の教へる學生たちが、はたしてその先生の熱心な推賞に値するかどうかは非常に疑問にしてゐる。

もちろん語學の講義を聞く事は頭をなぐられる事とは違ふ。多少の眠さを我慢しさへすれば、四五十分間くらゐは默つて聞いて居られる。そして休業の鈴が鳴つて、教師が教室の外に出る途端に、この女學生だちは語學と全く何の關係もない運動會の話やら、人の噂やら、キネマの話などをしやべり初めるであらう。そして今四五十分間聞いた語學の講義は、學期試驗の前までは、二度と再び彼女だちの意識には現はれて來ないであらう。その様にして彼女等は學校を出て、そして間もなく家庭の奥に埋もれはてゝしまふ。しかし、世の中はかなりの好奇心をもつて女の文士や學者の出現を待つてゐる。女の方にも世の中に自分の存在を示したい功名心は盛に燃えてゐる。それにかゝはらず、この友人の長い間推賞措かぬ女學生諸君の中から、未だ曾て男なみの仕事をした人の出た事を聞かない。この友人は何のためにその專門の語學を非常な豫習の時間をつぶしてまで女の學生に教へてゐるのであらう。どうせ行く水に數を書く様にはかないものならば、豫習など何もせずにたゞ口から出まかせな事を言つてゐても別に害にはならぬ筈である。どうせ忘れるものならば、馬は女性で、鹿は中性で、女は男性だと言つてもよろしい。そしてそんな豫習の時間で自分自身の仕事をした方がどれほど意味があるかわからない。世の中には女に物を教へてさも得意然としてゐる人は多い。しかし私はその人々の報告を眞面目に信用する氣にはまだどうしてもなれない。

女は常に從つてゐる [illegible]

ふのは、それは或は少々過激であるかもしれないが、私はもう一つその様な例をこゝにあげる。それは女と音樂である。音樂の世界で如何に女は男に劣つてゐるかといふ事である。

もし男だけの世界といふものがあり得るならば、音樂の世界は確にその一つである。これこそ女がまだ少しもその權力を振つた事のない世界である。昔から音樂を作つたものはみな男である。バッハは男である。ベートーヴェンは男である。ワーグネルは男である。シュトラウスは男である。シエーンベルクは男である。音樂の歴史の中で、音樂を作り出した女の名は殆ど一つも見あたらない。音樂といふものは全く男の手だけで築き上げられた藝術の大殿堂である。

音樂の世界では女はたゞ勞働者である。男の作つた計畫に從つて忠實に勞働するだけのものである。つまり男の創造した音樂をその樂譜どほりに演奏するだけのものである。たとへば百人一首の歌人は歌を作り、かるたを遊ぶ人はそれをたゞ讀んだり取つたりしてゐる様なものである。もちろんこの様な仕事も必要である。なくてはならぬ。讀む人や取る人がなくてはかるたは出來ぬ。演奏者なしには音樂は成立しない。そして女房が女でなくてはならぬ様に、看護婦や助産婦が必ず女である様に、女の役は女でなくては出せない。昔から女優は必ず女である。そしてたゞそれだけの事である。

何故に女には音樂が作られないか、

[illegible]

わからない。たゞ歌劇の上では女は音樂の世界にはたゞ演奏の仕事をしてゐるだけである。しかしその演奏といふ事も、よく考へて見ると、やはりそれは一種の創造である。優れた演奏といふ事は、つまり或る樂譜によりながら自分のものを表現する事である。さうすると、よし女は音樂を作り得ないまでも、演奏するといふ事がすでに一種の創作であるから、「女にも結局は或る種類の音樂を創作する事も出來る、と諸君は言ふであらう。しかしそれは暫く待つてもらひたい。誠にお氣の毒ながらその演奏にかけても女は到底男の敵でない。女が十分に氣を吐く事の出來るのは、女だけに出來て、生理上男には出來ない仕事だけである。つまり女聲を唄つたり、歌劇女優をつとめたりする事だけである。

いやしくも男にも出來る演奏では、男はこれまで完全に覇を稱してゐる。ピアノ大演奏家、ヴイオリーネの大演奏家、管絃樂の大指揮者といふ樣なものは、たいていはみな男である。もちろん、たまには女の大演奏家といふ樣なものも出ないではない。たとへばピアノのカレンニヨの樣なものである。今の世の中でも女のピアニストやヴイオリニストと言はれる人を數へたら相當の數には上るであらう。そしてそれにはまた相當のごひいきがあるであらう。しかし女の中で、はたしてダルベールやザウエルに匹敵するピアノの大家がゐるであらうか。女の中で、はたしてクライスレルに匹敵するヴイオリーネの大家がゐるであらうか。その藝術全體の大をもつてすれば、やはり女はたゞの演奏家、たゞの唱歌家である樣に見える。今の世界の本當の大演奏家——その演奏が實にその人の獨創的な藝術である樣な大家、或は演奏より以外になほ獨創的な作物を持つてゐる樣な大家は、やはりたいていはみな男である。音樂の世界で女が男なみの仕事をするのは、まだなかなか前途遼遠であるらしく見える。

諸君は日本の事を考へてはいけない。これは確に變態である。日本ではこれまで男は音樂をやらなかつた。音樂などいふものは、かりにも男が手を出すべきものではない樣に思はれてゐた。その樣な國で多少女の演奏家が出たといつた處で、何もそんなに驚くほどの事ではない。罪はむしろ男の方にある。女だけに音樂をまかせた男の方にある。男が音樂に指を染めなかつた事にある。女からいへば、つまりどさくさまぎれの功名である。ほんとに日本の女が男なみに音樂の世界では活動出來るものか、どうだか、それはまだきまらない問題である。全く將來の問題である。過去の成績から推して、日本の女は音樂にだけは適してゐると思ふ人があれば、それは大きな考へ違ひである。むしろ或る期間だけ女も男もほとんど同じ樣にやつた事のある藝術を見た方が確である。それは恐らく畫や文學であらう。そして今の日本の畫壇も文壇も、それは完全に男のものである。もし女が或る程度まで畫を描いたり、文學を作つたりしたとしたら、それは珍らしい例として新聞に寫眞でも出されるかもしれないくらゐなものである。もちろん藝術家や藝術品の評價は決して一定してゐない。しかし私共は女

の漱石、女の鷗外、女の藤村、女の樗牛といはれる様な人の出た事をまだ聞かない。この様な例で音樂をも律するのは、それは或は多少不穩當かもしれないが、その不穩當は日本の女は音樂には秀でゝゐると斷定するよりも恐らく遙かに穩當であるらしい。日本の女の音樂も、世界全體の女の様に、たいていたかの知れたものであらう。

これからだ！――この言葉は誠に重寶な言葉である。到る處に勝手次第に使はれる。女の世の中もこれからだ、男の世の中はもう下り坂かもしれない。しかし女はこれから雄飛する。――婦人愛護者諸君は必ずさう言ふであらう。もちろん、これから先き女も社會的には相當な處まで發展はするであらう。また、して貰はなくてはならぬ。たゞ一方は下り坂で一方は上り坂といふ様な全く位相の違つた存在物として、これから先き男と女とが一つの社會に生存し得るかどうかは、それは恐らく社會學者の一考を要する處であらう。

これからだ！――もちろん、これからである。音樂の世界で、どさくさまぎれの功名をしてゐた女が、本當にその實力を試みて見るのもこれからである。しかし私共が女に期待することは、必ずしもこれから先き女が男と同じ様に一人前の樂人として世に立つ事でない。私共はそんな凜然とした、男からしさの事のあまり多くないらしい事がらに、さう多くの期待をかけようとは思はない。それよりもたゞ外に、私共は大いに女に期待する家庭上の仕事がある。それは子供の教育である。

音樂はつまり感情の言葉である。感情の世界語である。音樂は一種の語學の様なものである。音樂の技術を完全に手に入れて、それで自分の心の中にある事を自由自在に表現するのは、ちやうど或る一つの國語を完全に覺えこんで、それで自分の心の中の事を自由自在に言ひ現はすといふ事に似てゐる。音樂家はつまり二つの母語を持つてゐる様なものである。一つの母語は――私共にとつては日本語は――私共生れて間もなく兩親から教へこまれた。そしてそのおかげで、今日何の不自由もなく、それによつて私共は考へもし、感じもし、また感じた事、考へた事を完全に言ひ現はしてゐる。一體に人の一生の中には、いろ／＼な能力の發展の段階がある。語學を覺えるといふ様な事は、人が生れてからまづ最初の腦力の活動に適した事の様に見える。この時機を失しては、よし語學を覺えたにしたところで、普通の人では、とても母語の様に完全には覺えられないらしい。そして音樂家にとつての一つの母語も、恐らくこの第一の母語とほとんど同時に教へこまれなくてはならぬものではあるまいか。

それでなくては、音樂がその人の第二の母語の様になる事は到底出來ないものではあるまいか。それでなくては、音樂はちやうど私共が高等學校で習ひはじめたドイツ語の様なものになつてしまふのではあるまいか。高等學校の時から習ひ覺えたドイツ語で、私共は辛じて獨[illegible]の本くらゐ讀んでゐる。しかしそれで獨逸人の心の中を、

底の底まで美しく表現しようといふ樣な事は毛頭出來ない。音樂家にとつて音樂といふものが私共のドイツ語の樣なものであつたならば、それではその人はほとんど音樂家としての望はない。それはちやうど私共がドイツ語の詩人としての望のないのと同じ事である。

自分の子供に音樂を第二の母語になる樣に教へこむこと——それこそ私共が女の音樂家に熱心に期待する事である。これならば恐らく女に出來る事であらう。技術としても、たとへばそれがピアノならば、バイエルや簡單なツエルニーが正確に完全に彈かれたらそれで十分である。それ以上は專門の教師にまかせたらいゝ。そして技術だけから言ふならば、それは大したむづかしい事でも何でもない。かりにも音樂を業としようとする女ならば、誰でもそれくらゐは出來るであらう。これ以上は母の愛である。そしてこれこそ女だけが天から與へられた決して間違ひのない能力である。決して間違ひのない能力をもつて、その足らない處を補ふ事である。女にとつては誠に鬼に金棒である。

言ふまでもなく、これだけの仕事をするにも、たゞ技術だけでは遙に物足らぬ。自分の子供の才能の現はれかたに對する明敏な觀察がいる。そしてそんな事がはたして正しく女にも出來るかどうか、それには多少の疑もないではない。しかしとにかく母が自分の言葉と同時に音樂をも教へ得る樣な家からでなくては、本當に音樂を母語の如くに自由に、完全に使ひこなせる人は出て來ない。日本の音樂界の將來の

發展の一つは、確に女の手にもこの樣にして獲られてゐる。

私は例を音樂に取つた。しかしこの例は、或る意味ではまだいろいろな處まで應用する事は出來る。これこそ正に女の仕事として特に天の與へたものかもしれない。そして過去の歴史を根本から覆す樣な大改革が女の世界に行はれない限り、女は當分はこんな處で滿足してゐるべきものではあるまいか。それが男の仕事ほど花々しくないのは、これは誠にやむを得ない事である。

かつて伊澤蘭奢が或る人に書いて與へた筆蹟にはかうある。——『女に生れてよかつたわ。』私はすべての事を考へあはせて見て、やはり男に生れてよかつたと思ふ

世界の雄辯を聽く

フーヴァーの演説の印象

鶴見祐輔



『あの寛濶さを見給へ』

隣に坐つてゐたタンツ博士が、私の耳に囁いた。

その一言が、フーヴァーの演説振りのみならず、彼の人となりの全斑を寫し出してゐる。

それは大正八年の十月二十七日、彼が戰後歐洲より歸つて、始めて紐育で公けの演説をした折で、場所は落機山倶樂部、時はローズヴエルトの誕生記念日であつた。

彼は顴の張つた、鼻の低い、眼の小さい、毛髮の蓬々とした、頗る振はない風采をして、千人程の聽衆に向つて、食後演説をしたのであつた。私は彼の演説を聞きながら、全く吃驚した。

『これがあの全世界に轟き渡つたフーヴァーか』

と思つた程であつた。殊にフーヴァーにつづいて立つたルートの雄辯なる演辯に較べると、まるで子供のやうにまづかつた。

聲が低く、態度が威容乏しく、修辭が亂雜で少しも人を魅する持ち味が無かつた。ことにその一ケ月前、アクヰタニア號に同船して、歐洲から米國へ歸るとき船中の演説に於て、[illegible]諄々として、我を感歎させたその人とは、

[illegible]

「フーヴアーは、演説が下手だから、政治家には向かない」それが大勢の亞米利加人の意見であつた。

それが今度、政治家も政治家、大統領候補者となり、しかも米國で一二を爭ふ雄辯家のスミスを向ふに廻して戰ふことになつたと聞いて私は、他人事ながら、隨分と骨の折れることだらうと、密かに同情したわけである。

ところが、結果は全然豫想を裏切つてしまつた。

その一つはフーヴアー自身の變化といふことで、その第二は時勢の變化で、その第三は器械の進歩といふことである。

フーヴアー氏は商務卿としての在職七年間に、たしかに公人として演説の稽古を積んだ。上手とは言へないでも、兎に角下手ではなくなつた。二萬三萬の聽衆を前にして、平氣でこなすだけの腕が出來上つた。

それから時勢が變つた。雜誌ニユー・リパブリツクが評したやうに、今の時は抽象的雄辯を要求せずして、當時最新科學者を政界が要求し出したのだ。鑛山技師たるフーヴアーを現代は要求したのだ。即ちその演説に於ても、才華爛漫として大衆を魅する舊式雄辯術よりも、句々論理に即し、言々實行性に富む事務的表現法を歡迎し出したのである。その時代の變化が、精彩なきフーヴアーの演説を容認したのである。

さうして、器械の進歩がフーヴアーの最上の味方であつた。それはラヂオの普及といふことだ。肉聲の雄辯を眼のあたり見もし聞きもし得るのは、多くても二萬か三萬の人だ。しかるにラヂオを通じての聽衆は、三千萬にも五千萬にも及んでゐる。殊に今回の米國の言論戰は、第一にラヂオ戰で、第二に新聞戰であつた。しかるにラヂオの雄辯は、肉聲の雄辯とは全然異る。ラヂオで聞く聲といふものは、肉聲と全然別だ。肉聲の美音家が、ラヂオの惡聲家となり、肉聲の惡聲家が、ラヂオの美音家となる。フーヴアーを助けたものは、このラヂオであつた。彼はその振はざる風采の見えない三四千萬のラヂオ聽衆に向つて米國一のラヂオ聲で演説した。彼の聲はラヂオで實に明瞭に聞える。さうして、ラヂオで語る者は、感情に訴へずして、理性に訴へる。益々フーヴアーに誂へ向きである。

ゆゑにフーヴアーは、ラヂオ雄辯で、大統領に當選したといふことが出來る。

（四、二、四夜）

大衆的雄辯のトロツキー

田口運藏



ロシア革命の指導的位置を占めた人達は、思想的にも秀でてゐたことは勿論だが、總てが非常の雄辯家であつた。それは單なる辯舌の人ではない。大衆的雄辯とでも云ふべきであらう。

革命的動亂の雰圍氣にあつては、筆よりも口が、より強い戰鬪力をもつものである。プロパガンダもアジテイシヨンも、筆に書かれたのでは、そのスピリツトが幾分に弱めらるる。だが、空虚の美辭麗句では、動き出した民衆は滿足しない。理論的な、現實性のあるインストラクチーブな、具體化した強い辯舌のみが受けるのである。それのみが有效となる。

かゝる環境にあつて、生死の闘爭のうちにボルシエヰキの首領達は、生來の雄辯が、益益精練され、熟達したのであつた。

一九二一年の五月某日、丁度、コンミンターンの第三回大會の二三日前であつた。ボルシヨイ・セヤトルで、モスコウ共產黨支部主催の海外代表者歡迎演說會が開かれた。トロツキー、ブハーリン、コロンタイ女史、ルナチアルスキー、ラデツク、クリレンコなどのお歷々が辯士であつた。思想的に選ばれた五千餘の聽衆は、魔術にでもかゝつたかの如く吸ひ込まれた。萬堂水を打つたと云ふ形容詞は、その場面を言ひ表すために拵へられた文字となつた。列強の經濟的、社會的客觀情勢からとき始め、×××の見地から、ソヴエヰツト・ロシアの當面の諸問題を一時間ばかりづつ語つた。

私は「なるほど、雄辯ばかりだ。これらの首雄の多くをもつたればこそロシアのプロレタリアは×××成功したのであらう」と、肚のうちで、感心しながら、私のそばにゐるアメリカのHに「實に偉大な辯士ばかりだ。トロツキーの聲量と態度はとくに秀でてゐるようだ」と話かけた。Hはうなづいて、

「勿論、トロツキーは雄辯家としては世界一だ。これらの人達は、革命と云ふ生死の境を突破するうちに、皆な、こんなにうまくなつたのです。革命の一ヶ月は、他の時代の十ヶ年の經驗に匹敵するから……」と勿論に力をこめてさゝやいた。

トロツキーが赤色廣場の演壇に立つたときの勇姿は、今でも私の眼に映ずる。何回かのうちで、一九二二年のメーデーの司會者としての彼の挨拶が最もよかつた。

肩幅のある五尺八寸からの偉大軀から、やゝ力をこめて握つた右手の拳に調子をとらせて、焦らず、迫らず、豐かな聲量をオペラの如く送り出す。それが、勸工場、寺院、クレムリンの建築物に反響して山彥を起し、而も論旨明晰に十數萬の聽衆を滿足せしめる。この場面を親しく見ない人は或は信ぜられな

いに相違ない。萬を以て數へる大衆を雄辯で左右し得る程の人をトロッキーを措いて、私は未だ聞かない。この點丈けでも彼は確かに天才的英雄かも知れない。

私はかつて、その用語は當を得てないが、次の如くトロッキーを論じたことがある。

「……トロッキーは、思想と時代とを異にすれど、ナポレオンのそれより以上に英雄的である。大衆のアトモスフエアを掴む雄辯と組織力の偉大さに於いても……。」

——一九二九、一、三〇——

ムッソリーニ演説の印象

吉田彌邦



伊太利首相ムッソリーニが二百萬のファシスティ黨員を得た其の第一聲は實に伊太利青年「ジョヴイネッツア」の叫であつた。

戰前伊太利に於て大政治家として聞えたオルランドやサランドラは何れも雄辯であつたが兩氏とも羅馬大學の國法學教授であつた故か演説よりか講演の方が味まいと云ふ評判である。

現今伊太利の政治家中聽衆を感激せしむる第一人者はデル・クロアー(Del Croix)一名之をチエーコ・デイ・グエルラ、(Cieco diguerra)とも云ふ人物である。此意味は彼が歐洲大戰に參加し敵彈に觸れて失明したことを指すのであつて、固より戰爭盲人として世の同情もあらうが、斯く名聲の喧傳せらるゝ所以は實際彼の政治に忠ならんとする態度の立派なると、其の說く條理の井然たるに主因するのである。

偖て現伊國首相で國粹黨首領であるベニト・ムッソリーニは如何なる態度にて又如何なる音調にて演説するかと云へば彼の演説は全く彼の容貌の如しと想像せばよいのである。此觀察は恐らく伊太利人が一般に一致する處であらう。即ち彼の聲は鐘の如く響き、遠くより聞くことが出來る。其上に權威と活力が漲つてゐる。一例を擧ぐれば一九二二年十月二十八日羅馬進軍の記念を其後毎年さしもに廣きピアッツア・デイ・シエーナの廣場に於て行はれるが其の場合彼の聲は幾萬の群集にも明瞭に到達するのである。殊に國內で惹起する吉凶出來事の都度幾萬の民衆がピアッツア・デイ・コロンナ廣場に殺到する場合彼は

自若として外務省廳舍なるキジー宮殿の樓閣に備へらるるバルコーニより彼れ固有の音聲を以て是等の群集を麾き激勵又は訓諭するのであるが彼の語句は斯く多數なる群集の喧囂に遮ぎられない。斯て彼がモンテチトリオ(衆議院の別名)や「パラッツオ・マダマ」(貴族院の別名)に於て行ふ施政の演說又は質問に對する答辯の如きは何時も勝利者の如く堂内を威壓するのである。予は記憶する、一九二四年五月十五日午前十時半萬國移民會議の發會式が羅馬カムピドリオの宮殿に行はれて、伊國皇帝陛下を始め、五十有九ヶ國の代表、隨員等が彼の燦爛たる宮殿の大廣間に充溢した當時の事である。羅馬市長であつたクレモネージ氏が陳べられた歡迎の辭に次で首相ムツソリーニ氏の開會の辭があつた。此場合前者は溫良なる聲にて簡短明瞭に能く遠來の貴客を慰むるに適する歡迎文を讀まれたが後者も又至つて鄭重なる修辭を施せる頗る長文句のものを述べられたのであつた。而して彼の聲は例に依り力量あり、活氣に富み毫も他に倦怠を感ぜしめないのである。今尚予が腦頭の邊に當時の光景が殘つてゐる。要するに彼は演說に巧みと云ふよりか彼の演說は其の面貌の如く異常の力を有つて居る。斯て一言一句も之を聽衆の耳底に吸入せしめずしては置かないのである。其の結果彼の演說は常に意外の收穫がある。

國難獨逸の雄辯

佐々弘雄



國難と云ふ言葉が流行する。しかし、その頃の獨逸は、ほんたうのどん底であつた。大戰の悲慘なる影響が漸次その凄味を起してゐた。一九一三年に二萬五千移民を出した獨逸は、一九二三年には十萬を超ゆる移民を押し出してゐた。人口の一割と、一割七分の土地を失ひ、原料品中最も重要な石炭は約三分の一を減じ、鐵鑛は四分の一、亞鉛鑛は三分の二を奪はれたばかりではない。産業の停頓、輸出入貿易の半減、殊に悪いことは、これ等經濟的悲境の表徵として、マルクがどんどん下落して、取引を破壞し社會を混亂の淵に沈めて、行つたことである。戰ひに喪はれた數百萬の壯丁をうらやましめるほどのフツカ

ー・ノートが木葉の如くに飛び、既にマルクの下落で一面資本家は五十億金貨マルクの債務が消散したのに、生活の基礎を失つた小資本家階級とワイマアル憲法で得た權利の空文を抱く勞働階級とは喪家の犬の如くならしめられたのである。而も農産物は品目により一九一三年に比し二割五分から六割の減收を示し、殊に都市の食料不足が甚しかつた。ザクセンの小學兒童の虚弱者三割であつたのが今や七割五分に達したのに見てもその一斑を窺ひ得るのである。そして五百萬ほどの全失業・半就業者群が巷に溢れた。

一九二三年は、かくの如き年であつた。全獨逸の血の滴るを聞くとさる詩人が嘆じた。新年匆々巴里會議は決裂した。佛白兩軍は「軍隊保護の下に技術委員會をルール地方に派遣する」口實の下に、一月十一日にエッセン方面に侵入するに至つた。ラインの保證占領に、今やルールも加へられた。單に經濟的、政治的占領ではない。あらゆる種類の社會的、人間的冒瀆が露出せられたのである。

そして獨逸は――。

一月の十四日は全獨逸の忌みの日であつた。その朝早くから伯林はどん底の呻きを、既に發してゐた。ケーニッヒ、プラッツは見渡す限りの灰色の人の波であつた。先輩O氏、K氏、とS君ともども十萬に餘る人渦に唯もまれるばかりであつた。中央黨首領ウイルヘルム・マルクスの演説をその渦巻きの裡に聞き得たのはその時であつた。Nieder mit Frankreich! Franzözen! と叫ぶ民衆の怒濤に比して、その餘りに、靜かなる演説は寧ろ意外の感を催したのである。彼が裁判官上りの、舊教黨首領たるためばかりではあるまい。型の如き佛國攻擊の演説に過ぎぬその演説に、一種の力を感ぜしめたのは、それが大衆の地に這ふような呻吟であつたためであらふ。淳々として説き來り、説き去ると云つた風な克明な彼の演説は、國粹黨の擡頭をとれるラインの守りの合唱に變はつて行くのである。人崩れに押されつゝ、ラインゴルドの前まで來たとき、ラインの守りで元氣づいた彼等のデモンストラチオンの行進が、我々日人に「ヤップ」と浴せたのは、余興にもならぬことではあつた。けれども、アレキサンダア・プラッツ近くで行はれる一月七日のI、K、Pの健鬪、靜謐な Erkämpft das Menschenrecht 」の合唱の余韻と、路傍の異邦人たるO氏の肩をニコニコし乍ら叩いたりしたことを、ふと思ひ出してゐた。……

ルール占領は獨逸を更により以上の困厄に陥れた。「大きな無意義」とロイド・ジョルヂをして曰はしめたばかりでなく、列國の識者階級は反感をもつた。英國勞働黨は二月二十二日異議を唱へ、フランス急進社會黨首領エリオも三月二十九日ルール占領につき政府の闡明を求めてゐる。獨逸が國を擧げて反抗したことは云ふ迄もない。Frankreichs Ring um Rhein und Ruhr と云ふセリースのパンフレットをはじめ反佛宣傳は、小冊子にビラに遺憾なく行はれた。戰後獨逸の政界は幾變轉したが、カップ・プッチ、スパルタクスの二個の叛亂は極右極左の彈壓に歸着し、左、

右、中間の所謂 Koalitionspolitik が指導的役割りを占めてゐた。エルツベルゲル、ラーテナウの暗殺は共和國擁護運動を刺戟し、佛國の侵略に對しては消極的抵抗が試みられ祖國擁護がなされたのである。クノー内閣は前年十一月十四日、ウイルト内閣崩壞の後をうけ



て成立した。微力な内閣であつたけれども、大體この政治背景に立つて内外の難局に直面す可く運命づけられてゐた。外相ローゼンベルグが三月二十七日消極抵抗の繼續と賠償問題解決のため國際委員會の設置の必要を説明したのは、此の難關に處するクノー内閣の方針に基いたものであつた。四月十七日、I君、S君と共に、議會見物を試みて偶然聞き得た討論は、かゝる一般的政狀のもとに展開せられたものである。消極抵抗の繼續、獨佛國際平和條約、賠償金額支拂方法に就いての、前日のローゼンベルグ外相の見解に對する諸黨派代表の意見の開陳である。小雨がわびしく降る寒い日であつた。ヴァイー・プラッツで落合ひ傍聽席から、思ひの外狹い、議場を見下ろしたのは、民主黨のゴットハインが "Freie Deutschland" と叫んでその演説を結び自黨の拍手裡に降壇した頃であつた。見渡せば演壇より向つて右から、獨逸國粹黨、獨逸人民黨、中央黨、民主黨、社會民黨、共產黨の順に居ならぶ。二十人位ゐの婦人議員が先づ目につく。殊に六十五才を越ゆる白髮のクララ・ツエトキンが共產派の眞中で遠い耳を傾けて辯士に聞き入る樣子は一種の感を催ほす。獨逸人民黨を代表して、グスタフ・ストレーゼマンがその一分刈り頭で、巨軀を演壇に運ぶに及んで、議場その緊張に寂然しはじめる。明瞭な語調と、明快な論旨はその雄辯と巨軀と相待つて非常に練達な勢力家たるを思はしめる。「佛國の侵略政策」を痛罵し、「ライン、ルール占領による全獨逸國難」を絶叫して抵抗の必要を説くのである。彼は伯林、ライプチッヒ大學に學び製造業組合の書記等を振り出しに、實業界政界に地步を堅め、人民自由黨の首領として戰時中、極端な併合政策を主張し、革命後も人民自由黨右派を糾合して獨逸人民黨を組織し、蒙塵後のウイルヘム二世に對し王政主義的な賀詞を送つたりしてゐたが、聯立政策の一分子として次第に大勢に順應し、社會民主黨とも提携するに至つたのである。その雄辯と精力と練達は、オッポチュニズムと相待つて彼をして次第に政治家として有力ならしめた。後にドウズ案、ロカルノ協定の成立、國際聯盟加入等の功績を殘さしめた準備は、恐らくこの頃から出來てゐたであらふ。

　正統な圍い裡にはまつた議會議論であり、その內容も大したものではなかつたが、その雄辯は議場の出席を驚動するに充分であ

る。[illegible]の[illegible]の叫びが、急に立ち上つた痩軀、白髮の一老人の怒號によつて、默らされてしまつた。その爲めに捲き起つた贊否の、叫喚混亂は一時ストレーゼマンを立往生せしめた。獨立社會黨が社會民主黨と前年合同を決した際一人獨立社會民主黨にとゞまり、世人の所謂「二人黨」または「レーデブア黨」の首領として頑張つたゲオルグ・レーデブアこそ、この老人に外ならなかつた。七十三才の高齢の彼が顔を眞赤に染め、議席に突立ち卓を叩きながらストレーゼマンと應酬した姿は、森戸氏の所謂、舊時代の「悲壯なる英姿」ではあつた。獨立社會民黨から共産黨に加はつた、若き、ワルター・ステッカーがストレーゼマンに代るや、議場は無殘にもがら空きとなり、私語雜談にざわめく。その論旨が政府の政策の非難攻撃に終止したことは云ふ迄もないが、その辯論は決して成功とは云へない。輕い、さはがしい演說であつた。……此の Koalition Politik の一場面は、共和國の確保と共に資本主義の復興を豫示し、獨逸革命が、「芝生を踏まず」に市街戰が爲されたと謂はるゝように、經濟組織にふれずに終つたことを意味するであろふ。そしてその事は復興獨逸の方に辿つた道であり、又國際情勢上も聯立政策を是認す可きであると考へる。唯筆者は、國民主義的感情があれほどまで熾烈であつたのに、ファッシスト運動がものにならなかつた點に興味を感じてゐる。その年の八月ライン、ルール占領地に探險旅行を試みたとき、この國民的感情は觸目悲慘の狀況のもとに於ても感情の範圍にとゞまり決して時運の向ふところを指してゐないことを觀取し得た。デユッセルドルフの自治行政大學のクンプマン教授が余の肘をつかんで訴へたところの佛軍行政の暴狀が、却つて、いづれの側の國民主義的支配の永續をも可能ならしめぬと云ふ觀察の一つの示唆であつたことを附加して置かふ。（一九二九、二、三）

鹿、象、獅子吼の蒋介石氏

小村俊三郎

予が親しく蒋介石氏の辯論を聞いたのは、去年の十二月十一日、國民政府主席としての同氏が主人となつて、床次竹二郎氏の一行、及び支那革命の舊き同情者としての予等をその官邸に招き、各院長、部長以下總出の大晩餐會を開いた時に、蒋氏がした歡迎演說のそれが、始めてゞある。肝腎なその演說の印象については、後に改めてこれを說くが、その翌十二日の晩には、胡漢民氏、戴天仇氏が主人となつて、同じく一行のために、歡迎會を



開いた。馮玉祥氏以下多數の要人の外に、その朝始めて山西から南京に着いた閻錫山氏もやつて來た。馮閻兩氏がさも親しげに、肩を並べて語り合ふてゐるその容態が、ドロウイソグ・ルームの目を惹いた。で、予はフト茶目氣分になつて、彼等兩人を動物に見立つることを考へた。そこで、大きな胴體をしながら、ブクノ＼とした青布の軍服にクルまり、そして割合に小さな頭で、ニコノ＼とした顏をしてゐる馮玉祥氏をば熊に譬へ、ヅングリムツクリとした閻錫山氏をば、チト失禮ではあるが、傍りに豚にして置くことにした。その容貌には[illegible]て來てゐなかつたが、予は又蔣介石氏を何に譬へたらよからうかといふことを考へた。その瘦せギスで、表情に乏しく、別に偉くも何とも見えぬ外觀だけからは、先づこれを鹿に見立つる外なかつた。ところで問題はその鹿であるが、僅か二年半前に廣東を出發してから、北方軍閥の總べてを一掃して北伐の偉勳を立て、中頃共產黨とも鬪つて、兎も角平和統一の大業を成した支那革命の中心人物としては、これを鹿に見立つるのは、何としても餘りに不似合な氣がする。また蔣氏の半生中に、一番その力量を見せたのは、昨年五月三日の濟南事件があつた時、南軍は八萬、日本軍は六千といふのに、そこで日本と正面衝突をしては、北伐の進行は愚か、日支の大局は、救ふべからずと見て、逸り立つ全軍に總退却を命じたことである。萬牛を挽くの力に比すべきこの時の力量は、今や全國に認められ、蔣氏のために、重要な潜勢力の礎石となつてゐる。して見れば、鹿どころでないのは勿論、虎と曰ふ戸射にも比すべきであらう。

が、前述床次氏以下を自邸に歡迎した時の蔣介石氏は、その風貌の貧弱さが、どう見ても鹿位ゐにしか見へず、その演說もまた日支國交の現狀に顧りみては、矢張り鹿のやうに穩健で、何等の激情もなく、その內容と共に取立てた印象を予に殘す程のものでもなかつた。が、その翌々日の十二月十三日、かの南京の學生と民衆とが、王正廷氏の官舍を襲つた時には、蔣氏はたまノ＼その晚出發する床次氏を訪問中であつたが、その報告を聞くと直ちに現狀に馳せ付け、自身に名乘りを揚げて暴動を制止すると共に、國民黨本部にその群衆を驅り集め、斷乎たる態度を以て、嚴厲なる訓示演說をした。その要旨は、外交部長の外交方針は、國民政府の外交方針である。國民政府に不服なものがあれば、直ちに政府委員を選擧して、その責任を取れ云云と叱咤した。これには一同も辟易し、國民政府の地位と外交部の信用とは、蔣介石氏のそれと共に、この一擧の獅子吼によつて、俄みに高められた。[illegible]であるから、僅でも

ないといへば、それまでゞあるが、支那ではその學生と民衆とには、誰れもが辟易してゐるのであるが、大統領や大元帥に比すべき國民政府主席の蔣氏が、身を挺してこれに當るといふところに、その强味がある。蔣介石氏の雄辯に對する印象としては、直接に聞いたそれよりも、同じく南京で後から聞いたこの一場の獅子吼の方が、予には遙かに多大の印象を與へた。

マクドナルドを聴く

後藤信夫



丁度二年前の今頃の事である。上海防備を名としてイギリスが出兵を敢行して、議會は勿論、世を擧げて議論に沸騰して居た頃の事である。トラフアールガー・スクウエヤーのネルソンの柱の土臺に、モスレイやラツセル夫人が立つて出兵反對の示威運動の氣勢を擧げたその頃の事である。私はあのしまりのないアルバート・ホールの平土間に腰かけ乍ら、入口でもらつた青いプログラムを眺めて居た。それには勞働組合會議と全國勞働黨と議會勞働黨とを代表する全國勞働運動共同評議會の主催の下に行はれる出兵反對の合同示威運動、と大きく書いてある。さうして共同評議會の議長のヒツクスが司會し、演說者は勞働黨を代表してランズベリー、組合側を代表してベン・テイレツト、獨立勞働黨を代表してマックストン、そして勞働黨議員を代表して議會に於ける勞働黨の指導者たるマクドナルドの四人が演壇にたつと書いてある。私はさう列べられた人々の名を眺め乍ら、ふと或る知人が曾つて語つた言葉を想ひ出した。

『アルバート・ホールで本當に演說の出來る人は、今のイギリスに三人しか居ない。ロイド・ジョージ、スマイリー、マクドナルドがそれだ。』

建築樣式がルネッサンスであるとか、廣さが何れ程であるとか云つて居る間は無難であらうが、一度び音樂會場に使ふと、反響が交綜したり、音響が散逸したりして全く手に負へない建築物である此のホールが、たとへ演說に於ては音樂に於ける程の微妙な音の効果が必要とされて居ないとしても、演說をする人にとつて決して樂な場所ではないと云ふ事

は容易に考へられる。私は自分の傾向からロイド・ジョージを聞かうとも思はなかつたし、聞いた事もない。スマイリーは三角同盟全盛の頃に比べては著しく年もとり、實際上は隱退同樣であつて、その演説を聞く事が出來なかつた。さうして殘るマクドナルドの演説もそれを聞く機會なしにその日まで來てしまつて居たのであつた。

廣い會場に一杯人がつまつた。土間から圍りのボックスにかけては全く滿員である。尤も音樂會の時にその邊りにをさまる人とは種類が異る。その代り今日は人々はその隣人に對して他人ではない。天井に近く霞んだ邊りにも人の顏が並ぶ。こうして會はヒックスの司會の下に來會者一同の合唱に始められた。

マクドナルドは司會者の挨拶に續いて演壇に立つた。

「大きい人だな」と私は一人で心の中で考へた。併し大きいのは彼の丈ばかりではなかつた。あの特徴のある髭らしい顏の前に右手を差出し乍ら、將に何か云はんとする時、突然その聲に廣い空間の隅々迄もゆきわたつて居ると思はれた。併し彼の演説は一貫して快い鋭さと巧妙を極めた抑揚とを持つて居る。兩手の拇指をチョッキの兩脇にかけ乍ら、一段と聲をおとして話頭を轉ずる時、人々は吸ひこまれる樣に耳を欹て、議論の調子が段々と熱して行つて最後の沸騰點に達する時、聽衆は必ず拍手に崩れる。雄辯術に無智な私にはどう云ふものを雄辯とすべきかを知らないけれ共、自分の受けた印象は彼の演説は完璧であると云ふ事であつた。ただ併し私は彼の辯論に背景を與へて居る所の過去に於ける彼の行動を無視する事が出來ないと思ふ。勞働黨創立當時からの長年の闘士としての經歷を若し彼が持たなかつたならば、又彼が平和論者として少からぬ犧牲を過去に於て拂つて居たかつたならば——その非戰論の故に大戰中からその後にかけて彼が世間から受けた冷酷な待遇を人々は記憶して居るであらう——彼が壇上に對支出兵反對論を提げて立つ時、果して今現に彼の演説から受ける感たるや、我々が受けるであらうか。

人は、例へば、炭坑夫聯盟のクックを當代での雄辯家である。炭坑夫の執拗な數ケ月に亙る持久戰には彼クックの雄辯が與つて力あつたと云つて居る。併し、クック程實際に徹底的に組合のために全身を献げて闘つた人があるか何うかを何人も疑ふ。さうして、その熱情に對して酬ゐられた衆望か、彼の雄辯を常に支持して來たのであると云ふ事を誰が否定するであらうか。大ストライキの後に炭坑夫が獨り殘されて闘爭を余儀なくせられて居る最中私は一日彼の演説を聞く機會を持つた。數ケ月に亙る連日の奮闘の爲であらう、彼は非常にやつれても見えたし、その聲は殆んどつぶれて居た。それでも彼が演壇に立つ時、聽衆は全く彼のものであつた。人々は彼の何物であるかをよく識つて居る。そして其故にこそ彼の胸から溢れ出る言葉は一つく人の魂を搖る力を持つて居るのだ。

マクドナルドに續いてマックマトンペン・サイレット、及しアンズベリーが立つた。さ

うして最後に『赤旗』の歌と『インターナショナル』が大オルガンの伴奏で合唱されて會が終つた。

二月のロンドンの夜は寒い。外套の襟を立てヽケンジントンの大通りを西へと下り乍ら、私は、口にまだ耳に殘つて居る『インターナショナル』の節を口吟んだり、頭の中でその夜の光景を初から憶ひ返して見たりして、憶ひを遠く地球の向ふ側の出來事に走せた。



クレマンソーとポアンカレ

町田梓樓

近世フランスの政界において、クレマンソーとポアンカレとは、色々な點で極めて興味ある對照である。九十歳に垂んとするクレマンソーはポアンカレに長ずること二十年であるから、若し歐洲大戰爭が無かつたならば、フランス議會史においては兎もあれ、世界の歷史を論ずる者にとつては、兩雄は對照さるべき存在ではなかつたであらう。兩雄の雄辯を比較することを目的とする本文において、兩者の人物論を試むることは少しく餘計なことであるかも知れないが、雄辯は性格の現れであり、性格は時を待つて顯はれるのであるから、二者の性格を比較することは、その雄辯の特色を明かにする所以である。

私が始めてクレマンソーとポアンカレとの風丰に接したとき、日本で——私が畫いてゐた想像は全く裏切られた。虎の仇名を以て知られてゐるクレマンソーは定めし眼光烱々たる恐ろしい人物であらうと思つてゐた。又博識宏辯、つとに法曹界に名を轟かし、碩學に伍して、翰林院に席を列ね、五十三歳にして大統領の榮位に登つたポアンカレは、定めし溫厚典雅の政治家なるべしと想像してゐた。然るに一見して私の想像は破られた。クレマンソーの平面的顏面に無雜作に延した鼻下の髯は、宛然韃靼人の如く、極めて好々爺たるを思はしめる。之に反してポアンカレは青光りのする兩眼をくぼませ、一寸の隙もない面魂は、どうしても虎である。之は容貌の上から見た兩雄に對する私の印象であるが、性格からいつてもさうである。若し強いて二者を猛獸に比せんとするならば、ポアンカレこそ虎であつてクレマンソーは獅子である。アンカレは細心にして精悍である、クレマ

ソーは放膽にして壯快である。ポアンカレは理智の人であり、クレマンソーは氣力の人である。

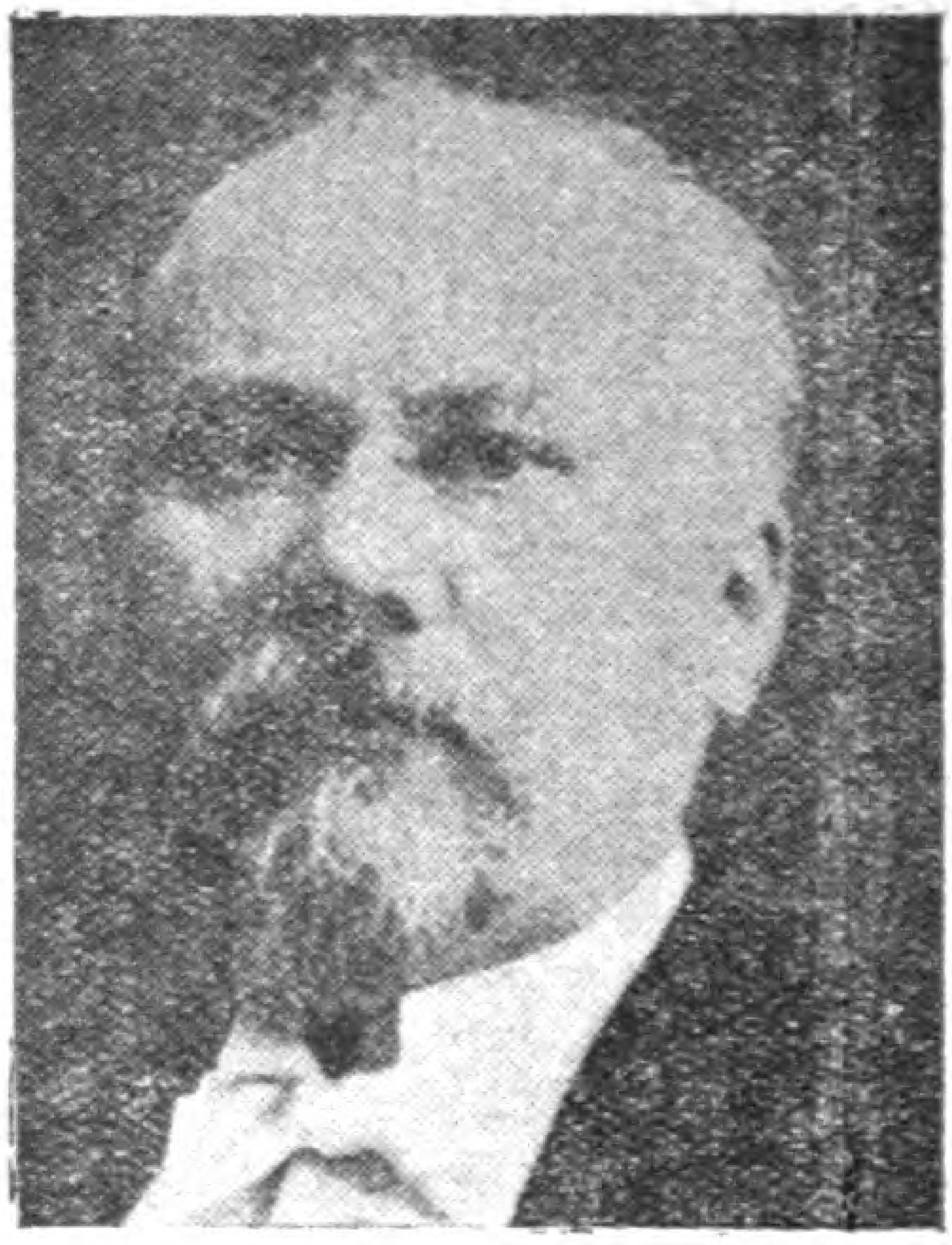
この性格の差は、二者の政治的生涯に現はれてゐる。クレマンソーは典型的闘士である、若し歐洲大戰がフランスの國運を累卵の危きに陷れなかつたならば、クレマンソーはフランスの議會史に破壞者として名を留むる外、恐らく何者でもなかつたであらう。これ即ち虎の仇名を得た所以である。博識を以て知られるポアンカレは、燃ゆるが如き愛國の至誠と動かない信念とはさることながら、決して豪放たり得ない、あまりに自己を顧みるからである。クレマンソーは風雲を叱咤する英雄兒である、ポアンカレは飽くまで立憲的政治家たる道を辿つて過らない。兩雄が政界において常に相反目し、しばしば敵として苦しきまでに深刻な爭ひを繰返したのは、要するに斯ういふ性格の差から起つた當然の結果である。二者の雄辯を聽くと此性格の差が一層明かである。クレマンソーは直截簡明、鐵槌を下すが如く、意氣あるを知つて又修辭を顧みない。ポアンカレの演説は首尾一貫した大文字である、序論より本論に入り結論に終る大文章である、理路整然として修辭の完璧した金玉の文である、之を雄辯と見るよりは寧ろ一篇の大議論と見るべきである。クレマンソーの辯は人を醉はしめず又躍らしめず、冒頭より聽衆を威壓する、之れその氣魄である、故に敵に討論の餘地を與へない。隨つて時と處を得て一度び蹶起すれば以て大勢を一變すべきも、彼の雄辯は以て治國平天下に用ゆべきでない。之に反してポアンカレの辯は、如何なる場合と雖も必ず時と所に適つて過らない、理智と博識との賜である。

クレマンソーは大戰によつて不朽の名を史上に留め、古今の英雄の列に伍した。彼の不滅の大雄辯も亦戰爭によつて發された。一九一七年の秋、大戰やうやく末期に臨んで、勝敗の決未だ定らず、佛國の士氣やうやく衰へて國家の前途に暗影を投じたとき、多くの政敵たる時の大統領ポアンカレの依囑を受けて政權を握つたクレマンソーが、議會の壇上に獅子吼した雄叫びは、單に一代の雄辯として形容し去るには餘りに偉大なる言論であつた。そこには渾身の力があつた。蓋世の氣魄があつた。右のかくしから取出す一片の紙、左のかくしから取出す鼻眼鏡、無造作な態度の好々爺の心には、國家の運命を双肩に荷ふ強い信念が宿つてゐた。

一人を顧みず感情に左右せらるゝことなく、眼中たゞ奉公の義務あるのみ。和平の辭に耳をかさず反逆あれば法に照らして罰すべく、目標はたゞ戰爭にあり、軍隊をして迷はしめず、正義の赴く所、國家は防禦せらるべし、これクレマンソーの大雄辯の一節であつた。修辭を超越した人神の言論である。近世佛國文壇の巨人モーリス・バレスが、氣魄と火焔とを宿す此の老翁、時の美はそこにあると贊嘆したのは、當時のクレマンソーの力強い姿であつた。一人の意思の力が人心を動かし國家の努力を統一して、戰時の困難を凌いだと

ない。眞の雄辯は正にそこにある。

ポアンカレの辯は行くとして可ならざるなく、その七ケ年の大統領任期を通じて、凡ゆる機會に試みた演說式辭は、眞に模範的大文



章である。一九二〇年彼が大統領の地位を去つて以來、或は一市民として或は國務總理として試みた大演說は永く後世に傳へて不滅の響を殘すであらう。要するに彼の長は議政壇上の討論ではなくて、經國の大抱負を披瀝する大言論である。昨年六月フラン貨安定に關する法律案を提出するに當つて、彼が首相兼藏相として試みた數時間に亘る大演說は、修政學者といへども反駁の餘地なきまでに完備したものであつた。此種の施政演說に至つては、天才群出を誇る佛國政界においても、ポアンカレは斷じて他人の追隨を許さざる獨步の地位を占めてゐる。辯論は遊戲ではない、政治家に經國の大抱負と奉公の大精神がなければ、雄辯は斷じて聽くことは出來ない。魅力を有する藝術的雄辯の持主ブリアンはしばらくおき、私はクレマンソーとポアンカレとの對照に一層の興味を有するものである。

（完）

財閥政治と日本財閥の解剖

鈴木茂三郎

恐慌期に於ける財閥資本の飛躍

三井銀行の池田成彬が、臺銀のコールを引上げることによつて點火された所謂財界の金融恐慌を通じて三井、三菱、住友諸財閥の「資本」は飛躍した。

小財閥だつた村井、神田、松方、鈴木、渡邊、中井、中田、左右田は、恐慌の波に押し潰され、それらの紐附資本を通じての諸産業は、飛躍的な強大な「資本」の手に握られた。若尾、藤田も、その銀行を攫はれて、もろくも産業資本家に轉落した。森村の業蹟は、三菱の資本の影に姿を沒し、怪物淺野も今は、安田の黄金光に照り映えてゐる。

生糸の片倉は、對立物としての[illegible]を打ち倒したのであつた。

左様に恐慌は財閥的「資本」の飛躍期だつたが、恐慌から恐慌への中間は、財閥的「資本」の、飛躍への準備期で、今日はまさにその飛躍的な[illegible]、次ぎの恐慌期に、どの財閥が倒され、倒すかは、そのときに於ける財閥の現實的な資本の力が決定するものではある。だが恐慌を通じて、十の財閥が八となり、五となり、三となり、やがては一つとなるであらう、ピラミットの頂點へ向つて、必然的な段階を、急速に諸財閥の諸君は、今や上りはじめてゐることだけは明白である。

次ぎの恐慌期に、どの財閥が倒され、又倒すかはともあれ、今日財閥とよばれてゐるものには、大小をとりまぜると甚だ多い。

東京には、三井、三菱、安田、大倉、古河、大阪には住友、藤田、商船系、鴻池のほか、小財閥になると東京に澁澤、根津、川崎、若尾、久原、大阪に山口、島徳、阿部、野村などがある。地方色を持つものとして、神戸の鈴木商店、九州の安川、貝島、名古屋の九日會、横濱の原、長野の片倉などに、いつぱしの小財閥を形成してゐる。

財閥とは何ぞや、甲州系、九日會、商船

財閥とは何ぞや、となるとこれを[illegible]

[illegible]ては、むづかしい規定などとする必要はない。

だが、簡略に片附けて了へば、財閥とは大富豪の資本家或はその一族の獨占下に集合された企業結合であるといふことになる。とすると、岡崎邦輔の電鐵財閥や、商船を盟主とする商船財閥や、九日會やいはゆる甲州系財閥などは財閥では無い譯である。事實さうしたものが財閥であるとすれば、福澤桃介の大同電力も、松永安左衛門の東邦電力も、また一個の財閥でなければならぬ勘定である。

もちろん京阪電鐵、新京阪、南海の電鐵に跨る岡邦などは、阪急、堂島、北濱にうつぜんたる勢力を把握する島徳などと共に、財閥と呼ぶには、あまりも小さ過ぎる。

けれども九日會や甲州系や商船系は、その事業と資本の規模よりすれば財閥の名を毫も恥しめてはゐない。

九日會の事業大系

共同―明治銀行、中京信託、愛知時計、

伊藤治郎左衛門―松坂屋、伊藤銀行、日本貯蓄、

瀧一族―名古屋銀行、瀧兵商店、瀧定合名、名古屋貯蓄、帝國撚絲、愛知織物、日本車輛、瀧定殖產、

岡谷惣助―愛知銀行、岡谷合資、岡谷肥料、岡谷[illegible]物、岡谷保產、

富田、神野―福壽火災、福壽生命、名古屋鐵道、

九日會とは、毎月の九日、料亭「**河文**」で**儲け話といつしよに飯を**[illegible]

[illegible]盟主格は伊藤治郎左衛門だが、ゆるやかな親和組織の地方的財閥である

甲州系財閥

若尾系―東京電燈、若尾倉庫、若尾保全(本家)、横濱若尾銀行、(横濱若尾)東洋モス(東電若尾)、東京瓦斯、三ツ引物產、(東電若尾)三ツ引同族、(東電若尾)江之島電氣、

根津系―根津合名、東武鐵道、麥酒礦泉、富士身延、富士山麓、日清製粉、

小野系―北海道電燈、割引銀行、中央ゴム、日本煉炭、

甲州財閥といつても、若尾逸平や天下の雨敬や、小野金六、小池國三などが、立志傳的な色彩を中央財界に光らせてゐた時代とは違つて、僅かに地方色を以て結びつけらるゝ今日の甲州財閥は、財閥的色彩の色褪せてゐる。

その中心勢力は根津と若尾(東電)だが、根津は民政、若尾は政友のいづれも勅選で反りが合はない

又若尾系といつても、土地資本家たる若尾本家の謹之助と生糸の横濱若尾の幾太郎と東電若尾の璋八と、若尾三家は、それぞれ小獨立を形成してゐるので、だから三家の資本は、時に相合し、時に相噬むことがある。そして相噬むことが多い。そこへゆくと、根津は[illegible]一寸で動ける、殊に戰鬪的資本いはゆる現ナマをつかんで居るだけに強味がある。

かつて彼は、三井を代表する藤原銀次郎と東電で噛み合つて、三井が何んだ、と啖呵を切つて財界を騒がせたものだが、三井と引つ組まんとする暴漢は、おそらく彼だけではあるまいか。

といつて、根津がその意氣で、甲州系財閥を背負つて立つのではなく、かつては甲州系財閥の重要な産業だつた東京電燈、東京瓦斯、富士製紙などは、鮮かに三井財閥の手に奪取されてゐる。だが甲州系といふ地方色を洗へば根津も若尾も、いつぱしの財閥ではあらふが、甲州系財閥としては、近江銀行の沒落と共に死滅した江州系財閥のやうに、まさに死滅せんとしてゐるのである。

商船系財閥

大阪商船
- 日清汽船、摂陽汽船、
- 大阪海上保險、摂津海上保險、
- 宇治川電力、日本電力

盟主は中橋德五郎である。銀行資本をもたないことが、商船系の致命的な弱點である。電力小賣會社たる宇治電と發電會社たる日電即ち林安繁—あんぱんと故山岡順太郎—山あらし、影山と池尾等の内紛をかもさしめたのも亦、中橋が解決し得ないのも此の弱點を暴露したにすぎない。

最近に至つては、住友財閥の資本が、戀々として侵入しつゝある。

所得額から見た諸財閥

財閥とは大富豪又はその一族の獨占する企業結合である。

俗惡な規定ではあるが、前にも言つたやうに、財閥をさうしたものと一應規定して、さて長者番附をくりひろげてみると、甚だ心元ない財閥が現れてくる。

所得税額から累推される年所得をみると、根津が—いづれもざつとだが—七十萬圓、淺野系が六十萬圓、若尾が三十五萬圓、原が三十萬圓、藤田が廿五萬圓、川崎が廿一萬圓、山口(大阪)が廿五萬圓、さらに久原の十五萬圓、鴻池の十二萬圓、古河の十四萬圓に至つては財閥とも受取れない。

三井は十一家一族の所得千五百萬圓、三菱は五百五十萬圓、大倉、安田一族は百萬圓、住友百廿萬圓、ここらは財閥らしい。

三井の大番頭團琢磨の所得は約六十萬圓だから、久原、藤田、古河の所得を三つあはせたよりも大きい。が、だからといつて團財閥ではない。團は、彼自身、所得の源泉となる資本を所有しないからである。

例へば總理大臣の所得は、年俸の一萬二千圓と同額の、、、をあはせて二萬四千圓になる。この二萬四千圓と團の六十萬圓は、所得額に高低こそあれ、財閥の、、に對するお手當てといふことに於て、何等かはるところがない。

時計の服部金太郎は九十萬圓、ビールの馬越恭平は五十萬圓の所得があるが、だからといつて服部財閥、馬越財閥[illegible]ない。

[illegible]

[illegible]ならぬし、又[illegible]いた、いはゆる一門代表としての[illegible]ないからである。

そこで、所得こそ少ないが、鴻池、古河、藤田等は、さうした財閥たる條件を具有してゐるわけである。又所得が少ないからといつて、これだけをもつてそれぞれの財閥の全所得だと見てはならぬ。

安田のやうに、一族の所有財産を保善社名義にしてあるものは、[illegible]に保善社に累積されてある。

三井財閥にしても、その全所得は、××××收入とほゞ同額だといふことが、吾々の常識的な見解である。すると全所得は[illegible]たらぬ筈で、一族の所得額として現れた[illegible]は、[illegible]の[illegible]に[illegible]されたり、[illegible]として[illegible]れ[illegible]、[illegible]にとゞまるものである。

銀行と輕工業と雑種産業財閥

[illegible]

大倉文[illegible] [illegible] 大倉[illegible] 三[illegible]

大倉製材 二〇 [illegible] 六〇

秋田[illegible]材 一一[illegible] [illegible] 二[illegible]

[illegible]製[illegible] 一[illegible] 三[illegible] 一[illegible]

[illegible]機械 一五[illegible]

二、[illegible]、一[illegible] [illegible]

[illegible]

三、[illegible] 二[illegible]

[illegible]

正隆銀行	一二〇〇	十七銀行	一〇二〇
四國銀行	一二〇〇	大垣共立	三〇〇
第九十八	一三〇	第三十六	三〇〇
富山銀行	二六四	安田信託	三〇〇〇
安田生命	三〇	東京火災	一〇〇〇
帝國海上	一〇〇	東洋火災	五〇〇
二、電氣鐵道			
京濱電氣	一五〇〇	中國鐵道	四三〇
小湊鐵道	一五〇	水戸鐵道	二〇〇
博多灣	六三三	秋田電氣	二〇五
熊本電氣	二六〇〇	海岸電軌	二〇〇
湘南電氣	一二〇〇		
三、雜種事業			
日本紙業	一五〇〇	帝國製麻	三三二五
奉天製麻	一五〇	臺灣製麻	二〇〇
横濱棧橋	一〇〇〇	東京建物	一〇〇〇
滿洲興業	五〇〇	興亞起業	一〇〇〇
安田商事	二〇〇〇		

安田財閥の弱點は、重工業をもたざることと、淺野財閥を背負ひ込んでゐるところにある。

彼の背後にあつた高橋是清を、顧問として正面へかつぎあげたのも、おそらくさうしたことなどが、原因するものと見られないことはない。

「銀行資本」に主要勢力を置く澁澤義右衞門は、澁澤合名（一七〇〇〇[illegible]銀行」、[illegible]（一〇〇〇）、[illegible]（二〇〇〇）、[illegible]

川崎八郎右衞門は

定德（保善社）	三〇〇萬圓	川崎第百	三三九八
川崎貯蓄	三〇〇	麹町銀行	一〇一〇
安房合同	三〇〇	常盤銀行	八八五
常盤貯蓄	一〇〇	足利銀行	七三二
所澤銀行	三〇〇	日本火災	一〇〇〇
日華生命	一〇〇	萬歳生命	一五〇
常盤火災	三〇〇	自働車	一〇〇
日本商事	一二		

といつた銀行と保險、このほかの京成電車、池上電鐵、東電、東京瓦斯などに對する投資事業は彼の義兄鄕誠之助と、その幕下の番町組が支配してゐる。

大阪の山口は日本生命、山口銀行、關西信託、野村德七は野村銀行、野村證券、と大阪瓦斯、神戸の岡崎は岡崎銀行と神戸海上、朝日海上、澁澤榮一は第一銀行を主要勢力として、澁澤同族澁澤倉庫のほか伜の正雄は石川島造船と富士製鋼、武之助は石川島飛行機、秀雄は帝劇をやつてゐる。

同族の純益は年三十萬圓、これだけのものは、彼の財界世話役たる顔料として、彼はあちら、こちらへばら撒くさうなか、彼のために恩顧を蒙つた古河、大倉、服部や大川平三郎、田中榮八郎、山下龜三郎、植村澄三郎、又血緣につながる阪谷芳郎、穗積陳重、明石照男などは彼のもとにあつまつて龍門社を組織してゐる。

[illegible]

いづれも[illegible]だが、[illegible]片倉は片倉製糸(五二七五萬圓)のほか日華蠶糸、薩摩製糸、片倉江津製糸、長崎製糸、日東紡績、備作製糸、武州製糸、滿洲蠶絲、越後片倉、片倉米肥など、全國にまたがる。片倉製糸だけでも工場三十餘ケ所、二萬釜、從業員三萬人にも及んでゐる。

原合名の富太郎は、財閥としては地方的財閥だが、横濱財界の顔役である。彼は若かりし頃、前代富太郎の娘の[illegible]の家庭教師をつとめ、娘に見染められて原財閥の婿となつた。「果報は寢て待て」とのブルジョア的な格言は、彼のためにのみつくられたものだらう。

重工業産業の財閥

重工業は資本主義經濟の基礎産業である。あらゆる産業の王である。從つて重工業に基礎を置かざる財閥は、根底が弱く、發展力がなく、戰鬪的な覇氣がない。振はざる安田と、萎縮せる鴻池と、三大財閥となつた三井、三菱、住友と比較してみるが好い。將來の財閥の勝敗は重工業を持つものと、持たざるものとの決戰によつて決るとも見られないことはない。だがそれはともあれ、重工業産業を基礎とする財閥のうち、住友、久原、古河、藤田は銅、貝島、安川は石炭、三井は鑛と石炭、三菱は銅、鐵、金屬、石炭が主である。

	採掘製煉	機械工作(造船)
	釜石鑛山(二〇〇〇)	
	太平洋炭鑛(一〇〇〇)	
	松島炭鑛(五〇〇)	
	キールン炭鑛(一〇〇〇)	
三菱財閥	三菱鑛業(一〇〇〇〇)	三菱造船(五〇〇〇)
	三菱製鐵(二五〇〇)	三菱電機(一五〇〇)
	九州炭汽(五〇〇)	三菱燃機(五〇〇)
	中島鑛業(——)	日本光學(三〇〇)
	雄別炭鑛(五〇〇)	
住友財閥	住友合資(一五〇〇〇)	住友電線(一〇〇〇)
	住友炭鑛(一〇〇〇)	住友製鋼(一二〇〇)
		住友伸銅(一五〇〇)
古河財閥	古河鑛業(二二五〇)	古河電氣(二〇〇〇)
	大正鑛業(——)	日本伸銅(五〇〇)
		日本電線(二〇〇)
		尼崎伸銅(二一〇)
		大阪製煉(三〇〇)
		富士電機(一〇〇〇)
藤田財閥	藤田鑛業(三〇〇〇)	
久原財閥	久原鑛業(七五〇〇)	日立製作所(一〇〇〇)
		大阪鐵工(一二〇〇)
貝島財閥	貝島鑛業(一〇〇〇)	
	大辻屋炭鑛(一〇〇〇)	
	貝島石炭(一〇〇)	
三井財閥	三井鑛山(一〇〇〇〇)	芝浦製作(二〇〇〇)
	北海道炭礦汽船(七〇〇〇)	日本製鋼所(三〇〇〇)
[illegible]	[illegible](二〇〇〇)	[illegible](三〇〇)

財閥の對立、抗爭、三井と三菱

久原、藤田、貝島は血縁と共に事業關係も淺からぬものがある。言はゞ締盟國といつた資本關係だが、三菱と古河も、世評にのぼる程度の親善關係にはある。

が、しかし、財閥間に於ける資本と資本の闘爭、對立は秋霜酷烈である。

日米硝子における三菱と住友、東電に於ける三井、三菱、安田、川崎、若尾、郵船、東京海上における三井と三菱の資本の對立などは、力のバランスが一定の平衡を保つてゐればこそ、對立抗爭は表面化されないのだが、財閥間の闘ひは、金持ち喧嘩せずではなくて、向ふ脛を怪拂ふ式の陰險、辛らつ、にして且つ戰闘的である。現在は住友の手にある日本樂器はかつて天野某の支配下に、、、、、、、、、、、、大ストライキをおこなつたことがある。當時若干の資本をおろしてゐた三井と住友は、天野から樂器會社を強奪することに必死的努力をなした。

三井の如きは無條件的に勞働者側の要求を認め、強引に出て天野追ひ出しを策したのだが、民政黨内閣のために、つひに三井は出動を叩きつけられた。

此の場合、三井にとつては勞働者側は×××の指揮すると言はれたあれ、勞働者側を勝利せしめても、樂器を住友に渡さないで、樂器のプロペラ製作の特殊技術を三井財閥の手に獨占したかつたのである。

とりわけ三井と三菱は、財閥資本の規模、商業の色彩に於て、必然的に對立せざるを得ない陣形にあることを見逃してはならぬ。

三井財閥

一、財閥の主體

三井合名（三〇〇〇〇萬圓）

男爵 八郎右衛門	六九〇〇
元之助	三四五〇
源右衛門	三四五〇
男爵 高精	三四五〇
壽太郎	三四五〇
高修	三四五〇
高達	一一七〇
守之助	一一七〇
高昶	一一七〇
辨藏	一一七〇
高光	一一七〇

二、銀行資本

三井銀行	一〇〇〇〇
三井信託	三〇〇〇
三井生命	二〇〇
大正海上	五〇〇

三菱財閥

三菱合資（一二〇〇〇萬圓）

男爵 久彌	四〇〇〇
彦彌太	五〇〇〇
男爵 小彌太	三〇〇〇

三菱銀行	五〇〇〇
三菱信託	三〇〇〇
東京海上	三〇〇〇
明治火災	一〇〇〇
明治生命	二〇〇
[illegible]	[illegible]

三、重工業企業(前掲)

四、一般産業

三井物產	一〇〇〇〇	三菱商事	一五〇〇〇
臺灣製糖	六三〇〇	明治製糖	三七五〇
東神倉庫	一五〇〇	三菱倉庫	一〇〇〇
王子製紙	六五九一	三菱製紙	一〇〇〇
中島製作所	—	三菱航空機	五〇〇
物產船舶部	—	日本郵船	一〇六二五

五、對立せざる一般産業

電氣化學	三五〇〇	旭硝子	一二五〇
三越呉服店	一五〇〇	キリンビール	一〇八〇
豐田紡織	三〇〇〇	東山農事	一〇〇〇
熱帶產業	六五〇	日本生絲	五〇〇
東洋レーヨン	一〇〇〇	昌光硝子	三〇〇
東洋棉花	二五〇〇		
日本製粉	一一〇七		

財閥の市場支配

さらにこれらの諸財閥は、商品の市價を自由に支配するために、他方には橫斷的企業結合を形成してゐる。

その主たるものをあげる、

紡績聯合會、石炭鑛業聯合會、電氣銅共販所、銑鐵共同組合、製鋼懇話會、日本セメント聯合會、過燐酸同業會、曹達晒粉聯合會、糖業聯合會、酒精協定、製粉聯合會、共同洋紙株式會社、共同パルプ會社

石炭に三井、三菱、の両社が、わが全出炭高の約半分にも及び銅に古河と住友、セメントは三井と淺野、製糖產業は三井、三菱、大倉と藤山雷太、製紙產業は三井、人肥と晒粉は澁澤傍系の大川、田中と住友保險は三菱と安田などが、カルテルの王座的位置にある。

またタングステンと錫は三菱、亞鉛製煉は三井の獨占によつて、安田の製麻と共に、おのづからなるトラストをかたちづくつてゐる。

紡績に對しては商船傍系の喜多又藏の日本棉花、三井の東洋棉花によつて、原料を通じて、その支配に參與してゐる。

殊に三井財閥は、物產によつてわが輸出入貿易の大半を獨占しつゝあるが、その強大なる資力と膨大なる機關を背景として、內にカルテル、外に輸出入を巧みにあやつつて、商品市場を強力に支配してゐる。

朝鮮人蔘を、海に投げ込んで人蔘相場を吊りあげたのも三井なら、、、、のとき輸出米を積んだ貨物船二隻を神戸沖にかくしたのも物產である。

岡つ引のやうに眼を光らせ、そして商品市場に、利益を追窮しつゝ馳け步くは財閥の手代どもである。

財閥の參謀部と幕僚

かうした手代どもを驅使する財閥の參謀部は、もつと奧つたところにある。

三井の三井合名、三菱の三菱合資、安田の保善社、川崎の定徳、住友の住友合資、淺野の淺野同族、大倉の大倉組、藤田の藤田組、古河の古河合名、若尾本家の若尾保全社、東京若尾の三ツ引同族、根津の根津合名、貝島の貝島合名、鴻池の鴻池合名、即ちこれらがそれぞ〳〵の財閥の參謀本部である。

參謀部に君臨する三井の十一門、岩崎二門といつたやうに、財閥の王座に、先代の遺産を相續したものは、たいていは三月雛のやうにかざりもので、住友の當主吉左衞門は學習院のボンチ、鴻池の善右衞門は丁髷の骨董、安田は天保錢ぞろひと言つた譯で、總帥は「合名」が參謀部である。

財閥の王座	合名の主脳參謀	將軍と幕僚
▲三井財閥 八郎右衞門、元之助、源右衞門、高精、高修、守之助、高昶、辨藏、高光	團琢磨(理事長)有賀長文、福井菊三郎(常務理事)	藤原銀次郎、池田成彬、山本悌二郎、米山梅吉、安川雄之助、服部金太郎、藤瀬政次郎
▲三菱財閥 岩崎久彌、彦彌太、小彌太、俊彌、	木村久壽彌太(總理事)青木菊雄(常務)	各務鎌吉、串田萬藏、桐島像一
▲安田財閥 安田善次郎、善五郎、善四郎、善助、善兵衞	高橋是清(顧問)森廣藏	結城豐太郎、男爵長松篤棐、子爵前田利定
▲大倉財閥 男爵大倉喜七郎	門野重九郎、[illegible]	大倉久米馬、[illegible]
▲古河財閥 男爵古河虎之助	鈴木恒三郎佐々木[illegible]	男爵中島久萬吉
▲住友財閥 男爵住友吉左衞門、寛一、元夫、忠輝	湯川寛吉(總理事)草鹿丁卯次郎(理事)	八代則彦、山中榮吉
▲久原財閥 久原房之助	鮎川義介(社長)竹内維彦	大谷尊由、伊藤文吉、津村秀松
▲川崎財閥 川崎八右衞門	野々村金五郎	郷誠之助、原邦造
▲淺野財閥 淺野總一郎	淺野總一郎、泰次郎、良三	白石元次郎
▲澁澤財閥 子爵澁澤榮一	澁澤正雄、武之助、秀雄、敬三、佐々木勇之助	阪谷芳郎、穗積陳重、大川平三郎、田中榮八郎
▲鴻池財閥 鴻池善右衞門、萬藏、禰雄、幸武	野々村政也	加藤晴比古
▲藤田財閥 男爵藤田平太郎	田中陸三(總務理事)	鈴木庫太郎、和田久左衞門
▲片倉財閥 片倉兼太郎	尾澤福太郎、片倉武雄、修一、直人	今井五介
▲原財閥 原富太郎	大河原與三郎	井坂孝

財閥の政治支配へ

ここで、襟を正して、財閥の政府支配のからくりをのぞかねばなら[illegible]

[illegible]うには財閥は太らないのである。

さきに沒落した高田商會は、大木遠吉伯を政治的代表者として、當時の政友本黨を牛耳つてゐたが、沒落したので秘密帳簿が負債表とともに債權者會議の手に落ちたために、からくりが曝露した。

それによると、彼は政友本黨系であるにかゝはらず、ブルジョア黨の首腦部領袖に毎年珍品を附け屆けたことが明かだ。××××が坊主になつて××から立候補したときにも彼は×××××を贈つてゐる。「×××は涙をホロ〳〵こぼして喜ばれた」と高田釜吉の日記に書かれてある。

さらに彼は、總選擧の費用として政友本黨に百萬圓を提供してゐる。だがその百萬圓は、彼の財布から取り出したのでなく、×××から四百萬圓の融通を受けた低利資金のその四分の一を、代償として投げ出したのだつた。かうしたことなどは財閥と政治との、からくりの一斷面を曝露したにすぎないものだが、現在の政治機構は明らかに財閥の支配する寡頭政治であり、言ひ換へると財閥政治である。

そして、必然に財閥政治ならざるを得ない狀勢にある。

何故かなれば、政府の政策の、その末端に至るまでが、財閥の利害と深い結びつきがある。現實の問題をとらへて言へば、××の對支外交は三井財閥、××外交は三菱財閥、××の對支意見は輸出綿糸布商の對支利害を、まことに端的に反映したものであつたが、曲りなりに[illegible]現されたことである。現に濟南事件解決の報をいれて、新聞紙は「綿糸の暴騰、商談活況を呈す」などと書き立てゝゐることによつてもわかることである。

次ぎには政商としての財閥の利害關係である。財閥にして政商ならざるものはないが、住友などは製鋼、伸銅、製線の三社製品の大部分は政府の御用品であり、鐵道、土木、建築の材料、機械、備品等國庫豫算に喰ひ入る財閥の利得は斷じて少くない。さうしたところに國庫豫算と財閥が結びついてゐる。或は政府には許可權、認可權、補助金制度などについて、かなりに强大な權力があるが、××は××××と組んで昨年庄川水力を起した。ところが××が賣りつけた水利權の代價は××××だつた。水力利用の當局の認可證の紙片が××××に買はれる。だから財閥が政治に參與しないではをられないではないか。

或は「國家資本」との關係はどうか、日銀、興銀、勸銀、鮮銀、臺銀の資本や預金部資金の融通の便益をうけたり、國家資本による政府事業、卽ち鐵道貨車の利用や八幡製鐵所製品の廉價拂下げや、軍需品工場の機械の使用や、種々なる利益がある。

かうした廣大な利益は、財閥が政治を支配することによつてのみ、確實に有利に、且つ容易く保證されることは見易い道理である。

殊に資本主義沒落期の樣相として、無產階級の勢力は、戰線を限

甚しく擴大した。財閥にとつて何んたる脅威だらう。總選擧後の開票日におこつた笑ひ話の一つだが、無産政黨の當選者が續々、と言つても八名だが—ラヂオで放送されるを聞いた××財閥の宗家なる×××は、「あー、日本はもう駄目だ、どうしやう」とソファーに倒れかかつたさうなが、財閥にとつては笑ひ話ではなく胸を壓するが如き脅威でなければならぬ。

××××の反動政策は、さうした財閥の脅威の政治的表現に外ならぬが、と言つたやうに無産階級運動を叩きつけるべく、政治的權力を強度に利用せんがためにも、財閥政治をますます強行しなければならないのである。

財閥政治の尖鋭化

三井財閥が政友會、三菱財閥が民政黨を、その政治支配の機關としてゐることは、今や普く知られてゐる。

その他の財閥の、政治的色彩と政治代表を凡そ分別すると次ぎのやうである。

政友會		民政黨	
三井財閥	山本悌次郎	三菱財閥	幣原喜重郎
	服部金太郎	原財閥	中村房次郎
安田財閥	高橋是清	山口銀行	町田忠治
	前田利定	澁澤財閥	[illegible]
住友財閥	[illegible]	若尾財閥	若尾謹之助
久原財閥	久原房之助		
藤田財閥	田中義一		
片倉財閥	小川平吉		
	今井五介		
若尾財閥	若尾璋八		
	若尾幾太郎		
商船系財閥	中橋德五郎		
日魯漁業	後藤新平伯		
	堤清六		

川崎、古河、淺野なども政友系と見て好い。澁澤、鴻池、大倉などの政治的色彩は外見上不鮮明である。或は中立灰色なるやも知れない。

さうして中立、灰色であることは、斷じて政治支配に參與しないことを意味しない。あしたに政友を送り夕に民政を迎へることもある。

東京瓦斯のやうなところでは、市政が後藤伯一派の手にあるときには、後藤の血縁の杉浦宗三郎を筆頭常務に据ゑ、市政が三木一派にうつると、民政系の鈴木寅彦を常務に代置するやうな、遣り繰りさへしなければならぬのである。

新潟の床次は、高田、松方財閥の支持を失つた。後藤伯に鈴木財閥と川崎造船の支柱が倒れた。そのことが、床次をして糸の切れた紙鳶の如くならしめ、後藤伯をして政友の軍門に降らしめたのである。

財閥の政治的色彩がいかになりゆくか？財閥の對立と抗爭、興亡と盛衰が、いかになりゆくか？

それは財閥の利益と力が決するであらう。吾々が、ここではつきり知り得ることは、[illegible]になりゆく

白日村舍の追憶

厨川蝶子

御柩假りに埋めし磯山の砂もしとゞに秋雨ぞ降る

あの大震災の日から三日後、大正十二年九月四日の夕暮であつた。鎌倉材木座の海に近いある寺に漸く頼みこんで、夫、白村の遺骸を假埋葬した。張物板をよせ集めて釘附けにした粗末な寢棺に、私は後日掘り出す時の目印にもと夫の姓名と命日とを書き記して置いた。地盤のもろい海岸のことで墓穴を掘り下げるあとから跡から小砂がサラサラと穴の底に崩れ落ちた。折からの村雨に周圍に茂る立木の梢、葉末から落ち散る雨の滴は、底深く埋められた棺の上にハラ〳〵と降りかゝつた。

憶へばあの時から數へて七年、今また早春の鎌倉に來て見れば、靜かな海、松林ある赤土の丘陵、川岸の芦の葉や石垣の影を映してゆるやかに流るゝ滑川、あの大震災の日には壞れ落ちた海岸橋や釣堀も、凡ては事なかりし日の儘の姿である。斯樣した景色を目にした私は、まだあの松林の中に、バンガロー風の可愛いゝ小さな私達の家が見えさうな氣がしてならない。

ブラウンの濃い色の下見張りに純白の窓枠、水色のカーテン、蔦かづらの纏ひついたテレス、夫が朝夕に水をやつた花壇、池、涼亭、なかにも二階の書齋に造り附させた大谷石のファイア・プレースは最も夫の氣に入つた物の一つであつた。京都の本宅では、大理石のマンテルピースのついた石炭を焚くストーブを使つてゐたので、それが成金くさいと云つて氣に入らず、この鎌倉の白日村舍では(これは白村のペンネームからとつた家の名である)松の根つこか、何かの薪を焚き度いと、わざ〳〵自分で注文して大きく素朴に拵らへさせたのであつた。「この家は夏より冬の方がずつといゝよ」――其大谷石のファイア・プレースが出來上つた時、其前に据へたアームチエアに深く腰を落してさも美味さうに、マドロスパイプで刻み煙草を喫み作ら夫はさう云つた。そして紫色の煙のゆらめいてゆくのを、じいつと眺めてゐた。きつと其煙の末には、梅咲く頃の鎌倉の閑寂な書齋の中に、獨り薪を焚いて、著作の想を練る自分自身の姿が想ひ描かれてゐたのであらう。

この白日村舍といふ名に就ては面白い話がある。厨川白村といふ表札はこの隱れ家には出し度くない、さりとて郵便配達を困らせるのも心ない業と、種々考へた揚句、白日村舍と表札を出して郵便物もそれで屆くやうにして置いたのである。或日、年寄りの氣輕な配達夫が一把の郵便物を持つて來て、取次に出た私に「あなたの所は白日さんといふ名ですか」と訊ねた。「いゝえ、この家の名を白日村舍といふのです」「あゝ、それではつまり屋號ですな。」と獨り早合點して歸つて行つた。あとで、その事を夫に話したら、「屋號はよかつたな、白洋舍とかいふ西洋洗濯屋があるだらう。お爺さんきつとあれから考へ附いたんだよ」と皆で大笑ひした事があつた。それから半月ばかり居る中に、このお爺さんとすつかり心やすくなつてしまつた。お爺さんは夫を呼ぶのに「先生、先生」と言つた。

左脚を切斷して以來、さらでだに虛弱であつた身體が運動不足のために一層衰弱して底冷えする京都の冬の寒さが人一倍身にこたえるらしかつた。それには鎌倉のやうな[illegible]



白村博士と蝶子夫人

分に研究も著作も出來やうし、又京都では訪問客や雜多な用事で、落ちついて机に向ふ暇も得られぬ位なので、例へ暫くでもそれ等をさけて、靜かな所で讀書もし、思索もしたいといふ希ひが切であつた。夫は其頃もう自分の死期をおぼろ氣ながら悟つてゐたらしく、よそ目にも痛いたしい程、仕事を焦つてする傾向があつた。其爲めには朝も早くから起きて家族の者の話聲など聞えぬうちに著述の筆をとり、夜も子供から寢室に入つた後、夜中の二時三時迄も起きてゐて、机に向つてゐるといふ有樣で、日中は新刊書を讀んだり、調べ物をしたり、或時は子供達をつれて買物に行つたり、海岸に散歩に出たりした。

八幡宮の前から鐵道のガードの下を拔けて海岸に通じる松林の道がある。途中に今は壞れ落ちてしまつた大きな花崗石の鳥居が立つてゐた。その道を夫が子供をつれて夕方散歩に出た歸りに通ると、末の子が何か怖さうにしてゐるのを見て「この邊は古戰場だから、今でも暮れば人馬の聲が澤山出て來る

[illegible]つて、其表札には「海見ゆる[illegible]」などと、ローマ字で書いてあつた。斯様した海邊のヴヰラに來ては、かたくるしい本名をわざと出さずに、こんなしやれた表札を出して置く外國人の習慣を大層面白がつてゐた。それは何々家別莊などと書いた、堂々しい門構への表札を嫌がつてゐた心の反映かと私はほゝ[illegible]れた。さうした風雅な表札を探し出して「今日はこんなのが見附かつたよ、かういふ風に書いてあるのさ、君もこの次には一緒に行つて見ないか？」と表札の模樣や書體などを書いて見せて、私を誘つたりした。

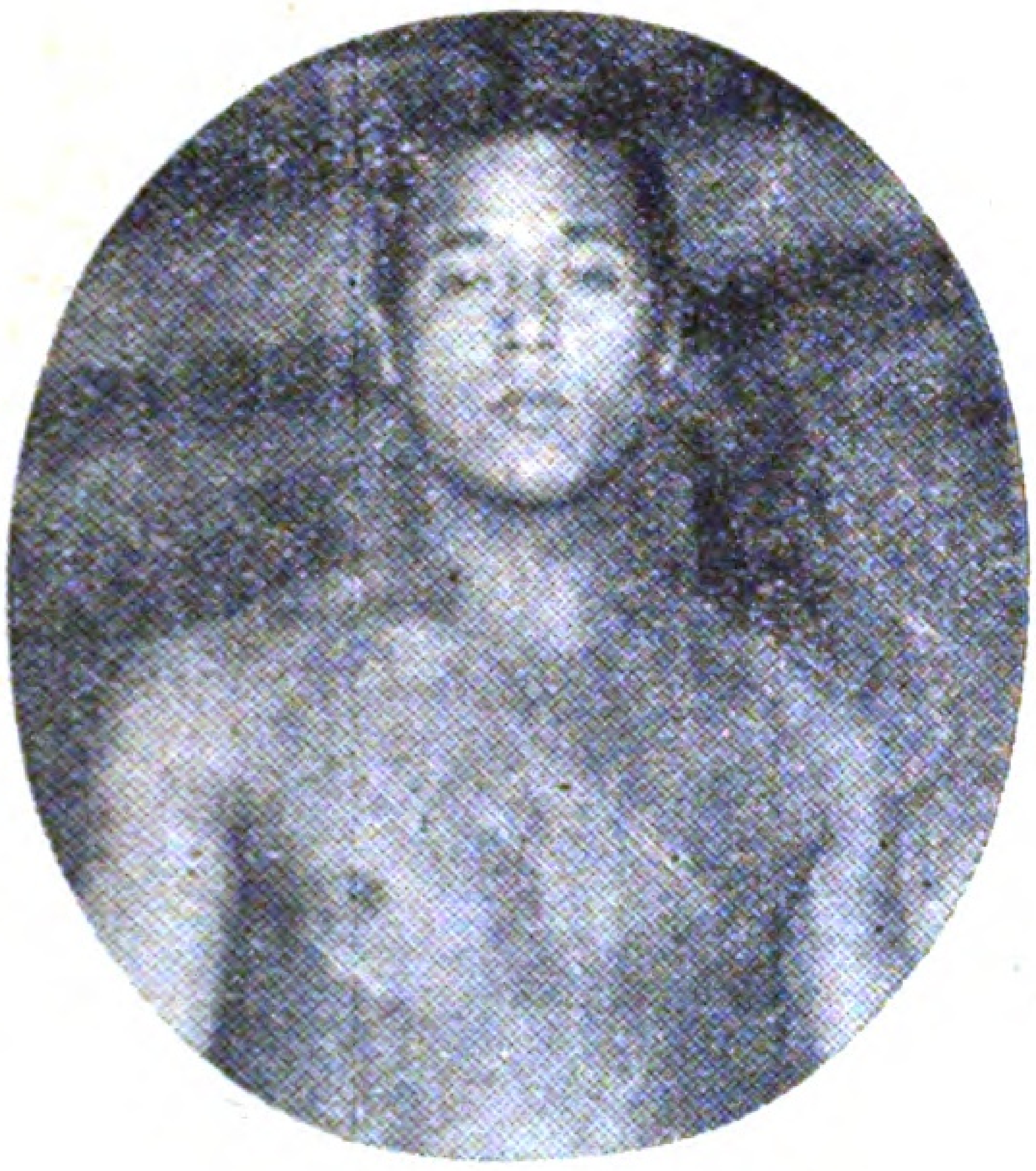
少しびつこをひきながら漁場や材木座の邊りなどを歩いてゐる[illegible]姿を見て、土地の人達はよく會釋をした。それに[illegible]は[illegible]言葉をかけてゐた。その打とけた物やさしい態度は[illegible]の[illegible]漁師、[illegible]だとか、[illegible]だとかいふ[illegible]には。[illegible]な[illegible]の人[illegible]

[illegible]

なかつた。[illegible]を手傳つて[illegible]うとは[illegible]た。[illegible]

武藏山と玉錦

三木愛花


全勝力士　武藏山　武

力士は體格と力量が基本であるから、先天的に體格と力量さへ持つて居れば卽ち大力士たり得ると考へるだらうが、決して此二つが成功の基本では無い。從來も時々七尺近く四十貫足らずの大兵力士が出顯しても却て成功せず了つたものが尠くないので、一々名を擧げることは遠慮するが、現在でも其人が在るやうに思はれる。然るに力士にも天才的のものがあつて、必ずしも大兵でもなく、肥滿でも無く、五尺七八寸、二十四五貫のものに驚異すべき名力士を出すのである。舊くは荒岩、逆鉾、近くは玉椿、大の里などが卽ち其人である。

十年の昔から横綱を豫期された出羽ケ嶽は前途暗黑、好角家を失望させつゝある。出顯と共に大關を以て擬せられた男女の川も、今尙ほ遲々として吳下の阿蒙を免れぬ。此時に突如として好角家の驚嘆を招ぎつゝあるは天才武藏山武である。彼が力士に入つたのは僅々數年前である。が其二段目に入るまでは力士に武藏山あるを知るものは稀れであつた。此間に彼は全勝、土つかずを繰り返へし昨年を以て彗星的に二段目に出顯し、始めて好角家に其名を知られて、毎場所に數十席を飛び越えつゝ、去五月には早くも幕の内の中軸近くに位置せんとするのである。彼は身長は六尺に近きも、體量は二十三四貫に過ぎぬ。決して先天的に惠まれた大力士型のものではない。然るに其角力に於ては天才的である。出羽ケ嶽の鈍重、男女の川の疎笨などが企て及ばぬ處である。

彼が去る一月の場所に、十一日間全勝の敵手は、幕內力士六人と幕下十兩中の選拔五人であつたが、悉く之を寄せ附けずに突つ張り出して仕舞つて、僥倖の勝ちは一つも無い。尙ほ餘力を殘して此上の强味を知らせぬのであつた。就中難敵と考へられた太郎山、古賀之浦、淸水川に對しても角力にせずに料理して居る。其立合の落ち附は數年幕內で苦勞した先輩にも遜色がない。立つて後も腋が固くて敵に得意の手を指させるやうな事は無い。必ず角力の妙諦、押すに手なしの格言通りに戰つて居る。彼尙ほ丁年を越えたのみである、數年の後は太刀山たるに到らずとも栃木山に至ることは明かである。其筋肉の緊强と突つ張りの强さが旣に栃木山を彷彿して居る。五月場所には出羽ケ嶽を役座に見て、男女の川と地位を比べ、[illegible]男女の川との對[illegible]は五

月場第一の好取組を以て迎へられるであらう。二段目に入つて僅々二三場所にして幕内第一の好取組を以て迎へらるゝ如きは、荒岩以來の天才力士である。而して立合と攻守の巧拙に於て、男女の川は却て危ぶまるゝであらう。特たるゝ五月場よ、武藏山健在なれ。



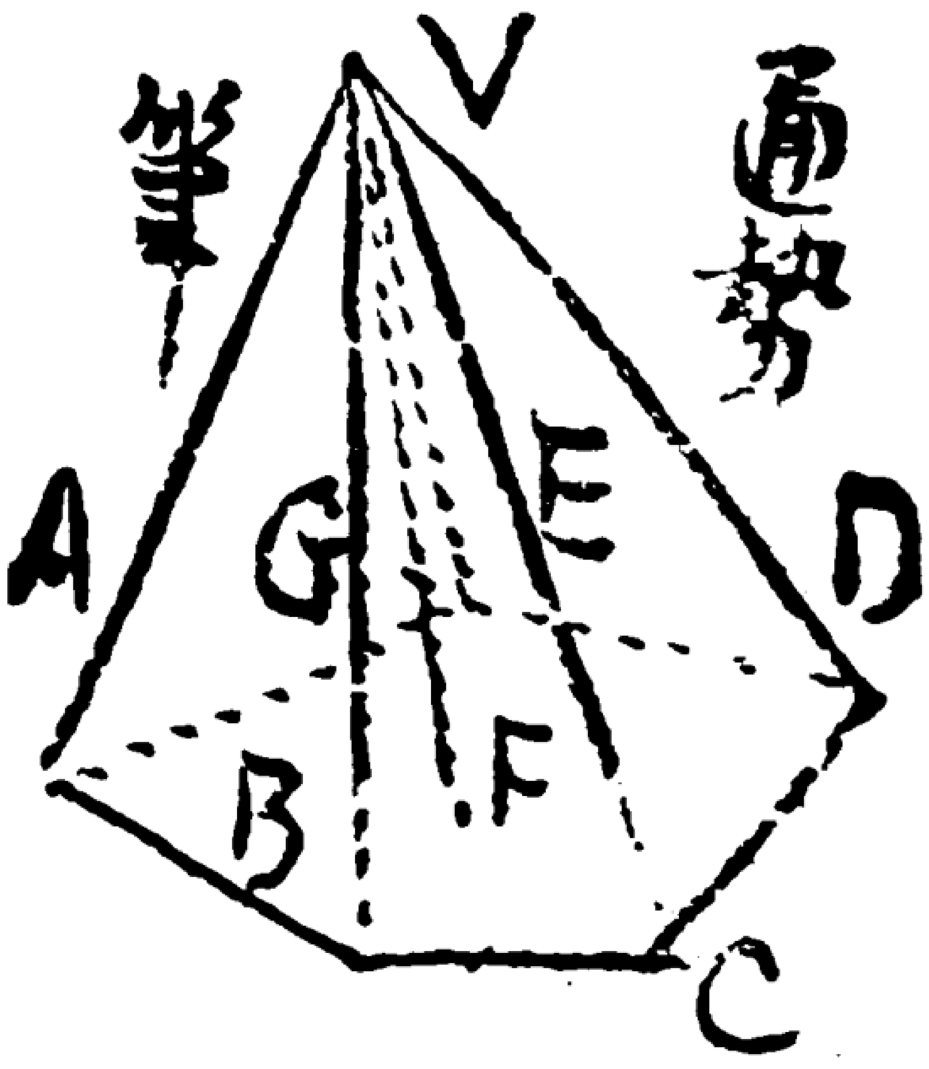
[illegible]力士　玉錦三右衛門

土佐からは明治時代に多くの名力士を出して居る。大先輩友綱が角界の一隅に覇を唱へて以來、其門葉に八幡山、國見山の二大關、關脇海山(二世)以下土州山、鏡川、加勝山、矢筈山等々を輩出したが、友綱一門の衰廢後は急に土佐力士の跡を絶つて寂寞を歎じさせ時に及んで、風雲兒玉錦三右衛門が其寂寞を破つて擡頭した。玉錦は身長五尺七寸を出ぬ、而し體量三十貫に近い。斯くの如く縱の低い横の廣い力士は、横に弱く前に脆く、今日の如く技巧を主とする土俵では成功するものが少ないのである。又一時成功しても此場所の常盤岩が五勝六敗の不成績を示したやうに(前場所にも三敗して休場)弱點の露出し易いものである。

然れば玉錦が入幕當時には甚だしく期待さるゝに至らなかつたのである。然るに近く前々場所には優勝爭ひの三杉磯を破つて常陸岩に優勝額を與へ(此場所も五つ勝越)前場所にも七つ勝ち越して常陸岩、大の里の兩大關より數等の好成績を占め、此一月場所には十勝一敗で最優勝の榮冠を占むることが出來たのである。彼は一月場に豐國と男女の川には投げを打たれて兩體に倒れたが、巧みに體を預けて勝つことが出來た。眞鶴との角力には敵に十分兩手を引かれて、極めて不利の姿勢であつたが尙ほ之を攻撃して眞鶴をして畏縮して利勢に乘ずるを得ざらしめ、一旦引分て後の取直しには咄嗟に之を突破してしまつた。

就中老巧清瀨川との角力には、突如左を卷き變て兩ざしとなつた取り方は却つて敵の技巧を奪つて流石の淸瀨をして呆然手を下すことを得ざらしめたなどは、此縱低横廣の力士型には珍らしき働きぶりである。蓋し彼は縱低横廣の型であつても、其筋肉が緊張して所謂ブク〳〵太りでなく、且つ其氣象に土佐武士の慨を受けて居る爲めでもあらう。之れが爲めに其顏と擧動に愛嬌が乏しく傲慢に見えるのが多少人氣に關するであらうが、其心の中は顏と擧動では忖度することが出來ぬ。

彼は二場所も續いて常陸岩、大の里の兩大關に優越して居る。宜しく大關に榮進すべきである。然るに今尙ほ此沙汰の無きは人材を重んずる所以でない。大關は一と場所の不成績で位を落さぬと云ふので、常陸と大の里を依然大關に据ゑ置くと云ふのであらうが、二場所も關脇(玉錦)に劣つた大關は地位を變へるのが當然である。予は協會の杓子定規に依つて或は好力士を腐らすことあらんかを恐るゝのである。



說教強盗私見

甲賀三郎

昭和二年三月から昭和四年二月に至るまで滿二年間、帝都の市郡六十ヶ所に亘つて強盗を働き、未だ縛に就かないのみか、殆ど手懸りさへないと云ふ稀代の怪盗說教強盗が現はれた。すると、それを模倣して二世三世が續出し、ピストル強盗まで出て來て、毎日の新聞は強盗の記事で埋められるやうになり、市郡の住民は極度の不安を感じ、折柄議會中の議會では、衆議院では帝都不安の問責案が出さうな形勢となり、貴族院では元警視總監の議員達が合議して、現警視總監に警告を發しようと云ふ事までになつた。大變な騒ぎである。

帝都にかく強盗が横行し出したのは、根本的には時勢の變轉に伴ふ人心の險惡化と云ふ事があるが、直接の原因は何と云つても、警察の缺陷の暴露の爲である。

近頃警察の横暴などと云ふ事をちよい〳〵耳にするが、一般には治安維持について、警察に信賴し切つてゐる。小供の惡戯にまで巡査を引合に出して嚇したり、失禮な事をしても謝らず、貸した金を拂はないと云つては交番へ、買つた品物が不正だつたとか、不當に高かつたとか云つては直ぐ警察に訴へて出る。往來で喧嘩なんかしても、直ぐ交番へ來いだ。會々通り合せた人が仲裁口を利いても、下手をすると、貴樣にそんな權利があるかと食つてかゝられる。寔以つて警察萬能である。

こんな有樣だから、一朝警察の威信が地に落ちたら大變だ。民衆は忽ち、、、、する。震災直後の帝都が能くそれを說明してゐる。つまり信賴し切つてゐるだけに反動が大きいので、とても齒が立たないと思つてゐた警察力も、案外不備な所があり、鳥渡頭のある奴が新手を出してやつて見ると、中々捕らない。恐い〳〵と思つて近寄らなかつたのが、何かの拍子で、、、だと分れば、愚弄し出すのが鳥の常だ。二世三世と強盗が續出するやうになる。

日本人には自治と云ふ事が能く呑み込めないらしい。殺人強盗でも巡査が立つてゐる處に悠然と行はれるが、巡査が行つて訊ふと、もう

メチャ〳〵だ。切符賣場でも掛員のついてゐる間は當々並ぶが、掛員がゐなければてんでんこで、折角列を作つてゐながら、それを無視する横着者が出ても、誰も何とも云はない。そんな事を取締るのは巡査の役で、普通人の口出しすべきではないと心得てゐる。だからさうした場所で、警官取締らんかと眞赤になつて怒鳴つてゐる人に能くあ[illegible]る。警官がゐないとどうにもならんのが日本人なのである。その[illegible]切つてゐる警察が案外頼みにならんとなると、[illegible]で、強盗横行と共に世論騒々とし出したのは、[illegible]新聞が煽動するのが悪いと云ふ議論もあるが、今日の[illegible]辯者以外の何者でもないのだから、新聞だけの[illegible]ない。

所で、警察はどんな施設を準備したか。

仕事が無暗に多くて、人が足りない。[illegible]者が熱心でない。士氣が振はない。[illegible]點では男職が公平でない。例へば、、、、、、、、、[illegible]た巡査が早く出世し[illegible]、、、、、、、、[illegible]發見されて、[illegible]とか、いろ〳〵[illegible]

[illegible]何といつても、[illegible]

[illegible]

襲撃の報が本當だつたら、恐れこのドン・キホーテは虐殺の憂目を見てゐたかも知れぬ。

暫く樣子を覗つてゐると、四邊はしーんとしてゐる。そこで私は直ぐ噓報だと確信した。と云ふのは××人が眞に襲撃して來たとしても元より彼等は少數である。到る所で掠奪を恣まゝにして、所在に火を放ち、喊聲を上げて攻めて來るに違ひない。少數で多數に當るのに、喊聲を上げる事位は、兵法の書物を讀まなくても、自然に起る現象である。夜襲ぢやあるまいし、肅々として攻めて來る筈がない。とかう信じたから、裏手の廣場に避難して、大勢の避難者と共に戰々恂々としてゐる妻子を、無理やりに家に連れて歸つた。

この時の有樣がどうかと云ふと、廣場の中に大勢の老幼婦女を圍らせ、その廻りを思ひ〱の武裝をした便衣隊の屈強な若者が、物々しく取り卷いてゐるのだ。然し、こんな事でどうして敵に當れるか。敵が間近かにやつて來て、亂鬪が起つたら、老幼婦女は一體どうする積りか。私は軍隊生活をした事はないけれども、かう云ふ際には、足手纏ひの老幼婦女は出來るだけ後方に置き、壯年者を豫備隊とし、青年者を本隊とし、夫々指揮者を定め、前哨を放つて、索敵行動をなさしめて、出來るだけ有利な地點で敵を邀へて、之を撃破するやうにしなければなるまい。其後の自警團なるものでも、日本人は指揮者を定めて團體的行動をとる事が出來ない事を暴露した。

話が傍路に這入つたが、民衆は暫く措くとしても、警官の團體的行動が巧妙に出來ないやうでは困る。警官の團體的訓練は軍隊に倣つて、徹底的にやつて貰ひたい。近時軍備を嫌ひ平和を唱ふ風が流行してゐるのは私も賛成だが、その爲に軍隊的訓練を否定してはいけない。今日軍隊ほど整頓した科學的組織と、進步した科學的機械を持つてゐる所はない。尤も軍隊の組織や機械はすべて戰爭を目的としてゐるのであるから、直ちに之を警官や普通人に移す事は出來ないが、その科學の粹を盡してゐると云ふ點は、是非學ばねばなるまい。

警察の欠陷に就いてはこれ位として、次に被害者の缺陷を見てみよう。云ふまでもなく、第一に戸締りの不完全だが、次に被害者の心理（或ひは思想）の問題がある。

多くの被害者は「怪我をしては詰らない。金で済む事ならすませ」と云ふエゴイスチツクな考へで、安々と強盗を逃がして終ふ。その強盗が直ぐその足で隣家へ這入らうが、他日どんな害毒を社會に流さうが、少しも構はない。社會の害虫であるから、どうかして捕へてやらうと云ふ考へがない。

尤も私は何でもかでも強盗に組つけとは云ひはしない。婦人や老人ばかりの所では、身を守るだけでも、非常に努力を要するであらう。三宅やす子氏の場合や、新渡戸老博士が最も恐るべきピストル強盗に對して、毅然として應待せられたなど、むしろ敬服に値する。

然し、その他の場合でこつちが壯年者で、相手の強盗が兇器らしいものも持たず、さして強さうでもないのに、捕へてやらうと云ふ氣構へのないのは遺憾だと思ふ。繰り返へして云ふが、何も組つけと云ふのではない。只、さうした氣構へだけを云ふので、若し強盗と雖も、その抵抗に遭つて、這入る家毎にさうした氣勢を示されたら、中途で止

…めて終つたかも知れない。つまり餘りに易々と獲得せられた事が、彼をして六十ヶ所も記し廻ほらせた一つの理由ではあるまいか。

こゝで私は日本婦人が餘りに退嬰的である事を指摘して、その退嬰を男子に及ぼす不可について論じたい。

日本人は何かと云ふとアメリカを輕蔑したがる。殊に軍事について甚だしい。然し、アメリカは歐洲大戰に百萬の義勇兵を參加せしめてゐる。その義勇兵はアメリカ婦人が作つたものだと云つても過言ではない。未亡人になれば年金が貰へると云ふ事もあるだらうし、[illegible]的であつたかも知れないが、兎に角、アメリカ婦人が、正義の爲には生命の危險をも辭せないと云ふ男子を好んだからだ。

近代人はひどく[illegible]的になつてゐる。さうしてその[illegible]である事に疑ひはない。だから近代人はその[illegible]あつても、[illegible]る。

[illegible]

[illegible]へたいではおくまい。

私は同情すべき[illegible]にどうしてそんな[illegible]おちたらすませ[illegible]指摘するに[illegible]である。

[illegible]

項で述べた通り、現場で押へる他ないとすると、彼の出現しない限り、捕まらない譯だが、彼がこのまゝ強盗を廢業して終ふ事は、先づ無いと信ずるから、彼は今後何回出現して、遂に捕へられるに相違ない。時期の問題だと思ふ。

警察を萬能視すると同様に、科學を萬能視して、科學的搜索法をひどく有難いもののやうに思ふ者があるが、さう特種な方法がある筈がないし、中には科學的搜索法と、科學的な機械を用ひて搜索する方法とを混同してゐる者もある。

科學と云ふのは、あらゆる場合の經驗を網羅して、之を系統的に分類し、その間に何等か共通の法則を結論したもので、犯罪を科學的に檢討して、その結果に依つて搜索法を決するのが、科學的搜索法である。多くの經驗によるに、強窃盗犯人は盗んだ品を入質するものだ。だから犯人の手懸りを得るには質屋を虱潰しに探せば好い。世人は質屋を虱潰しに探して歩く事を、非科學的だと思つてゐるらしいが、決してさうではない。犯人は贓品を入質するものであると云ふ結論が正しい限り、質屋虱潰し探索法は科學的である。

然し、こゝに贓品を入質しない強窃盗が現はれると、前段の搜索法は極めて價値のないものになつて終ふ。科學が絶えず進歩し、犯罪の方法が絶えず變化する以上、今日の科學的搜索法は明日は最早科學的でなくなるかも知れない。それにも係らず、警官の頭腦が固定して、古い經驗から割り出した搜索法ばかりに頼つてゐては駄目だ。

箇々の刑事は可成非科學的搜索法をやるらしい——之は時に奇功を奏する事がある——非科學的と云ふのは、全く個人的な自己の經驗を基とする事で、例へば曾々兎が杭に突當つて死んだのを見て、杭の傍にゐれば兎が捕れると考へる類である。

けれども、世の進歩と共にすべてが科學的であるのに、獨り警官の頭腦だけが非科學的だとは思へない。要するに時代に適應した新知識が缺けてゐるのだらう。犯罪搜索に當る警官には、絶えず新知識を注入する爲に、適當な講師を招いて、講義を聞かせるが好い。自己の經驗のみに信頼してゐると、つい非科學的の弊に陷るものだ。

強盗の遣口が變つた。然し、強盗の方には系統的な科學的な研究がある譯ではないのだから、要するに自己の經驗のみで割り出したものだ。即ち天才的強盗は從來の警察の搜索法の裏を行く事を發明する。と云ふよりは寧ろ自然淘汰の理によつて、警察の罠に陷つた強盗は捕へられて、偶々警察の遣方の裏を行つたものが生殘つたと云ふ方が至當で、説教強盗の如きはその生殘りの、、である。

警察當局者が過去や現在の事ばかり考へてゐるのがいけない。強盗が將來こんな遣方をしはしないか。さう云ふ場合にはかうと、明日の犯罪に對する用意が警察にあつても好いと思ふ。明日の犯罪となると、過去の經驗にばかり頼る警官だけでは考へられる事ではない。宜しく學者を迎へて、共に研究すべしである。明日の犯罪を考へ出すには、空想家である探偵小説家などが適任かも知れない。又彼等の作品から暗示を得る事もあるだらう。

要するに今日犯罪搜索の任に當つてゐる人達は、身體を動かし過ぎて、頭腦の營養を怠つてゐるのだらう（同、二、六）

藝術の社會的地位について

（游歐雜記の序）

阿部次郎

近松にとつて戀愛は魂の事件である。從つてこの戀愛は[illegible]だけでも、西鶴の場合よりも更に廣き領域を占め、[illegible]を張つてゐる。併し近松はこれを單に魂の[illegible]として、[illegible]の人生から切り離して取扱ひはしなかつた。彼は西鶴と[illegible]し、戀愛をより普遍的な關係の中に置いて、それとの關聯に於いて[illegible]ふことを解してゐた。さうして彼は西鶴よりもより多く、かういふ[illegible]をすべき藝術的必要に迫られてゐたのである。[illegible]戀愛を[illegible]とする彼の[illegible][illegible]が大多數の中物である以上――さうして[illegible]や[illegible]彼等のやうに窮屈な組木に縛つてゐるものも、[illegible]道德による[illegible]の目の[illegible]しくであ[illegible]世間に相違ない以上――彼は男女[illegible]

[illegible]

だこの心性の美を味ふ上に於いても、近松は西鶴と力點の置きどころを異にしてゐた。西鶴にあつては主として戀の戯れに對する堪能の見地から賞美された人間の心性は、此處では特にその誠、その純眞、その淸さ、その無私などの方面から探照される。西鶴が重きを置くのは主として心性の教養である。頭の働きである。近松が愛の眼を向けるのは寧ろその天眞である、心臟の置きどころである。この相違は兩者に於ける名妓の描寫を比較すれば特に著しく目に立つであらう。「一代男」に於ける夕霧の悧發は世之介のために戀の拔道を作る機轉を點睛として描寫されてゐる。同書の吾妻は「口添へて酒輕籠」の趣向によつて戀の名人であることを證明する。これに對して「夕霧阿波鳴渡」にも伊左衞門の子を阿波大盡におしつける離れ業があり、「壽門松」には南與平の切なき戀を憐んで「與次兵衞樣の御小袖、暫しも身を放されど、これがわしが心一ぱい、これを著て表向の客になつて下さんせと小袖を渡」す名妓ぶりがあるが、作者が力を極めて描かうとしたのは兩女のからいふ挿話ではない。「我身をともにうちかけに、引纏ひ寄せとんとねて、だきつき縮めよせ泣きける」夕霧や、「あのとつ樣や此かゝは、今の如く人中で、踏れぬ斗に恥をかき、言ひ下げられてもそなたを抱くが嬉しい、逢ふが嬉しい、兩身分ケし樹の子は、かゝもいとしい可愛いの、かゝが詞氣色では、もう逢ふことはなるまい、とつ樣のこと賴むぞや、せめて一晩しつとりと、ひとつ寢臥しもしたいぞと、かき口說きしみぐと眞實、つくすうき淚」を絞る夕霧の姿の前には、「身のうき時は色々のこはい智慧も出る物」、阿波の大盡をまんまとたらした傾城の計略の印象などは、何處かに吹き飛ばされてしまふのである。固より吾妻が南與平にかけた情は、夕霧の離れ業ほどに印象薄弱ではないが、それも全體の印象としては、地女と共通な人情の見地の下に攝取される。それは「お前の御緣は妨げぬ、たつたま一度お顏見せて下さんせ、其目をすぐに塞ぎます、ナフ御慈悲ぞやと懷中の、剃刀咽におしあて、娑婆の名殘と涙さへ思ひ、切つたる哀さ」を以て女房お菊に哀願する、氣取り氣のない彼女の地金が全篇の中心に立つてゐるからである。約言すれば近松はあらゆる男女の心性の底に一般人間的なものを探し出してこれを愛撫する。魂を裸かにして見ようとする態度は茲に個人を普遍化しようとする見方と握手して、無假借な摘發とは全然異れる色合に染め上げられる。美學上にいふ「類型」の發見が彼にとつて重大な仕事となるのである。

併しかういふのは、彼が各個人の性格描寫に無頓着であつたといふのではない。彼は世間で普通に考へてゐるよりももつと細かにこれに注目してゐた。この點で彼は西鶴よりも微妙を見せることが少いと私は思ふ。固より西鶴にあつても、一代男を本當に一人の主人公を取扱

つたものと見るのが無理であるばかりではなく、一代女と雖も女といふものの「花は咲きながら藤蔓のねぢれたる」趣きに强調を置いた幾枚かの肖像の連續と見るべきであつて、一人の人物と假定しての彼等の性格の不統一を直ちに西鶴の藝術の破綻と認めるやうな簡單な見方が許されぬことは云ふまでもないが、彼の著作中一貫せる描寫の點に於いて最も見るべき「好色五人女」の中にも容易に首肯し難き性格の不整合は見られるのである。樽屋おせんの、處女としての嚴苦しさ、戀人としての放心、家妻としての貞實、姦婦としての跡先見ずの間には、なだらかな變化の筋道が辿られてゐない。大經師のおさんの性格は假に「いたづらもの」といふ作者の折紙によつて領會し得るとするも、「只十露盤を枕に夢にも銀もふけの詮索ばかりに明し」て、身なり構はぬ不粹者の茂右衞門が、事後に至つて人並ならぬ熱意と大膽と智略とを見せるのは、前に下女のりんに答へた痴話ぶみの返事を思ひあはせても不思議な變り方と云はなければならぬ。又お七が「二人ながら涙をこぼし不埒なりし」始めての逢瀬の通ひ路に、姥や新發智をあしらふ扱ひ方の小憎らしいほど物馴れてゐるのもあり得ぬことに思はれる。所詮西鶴の五人女の中で、飛びぬけて强調されてゐるものは、美形に心醉する情熱と運命の不可測の印象であつて、此處でも一貫せる性格に對する注意は二の町に置かれてゐるのである。これに反して近松の心性に對する愛は、各人の性格に對する親切な注意にまで擴張される。彼の場合にあつても、著しい個性の發見とその研究及び描寫に、興味の中心が置かれてゐるのではないが、性格は作者が一般人間的なものを探索すべき場處として、それに應ずる重さを持つ。故に其處には、個性が著しく飛び出しはしないが而も同時に抽象的でもない、溫和な類型の藝術が生れて來るのである。

「天の網島」の小春と「冥途の飛脚」の梅川との性格の對照は誰でも云ふところである。誠にこの二人は近松の作中でも最も著しい性格描寫であつて、この點を問題とするとき全然この二人に觸れずに素通りすることは、獨創自慢の知らん顏先生にとつても甚だむづかしい藝當であらう。女あるじの越後屋の二階、女郎達が大勢遊びに來て、「男まぜずの火鉢酒」、拳の勝負の最中に來合せ、「ア、うたての酒や、拳をする氣もあらばこそ、此梅川が今の身を、少しは泣いて貰ひたや」と「泣しみづきて語る」も梅川。すぐそのあとに、下から聲をかける八右衞門の戲談につひ誘はれて、「デモ逢ひたいが定じやもの、憎いなら來て叩かんせ」と浮かれるも梅川。封印をきつた忠兵衞を諫めて、「情なや忠兵衞様、なぜ其様にのぼらんす、そもや郭へ來る人の、假令持丸長者でも金に詰るは有ならひ、こゝの恥は恥ならず」と道理至極の白は云へど、忠兵衞の「前後括らぬ間に合ひむしろ」其場の出鱈目を

すぐ顔に向け、「べた〳〵した髪たり、帯もきり〳〵と仕直しや」と叱られながらも「何心なく勇む顔」を見する梅川。すぐ其あとで忠兵衛に本當のことをきかされて「聲もなみだにわなわなと」又懐ひ出すいじらしい梅川。新口村の百姓家の時雨の窓から男を遠望して、「あの綟の肩衣が孫右衛門様か、ほんに目元が似たはいの……私は嫁でござんする、夫婦は今をも知らぬ命、百年の御壽命すぎてのち、未來で御目にかゝりましよ」となつかしがる、氣のよい梅川。これに反して小春は、大事のことを腹で問ひ腹で答へて、言葉少なに、恐ろしくしつかりした女である。「ヤ小春様か…氣色がわるいか顔も細りやつれさんした」——思ひが内にあれば口には出ずに體がやつれ細る部類に彼女は屬してゐるのである。小うるさくつけまとふ太兵衛を避けて河庄に逃込みながら、「表にいやな李蹈天がゐるわいの、ひそかに〳〵頼みやす」といふは彼女。おさんの頼みをしつかりと自分一人の腹に引受けて、何の辯解もなく默つて治兵衛に踏まれてゐるは彼女。初見の客に「ふところで錢よむように」うつむいた姿を見せて、河庄の花車がとりなしに、わさ〳〵わつさり頼みます、小春様〳〵と、いへども何の返答も涙ほろりの顔ふりあげ、あのおさむらひ様、同じ死ぬる道にも十夜の中に死んだ者は、佛に成るといひますが定かいな……自害すると首くゝるとは必定苦痛が勝つたがたと違いてござんしよう」とたゞねけに問ふを敢てするは彼女、これを敢てせずにゐられぬほど、情死を腹に感じて、死覺悟を心に練るは彼女。最後までおさんへの義理をたてぬいて、自分で云ひ出して「所々の死」をすることにきめて置きながら、「こなさんそれで死なしやんすか、所を隔て死ぬれば側に居るのも少しの間、此處へ〳〵と手を取合ひ、刄で死ぬるは一思ひ、さぞ苦痛なされうと思へばいとしい〳〵と止めかねたる忍び泣」堪へ忍ぶ者の情の深さを底からつき出して來るのも彼女。「我から先に目も眩み刄の立どもなく涙」ためらふ治兵衛を勵まして「ア、せくまいせくまい、早ふ〳〵」と勇むのも亦彼女。近松はこの二人の女の中に、情に殉ずる同じ魂を捜しながら、而もこの魂の居場處として二人の異れる性格を十分の意識を以て描きわけ、愛しわけてゐるのである。ほゞ同様のことは男主人公の忠兵衛と治兵衛とについても云はれる。忠兵衛は「あきないの巧者、駄荷づもり江戸へも上下三度かさ、茶の湯俳諧碁双六のべに書く手のかど取れて、酒も三つ四つ五つ所紋羽二重も出ず入らず、無地の丸鍔象嵌の國細工にはまれ男、色のわけ知り里知り」で、機轉が利き、意味定つて、氣の勝つた男であるに對して、治兵衛は、作者が最後の道行の中に掛け詞的に云ふところによれば、獻に飢へ、分別が足りないが、それだけに又おつとりとして人に好かれる厭のある男として描かれる——あはれ遊君の首尾あらば、それを一人

に對する着眼が意識的に行はれてゐることを悟らうとする者は、特に近松の最後の世話物、澁いさびのある同情を以て貫かれてゐる「心中宵庚申」を讀むがよい。その上の卷は殆んどこの目的のためにのみ捧げられてゐることを發見するであらう。凡そ近松が、やゝもすれば同じものになり勝な世話物を前作と區別するために用ゐた手段は色々であるが、境遇、場面、時季や、曲節に應用すべき旋律などと並んで、性格の描きわけも亦この中の重要な一つであつたことは、再々の見のがすべからざる點である。時代物は兎に角世話物に於いては、不可能な性格といふやうなものは殆んど一つも發見することが出來ない。凡ての戀

此かを選擇決定しなければならぬ瀬戸際に立つ。故に忠兵衞は封印を
きり、治兵衞は金の工面につきたり、心の底から恩義を感じてゐる
房を奪ひ歸られたりするやうな羽目に陷るのである。特に女性はそ
眼界の狹小の故に自らも危地に立ちその戀人をも危地に誘ふ傾向を持
つ。「山はあれても崩れても、久米樣に逢へば嬉しい／＼」(「心中萬年
草」のお梅)——このやうな一向きな熱中が冷酷な人生と調和する道は到底ないであらう。「お身に惡い事でもなし、あッといふて仲間になり、早ふわたしと起臥を一所にせうとはおぼさぬか、お爲にならぬ筋ならば、いやと返事をいひきらしやんせ、こなさんに添れねば生きて

すぐ貝に向け、「べた〱した取たり、襟もさり〱と仕直しや」と叱られながらも「何心なく弥む顔」を見する梅川。すぐ其あとで忠兵衞に本當のことをきかされて「膝もなみだにわなわなと」又慄ひ出すいじらしい梅川。新口村の百姓家の時雨の窓から男を遠望して、「あの緜の肩衣が孫右衞門樣か、ほんに目元が似たはいの……私は嫁でござんする、夫婦は今をも知らぬ命、百年の御壽命すぎてのち、未來で御目にかゝりましよ」となつかしがる、氣のよい梅川。これに反して小春は、大事のことを腹で問ひ腹で答へて、言葉少なに、恐ろしくしつかりした女である。「ヤ小春樣か…氣色がわるいか顔も細りやつれさんした」——思ひが内にあれば口には出ずに體がやつれ細る部類に彼女は屬してゐるのである。小うるさくつけまとふ太兵衞を避けて河庄に駈込みながら、「表にいやな李籍夫がゐるわいの、ひそかに〱頼みやす」といふは彼女。おさんの頼みをしつかりと自分一人の腹に引受けて、何の辯解もなく默つて治兵衞に踏まれてゐるは彼女。初見の客に「ふところで鏡よむように」うつむいた姿を見せて、河庄の花車がとりなしに、わさ〱わつさり頼みます、小春樣樣と、「いへども何の返答も涙ほろりの顔ふりあげ、あのおさむらひ樣、同じ死ぬる道にも十夜の中に死んだ者は、佛に成ると云ひますが定かいな……自害すると首くゝるとは必定地獄を眼かたがたんと爹いや……そうしましよか」とたしねけに問ふを敢てするは彼女、これを敢てせずにゐられぬほど、情緒を腹に感じて、死覺悟を心に縣るは彼女。最後までおさんへの義理をたてぬいて、自分で云ひ出して「所々の死」をすることにきめて置きながら、「こなさんそれで死なしやんすか、所を隔て死ぬれば側に居るのも少しの間、此處へ〱と手を取合、刄で死ぬるは一思ひ、さぞ苦痛なされうと思へばいとしい〱と止めかねたる忍び泣」堪へ忍ぶ彼の情の深さを底からつき出して來るのも彼女。「我から先に目も眩み刄の立どもなく涙」ためらふ治兵衞を励まして「ア、せくまいせくまい、早ふ〱」と勇むのも亦彼女。近松はこの二人の女の中に、情に殉ずる同じ魂を捜しながら、而もこの魂の居場處として二人の異れる性格を十分の意識を以て描きわけ、愛しわけてゐるのである。ほゞ同樣のことは男主人公の忠兵衞と治兵衞とについても云はれる。忠兵衞は「あきなひ功者、駄荷づもり江戸へも上下三度かさ、茶の湯俳諧碁双六のべに書く手のかど取れて、酒も三つ四つ五つ所紋羽二重も出ず入らず、無地の丸鍔象嵌の國細工にはまれ男、色のわけ知り里知り」で、身輕が稀き、苦味走つて、氣の勝つた男であるに對して、治兵衞は、作者が最後の道行の中に半ば教訓的に云ふところによれば、酷愛に溺く、分別が足りないが、それだけに又おつとりとして情にもろい處のある男として描かれる。さあれ遊藝の首尾あらば、それを二人

が、最後目と、名殘の文の言ひかはし、[illegible]夜々々の[illegible]、[illegible]拔けてとぼとぼうかうか身をこかす」、鋭いところはないが、底に澁へて受ける信實を持つてゐる點に於いて一見小春にふさはしからぬぐうたらに見えながら、其實却つて彼女の愛を誘ひ出すやうな性格を持つてゐるのである。其他「重井筒」の德兵衞の薄弱な性格が最後の死に極まで貫いて見られてゐることは既に前にも云つた。「ひぢりめん卯月の紅葉」の與兵衞の「氣の弱い生れつき」も亦「まだ蕾む花[illegible]る月、玉つやうなる若い者若い女の頑是なさ、なだめらるゝもただなるも分々分なたぬ涙」の最後まで、作者のいた〱しげな眼に見護られてゐるか[illegible]ういふ例は擧げれば何處までもきりがないであらう。作者の性格描寫に對する着眼が意識的に行はれてゐることを悟らうとする者は、特に近松の最後の世話物、温いさびのある筆を以て書かれてゐる「心中宵庚申」を讀むがよい。その上其の筆は殆んどこの目的のためにのみ[illegible]げられてゐることを認識するであらう。凡そ近松がかく[illegible]ものになり勝な世話物を前作と區別するために[illegible]るが、近松が世話物に於いて特に[illegible]すべき[illegible]描きわけられた[illegible]の中の[illegible]は、[illegible]からぬ點である。時代物は[illegible]に於いては、[illegible]といふやうなものは[illegible]

は性格（心理）と[illegible]に於いて[illegible]

43

凡ての[illegible]に於いて[illegible]

に發達する[illegible]

[illegible]

[illegible]にのみあることではないのである。[illegible]も「戀しさと悲しさと涙の數は多けれど、いとしいばかり一道に」（「壽門松」）思ひつめた者に、「思ひあふた中、離れがたない習なれど、それは一度の皮切、なんぼいとしい戀しいも、身が立ねばかなはぬこと、但し思ひきられぬか、サアいやおふの返事しや、どふぞどふぞと手詰に」（「心中刃は氷の朔日」）なつても、それが近松流の戀愛である限りは引もどすことが出來ない。近松はこの力の強さを見た。同時にそれが悲劇を作る力となることをも勿論見た。彼は同情と悲哀の眼を以てこの悲[illegible]の發展を追跡する。

[illegible]そのものゝ中に含まれてゐる[illegible]の[illegible]に[illegible]を[illegible]て、悲劇に[illegible]

[illegible]の描寫もない[illegible]ら、近松が運命に對する驚異や畏怖や歎息を[illegible]ゐる證據は發見し難い。況してその他の場合に[illegible]運命は、人生に臨む冷嚴な力としてではなくて、[illegible]理描寫、全體としては主として戲曲構成上の技巧[illegible]過ぎない。天の網島最後の場、「隣も爭ふなら烏[illegible]に、起請誓紙の度毎に熊野の烏が三羽づゝ死ぬとい[illegible]て「常にはかはいかはいと聞く、今宵の耳へはっ[illegible]報い／＼と、聞ゆるぞや」といふ治兵衛の白はこの心理描寫の[illegible]とすべきである。一體にこの「[illegible]」は[illegible]

[illegible]せずにゐられぬほど、[illegible]

中の世界を離れて、心中に於ける警告を上から與へてゐるものであるが、さればと云つてこの一節を作者の形而上的信念の表現と見るを得ないことは勿論である。午王の烏の想念が小春治兵衞を心中に導くといふやうな怪誕めいたイデーは作中の何處を搜したつて見當る筈もない。それはたゞ感情の興奮の極に立つてゐる「今宵の耳へは」さう「聞ゆる」のである。近松は、この方面から神秘感へ――從つて宗教へ行くべき道を持合せてゐない。超自然は、彼にとつては、一面から云へば人生の起伏に無常と哀れとを添ゆる感情的背景、一面から云へば未來の夢をかくべき憧憬の對象である。故に彼は「あしたの雲夕の霜、あだしが浦のうつぼ舟、身をなきものと知りながら、いとし憎しのたはふれも、離し此岸彼岸の、假のうつゝの假橋や」(「重井筒」)と觀ずることも出來、又「神や佛にかけ置きし現世の願を今こゝで、未來へ回向し後の世も猶――も一つはちすぞやと、爪繰る珠數の百八に涙の玉の、數添ひて盡せぬ、あはれ盡きる道、心も空も、影暗く風しん〳〵たる曾根崎の森にぞ、辿り着きにける」と歌ふことも出來るが、それは悲劇の發展を導き行くためには動的な力を缺きすぎてゐるのである。

併し私はこの意味の運命のうちで、近松がしみ〴〵と見詰めたものが一つもないといふのではない。その最も著しいものとして、私は男女の緣の不思議をあげる。彼が一度「三世相」の武[illegible]て、「冥途の飛脚」に於ける反復を通し[illegible]は、彼が或強調を以てこの事を考へてゐたこと[illegible]――「傾城に誠なしと世の人申せども、それは皆僻言、ぞや、誠も嘘ももと一つ、たとへば命拋ち如何に誠を盡しより便なく遠ざかる其時は、心やたけに思ひてもかうしよゝならず、おのづから思はぬ花の根引に逢ひ、懸し誓もうそ初より僞の勤斗にあふ人も、たへず重ぬる色衣つゐの寄邊は、初の嘘も皆誠、とかく戀路には僞もなく誠もなし、緣の有ぞや、逢ふ事叶はぬ男をば思ひ〳〵て思ひが積り、思ひざめにもさすもの、つらや所在と恨むらん」。これは最も深く人の心の中にあるものが、意志の支配を越えて、人力以上の或ものにひき廻さるるが如く流轉することに不思議を發見せるものである。心のことであつて實は運命に屬するものの作用が作者の驚きを捕へる。これは人心の上に懸る或動的な力として劇的構成の動機となるを得るものである。併し近松はこの不思議を中心として一篇の戯曲を構へるまでには至らなかつた。恐らく最も端的な、最も明白な劇的集中を求むる當時の好尚の幼さや、人形芝居が置かれてゐる劇的表現の制限などが、かういふ微妙な陰影を必要とする題材を選ばせなかつたのであらう。故に緣の不思議も亦

ある小女郎じやない、女房に仕なと殺しなと、いやか應かど生じにの、大事の返辭でござんする、せく事はないぞやとふところに手を差入れ、ヲ、肝汗はいと、鼻紙有たけ、ふきすつる」(「博多小女郎波枕」)──これは毛剃の素性を十分に知らぬ小女郎としては無理ならぬ言葉であるが、その中には、毛剃の素性が明かになつても猶引返す事の出來ぬ決斷が含まれてゐて、その一向きな熱中が否應なしに宗七を海賊の仲間に引ずり込んで行くのである。かくて戀愛は男にとつても女にとつても一つの運命である。「そなたも殺し我も死ぬ、もとはと、問へば分別のあのいたいけな貝殼に、一杯もなき蜆橋」といふ道行の文句は、單に小春治兵衞にのみあてはまることではないのである。而も「戀しさと悲しさと涙の筋は多けれど、いとしいばかり一道に」(「壽門松」)思ひつめた者に、「思ひあふた中、離れがたない筈なれど、それは一度の皮切、なんぼいとしい戀しいも、身が立ねばかなはぬこと、但し思ひきられぬか、サアいやおふの返事しや、どふぞどふぞと手詰に」(「心中刃は氷の朔日」)なつても、それが近松流の戀愛である限りは引もどすことが出來ない。近松はこの力の强さを見た。同時にそれが悲劇を作る力となることをも勿論見た。彼は同情と悲哀の眼を以てこの

詮けれ〳〵藝術の發展を追跡する。

戀愛そのものゝ中に含まれてゐる悲劇の根源に、照明を與へて、悲劇に

これを覆すにいたる力として近松は如何なるものを見たか。私が假りに觀察の順序に當つて第二にあげた特殊の意味の運命は、近松の世界にあつてはどんな役目を勤めてゐるか。この運命が悲劇の進行に影響する方式は主として偶然である。又偶然を通して行はれる超人間的な因果應報である。西鶴がこの力の不思議を身に感じて、恐怖若くは敬虔を以てこれを描く方面を持つてゐることは前に云つた。併し近松はこの點に於いて西鶴ほどの神秘感を持つてゐない。固より其處には「どこも彼處も一どきに、しほのさいて來るごとく」押し寄せて遂に人を覆滅する運命の描寫もあり、偶然の錯誤から我夫ならぬ褄重ねする不義の描寫もないことはないが、この「重井筒」や「昔暦」に於いてすら、近松が運命に對する驚異や畏怖や敬虔を以てその事件を取扱つてゐる證據は發見し難い。況してその他の場合に於いては、この意味の運命は、人生に臨む冷嚴な力としてではなくて、部分的には人物の心理描寫、全體としては主として戲曲構成上の技巧に利用されてゐるに過ぎない。天の網島最後の場、「聲も爭ふむら烏塒はなれて鳴く聲」に、起請誓紙の度毎に熊野の烏が三羽づゝ死ぬといふ言傳へを想起して「常にはかはいかはいと聞く、今宵の耳へは、其殺生の恨みの聲、殺い〳〵と、聞ゆるぞや」といふ治兵衞の白はこの心理描寫の一條とすべきである。一體にこの「名ごりの涙づくし」は何者が少し〳〵作

中の世界を離れて、心中に[illegible]

か、さればと云つてこの一節を作者の彩雨[illegible]の表現と見ることは[illegible]ないことは勿論である。牛王の歸の想念が不斷に[illegible]を心中に描くといふやうなイデーめいたイデーは作中の何處を[illegible]い。それはたゞ感情の氣分の[illegible]一所謂ある一のである。[illegible]この[illegible]へ行くべき道を持合せてゐない。[illegible]云へば人生の[illegible]に[illegible]た[illegible]の[illegible]をふくべき[illegible]である。[illegible]靜、あたしは湧つらつ[illegible]のたはふれも、[illegible][illegible]ることも出來、[illegible][illegible]の[illegible]の、[illegible]くまる[illegible][illegible]のである。

[illegible]

[illegible]

悲劇の主動機として重要な役目を勤めてゐるとは云へないのである。

然らば近松の戀愛悲劇に於いて消滅の力を具體化するものは何であるか。それは、後に云はうとする義との關係を除けば、主として簡單明瞭に敵役である、敵役に似た人物の力である。これは一面に於いて古淨瑠璃の中に準備せられ、一面に於いて歌舞伎芝居の典型的仕組から傳統をひく舞臺構造法であるが、主人公に對抗して葛藤を作り、遂にはこれに打勝つべき反對力が、具體的代表者を舞臺の上に必要とする以上、而もこの代表者は正義が運命といふやうなものの手先として主人公に臨むよりも、それ自らの惡意、詭計、無智、卑劣等によつて波瀾を製造する方が、簡單に劇的動作の集中と主人公への同情とを高めるに便利である以上、演劇發展の或時期に於いては、獨立しても發生すべき充足理由を持つ。吾々は演劇發展のこの潮先に近松の淨瑠璃が乘つてゐたことを諒察すべきである。併しこの仕組は手輕ではあるが世界の奥行を淺くする。それは主人公を破滅に導く反對力そのものゝ保存理由を抹殺し、從つて相爭ふ二つの力を奥から支配する宇宙的なものゝ印象を淡くするからである。特にこの仕組に伴つて來る缺陷は、單にその無價値を舞臺の上にさらして、憎まれ、蔑まれ、笑はれるためのみの犧牲的役割を必要として來ることである。どの方面から見ても鄙劣を嘲りたいやうな人物と舞臺に長い時間を費して、辛抱してその醜態を拜見する義務を、見物は負はされる。さうしてこれは、普通の場合とは逆に、歌舞伎芝居よりは人形、人形よりは素淨瑠璃に於いて愈々堪へ難くなる缺陷である。例へば義太夫節の末流、「朝顔日記」宿屋の段に於ける岩代瀧太の表現を見るに、歌舞伎芝居にあつてはその權衡を失した赤つらと人形振を加味した身振のとぼけ加減によつて、その嫌味は可なりの程度まで救はれ得る。併し人形芝居に於いては、彼は駒澤や朝顔と同じ水準の實在性を有する故に、一様に現實から隔てられてゐる世界の中で、その隔離の程度の差によつて下劣の印象を濃くするといふ便宜が奪はれてゐるのである。更に素淨瑠璃にあつては、前兩者が獨自の工夫によつて獲得し得る遁道をすべて奪はれてゐるが故に、聽者の受取る者はただ白の印象のみとなつて、結局耳を塞ぎたいやうな卑しさのみが殘るのである。この意味に於いて私は、時として義太夫に對して下さるゝ野卑の非難を承認する。さうしてこの缺點が「曾根崎心中」の九平次、「天の網島」の太兵衞其他の敵役によつて、既に近松の中に準備されてゐることも亦遺憾ながら承認しなければならぬ。併し近松にあつてはこの[illegible]期にある。後世の改作に從つては、太兵衞の傍に更にワキツレの善六を加へ、結末に於いては敵役の役まはりをした[illegible]に於いては[illegible]なる「天の網島」の入替部門を[illegible]の點に[illegible]する時、興味のあく

どさが加速度をなして增長するのである。

第三の經濟的關係がこの敵役の役目と決濟する。西鶴にあつては消極積極の兩面に亘つて——人を減すのみならず又人を高める力として見られてゐたこの社會的事實は、近松に至つて、敵役の掌中に握られた最も強力な武器に變化する。敵役の大多數は、その優秀な金力によつて相思の男女を壓倒するか、若くはその狡智を以て主人公の金力を奪ひ、これによつて彼を死地に陷れるのである。金錢が大なる勢力であると見る點に於いて、西鶴と近松とは一致するが、後者の主人公は金力あるが故に輝かず、寧ろ貧を通して發揮される性情の誠と美しさが、彼を同情の焦點に据ゑる。而も彼等は敵役に蹂躙せられ金力に打倒され、觀客の涙を絞りつゝ沒落して行くのである。元祿期の金力全盛時代、而も大阪にその後半生を送つた近松は、固よりその壓倒的な社會的勢力を承認せぬ譯に行かぬ。併し彼は物理的暴力にも比すべきその力に、心から頭を下げることを屑しとしない。故に彼は、西鶴が時として——而も西鶴としては正當の理由を以て——したやうに、第一義のものとして金錢を讃美するやうなことをしないのである。私がかういふのは、「生玉心中」の嘉平次のやうに商才ある心中者を描き、「壽の門松」の淨閑のやうに金銀を神とする老熟者を推重した近松を忘れてゐるのではない。彼は金銀の社會的勢力を認むるのみならず、又金錢を重んずる町人の分別を嘉賞する。併し彼が庶民の藝術的要素を發見する點は——從つて第一義の價値を置く點は、此にあらずして彼にある。商才にあらずして誠にある。金錢を惜むところにあらずして、子に對する愛の爲にはその貴重な金銀をも擲つところにある。町人の神を祭るところにあらずして、駈落を決心した息子から「三十年の孝行をたつた一度に請取」るところにある。要するに彼は金銀を重んじながらも、その上に立つ魂の自由を更に中心に据ゑて人生を見てゐるのである。彼のこの自由のたて方には、西鶴に比較すれば、確かに簡單に過ぎ、性急に過ぎ、從つて一面的に過ぎるところがある。併し近松が近松として一貫した見方を持つてゐることは充分に認めてやらなければならぬ。吾々は、彼の作中に於いて、太兵衞のやうな敵役の——戀愛の敗者の氣障な口から、主として金力の讃美を聞くことを怪むべきではないのである。

この事は富貴を失つて而も沒落するに至らなかつた人達のことを考へることによつて更に明かになるであらう。藤屋の伊左衞門は五萬の富を擁する分限者の若旦那から紙衣一枚の「風の神」に零落した者である。併し彼が「昔は槍持迎へに出る、今はやうやう長刀の草履」をはいて吉田屋を訪れたとき、彼の性格は[illegible]に微塵も變るところがなかつた。その跳揚さもその肝積も昔そのまゝに、「男に扇の權柄」な

姿を師走の廓に彼は見せるのである。而もそれから更にどん底に身をおとしても彼の性情は依然として昔のまゝである。末期に迫る夕霧の床にその子源之介と共に馳け寄つたとき、彼等の挨拶は、「太夫又逢ひに來たはいの、伊左衞門樣わしや死ぬるわいのふ」である。この坂田藤十郎の舞臺を想見させるやうな一貫した鷹揚さに、近松は特別の愛を持つたらしい。これに對して「丹波與作待夜の小室節」の與作は、確かに貧故にその性情に變化を受けてゐる。賭博、竊盜使嗾などさへやり兼ねぬ馬方氣質が彼に染み込んで來てゐるのである。併し最後になつて彼は「腰拔け」から癒えて、再びもとの本心の輝きを見せる。「與作も名ある弓取の家に生れし氣質とて、きつと死に身に胴すわりてのち、彼の言動は、馬方の弊衣を完全に心から脫ぎ捨てたかのやうに、武士らしい。さうして作者が看客の娛樂のために附加した與作踊の踊手をきり離して考へれば、この淨瑠璃の結末は、彼の言動の武士らしさによつて特殊の風趣を得て來てゐるのである。故に伊左衞門と與作とを通じて、作者のねらひどころは、人が貧ゆゑに變化するところにあらずして、寧ろ貧ゆゑにも變らぬところにあつた。彼は金銀の勢力よりも魂の自由に中心興味をかけてゐるのである。

併し人は果して貧ゆゑに性格の腐蝕を受けることはないか。魂の日常は決して伊左衞門や與作のやうにして放任されることを許さる

か。魂の自由はもつと複雜な苦勞を經て、境遇による變化を受けつつ、始めて恢復若くは獲得されるのではないか、この問題に對する西鶴の見方はもつと複雜にして深刻である。彼は魂が受身になつて內から變へられる方面をもつと眞劍に見た。彼が最後に到達する境地も近松の如く矢張魂の自由であるが、それは小石が波に洗はれるやうに、貧に洗はれておのづから淸らかになるのである。この「阿闍世」の境地を近松は知らなかつたらしい。その意味に於いて、近松の世界は西鶴の世界よりも通俗である。

新刊批評

野村兼太郎氏著

『英國資本主義成立史』を讀む

石濱　知行

本書は、かつて、三田學會雜誌等に散見した著者の論文を集積したところのものである。

著者自らの言葉を借りれば、『アングロ・サクソン民族の勃興的勢力は、一方、中世以來の市民階級の發展となり、他方近世初期の海外に於ける商業的活動となつた。そこで私は一方市民階級の活動の根柢である都市の發達を探り、他方近世に於ける資本蓄積の基礎となれる海外發展の經過を辿つて見た。そして英國に於ける產業革命勃發の必然的內由をその點に歸した。乃ち英國資本主義的制度成立の根本的原因と見做したのである』。しかして、本書を構成するものはすべて一度獨立して發表した論文であるが『しかし一貫して上述の經過を辿るには十分であると思』はれるので、『本書を名附けて資本主義成立史と敢て稱した所以である。』

著者のこれらの言葉に依るも、また本書の內容からするも、また著者が別のところで言ふやうに產業革命及びそれ以後の歷史を除外せる點からするも、本書は、むしろ、『英國資本主義の起源』又は、『英國資本主義成立前史』とするを、內容により忠實なる命名なりと考へられる。

本書は、序文と本論より成り、本論は、總論(現代の產業組織、英國民の由來、英國資本主義制度の起源)、都市の發達(古代都市概觀、英國都市の起源、中世に於ける都市生活)、市民階級の勃興(文學書に現れたる中發展(近世商業發展の意義、英國東印度會社の發展、マーカンテイリズムの發展、商業的霸權の確立)より成り立つてゐる。

序文は、著者自身の歷史觀を、『少しく』のべてゐられる。先づそれを見やう。著者はシュムペター、ランプレヒト、リツケルト、ウエヴー、ラッポポルト、ランケ、リンドナア、ジンメル、ヴント、チェヌ、ブラウン、ニイチエ、リール、デイルタイ等の諸學者の難解なる歷史理論を四十頁のうちに檢討せられて、さて、『歷史は、換言すれば人類の社會生活の確實なる把握を目的とし、かくして、その本質を會得せんとすることにある』といふ數語のうちに要約せられてゐる。

而して、『歷史現象は一個の綜合的現象であるから、經濟現象もその總體の中に融合してゐる一の現象に外ならぬ』從つて、『經濟的要素のみをそれだけ摘出するといふのなら、恐らく不可能でもあり、又可能なりとしても、その經濟的發展の實相を把握したもの

と言へぬ。從つて恐らく無意義であらう。然し文化發展の全過程が如何なる經濟狀態の基礎の上に立つか、又その文化の他の部分に於ける發展とが如何なる作用・反作用をなしてゐたかを描くものとしての經濟史は成立し得ると考へる』『かくの如く經濟史は經濟的發展を中心とする人類の生活を明確に把握するのが目的である。然るに經濟生活が人類の生活維持の基本であるからして、經濟史は全般の歷史を理解する上にも極めて重要なものとなる。この重要性が誇張され、系統化された史觀が所謂唯物史觀である』と

著者野村氏は、かくして、自らの史觀を、ここまで導き來つて、氏の史觀と唯物史觀との關係の最も學問的興味ある點にまで說き來つた。所が、氏はそこまで來つて突然橫を向いて曰ふ。『然し唯物史觀についてはここでは省略する』。そして論を全く他に轉じてゐる。かゝる論法は他の所でも用ゐられてゐる。『社會制度の根本の變革は、[illegible]關係に於いて不合理に陷入りたりと認めた時に起るものと考へられる』から言ふ筆者の考は唯物史觀論者の如く思はれるが、さてそこまで來て又橫を向いて言ふ。『然しこれらの點の詳細はなほ他に讓る』！

私は、筆者が今少し學問的にその曖昧な心を棄てて大膽に堂々とその次を明言せられん事を希望する。これでは野村氏の史觀は尻切れトンボである。何故唯物史觀は、著者の言ふ樣に『素撲』であるのか、何故『誇張』であるのか、もし、唯物史觀が氏にとつて採る可らざるものとせば、何故、本書中、所々に唯物史觀らしき文句を用ゐるのであるか。この文の讀者には、野村氏が歷史觀を自ら卷頭にかゝげて、ここまで來て、論を橫にそらす態度を、學問的にまことに遺憾に思ふ。

以上氏の歷史觀について若干のべたが[illegible]規定せられた紙數がつきた。後の部分の詳細なる批判は、これを『他日』に讓ることと[illegible]

（價四圓五拾錢）

『明治大正詩史』

日夏耿之介著

富田　碎花

名は「明治大正詩史」であるけれども、その總序として著者は透徹せる眼光を放つて本邦に於る詩歌、中んづくその長[illegible]型に關して、洋の東西古今に出入し他の姉妹藝術にさへも關聯しつゝ、發生學的の檢討を試みてゐる。開卷幾許も無くして讀者は先づ著者の文明批評家としても優に一隻眼を有するを知るであらう、そして斯くすることは、假令、この三分の一世紀の間に突如としてこの邦の文學に新しき一分野の展開を示した「詩」を考察せんとする者にとつては當然の過程であらねばならないとは云へ、而してこの命題をめぐつて斯くの如き企を識したものは既に一冊にして止まらず、[illegible]著者に於いて

その第一人者たるの名譽を輕々しく許すことは憚られる事實であるが、前人の爲せるところ概ねそれぞれの一得一失を具へつゝ多くは詩壇の上から、若くは研究室乃至書齋裡の機械的勞働の累積に非ざれば、「早わかり」程度の一夜漬のブック・メイカの小遣錢拵ぎを想はすものであつて、往々にして典據その他の諸點に不安の念を挿まざるを得ぬもの比々然らざるは無い。從つて權威ある文學史として受取るに逡巡無くしては能ひ得ない。

「明治浪曼詩展開の顛末」と小題を添加されたこの「明治大正詩史」卷ノ上は、續刊せらるべき姉妹篇一卷と相俟つて全卷を成すものであるが、第一編「草創時代」は三章に分たれ、さらに各章を通じて二十二節に小區分せられる。この編に取扱はれた時期は概ね日清戰役前後までゞあつて、近世史として最も波瀾興趣に富める明治時代前期の大半を、純粹なる藝術としての史價は云ふまでも無く別問題として所謂「新體詩」時代を評論し盡してある、その間、福澤諭吉の「世界國づくし」[illegible]一般に受取られつゝある謬見を打破しつゝ、また一面には湯淺半月著「十二の石塚」の如き嘖々者流には殆んどその存在さへも知悉しない者の多かるべき渺たる一冊子を擧げて正當なる史價を與ふることを教へたる如き著者一家の創見想ふべきものが多い。

第二編「浪曼運動」は二章、二十四節から成る。この編は日本詩史に於ける最も[illegible]にして百華一時に競ひ咲く盛觀を呈した所謂藤村晩翠時代から泣菫有明時代、これに踵續する[illegible]に運動としての「明星」「文庫」「白百合」その他、最も問題多き時代が取扱はれてゐる。さらに特記すべきは詩に對する同情者、啓發者として恐らく何人からも無視されて來たであらう病弱夭世の哲人綱島梁川や小山鼎浦等に正しき位置を與へる一方、高山樗牛を目して純正なる詩眼を缺くこと黃口の一中學生にだも及ばず、尠くとも詩に關する限りに於ては單に一個の好ジヤアナリストたりと斷じ去れる如き、これ著者が作家としては[illegible]にして[illegible]一の[illegible]新り。世界にも稀に見る卓越秀拔なるゴテイク・ロオマン風の詩體の[illegible]を歐ひ得ると同時に好[illegible]の徒としても具眼者間の尊敬を一身に負ふ底の彼れにして始めて口にし得ることを許さるべき眞なる專家であつて決して大向を悦ばせる場當りでは無いことを首肯し得られる。

この一卷を通じて[illegible]

[illegible]う。(東京市牛込區矢來町 新潮社發行・定價三圓五十錢)

兼常清佐氏著

『音樂概論』を評す

遠藤　宏

本書を兼常氏からいたゞいた時、本の表題から推して、今度は學究的著述かしらと考へた、が「はしがき」を讀むと、――この本は研究でも理論でもなく、一種の漫筆であつて、理論正しく論じて行つたものではなく、そこはかとなく書きつらねたのであると。且つ「概論」の字は岩波書店でつけたのだとある。そこで本書の評を書かされる私は、此の興味深い音樂漫筆を讀了して勝手な批評と紹介とを書きつらねることにした。失禮な點は日頃のよしみを以てお許を願ひます。

學藝叢書は純學術的でなくともいゝらしいが、表題が音樂概論で內容が、漫筆であつてはなるまい。音樂概論とあれば、音樂通論[illegible]音樂入門[illegible]音樂研究を[illegible]ればならぬ。所が本書は少しも概論的でなく、興味中心に書いてある。併し私は讀者に注意したい。――兼常氏は漫筆を以て實は理論を說くのである。理論整然たる漫筆を以て、無趣味な理屈ぽい議論に代へてゐるのである。――實際ユーモアに富んだ、思ひつきのいゝ表現法を以て、手際よく音樂の本體を遠巻きにして論陣を張つて行く所などは如何にも老巧である。本書の內容を見るに、第一には聽衆の心理から出發して音樂を理解する種々なる場合を考へて行き、第二には批評家の仕事は如何なるものであるかと云ふ點から音樂を說明し、第三には想像の翼を以て天翔る作曲家が、如何なる樂曲を如何に生み出して行くかと云ふ創作意識の問題を考へてゐる。この三大項目が本書の骨組みである。要するに本書は鑑賞論と創作意識論から見た音樂美學だと私は思ふ。概論と云ふ表題は適切ではない。音樂美學論としても云ふ方が、また妥當のように思へる。

そこで私の理論整然たる漫筆を讀ま[illegible]とする。――本書の興味深さに引込まれ過ぎずに讀んで下さい。その表現の自由奔放さと、筆の綾、いともおかしさに幻惑されないで下さい。また時には詭辯らしい名文もあるから煙に巻かれないで下さいと。――本書を本當に理解するには、難解な幾多の音樂理論書や音樂美論の類をよく讀んでゐる人々でないと實は困難であると思ふ。讀んで非常に興味深い。併し著者の眞意は表面に平易にあらはれてはゐない。モーパッサンの小說は思想のかたまらない若い人々に讀ませたくないと思つてゐる私は、本書を讀む若い人々に出來るだけ注意して讀んでほしいと忠告する。兼常さんは自から無趣味な概論を書くには氣持だけ若過ぎると言はれる。けれども私共は兼常さんが本書の附錄につけたような純音樂理論的な記述だけの本を發表して、私共を正式に教育してくれることを望む。最後に[illegible]お願ひします[illegible]お早く老い込んで下さい。（東京[illegible]岩波書店。）

予は何故に國民新聞を去りたる乎

蘇峰　德富猪一郎

×　×　×

今夕は存掛なく、操觚界の諸先生、諸君及びそれに關係ある御方々が私を御招待下され、四十年の文筆生活の慰勞の宴を催され、殊に吾々が東京に於ける新聞界の長老として尊敬する一人、簗田君の鄭重なる御挨拶を忝し、更に帝國の經濟學界に於ける權威者の隨一たる福田博士より、種々教訓にあたる御言葉を賜き、何とも御禮の申上げ樣もありませぬ。

斯る御馳走を頂戴致しまして、此儘引下る事は甚だ不本意な事でありますから、一二所感を述べて御厚意に酬ひたいと存じます。決して長談議は致しませぬから、暫く御靜聽下さるれば私に於きまして誠に有難い事であります。

×　×　×

有體に申しますれば、私は決して御慰勞を受ける資格はないのでございます。期間は四十年で事實長いのでありますが、何等天下國家に貢献を致してをらないのであります。且つ申して見ますれ の苦戰の後に於て、凱旋將軍とも云ふべき位地であれば仕合 するが、私の昨今の情態は、凱旋どころではありませぬ。大 あります。若し私に取り柄があるならば、それは已に捕虜になつ が、命からぐ逃げて來たといふだけであります。斯る戰敗者に加 き盛會を開かれたのは、誠に望外の仕合せでござります。

×　×　×

嘗て私の親しき友人であつた故山路愛山君が私に向つて、「御身は全く困つた人である。我等が同情を表さうとして水を向けると、飛んでもない權幕で、何これしきの事！などゝ云ふから、折角出かゝつた同情もその儘に引込んでしまふ。御身が人氣の少いのは畢竟餘り痩我慢をするからだ」と申した事がありました。寔に尤もの忠告と存じましたが、これは持つて生れた性質で殊更に私が强がりを申すのではありませぬ。若い

姿を師走の廓に彼は見せるのである。而もそれから更にどん底に身をおとしても彼の性情は依然として昔のまゝである。末期に迫る夕霧の床にその子源之介と共に馳け寄つたとき、彼等の挨拶は、「太夫又逢ひに來たはいの、伊左衞門様わしや死ぬるわいのふ」である。この坂田藤十郎の舞臺を想見させるやうな一貫した鷹揚さ、
を持つたらし、。



か。魂の自由はもつと複雑な苦勞を經て、境遇による變化を
つ、始めて恢復若くは獲得されるのではないか、この問題に對す
の見方はもつと複雑にして深刻である。彼は魂が受身になつて
ら變へ
彼が最後に到達する境地も
波に洗はれるやう
の「置土産」
紅松の世界

草廬を訪はれた事もあつたのであります。

×　×　×

併し私は先程の福田先生のお話の通り、五反百姓でもよいから自分の田を耕さうと思ひましたので、これをお斷りしたのであります。而して明治二十三年の二月に國民新聞を作へたのであります。私の二十八歲の時であります。明治二十三年一月の今頃は最も私が國民新聞創立に心を勞してゐた時でありました。神ならぬ私が四十年の後、六十七歲の老人として、自分が千辛萬苦して作り上げた新聞をやめて皆樣から斯る御馳走を頂戴しようとは、如何に先見の明を誇つても、とても考へなかつた事であります。

偶然にも斯くして今日結構なる御馳走を頂くといふ事は、私にとりまして、嬉しくもあり、又た悲しくもあり、何とも云ふべき言に窮する次第であります。

×　×　×

まして、今日の如く寫眞[illegible]
氏の如き畫家は實に重寶無二の人でありました。

併し何と申しても先立つものは金でありました。然るに[illegible]友』の純益は、他人に借金せずに日吉町なる國民新聞社を購[illegible]千圓の餘裕がありました。併し家ばかりでは新聞は出來ませ[illegible]は固より秀英舍に依賴する事としても、一切の創業費にはそ[illegible]さへも小一萬の金は必要でございました。私は鄕里の友人[illegible]の金を申込みましたが、彼は確かな保證人さへあればとの事[illegible]ので、彼是相談の上、遂に新島先生を煩はす事と致しました。

此に新島先生の話を持出すのは聊か脫線の樣でありますが、[illegible]實に國民新聞の創立には、多大の同情者であり、且つ贊成者であ[illegible]した。

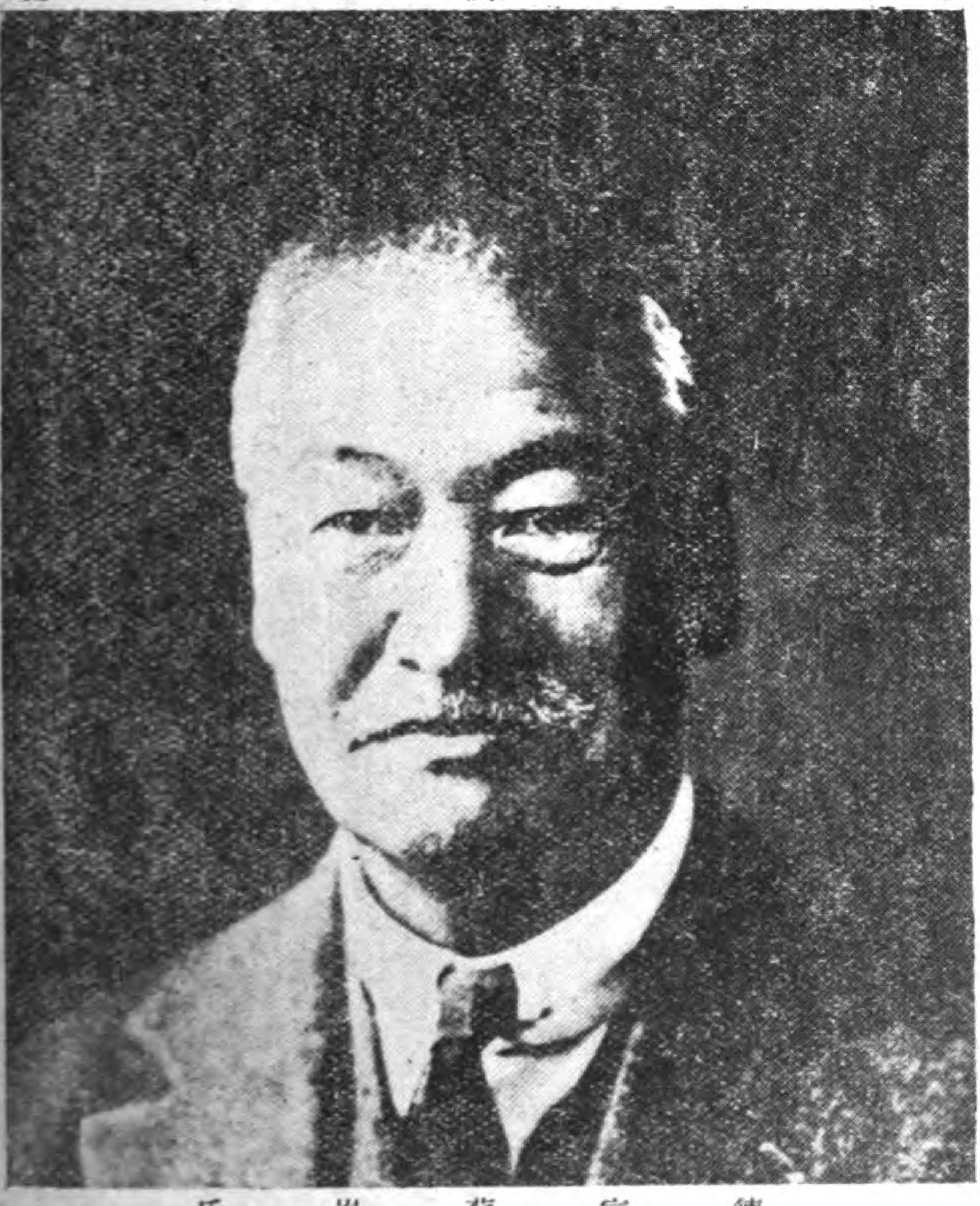
當時先生は大磯に病を養つて居られ、その病は旣に死に瀕して居[illegible]

時は私も若干反撥力もあり、勇氣とでも云ふべき種類のものもあつたのであります。その爲に御同情を得なくとも一人で歩けたでありませう。今日でも皆樣に向て、女々敷御同情を願ふのではありませぬが、さりとて實際今度は自分でも『なーにこれしきの事』とは申上げ兼ねるものがあります。

或方は『貴君が國民新聞を失うたのは、多分子供を失つたより苦しかつたらう』と申されました。私は澤山の子供を失つたわけではありませぬが、唯だ一人の子供を失つた、其事は實に苦しかつたのであります。子供を失つたよりもつと苦しいといふ言葉はどうかと思ひますが、申して見ればそれと同樣の苦しみであります。

× ×

正直に申せば、私は新聞の爲に生きて來た人間であり、新聞と共に生存して來たのであります。新聞記者を自分と思つてをりました。世の中には偶然新聞記者になつた方



徳富蘇峯氏

むを得ず新聞記者になつた方もありませう。當座の出來心で新聞記者になつた方もありませう。どんな事で新聞記者になつたとて、成功さへすればよいのでありますが、唯だ私は生れながらと申せば、少し口幅いが、少くとも一人前の心がついてからは、新聞記者にならうと思つて新聞記者になつたのであります。新聞を作らうと思つて新聞を作つたのであります。云はば、役者が中途より角力取となつたでもなく、坊主が還俗して醫者となつたのでもなく、生涯の第一歩から記者たらんと欲して、新聞記者となつたものであります。

子供が生れるには、御婦人は苦痛でありませうが、男子は何でもありませぬ。手短く申せば、子供は腹から割つたものとでも云ふべきでありませう。併しな

私が初めて『將來之日本』の原稿を抱いて東京に出て來ました時に、特に私を『僕の處に來ない乎』と招んで呉れた方もありました。例へば矢野文雄先生は『報知』に來ない乎と勸めて下さり、大阪の或る新聞は新島先生を介して來いと云ふ事であり、少し時間は後でありますが、大阪の或大きな新聞の社長は、自ら駕を枉げて、私の草廬を訪はれた事もあつたのであります。

× × ×

併し私は先程の藤田先生のお話の通り、五反百姓でもよいから自分の田を耕さうと思ひましたので、これをお斷りしたのであります。決心して明治二十三年の二月に國民新聞を作へたのであります。私の二十八歳の時であります。明治二十三年一月の今頃は最も私が國民新聞創立に心を勞してゐた時でありました。計らぬ私が四十年の後、六十七歳の老人として、自分が千辛萬苦して作り上げた新聞をやめて皆様から斯る御馳走を頂戴しようとは、如何に先見の明を誇つても、とても考へなかつた事であります。

偶然にも斯くして今日結構なる御馳走を頂くといふ事は、私にとりまして、嬉しくもあり、又た悲しくもあり、何とも云ふべき言に窮する次第であります。

× × ×

か、一度は自分の思ふやうな新聞を作つて見度いと熱心して居たのであります。それでその際には種々の準備を致しました。當時の國民之友記者故福田和五郎君を、京都日報創立の際に京都に派遣したのも、その目的の一つでありました。

扨人は揃ひました。殊に私は何よりも必要と思ふ久保田米僊氏を手に入れたのであります。米僊氏は當時に於るスケッチの大家でありまして、今日の如く寫眞版などが行はれて居ない時節に於きましては、氏の如き畫家は實に必要無二の人でありました。

併し何と申しても先立つものは金でありました。然るに『國民之友』の純益は、他人に借金せずに日吉町なる國民新聞社を購ふべく五千圓の餘裕がありました。併し家ばかりでは新聞は出來ません。印刷は固より秀英舍に依頼する事としても、一切の創業費にはその時節でさへも小一萬の金は必要でございました。私は鄕里の友人に五千圓の金を申込みましたが、彼は確かな保證人さへあればとの事であつたので、彼是相談の上、遂に新島先生を煩はす事と致しました。

此に新島先生の話を持出すのは聊か脫線の樣でありますが、先生は實に國民新聞の創立には、多大の同情者であり、且つ賛成者でありました。

當時先生は大磯に病を養つて居られ、その病は既に死に瀕して居た

のであります。私は一月二十日、即ち足掛四十年前の今月昨日、國民新聞の創立に就いて、社友その他の知己諸君を芝公園の三緣亭に披露の爲に招待致しておきました。私は最早三緣亭に赴く時間も迫つたからとて、フロックコートを着込み、從前の東京朝日新聞社の裏なる瀧山町の床屋に赴き顏を剃つて居りました。その時慌しく一通の電報が私の手許に屆けられました。それは實に新島先生危篤といふ事であります。そこで私は顏を剃るか剃らぬに、お客樣も何もかもその儘にして、――お客樣の方は湯淺治郎君に賴み、――大磯に驅けつけました。それから一月二十三日午後二時幾分、先生が瞑目される迄、フロックコートを着たまゝ、殆んど不眠不休の體にて病床に侍して居りました。

扨先生の遺骸は京都に、私の生ける體は東京に、各々に別れたのであります。

それから愈々國民新聞の發行に取掛りましたが、五千圓の金がその儘金庫に殘つてをりましたから私は取敢へず電報で故郷の友人に、

『保證人たる新島先生は逝れた。この上貴君が安心出來ぬとあれば、現金は手許にあるから、その儘返却する』

と申し遣しましたら、向ふから

『[illegible]上は何等の關係にもないから、[illegible]』

號を發行する事となつたのであります。

金錢の不自由は私に於きまして今に初まつた事ではありません。國民新聞創立の時から金錢には常に不自由でありました。以上の話をお聽きになりましても、私が如何に徒手空拳、奮鬪努力した乎といふ事の一斑は御想像つきませう。

× × ×

古い話はくだくだしく申上げませぬが、四十年と申せば長い事でありますから、一言三言經歷に就いて申上げて見ます。これは面白いと云ふ乎。可笑しいと云ふ乎。皆樣の御一興になる一二を申して見度いと思ひます。

私は新聞を漠然と作つたのではありません。主張、主義を持つて立つといふのが私の本來の目的であります。明治二十三年帝國議會開設から二十七八年戰役迄、私は傍目も振らずに藩閥政府と戰つたのであります。私の政治に對する考は、政權は國民に公平に分つべきである。それに藩閥が獨占するのは間違であると云ふ事でありました。先づ藩閥政府の專横を矯め直すといふのが國民新聞の一本槍であり、その爲に自由黨と喧嘩したのであります。何故自由黨と喧嘩した乎と云へば、自由黨はその中頃よりして藩閥政府と妥協したのであります。私は[illegible]の第一歩に、先づ藩閥政府を倒すにありと信[illegible]

[illegible]

[illegible]

といふ[illegible]になつた[illegible]

[illegible]

と云ふ[illegible]のであります。その後幾許もなく、[illegible]

[illegible]長老の一人である[illegible]

[illegible]

く生きると種々の變遷を見るものであります。

× × ×

斯くて明治二十七、八年役に至り、擧國一致で外敵に當り、私も可成り働いたのであります。今夜は委しく申しませぬが、更に彼國民新聞は明治二十七、八年迄は薩長藩閥政府を倒す爲に働いたのであります。それ以後はロシヤと戰をする事に力を盡したのであります。私は同胞が血を流して取つた遼東を露國から横取りされたのは、實に國辱の極と思つたのであります。

× × ×

ロシヤと戰ふ乎、薩長と戰ふ乎といふ事になれば、薩長は日本人であります。我々は第一ロシヤと戰はねばならぬ。我より戰はざるも、ロシヤは必ず向ふから仕掛けて來るに違ひない。その爲には軍備擴張が必要であると信じてそれに力を盡したのであります。

昨日まで薩長藩閥と戰つてゐたのを今やロシヤと戰ふ事に力を盡し、その爲に、軍備擴張を唱へたから、私の意志をよく了解せぬ人は、私を變節漢と申しました。併し事實その節は言扁の說であつて、オピニオンを代へたたけであり、節操を代へたのではありませぬ。

變說は決して惡い事ではありませぬ。世が進めば意見も進むのであつて、段々變つて行きます。[illegible]

又た寒暑に從つて衣服を變へるのは當り前であります。もし寒暑に從つて着物を變へるのが變節ならば、冬になつて外套を着るのも變節であり、夏の日に薄い着物を着るのも變節であります。私は變說を決して恥とせぬのであります。横井先生は達人能明了、渾順天地勢と申しました。私の變說は、全く其の通りであります。

明治二十七八年の役後私はロンドンで死ぬ様な病氣をしたのであります。そしてその病氣が癒る時分に、頻りに『日本へ還れ』といふ電報が來たのであります。その時も私は考へました。當時は松方內閣でありました。松方內閣が出來るのには、私も微力を添へたのでありますが、しかもこの松方內閣は月足らずの兒でありました。準備が出來ぬ前に調子が違つて月足らずで生れたのであります。七ケ月でもない六ケ月位の內閣であつて、大きくなる筈はないのであります。私ももすこしロンドンにブラブラしてゐればそれで此の內閣も片付くから、それから歸れば何の苦勞もなくてすむが、松方內閣の成立には隨分餘計なお節介もしてをります。今度は內閣と共に打死する積りで歸らうと決心して日本に歸つたのであります。

× × ×

話は横にそれますが私は遼東を還附したる伊藤內閣が憎くてたまらなかつたのであります。伊藤內閣は恰もロシヤの[illegible]のやうに[illegible]かつたので[illegible]

[illegible]になつて來ると高平公使が、

『遠東還附が惡いと云つて、伊藤さんを惡く云ふのは間違ひですね』

と云はれたのであります。それ迄は美味しく喰べてゐた私も、これを聞いて神經にこたへたのであります。それで、

『いやそれは違ひます』と云ふ、

『否、違はん』と云ふ事で、段々話が先に進んで來たので、公使は致方なくブランデーを飲む、私は酒はいけぬが、伊藤さんを賞める人に對しては、酒を一升も飲んだ位上氣して、まあ大變な喧嘩になつて來たのであります。その席には公使館附武官小原といふ川上操六君のお婿さんもをりましたが、二人の言ひ合ひを見て何とも挨拶の仕樣がなくなつて、小さくなつて居るといふ仕末でありました。餘り聲が大きくなるので、高平公使の夫人は心配の餘、隣室まで來られて樣子を見てをられたらしかつた。午前三時迄論じ合つて、仕方がないから私はそれから引き上げ宿に退りました。處が翌日公使から手紙が來て、

『是迄貴君は口先ばかりの一文士と思つてゐたが、なか／＼氣骨があつて敬服した云云』と云ふ事で、翌日は仲直りをしたのでありますが、これは私が高平さんの外交手段に乘つたのであつて、私も若かつたのであります。

兎に角、伊藤内閣を潰すのには當時の大藏大臣たる松方さんをひか[illegible]斯云ふ建白はどう乎といつて、松方さんに建白の種子を提供したのであつて、それを松方さんがどれ丈採用した乎は兎も角、さういふ關係であります。他日伊藤さんと仲が良くなつた時に伊藤さんが、

『徳富君、君も隨分ヒドイ事をしたね』

と云はれたので、

『どうしてです乎』

と云うたらば、伊藤さんは

『松方の建白は僕は君だと云ふ事に考へついた。何故かと云へば、一何を以てか輿論の法廷に訴へんや』なんていふ文句がある。輿論の法廷などゝいふ熟字を使ふのは君より外にないと思つて、それからはもうこんな建白は聞くものかと思つたのだ』

と云はれました。私もこれを聞いて、伊藤さんは成程聰明な方であると思つたのであります。

こんなわけで、私も知らない振りしてロンドン邊りをうろついてをられなかつたので、只今日本銀行の副總裁をしてゐる深井英五君が當時同行者であつたので、病後の身をその肩に手をのせて、深井君に助けられて日本に歸つたやうなわけであります。そして私は生れて初めて役人になつたのでありますが、世間の評判は大變に惡かつたのであります。而して私が役人となつた時の惡評判よりも、進歩黨と分離の後、依然松方内閣に踏み止つた時位評判の惡い事はなかつたの

のであります。私は一月二十日、即ち足掛四十年前の今月昨日、國民新聞の創立に就いて、社友その他の知己諸君を芝公園の三縁亭に披露の爲に招待致しておきました。私は最早三縁亭に赴く時間も迫つたからとて、フロックコートを着込み、從前の東京朝日新聞社の裏なる瀧山町の床屋に赴き顔を剃つて居りました。その時慌しく一通の電報が私の手許に屆けられました。それは實に新島先生危篤といふ事でありました。そこで私は顔を剃るか剃らぬに、お客樣も何もかもその儘にして、——お客樣の方は湯淺治郎君に頼み、——大磯に駈けつけました。それから一月二十三日午後二時幾分、先生が瞑目される迄、フロックコートを着たまゝ、殆んど不眠不休の體にて病床に侍して居りました。

扨先生の遺骸は京都に、私の生ける體は東京に、各々に別れ[illegible]であります。

それから愈々國民[illegible]

號を發行する事となつたのであります。

金錢の不自由は私に於きまして今に初つた事ではありませぬ[illegible]民新聞創立の時から金錢には常に不自由でありました。以上の話をお聽きになりましても、私が如何に徒手空拳、奮闘努力した乎といふ事の一斑は御想像つきませう。

× × ×

古い話はくだくだしく申上げませぬが、四十年と申せば長い事でありますから、二言三言經歴に就いて申上げて見ます。これは面白いと云ふ乎。可笑しいと云ふ乎。皆樣の御一興になる一二を申して見度いと思ひます。

私[illegible]、主義を持つて[illegible]帝國議會[illegible]

『貴下は實に困つた人である。折角此までやればまた元に戻してしまふ。貴下はまるで磧の河原の石積同樣である。漸く千辛萬苦して積み上ぐれば、また元の木阿彌だ。これではとてもやりきれぬ』と云ふのでありました。此れも成程と思ふが、私は決して新聞の營業者ではなく、新聞を以て國家に貢獻せんとした者でありますから、何と云はれても致方なかつたのであります。

× × ×

その厄難も彼是切り拔け、世の中も段々變つた後、明治天皇崩御と

燒打だけはどうしても分らないのであります。何故燒打に
らぬのか。私にも一向わからず、これこそは[illegible]を喰つ
のであります。この燒打には私も不服でありました。
は何處にも持つて行き處もなく、その時には此席に居ら
河上君も一緒にその苦痛を嘗めたのであります。

× × ×

餘り長くなりますから、たいていの處で打切りますが、第
厄難も彼是すんだ。其後大正八年に私は殆んど死ぬやうな

であります。親類からさへひどく云はれたのであります。當時私を人間らしく取り扱うて呉れたのは、老人としては勝海舟先生と私の父位でありました。

　私も松方内閣の直く潰れるのを知りながら自分の造つたものを見捨てられぬと思つたから歸つて來たのであります。大隈さんとの喧嘩のときは、松方さんの方がよいと思つたのであります。松方さんは初から軍備充實の爲には増税の外に案は無いと云はれたのであります。此席には軍備擴張などといふ事をお嫌ひの方がありませうが、これは今日の話ではなく、日露戰爭前の事であります。日淸戰爭の後には、これより外に道はなかつたのであります。

× × ×

かうして案の如く松方内閣は潰れたのであります。それは致方がないが、内閣の諸公が皆などんどん逃げてしまつたのであります。總理大臣は御影に逃げる、内務大臣は大磯あたりに逃げるといふの仕末であつて、殘されたものは私一人であつたのであります。その時私に殘つたのは、[illegible]と、非難と福田博士の申された借金と、この三つが殘つたのであります。大[illegible]に逢つて社も破産し、私も破産したのであります。それで私も百計茲に窮して、或る有力なる實業家に[illegible]か、[illegible]

と申しました。その人は賢い人で話を聞いて非常に感心はしたが、實行はしなかつたのであります。そしてその人が云はれるには、

『御説御尤。それは貴君の立場からはよい。併し私の立場を考へて貰ひ度い。二人の議論が一致してゐる間は便利であるが、萬一議論が違ふと、半分ではあつても私が金を出してゐるに、貴君は筆が立つから何んでも貴君の思ふ通りに書くだらう、私は筆が立たないから貴君の勝手にされる。今は都合がいゝが惡くなつた時の事も考へねばならない』

と云ふことでありました。併し此話は全く不成功ではなかつたのであります。その人の會社が私の社の債權者であつたので機械の代價も拂はなかつたのでありますが、それからは番頭や手代も借金の催促に來なくなり、やがてそれをまけてくれたのであります。又た瓦斯エンヂンは帳消しにしてくれたのであります。併しその時は實に困つたのであります

× × ×

日露戰爭以後は——ロシヤと再び戰ふ目的もなく、支那と戰ふ事は猶更ないのであります。

それから以後に武力によつて獲得した位置を、日本の文化の力で維持し、これを更に擴張して行かねばならぬと考へたのであります。既ち[illegible]を辭て、新聞の經營者となつて、[illegible]

も今や世界政策樹立の爲に、桂内閣が政友會と妥協政策に賛成した。反對には反對の理由がある、賛成には賛成の理由があります。

此で一言申しますが、明治三十七八年役後國民新聞は燒打に逢つたのであります。その時燒打をなすつた方が此にも一人や二人は居られる筈であります。これは昔の事であつて、今は怨恨二ッ作らないから御白狀になつてもよろしからうと思ひます。これも追々考へると、即ち私共が遼東還附に反對した當時の意氣込みから考へると、燒打は當り前で私共は八ッ裂にされても致方がなく、伊藤さんに對する罪滅しと思つて、たいして苦に思はなかつたのであります。

個人としてはたいして苦に思はなかつたが、新聞は又たひどい不成績で、販賣部長などはまるで色を青くして、

「貴下は實に困つた人である。折角此までやればまた元に戻してしまふ。貴下はまるで磧の河原の石積同樣である。漸く千辛萬苦して積み上ぐれば、また元の本阿彌だ。これではとてもやりきれぬ」

と云ふのでありました。此れも成程と思ふが、私は決して新聞の營業者ではなく、新聞を以て國家に貢獻せんとした者でありますから、何と云はれても致方なかつたのであります。

× × ×

その厄難も彼是切り拔け、世の中も段々變つた後、明治天皇崩御とありますが、段々政黨に勢が出て來ると内閣を脅迫したり威嚇したりするので、とてもこれではやりきれぬ。辻車に乘るよりも、金がかかつても自分で車を造へた方がよいと思ひ、これはとてもいかん。一回ならず二回までも桂内閣で、政黨の爲めにひどい目に逢つてゐるから、この上は自分で政黨を作る方が宜しい、のみならず吾々が作れば若干結構なものが出來ようなど〻云ふ事で、あの時の趣意書の原文のい〻部分は私が書いたものであります。それを種々な人が集つて段々悪くしたのであります。此でも詩でも一人で作らなければ、い〻ものが出來ないのであります。私の書いたのがい〻と云ふのではなく、一人で書いたからよかつたのであります。

此時も燒打に逢つたのでありますが、この大正二年二月十日の第二燒打だけはどうしても分らないのであります。何故燒打に逢はねばならぬのか。私にも一向わからず、これこそは傍杖を喰つたと思つたのであります。この燒打には私も不服でありました。併しこの不服は何處にも持つて行き處もなく、その時には此席に居られる[illegible]君や河上君も一緒にその對聯を書めたのであります。

× × ×

餘り長くなりますから、たいていの處で打切りますが、第二燒打の厄難も彼是すんだ。其後大正六年に私は殆んど死ぬやうな病氣をし

たのであります。國民新聞も危いと考へられたのでありました。私がこの病氣の後、湯ヶ原で靜養してをりました時に、中野正剛君が病氣見舞旁々、

『先生國民新聞を賣つて下さらないか』

と、新聞を買ひに來られたのであります。又た今はもう幽明を隔てましたが、柳原燁子夫人の良人のお父さんである宮崎寅藏君が、

『先生、もうたいがいの處であれを手放しては如何です乎』

と申し來り、當時は國民新聞の買手が大分集つて來たのであります。

私も、

『何程で買ひますか』など揶揄し、中野君や宮崎君には御馳走をして歸したのでありますが、新聞を賣る事だけは見合したのであります。兎も角も大正二年第二燒打以來、新聞は儲かりはしなかつたが、自給自足で國民新聞はやつて行けたのでありまして、震災さへなければ何でもなかつたのであります。當時國民新聞の紙數は少い時で二十萬、多い時が二十五萬、廣告料が少い時で十萬圓、多い時は十五萬圓でありました。これは決して掛値ではなく、正直正味の事を申してゐるのであります。

現に先日も逗子に行つて、古い書付けたのを見てゐると、その中に當時の營業局長尾崎君が大正十二年八月廿一日附にて八月の廣告料を報告した手紙があり、それによれば十萬七千何百圓、此外十一萬圓に

これ丈あつたのでありますから、たいして困らなかつたのであります。これからが地震であつて、この先は實に苦しかつたのであります。

×　　×　　×

地震ですべてを失つて萬事休した時に、此席に居られる石川武美君が――當時は一面識もなく、一回の音信も取交した事もなかつたのでありますが――私の友人綱島君を介して、一肩ぬがうと云つて來られたのであります。斯うして復興の業は出來、これからは攻勢的防禦で行かうといふのが私共の考へでありました。國民新聞のこの窮境を救ふには、積極的にやつて行くより外はないと思つたのであります。私は算盤は知りませぬが、自分の運命を信じたのであります。これで國民新聞も盛んになると思つたのであります。

私も將來は田園都市を造つて、社中諸君を住まはせ度いと思ひ、小金井に五萬坪ばかりの地面を買つてそこには私の好きな公孫樹を街路樹として植ゑておいたのであります。そして私が七十歳位の時には國民市邑が實現されるであらうと樂しみに致して居つたのであります。それが大正十二年の地震で、致方なく國民新聞はその復興の爲にこの土地を最初に喰つたのであります。亡父淇水翁の手植したる澁谷の櫻ヶ岡も喰つたのであります。それからまた國民新聞に色んなものを喰つたのでありますが、積極的に切り出すにはそれでも足りなくて、この時は[illegible]にするよりは[illegible]、私に御讓りの

の出資者であつたのでありましたが、扨網を上げて釣上げた魚を見てこの魚はどうだらう。飛んでもない魚を釣上げたものだと、これには私も大分考へたのでありました。併し何とも致方なかつたのであります。これから先を詳しく申しますと、人の悪い事を云はねばなりませぬ。

『君子は交り絶てども悪聲を出さず』

であります。

爾来私も随分我慢をしてやつて來たのであります。これは私の運であつて、丁度私は間違つた結婚をしたと諦めたのであります。外に大きい聲をあげると、自分の恥を表はす事になるので、自分は『ノー』と云ふ言葉を封じて三猿主義を守つたのでありました。何事も好々で所謂る好々先生、笑々翁となつたのであります。社長の名はあつても、大正十五年四月中頃以前と、それ以後の社長とは、字は同じでも意味はまるで違つたものでありました。大正十五年四月以後は大政返上後の徳川慶喜將軍よりも私は無勢力であつたのであります。

私は何も爭はなかつたのであります。何故私が現在の出資者を選んだ乎。それは決して選んだのではなく、先方から來たのであります。而して彼が積極的にやるといふ事に私は共鳴したのであります。自分は裸になつてもいゝ。持物を無にしてもよろしい。但だ外に向つて萬事積極的にやつて具れゝばそれでよいと考へたのであります。

積極的でやつたのであります。先づすべての都の首を[illegible]る事から始め、老功者に代ふるに無經驗者を以てし、無暗矢鱈に社員の首を斬つたのであります。

私も申上げたい事は澤山ありますが、云へば人の悪口を云はねばなりません。たゞこの詩がよくその心を表してゐるから、詩を申します。

『昨日一縣を割き、今日一城を割き。對て壯士の膽に挑れば蕭々として易水鳴る』

全くこの通りであります。私は友を失ひ、自分の手足を失ひ、手を切り、足を切り、持てるものをすべて割かれてしまつたのであります。この次は割いて壯士の膽に挑れば蕭々として易水鳴るであります。臆病の私は蕭々として易水鳴るではなく、この上は自分が去る乎、出資者に出て貰ふ乎であります。併し前申上げた様な二つの厄の最後の事で自分が去るより外に道がなかつたのであります。

×　×　×

これに就いても申上げようとすればいくらもありますが、併し要するにどうしてもこれを忍んでゐるに於ては、自分は新聞記者としての立場を失はねばならぬから私は斷然去つたのであります。而して私は既に左の通りの聲明書を昭和四年一月十七日の國民新聞に掲げたのであります。

『國民新聞愛讀者諸君各位

不肖は國民新聞社長及記者を辭退したることを、諸君に向つて告白せざる可らざるを悲しむ。國民新聞は、明治二十三年二月不肖創立し、爾來約四十年。諸君の御同情と友愛とによりて今日に到つた。不肖の一生、不肖の生命、殆んど此中に存す。

然るに不肖自から去らねばならぬ所以は、何故である乎。不肖は進んで即今具體的に之を陳述するを、屑しとしない。但だ不肖をして斯く決心せしめたる、重なる理由の一は、筆政の不自由と不安心の爲めである。別言すれば新聞道の爲めに、言論自由を擁護せんが爲めである。

公人としての不肖は、唯た國民新聞あるが爲めであつた。既に國民新聞を失ふ、不肖の公人としての存在は、殆ど其の意義を沒却する。而して之をしも忍ばざる可らざる事情は、唯だ偏に各位の諒察を仰ぐのみ。

然も是皆な不肖の微力と、不明と、不徳の致す所、偏に慚愧の極である。

茲に謹しく玆に多年不肖を作興せられたる、國民新聞愛讀者諸君各位に謝し、諸君の諒解を希ふ。

昭和四年一月五日

德富猪一郎

然るに江湖の諸君には、これでは一切不得要領である。今少しく具體的に話を聽き度いといふ事でありますが、これ程困つた事は無いのであります。私が斯く意味を縮めて書くには、正直のところ隨分骨を折たのであります。

若し私をして遠慮なく云はしむれば、申すべき事は山程もあります。その爲に一巻の書物が書けます。現に私はその若干を手許に書留めて置いた程であります。

併し今日此の事を具體的に申すのは、寔に私にとりましては迷惑でございます。何故なればそれは惡趣味であつて、所謂る自ら泥合戰の中に飛込むのと同樣であるからであります。

但た惡趣味に陷らぬ限り、具體的とは申しませぬが、一二私の感想を申上げませう。

× × ×

前に申した通り、私は自ら好んで彼の出資者を求めたのではありませぬ。私は國民新聞社を株式組織にする時に、社の基礎を堅實ならしむる所以と考へて、唯だ相手を同脚に求めたのであります。その中に私と國民中心主義に於て一致する、或る[illegible]の功勞者である[illegible]、私に同情と云はん乎、私の[illegible]に同情と云はん乎、一[illegible]ならず骨折りて、遂に現在の出資者と提携する事になつたのであります。[illegible]

併し私は『人性元善』『衣食足つて禮節を知る』『年老れば佛心が出來る』と云ふ見地から、その者の云ふ事を信じたのであります。私が不明の罪を殊更に謝つたのは、即ちこの點であります。

× × ×

彼は私の晩節を全からしめんが爲に、一肩入れると申しました。彼は大いに積極的に國民新聞の勢力を擴張すると申しました。私は此の二つの爲に蘇峰を犠牲としたのであります。

國民新聞の價値を、金錢にて定めるのは面白くありませぬが、併しながら兎も角、二十萬以上の紙數を出し、帝都に於ける五大新聞の位置を保つてゐる國民新聞か、平時に於ては、その評價として、如何に廉く見積るも、三百萬圓以下ではあるまいと信じます。

若し新らたに是程迄に國民新聞を築き立てんとするならば、五百萬圓の金でも到底むづかしからうと思ひます。或は一千萬圓位は入用と存じます。

併し地震の當初石川君との提携の時に、その評價を百五十萬圓と定めたのでありますから、これが當然と思つたのでありますが、相手はなかなか承知せず、百萬圓、九十萬圓、八十萬圓、愈々調印と云ふ曉には、更に七十萬圓となつたのであります。縁日の植木屋でも、是程まではまけぬのでありませう。

私は此時に既に厭氣が十二分にさしたのでありますが、評價にての爲に新聞を起したのではありませぬ。欲得の爲に新聞を經營したのでもありませぬから、若し自分の主義、主張を容れ、自分をして、これに依つて今後、國家への御奉公を全からしむる事を期せしむる人でさへあれば、全部呉れてやつても惜しくないと云ふ決心の下に、愈々調印に漕ぎ付けたのであります。

されば國民新聞社の社則第一條に、

『株式會社國民新聞は、皇室を中心とする平民主義に依りて立ち、何れの政黨政派にも屬する事無し』

と特筆してあります。

然るに其後の形勢は如何でありませうか。それは前にも申上げた通りであります。

經營の上から申しますれば、唯だ消極一方であり、功勞あり、經驗あり、社務に堪能なる人間を片端から首を切り、切つたまゝなら夫れ迄の事、經驗なき、熟練なき素人を之れに代へたばかりでありまし[illegible]しかも編輯局の經費などは、大正十五年四月株式會社となつた當初と、私が退去した昭和四年一月とは、約一萬圓の減額となつて居ります。經費さへ節約すれば、收入は增すものと心得、節約する經費[illegible]減すれば收入は低減する、節約する、收入は減る、又た節約、收入減。又た節約。節約すれば收入が低減する。

此の如くにして社の經營は隆盛する所ではありません[illegible]

を削るが如く、唯だ細くなつて行くばかりであります。

廣告などは部長が役に立たぬとて、短き期間に二人も三人も取換へてをります。部長の變る毎に廣告は減る一方であります。然らざればその單價が減少する一方であります。而して又たその結果は馘首となります。馘られるものは概して經驗ある者であります。

これは唯だ事務の上に就ての事でありますが、編輯の上には云ふべき事が澤山あります。併しそれ等の事は兎も角、私も株式會社となつた以後は、全く三猿主義を守り、せめて私一個の仕事なりと完全になして以て晩節を了せんと致しました。

然るに出資者は恰も國民新聞を自個の私有物でもあるかの如く、事務局は勿論、編輯局に向つて甚大の干渉を加へたのであります。その干渉の詳細を申せば、餘りに個人的になりますから申しませぬが。兎に角國民新聞の紙面を利用して己れの好まざる者を攻撃せしめ、己れの利益とする所を鼓吹せしめ、恰も國民新聞を金儲けの道具か、己れの私意私情を逞ましくする機關と心得てゐるかの如く見えたのであります。のみならず少しく己れの意に叶はざる記事があれば、その記事を書いた社員を忽ち馘首るとか、左遷するとか、凡有る手段をとつたのであります。

而して遂には私の記事にさへも彼是容喙し、長いと云つて打切り、面白くないと云つて中止せしめ、或は私に向つて記事に就いて彼是注文がましき事を云へ、誠に[illegible]ります。

私は何の爲に二度の燒打ちに逢ひたでありませう乎。何の爲に星亨と爭つて、自由黨の壓迫に逢つたでありませう乎。何の爲に桂内閣の時に非難のドン底に陷つたでありませう乎。

諸君は私の見識が間違つてゐたのだと或は思はれるかも知れませぬ。併しながら私は自己の信念の爲に、利害得喪を度外視して邁進み來つたのであります。

然るに晩年に至つて一人の金持の爲に、私の自由なる筆が拘束せられ、左右せらるゝに至つては、最早新聞記者としての私の存在はなくなつたのであります。これをしも忍ぶべくんば、何れを忍ぶべからざらんと云ふはこれの事であります。此に至つたのは畢竟私の不徳の致す所であつて、これが固も不敏の註釋であります。

× × ×

しかも此際私は考へました。若し相手が金持であるから、私も金を持つてこれに抵抗すれば、或は抵抗し得らるゝ事もあらうと。併し私には二百萬以上の金は愚か、二十萬圓の金さへ出來ませぬ。さりとて他からこれを調達すれば、前門の狼を防ぎ、後門の虎を進むるのであつて、一の資本家にいじめつけられて、又た他の資本家にいじめられぬとも限りませぬ。

世の中には斯る無理解なる資本家のみではあるまいと思ひまするが、私はこれ程迄心配をなして、強いて一時に資金を調達する事を[illegible]

のない事が、即ち微力の微力たる所以であります。

× × ×

諸君は私があまりに腑甲斐ないと申されるでありませうが、何と云はれても致方はないのであります。吾々を普通の株主となし、自らは優先株主となり、しかもその株金の一部分のみを拂込み、その餘は拂込むべき株金を貸金の名にて社に貸付け、社よりその利をとるやうな人とは、到底競爭出來ぬのであります。

× × ×

世間で『德富は一切經濟が解らず、株式會社になつてからは、德富は他人の金と思ひ、勝手次第に金錢を浪費し、徐りに損を出資者にかけたから、出資者も德富に向つて嫌氣かさしたなどゝ云ふ人もあるさうでありますが、凡て間違と云へばそれ程大なる間違はありますまい。

私は元來個人としても、公人としても、私會計に於ても、公會計に於ても、節儉者ではあるが、浪費者ではありませぬ。殊に株式會社となつて以來は、私は本社の會計には一切手を觸れた事がありませぬ。本社の社規に依れば第二條に、

『社長は取締役の會長となり、會社の經營を管理し、副社長は會社を代表し、統轄、經營の任に當るものとす。』

と、特記されてある通り、自分は唯だ管理と云ふ名義の上にある社長であります。私には一切の實權は有りませぬ。

されば如何にその損が莫大であればとて、それは出資者自らがなしたる損であつて、私の干知した所ではないのであります。取締役の多數は固より出資者側でありますから、その多數によつて決めたる所を副社長が行ひ、その行つたる所によつて、私はそれを管理と申しますれば立派な名目でありますが、事實は出資者等の爲すまゝに一任するの外はないのであります。

成程損失もあつたでありませうが、それは全く經營の根本的方針を誤つたからであつて、それを誤つたのは、畢竟私共が當初に云つた事を聽入れず、これを無視したからであります。今更彼等には損失などと云ふ事を云ふべき理由もなければ云ふべき面皮もありませぬ。

しかもその損失は經營の大方針を誤つたばかりではありませぬ。前にも申した通り一方に於ては拂込むべき株金を拂込まず、それを貸金となし、その上に利息をとるが如き、極めて不條理、且つ不自然なる經濟情態を作り成したが爲であります。今更ら吾等に向つて斯る事を云へたものではありませぬ。

損得から申せば、此方は四十年の努力も苦心も赤裸々にして渡したものであり、向ふは國民新聞の動産、不動産、その聲價、看板までも得たるわけでありまして、とても問題にはなりませぬ。

浪費云々と申しますが、前にも申しました様に昭和四年一月の編輯

局費は、大正十五年の四月の編輯局費に比すれば一萬圓內外の減額であります。即ち私が持主であつた時よりも、株式會社となつてからは、編輯局の費用が漸次に減じて、遂には前に比べて一個月一萬圓程度も減ずるに至つたのであります。これで浪費と云ふ事が云ひ得るでありませう乎。詳しい事を申せば限りもありませぬ。併し數字は立派な證人であります。何れかの機會には、數字がよく物を云ふであらうと思ひます。私は今此に呶々喋々の辯を費すのではありませぬが、餘りに世間の或る人々が眞相を曲解致しますから一寸一言申しておくのであります。

猶一言申しますが、出資者は二百幾十萬の金を出したと申しますが、その金は果して空に出したのでありませう乎。國民新聞社には、五百坪の地面が伴つてをります。一切の機械及び家屋があります。これ丈を精算しても決して少きものではありませぬ。況んや二十萬の紙數を持つてゐる國民新聞の聲價に至つては、それを賣つても彼は寧ろ得こそして居れ、損をしてゐる筈はないのであります。

又た月々の缺損が幾程、年々の缺損が幾程と申しますが、缺損と云ひつゝそれにあげた利息は、彼自ら懐に入れてをります。その缺損はしかも自ら經營して自ら缺損してゐるのであつて、經營に關しては私共は一切與り知る所ではないのであります。それを殊更私共の責任でもあるかの如く云ひ懸け、然も無代價に一錢を國民新聞に提供したが如く云ひふらすに至つては、開いた口が塞がらないと申す外何も、これ以上の事ではないかも知れませぬ。

× × ×

今國民新聞社を去る事は私にとつて不利益である事はよく知つてをります。私は四十年の働きの結果として、國民新聞に於て五十萬圓の株主であります。私が去ればこの五十萬圓は反古になりますし、これを捨てる覺悟がなければ去られぬ事も知つてをります。

併し假りにも新聞記者の立場を汚されるに於ては忍ぶ事が出來ぬのであります。私は役人になつた時も新聞記者でありました。其所が日吉町から坂下門に移つた丈であつて、新聞記者である事に變りはなかつたのであります。私は如何なる場合に於ても新聞記者の立場は守り、自分の天職、自分の職分の爲には何處までも筆を揮はねばならぬと信じてをります。桂公は喧嘩をしない本領の人でありますが、桂公以外內閣の人とは私も大分喧嘩を致しました。伊藤公とも、仲直りした以來、大分新聞事件には交渉がありました。伊藤公から號外の事で受取つた手紙が此にありますから今これを讀みます。

「貴書敬讀、國民新聞號外云々。小子ハ在病蓐一切承知不仕候。又號外發布之遲速ハ如貴說其勢情之所致、更ニ不足怪候。國民新聞之小子ニ於ル、對候好意ノ所在ハ、昨年來老兄より直接ニ御懇話承及候故、於小子ハ一點之疑心モ不挾候間、乍病中御來臨被下候得ハ、萬事御相談可申、如御承知過日來之紛擾ニ加ヘテ病ニ臥ト相成、[illegible]、[illegible]ニ更ニ之

事ヲ致シ爭行ニ候迄ニ候。書外ハ譲ニ拜光ニ早々頓首。

十月念一(明治三十三年)　　　博　文

德富大兄

これは伊藤公が政友内閣の組織の時に國民新聞が少し早く號外を出したのであります。その種は野田卯太郎君が漏したのであります。野田君が「子爵の家へ行つたら子爵が着物を着更へてゐるので、

「貴君は何大臣になるのですか」

と聞いたら

「何になるかまだわからないが、來いと云ふ事だから行く」

と云つたさうで、野田君が歸つて來て

「君大抵見當がつくよ」と云つたので、私が大凡そ見當をつけて號外を出したのであります。實に危い事であつたのでありますが、これがうまく當つたのであります。これがまた大變問題となつてしまひました。書記官長なども大變ムキになつたので、私は

「早く號外を出すのは新聞の名譽であります。吾々も政友會をつくる時にはお手傳もした。それに内閣が出來たからと云つて、號外を出して怪しからんとか、宜くないといふのは、閣下の御指圖でありますか」

と伊藤さんに聞いてやつた處が、この手紙で

「私は一向關係に在つて知らぬ。早く號外を出したのは、君の社の働きだ。併し結構ではあるが、話があればやつて來い」

といふ返事だつたのであります。

以上はつまらない事の樣でありますが、私は常に新聞に對してはその考を持つて、新聞の立場は何時も守つてゐたのであります。川上明治二十七八年役にいよいよ軍人と喧嘩をしたのであります。將軍が心配して、

「貴君そんな事を云ふと殴られますよ。出先の軍人は氣が荒いから」

と云はれましたが、新聞の爲には、隨分軍人とも議論もしたのであります。

×　×　×

この考は四十年間終始一貫、私の守つて來た處のものであります。此度國民新聞をやめた唯一とは申しませぬが、重なる理由は、新聞記者として當然守るべき道を守る爲でありました。

私は餘命いくばくもありませぬ。精々二十年か或は十年でありませう。私は千辛萬苦して記者の體面を守つて今日に至りました。私の議論には御不滿の方もあつたでありませうが、私が四十年間、誠心誠意國家の爲と信じてやつた事はお疑ひはない事と思ひます。然るにこの老年に至つて、心にない事を書き、書きたくもない事を書くと云ふ事は皆樣に對して、又た私自身に對して恥ぢねばならぬ事であります。人間は年をとると保守になり勝ちであつて、今更引越などは致したくないのでありますが、なんとも致方がなかつたのであります。

一論語したる良書であるが

私は英國の名記者スペンダーの自傳を讀みました。而して彼が資本家サー・ジョーヂ・ニユーンスと相得たるの記事を讀んで、世の中には珍らしき例もあるものだと思ひました。彼はスペンダーに一切を托せ十五ケ年に亘り、年々の缺損を一度も惡い顔をせずに出したとあります。此の如き資本家は、英國に於ても多くはありますまい。併し若しスペンダーの共同したる資本家が、最善の極なれば、私の共同したる資本家はその反對であつたかも知れませぬ。世の中には兩極があつて私は不幸にして、反對の方の極點にぶつつかつたのでありませう。

これも前申す通り、私の不明の罪であつて、今更誰を咎める事もなく、誰を怨む事もないのであります。併し斯く申すのは、世の中の諸君が、私が唯だ癇癪紛れにでも飛出したのではないかと云はれるかも知れませぬから、一通りの事を打明けた迄であります。また此上打明けようと思へば、いくらもあるのであります。

又た英國の記者マツシンガムの如きも、その自ら創立したる雜誌『ネーション』を去りたる後は、總ての點に於て、殆んど反對として立た『スペクテーター』の誌上に、その寄稿が歡迎せられたのであります。『ネーション』の主筆の記事が、『スペクテーター』の寄書欄に載るなどゝ云ふ事は、何やら木に竹を繼いだ樣な感も致すでありませうが、私は一方に於ては此に至つたマツシンガムの志を悲しみ、他方に於て彼を迎へたるストレーチエーの雅量を賞讃せずしては止む能はぬのであります。

廣く世間を見渡しますのに、記者にして經營者を兼ねたる者は、島田三郎君の『毎日新聞』、陸實君の『日本新聞』などでありました。島田君は私の先輩であつて、私が一書生として『將來之日本』の原稿を携へ、明治十九年東京に來た時には、已に蔚然たる大家であつて、私は島田君の爲に諸名士に面會の便宜を得た事も尠くありませんでした。晩年『毎日新聞』は餘り振はず、如何なる事情にや、他に讓り渡されましたが、併しそれは寧ろ自然的の經過と見るべきものでありました。

陸君の『日本新聞』は明治二十二年、恰も國民新聞の一年以前に出で來つたものでありまして、陸君が年齡に於て私の兄である如く、日本新聞も亦た國民新聞の兄でありました。殊に『日本』は谷、鳥尾、三浦等の諸先輩がその擁護者であり、その他有力なる背景を持つてをりました。然るに國民新聞は全く書生の梁山泊とも云ふべきものでありましたから、對抗するには骨が折れました。

併し、少くとも國民新聞の第一期は、常に『日本』を競爭の目標としてゐたのであります。

陸君は記者としても特色ある記者でありましたが、經營の方面にかけても、滿更ら不適任とは云へなかつたのであります。私とは總ての點とは申しませぬが、多くの點に於て相反しました。然も紙上に於ては相爭ひ、實業に於ても競爭の立場でありましたが、それにも關は

らず、その交情は變りませんでした。私の『將來之日本』が世に出るや、その批評を『出版月評』に掲げたのは陸君でありました。

私は明治十九年の中頃、當時陸君が未だ官報局の役人でゐる頃から君とは面識があつたのであります。斯る關係でありましたから、陸君とは屢々會合致しました。

然るに明治三十七、八年の役後陸君は、『日本新聞』を他に讓り渡し、病を鎌倉極樂寺の邊に養つてゐる頃、私に書面を與へて、陸君の部下であつた『日本新聞』記者諸君の或る人々が、國民新聞に入社したるのを見て、

『漢何んぞ楚人の多きや』

との文句を私に投じた事を記憶してをります。今更らその事を想出して感慨に堪へぬのであります。

私は今日に於きまして、轉た陸君當時の心境が了解された樣に思ふのであります。

兎にも角にも日本に於て、記者と經營者と同一であつた新聞は、全く國民新聞に於て、その後を絶つに至つたのではありますまい乎。これを思へば今回の出來事は、私一個の進退ではありまするが、新聞の歷史にとつても、何となく、閑却し易からざる意味がある樣にも思はれます。

× × ×

私の申上げる事はこれだけであります。これ以上申上げると悪趣味に陥入ります。私もこの年で相手選ばず喧嘩するのは、私の面目に關するのであります。沈默が賢明であると思ひますから、私は此際沈默を守ります。繰返して申ますが、申上げる材料がないのではありません。能はざるに非らずして屑しとしないのであります。この點皆樣の御諒承を願ふ次第であります。

× × ×

私が國民新聞を去つたに就いては、段々手紙が參ります。中にも或る人の如きは、

『貴君はそんなに弱いとは思はなかつた。もう一つ踏張れ』

と申し、又或る人は、

『貴君は不親切だ』

と申しました。皆一々道理がありますが、私の心に深く感じたのは菊池寛君が、

『貴君が飛出して來たのは感心だ。此に於て蘇峰未だ老ざる也』

と云はれた事であります。この一言は私にとつて五十萬圓の株券よりも有難かつたのであります。

私は已に老いてゐるかも知れません。私の總ての官能は衰へてゐるが、併し記者としての資格だけは、明治二十三年新聞を創立した時も、昭和四年に新聞を去つた時も、二十八歲の時も、六十七歲の時も、未だ嘗て此點に於ては渝らないと信じます。

若し私にとるべき處があれば、それは私の[illegible]でなく、文章

のである。

一論說したる良書である。

でもなく、功勞でもなく、終始一貫新聞記者として俯仰天地に恥ぢぬ點を認めて頂ければ、これに增した喜びはありませぬ。猶ほ一言申しますが、私に向つて、

『今後はゆつくり歴史を書けるから貴君の爲に喜ぶ』

といふ手紙を下すつた方があります。併し私の歴史は明窓淨几、幽窓兀坐して筆をとるのではありませぬ。もし私の書く歴史に價があれば、それは學者、物識りの歴史ではありませぬ。天下の時務を論じたる新聞記者の歴史として幾分價値があらうと思ひます。それと緣を切つて、學者として私が歴史を書くといふ事は、私に相當しない事であります。私が歴史を書くインスピレーションは、新聞から來てゐるのであります。編輯局の電話を聞き、印刷インキの臭をかぎ、輪轉機の廻る聲を耳にし、紙屑の堆裡にあつてそのゴミを吸ひ、騒々しさの中に私の歴史は出來たのであります。歴史の爲にも新聞は私にとつて必要だつたのであります。

私から新聞を奪ふのは、茨木童子から片手をとつたやうに、河童が水から出た様に、サムソンから髪毛を剪つたやうなものであります。併し今更新聞を作る元氣もなく雜誌を作る勇氣もありませぬ。或人は『國民之友』の再刊をすゝめて下さいます。併し誰何ぞ容易なる。今日我々には雜誌など手に負へぬのであります。至つて簡單、今夜此に御集りの皆様にお願ひ致したい事は、何處でもいゝから皆様の編輯局に私を入れて頂きたいのであります。所謂る木戸御免であります。決して永久に入れて頂き度いとお願ひは致しませぬ。今夜のこの會を、新聞記者の德富の送別會ではなく、加入會にして頂き度いのであります。送別會と云ふと葬式をされる様でありす。死んだ者に葬式は必要でありませうが、半死半生の者には少しく早過ぎるのであります。

私に餘命はまだ若干あります。皆様の仲間に入れて頂き、諸君の餘勇を賈うて歴史を完成しようと思ふのであります。

私の理想の死は、先程福田博士も申されましたが、國民新聞の編輯局で、原稿紙に向つて筆を採りつゝ其まゝ眠る事でありました。然るにそれに至らずして國民新聞社を去つたのでありますから、全く私としては死に切れぬのであります。併し今後共新聞とは絶縁しない積りであります。

併しながら、たとへ隅田川がひつくりかへつても、現在の出資者の存在する限り、私は決して國民新聞社の門はくぐらぬのであります。それに就いては十二分の理由があります。今日はそれを申上げる事の出來ぬのは甚だ遺憾でありますが、申上げぬ事が紳士道であると信じますから、申上げぬ事に致します。

終りに臨み、私の話を長い間御靜聽下されたる諸君各位に厚く御禮申上げます。

（昭和四年十一月二十一日　東京會館に於て）

室伏高信著

大衆時代の解剖

文明の沒落 第三卷

（四六判 三一二頁）

定價壹圓 送料拾六錢

新しき時代―現代は大衆の時代―大衆によりて總てが動く。一切の學問、藝術は大衆を目標として動く。だが、人類はこの大衆時代に於て果して眞の文明の最高段階に到達し得るだらうか？我文明批評家の雄室伏氏は、この疑問を提げて大衆時代を俎上に縱横の鋭いメスを振つた。「この文明のより新しき傾向を把握し、人口問題、帝國主義、及び大衆社會の三方面に文明史的意義を明かに」せんと試みた一書は、より高き創造的文明を翹望する人々に競ひ讀まるゝのは當然である。

（內容一斑）第一章 大衆時代の解剖（その一）。第二章 大衆時代の解剖（その二）。第三章 帝國主義の文明批評。第四章 人口の論理。第五章 この人間を見よ（その一）。第六章 この人間を見よ（その二）。第七章 辯證法的批判の批判。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

谷譲次新著

もだん・でかめろん

大都會に夜が下り、星屑とビルデングの灯が一つにぼやけて來ると、蝙蝠みたいに屋根裏に寢てゐた獵奇者の群は、どこかに何かしら面白いこと變つた事件があるやうな氣がして街に流れ出る。斯くて彼等は近代都會の神經を探ぐり心臟に觸れる。近代十日物語(もだん・でかめろん)は彼等の見た亞米利加といふ大都會の不思議な挿話のかず／＼と、いろ／＼な場面を次々に展開する。讀者は唯彼等と共に夜毎々々に街を彷徨し大都會の驚異を飽かずに觀る。恰も夢遊病者の如くに。

●デュ・デボア夫人の出靈●勇敢な惡魔●太郎とB・V・D●キキ●腸詰と詩人●魔法の絨毯●黒い舞踏會●兎の手●妖婆と南瓜と黒猫の夜●國のない人々の國

價壹圓五拾錢
送料 廿四錢
四六判 上製
三百七十四頁

テキサス無宿 他三十一篇

めりけん・じやつぷは單なる在米日本人ではない。それは亞米利加の社會のみが生み出した日本人の一變種である。特殊の生活様式を持つ特殊の人々である。テキサス無宿他三十一篇の中に彼等は谷氏の輕妙・深刻の筆によつて、哄笑し、啼泣し諧謔を弄し惡戯を行ひ失敗に萎れ得意に踊る。異境に於ける同胞の不思議な生活は限りなき興趣を與へる。同時に如何なる觀察者も未だ語らない亞米利加現代文明の眞相が鋭く解剖され暴露されてゐる。

内容 ●ヤング東郷●ダンナと皿●ジョウヂ・ワシントン●Sail, Ho●喧嘩師ジミイ●秋●返報●AMMA●テキサス無宿●めりけん・じやつぷ商賣往來六篇●他十七篇

價壹圓八拾錢
送料 廿四錢
四六判 上製
五百〇四頁

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

全五卷

石川啄木全集

東京・芝・愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二番

新刊

第五卷（第四回配本）書簡集　六百六十頁

明治三十四年　三通。同　三十五年　九通。同　三十六年　九通。

同　三十七年　五十通。同　三十八年　二十八通。同　三十九年　二十五通。

同　四十年　二十六通。同　四十一年　六十三通。同　四十二年　二十四通。

同　四十三年　二十八通。同　四十四年　五十通。同　四十五年　十五通。

計　書簡　三百二十通。内未發表のもの百五十通に及ぶ。

（附）石川啄木年譜（三十九頁）……金田一京助編

豫約　一冊・一圓

既刊

第一卷（第二回配本）小説集　六〇九頁

第三卷（第一回配本）詩歌集　七六一頁

第四卷（第三回配本）評論感想集　六二〇頁

柳浪・眉山・緑雨集

現代日本文學全集

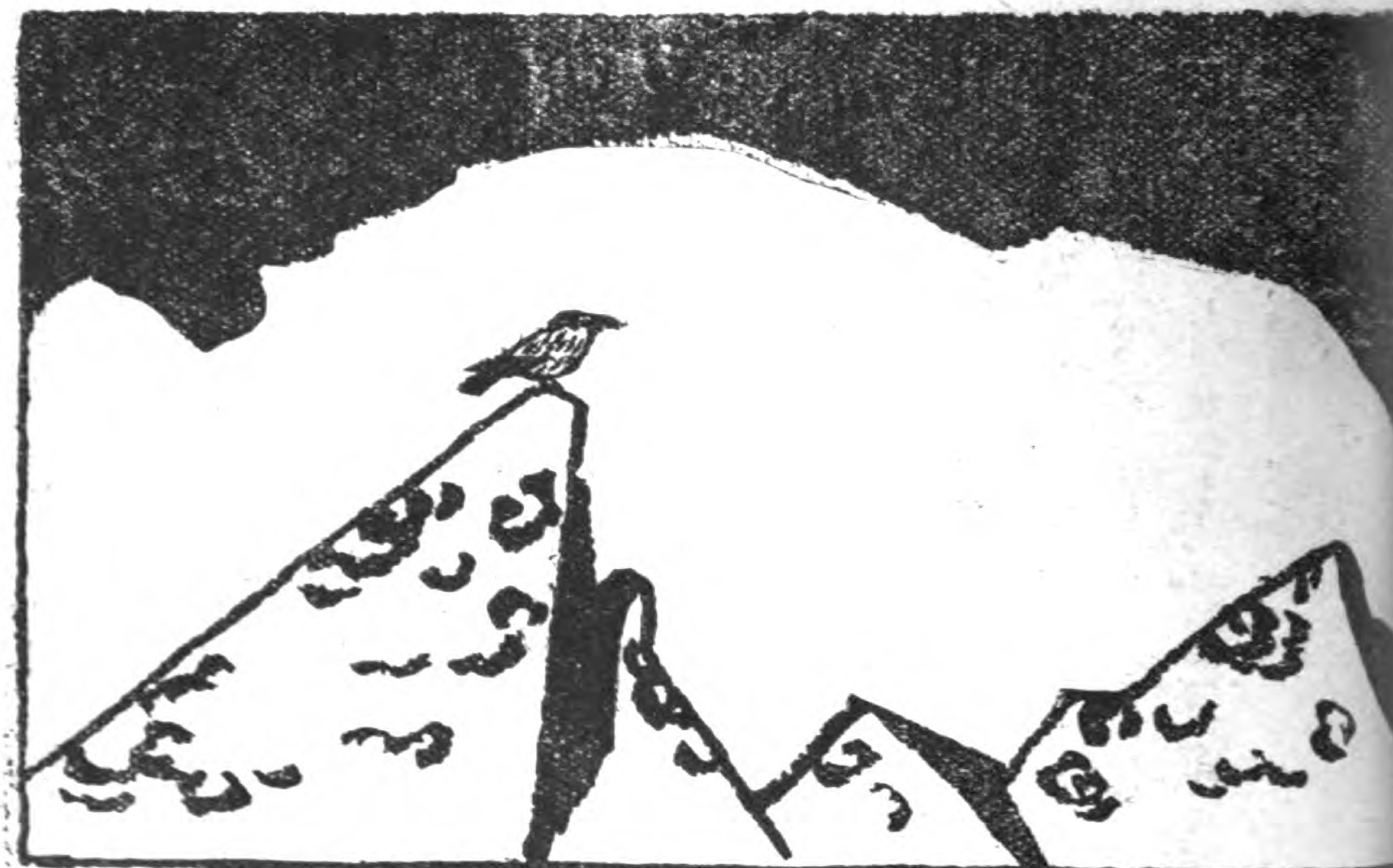
三月上旬配本

廣津柳浪集
（小説）今戸心中　雨　八幡の狂女　變目傳　淺瀬の波　龜さん　黒蜴蜓　女子參政蜃中樓
（戯曲）目黒巷談

川上眉山集
（小説）大さかづき　書記官　うらおもて　うつせ貝　絃聲　春宵　ゆふだすき　小町紅
（隨筆）ふところ日記

齋藤緑雨集
（小説）おぼろ夜　門三味線
（隨筆）おぼえ帳　眼前口頭　霏々剌々　巖下電　靑眼白頭　長者短者　正直正太夫死す
（俳句）春一ダース　のこり物　小細工集　枯菊十句　ひとりごと　豆の花
（小唄）こほろぎ　からす　まつの木　つき　えんきり　すみぞめ　みじか夜　珠數かひ　こひ中　くぜつ　つき花　わかれ　ねざめ　くりこと　かね　穗すゝき　くさの戸　出もどり　まよひ　ちりの世　いのち　やみ夜　まばたき

東京芝區愛宕下町　**改造社**　振替東京八四〇二



足と正義

横光利一

一

プラターンの花からは花が吹雪のやうにこぼれてゐた。宮子は甲谷に腕を持たれて歩いて來た。ひしやげた栗のやうな安南兵が劍銃を連られて並んでゐた。その圓いヘルメツトの背後では、フランスの無線電信局が火花を散らして青々と明滅した。宮子はミシエルの高雅な秋波を回想しながら、甲谷に云つた。

「あたし、ここの電信局の技師さんと十三日間踊つたことがあつたのよ。ミシエルつて云ふの。矢張り、フランス人はいいものねつ」

甲谷は何を話さうとしてゐたのか忘れ出した。踊り場から漸く初めて、一哩も踊子を連れて來て、愛の花束の大きさを較べられては彼とて興奮せずにはをれなかつた。

「もう僕は、幾同君を好きだと云つたかね。どうも此の頃は急がしくつて、日記をつけてゐる暇もろくなし。」

「そりや、あたしだつて、此の通り急がしいのよ。あなたは、あたしを見ると、もう好きだ好きだと嘘ばかり仰言るし、イタリア人はイタリア人で、あたしの急所ばかり捜さ

うとしてゐるし。まア、何んでもいいわ。その日その日は、なるだけ愉快に暮すのが一番よ。」

「ぢや、今の所、僕はイタリア人と競爭かい。」

「だつて、あたしはこれでも、容子さんと競爭なの。あのイタリア人は、あたしと容子さんとをいらいらばかりさせてるの。だから、あたし、今度はアメリカ人とばかり踊つてやるの。」

「それぢや、日本の旗も、いつまでたつたつて上らないな。」

宮子は毛皮の中で首を縮めて笑ひ出した。

「さうよ、だつて、外國人はお客さんだわ。あなたなんか、少しはあたしたちと共謀して、外國人からお金をとらなきア駄目ぢやないの。」

哲學は到る所から生えていく。甲谷は日本人の色素のために、ここでも悲しまねばならなかつた。彼は今まで、過去に堆積された女から賞讃され續けて來た理由は、かうであつた。

——まア、外國人のやうだわね。

だが、宮子の前で、外人らしさを外人と競爭することは、甲谷にとつては不利であつた。彼はもう十日間も宮子の踊場へ通つてゐた。たが、宮子の眼はいつも云つた。

「まア、日本人は、後にしてよ。」

[illegible]

分にばかり集めるかを計算し合ふことだつた。さうして、宮子は此の計算では、常に「ナンバー・ワン」の折紙をつけられてゐるのである。

甲谷は十日間の三分の一を、その自由なフランス語とドイツ語とで外人と張り合つた。後の三分の一の力を、金と饒舌に注ぎ込んだ。しかし、此の宮子の高ぶつた誇りの穴へ落ち込んだ日本人——甲谷が、宮子の誇りを無くするためには、彼はあまりに誇りすぎてゐたのである。

甲谷はだんだん滅んで行く自信のために、今はますます宮子に手を延ばさずにはをれなかつた。

微風に吹きつけられたプラターンの花の群れは、菩提樹の幹へ突きあたつて廻つてゐた。その白い花々は三方から吹き寄せられると、芝生にひつかかりながら、小徑の砂の上を華奢な小猫のやうに轉げていつた。

「まア、此の先きは、眞暗だわ。」と宮子は彼に寄りそつて云つた。

「大丈夫、僕に手よつてゐれば、どこだつて同じことさ。」

甲谷は公園の芝生を突き切ると光りの届かぬ繁みの方へ廻り出した。宮子はその繁みの蔭に何があるのかも知らずについて行つた。彼女には

[illegible]

[illegible]
で、甲谷が何をするかを知つてゐた。――甲谷は宮子の回想を案内しながら水草の沈んだ池の傍まで歩いて來た。

「さア、もう、あなた、ここらあたりで歸りませう。」と宮子は云つた。

宮子はひとり甲谷から放れると、ちらりと一叢の芽を出した灌木を眺めながら、門の方へ歩き出した。

甲谷は宮子の後姿を見詰めてゐた。彼は彼女の足を牽きつけてゐる者が、彼女を廻つてゐる逞しい外人の足の群れだと睨んでゐる。だが、どうして日本人は、此のやうにも輕蔑されねばならぬのか。――甲谷は公園の門の前まで、自分の短い足を歎きつつ歩いて來た。しかし、彼はその門から前へ、公園の中へ、何が故に支那人の足だけが這入ることを赦されてはゐないのか、考へるのはうるさかつた。

枝を截り拂はれた菩提樹の若葉の下で、宮子は瓦斯燈の光りに濡れながら甲谷の近づくのを待つてゐた。

「ね、あたしたちは、此の瓦斯燈のある所では、いつでも仲良く出來るのよ。」

勝ち誇つた宮子の微笑が、長く續いた青葉のトンネルの下を潜つていく。坦坦砥のやうに光つた道。薔薇の垣根に燈を映して辷る自働来ると、再び彼らがそのやうにも負かされ續けた外人達の侮蔑を、支那人ではないと云ふことを示さんがためばかりにさへも、應じなければならなかつた。彼は宮子の手をとると云つた。

「さア、此の次は、どこにしよう。」

「ランタン・カフエー。」

甲谷の顔は、今は池の傍で、ズボンの折目を亂さなかつたと云ふ自身の巧みさを誇つてゐるかのやうに笑ひ出した。

「かうして君と手を組み出すと、まるで人生が明るくなる。これは不思議の一つだね。」

「さうよ、あたし達は踊子なの。」

「だが君らはダンスをするのが目的なのか、それとも、一」

「もう澤山、あたしたちが結婚すれば、結婚の墮落だと仰言るんでせう。」

「いや、僕らは君を追つかけては振り廻され、追つかけては振り廻されてゐるのは、こりやいつたい、何んだらうと訊いてるんだ。」

宮子は突然、甲谷に見られてゐない片頬に、鱗のやうな鮮明な微笑を揺るがせた。

「そりや、なかなかなつかしいわね。あなたは、相当ダンスの踊り方

柳浪・青山・[illegible]

ひとり謂ひたき…

夢中の覺てゐる藝撃の上へ醒れると、泣き眺め
…になるか想しむべき結果になるかを

「僕はボルシエビーキぢやありませんよ。」

「さうよ。あなたはボルシエビーキです。さうでなくちや、あなたのやうに冷膽な人なんか、ゐやしません。」

「だいたい、僕がここにかうして寝てゐるとき、僕を叩き起して、代りに自分がベツドを奪らうと云ふのは、ボルシエビーキならしませんよ。」

　オルガは唇を噛み緊めると、默つて泣きながら、參木の腕をくいぐい引いた。參木はオルガの力に抵抗しながらも、足が辷つて寝臺の方へ引き摺られた。彼は片手を寝臺につきながら、海老のやうに曲つて云つた。

「オルガさん、そんなことをしちや、此の服が破れるぢやありませんか。」

「悪魔。」

「僕は失職してるんです。服が破れたら、明日から、」

「オルガさん、放しなさい。殴りますよ。」

　しかし、オルガはなほも齒を食ひ縛つたまま彼の首を締めつけた。彼は呼吸が苦しくなると、咳が出た。

「オルガ、オルガ。」

　參木はオルガを擔いでベツトの上へ投げつけた。オルガの足は慄へた寝臺の上で彈動した。が、直ぐ彼女は起き上ると、枕を參木に投げつけて云つた。

「悪魔、悪魔。」

　彼女は眞青になつたまま、再び猛然と彼の頭の上へ飛びかかつた。彼は擴つた彼女のぶよぶよした身體を受けとめると、背後へよろめいて、壁の鏡面へ手をついた。オルガは彼の肩口へ食ひつくと首を振つた。參木は押しつける筋肉のうねりと鏡面に絞ぼり出されて長くなつた。彼と彼女との肉體は狂氣と生との一線の上で、うなりながら、朦朧と混雑した。と、二人は、今は誰れが誰れだか分らぬガラスのやうに放心したまま、横に倒れた

の一歩進んだ物理主義者の集團です。」
「あたしには、あなたの仰言ることが、分からない。」とオルガは云つた。
――つまり、愛の言葉を聞きかけたら、わけの分らぬことを云ふが良いと云ふ主義なんだ、と參木は思ふと淋しくなつた。
オルガは一層しほれて歩き出した。街角の瓦斯燈の下では、跡さめた甃石の水溜りに鐵の梯子が映つてゐた。複合した暗い建物の下で、一軒の豆腐屋が戸を開けて起きてゐた。その屋根の下では、重々しく動く石臼の間から、眞白な粘液だけがひとりぢくぢくと流れてゐた。
「あーあ、あたし、オデッサへ歸りたい。」とオルガは云つた。

三

參木は山口の家へ着くと、自分の部屋に當てられた一室へ這入つた。彼はひとりになつて寢臺の上へ仰向きに倒れると、急に東京の競子のことを思ひ出した。もし死にかかつてゐる競子の良人が死んでゐる頃だとすれば、電報は彼女の兄の甲谷の所へ來てゐるにちがひなかつた。が、その甲谷とはもう三日も逢はぬのだ。しかし、甲谷と逢ふたびに家へ歸れば、家にはお柳の愛が待ち伏せてゐるに定つてゐた。
――[illegible]杉、競子、お柳、オルガ。――ただ競子をひそかに秘めた愛人であつたと思つてゐたばかりのために、絶えず押し寄せて來る女の群れを跳ねのけて進んでゐるドンキホーテ。――然も、競子の良人が死んだとしても、彼は競子と結婚出來るかどうかさへ分らないのだ。いや、それより、彼は今は自分の職業さへ失つてゐるのである。
そのとき、今別れた筈のオルガが突然這入つて來て彼に云つた。
「まア、山口はゐないのよ。あなた、捜して頂戴、あたし、これからひとり歸らなきアならないんだわ。ああああ、いやだ。あたし、オデッサへ歸りたい。」
オルガはいきなり參木の寢てゐる寢臺の上へ倒れると、泣き始めた。參木は、これが喜ぶべき結果になるか悲しむべき結果になるかを考へながら、オルガの背中を撫でてみた。すると、オルガは首を振り立てて怒つたやうに彼に云つた。
「あなた、そこを降りて頂戴。あたし、今夜はひとりそこで寢るんです。」
參木は默つて寢臺から降りると靴を履いた。
「ぢや、お休みなさい。さやうなら。」
彼が合圖をして部屋から出ようとすると、オルガは不意に彼の腕に

か。」
「ボルシエビーキ、惡魔、あなたたちはあたしをこんなにしたんです。」
「僕はボルシエビーキぢやありませんよ。」
「さうよ。あなたはボルシエビーキです。さうでなくちや、あなたのやうに冷膽な人なんか、ゐやしません。」
「だいたい、僕がここにかうして寢てゐるとき、僕を叩き起して、代りに自分がベツドを寢らうと云ふのは、ボルシエビーキならしませんよ。」
　オルガは唇を嚙み絞めると、默つて泣きながら、參木の腕をぐいぐい引いた。參木はオルガの力に抵抗しながらも、足が辷つて寢臺の方へ引き摺られた。彼は片手を寢臺につきながら、海老のやうに曲つて云つた。
「オルガさん、そんなことをしちや、此の服が破れるぢやありませんか。」
「惡魔。」
「僕は失職してるんです。服が破れたら、明日から、」

くなつた。參木は首がだんだんと痛くなつた。彼はオルガの腕を[illegible]しながら云つた。
「オルガさん、放しなさい。毆りますよ。」
　しかし、オルガはなほも齒を食ひ縛つたまま彼の首を搾めつけた。彼は呼吸が苦しくなると、咳が出た。
「オルガ、オルガ、」
　參木はオルガを擔いでベツトの上へ投げつけた。オルガの體は[illegible]へ[illegible]た寢臺の上で彈動した。が、直ぐ彼女は起き上ると、枕を參木に投げつけて云つた。
「惡魔、惡魔、」
　彼女は眞青になつたまま、再び猛然と彼の頭の上へ飛びかかつた。彼は擴つた彼女のぶよぶよした身體を受けとめると、背後へよろめいて、壁の鏡面へ手をついた。オルガは彼の咽喉へ食ひつくと首を振つた。參木は押しつける胸肉のうねりと鏡面に[illegible]出されて[illegible]たつた。彼と彼女との肉體は鏡面と壁との一線の上で、[illegible]、[illegible]脚と混淆した。と、二人は、今は倒れるか倒れないか[illegible]に放心したまま、横に倒れた

四

參木は暫く、オルガのなすがままに負かせてゐた。オルガは彼の額の前で潑溂と伸縮しながら囁いた。

「まア、可愛い。參木、お休みなさいな。ここは、ほら、こんな床の上ぢやないの。風邪をひいてよ。さアさア、」

オルガは參木の頭を持ち上げやうとした。が、彼女はまたそのまま坐り込むと云つた。

「參木、あなた、あたしを忘れちやいやよ。あなたはあたしを、日本へ連れてつて下さるでせう。あたし、日本が見たいの。ね、參木、何とか仰言しやい。」

オルガの脣が參木の顏の全面を、刷毛のやうに這ひ廻つた。と、彼女は、立ち上つてベットの鐵をぽんぽんと叩き出した。

「まア參木は强いわね。あたしをここへ投げつけたのよ。あたしあのとき、眼が廻つてくるくるしたわ。だけど、あたし、もう、いいの。」

オルガはベットの中へ飛び込むと、ひとり毛布を冠つたまま膝でダンスをし始めた。

しかし、參木は寢たはつたまま起きて來なかつた。オルガは毛布の[illegible]

「參木、どうしたの。」

參木は漸く起き上ると、オルガから顏をそ向けて部屋の外へ出やうとした。

「參木、どこ行くの。」

彼は默つて肩でドアーを開けかけた。と、オルガは毛布を引き摺つたまま、彼の傍へ馳けて來た。

「いやよ、參木、出るなら、あたしも連れてつて。」

參木は投げ出された足のやうにオルガの顏を眺めてゐた。が、彼はまたそのまま出やうとした。

「いやよ、いやよ。あたし、ひとりなら、死んで了ふ。」

「うるさい。」

參木はオルガを突き飛ばした。オルガはぶるぶる慄へると、膝を上げて泣き出した。參木は素早くドアーを開けて部屋の外へ飛び出した。オルガは屛風のやうに傾いて彼の後から馳けて來た。彼女は階段の降り口の上で、參木の片腕をつかまへた。

「參木、あなたは、あたしから逃げるんだわ。いやだ、いやだ。」

ばたばた足を踏みながら、彼女は彼の手を濡れた顏へ押しつけた。

參木は暫く默つて[illegible]、彼は握られた手を振り切ると、また階段を[illegible]

——參木、待つて、待つて。」

引き摺られるオルガの反り返つた足先は、階段を一つづつ叩き出した。シャツを剝がれた參木の腹の汗の中で、臍が苦しげに動搖した。と、參木は一氣に階段を馳け下つた。彼は惰力で前面の壁へ突きあたつた。オルガは階段の下で廻轉すると、參木の足元へぶつ倒れた。參木はオルガを起さうとして身を蹲めた。が、ふと急に、彼は空を見上げたときのやうな淋しさを感じて來た。彼は呻いてゐるオルガを跨いで突き立つたまま、茫然として彼女の頭髮を眺めてゐた。

五

夜のその通りの先端には河があつた。波立たぬ水は朦朧として霞んでゐた。支那船の眞黑な帆が建物の壁の間を、忍び寄る賊のやうに流れていつた。

お杉は時々耳もとで蝙蝠の羽音を感じた。仰げば高層な建物の冷たさが襲つて來た。——彼女は三日間參木の歸るのを待つてゐた。が、歸らないのは參木だけではなかつた。甲谷も一夜も歸らなかつた。ただその間、彼女は湯を沸かしては水にし、部屋を掃除し續けては泥溝の河の岸まで來たのである。

泥の中から浮き上つた起重機の群れが、錆びついた歯をむき出したまま休んでゐた。積み上げられた木材。崩れ込んだ石垣。揚げ荷からこぼれた菜つ葉の山。舷側の爆けた腐つた小舟には白い菌が皮膚のやうに生えてゐた。その龍骨に溜つた動かぬ泡の中から、赤子の死體が片足を上げて浮いてゐた。さうして、月は、まるで、塵埃の中で育つた月のやうに、生色を無くしていたる所に轉げてゐた。

Ponco tempo somente
De pressa de cima abaixo

ポルトガルの水兵が歪んだ帽子の下で、古里の歌を唄つて通つて行く。お杉は月を見ると、月のやうになつた。泥溝を見ると、泥溝のやうになつた。——彼女は、今も朝からの續きをまだ茫然と過ごしてゐるのだ。が、ふと、お杉は友人の辰江のことを思ひ出した。

——あの辰江のやうに、部屋を持つて、客さへ取れば。

さうだ。辰江のやうに客さへ取れば、と彼女は思ふと、急に橋の上で、生き生きと空腹を感じて來た。彼女は朝から食べた食物を數へてみた。

――家鴨の足と、蓮の實と、豚の油と、筍と。

だが、お杉の頭には、辰江の絹の靴下が、珍稀な歓樂を詰めた袋のやうにちらちらした。唇の紅の色が、特別な男の舌のやうに秘密を持つて搖れて見えた。と、彼女は、またいつものやうに、自分を奪つた者は參木であらうか、甲谷であらうかと迷ひ出した。彼女は、あの夜の出來事が――、、、、、、、、、、、、、、二人の中のどちらであらうかと思ひ煩ふ念力のために、きりきり廻つた無謀な風のやうに中心を無くし出した。さうしてお杉は、今は一切のことが分らぬままに、女の中の最後の生活へと早道をとり出したのだ。

胡弓の音が泥の中から聞えて來た。お杉は橋を渡ると、見覺えた春婦のやうに通る男の顏を眺めてゐた。彼女の前の店屋では、べたべた濡れた穀物の中で口を開いた支那人が眠つてゐた。起重機の切れた鎖の下で、花を刺した前髮の少女がランプのホヤを賣つてゐた。河岸に積み上つた車の腐つた輪の中から、擬髪の苦力が現はれると、お杉の傍へ寄つて來て笑ひ出した。

お杉は脊を縮めて歩き出した。すると、男は彼女の後からついて來た。お杉は慄へながら後ろを振り返つて男に云つた。

「ちがふ、ちがふ。」

彼女は[illegible]

つていつた。その露地の奥では、鋭く割れたガラスの穴の中で裸體の脊中が搖れてゐた。お杉は立ち停ると、どちらへ出るのか迷ひ出した。彼女の頭の上には、鰻のやうに下つた洗濯物が壁を濡らして並んでゐた。柱にもたれた女が突角つた肩をぴくぴくさせて咳きをしてゐた。その後ろの床の上では、眼病の裸體の男女が、一本の赤い蠟燭を取り卷いたまま蹲んでゐた。ふとお杉は上を向くと、四方から迫つてゐる壁の窓から、黙々とした顏が一つづつ覗き出した。お杉は慄へた棒のやうに、敷石に躓きながら、壁の中から壁の中へさ迷ひ込んだ。灯がだんだんとなくなり出した。と、闇の中で、今まで積つた塵埃だと思つてゐた襤褸の山が、急に壁の隅々から無數にもぞもぞと動き出した。お杉は壁にぴつたりひつつくと足が動かなかつた。と、忽ち、その黑い襤褸の群れは、狭い壁と壁との間いつぱいに詰まりながら、鈍重な波のやうに襲つて來た。お杉は一瞬、眼前に並んで點々としてゐる人間の鼻の穴を見た。と、彼女はその場へ昏倒すると、塊つた襤褸の背中の波の中に吸ひ込まれて見えなかつた。

六

臭氣を帶びて露店の群れは賑つてゐた。其處に[illegible]

[illegible]

えず人の足首に觸つてゐた。向を變へた街路が彼等の眼に觸れたマンゴ。光つた石炭。潰れた卵。膨れた魚の氣胞の中を纏足の婦人がうろうろと避つてゐた。

此の雜然とした街角の奥に、婆羅門の寺院が聳えてゐる。しかし、釋尊降誕祭の此の日の道路は支那兵の劍銃に遮斷されて印度人は通れなかつた。それが明らかに英國官憲の差金であらうことを洞察してゐる印度人達は、街の一角を埋めたまま、輝やく劍銃を越して寺院の尖塔を睨んでゐた。

間もなく此の露骨に印度人の集會を嫌ふ英國風の街の中を、草色の英國の駐屯兵が隊部にロシアの白衛兵を加へながら、樂隊を先驅にして進んで來た。その後から、眞赤な装甲自動車が機關銃の銃口を、觸角のやうに廻しながら、黒々と押し默つた印度人の團塊の前を通つていつた。

山口は印度の志士のアムリから電話を受けて參木と一緒に來たのである。だが、來て見れば機關銃の暗い筒口の前で、眼を光らせたまま沈默してゐるだけにすぎなかつた。しかし、それにしても、アジア主義者の山口は、英國の官憲と同樣に印度人を遮斷してゐる支那の軍隊に腹立たしさを感じて來た。が、ふと、彼はアムリが彼を呼び出した原因を、同時に感じて笑ひ出した。

――此に眼を通りこして來て、俄に呼び起すためだとすると、成る程、成る程、アムリの奴め。

しかし、瞬間、彼は支那の軍隊の遮斷してゐる道路が、その街角から彼らの方向へ向つては、支那の管轄區域だと云ふことに氣がついた。

――これおや、アムリの奴め、日本人に考へろと云やがつたんだ。馬鹿にするな。馬鹿に。

が、次の瞬間、彼は支那兵と對峙してゐる印度人の集團を、英國の官憲として使はれてゐる印度人の警官が、壓迫してゐるのを發見した。

山口はアムリの意志がどこにあるのか分らなくなり出した。――此の馬鹿な印度人の醜態を見るが良いと云つたのか、支那の國内で暴れてゐる英國兵を、支持してゐる支那の兵士の、その顏を見よと云つたのか。

しかし、山口はアムリと同樣此のアジアを聯絡させて內禍に備へる活動分子の一人として、眼前の支那と印度の無力な友の顏を見てゐると、笑ふことは出來なかつた。彼は街路で、此の民族の衝突し合つてゐる事件とは無關心に笊に盛り上つてゐる茹卵を見つけると、支那人の顏を思ひ出した。足元の屋臺の上に、斬られた鳥の首が黒々と積つ

てゐるのを見ると、印度人を思ひ出した。彼は彼の横に、アムリがゐるかのやうに呟いた。

「數の多いと云ふことは、ただ彈丸除けになるだけだ。」

「さうだ。」と參木は自分に云はれたやうに返事をした。

事實、山口はアムリに逢ふと、アムリの誇る「印度人の數の多數」を、いつも此の言葉で粉碎するのが癖であつた。すると、アムリは山口の誇る日本の軍國主義を、、、した。

——しかし、日本の軍國主義こそ、東洋の白禍を救ひ上げてゐる唯一の武器ではないか。その他に何がある。支那を見よ、印度を見よ、シャムを見よ、ペルシャを見よ。日本の軍國主義を認めると云ふことは、これは東洋の公理である。

山口は鋪道の上を歩きながら、ひとり過ぎた日のアジア主義者の會合を思ひ出して興奮した。その日は支那の李英朴が日支協約の「二十一ヶ條」を楯にとつて、此の明らかな、、、、、、、、、主義と聲明した。山口はそれに答へて直ちに云つた。

「支那も印度も、日本の軍國主義を認めてこそ、アジアの聯絡が可能になる。然も僅かに日本の南滿租借權が九十九年に延長されたと云ふことを仲介として、われわれは東洋を滅ぼさねばならぬのか。われわ[illegible]九十九年間の生命を保證されたと云ふことに氣附かねばならぬのだ。」

すると、アムリは皮肉に云つた。

「日本が南滿を九十九年間租借したと云ふことによつて、われわれの同志、山口と李英朴がかくのごとく相ひ爭ふと云ふ事實は、日本が少くとも、九十九年間東洋の、、、、するであらうと云ふことを、豫想せしめて充分である。しかし、印度は此の日支の係爭如何に係らず獨立する。もしその獨立の日が來たならば、印度は支那から、いかなる海外の勢力をも驅逐せずにはをかぬであらう。印度のために、東洋の平和のために。」

だが、その印度の獨立の日までに、支那を滅ぼすものは何んであらうかと山口は考へた。

——それは明らかに日本の軍國主義ではない。英國の資本主義でもない。それはロシアのマルキシズムか、、、、、、、、いや寧ろ印度の阿片かペルシャの阿片か、そのどちらかにちがひないのだ。

此の志士を氣取つて緊張してゐる山口の傍では、參木は前から、どう云へば昨夜のオルガとの交渉を、彼に理解さすことが出來るだらうかと考へてゐたのである。彼は午後の二時から甲谷と會はねばならぬ約束を、[illegible]にしたのだ。甲谷と逢へば、競子のこととお杉のこととを[illegible]

かこ[illegible]に[illegible]したかを考へた。が、その結果が、これほど[illegible]
まの言葉について考へねばならぬとは、――
[illegible]もうこれは、いかにすればオルガのことを忘れうべき
かこと。それが一番だと
[illegible]、もう今日から、僕は彼の所へは帰らないと[illegible]
一時でも、オルガが恋しくなったのか。」
「[illegible]、[illegible]山口の[illegible]を、[illegible]
[illegible]
[illegible]かつて[illegible]につて、[illegible]かつてあるし
[illegible]
[illegible]かりなりたい[illegible]
[illegible]れ、より[illegible]のことより、こつちの[illegible]か[illegible]
[illegible]

七

[illegible]

彼は、外人達の經濟力の源泉となりつゝある支那の士貨に對して、彼らの向ける鋭い垂直トラストの尖鋒を、飽まで攪亂しなければやまぬと考へた。

――それには、先づ、フイリッピン材の馬を射よ、馬を。

此の燃え上つて來た彼の妄想の横では、棧橋が黒い歯のやうに並んでゐた。のろく揚げ荷の移動してゐる彼方では、金具を光らせたモーターボートが縱横に馳けてゐた。波と湯氣とを食らつて逃げる艪舶。繁殖したマスト。城壁のやうに續いた船舶。河水の色の變り目の上で舞ふぼろ帆。甲谷の車の速力へ、今は一切の風物が生彩を放つて迫つて來た。

・

パーテルへ這入ると、休んだ煽風器の羽根の下で、これはまたあまりに長閑に、參木はミルクに溶ける砂糖の音を聞いてゐた。甲谷は入口から手を上げて進んでいつた。

「どうも一度も家へ歸らないから、少々きまりが悪くなつたんだ。」

「そりや、僕もだ。まだあれから一度も家へは歸らない。」

「それぢや、君もか。」

二人は同時に、殘されたお杉のことを考へた。が、甲谷は浮き上つてゐる喜びに落ちつくことが出來なかつた。

「[illegible]、今日はこれから[illegible]たんだ。まア、ごつと

これで三萬圓、」

「もう君はすやうな話はやめてくれ。僕は君と別れた日から首になつた。」

「首か。」

「うむ、少々、痛い所を突いてみた。」

「だから、君は馬鹿だと云ふんだ。馬鹿な。」

重い時計の振り子の下で、帝政ロシアの幹部派達がいつもの憂鬱な顔を並べて密談に耽つてゐた。巻かれたナフキンの靜かな群れ。暖爐の沈んだ大理石。厚いテーブルの彫刻に散らかつた干菓子の粉。秘密な波を垂れ下げたカーテンの暗紫色。――ふと甲谷は此の重厚なロシヤの帝政派の巣窟、パーテルは、今は自分の快活さに不似合なことに氣がついた。眼につく一切のものが過ぎたロココの優雅さのやうに低迷で、放埒に巻き上つた絨毯の端にまで不幸な氣品がこぼれてゐる。

「おい君、ここは出たつていいんだらう。」

「うむ、しかし、僕は今日はここは落ちついて好きなんだ。首を切られたときは、かう云ふ所が一番だ。」

「まるでここは、君みたいな所だね。首を切られたものの寄り合ひで。」

「[illegible]にはして[illegible]。僕は[illegible]も。君の[illegible]を

つてゐるんだ。」

「いや、これはこれは。これぢや、どつちが親敵派か分らんが。ひとつ、あそこのロシア人に聞いてみやう。」

ひどく愉快さうに笑つてゐる甲谷の口を見てゐると、参木はもう此の日の甲谷を信用することが出来なくなつた。甲谷は云つた。

「さて、ひとつ、と云つた所だが、どうだ、今日は僕の云ふままになつてくれるのか。」

「君のお附きは愉快ぢやないね。君の金を皆渡すか。」

「所が、そこに僕の悩みがあるのさ。此の眼の色を見てくれたつて分るだらう。」

「そんなら、こつちの眼の色だつて分るだらう。首を切られてお附きになるなら、首なんか切られなくつたつてすんだんだ。」

「頑固な奴め、支那の美徳は金に服従する所にあるんぢやないか。まだ君は、、、が抜けぬから、馬鹿なんだ。さて、馬鹿な奴は馬鹿にして、と、ボーイ。」

ボーイが来ると、甲谷は立ち上つてまた云つた。

「ね、君、今日はひとつ、二人で馬鹿の限りを尽さうぢやないか。まだまだ人生には、面白いことがいくらだつてあるんだよ。それに、何んだい君は、顔を顰めて、首を切られて、今頃からドンキホーテの真似をしてゐる。」

「いや、僕は今日は、君の兄貴の家へ行くんだよ。僕は君の兄貴に仕事を探して貰はなくちやならんのだ。」

参木は外へ出ると、甲谷には介意ず、彼の兄の高重の家の方へ歩き出した。

八

「競子もどうやら、いよいよ亭主が危くなつて来たらしい。亭主が死ねば踊ると云つて来てゐるが、お好みは日本よりは支那の方が好きだと見える。しかし、此の俺だつて此の頃は危いからね。今の所、競子の亭主が先きか、俺が先きかと云ふ所さ。さうと、細君が聞いてやしないかい。此奴に聞かれちや、こりや一番危いぞ。」

「どうしてだ。」と甲谷は意外な顔つきで兄を見た。

「いや、職工の中へ、ロシアの手が這入り出したんだ。俺は職工係りだから、一番危い所にゐるわけだ。いつ何時、職工の間から、ぽんとやられるかしれないさ。もうそろそろ、[illegible]がおこしたいんだらう。」

「おや、争議が始つたのか。」

「いや、争議の前だ。だから今がなかなか危いのさ。あの[illegible]総工会が曲者だ。」

「そりや危いね、他人事ながら。」
「他人事ながら？」
「うむ、俺は今日は、三萬圓の契約をすましで來たんだ。此の調子だと、ここ半年の間に支店長は受け合ひだ。」
「そりや、他人事ながら羨しいが、兄貴は職工係りで苦い汁ばかりを吸はされるし、弟は美味い汁ばかり吸つてるなんて、どつかの教科書にあつたぢやないか。もし俺が支那人だつたら、やるね、此の職工係りに突きかかつて、それから、棉花工場をぶち碎いて、お前のやうな奴を吹き飛ばして。」
「所が、その職工係りが狙はれてちや、兄弟爭議にもならないね。」
「全くだ、職工の顏は立ててやらねばならぬし、重役の顏も立てねばならぬし、それに日本人の顏も立ててゐなけりやならず、お負けに兄貴としての顏も立てねばならぬとなると、どうもこれぢや、ぽんとやられる方が良いかもしれぬ。どうです。參木先生。」
「いや、僕もさう思つてる所なんですよ。」と參木は云つた。
「さうさう、參木は首を切られてね、僕の財布を狙つてるとこなんだ。」
と甲谷は云つた。
「酷か。」
[illegible]

と云つてた所さ。」
「何ぢや、そりや、ぽんとやられたくなる筈だ。」
「どうです、そのやられるやうな職ぢやないですか。どこだつていいんですよ。さつきから、それをお願ひしたくつて來たんですが。」
「そりやある。いくらだつてあるにはあるが、今も云つた通り、その、ぽんとやられる所だぜ。そこでも良いならいつでも來給へ。」
「いやもう、かうなつちや、なるだけぽんと。」
全く話題に落ちがついたと云ふやうに、聲を合せて三人は笑ひ出した。
聲が沈まると、參木は部屋の中を見廻した。此の部屋の中で、競子は育つた。此の部屋の中で、彼女を愛した。さうして、自分は此の部屋の中で、幾度び彼女の結婚のために死を決したことだらう。それに、今は、此の部屋の中で、競子の兄から自分が生き續けるための生活を與へられやうとしてゐるのだ。何のために？　たゞ彼女の良人の死ぬことを待つために。──
參木は此の地上でこれほども自分に悲劇を與へた一點が、たゞ索寞とした此の八疊の平凡な風景だと思ふと、僅に平凡と云ふことが何よりも、奇怪な風致を持つた形のやうに思はれ出した。しかも、また此[illegible]

活動を黙々として、續け出すのだ。

參木は窓から下を眺めてみた。駐屯してゐる英國兵の天幕が群がつた海月のやうに、紐を垂らして並んでゐた。組み合された銃器。積つた石炭。質素な寢臺。天幕の波打つ峰と峰との間から突如として飛び上るフットボール。——參木はふとこの駐屯兵の生活が、本國へ歸れば失はれて了つてゐることを慨歎したタイムスの記事を思ひ出した。さうして、此の地の日本人は？　彼らは醫者と料理店とを除いては、殆ど盡く借財のために首を締められてゐる群れだつた。參木は云つた。

「もうこの支那で、何か希望らしい希望か理想らしい理想を持つとしたら、それは何も持たないと云ふことが、一番いいんぢやないかと此の頃は思ふんですが、あなたなんか、どう云ふ御意見なんですか。」

「そりやさうだ。ここぢや理想とか希望とか、そんなものは持ちやうが全くない。第一ここぢや、そんなものは通用しない。通用するのは金だけだ。それもその金が贋金かどうかといちいち人の眼の前で檢べてからでなけりや、通用しない。」

「所が參木は、その贋金を溜めることまで嫌ひだと云ふんだから、仕樣がない。」と甲谷は云つた。

「いや、そりや參木君も僕と同樣で、金を使ふのが好きなんだ。だいたい、支那で金を溜める奴と云ふものは、どつか片輪でなきア溜らんね。そこは支那人の賢い所で、此の地でとつた金は、殘らず此の地へ落して行くやうな仕掛けがしてある。まだわれ／＼を、人間だと思つてゐてくれる所が、支那人の優しい所だ。」

「ぢや、支那人は人間ぢやないのかい。」と甲谷は云つた。

「うむ、もうあれは人間ぢやない人間の先生だ。支那人ほど嘘つきの名人も世界のどこにだつてなからうが、しかし、嘘は支那人にとつちや、嘘ぢやないんだ。あれは支那人の正義だよ。此の正義の觀念の轉倒の仕方を知らなきア、支那も分らなきア、人間の行く末だつて分りやしない。」

參木は高重の長い顎から溢れて來る逆説に、久しく缺乏してゐた哲學の朗らかさを感じて來た。參木は云つた。

「それであなたなんか、職工係りをやつてらしつて、例へば職工達の持ち出して來る要求を、これは正しいと思ふやうな場合、困るやうなことはありませんか。」

「いや、そりやある。しかし、そこは僕らの階級の習慣から、自然に猾い笑顏が出て來るんだ。僕はにやにやツとしてやるんだが、此のにやにやが、支那人を征服する第一の武器なんだ。これは虚無にまで通じてゐて、何んのことだか分らんからね。うつかりしてゐる隙に、後

ゐから金を握らしてやたにやにやだ。それで落ちる。所が、こんどの奴だけは、いくらにやにやしたつて落ちないんだ。かうなると、こつちが正義に打たれて、もう一度にやにやとは出來ないからね。どうも日本人と云ふ奴は、正義に脆くて輕佻だよ。君、今にどこやらの國は正義のために、、、、。支那人のやうに嘘つくことが正義になれば、もう此奴はいつまでたつたつて、滅びやしないよ。あらゆるものを正義の廻轉椅子に乘せて廻すことが出來るんだ。いつたい、こんな怪奇な國つてどこにある。」

高重は年長者の自由性のために、二人の前でだんだん興奮し始めた。參木は高重の話そのものよりも、今は自分の年齡の若さが、これほども年長者を興奮させ得る材料になりつつあると云ふ現象に、嶄新な物理を感じて來た。

九

海港からは銅貨が地方へ流出した。海港の銀貨が下り出した。ブローカーの馬車の群團は日英の銀行間を馳け廻つた。金の相場が銅と銀との上で飛び上つた。と、參木のペンはポンドの換算に疲れ出した。——彼は高重の紹介で此の東洋綿絲會社の取引部に勤めることが出來たのだ。彼の横ではポルトギーズのタイピストが、マンチエスターも、市場からの報告文を打つてゐる。孟買市場では米棉相場が下り出した。リヴアプールの棉花市場の強さがボンベイサツタ市場を壓へ出した。カツチヤーカンデーとテジーマンデーの小市場が、サツタ市場を支へてゐる。——參木の取引部では、此の印度の二箇の棉花小市場の強弱を見詰めることは、最大の任務であつた。どこから綿の花を買ふべきか。この原料の問題の解決は、その會社の最も生産量に影響を及ぼすのだ。さうして、カツチヤーカンデーとテジーマンデーの小市場は、突如として、旋風のやうに一切の市場の棉花相場を狂はすことが度々あつた。

參木は、前から此の印度棉が支那の棉花を壓倒しつつある現象を知つてゐた。だが、印度棉の勢力の擡頭は、東洋に於ける英國の擡頭と同様だつた。やがて、東洋の通貨の支配力は、完全に英國銀行の手に落ちるであらう。さうして、日本は？——、たゞ僅に支那の棉花を購買することによつて、印棉の擡頭を壓伏するより手段がないのだ。しかし、日本の好事家は國家の利得を考へることよりも、自身の利得を引き上げる印度の綿の花の容貌に、ますます快感を感じ出した。此の麻藥の醒めぬ間に、着々として支那の棉花に手を延ばすのは、英國だつた。さうして、支那は、支那の中に住む者が、何者であらうとも、彼らの蓄積が保護されることになつて一、エの保護するものを保護

しなければならぬのだ。さうして、彼らから絶えず守護されつつあるものは、同様に英國の銀行だつた。

參木は此の綿の花の中から咲き出した巨大な英國の勢力を考へる度毎に、母國の現狀を心配した。彼の眼に映る母國は——母國は絶えず人口が激増した。生産力は、その原料の生産地が、各國同様、最早や支那以外にはないのであつた。さうして、經濟力は？　その貧しい經濟力は、支那へ流れ込んだまま、行衛不明になつてゐた。思想は？　小舟の中で沸騰しながら、その小舟を、、、、、と叫んでゐる。

原料のない國が、いかに、、しやうとも同じことだ、と參木は思つた。だが、いづれ盡くの國は、、、、であらう。だが、英國の顚覆しない限り、顚覆した盡くの國は不幸である。先づ何事も、印度が獨立したその後だ。正義は印度より來るであらう。それまで、母國はあらゆる觀念を切り拔けて、、を防がねばならぬ、と參木は思つた。

參木はそれまで、此の机の上で、元貨を英貨のボンドに換算し續けなければならぬのだ。

彼は正午になると煙草を吸ひに廣場へ出た。女工達は工場の門から溢れて來た。彼女達は圓光のやうに身體の周圍に綿の粉を漂はせながら、屋臺の前に重なり合つて饂飩を食べた。忽ち、細な綿の粉は動揺する少女達の一群の上で、蚊柱のやうに舞ひ上つた。肺尖カタルの咳きが湯氣を立てた饂飩の鉢に響いてゐた。急がしさうに彼女らは足踏みをしたり、舞ひ歩いたりしながら饂飩を吹いた。耳環の群れが揺れつつ積つた塵埃の中で伸縮した。

遠く續いた石炭の土手の中から、發電所のガラスが光つてゐた。その奥で廻轉してゐる機械の中では、支那人の團結の思想が反抗を呼びながら、濛々と高重に迫つてゐるのだ。そこでは高重は、その精悍な職工團の一團の前で、一枚の皮膚をもつて、なほにやにやと笑ひ續けて防がねばならぬのであらう。

參木は河の方を見た。河には、各國の軍艦が本國の意志を持つて、砲列を敷きながら、城砦のやうに塊つて停つてゐた。

參木は思つた。自分は何を爲すべきか、と。やがて、競子は一定の鰤のやうに、產卵のために此の河を登つて來るにちがひない。だが、それがいつたい何んであらう。自分は日本を愛せねばならぬ。が、それはいつたい、どうすれば良いのであらう。しかし、——先づ、何者よりも東洋の支配者、英國を！　と參木は思つた。

彼はだんだん、日光の中で、競子の良人の死ぬことを望んでゐた自分自身が鰤のやうに馬鹿馬鹿しく見えて來た。

十

ホールの櫻が最後のジャズで慄へ出した。振り廻されるトロンボーンとコルネット。樂器の中のマニラ人の黒い皮膚からむき出る齒。ホールを包んだグラスの中の酒の波。盆栽の森に降る塵埃。投げられるテープの暴風を身に巻いて踊る踊り子。腰と腰とが突き衝る度毎に甲谷は醉ひが廻つて云ひ始めた。

「いや、これは失禮、いや、これは失禮。」

階段の暗い口から、一團のアメリカの水兵が現れると、踊りながら踊りの中へ流れ込んだ。酒の匂ひを波立たせた踊場は、一層激しく搖れ出した。叫び出したピッコロに合せて踏み鳴る足音。歡喜の歌。きりきり廻るスカートの鋭い端に斬られた疲れた腰。足と足と、肩と腰との旋律の上で、三色のスポットが明滅した。輝やく首環、仰向く唇、足の中へ辷る足。

「いや、これは失禮、いや、これは失禮。」

宮子はテープの波を首と肩とで押し分けながら、ひとり部屋の隅で動かぬ參木の顔へ眼を流した。ドイツ人を抱くアメリカ人、ロシア人を抱くスペイン人、混血兒と突き衝るポルトギーズ。椅子の足を蹴飛ばしてゐるノルエー人。接吻の雨を降らして騒ぐイギリス人。シャムとフランスとイタリヤとブルガリアとの醉つぱらひ。さうして、ただ參木だけは、椅子の脚に膝をついたまま、此のテープの網に伏せられた各國人の肉感を蓋のやうに見詰めてゐた。

踊りがすむと人々はもたれ合つて場外へ雪崩れ出した。廻轉ドアは踊子の消える度毎に廻つていつた。火は一つ一つと消え始めた。逆さまに片附けられる椅子の足が、テーブルの上で俄に生き生きと並び出した。さうして、金庫の鍵が靜に廻り終ると、いつの間にか影をひそめた樂器の後に、羽根を閉ざしたピアノが一臺、黒々と沈んでゐた。

甲谷は漸くひとつ取り殘された燈火の下で、尻もちをついたまま自分の影に云つてゐた。

「いや、これは失禮、いや、これは失禮。」

參木は此の急激に靜つたホールの疲勞に鋭い快感を感じて來た。彼は身動きも現さず、甲谷の鈍い醉態を眺めたまま時計の音を聞いてゐた。天井の隅で塵埃と煙の一群が輕々と戯れては消えていつた。

甲谷は散らかつたテープの塊を抱きながら、首を振り振り、呟くやうに唄ひ出した。

Casi no he caido,
Traigame algo mas,
No es nada no toque.

[illegible]にまでまだ飲みたいと、日頃自慢のスペニッシュ・ソングを歌ひ出

[illegible]にかゝへると、森閑としたホールの白いテープの[illegible]を、[illegible]
ながら歩き出した。と、ふとどこかのカーテンが揺らめくと、[illegible]
から青い微光が漣のやうに流れて來た。
「まア、甲谷さん、駄目だわね。」
歸り仕度になつた帽子がドアから二人の[illegible]へ[illegible]
らぶらしてゐる甲谷の片腕を支へながら參木に[illegible]つた。
「これからどこまでお歸りになるつもり。」
「さア、まだ、どこにしやうかと思つてゐるところ[illegible]」
「ちや、あたしん所へいらつしやいな。[illegible]
くの心機よ。」
「そりや、あなたさへかまはなければ[illegible]
「あたしはいゝの。だけど、あなた、[illegible]
「いや、此奴はいつでも[illegible]」
[illegible]
つた。
[illegible]

十一

[illegible]

「ええ、ええ、そりや、毎日あなたのことを伺つたわ。それであたし、實は少々、あなたのことを輕蔑したの。だつて、あなたは、あたしのやうな女を輕蔑ばかりしてらつしやる方でせう。」
「しかし、僕があなたを見たのは、今が初めぢやありませんか。」
「そんなことは、何んの云ひわけにもならないわ。あたしは男の方を一目見れば、その方がどんなことを考へたかつて、直ぐ分るの。これだけは、いつもあたしの自慢だから、もう何も仰言らないで。ね、もうそのことは此の次ね。あなたがどれほどあの方を愛してらつしやるかつてことだつて、少々あなたを輕蔑しただけで、すんでるの。」
「何をあなたは云ひ出すんです。」と參木は云つた。
「いいえね、もうこれは別のことなの。どうしてあたし、こんなことを云つたんでせう。さア、召上れ、これはサルパリラつておかしなものなの。踊つた後は、これでなくちや駄目なのよ。」
「甲谷はそんなことまで云つたんですか。」
「ほら、またおかしな顔をなさるわね。甲谷さんが何を仰言らうと、いいぢやないの。あなたはあなたで、ここにかうしてゐて下されば、あたし、それで嬉しいの。あたし今夜は眠らないわ。」
「あなたは疲れてゐらつしやるんぢやありませんか。」
「ええ、あたし、もういつもならくたくたよ。御免なさいね。こんなに長くなつたりして。だけど、かうしてゐると、あなたといくらでもお話が出來さうなの。あたし、今夜は饒舌つてよ。あなた眠くなつたら、甲谷さんの所で寢て頂戴。あたしここで、かうして寢て了ふかも知れないから。」
「ぢや、もうどうぞ、僕はここにかうしてたつて、疲れてやしませんから。」
「いいの。あたし、あなたを眠らせるくらひなら、此の長椅子だつてお貸しするわ。あたしがここに寢てゐるのだつて、あなたを起してをきたいからなの。ね、分つたでせう。まアそんなに汚なさうに部屋の中を見なくつたつて、踊子の生活なんて、分つてゐるぢやありませんか。いづれお察しの通り、ろくなことなんかしてなくつてよ。」
刺戟の強い白蓮花が宮子の指先きで廻されると、曙色の花瓣が酒の中に散らかつた。彼女は紫檀の圓卓の上から花瓶を取ると、花の名前を讀み上げながら朝毎の花賣の眞似をし始めた。
「鶏子花、倍々花、玫瑰花、白蘭花、パーレーホツホー、メーリーホ、まア、今夜は若いわねえ。あたし、かう云ふ夜はきつと白菜の夢を見るに定つてゐるの。」
彼女は花瓣を埋つたコツプを參木に上げて飲みほすと、身體を反らして後の煙草を捜し出した。めくれ上つたローブの下で動く膝。參木は

參木はいつの間にかむしり取られた白蘭花の蔓だけを酒の中で廻してゐた。

「あ、さうさう、あたしあなたにお見せしたいものがあつたんだわ。あたしには今五人の戀人が揃つてゐるの。フランス人とイタリア人と、イギリス人と支那人と、アメリカ人なの。まだその他にもないことはないんだけど、今は儉約して腕を持たせてやるだけにしてあるの。」

彼女は吸ひかけた煙草を膝で挾むと、抽斗の中からアルバムを取り出した。

「ね、此のフランス人はミシエルつて云ふの、それからこれは、アメリカ人、その他のも見て頂戴、どれもこれも立派な男で蓮の實みたいに甘いのが特長よ。まアその日本の女を好きなことつて、お話にならないわ。あれはきつと、奥さんに虐められて來たからね。だからあたし、出來るだけさう云ふ人には猫を冠つて大切にしてやるの。」

參木は宮子の戀人の顔を見ることよりも、今は彼女に近づく好奇のためにだんだん椅子を動かした。彼女は足を縮めると參木に云つた。

「さア、もつとこちらへ來て頂戴。そこぢや、あたしの戀人の顔が眞黒に見えるぢやないの。」

「いいわよ、たまにはさう云ふ立派な顔も、見と
こちらへいらつしやいつて、あなたには、叱らなき

「もうここまで來れば、こんなにはつきり見えるん

「あたし、あなたが、何を恐わがつてびくびくしてら
分つてゐるのよ。だけど、安心して頂戴、あたしの戀人
ここに五人も並んでゐるんですからね。あなたのやうに
を盗られて青ざめてゐる人なんか、あたしは相手にしない

參木は上眼で宮子の顔を見た。どこか身體の中の片端で、
び上る感情を制しながらにやにやと笑ひ出した。宮子は參木
つたテーブルの一角へ足を上げるとまた云つた。

「ね、もうちよつとは怒つてらつしやる頃ぢやないの。でも、
にはあなたの戀人が御主人とどんなことをしてらつしやるかつ
ことが、それはそれはよく分るのよ。だから、あたしはあなた
の毒で仕樣がないの。あたしの戀人なんか、まア、競爭であた
の廻りのことをしてくれるの。此の下の毛氈だつて、これはミシ
がコオラッサンだつて持つて來てくれたものなんだし、此のクシ
の天鵞絨だつて、イギリス人がスキユタリだからどうだとか、ビ
チンがどうだとか云つてかつぎ込んで來てくれたものばかりなの。」

「それは僕にはかまひませんが、もうその足だけは上げないでくれ給へ。」と參木は云つた。

「あら、まア、あたし、いつの間に足なんか上げたんでせう。踊子は足が大切なもんだけど、それほど大切なもんぢやないわ。御免なさいな。あたし疲れると、何をし出すかしれないの。これであたし、踊子なんかになつたのね。」

「あなたは戀人が來たときでも、そんなことをなさるんですか。」

「まア、そろそろ、馬鹿になさるわね。あたしの戀人なんか、あたしにこんなことをさせたりするもんですか。」

參木は宮子が兩手を擴げたやうに思はれた。彼は自分がいかに馬鹿かを清算せずにはをれなくなつた。と、參木は思はず立ち上つた。彼はオルガの跳ね上つた足を思ひ出した。

と、彼はいつの間にか宮子の傍に坐つてゐた。

「それから?」と宮子は云つた。

參木は彼女の唇の端に流れた嘲弄を感じると、いきなり宮子の首を締めつけた。彼女のマルセル式の頭髮が長椅子の背中を轉々と轉がつた。宮子は聲に笑ひを波立たせながら參木の顏を叩いて云つた。

「まア、あなたでも、そんなことを知つてらつしやつたのね。あたし、油斷をしちやつて、失敗つたわ。」

白蘭花の花瓣が宮子の口に含まれると、次ぎ次ぎに參木の顏へ吹きつけられた。クションが長椅子の逆毛を光らせつつ辷り出した。と、やがて、聲をひそめて浮き上つた彼女の典雅な支那沓が、指先に銀色の栗鼠の刺繍を曲げながら慄へ出した。

ふと、參木は思はぬ危險區劃に浸入してゐる自分に氣がついた。彼は飛び上ると鏡を見た。——何と下品な顏ではないか。彼女は自分の中から此の汚さを嗅ぎつけたにちがひない、と思ふと彼は、再び突つ立つたまま宮子の顏を睨んでゐた。

宮子は片脇にクションを抱き込むと、突然大きな聲で笑ひ出した。

「まア、あなたは、心配ばかりしてらつして。あなたのなさるやうなことなんか、なんでもないわ。あたし、あなたなんかに、悲しまされると思つてらつしちや間違ひよ。さア、こゝへいらつしやい。そんな恐ろしい顏は、なるだけ鏡の中でして頂戴。」

參木は手丸にとられた自分を識つた。彼はやり場のなくなつた自分の顏を感じると、此の悲慘な醜さが、どこから襲つて來たのであらうかと考へた。彼は再び宮子の傍へ坐ると云つた。

「さア、もう、そろそろ夜が明け出して來ましたよ。」

「まア、よくいらつしたわね、あなたは私を御覽になつたときから……

あなたを見たときから、あなたを愛しちやいけないとばかり思つてゐたの。でも、もう駄目よ。あなたとあたしは、これから喧嘩ばかりしてなきアならないわ。」

心はずるずる辷つていく。彼は肉體よりも先立つ自分の心の危險さを考へた。彼は立ち上ると宮子に云つた。

「ぢや、もうこれで失禮しましやう。さやうなら。」

宮子は不意を打たれて默つてゐた。參木はそのまま部屋の外へ出やうとした。

「まア、參木さん、夜が明けるのに、あたしひとりでなんかゐられないわ。あなたは禮儀つて云ふものを御存知ないの。」

參木は振り返ると、絨氈の上に轉げてゐたアルバムを足で踏みつけた。

「ぢや、今夜はもうこれだけで、赦してくれ給へ。」

彼は明け始めた綠色の戸外へ、さつさとひとり出ていつた。

（或る長篇の第二篇）



冷たい靄

（『眞知子』のつゞき）

野上彌生子

一

「ロウザを有り難う。彼女が私を鞭打つ。私の弱さを、私の怯懦を、私の胡魔化しを、私の一切の微温的なものを。——それが私に起りかけてゐるこのごろの變化といつしよになつて、私の平靜を覆へしてゐます。今日までお禮の手紙を書かなかつたことを許して下さい。身體はまだ本統ではないけれども、働くことはずゐぶん働いてゐます。一昨夜の音樂會の話聞きました。ではいづれ、また。」

封筒の中にたつた一枚入つてゐた小型の書簡箋には、これだけしか書いてなかつた。上京前に田舍から貰つたやうな便りは別として、米子は大概の場合長い手紙は書かなかつた。この流儀には眞知子も慣れてゐる筈であつたに拘はらず、今日の手紙は、短かさのためより、もつと何か書きたいのを端折つて、義務的に、おくれた受取の申譯ばかりに書いたと云ふ風な書き方で彼女を不愉快にした。その物足らなさは、米子の東北人らしい無口に對して時々感じさせられるじれつたさに似てゐた。眞知子は二度とは讀み返さ

ず、封筒に押し込んで机の上に投げ出しながら、口に出して云つた。

あのひとの一番わるい癖なんだわ、これが。——

併しその短い手紙に省略されてあることを察するのは、さうむづかしいことではなかつた。眞知子は米子の最近の思想的動搖を知つてゐた。闘に揶揄されてゐた所謂オウ゛ェン的な殻から脱し切らうとあせりながら、眞に勇敢に、彼等の戰陣で、彼等と共に戰ひ得るかどうかゞ彼女の苦しい逡巡であつた。

『私が弱いのは批判的になるからよ。ブルジョアジの、それが血の作用だなんて云はれると口惜しいのだけれど。』

『なら全然批判的ぢやないの、あの人たちは。自分の仕事に對して。』

『實行者が最も強いのは最も批判的でない時でせう。』

『本統は最も批判的であつて最も強い筈ぢやない。』

『どちらだつて、そんなことを論じてゐられるのは岸に立つた傍觀者なのよ。あんな人たちから見れば。あんな人たちはたゞ溺れまいとして、泳いで、波と戰つてるだけなんだから。』

この前逢つた時の、對話の斷片を眞知子は思ひ浮べた。米子の意味する變化が、終に自分も彼等といつしよに波の中に拔手を切らうとするのであつたとすれば。——それ以外にその言葉を解釋することは出來なかつたので、置き去りにされた寂しさと共に、今後はこの唯一の親しい友だちにさへ、一定の距離を以つて見られるであらうことに眞知子は辛らさを感じた。と、闘が初對面の時から示した露骨なよそよそしさも、今はつきり理由づけられる氣がした。お前は仲間ではない。別な階級だ。所謂岸の傍觀者だ。——彼はあのひやゝかな眼で、あの左だけ聳やかした素つ氣ない肩で、あの全身の冷淡で、常にさう云つてゐたのだと思つた。

眞知子はもう一度手紙を取り上げた。一昨夜の音樂會の話聞きさした。——この附記が新たな強い關心で彼女を引きつけた。どんな風に彼は話したか、どんな言葉であの晩見たものや聞いたものを、あの有閑階級の奢侈や僞瞞や饒舌や暇潰しを彼は評したか、聞きたかつた。この願望は彼女が被評者の側に立つことの意識で滅じはしなかつた。却つてそれを厭ひ、それを輕蔑しながらなほその集團から脱却することの出來ない自分を、思ふさま痛罵されて見度いやうな、丁度サヂストが痛い鞭を悦ぶと同じ殘忍な興味を感じてゐた。眞知子は今日夕方からでも米子に逢ひに行かうと考へた。

併しその時、暮の贈答品を買ひに出るため用意してゐた母から呼ばれた。行くと、彼女も急いで外出の支度をするやうに命令された。

『あら、芝のお姉さんがいつしよの筈ぢやなかつたの。』

『今電話でことわつて來たのだよ。田舍のお父さんが見えて行けなく

なつたつて。』

『ちや延ばしたら。明日だつていゝんだせう。』

『そんな呑氣なことを云つて、一體もう何日だと思ふのです。』

眞知子は不平な顏を隱さないで、それつきり默つて部屋に引つ返した。が、十五分の後には身輕な洋服に着換へ、却つてまだ納戸でぐずついてゐた未亡人を促した。

『お母樣まだ。おそくなると混んで大變よ』

青銅の大きな二匹の獅子の蹲まつた入口から、客は幅いつぱいの密集隊になつて無限に間斷なく侵入した。各方面についた幾つかの階段と、野獸の檻に似た鐵のエレベイタが、まつ黑な、個を失つた、人間の團塊を上へ上へと運搬した。地下室から青い空の見える七階のてつぺんまで、そのあらゆる層に亘つて充滿した、それも殆んど八割以上婦人の群集は、目の前の物品を手當り次第掻き廻し、引つたくり、奪ひ合ひ、安いの高いのと値踏みし、または誰に似合ふか似合はないかを連と相談し、店員に叫びかけ、同じ八方からの呼び聲で容易に振り向かない彼もしくば彼女に舌打をし、もう一度高い聲を張りあげた。正月とクリスマスの需要を當て込んだ、毛織物、格安の反物、ショウル、帽子、玩具、おもちや、――斯う云ふもの、賣場では、シイルのコウトで勿體ぶつた奥さんも、赤ん坊をしよつた師走の引き詰め髪のかみさんと勇敢を爭つた。

この大骨折の買物は、もう何時間か母と共にその中に押し揉まれてゐた眞知子を貧血性にした。彼女は青くなつた顏で、時々神經的に唇をかんだ。なにか苛々してゐる時のこれは癖であつた。併し彼女のやうなそんな不快らしい顏をしてゐるものはほかには誰もゐなかつた。三越に買物に來て不機嫌な風をする。それは彼等の思惟を絶したことのやうに見えた。ますますひどくなる混亂と惡い空氣の中で、更に無數の雜多な履物から生ずる、それだけの無數の雜多な足音の亂れ合つた、それが割合に低いコンクリイトの天井と壁に反響する、騒然とした、氣の遠くなるやうな喧噪をものともせず、殆んど夢中で、露骨に引つ張り合ひや、掻き廻しを續けてゐる光景を見てゐると、眞知子はこの種の百貨店が持つ激しい誘惑力に對して怖れに近い驚きを感じないではゐられなかつた。

個々の店舖で賣られたとすれば、少くとも數丁の町を要した筈の物資が、一つの建物を何遍か上つたり下りたりするだけで手に入る。――たしかに大なる便利に相違なかつた。併しこれ等の組織は、そこに投下されてゐる資本の最初の企圖に從つて、單に客を便利にするに留まるべきではなかつた。便利以上の欲望を、必要以上の贅澤を、

來るほどの客の上に焚きつけなければならなかつた。三月毎に變へる新しい流行、店内の新しい装飾と新しい陳列法、新しい色、模樣、型、音樂、繪畫、花、小鳥——さへも小鳥屋の店から雇つてゐる、その網羅と聚集と變化は、すべてその目的のためであつた。同時にまたそれは尨大な資本のみが發揮させ得る特殊の煽動力であつた。

眞知子はそこに無知覺狀態の興奮を以つていぢり廻されてゐる、ちりめんや、絹や、めりんすの一束が、知らず〲どこかの若女房の袖に入つたり、風呂敷に包み込まれたりすることの生ずるのを決して怪しまなかつた。その現象の最も深刻な實例をさへ彼女は知つてゐた。

父の在世中執事をつとめてゐた老人の家に、遠縁のみなし兒の娘が養はれてゐた。彼女は半分女中の役を引き受けながら職業女學校に通つてゐた。刺繍科であつた。卒業すると有名な百貨店の刺繍部に入ることになつた。××の刺繍部に勤務する。おゝ、何と云ふ人聞のよい、晴れがましい地位であつたらう。彼女は執事の家を出て近所で間借をした。大事な資本の指をそれ以上仕事で荒らさないためにも、それは、必要であつた。しかし彼女の日給は一圓三十錢であつた。工場が郊外にあつて電車に二度乘らなければならなかつた。その上積立金とか何とか差し引かれると八十錢とは殘らなかつた。彼女はその八十錢で食べて、着て、その下に眠る屋根の代を支拂はなければならなかつた。その八十錢のために朝の八時から夕方の五時まで、夜業のある時には八時過まで、刺繍臺に縛りつけられた。それで彼女はどんな見事な刺繍をしたであらうか。——

一年の間、彼女は紋付の裾模樣につく葉の一部分を縫はされた。仲間の誰かが花の一部分を。また誰かが殘りの何かの一部分を。仕上げは年取つた男の職人の手に廻された。あけても暮れても綠の糸で一枚の葉の一部分だけ縫ひ取する。それが全體としてどれほど美術的な圖案を凝らした裾模樣であらうとも、彼女はその美しいものを完成する悦びに預かることは出來なかつた。彼女の刺繍臺で待つ仕事は常にその中の綠の葉の斷片である。

ドストイエフスキが「死人の家」に於て語つてゐる言葉に依れば、一つのバケツに水を入れ、それを絶えず他の一つのバケツからバケツへと移すやうな仕事しか與へない時、囚人は死ぬか發狂すると云ふ。彼女は死ななかつた代り瞬間的に狂人となつた。

仕上げの老職人とのちよつとした口論から、出來上つて、仕立部に廻すばかりになつてゐた振袖を、彼女は鋏でちよき〲と切りこまざいた。

「憎らしくて、かあつとなりましたの。あれつぽちの給金でやかましい小言を云はれて縫ひ取つたものが、さて一枚たつて自分のものにな

ゐるのぢやなしともつたら。——殊に一年ぢうの骨の折れる仕事の三分の二は、岩崎さんと三井さんのお誂だつて云ふんですからね。馬鹿馬鹿しくて、本氣につとめられやしませんわ。』

辨償金を出して貰つて、もう一度執事の家に歸つた時、斯う云つて話した彼女の利かぬ氣らしい、口許に小さい傷痕のある淺黑い顏を、眞知子は今でも思ひ出すことが出來た。

すぐそばの賣場で、台の上に中こごみになつて敏活に半襟を箱に詰めてゐる、若いセルのお仕着をはをつた女店員を眞知子はぢつと見てゐた。年恰好や顏や身體つきの印象が、その時思ひ出してゐた娘に似てゐた。

『馬鹿々々しくて、本氣につとめられやしませんわ。』

或る時、この娘も同じ嘆聲を洩らさないであらうか。——

しかし今はそんなどころではなかつた。彼女の前では一時に四十本以上の手が思ひ〳〵の色や刺繡の半襟の上に交錯する。競爭でニッケルの環から引き拔く。彼女は他の二人の朋輩と共に、撰まれた一筋一筋に就いて勘定し、金を受け取り、疊み、また箱へ、でなければ紙袋へ、大急ぎで包んで渡す。

『馬鹿々々しくて、本氣につとめられやしませんわ。』

云ふ代りに、丁度機械人間の發聲のやうに紊戯に叫ぶ。

『ありがたうございます。』

『これ×子さんにどうだらう。』

母はえんじ色に小櫻を泄し縫ひにした一筋を取り上げた。

『いゝ半襟だわ。』

『でも、これだけ出すんならいつそ反物にしようか知ら。』

『どちらだつて同じよ、早く極めてつた方がいゝわ。』

『そんな無精を云ひ出せば、買物は出來やしないよ。』

母は半襟を置き、今度は隣りの襦袢の袖を探しはじめた。半ダスのハンケチを買ふのも、これ等の移動を二三遍くり返さないではすまなかつた。さうして堪らない雜閙だの、氣分がわるくなりさうだのと云ひながら、未亡人はほかの場合よりもずつと精力的で、周圍に負けない臆面なさで、どこにでも割り込み、なににでも手を出した。

眞知子はあとではただ母の側について壓されるのを防いだり、足を踏まれないやうに氣をつけたりするだけで、なにか相談されてもいい加減に答へた。疲れてうるさくなつたせゐもあるが、それより母の選擇を支配してゐる明白な醜い意圖が、だん〳〵と厭はしくなつてゐた。貰つた人を悦ばすため、または受け取つた家を滿足させるために選ばれたものは、正直に云つて決してひと品もなかつた。七點を十點

に、四圓を五圓に、その見せかけが何より大切であつた。
未亡人に限らず、そこに奮鬪してゐる大部分の客の目的と努力は、みんなそれであるらしかつた。が、そのために眞知子は嫌惡を割引しようとは思はなかつた。皆んなのしてゐる醜さを、自分の最も親しいものがいつしよに平氣でしてゐるのが我慢出來ない氣がした。
『來年から省けるところは省くといいのね。』
『そんな譯には行かないよ。しきたりつてものがあるから。』
『そのしきたりを止すのよ。』
『それが口で云ふやうに、無造作に止されるものかどうか考へて御覧。』
『なんでもないわ、お母様が餘計な見えを捨てる氣にさへなれば。』
二人は赤く灯のついた、ガスストウヴの陳列場を、向ふの洋家具部の方へ抜けようとしてゐた。そこはめづらしく人があまりゐなかつた。それに床から積み立てた絨氈が、厚い壁になつて一方を遮斷してゐたので、籠つた、自分たちだけのやうな感じが、家まで辛抱しきれないで眞知子にそれを云はせた。
未亡人は娘を睨み、黒いショウルの下で肩をゆすぶつた。夫の死後、どうにかして在來の慣例を崩さぬこと、それに依つて所謂家の格を守らうとすることを生活の目標としてゐる母に取つて、自分の言葉が無情すぎることは眞知子には分つてゐた。併し無駄事はもう大概でよさせた方がいゝのだと彼女は信じた。それだけの餘裕は未亡人にはなかつた。眞知子は今日金入に疊み込まれた何枚かの紙幣にこもつてゐる母の苦心を、誰よりもよく知つてゐた。寧ろ彼女よりほかに知るものはなかつた。子供といつしよに、犬まで連れて呑氣に客になつてゐる姑夫婦さへも恐らく。——ましてそんなところを母と歩いてゐれば、よそ目には金に不自由のない親子が、新年用の贅澤な敷物でもあさつてゐると見えたかも知れないことが、自嘲的な恥を彼女に感じさせた。
數分の後、未亡人は實際絨氈の一つも買ひに來たやうな、少くともさつきの見苦しい買物はした覺えもないやうなお上品ぶりを粧つてゐた。彼女は多喜子とほかに若い女中を連れた柘植夫人に出逢つた。
『なんと云ふ人でございませう。』
『氣の弱いものは、何を買はうたつて寄りつかれないくらゐですわ。』
斯う云ふやりとりについで、二人の母親はお互ひに相手方の娘を賞め合つた。柘植夫人は眞知子の洋服が如何にも活潑さうだと云ふことを、未亡人はまた多喜子の美しい髮の出來榮を。
多喜子は高島田に結つてゐた。
『河井さんの新年のお皷の會に、このひとが初めて何か打たせて頂く

とかつて申しますのでね。』

『おや、もうそんなに御上達なさいましたの。』

『どうせ歯入れ屋さんでせうが、とにかく、あゝ云つた場合は日本髪の方がよささうだと思ひまして結はせて見たのですが、なんですか、ちつともまだ恰好がつかなくて。』

『いゝえ、よくお似合ひになりますよ。本當にお樂しみでございますわ。』

未亡人の最後の附け加へには、お世辭だけでない實感が籠つてゐた。多喜子の高島田は、彼女の母が吹聴したやうに皷の會の下準備のみではなく、豫想されてゐる河井との結婚の日の晴れの裝ひの用意でもあつたであらうから。

彼等に別れると、未亡人は娘に訊いた。

『多喜子さんは一。』

『來年でせう。富美子さんとひとつ違ひだとか云つてたから。』

未亡人は重い溜息をした。それから、多喜子の年齢が自分たちになんの關係があるだらうと云ふ風にすましてゐる眞知子を、尻眼に嚴しく吟味するやうに眺めてから、急に彼女の帽子のわる口を云ひ出した。

『だいち色が變だし、形もよくないよ。』

『今まで、そんなこと聞いたか知ら。』

『聞きましたとも。今日だつてあの新しい方のになさいつて云つたのに。』

『どちらだつて同じよ』

『ほら、さういふことを云ふ。』

歩きながら母が人の中で怒つてゐるのが眞知子にはをかしかつた。たとひ母の氣に入つた帽子を持つてゐて、そこでかぶり直したとしても、誰か知つた若奥さんの丸髷にでもこの次見つけ出せば、今の帽子より一層ひどくそれはけなされたであらう。

併し幸ひに未亡人をもう一度ヒステリにするやうな相手には出逢はないうち、彼等はどうにか買物をすました。地下室の受取場に下りた時、未亡人のコウトのポケットから木札が二十枚近く出た。そこでも彼等はまた驚されたり揉まれたりした。かさばる物は大部分屆けに廻したに拘はらず、なほ數箇の紙包が二人の手に殘つた。

『自動車にしませうね。』

眞知子は自分でそれに極めて命じた。未亡人も今日はガソリンの包ひを我慢出來ないとは主張しなかつた。が、自動車が動きはじめると、

『細いのがあつたか知ら。』

さう獨り言につぶやき、大のものであつた、古風な印傳の金入を取り出した。開けて、覗いて見て、ぱちんと云はせて閉ぢ、早々にも

『どんな話。』
『山瀬さんが臺灣の大學に行くやうになるかも知れないつて云ふぢやないか。』
眞知子は深い鬢の下で急に眼を大きくした。彼女の驚きは義兄の好運に對するよりも、彼でも大學教授になり得ると云ふことの方に强かつた。
母はみね子自身はまだよく話を聞かされてゐないのかも知れないと云ひ添へた。
『まだはつきりは極まらないんだし、それに何だか大そう秘密なんださうで、私にだけ耳に入れるつてことだつたから。』
それには必要があつた。赴任が決定すれば同時に彼は海外留學を命ぜられる筈であつた。その間妻と子供を預かつて貰へるかどうか、彼はそれを昨夜相談したのであつた。
『お母樣が賑やかになつていゝぢやないの。』
眞知子はただそれだけ云つた。
『そりや私だつて、みね子や子供を山瀬さんの田舍にやりたくはないけれど、さうするには一應北海道の方の意向も聞かなければならないしね。』
『北海道だつて、そんなことに話の解らない人ではないわ。』
『それにしたつて、ものには順序つてものがありますよ。』
決して順序だけではなかつた。たとひ愛する娘や孫にしても、それを二年間も同居させるとなれば、北海道との間に絡む面倒な金錢上の取り極めに、未亡人は新たな改訂を求めなければならないであらう。
眞知子はそれ以上この話を續けようとはしなかつた。
自動車は彼等の沈默に潜んでゐる問題とは非常に不似合な、木深い、堂々とした邸宅の前で、やがて留まつた。
『お歸んなさい。──また出て來た。アキルや、アキルや、飛びつくんぢやありませんよ。──まあちやん、泥だらけにされるわ。いゝからふつておやんなさい。この頃あんまりふざけ過ぎるんだから。──どうでせう、あの恰好。ねえ、きみちやん、厭なアキルねえ。──こら、アキルや。アキルつてば──』
小さい娘を抱いて玄關に出迎へたみね子は、庭から駈け出してふざけ廻る犬を、式台の上に立つて大きな聲をして叱つた。が、いつもさうである通り、彼女は本統に叱つてゐるのか、自分も面白がつて犬といつしよに騷いでゐるのか分らなかつた。どちらにしてもその仕方は小さい娘を喜ばせた。で、犬がふざけると、娘の喜ぶより彼女はずつ

と落淚となつた。

起き拔けにどこへか訪問に行つて、未亡人と眞知子が出掛ける時には留守であつた山瀨は、一時間前歸つたと云つて先に風呂に入つてゐた。みね子は、外から歸宅するとなにより先づ手を洗ひに行く母について自分もばた〳〵と洗面場に驅け込み、隣りの夫に皆んなが歸つて來たことを知らせて、硝子戶越しに叫んだ。

その樂しさうな聲や、はしやいだ樣子も、平生のみね子とは違つてゐた。またたしかにそれは犬のせいだけではなかつた。彼女はまだ知らないかも分らないと想像されてゐたことを、夫から聞いたばかりであつた。その驚きと歡喜は、それを耳にした瞬間の密度でいまだに善良な妻の腕をいつぱいにしてゐたので、生理的に云つても早く誰かに洩らさないではゐられなかつた。

『ねえ、ちよつとまあちやん、山瀨が臺灣の大學に行くかも知れないのよ。』

洗面所から納戶に着換へに廻つた母を待ちきれず、彼女は茶の間で妹を捕へると直ぐはじめた。眞知子は母から今日ちよつと聞いた旨を答へた。

『あら、お母樣知つてゐらしたの。――昨晩山瀨から――さう。それが今日の話で八九分極まりさうになつたんですつて。あのひとつたら、私を吃驚りさせようともつて、今まで一言も知らせなかつたのよ。ひとが惡いわねえ。でも私怒りはしなかつたの。だつて十分確かつて見込のつかないうちは、話し度くても話さないと云ふのは、沈着な態度だわ。あのひとはあゝ見えてもさう云ふところがずいぶんあるのよ。』

『でも、臺灣ぢや大變だわね。』

『まあ、どうして。大學教授になつて、洋行が出來れば、臺灣ぐらゐ誰だつて平氣よ。ですから今度でも競爭者が可なり多いのだけれど、文部省の××さんがあのひとを推薦してくれてるんだつて云ふから、大丈夫らしいの。でも私思ふわ。これだけは幾ら推薦したくも、相手がその資格のある學者でなければ、從弟だつて兄弟だつて、どうする譯にも行かないんですものねえ。山瀨の勉强が今度やつと報いられるのよ。それにあのひとは、大學教授になりたいつてことが一生の望だつたのだから、とても悅んでるわ。――おや、もうあがつてらしたの。今まあちやんにあの話してきかしたところよ。』

みね子はそこへ湯上りのいゝ艶をして入つて來た夫を、崇拜に近い優しさで眺めた。

その晩の食卓は、この一つの話題のために祝祭になつた。殊に山瀨とみね子は外のことはなんにも話さなかつた。非常な熱心さで斯う云

ふ話が續けられる場合によくある通り、彼等の調子からは初めあつた疑問詞がふり落され、確實な肯定の言葉に入れ代つた。山瀬の期待された新たな地位は、みね子が妹に打ち明けた時よりも、食事の間に數倍がた鞏固になつてゐた。彼は大學教授になるかも知れないのではなく、既に立派な大學教授であつた。彼の妻はバナ、やぼんかんが庭先で一年ぢう香はしい實をつけてゐる臺灣の官舍に、どうかして母を招待することをさへ夢見た。

『お正月頃だと、あんまり暑くなくていゝ氣候だつて云ふから、その時分に一度是非入らつしやるといゝのよ。ねえ、あなた。』

『さうだ。來年の丁度今頃から入らつしやるといゝのです。眞知子さんもひとつどうです。』

『さうよ、まあちやんが一緒なら心配なしだわ。でも、お母樣、船がお嫌ひだつたのね。』

未亡人は以前向島の渡船でも醉つた位だと云つた。眞知子は船暈よりも生蕃に對する恐怖を楯に辭退した。

『まあ。生蕃なんて、そんなものが臺北の町のまん中にのこ〳〵出て來ると思ふの。まあちやんのやうでもない。』

みね子は大眞面目に妹に抗議し、そして臺北が如何に便利に美しい都會であるかを說明したあとから、急に思ひついたやうに、附け加へた。『でも、アキルどうして。置いてちや可哀想だし、きいちやんだつて淋しがるだらうし、少し位お金がかゝつたつていつしよに連れて行きませうよ。ねえ、きいちやん、さうしませうね、いゝことねえ。』

みね子は、隣りでいつになく獨りでおとなしく匙を動かしてゐた娘に頰ずりをした。

山瀬もアキルの旅費ぐらゐ平氣だと云つた。彼は悅びで氣が大きくなつてゐた。ふだんは晩の食卓で二杯だけ飲むことにしてゐる葡萄酒を、今夜は特別に一杯多くしたので、幾らか醉つてもゐた。

『斯うして考へると、人間の一心と云ふものは無駄にはならないものなんですね。』

彼は舌の上と頭と兩方のたのしいあと味を追ふやうに、赤らんだ眼がしらを眼鏡の下で細くした。『僕はこれでも高等學校の教師で一生終る積りはどうしてもなかつたのです。尤も大學でも東京の私立の教授ならいつでもなれたし、友だちで勸めてくれる者もあつたのですが、今更私立大學教授でもあるまいと云ふ氣がして、まああんな田舍にも辛抱したのです。』

『そりやさうよ。幾ら大學だつて私立は名ばかりですもの。免職にでもならない限り、官立の學校からそんなところへ行く人つてないわ。ねえ。』

眞知子は姉の誘ひかけに對して何とか答へなければならなかつた。が、丁度口に入つてゐたもので邪魔されてゐる間に、顯職にあつた官吏の未亡人として、おかみの仕事の確實さと賴もしさを、またそれの齎す名譽と特權を最もよく知つてゐた母が、代つて返事した。

『ほらね、お母様だつて考へは同じですわ。ですから私、今度でも滿洲が暑いの遠いのつて決して考へない積りよ。お兄さんだつて、さう云へば北海道なんですもの。──どつちかつてば暑いのは寒いよりか暮らしいゝし、殖民地俸はつくのだし、その上すぐ洋行が出來て、それで不足を云つちや勿體ないのよ。』

『さうです。正直に云へば僕はその洋行が何より樂しみなんです。北海道の兄さんとか、またあの河井さんとかの連中とは違つて、僕なんぞは斯う云ふ機會でもなければ留學するわけには行かないんですから。で、あゝ云ふ殖民地の新しい大學が、内地から誰か引き拔かうとする場合には、一番に洋行を條件にするんです。それに今云ふ殖民地俸の五割増を考へると、誰でもちよつと誘惑されますからね。やり方が大に巧妙ですよ。こちらの弱點をちやんと摑んで來るんだから。』

山瀨は醉のために助長された善良さで、自分のかゝつた罠を自分であけすけに分解して見せながら、愉快さうに──實際それは愉快な罠に相違なかつたから──笑聲を立てた。

未亡人は外國に行くとなれば、いつ頃出發の豫定で、いつまでゐることに決定したかを尋ねた。

『昨晩の話だとたしか二年でしたね。』

『それがどうも二年ゐられさうにないのです。××さんはなるたけ早く戻つてくれなくちや困ると今日話してゐましたから、まあ來年の四月時分立つとして、長くて一年半ぐらゐだらうと思ひます。』

未亡人は彼の答に滿足した。半年の節約は、北海道に對する物質的の氣象にも、同じ期間の短縮を生じさせる筈であつたから。

『どうせ半年やそこいら長くゐたつて同じだから、旅で煩つたりしないうち、なりたけ早く歸つて來た方がよござんすよ。』

未亡人は半分の眞情と半分の詐謀で附け加へた。

『僕もその積りなんです。昔のやうに三四年も留學期間を貰ふのとは違つて、一年半ぢやどこかの大學に入つて見るにしても、纏まつた勉強は出來ないんですからね。その點は初めから希望を持たないで、その代りヨウロッパぢうを呑氣に旅行して見ようと考へてゐるのです。』

『最初どこへいらつしやるの。』

眞知子は誰よりも先にお茶になつたので、熱い茶碗をさます間訊いて見た。

『勿論ドイツです。ドイツだけには一番長くゐる積りです。マアルブ

ルクにも行つて、逢へたらフッサアルにも逢つて來ますよ。』

『臺灣では倫理だけ。』

『哲學概論もやらなきやならないでせう。』

『おや、ドイツ語は。』

『それだけはもう持ちません。』

今の田舍の高等學校では專攻の教師が一人缺員になつてゐるため、少時間彼はドイツ語も受持たされてゐた。もし臺灣で同じ任務があるとすれば、その母國への旅行は短時日でもたしかに有效であるであらう。しかし倫理學や哲學概論と、一年か半年ヨウロッパをぐるぐる廻つて歩くことや、ドイツのどこかの町の下宿に何ケ月かとどまつて、ビイルの味といつしよにフッサアルの顔だけ覺えて來ることと、何か關係があるであらうか。――而かもそれが彼等の所謂留學であり、またそれが大學教授になることの重なる資格の一つであることが、眞知子を不思議がらせた。

しかし彼女はその疑問を口に出して無邪氣な姉夫婦の悦びを掻き亂す代りに、丁度飲み加減にさめたお茶と共にしづかにそれを胃の腑に流し込んだ。

電話のベルが鳴つた。

女中が小走りに驅けて行つた。ちようど手が離つてゐたから、茶の間に取りついだ。

『お孃樣、お電話でございます。』

『どこから。』

『鈴木樣とかつて仰しやるやうですが、なんですか混線してゐてはつきりいたしませんので。』

『女の方。』

『はい。』

そんな婦人に知つた人はなかつた。斯う云ふ場合には眞知子はもう一度聞き糺させるのが例であつたが、その時はすぐ立ち上り、女中と入れ代りに電話室にはいつた。

『もし、もし、――はい、左樣です。――』

取次がれた通り、若い、知らない婦人が、彼女を曾根の姓で確かめた後、少し待つことを頼んだ。一體誰がかけてるのだらう。――が、つぎの瞬間、はつきりした、聞き覺えのある男の聲が、受話器の底に現はれた。

『もし、もし、曾根さんですか。――僕です、關です。――』

眞知子は反射的に意味をなさない言葉で受けた。咽喉がなにかで塞がつて、ふだんの調子が出なかつた。

聲は幾らか窮屈さうに話した。女中の云つた通り、聲に錆聲が交

知らない人のことでも根掘り葉掘り聞いて氣にやむ癖のあるみね子さへ、短い同情の言葉を漏らしたに過ぎなかつた。

母はまた今から行かなくとも、明日の朝のことにしてはいけないのかと云つた。

『そんなこと仰しやつて、もしそれまでに萬一のことがあつたらどうして。』

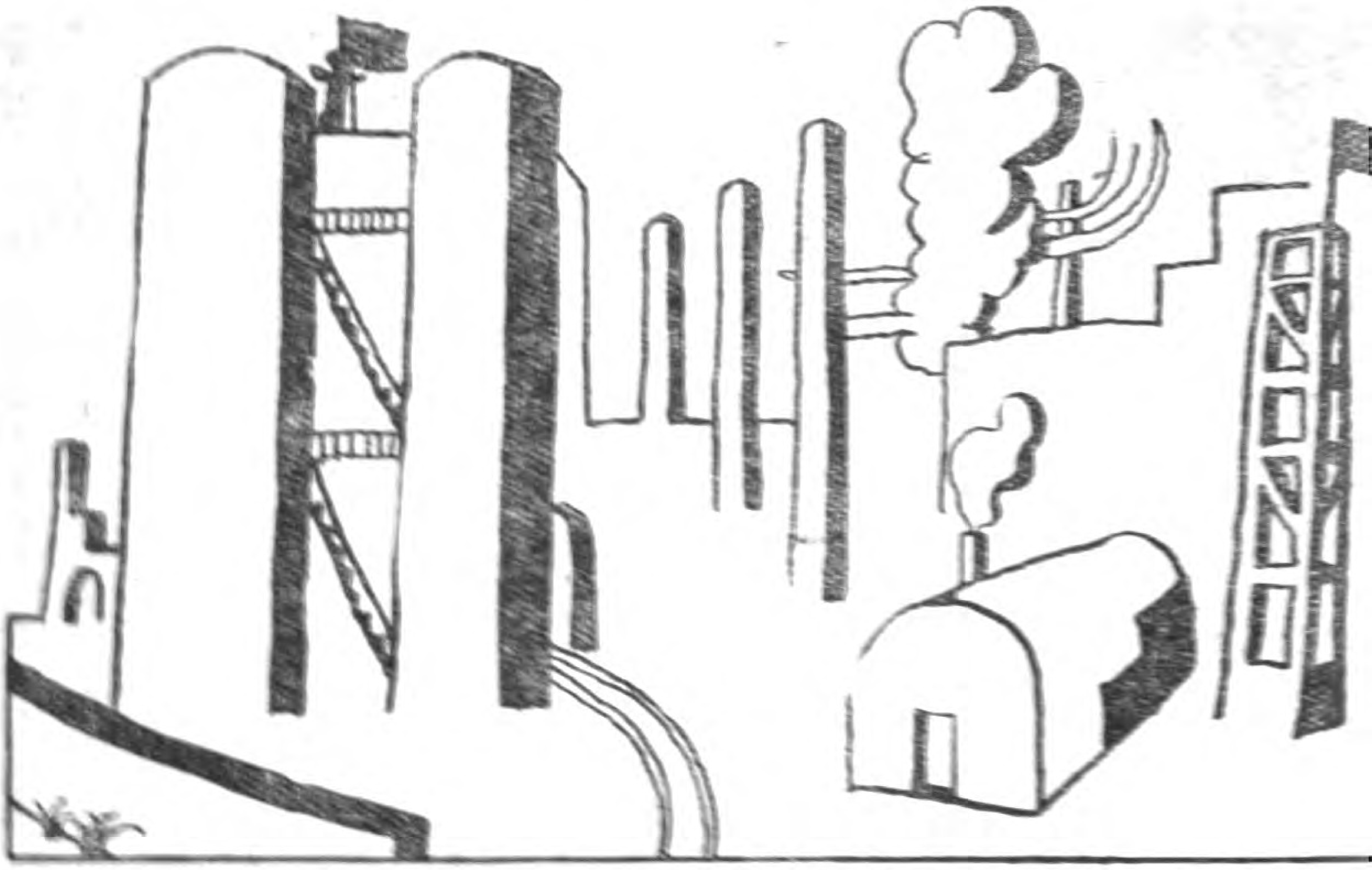
本統はそれほどの危險に米子が置かれてゐるとは信じてゐなかつたに拘はらず、眞知子は不自然な強さで母を拒んだ。

『ぢや、車になさい。若い娘がはじめてのところを斯んな夜になつてうろ〳〵するなんて、見つともないよ。』

『さうです、さうです。』山瀬もそれについて言葉を挾んだ。『さう云ふことは身分のある young lady のすべきことぢやありません。』

○ poor young lady に——

部屋に歸り、さつき脫いだばかりの洋服にもう一度着換へてから、さてと思つて念のため開けて見た金入に、五十錢銀貨がたつた二枚しか入つてゐないのを見た時、この嘲りが笛のやうに彼女の唇から迸つた。



シンピルスク號事件

林　房　雄

一

ひ起させずにはおかない手紙であつた。
　その寫眞も、彼の手紙の一つに同封されて運ばれたものである。たいして上手でない、露出の怪しい手札型の素人寫眞。雨の日の臺所のやうに、ぼんやり霞んだ光の中に、二三脚の椅子の頭と、頑丈な素木のテーブルを前景にして、ポスタアらしいものを一面にはりつけたしみだらけの板壁が朦朧と浮いてゐる。——展覽會場にしては殺風景すぎるし、場末の酒場にしては、ポスタアの模樣と位置が少々荒らすぎる。
　寫眞にそへられた李の手紙——支那流の青い野線のはいつた縦に細長い用箋に、薄いインクで書かれた手紙には、彼の達者な日本語で、次のやうな説明がついてゐた。
「……浦鹽で最後に案内されたのは、海員組合の勞働者倶樂部だつた。(手紙の他の部分によると、李は沿海州からチタのあたりまで旅行して、歸つて來たばかりのところであつた。)その倶樂部のサロン、といつても寫眞で見るとほりのバラック部屋だが、その部屋の壁の上に、僕は珍しい發見をした。
　それは、ポスタアと壁飾りの間に貼り交ぜられた赤い一枚の旗だ。旗といつても、薄い白木綿地をインクか何かで染めたらしい、縁の縫ひとりさへもしてない一メートルあまりの切れ地にすぎないのだが、それがかつて旗竿に結びついてゐたものであることは、片側の上下の端についてゐる小さな紐によつてわかる。
　旗には、東洋の墨で、次のやうな文字が浮いてゐた。

"Welcome our Comrade!
、、、、、、、、、、、、"
、
、、、、、、、、、、、
Kobe-Shibu."

同じ人種の深い興味をもつて、僕はこの旗の由來を案内の同志にたづねた。つい最近チタから移つて來たばかりの彼はそれを知らなかつた。よほど前からあるものらしいから、倶樂部の委員でも歸つて來たら聞いてあげようといふ答へだつた。が、出發前のあわただしさが、つひに彼の答へを受取る機會を僕に與へずに終つた。
　その時、許しを得て撮つておいた寫眞がこれだ。いつたいどうした旗なのだらうか？　君の國の勞働者によつてソヴエート・ユニオンに贈られたものには違ひないのだが、心あたりはないか？……」
　新しい好奇心をもつて、私は、寫眞の上部、右寄りの壁の上に浮いてゐる小さな黒い四邊形——問題の旗らしいものを眺めなほした。が、もとより小さすぎて、墨で書かれてあるといふ文字に至つては、その影さへも認めることは出來なかつた。

[illegible]

には、[illegible]

事情の[illegible]

[illegible]

なわけである。

これから[illegible]

[illegible]

二

[illegible]

、、、、、、、、、、、、、、、、は、演說會場の空氣を激しい効果をもつて緊張させた。そして、遊說隊が、大阪府下から、神戶市に移つたその夜の會の劈頭に、私はついに檢束されてしまつた。

、、、私は、、、、、、、、、、、、、。演說會の終るまでの檢束だらうから、火鉢のある高等係の部屋で待たうといつた。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。

「、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。」

、、、、、、しかし、私を留置場のすみにある保護室の方にまわしてくれた。

細長い留置場は、奴隷船の船底に似てゐた。暗くて寒くて臭ひがした。壓迫的な無理に作られた靜寂が支配してゐた。時々思ひ出したやうに、檻房の覗き窓が顏を出して何事かを哀願した。、、、、、、、、、、、、、、。女囚のゐる監の食事窓からは白い手が差し出された。、、、、、、、、、、、、、。

遠い天井から、十六燭光が縞をなして落ちて來る。私は豚のやうなその光の中で、こゝだけは扉のついてない保護室の一疊敷に腰をおろして、持つて來た雜誌をひろげた。

二十分ほどたつた時、看守の机の上の電話が激しく鳴つた。看守の[illegible]いて聞いて、[illegible]した。

「今晩は駄目らしいぞ。保護室じやあおさまるまい。」

廊下の簀の子板の上で足音が亂れた。扉が鳴つて、一人の男がよろめきこんだ。

粗い外套のポケットに兩手をつつこんで、背中を太々しくまげた恰好が、歩いてゐる猪を思ひ出させて妙に滑稽だつた。黑い隈のある大きな眼が、燐光に似たものを射出してゐた。彼は無表情な鼻を看守に向けて、場馴れた調子で住所姓名の控へをとらせた。記入がすむと、看守は私のゐる方を指していつた。

「あつちに行つとれ。」

彼は、兩手をポケットに入れたまゝの姿勢でのしのしと近づいて來た。そして思ひがけない私の本名をいつた。

「後藤君だらう。」

「おゝ北島！……」

北島幸造！――この組合運動の老將には、學生の頃、私達はよく煽動されたものだ。Ｉ造船所の、、、、、、、、、、、、、築地の海の夜霧を裂いてランチを飛ばす、、、、、、、の思ひ出、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、九州の炭坑者の話。長い組織者の經驗が鍛へあげた彼の巧みな話術は、私達の若い血をとよめかして湧きたたせた。

[illegible]

「君も……」

「うん、君のすぐあとに出て、、、問題でやられた。ほい、こん畜生！」

彼は突然手をのばして、私の外套のはしから、白い小さな粒をつまみとつて、指の間でぴちりと鳴らした。何時の間にはひあがつたのか、大きな虱であつた。

「今度の事件で、あんたは[illegible]だつたのか？」

私はたづねた。

[illegible]

に、[illegible]三人はいつて來た。三人とも若い勞働者であつた。一人は、、、、、、一人はカラが飛び出し、一人は、、、、、、、してゐた。

人數がふえたので、私達は一まとめにされて、便所に近い一番端つこの留置房に入れられることになつた。

それは妙な獨房だつた。廣さは普通の室の半分もなく、床は概のコンクリートで、その上に腐つた疊表が二枚ならべてある。[illegible]が破れてゐて、風がひゆう／＼吹き通した。[illegible]

[illegible]

襁衣のやうにべとぐくした蒲團を三枚投げこんで行つた。

臭ひのする青いぼろ切れの下に足を重ねて、私達は車座になつた。背筋を噛む寒氣から身をまもるために、身體をよせなければならなかつたのだ。

お互ひの體溫で、いくらか身體が溫まると、やがて雜談に花が咲いた。話の中心は、北島幸造であつた。彼の話は、聞き手を明るくはしやがせた。私達は大きな笑ひ聲さへ立てた。看守が怪しんで覗きに來ると、一同は、、、、、、、、、、、。思ふに、彼の煽動者的本能が、場所柄、つとめて快活で明るい話題を選び出したのであらう。

次に書くシンビルスク號の物語も、その中の一つである。そして、賢明な讀者のすでに想像するが如く、これが、あの李永根の寫眞の謎を私に解いてくれたその物語りなのである。

三

「一九一七年だから、大正七……いや八年。大正八年の終りから十年の正月すぎる頃までだ。そのシンビルスク號が、その神戸の港外に、場所はづれの浮標みたいに、ぽかんと浮いて立往生してゐたのは。」

と、北島君は始めた。

「ロシア義勇艦隊に所屬してゐた[illegible]だつたが、上海から神戸にやつて來たその翌日に、三月のケレンスキイ革命の報が傳つて、歸らうにも歸るところがなくなつた。まごまごしてゐるうちに十一月革命だ。政權はボルシエヴイキの手に移つた。シンビルスク號は、いよいよ動けなくなつたのであつた。

「あの、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、のないものにはわかるまい。それは僞氣だ。それは魔法だ。それは、、、、、、、、、、、、、、、、にしてしまつた。少くとも僕にはさう思へた。——反對物への轉化！　歷史の、、、といふ奴だ。

横つ腹に牡蠣などくつつけて、一年以上も港の泥水の中にぷかぷかしてゐた間抜けなシンビルスク號も、見事にその轉化をやつてのけた。昨日までの間抜けの船は一躍して勇士の船になつた。

そのうちにいよいよ、ソヴエートの委員が船をうけとりに來たといふ報導が新聞にのつた。僕等は、、、、、、、、、、、、、、につて神戸沖まで來てゐる、ぐづぐづしてはおれないぞ！　そんな氣がした。

組合の青年組のある日の集會で、シンビルスク號訪問の件が提案された。異議なし！　反對者のあらう筈がなく、集つた十人ばかりが全[illegible]した。

今から十年も前だから、僕らも若かつた。君達よりももつと若かつたかも知れない。、、、、、、、、、、、になつたばかりの頃で、神戸支部で全部合せて三十人あるかないかの有樣だつたが、どいつもこいつも、いいいがむしやらで向ふ見ずで、元氣だけはよかつた。

、、、、、、、、、、してゐるから駄目だらうといつても、なに吉田松蔭だつて黒船にのりこんだ、夜陰に乘じて決行するさ、と威勢がいゝ。言葉が通じないぞといつても、その時は筆談で行くさ、と日淸戰爭の通譯みたいな呑氣なことをいふ。

「それから三日目の午後。——

空はからりと晴れて、鷗がとんでゐた。風はいくらか强く、二月の波が白い齒をむいて港中をあばれまわつてゐた。

一行八名、第二棧橋から小さな傳馬船にのつて勢ひよく漕ぎ出した。

漕ぎ手は沖仲仕を親父にもつた造船工で、傳馬船もそいつが都合したのだが、彼は大いに犧牲的精神を發揮して、僕達がシンビルスク號にのりこんでゐる間、一人船に殘つて、知らぬ顏をしてそのあたりを流してゐるやうにちやんと手はずをきめてくれた。

「港外の綠色の波の上には、五色の旗をなびかせて、旅客船やら貨物船やらがぽかぽか浮いてゐた。その間を汽艇や發動機船が蜜蜂のやうにうなつて飛びまわる。黄色い小蜂に似た、、、、、、、は、幸ひに防波堤の附近をうろついてゐて、港外にはまだ出てゐない。

目的の船はなかなか見つからなかつた。豫め見當をつけておいたわけでなかつたし、その上外國の貨物船はどれもこれも灰色で同じやうな型をしてゐる。

だから

（SIN……SINBI——あいつだ！）

と、ローマ字をやつと讀めるやうになつたばかりの製鋼工が、靑筒會社の旅客船とならんだシンビルスク號を發見するまでには二時間近い時間がかゝつた。

一ひどく汚い船だ。見たところ四千噸はたしかにあつて堂々としてはゐるのだが、樺色のペンキが剝げて、錆が粉のやうに吹いてゐる。甲板には人影がない。まるで死んだ船だ。マストのまわりに黄色い積荷の木製のクレーンが、開いた指のやうに五六本、空にむかつてぽかんと突き出てゐるのも間が拔けてゐる。

それに、一ばんいけないことには、あれほど、、してゐた、、が主檣にも、船尾にも、チラリとも翻つてゐないではないか！

僕達は、あてがはづれてぽかんとした。ソヴエートの委員が來てるるといふのは新聞の嘘かも知れないぞ。

「が、ぐづついてゐるわけには行かなかつた。、、、の山蜂が防波堤の向ふで唸つてゐる。なんでもいゝから漕ぎつけろ！　幸ひに釣り梯子は、岸から見えない方の船腹についてゐた。一同どたどたととび移る。一人を殘して、傳馬船は沖に離れた。

僕は先頭にゐた。用意して來た旗を、旗手のやうにかまへて、甲板に駈けのぼつた。甲板は空つぽだつた。が、やがて足音と人聲がして、下甲板への通路になつてゐる犬小舍みたいなところから、若い二人の水夫がとび出して來た。鬚のある顏を僕等に向けて、ロシア語らしいので何か鋭く叫んだ。僕は持つて來た旗をふつて（ウラア！）といつた。一同がすかさず（ウラア！）と合せた。

相手はびつくりして立ちすくんだ。首を傾け、兩手をつき出してもう一度何か叫んだが、僕等がまた旗をふつてウラアをやつたので、面くらつたらしく、もとの穴にとびこんで姿をかくしてしまつた。その恰好で大きな溝鼬を思ひ出して、僕達は笑つた。

間もなく、穴の中からどかどかと人間がとび出して來た。甲板は人で一ぱいになつた。何か騷ぎが起りさうで氣味が惡くなつた。大いそぎで旗をヒロげて、書いてある字が讀めるやうに、高く差しあげた。頭だつた背の高い男が進み出て、旗の文字を讀まうとしたが、露語[illegible]なかつたらしく、顏を[illegible]して、[illegible]が[illegible]だ。よばれた男らしい太つた鬚だらけの水夫が近づいて來て、旗の字を讀んだ。ニコ〳〵笑ひながら、ふりかへつて水夫達に何か叫んだ。

素晴らしい騷ぎが起つた。ウラアが叫ばれ、帽子がほうりあげられ、逆立ちをする奴、踊りまわる奴……氣早いのは僕等の間にわりこんで來て、手を握り、肩をたたいた。僕等はそのたびごとににひよろついた。なにしろ大きな奴ばかりだつたから。——」

北島君の話がこゝまで進んで來た時、聞き手の一人の鐵工所の職工が口を入れた。

「その旗といふのは、いつたい何んだ？」

彼はさつきから、車屋を出て、壞れた食車窓の風穴を千切れた疊表でふさがうとして、しきりに苦勞してゐたのだが、ちようどその時、難工事が一先づ完成したらしく、改めて蒲團の方に歸つて來て、この時宜を得た質問を發したのであつた。

四

「うん、その旗といふのは——と、北島君は續けた。なにしろ相手はロシア人だらう。露助は露助でも、言葉だけはどうにもならない。船に乘りこまないうちに[illegible]れたりしたら[illegible]だから、何か目印になるものをもつて行かうといふことになつて、[illegible]つて、旗[illegible]

り合ひの學生に字を書いてもらひ、あとで白ではいけないといふので、赤インキでまわりを染めた。

（よく來た、同志！

、、、、、、、、、、！）

といふ意味の言葉の下に、××××××神戸支部とローマ字で署名した。それを組合旗の竿にむすびつけて持つて行つたところ、幸ひに効を奏したといふわけだ。

「一行は委員長の部屋に案內された。委員長は、眼こそ碧かつたが、髮の毛の黑い、背丈のちんちくりんな、僕とたいして變らない小男だつた。その小男が委員長なのだから僕等はすつかり嬉しくなつた。それに、もつと愉快なことには、その男が日本語が出來るのだ。彼の口から、思ひがけない日本語がとび出した時には、例へは少々惡いが、地獄で佛といふ氣がしたよ、全く。なんでも世界をまたにかけた男らしく、日本にも二ヶ月あまりゐたそうだ。帝政時代にシベリアから脫走して、アメリカにわたる途中に立寄つたのらしい。日本語はどこでおぼえたのか知らないが、かたことながら兎にかく間に合つた。話の途中で行きつまると、唇をかんで上眼をつかひ、英語やドイツ語らしいのを勝手にまぜる。

「一應の引き合せがすむと、珍客だから御馳走しなけりやあといふことになつて、肋骨のついた豚の肉だとか、赤い蕪の酢につけたのだとか、葱と肉をどつさりつめた腕ほどもある眞黑な腸詰だとか、酒はさすがに出なかつたが、あんな御馳走、もう一度食つて見たいやな。

「食事の間にも、彼は不自由な日本語をあやつつて、いろんなことを訊ねるのだつた。勞働組合はどうだ、農民はどうだ、、、、、？どれも、まだまだと答へると、なう、なるほど、どこでも始めは微力だ。それだけ君達の責任は重いわけだぞ。太平洋に於ける、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、！——萬事そんな調子である。身體中が精動力ではりきれさうな男だ。食卓のまわりにゐる他の委員の連中も、何かいひたさうな風だつたが、言葉が通じない。時々委員長に通譯してもらつては、愉快さうにうなづいて、お互ひの間で、何かぺちゃくちゃしやべり合ふ。

「食事が終りに近づいた頃、一人の水夫がとびこんで來て、委員長に何か耳打ちした。委員長は大きくうなづいて、イエス・オーライでなことをいひ、他の委員達に早口で何か相談した。委員達も手を叩いて、賛成の身振りをした。

委員長は僕等をふりかへつて、
(諸君は非常にいゝ時に來た。諸君も氣がついてをられるであらうが、この船にはまだソヴエート共和國の國旗が揭揚されてゐない。正式の揭揚式がまだ行はれてゐないからだ。今日は日曜日だから、吾々は明日それを行ふ豫定だつたが、君達の來船を機會に、一日それを繰上げようといふ動議が、水夫委員會の方から出た。、、、、、、、、、、、、して、是非その式に參列してもらいたいと思ふ。どうだ。)
といふ意味をいつた。
異議なしだ。よくも好い日にやつて來たものだと僕等は考へた。
「後甲板に全員が整列した。僕達は委員達に案內されて船橋にのぼつた。足の下から音樂が起つた。讚美歌と軍歌を一しよにしたやうな聞き馴れない曲だ。何んだと委員長に聞いたら、
(インタナショナル。國際プロレタリアートの歌だ。あとで一同が歌ふから聞くがよい。一週間ほど前から大いに練習してゐるのだから。)
と、敎へてくれた。
音樂が止んだ。委員長が立ちあがつて演說を始めた。仲々うまい。鐵のやうによくとほる聲で、ぴしりぴしりと歯切れがいゝ。身振も手に入つたものだ。言つてゐることはまるでわからないが、兎に角感心して聞いてゐると、やがて演說の口調が急に早くなつた。手を振りあげ、振りおろし、獅子のやうに吼えたと思つたら、甲板から拍手がどつと湧き起つた。演說が終つたのだ。
音樂がまた始つた。全員が脫帽した。歌聲が波のやうに起つて來た
、、、、、、、、、、、、、、、、、、!
傾いた太陽が旗の向ふにある。風が吹いて來て、鐵槌と鎌の金色が輝いた。眞白な鷗が一羽、ひるがへる旗をかすめて斜めに飛んだ。眼の奧の方が暖かくなつて來た。癪だから歯をくひしばつて我慢した。
その間に、旗は、歌聲の中で、大マストの頂上にのぼりついた。一しよに來た仲間の一人が、たまらなくなつたらしく、頓狂な聲で
(ウラア!)
と、怒鳴つた。それがきつかけになつて、全員のウラアが三唱され、帽子が夕陽の中に、はじける泡のやうに投げ上げられた。
「騷ぎがひとしきり靜まつた時、委員長が僕に、何かしやべれといつた。僕は弱りこんで頭をかいた。委員長は聞かない。仲間はやれやれと煽動する。甲板からはぱちぱちと誘ひの拍手が鳴り始めた。思ひきつて、僕は立ちあがつた。手眞似演說の恰好で帽子を振りあげて怒鳴つた。

（同志諸君！　僕達はこんな、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、）そんなことを
前置きにして、さつき委員長から聞いたばかりの、、、、、、、、
プロレタリアートの特別任務といつたやうなものを一席やり、最後を
こう結んだ。（僕達の力はまだ弱い。、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、！）
委員長が通譯してくれた。拍手が起り、今一度ウラアが三唱され
た。演説は大成功だつた。
「歸る時が來た。僕達は甲板におり、水夫達にさよならをいつた。委
員長は僕達の一人々々の手を握つた後、例の旗を旗竿からはづして、
これは紀念にもらつておく。代りに吾々の旗を贈りたいのだが、君達
の今日の（密航）をあくまで（密航）としておくために、それはさし
ひかへる。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
、、、、、、、、、、といつた。

傳馬船がよびもどされて、僕達はのりうつつた。
西の空が熔鑛爐のやうに燃えて、雲が燒けてゐた。一丁あまりも漕ぎはなれたと思つた時、僕達は歡聲を聞いた。ふりかへると、舷側のデツキ、繩梯子、クレーンの根元に、水兵達が鈴なりになつて、帽子を振りながら、インターナショナルを歌つてゐるのであつた。……」

五

北島君の話はこゝで終つた。ちようどいゝ區切りだつたし、それに先きを話さうとしても話せない事情が起つたのだ。意地の悪い看守がいゝいどろんこに醉つぱらつた紳士を、僕等の監房にたゝきこんで行つたのだつた。

上等の外套を胸まで泥にした紳士は、勢ひよく僕等の頭の上をふつとんで、放尿場の濕氣の中に見事に尻もちをついた。その拍子に、したたか靴で、僕は脊骨のあたりを蹴つとばされた。

「諸君、相濟まぬ！」

紳士は右手をあげて正氣らしいことをいつた。そしてそのまゝ寢こんでしまつた。

僕達は怒つた。むろん看守に對してである。、、、、、、、、、、、、房をかへることを要求した。

やがて、、、、、、、、、、。房はかへられた。但し、一人が一つづゝの房に。――つまり見事に隔離されてしまつたのである。

僕は、竊盗とすりと横領犯人の中で二晩寝た。その間に、、、は一回もなかつた。

三日目の午後に高等主任がよびに來た。約三十分にわたる、彼の懇々たる說喩の後、、、、、、と三四の罰をつけられて、僕は、、、、、、、、、、、、、、。

北島君に會ふ機會は、いまだに持てない。あの旗が、今浦鹽の海員俱樂部にあることもまだ話せずにゐる。

李永根に、旗の由來のこの新しい發見を通知する方法に至つては、前にも書いたとほりの事情によつて、今は全くない。

李よ、君は何處にゐるか！

―一九二九年一月―



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その十三

私は剛情に夫の方へ背中を向けたまま、いつ迄も死んだみたいになつてましたが、夫はその間ちよつとも休まんと、「僕はお前の價値云ふもんを今迄知らなんでん」やとか、「今夜お前が居んやうになつたんで、始めて自分がどないにお前のこと思てるかが分つてん」やとか、いつかてそんな上手云ふことは下手な人のくせに、どないぞして機嫌を取りたうていツしよ懸命になつてると見えて、いろいろ巧いことの有るだけ並べて、「ちよつとでええよつて此方向いてんか」云うて、そんでもじつと默つてますと、「お前此の頃、えらい瘦せたなあ」云ひながら兩方の腕を按摩みたいにさするんです。私には此の「瘦せた」云ふ言葉がその時びーんとこたへました。夫はあの抽き出しの中の手紙を讀んだからには、私と光子さんとの秘密を一から十まで知つてしもたんに違ひあれしません、そこい持つて來てもう一と月以上も夫婦でありながら夫婦らしい待遇を受けたことないので、夫は「瘦せた」云ふ言葉の中にそのいろいろの嫉妬や恨みや煩悶やを籠めてるのんです。それでなうても近頃眼立つて瘦せるのんが自分でも氣になつてまし

たんで、此の一言は一番私の痛い所にさはりました。けど、それと同時に、ああ、ああ、こない痩せてしもたんもみんなあの人のお蔭やなあ思ふと、體がぞうッとなるやうに戀ひしなつて來て、あの人のためなら自分の若さも、美しさも、血も、肉も、身にあるもんは何でも彼んでも捧げてしもて骨と皮ばつかしになつてもええと、居ても立つてもゐられんやうになるのんに、「おい、園子、ちよつと此方向け云うたら！」と、夫は夫で、まるで私の體ぢゆうを雁字搦めにしたやうに締めつけたなり何ぼしても放さうとせえしません。そんで私はふつと或ることを思ひついた云ひますのんは、もうどないしても光子さんを取り返さんと措けへん云ふ氣になりましたよつて、それには夫を怒らしてしもたら工合わるい。此ら今夜はうまいこと云うといて何ぞの時利用してやろ、と、そない考へましたんで、「あんた、まだ葡萄酒殘つてたらうちに飲ましてくれへんか」と、少うし甘へたやうな調子で云ひますと、「なに、葡萄酒が飲みたい？――ふん、よッしや、よッしや、今注いだるさかいにちよつと待つてや」云うて、急に形勢が變りましたんでえらい慌てて、コップと壜とをガチヤガチヤ云はしたから、うしろから私の顔の方へ手を伸ばして、なみなみ注いだ杯を口の端へ持たしてくれはりますのに、よつぽど興奮してるらしいてその手が激しい顫へててるのがはつきり分るやうになりました……「お前、今夜大分酔うてんのに、そない飲んでもええのんか」云ひますのんを、「何でもええよつて飲まして欲しいわ」と、私は長いこと夫にコップを持たしたなりガラスの縁へときどき唇を持つて行つて、一と口飲んではふうッと大きな息を吹いて、喉をごくッ、ごくッ、云はして、「あんた、ほんまにうちを愛してんのんか。……さつきから彼れ此れ云うてたこときつとうそやないなあ？」云ひますと、「うそやないとも！」と、夫は體を半分起して背中をさすつてくれながら云ひますねん。「あんた、自分の悪いこと分つた云うたなあ？」「ふん、云うた。そやよつて今迄のことは詫まる云うてるやないか。」「そんならあんた、何が一番悪いことやつたか分つてる？　それさへ分つててくれたらうちかつて仲直りするねんけど。」「何やねん、そら？　云うてくれたら僕かて改めんことあれへん。」「あんたいつやつたか、光子さんのことえらい悪口云うたやないか。そら、うち、自分のことやつたらどない云はれてもしやうのないことたあんとあるねんけど、あの人のことちよつとでも云はれたら何よりも腹立つねん。あんた此れからもう決して光子さんのこと云はんといてくれるなあ？」「そら云うたんはあの時一ぺんだけやないか。僕かて人の悪口云ひたいことあれへんし、そないお前の氣に觸るねんやつたら何で云ふてくれへんかつてん？　そしたら、あの時は光子さんの悪いこと云うてえらい[illegible]なんだ云うて、今夜始めて詫まつて[illegible]かつて

あんたに詫まらんならんこともあるし、いろいろ今夜のことについても話したいことあるねんけど、あんたが先イあれを詫まつてくれへんかつたらどないしても胸がすうッとせえへんよつて。」「ふん、さうかさうか、そら僕が悪かつた、えらい済まなんだなあ。」「ただ悪かつただけ云うたかつてあけへん、ちやあんと手エついて詫まつて頂戴。」そない云うてやりますと今度はきちッと寝臺の上へすわり直して、兩手をついて、「さ、此れでええやろ？ 此の通り詫まつてるでエ、――此の通りになあ、――」と、背中の方で私に見えしませんよつて、二へんも三べんもお時儀して見ますねん。私は内心もうええ時分や思たんで、やうやうぐるッと夫の方い向き直つて、「あんたがそない詫まつてくれたらうちかつて聞いて貰ひたいことたあんとあんねんわ。あんた一體今夜のことどんな事件や思てんのん？」「どんな云うて、僕勝手に想像してただけやねんけど、二人で何處ぞい逃げて行ことしたのんが何ぞ手違ひでも起つたんと違ふのんか。」「阿呆らしい、そんな話やあるかいな」とくすくす笑て見せながら、「さつきはあんたがあんまり邪推するよつて、ついからかうてみてんけど、ほんま云うたら、今夜光子さんは刑事に掴まりかけてんわ。そんでうちのとこい急に電話かかつてんわ。」「何で刑事に掴まりかけてん？」「笠屋町の××云ふ宿屋で好きな人と、、はつてん。」――私はそこでその晩のことを大體ありのまま云ひましてんけど、自分に都合わるいことはすつかり事實と違へてしもて、光子さんに綿貫云ふ男のあるのんは自分かつて前から知つてた云ふ風に話しましてん。自分と光子さんとの間には、そらあの手紙に書いたあるやうなイヤらしい事も一時はあつたんに違ひないねんけど、今ではちよつともそんな意味の交際してエへん。ただ世間の人が同性愛や何やの云うて騒いでるのんは幸ひやよつて、いつそみんなにそない思はせといてくれへんか、そしたら綿貫さんのことだあれにも分れへんしなあ、云うて、光子さんが頼みはるよつて、何ぞ今でもけつたいな關係あるやうなふうにしてるだけや。「なあ？ そやよつてなんにも焼き餅焼くこといらんやろ？」「ふうん、さうかいな」云うて、夫は眼エ瞑うして、「ほんまに光子さんにそんな人あんのんかいな」云ふんです。「うそや思ふねんやつたら、秘密探偵にでも何でも頼んで、その綿貫云ふ男調べて御覽。うちかつて疑はれたらしやうむないし、今度お梅どん來たとき證人になつて貰ふわ。」「そやけどお前、その男のことが家い知れたらお前かて恨まれんでエ。」「恨まれたかつてちつともかめへん。うち光子さんのためにならどんな事でもしたげよ思てんねんもん。そら、親に内證で男に會うてるなんぞ云うたら悪いことに違ひないけど、あない眞面目に愛し合うてんのに結婚させん云ふ法あれへんよつて、うち何處までも同情するわ。あんたかつて詰まらん疑ひさへ晴れたら、そら諒解してくれるやろなあ？ ほんまにうちを愛してんねんやつたら、あんたもうちと一緒になつて光子さんのために盡してくれへんか？……なあ？ うちの大好きな友達やつたらあんたにかつて友達やないか？ そないしてくれたら、うちどのぐらゐ

あんたに感謝するか分れへんねんけど、……」「そんな工合に何や彼や巧いこと云うてるうちに、だあだんだん機嫌ようなつて、自分も葡萄酒を飲んだりして、まだちよつとぐらゐ疑うてたか知れませんけど、そんでもとうとう胡麻化されてしまたやうでした。」「僕ほんまに、さつきはどんだけ心配したか分れへんでエ。待つたかて、待つたかて、十二時になつても歸つて來えへんし、……」「あんたさつき泣いてたなあ、なんで今夜あんなふうになつたん？」「あの光子さんの手紙讀んだら、まだまだ自分は熱情が足らん云ふ氣ィなつて、急にお前が十倍も二十倍も戀ひしなつたんやもん。」「ふふふ、そんならあの手紙もえらい役立つたもんやなあ。」さう云うて久しぶりで夫婦らしい笑ひ話をしながら寝ました。

（つづく）

取消一

本誌二月號木下義雄執筆「無産黨の臺所調べ」中、（一）七十頁社會思想社……野武士も見えない』まで。（二）七十頁『最近日勞黨中の棚橋……河上、綱島、福田……本部の人のグチである』まで。（三）七十三頁『評議會の山本松澤野田……しかも立てねばならぬ所に對立の悩みがあるのだらう』まで。（四）七十三頁『農民黨の方は平野力三……ズクンズクンと立てゝゐる』まで。（五）七十四頁『日勞の麻生には……松永安左衞門がある』まで。（六）七十四頁『また龜井は……民憲黨の淺原……鈴木龜井を指したとのこと』まで。（七）七十五頁『彼は有馬伯爵を通じて……農民黨の費用を引出してゐる』まで。

以上の事實は全然無根なりしため、河上、森戸、櫛田、大内、棚橋、山名、吉田、河上、麻生、三輪、綱島、福田（狂）、鈴木（茂）、平野、河野、細野、加藤、淺沼、山本、松澤、野田、秋和、松谷、淺原、藤本の諸君に多大の迷惑をかけたることを玆に陳謝す。以上の諸君の名譽のために、前記個所の全部並に以上の諸氏に關する記述一切を取消し、筆者の不明なりしことをこゝに聲明す。木下義雄

取消二

本誌二月號木下義雄執筆「無産政黨の臺所調べ」の記事中。（一）七〇頁「黨費を集めない民衆黨」より、七一頁「鈴木氏……を看過してゐる」まで。（二）七二頁「團體交渉の名の下に」より、七二頁「個人的に生活資料を與へてる」迄。（三）七四頁「社民黨幹部の……稼ぎ」より、七五頁「大いに買つて貰ひたい」まで。（四）七五頁總同盟に關する記事一切。

以上の事實は、全然無根なりしため、社會民衆黨及び勞働總同盟の關係者に多大の迷惑をかけたることを玆に陳謝す。以上諸君の名譽のために、前記個所全部を取消し、拙者の不明なりしことをこゝに聲明す。　木下義雄

取消申込

改造二月號所載「無産黨の臺所調べ」のうち、私が鄕誠之助、松永安左衞門なる人をパトロンに持つといふ之れら一切に關することは全く事實無根です。私は公然と運動に身を投ずると同時に、かつて新聞記者時代に於ける、あらゆるものとの關係をも斷絶いたしてをります。筆者に充分おたゞしの上お取消し願ひます。

昭和三年一月廿五日　　鈴木茂三郎

改造社編輯部御中

編輯だより

◇民政黨の迫撃力は勇敢でない。その本領演口、若槻、幣原、江木等が官僚出であるせいか、どうも野黨らしくない。そこになると田中、小川、鳩山、森、望月等はどこから見ても野武士だ。濱口君ももうすこし小泉、中野等を擢用しては奈何。

◇新黨倶樂部政府彈劾案で八名の缺席、二十九名の八名は床次君考へねばなるまい。つまり自己の政權病をスッパリ投出すことだ。

◇河上博士が『第二貧乏物語』を本年一杯寄稿さる。その聲望と、名文と、洗練は誰でも一人者として許す。そして鉾戚の嚴として時代を射るにおいておや。

◇德富蘇峰氏四月號より「自叙傳」を執筆。新聞界の第一人者と思想界の第一人者とが對立して代表作を發表するのは誌界の一大偉觀である。

◇三月號の出來榮えは近來にないといふばかりでなく、畫壇の名星鏑木淸方氏が一大論文を寄せられたことや、阿部次郎、橫光利一、石原純氏等また特異ある作をよせられ百花繚亂の姿である。そして過渡期の先端にある新聞界のために「新聞論」を集中した。我々は決して無意識に新聞をよんでゐる時代ではない。或社の特種の立場のために讀まされぬことが肝心である。新聞社の囚虜とならずに自己の獨立せる批判力によりて讀んで行かねばならぬ。

◇再昨年來豫約せる「改造文庫」が漸く出來した。これから續々發刊せられるが、本年だけでも數百種に及ぶことと思ふ。定價といひ、裝幀の堅牢といひ、內容といひ何れの方面も失望を與へないものだ。

◇本誌で文藝評論を募集する。詳細は本誌の創作欄五二頁を御覽下さい。

◇「現代日本文學全集」の三月配本は「柳浪眉山、綠雨集」。四月配本は「近代日本詩集」です。此集は隨分苦心しました。大歡迎を受けるでせう。『經濟學全集』の三月配本は增地、吉田、太田三教授の「經營經濟學」で、其他高橋誠一郎教授「經濟學史」上卷、山室宗文氏の「我國經濟及金融」も近く配本される。「厨川白村全集」第一卷は「象牙の塔を出て」「十字街頭を往く」を收容。二月下旬配本。

◇懸賞詩の募集は二千を突破。この發表によつて詩壇に淸新の氣分を突入するとだらふ。

◇「臨時」校正係四人を募集。經驗ある人に限る。履歷書を本社人事係まで提出して下さい。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	五拾錢	參錢
半ケ年	參圓	郵稅不要
壹ケ年	六圓	郵稅不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

昭和四年二月十八日印刷納本
昭和四年三月一日發行

(五十錢)
(郵稅三錢)

東京市芝區愛宕下町四ノ六
編輯兼發行兼印刷人 山本三生

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍

發行所
東京芝區愛宕下町四ノ六
改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一一三二 一一三三 一一三四 一一三五

『厨川白村全集』總内容

第一卷 文學論（上）

近代文學十講

第一講 序論　第二講 近代生活　第三、四講 近代の思潮　第六講 自然主義　第七講 自然派作物の特色　第八講 最近思潮の變遷　第九、一〇講 非物質主義の文藝　索引

第二卷 文學論（下）

文藝思潮論

第一 序論　第二、三、四 思潮史の回顧（古代、中世、近世）　第五 希臘思潮の勝利　第六 EPILOGUE

苦悶の象徴

第一 創作論　第二 鑑賞論　第三 文藝の根本問題に關する考察　第四 文學の起源

最近英詩概論

第一章 英國近代詩壇の革新　第二章 最近英文學の背景　第三章 新時代の代表的詩人　第四章 頽廢厭世の詩派　第五章 スパズモディック派の詩人　第六章 ラファエル前派（P・R・B・）

第三卷 文學評論

象牙の塔を出て

象牙の塔を出て　觀照享樂の生活　靈より肉へ、肉より靈へ　藝術の表現　遊戲論　勞働問題を描ける文學　文學者と政治家　藝術としての漫畫　現代文學の主潮　藝術より社會改造へ（詩人モリスの研究）　英語の研究に就いて（英文）

十字街頭を往く

惡魔の宗教　僧正インゲそのほか　文藝上のリアリズム　文藝と性慾　再び民衆の手に　演劇と觀客　西洋の「蛇性の婬」　強ひられたる文明　有島さんの最後　戀愛と結婚のこと　オオブン・フオオラム　何が故の侮蔑ぞ　東西の自然詩觀　裸體美術の問題　西班牙劇壇の將星　ゴルズワアジイの劇論　ダンセイニの邦譯と新作　作家の外遊　宗教と迷信　冷嘲熱罵　婦人と讀書　服裝の墮落　小泉先生の舊居を訪ふ　詩人クロオデル　人間讃美（絶筆）

第四卷 文學評論及印象記

小泉先生そのほか

小泉先生　果して畫家の罪か　病的性慾と文學　ルウヱイルの愛書　初戀語の話　わかき藝術家のむれ　詩人ヴァン・レルベルグ　[illegible]

『厨川白村全集』全六卷内容

第一卷　文學論（上）

本卷に收めた『**近代文學十講**』は、實に白村博士不朽の名著であり、また博士の處女著述でもあると同時に、博士の文壇的名聲を最も高からしめた述作である。西歐の近代文學を系統的に、組織的に、しかも興味豐かに敍述したもので、出版當時それが讀書界に及ぼしたセンセイションは素晴らしいものであつた。今日苟も文學藝術に關心あるものにして、一度でも本書を繙かなかつたものはあるまい。唯に文學藝術に關心あるものばかりでなく、政治家、經世家、實業家等々、平常文學に縁遠い階級の人たちにも競ひ讀まれて、文學趣味の開發、近代思想の紹介に異常な役割を遂げた。此の如き有益にして興趣深き書は、今日と雖絶無である。今日、本書が讀まるべき需要があり、寧ろ累年その賣行を高めつゝあるは、本書の内容價値が永久に不朽たることを十分に證據立てゝゐる。現代文學の礎石として、また汎く現代文化の醱酵劑として、本書の存在はいつまでも大きな意味を持するであらう。

第二卷　文學論（下）

『近代文學十講』が近代文學の鳥瞰圖であるならば、『**文藝思潮論**』は、近代における思想文藝の依つて來れる所を闡明した系圖である。前者が「文學の地理」であるならば、後者は「文學の歴史」であつて、此の二著は彼此相補つて始めて全圓的統一を示すものである。『十講』の讀者は、必らず『思潮論』をも併せ讀み、以てその智識の完全圓滿を期せねばならぬ。また、『苦悶の象徴』は、白村博士が遭難の廢墟の中に見出された唯一の系統的述作であつて、博士が晩年に於ける文藝觀は、遺憾なく本書に表はされてゐる。蓋し博士は、『文學十講』の發表以後に於て思索上の一大轉機に逢著したが、その心的革命から生れたものが、此の『**苦悶の象徴**』であるから、本書を讀まずして博士の文學史上に於ける地位を斷ずることは到底不可能である。『**最近英詩概論**』は未定稿ではあるが而かも纏つた述作として脈絡一貫し、文學の研究者必讀の好書である。著者の生存中は筐底に秘められてあつたが、沒後門弟によつて公にせられたものである。

第三卷　文學評論

博士の一般文藝に關する識見は、前二卷によつて之を知り得るのであるが、本卷に收めた『**象牙の塔を出て**』と『**十字街頭を往く**』は、更に博士の藝術觀が如何に具體的に適用され、展開されてゐるかを知る上に必讀の書である。而して此の二書は、博士が文學者たると共に、また思想家、文明批評家として如何に時流に卓越せしかを語るの書であつて、その明澄流麗なる、爛漫として特異の色香に馥くエッセイ[illegible]は、日本文學の絶品と稱するも斷じて過褒ではあるまい。果して此の

電車の中に、旅の鞄の中に持ち行かれて、多く人々に喜び讀まれてゐる。蓋し、博士の博學と、圓熟した思想と、而して高雅な諷刺と、多分に盛られ詩情は、現代人のためには正しくその血となり肉となるからである。

第四卷　文學評論及印象記

薄倖不遇の舊師を偲んで書名にされた『小泉先生そのほか』には、主として文學に關する評論が收められてある。卓拔な思想、上品な皮肉、洗練彫琢され文章は、前卷の二書と共に、博士のエッセイストたる本領を最も十分に語るの書である。『印象記』は、その名の如く決して單なる紀行文でない、寧ろ博士の社會批評であり、また日本人の筆に爲つた最も卓絕した「米國研究」である。博士を以て一介のペダント視するより外、觀る所を知らなかつた論壇に對して、その奇拔なる社會觀、その深刻な現實感をまざ／＼と展開して見せて驚倒せしめたのは實に此の書である。

第五卷　戀愛觀及雜纂

『近代の戀愛觀』に於ける博士は、文明批評家といふ消極な立場から一歩を進めた、熱烈なる「社會改造家」である。『戀愛至上」の炬火一たび投ぜられて、全思想界は愕然としてその惰眠を覺醒した。輓近の思想界に於てこの書ほど大きな反

あらん限りその生命を持ち續けることであらう。

泰西文學の移植に寧日なかつた博士は、また飜譯家としても優に一家を爲してゐた。博士が赤門の學生時代から、折にふれて發表した譯詩譯文は、その流麗さと正確さに於て、後人の模範とするに足る。『新モンロオ主義』は、本全集に新に收められた譯書、そのほか、序文、跋文、講演等、散佚して未だ廣く世人の目に觸れざるをも集大成して、博士の全面目を躍如たらしめた。

第六卷　英詩選釋

英文學の研究に指を染むるもの、必らず英詩の研究に永き歲月を投ずるが、而かも我が厨川博士の如く、細心な研究と、精緻な鑑賞を擅にした學者は多くあるまい。本卷に收められた『英詩選釋』と『現代抒情詩選』は、右の理由によつて、今日、唯一無二の英文學鑑賞の指針として、英詩解釋の寶典として、文學に志すもの、文學を愛するものによつて、此の上もなく重んぜられてゐる。博士がまた優れた語學者であるとは、隨所に施された評句や文法上の說明によつて十二分に伺はれる。『現代抒情詩選』は、最後の推敲を加へられ、震災當時鎌倉なる白日村舍の博士病床の枕頭にあつたものを、博士の沒後門弟矢野教授によつて單行本に纏められたものである。

白村博士は文藝批評家として文明批評家として我國の文化史上に清新不朽の存在として永久に銘記せらるべき人である。

◇　◇

博士は筆の人たると共にまた口の人でもあつた。或時は輕妙洒脱に或時は峻烈深刻に、興湧けば幽妙なる藝術の理論を語り、清新の文藝を設じ、勢すれば、因襲の打破虚僞の排斥を說いて新道德の樹立、創造的生活への飛躍を唱へられた。

◇　◇

博士の文は、燃ゆるが如き詩人的情熱と冷靜氷の如き學者的頭腦とを混融して、獨自のスタイルを作り上げた。取材の廣汎、觀察の鋭敏なる、或は諷歎に或は諷刺に、眞に散文藝術の尤なるものを創出された。

『厨川白村全集』禮讃

厨川白村

吉田絃二郎

かの恐ろしい大震災はわが文學界から一つの最も花やかな、常にフレッシユな名であつたところの厨川白村を失はせた。かれの悲劇的な死はたしかに明治大正の日本文壇を通じての最も印象的な事件の一つであつた。わが文學界に於けるかれの存在はそれほど鮮かな足跡と感激とを遺して行つた。かれは溫かき明知と麗しき言葉と正しき表現とによりて外國文學殊によく英吉利の詩人たちを論じた。鎌倉の海濱に於けるかれのいたましい死はわたくしをしてロマンチシズムの天才キイツやシエリイの死を聯想せしむる。天才は風の如く來り風の如く去る。しかもかれ等が步いた靜かなる跫音は時を經るにつれてさらに確なる存在としてわれ等の敬愛と評價の上に遺されれる。「近代文學十講」[illegible]の象[illegible]遺して行つた跫音は今日なほわれ等の魂に最も快き優れたる藝術的存在として響いてゐる。たしかにかれの不慮の死はわれ等の周圍に寂寞の影を投げた。かれは當然なほわが文學界に生きてゐなければならぬ人間であつた。

英文學は知らないことはなかつた

戸川秋骨

白村君は學者であつた。由來、學者といふものは、解り切つて居る事を、難かしくし、面白いものを、乾燥無味にするものである。然るに白村君の學者たるや、さうではない。難しい事を、解りよくし、面白くないものを、面白くしてくれた。珍らしい學界の第一人者であるが、それは學者にして、よく世事を辨へた文人をかねて居たからである。白村君の書かれたものはどんなものでも面白く讀まれる。白村君の手にかゝると、複雑な難しいものでも、事を指す[illegible]る。その著「近代文學十講」は、その適例である。隨分面倒な近代文學、近代思想を、誰れにでも解るやうにしてあるのが、この書の特微である。その出版の當時、私はそれを新聞紙上で推稱し、また個人的に、某々數氏にも推薦したが、私の言つた處に從つて、それを讀んだ人は、孰れもみな、近代文學の事がよく解り、且つ面白く讀めたと云つて喜んでくれた。これはこの書に限つた事ではなく、白村君の書かれたものには、みな左様言へる事と思ふ。博覽强記で、英文學の事に就いては、知らない事はないと云つて良いか、と思はれる位である。かけ違つて、私は白村君と親しく知り合ふ機會を得なかつたが、書物を通して見た白村君は、寔に懐い人であつたと思ふ。白村全集の出版されるのも、偶然な事ではあるまい。

文壇生活に役立つた唯一の書

菊池寛

僕が京都大學で聽いた厨川博士の近代英文學の講義は、後年の文壇生活に於て役立つた唯一のものだつた。

白村子は學者であると同時に文明批評家であつた。殊に晩年はさういふ傾向が著しかつた。そのために廣汎な讀者を持ち名聲を揚げたが、一方にはまた可なり誤解も招いた。鋭い理知の持主でありながら、恐ろしく疳癖の强い人で、自分のことを「狂犬」と名づけたほど我武者らのところがあつたから實業家でも、政治家でも、軍人でも、宗教家でも、相手構はずに喰つてかかつた。それで隨分人に憎まれながら、どんどん有名になつていつた。問題の戀愛論なども今日讀んでみると内容上別に過激だとは思はれないが、筆の調子が激越なので思想界に大きな波瀾を惹き起こした。この俗に碎けた格調を喜ばない人も少くなかつたが、然し、それに依て書齋と街頭との闕を乘り越えたのだと云へる。それは可なり勇氣を要す

何故ならば、白村子は出發した人であるかゝ出たが、研究的良心はた。藝術的鑑賞乃至直いふよりも、寧ろ精神或時はまた論議の材料して取扱はれたかも知古今東西の文獻を渉獵代に先んじ、之を指導力したことは何人も承得ない事實だ。平生はつたが、學問上のことる虚心坦懐で、自分よ輩のところへでも、あ脚を曳ずつて態々質問した。どんなに忙が究や調査は憚らなか恐らく若い時から習慣たのであらう。從て、との基礎は夙に堅實にゐた。危つ氣がなかつは、修養も積まずに、頭へ飛び出して大言同日の談ではなかつ

成瀬

勵せられた。そして、七日になつてみると、あの反抗的な精神の底に潛んゝ思はれる暖かいもの、優のが沁々感ぜられる。それる「追憶の感傷」でないこと書きするために二三の事實をることも出來るが、此處では控へる。最後に白村子の仕事て一言附け加へることを許さるならば、私は何よりも子がその多年の計畫であつた「文學概論」大成を見ずして逝つたことを殘念に思ふ。云ふまでもなく、かの「苦悶の象徴」はその序論となるべきものであつたのだ。然し、所謂、缺陷の美、未完成の美を唱へた子は、この論文中、「近代文學十講」、「文藝思潮論」などの中に描かれた幾多の貴重な種子が自ら發育してゆくのを眺めて、莞爾として微笑してゐるかも知れない。「大きな事でも、小さな事でも、お前が涙を以て播いた種を他の者が刈り取るであらう」、かういふ臺詞がストリンドベルクの戯曲の中にあつたと思ふ。そして白村子の場合には、その種は主として大衆の中に播かれたもののやうである。さすれ

版の出現を喜び、廣く之を江湖に薦める。

父の思ひ出

厨川文夫

『お父さまが幼い時分には貧乏で斯んな筆一本だつて迚々買つて貰へなかつたんだよ』。僕が鉛筆を半分位しか使はずに打遣つて置いたり、書用紙にナポレオンの頭だけ書いて紙屑籠へ丸め込んで置いたりすると、父は時々斯う言つて窘めた。窘められる下から僕は浪費した。父の書齋へゆくと、父は僕の使ひ古しの鉛筆で原稿の下書きをしたり、學生の論文を直したりして居た。

其頃友達の寫眞器を見て僕も欲しくなつた。母に强請つて見たが駄目だつた。父にさんざん强請つた『では買つてやる。その代り是から決して紙や鉛筆を粗末にしちや不可ないぞ。いいか。』十日ばかり後、父はまだ新しい鉛筆を僕に見せた『これは誰のだい』。『僕の：：』僕は眞赤になつた。でも父は何も言はずに其鉛筆を返して呉れた。

マルクス・……エンゲルス全集

第六回 …… （第二巻—約五百頁）

青年氣鋭の彼等兩人が議會哲學新聞經濟政治其他の諸問題に對し如何に縱横に熱火迸るが如き論陣を振るつたか？彼等の慧眼と達識とを本書に見よ！

『ライン新聞』所載 …… 熱烈火の如き彼の意氣横溢す。
日刊新聞、保護關税、…… （エンゲルス）、時代の逆行的徴候
ドイツの通俗本（…… ス）、ドイツ貴族新聞の鎭魂祭（エ
（エンゲルス）、ヨ…… ンゲルス）、ジーク・フリードの故
ンゲルス）、一夜（…… ニト（エンゲルス）、インメルマン
郷（エンゲルス）、エ…… 論（エンゲルス）、南北ドイツの自
の回想錄（エンゲル…… と若きドイツ（エンゲルス）、ライ
由主義（エンゲルス…… ンゲルス）、大陸に於ける社會改
ン新聞への通信（エ……
良の進歩（エンゲル……
『獨佛年誌』所載……
『パリー・フオルウ…… ルス）

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二〇

...LY REVIEW OF
...FAIRS, ETC.
... YEN A YEAR
...AGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

厨川白村全集

豫約募集

全六巻

一册壹圓

毎巻約五百頁

〆切三月廿日限

内容見本進呈

彼逝いて文壇

華かな人生と、華々しい業績とを残し湘南に震死を遂げた白村博士逝いて七星霜。今や茲に其全著作を網羅せる眞實の『全集』成る。彼の足跡がいかに慕はしいもの...

發行所　東京芝區愛宕下町　改